昭和九年一月十五日印刷
昭和九年一月二十日發行
昭和十五年六月十五日再版發行

不許複製

國譯一切經　經集部　十四

【定價　金一圓五十錢】

編輯兼發行者　岩野眞雄
東京市芝區芝公園地七號地十番

印刷者　長尾文雄
東京市芝區芝浦二丁目三番地

印刷所　日進舍
東京市芝區芝浦二丁目三番地

發行所
東京市芝區芝公園地七號地十番
株式會社　大東出版社
振替東京一九四七一番
電話芝（三九四四番
　　　　三〇四〇番

製本所　兩角製本所

索　引

(數字は通頁を表はす)

—ア—

阿修羅　49, 212
阿羅呵　170
阿羅漢　130
阿蘭若　5, 129, 148
愛別離苦　18
惡語言　72
惡道　38
安般　291

—イ—

異熟　182
因緣　81
因果　80

—ウ—

有爲　17, 19, 35, 81, 127
有爲の色相　22
有爲法　115
有爲無常　151
有海　8, 15
有情　17, 108, 112
温陀南　280
鄔波斯迦　176
鄔波索迦　176
鬱單越　211
蘊處界　7

—エ—

壽命　32
宴座　136
宴坐　149
焔魔　16
焔摩羅　19, 100
閻浮檀金花　120
琰摩　107
緣起　81

—オ—

遠塵離垢　268

—カ—

伽陀　3
迦褸羅　17
我所　20
我慢　91, 136

餓鬼　13, 106
餓鬼趣　37
戒　112
戒定慧　86
契經　3
覺觀　212
含識　4

—キ—

鬼畜趣　108
歸依　155
吉祥　3, 116, 155
經行所　130

—ク—

九十八煩惱　88
究竟天　145
拘璺惟　4?8
垢染　6
功德　155
鳩槃荼　207
具足清淨　261
俱生　15
俱胝　32

—ケ—

化樂天　212
假名の比丘　132
袈裟　131
華曼　145
外道　6, 156
解脫　6, 8, 26, 108, 112, 145
解脫の法　127
懈怠　6, 111
輕安　127
結使　130
眷屬　17, 112
乾達婆　207
乾達婆城　8, 15, 40, 146

—コ—

五蘊　48
五根　39, 103
五境　88
五境界　39

五趣　32, 117, 151
五種惡　101
五欲　4, 6, 9, 22, 28, 146
光音天　212
廣果天　212
劫火　19, 66
劫樹　15
劫波林　145
號叫　205
業　4, 24, 67
黑繩　98, 205
極燃然　98
金剛　75, 122
金播果　63
金播歌果　41
根　9
惛沈　112

—サ—

三惡趣　13, 80
三惡道　113, 144
三有　3, 7, 103, 109
三有海　96, 125
三有の海　90
三衣　131
三界　9, 14, 70
三業　80
三際　90
三受　91
三種の良田　116
三種福田　141
三十三天　120
三世　9
三相　198
三塗　83
三毒　80, 99, 107
三摩地　124, 155
三摩鉢底　21
三昧正受　261
三藐三佛陀　110
妻孥子　6
最上寂靜　124, 149

—シ—

四獄 99
四種因緣 7
四種禪定 36
四種顚倒 35
四種福田 6
四攝行 147
四聖諦 127
四諦 125, 126, 127, 147
四大 24
四顚倒 92
四念處 89
四瀑流 89
四無所畏 5
四無量心 4
死霸 15
師子 6
自在天 81
自性 19
自性空 133
持戒 4
地獄 13, 39, 98
地獄餓鬼 21, 123
色界 13
七支 144
七種財 121
七寶 145
室羅筏 172
沙門果 137
奢摩多 131
邪命 111
寂靜 5, 10, 126
寂靜の涅槃 48
須陀洹 127
須彌 6, 85
衆合 98
衆生 88
衆同分 25
修羅 6, 15
十二因緣 88
十業行 106
十善 36
十二支 22, 87
十二處 86
十力 89
十六行相 127
十六現觀 88
宿曜 6
宿曜の光 103
出世間 29
出世間の法 127
諸惡趣 5
諸業 80
正覺 16
正遍知 155
生住滅 23
生老死 18
生老病死 133
精進 3, 123
淸淨法眼 268
聖財七種 48
勝慧 125
定 5, 8
悼擧 9, 135
情非常 22
身語意の業 113
眞常 16, 20
眞常の果 113, 124
眞如 127
眞俗二諦 89
尋香城 44, 50

—ス—

睡眠 111

—セ—

世間・出世間 46, 75
施戒 108
施戒慈智 8
施戒正慧 10
施戒智 115
施忍 97
星宿劫 268
刹利 57
染欲 9
栴檀 128
栴檀木 40
善逝 121
善知識 152
禪定 4' 91, 117, 124, 149

—ソ—

僧伽 131

—タ—

多陀阿伽度 170
多聞 7
帝釋 140
帝釋天王 146
對治の道 19
醍醐 113

—チ—

知足天 142
智慧 5
畜生 13, 108
稠林 40
調御 16
調御師 88

—テ—

天 13, 143
轉輪王 116
纏縛 5, 118

—ト—

兜率天 22
忉利 28, 212
等活 98, 205
等慈 3
貪火 51
貪癡 111

—ナ—

那由他 30, 141
泥黎 205

—ニ—

二號吽 98
二種生死 89
尼倶律陀樹 15
尼浮陀 78
如來 119, 141
人 15
忍辱 4, 122

—ネ—

涅槃 8, 124, 140

—ハ—

波羅奈 204
婆伽婆 261
薄伽梵 172
八地獄 99
八聖道 5, 36, 89, 124, 125, 130

—ヒ—

彼岸 39, 82, 112, 156
比丘 64, 128
苾芻 172
毘舍闍 207
毘鉢舍那 131
毘補羅山 272
畢舍遮 68
百八煩惱 88

—フ—

不還果 280
不與取 128
布施 4, 114
補特伽羅 273
富單那鬼 207
福田 113, 155
覆 283
佛世尊 26
糞掃衣 130

—ヘ—

遍淨天 212

—ホ—

菩提 6, 26
菩提心 7
菩提分法 199
法眼 7
法施 141
法本 266
放逸 4, 9
放逸・不放逸 26
傍生 21, 112
煩惱 3, 7, 48
梵志 139
梵天 90

—マ—

摩尼 136
摩羅耶山 40
曼荼羅華 145

—ミ—

彌盧山 17, 121

—ム—

牟尼 10, 129, 141
無爲 27, 127
無間 98
無色界 13
無常 9, 12
無想天 213
無煩天 213
無明 5, 63, 91, 179

—モ—

妄語 74

—ヤ—

夜叉 15
夜摩天 19, 61, 145, 212

—ユ—

由延 161
瑜伽師 198

—ヨ—

瓔珞 145
欲界 13

—ラ—

羅漢 124
羅刹 207

—リ—

離間語 105
龍 15
兩舌 5
輪廻 7, 10, 13, 108, 146

—ル—

流轉 11, 146

—レ—

蓮華獄 34
蓮華地獄 97

—ロ—

漏 3
漏・無漏 130
六根 45
六根門 69
六塵坌 9
六道 84
六欲の諸天 24

— 經集部十四索引終 —

て、阿難、長路叉手して世尊に白して言さく『此れを何經と名づけん、云何んが奉持せん』と。佛、阿難に告げたまはく『是の經は名づけて諸徳福田と曰へ、常に之れを奉持して經道を明宣し、缺減せしむること莫れ』と。佛、經を説きたまひ已るに、天帝釋衆、一切の衆會、歡喜せざるは莫く、禮を作して而して去りぬ。

佛説諸徳福田經（終）

意施すに　遷神して二天を典る　自ら世の最厚に歸し　世々願ひて尊み奉らん』と。

[一四] 佛、天帝及び諸の大衆に告げたまはく『我が所說、宿命の所行を聽け。昔、我れ前世に、波羅奈國に於いて大道の邊りに近く、圊厠を安施するに、國中の人民、輕安を得る者、義を感ぜざるは莫かりき。此の功德に緣つて、生ずる所淨潔に、累劫道を行じ、穢染に汚れず、功祚大いに備はり、自ら佛と成ることを致す、金體光耀にして塵永く著せず、食すれば自ら消化し、便利の患無し』と。是に於いて世尊、偈を以つて頌して曰はく、

『穢を忍び福事を修し　人の爲めに汚れざる所　厠を造つて便利を施すに　煩重なるもの輕安を得たり　此の德、貢高を除き　因つて生死の緣を解く　進み登りて佛道を成ず　空淨、巍々として尊し』

[一五] 佛、天帝に告げたまはく『九十六種の道あるも佛道最も尊し、九十六種の法あるも佛法最も眞なり、九十六種の僧あるも佛僧最も正し。所以は何ん。如來は阿僧祇劫より發願誠諦、命を殞し德を積み、誓つて衆生の爲めに、國財妻子、頭目血肉、以用つて布施して戀愛の心無く、心虛空の若くして覆はざる所無し、六度四等、衆善普ねく備はり、德慧成滿し、乃ち佛と爲ることを得、身色紫金、相好比無く、去來現在、照達せざる無く、三界の尊天も能く及ぶ者莫し。言信德重、天地を震動す。其れ衆生有りて一敬心を發して如來に向ふ者は大千世界の珍寶を獲たるに勝る。三十七品、十二部經を說き、罪福を分別するに言皆至誠なり、三乘教を開けば各ゝ奉行することを得、聞く者歡喜し、樂ひて沙門と作り、佛を信じ法を行じ、志淸高を尙ぶ。衆僧の中、四雙八輩、十二賢者有り、世の貪諍を捨て、世間の福を導き、天人路通ず、衆僧の由つてする、是れを最尊無上の道と爲す、諸佛、菩薩、緣覺應眞も、皆中より出で、一切を教化して群生を度脫す』と。[一六] 佛、是れを說きたまへし時、天帝釋衆は皆無上正眞道意を發し、計る可からざるの人は法眼淨を得たり。是に於い

【一四】宿命因緣說話の第七、佛陀が圊厠を施設せる福報を說く。

【一五】重ねて、佛及び衆僧に甚大なる福德を具することを說く。

【一六】正しく奉持を勸む、卽ち一經の結辭なり。

たてまつる」

[二]阿難、禮し已つて坐に還る。爾の時座の中に一りの比丘尼有り、名づけて[三]柰女と曰ふ。即ち坐より起ち、服を整へ禮を作し、長跪叉手して佛に白して言さく『我れ先世を念ずるに波羅奈國に生れ貧女人と爲る、時の世に佛有り、名づけて迦葉と曰ふ、時に大衆に圍遶せられて說法したまふ。我れ時に座に在り、經を聞きて歡喜し、意に布施せんことを欲すれども顧るに所有無し、自ら貧賤を惟ひ、心に悲感を用ち、他の園圃に詣りて果蓏を乞求し、以つて佛に施すに當つ。時に一の柰を得たり、大にして香好し、一盂の水、並びに柰一枚擎げ、迦葉佛及び諸の衆僧に奉るに、佛、至意を知ろしめし、呪願して之を受け、水と柰を分布し一切に周普す。此の禮德に依り、壽盡きて天に生じ、天后と爲ることを得、世間に下生しては胞胎に由らず、九十一劫、柰華の中に生れ、端正鮮淨にして常に宿命を識り、今世尊に値ひたてまつりて道眼を開示す』。爾の時に柰女、偈を以つて頌して曰はく。

『三尊の慈潤普く　慧度に男女無し　水果、施すに弘き報あり　緣つて衆苦を離るゝを得　世に在つては華中に生じ　上つては則ち天后と爲る　自ら聖衆祐に歸す　福田最も深厚なり』

[三]比丘尼柰女、禮し已つて坐に還る。時に天帝即ち座より起ち、佛の爲めに禮を作し、世尊に白して曰さく『我、先世の時、拘留大國に生れて長者の子と爲り、青衣抱行、城に入りて遊觀するに、衆僧の街巷に分衞するに値遇す。時に人民の施す者甚だ多きを見、即ち自ら念言すらく、願くば財寶を得て衆僧に布施する、亦快ならずやと。即ち珠瓔を解きて衆僧に布施するに、同心に呪願し歡喜して而して去る。此の因緣に從つて、壽終つて即ち忉利天上に生じ、天帝釋と爲り、九十一劫、永く八難を離る』。是に於いて天帝、偈を以つて頌して曰はく。

『德高く過る者無く、福を開きて禍元を塞ぐ　聖衆の神定力　童幼も歡喜を發す　衆に效ひて悅

【二】宿命說話の第五、柰女が柰（カラナシ）の一果を施せる福報を說く。

【三】柰女、大正藏經は皆柰を奈に作る、今卍藏に依つて改む。

【三】、宿命因緣說話の第六、帝釋天が珠瓔を施せる福報を說く。

賣らんと欲するに、衆僧の大會講法に値遇す、過りて而して立ちながら聽くに法言微妙なり、之れを聞きて歡悦し、卽ち瓶酪を擧げて衆僧に布施するに衆僧呪願し、益ゝ欣踊を懷く。此の福報に緣つて壽終りて天に生じ、世間に下生しては財富限り無く、九十一劫豪尊榮貴なりき。末後に餘愆ありて世間に生ず。母の姙すること數月、病を得て命終る、母を塚中に埋むるに、月滿ちて乃ち生れ、塚中に七年、死せる母の乳を飮み、用つて自ら濟活す。微福、佛に値ひたてまつり、明法を開聞し、死地を超度し、應眞を逮得す。諦なる哉罪福、誠に佛の敎へたまへるが如し』。爾の時に須陀耶、偈を以つて頌して曰はく。

『前に小家の子たりしとき　酪を賣つて以つて自存す　欣踊して微薄を施すに　三の苦患を離るゝを得たり　罪の塚中に生ると雖も　乳を飮んで活くること七年　因緣ありて解脱するを得たり　聖福田に歸命したてまつる』

〔一〇〕時に須陀耶、禮し已つて坐に還る。復一の比丘有り、名づけて阿難と曰ふ。卽ち座より起ち、服を整へて禮を作し、長跪叉手して世尊に白して曰さく『我れ宿命を念ずるに羅閱祇國に生れて庶民の子と爲る、身に惡瘡を生じ、之れを治せども差えず。親友の道人有り、來つて我れに語りて言はく「當に衆僧を浴し、其の浴せる水を取つて以用つて瘡を洗ふべし、便ち除愈すべく又福を得べし」と。我れ卽ち歡喜し、往きて寺中に到り、加敬至心に、更に新井を作り、香油浴具をもつて衆僧を洗浴し、汁を以つて瘡を洗ふに尋で除愈を蒙る。此の因緣に從つて所生端正に、金色晃々として塵垢を受けず、九十一劫常に淨福を得、僧祐廣遠、今復佛に値ひたてまつりて心垢消滅し、應眞を逮得す』と。阿難、佛前に於いて偈を以つて頌して曰はく、

『聖衆は良醫爲り　苦惱の患を救濟す　洗浴に淸淨を施せば　瘡愈え安らかなるを蒙り得たり
生ずる所常に端正にして　殊異なる紫金の顏あり　德の潤ふこと崖限無し　良福田に歸命し

【一〇】宿命說話の第四、阿難が衆僧を洗浴せる福報を說く。

世尊の衆生を顧臨したまふに値ひたてまつり、我が愚濁を蠲き、安んずるに淨慧を以つてし、生死栽枯す、號して眞人と曰ふ、福報の誠諦、其れ然りと爲す』と。爾の時に聽聰、偈を以つて頌して曰く、

『唯、過去の世を念ずるに　供養すること輕微を爲せども　報を蒙ることは遐劫を歷へ　餘福あつて天師に値ひ　淨慧をもつて生死を斷じ　癡愛を消えて遺る無く　佛恩の流れや窮まり無し　是の故に重ねて自ら歸したてまつる』

[六]時に聽聰、禮し已つて坐に還る。復一の比丘有り、名づけて波拘盧と曰ふ。座よりして起ち、服を整へ禮を作し、長跪叉手して世尊に白して曰さく『我れ宿命を念ずるに、拘夷那竭國に生れて長者の子と爲りしに、時の世に佛無し、衆僧敎化し、大會の說法あり。我れ往きて經を聽き、法を聞きて歡喜す。一の藥果を持てり、[七]呵梨勒と名づく、衆僧に奉上す。此れに緣る果報は、命終して天に昇り、世間に下生しては恆に尊貴に處し、端正雄傑にして衆に超絕す、九十一劫未だ曾つて病有らず、餘福あつて佛に値ひたてまつれば、癡冥を光導し我れに法藥を授けたまふ、[八]應眞を逮得し、力は能く山を移し、慧は能く惡を消す。善い哉福報、眞諦たり』。爾の時に波拘盧、偈を以つて頌して曰はく、

『慈澤は枯槁を潤ほし　德勳は苦患を濟ふ、　一果の善本も　福を享くる今に迄で存す　佛は眞諦の義を垂れたまふ　敎を蒙りて淵を超出せん　聖衆の祐は極り無し　上福田に稽首したてまつる』。

[九]時に波拘盧、禮し已つて坐に還る。復一の比丘有り、名づけて須陀耶と曰ふ。卽ち座從り起ち、服を整へて禮を作し、長跪叉手して世尊に白して曰さく『我れ自ら先世の時を惟念するに、維耶離國に生れて小家の子と爲りしに、時の世に佛無く衆僧敎化を行ふ。我れ時に酪を持ち、市に入りて

【六】宿命說話の第二、波拘盧比丘の一果の藥を施せる福報を說く。

【七】呵梨勒 Haritaki 又、訶利勒、訶梨怛雞、等と云ひ、梵語にして、天主將來と譯す、果物の名にして、五藥の一なり。

【八】應眞とは阿羅漢の舊譯なり。人天の供養を受く應き眞人を云ふ。

【九】宿命因緣話の第三、須陀が酪を施せる福報を說く。

『形を毀ち、志節を守り　愛と割れて所親無し　出家しては聖道を弘め　願ひて一切人を度す　五德は世務を超えたれば　名づけて最福田と曰ふ　供養するものは永安を獲ん　其の福こそ第一尊なり』と。

佛、[三]天帝に告げたまはく『復七法有り、廣く施すを名づけて福田と曰ふ、行ずる者は福を得て即ち梵天に生る。何をか謂つて七と爲す、一には佛圖僧房堂閣を興立す、二には園果浴池樹木清涼、三には常に醫藥を施して衆病を療救す、四には牢堅の船を作つて人民を濟度す、五には橋梁を安設して羸弱を過度す、六には道に近く井を作り渇乏のものに飲むことを得しむ、七には圊厠を造作し便利する處を施す、是れを七事と爲す、梵天の福を得ん』と。爾の時に世尊、偈を以つて頌して曰く、

『塔を起て、精舍を立て　園果、清涼を施し　病むものは則ち醫藥をもつて救ひ、　橋船をもつて人民を度し　曠路に好井を作らば　渇乏するも身を安くするを得　所生の甘露を食し　無病にして常に安寧ならん　厠を造りて清淨を施し　穢を除はゞ輕悅を致し　後には便利の患なく　穢惡なる者を見ること莫し　譬へば[四]五河の流れの如く　晝夜に休息すること無し　此の德も亦斯くの如し　終には梵天に昇るを得ん』と。

[五]時に座中に一の比丘有り、名づけて聽聰と曰ふ、法を聞きて欣悅し、即ち坐より起ち、佛の爲めに禮を作し、長跪叉手して世尊に白して曰さく『佛の敎へたまへる眞諦は洪潤無量なり。所以は何ん。我れ宿命を念ずるは、無數世の時、波羅奈國に生れて長者の子と爲りしに、大道の邊りに於いて小精舍を作り、床臥漿糧をもつて衆僧に供給せしかば、行路頓乏なるも亦止息するを得たり。此の功德に緣り、命終して天に生じては天帝釋と爲り世間に下生しては轉輪聖王と爲ること各〻三十六反、天人を典領し、足下に毛を生じ、虛を蹈みて而して遊ぶこと九十一劫、食福自然にして、今、

【三】正說中の第二、七法の福田を明す。七と雖も後の因緣說話と照合して單なる七に止まらざることを知る可し。

【四】印度河の支流に大なるもの五つあり、故に之れを合せて五河と稱す、滔々として淸く流るゝことを譬へたる也。

【五】正宗分を證誠助顯する宿命因緣說話の第一、聽聰比丘の精舍を施せる福報を說く。

佛說諸德福田經

西晋沙門法立法炬共譯

聞くこと是くの如し。一時、佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在し、大比丘衆千二百五十と菩薩萬人、大衆無數とに圍遶せられて法を說きたまふ。爾の時に天帝釋、諸の欲天子三萬二千と與に各々營從の稱數すべからざるを將えて佛の所に來詣し、地に稽首して皆一面に坐しぬ。爾の時に天帝[一]、衆の坐、定まるを察し、佛の神旨を承け、坐よりして起ち、服を整へ禮を作し、長跪叉手して世尊に白して曰さく。『所問有らんと欲す、唯願はくば彰演し、世に軌則を垂れたまへ』と。佛、天帝に告げたまはく『譬へば冥室の如し、燈火を求めずんば焉んぞ見る所有らん、善い哉問や、吾れ當に汝が爲めに分別して之れを說くべし』と。天帝、佛に白さく『夫人、德を種ゑて影福を求めんと欲す、豈に良田の果報限り無し、絲髮ほどの德本を種ゑて無量の福を獲ること有らんや、唯願はくば天尊、惠訓を敷揚し、此の愚矇をして福報無量ならしめたまへ』と。天尊歎じて曰はく『快い哉天帝、意の所問を開くは法の無上なり。諦に聽き、善く思へ、吾れ當に具に演べて汝をして歡喜せしむべし』と。天帝大衆、教を受けて而して聽きたてまつる。佛、[二]天帝に告げたまはく『衆僧の中、五の淨德有り、名づけて福田と曰ふ、之れを供すれば福を得、進んで成佛すべし。何をか謂つて五と爲す、一には發心して俗を離れて道を懷佩するが故に、二には其の形好を毀ちて法服に應ずるが故に、三には永く親愛に割れて適莫無きが故に、四には軀命を委棄し衆善に遵ふが故に、五には大乘を志求して人を度せんと欲するが故なり。此の五德を以つて名づけて福田と曰ふ。良と爲し美と爲し早喪すること無しと爲す、之れを供すれば福を得ること喩へを爲し難し』と。爾の時に世尊、偈を以つて頌して曰はく。

【一】天帝は宋・元・明の三本には天帝釋とせり。

【二】以上を序分と爲し、以下を正宗分即ち正說と爲す。初めに衆僧五淨德の福田を明す。

珠瓔、第七は佛陀の圍圓である。各々長行と偈頌があり、口を極めて福報の大なることを說いて居る。最後の長行に二段あり。初めの一段は重ねて、佛及び衆僧の淨德を說き、終りの一段は正しく本經の奉持を勸めて居る。

昭和九年一月八日

譯者　清水谷恭順識

佛說諸德福田經解題

經題は、「福田經」、或は「諸福田經」とも稱せらる。大唐内典錄卷二に「諸德福田經一卷等右四部、合せて一十三卷、惠帝の世、沙門釋法立、法炬等と共に洛陽に於て之れを出す」とあり、兩者の共譯であるが、歷代三寶紀卷の六を見ると、法炬の譯經目の條に、「福田經一卷」のもとに細註して「一名諸德福田經の第二出、法立の譯する者と少しく異なり」とあるから、共譯と云ふ共内容關係には少しく考ふべき點があるやうである。然し、法立、法炬はともに晋の惠帝代（D. D. 290—300）の譯經家で、其の氏族は二人とも詳かでないが、洛陽に於て相互に校照しつゝ譯經の事に從ひ、法立は早く歿したるが爲めに僅かに四部十六卷、立の歿後は炬自ら譯する所四十部五十卷（内典錄には百三十二部、一百四十二卷）と記してある。但し成果の多くは兩者の共同力作によるものらしく内典錄には「立の歿後炬又自ら出し、立の出す所と每に相ひ參合す、廣略異るのみ」とあれば、敢て譯者の單共を論ずる必要もないかも知れない。

福田とは、福報を養ひ生長せしむる處との意で、佛及び衆僧を供養するは、恰も農夫が田畑に播種するが如く、必ず秋收の利あるに擬へた譬喩の名である。之れに種々あり、二福田、三福田、乃至八福田等がある。今の經に明するところは重に功德福田であつて、古來佛敎興立の上に與つて大いに力ある思想を盛つて居る。福田經は、中阿含卷三十にもあるが、甚だ簡單なものであつて普通、福田經と云へば此の經を指して居るのである。

本經の梗概は、一には佛及び衆僧に甚大なる淨德を具することを說きて、福田たるの所以を明らかにし、二には、かるが故に之れを供養する者は必ず大福を獲べきことを、金口及び會中の聖輩に依つて證誠助顯するにある。大體文を分てば十二段となる。初めより、天帝の問を佛が受諾するまでの長行を序分とする。次に「衆僧の中、五の淨德あり」以下の長行と偈頌は正宗分の中の第一である。次の七法の福田を說く長行と偈頌の一段は正宗分の中の第二である。此れ以下は此の正宗分を根基として七つの宿命因緣說話が出され、事實の上に正宗分の說を證明して併せて受持流通することを勸めて居る。第一の宿命因緣話は聽聰比丘の精舍を施せる福報、第二は波拘盧の藥を施せる福報、第三は須陀の酪、第四は阿難の洗浴、第五は柰女の柰果、第六は天帝の

爾の時に目連比丘、四輩の弟子、佛の所說を聞きたてまつりて、歡喜し奉行す。

佛說盂蘭盆經（終）

種の親屬、三途の苦を出づることを得、時に應じて解脫し、衣食自然ならん。若し復、人有つて父母の現在する者は、福樂百年、若し已に亡ぜる七世の父母は天に生じ、自在に化生し天の華光に入り、無量の快樂を受けん』。時に佛、十方の衆僧に勅す、『皆先に施主の家の爲に呪願し、七世の父母禪を行じ意を定め、然る後に食を受けよ』と。初め盆を受くるの時、先づ佛の在す塔の前に安き、衆僧呪願し竟つて便ち自ら食を受く。

爾の時に目連比丘及び此の大會の大菩薩衆、皆大いに歡喜し、目連の悲啼泣聲、釋然として除滅す。是の時目連の母、卽ち是の日に於て一刧の餓鬼の苦を脫るゝことを得たり。

爾の時に目連、復佛に白して言さく、『弟子所生の父母、三寶功德の力を蒙ることを得たり、衆僧威神の力の故なり。若し未來の世に一切の佛弟子にして孝順を行ぜん者も亦應に此の盂蘭盆を奉じて、現在の父母乃至七世の父母を救度すべし、爾るべしと爲んや不や』。

佛の言はく、『大いに善し快き問なり。我れ正しく說かんと欲するに汝今復問ふ。善男子、若し比丘・比丘尼・國王・太子・王子・大臣・宰相・三公・百官・萬民庶人有つて、孝慈を行ぜん者は、皆應に所生の現在父母、過去七世の父母の爲に、七月十五日佛歡喜日僧自恣日に於て、百味の飯食を以て盂蘭盆の中に安き、十方自恣僧に施し、乞ひ願うて便ち現在父母の壽命百年にして病無く、一切の苦惱の患無く、乃至七世父母、餓鬼の苦を離れて天人の中に生ずることを得、福樂極まること無からしむべし』。

佛、諸の善男子善女人に告げたまはく、『是の佛弟子、孝順を修せん者は應に念念の中、常に父母供養、乃至七世の父母を憶ふべし。年年七月十五日常に孝順慈を以つて所生の父母乃至七世の父母を憶ひ、爲めに盂蘭盆を作し、佛及び僧に施し、以て父母長養慈愛の恩に報ぜよ。若し一切の佛弟子、應當に是の法を奉持すべし』と。

佛說盂蘭盆經

西晋月氏三藏竺法護譯

聞くこと是くの如し。一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に在したまふ。大目乾連、始めて六通を得、父母を度して乳哺の恩に報ぜんと欲す。卽ち道眼を以つて世間を觀視し、其の亡母を見るに餓鬼の中に生じ、飮食を見ず、皮骨連立す。目連悲哀し、卽ち鉢に飯を盛り、往きて其の母に餉る。母、鉢の飯を得て便ち左手を以つて鉢を障へ、右手にて飯を摶る。食、未だ口に入らざるに化して火炭と成り、遂に食することを得ず。目連、大いに叫びて悲號啼泣し、馳せ還りて佛に白して具さに此くの如きを陳ぶ。

佛の言さく、『汝の母は罪根深結なれば、汝一人の力の奈何んともする所に非ず、汝、孝順の聲天地を動かすと雖も、天神・地神・邪魔外道・道士・四天王神も亦奈何ともする能はず。當に十方諸衆僧の威神の力を須ひば乃ち解脫することを得べし。吾今當に汝が爲に救濟の法を說き、一切の難、皆憂苦を離れ、罪障消除せしむべし』。

佛、目連に告げたまはく、『十方衆僧、七月十五日僧自恣[一]の時に於いて、當に七世の父母、及び現在父母厄難中の者の爲に飯百味五果汲灌盆器香油錠燭床敷臥具を具へ、世の甘美を盡して以て盆中に著け、十方の大德衆僧に供養すべし、此の日に當つて一切の聖衆、或は山間に在りて禪定し、或は四道果を得、或は樹下に經行し、或は六通自在にして聲聞緣覺を敎化するもの、或は十地の菩薩大人權現比丘、大衆の中に在つて皆同じく心を一にして[二]鉢和羅飯を受くるに、淸淨戒を具して聖衆の道其の德汪洋ならん。其の此等自恣僧を供養すること有らん者は、現在の父母、七世の父母、[三]六

【一】自恣とは氣まま、心のまま、と云ふ意にして、僧が一夏安居を終りたる時、各自が縱まに己が罪過を宣べて人に直され、惡を更めて善に進むことである、之れを爲す日が七月十五日に當るのである。

【二】鉢和羅（pravāraṇa）は、盂和羅、又は鉢和蘭とも書き、自恣の梵語、新譯には隨意と云ふ、卽ち自恣食なり。

【三】宋・元・明の三本には六親眷屬に作る。

佛說盂蘭盆經解題

本經の經題は、諸經錄に單に「盂蘭經」とも書き、失譯の同本異譯の本には「佛說報恩奉盆經」と名けられ、其の題註には「亦は報像功德經とも云ふ」としてある。又、大唐內典錄には「盂蘭盆經（一紙）右一經、三本、灌臘經・報恩奉盆經・淨土盂蘭盆經と同じ」とあるが、灌臘經は矢張り法護の譯であり、大正藏經に於ては之れを涅槃部に編輯してゐる。今其の內容を見ると、此の經は矢張り經集部の攝、盂蘭經と同類のものと思はれるが、同本異譯ではない。

漢譯者法護に就ては多言を要しない。月支國の沙門で、元の名は曇摩羅察、西域に歷遊して三十六ヶ國語に通じたと云ふ晉代（A.D. 265—316）に於ける大譯經家である。歷代三寶紀等に擧ぐる所を以てすれば、其の所譯は本經等と共に二百一十部、三百九十四卷の多きに達して居る。

盂蘭盆は梵語 Ullambana にして烏藍婆拏とも書き譯に諸說あるが、普通、倒懸と譯し、苦の甚しきを意味する。西國の風俗は、七月十五日僧自恣の日に盛んに供具を設けて百味を盆に盛り佛僧に奉施して先亡倒懸の苦を救ふ、故に盂蘭盆と稱すとも云はれてゐる。我國に於ても齊明天皇三年七月十五日盂蘭盆會を設けられたに初り、聖武帝の天平五年には宮中の常式と定められ、從來今日に到つては、全國津々浦々まで、七世父母長養慈愛の恩に報ゆる盆會として、缺くことの出來ぬ一大年中行事となつて居る。

本經は正に此の盂蘭盆の起緣及び修法を說いたもので、小經一紙に滿たず、經文亦解し易く、本邦にては俗間にも餘りによく親炙して居るもので、內容梗概を說く贅言を要しない。

註疏に到つては古來俗間に普及して居るだけあつて甚だ多く、宗密の疏二卷、元照の新記二卷、普觀の會古通今記二卷、遇榮の疏孝衡鈔二卷、智旭の新疏二卷等、二十數種を擧げることが出來る。其の他、近代の講義布衍の書に到つては、殆ど枚擧に遑がないであらう。

昭和九年一月八日

譯者　清水谷恭順　識

て云何ん、是の善男子善女人、此の因緣を以て大功德を得んや不や』。阿難、佛に白して言さく、『甚だ多し世尊、甚だ多し善逝、此の善男子善女人は大功德を得ん』と。

佛、阿難に告げたまはく『此の四天下の功德を置け、復釋提桓因大莊嚴殿の功德を置け。若し善男子善女人有りて、百千億の釋提桓因大莊嚴殿を作りて四方僧に施すと、復善男子善女人有りて、佛の般涅槃の後に於て、芥子の如き舍利を以て塔を起つること大いさ菴摩勒果の如く、其の刹も針の如く、上に施す槃蓋も酸棗葉の如く、若しは佛の形像を造るに乃至穬麥の如くなると、此の功德の滿ち足れること、百倍も及ばず、千倍・萬倍・百千萬億倍も能く及ぶ能はざる所にして、稱て量る可からず。阿難當に知るべし、是れは如來無量の功德・戒分・定分・智慧分・解脫分・知見解脫分なり。復次に阿難、如來無量の功德には、大神通・神足・變化及び檀波羅蜜・尸波羅蜜・羼提波羅蜜・毘梨耶波羅蜜・禪波羅蜜・般若波羅蜜、是くの如き等の無量の功德有り』。

爾の時に佛、尊者阿難に告げたまはく『汝、諦かに此の法を受持せよ』と。阿難、佛に白して言さく、『受敎の世尊、此れを何の法と名けん、我等、如來の法の中、當に云何んが受持すべき』。佛、阿難に告げたまはく『此れを未曾有法と名く、是れ一切淸淨、妙法方便なり。我れ是を以ての故に慇懃に汝に囑す。當に數々廣め、諸の天・人・阿修羅・龍・夜叉・乾闥婆・伽留羅・緊那羅・摩睺羅伽・人非人等の爲めに分別して之れを說くべし。當に如來の善根功德種子を作すべし。一切衆の聞かん者、如來の善根功德に入ることを得、是の因緣を以ての故に諸の煩惱を離れ、悉く皆成佛せん』。諸の比丘、聞きたてまつり已りて歡喜し禮を作せり。

藥王佛　藥王菩薩　藥上菩薩　最上天王佛

佛說未曾有經（終）

に爲んが故に、世間を哀愍爲るが故に、大衆の爲めの故に、多く天人を饒益せんが爲の故に、乃し是の義を以つて如來に問へり。阿難、諦かに聽け、善く之れを思念せよ。閻浮提は地の廣さ七千由延、北に闊く南に狹し、其の中の人面は車形に似たり。是くの如き地上、中に滿てらん甘蔗竹葦稻麻叢林、空缺の處無く猶ほ一體の如し。阿難、是の諸の草木皆悉く人と爲り、須陀洹・斯陀含・阿那含・阿羅漢・辟支佛を得んに、若し一人有り、壽を盡して衣鉢・飯食・床座・醫藥・房舍を供養し、所須具足して供給し、滅度の後に至つては一一に塔を起て、各塔を起て已つて供養恭敬するに、香華・伎樂・燒香・塗香・末香・幢幡・寶蓋、是くの如きを具足す。汝が意に於て云何ん、此くの如きの功德寧ろ多と爲んや不や』。阿難、佛に白して言さく『甚だ多し世尊、甚多し善逝、是の善男子善女人は大いなる功德を得ん』。佛、阿難に告げたまはく『是の閻浮提を置きて復た瞿耶尼有り、廣さ八千由延、人の面半月の如し。彼の中に於ける人も亦復た是くの如きの大功德を作す。復次に阿難、是の瞿耶尼を置きて復た弗于逮あり、廣さ九千由延、人の面圓滿なり。彼の中に於ける人、悉く亦是くの如きの大功德を作す。復次に阿難、弗于逮を置きて復鬱單越有り、廣さ萬由延、人の面正方なり。彼の中に於ける人、悉く亦是くの如きの大いなる功德を作す』。佛、阿難に告げたまはく『釋提桓因の大莊嚴殿は彫文刻鏤微妙奇特なり。八萬四千の寶柱有り、天の青琉璃を以て黃金を間廁へ、以て羅網と爲して其の上を彌覆へ、金沙を地に布き、奇妙の梅檀以て欄楯と爲す。復次に阿難、是の天帝釋の大莊嚴殿には復た八萬四千の寶窓有り、亦、天の青琉璃を以て黃金を間廁へ、以て羅網と爲し其の上を彌覆ふ、布くに金沙を以てし梅檀の欄楯あり。復次に阿難、是の天帝釋の大莊嚴殿は復八萬四千の天井の寶窓有り、微妙嚴麗に挍飾せること上の如し。復次に阿難、是の天帝釋の大莊嚴殿には復八萬四千の樓櫓館閣有りて四出圍遶し、衆寶挍飾せること亦復上の如し』。佛、阿難に告げたまはく『若し善男子善女人有りて是の天帝釋大莊嚴殿を作り、四方衆僧に施す。汝が意に於

【三】閻浮提（Jambu-dvipa）穢洲と譯す、須彌四洲の一にして南方に位す、もと印度のことを名けたるも、後、之れを以て吾人の住する世界のことゝなせり。

【四】瞿耶尼は西瞿耶尼 Apara-godāna の略、須彌四洲の一にして、西に位す。

【五】弗于逮は東弗婆提(Pūrvavideha)のこと、勝身と譯す、須彌四洲の一にして東に位す。

【六】鬱單越 Uttarakuru 北勝處と譯す、須彌四洲の一にして北に位す。

佛說未曾有經

後漢失譯　人名古舊錄に出づ

是くの如く我れ聞きき。一時、佛、王舍城の耆闍崛山に住したまひ、大比丘衆千二百五十人と俱なりき。爾の時、尊者阿難、晨朝に衣を著け鉢を持して王舍城に入り、正念に乞食す。一處に新に大舍重閣の高く顯るゝを作れる有るを見る。戸牖彫飾、牆壁嚴整にして風塵あること無く寒暑を障隔せり。尊者阿難、見已つて卽ち是の念を作さく、若し善男子善女人有りて是くの如きの嚴麗の舍を作りて四方衆僧に布施すると、若し如來般涅槃の後、復た善男子善女人有りて、芥子の如き舍利を以て塔を起つること大いさ〔一〕菴摩勒果の如く、其の〔二〕刹も針の如く、上に槃蓋を施すこと酸棗葉の如く、若しは佛像を作ること乃至穬麥の如くなると、是の二の功德、何者をか多と爲ん、と。

爾の時に尊者阿難、乞食し訖つて本處に還り、飯食し竟つて衣鉢を擧げ、足を洗ひ已つて佛所に往詣し、一心に恭敬して頭面に禮を作し、一面に坐す。坐し已つて佛に白して言さく『世尊、我れ彼處に於て、晨朝に衣を著け鉢を持して王舍城に入り乞食するに、一處に、新に大舍重閣高く顯るゝを作れる有るを見たり、戸牖彫飾牆壁嚴整にして、風塵有ること無く、寒暑を障隔せり。便ち是の念を作さく、若し善男子善女人有りて能く是くの如き妙麗の舍を作り、四方衆僧に布施すると、若し佛の般涅槃したまふ後、復た善男子善女人有りて、芥子の如き舍利を以て塔を起つること大いさ菴摩勒果の如く、其の刹も針の如く、上に槃蓋を施すこと酸棗葉の如く、若しは佛像を作るに乃至穬麥の如くなると、是の二つの功德、何者かを多と爲せんやと』。

爾の時に世尊、阿難に告げて言はく『善い哉善い哉、阿難、汝、多人の爲めの故に、衆生を安樂

【一】菴摩勒果 Āmalaka 形、胡桃の如く、酸にして甘く、印度藥用果の名なり。今、此處にては小さきことに喩ふ。
【二】刹とは幡（ハタ）を建つる柱のこと。

佛說未曾有經解題

經題、未曾有經は、或は未曾有因緣經とも稱し、開元錄第一には「唐譯の甚希有經と同本」と註せられてゐる。唐玄奘譯の該經と比較するに、全く同本異譯である。然るに古い經錄、長房錄の卷第十三、及び內典錄の卷三等には、失譯經目中に列して「未曾有因緣經二卷」としてあるのが一紙に餘すこと幾何くでもない程の小經である此の經に對して妙な觀を與へてゐる。依つて考へて見るに、內典錄卷の十に「抄未曾有因緣經」なるものがあつて、「齊竟陵王の抄する所、既に本經と異なり云云」としてある。之れは、開元錄卷三に「未曾有因緣經、或は直ちに未曾有經と云ふ、已に曾て再譯し、一存一闕」と云ふ處と考へ合せて見て、どうも本經は、內典錄に云ふ「抄經」ではないかと憶想せられ得る。然りとせば本經々題下に「後漢失譯、人名は古舊錄に出づ」と云ふ點に多少會通がつく樣に思はれるのである。

未曾有とは如來の善根功德が甚だ廣大希有なることを標したものである。經中說述の梗概は、阿難の問に依つて起り、佛の滅後に於て、芥子粒程の佛の舍利を以て五分程の塔を造り、或は麥粒程の小さな佛像を造り、如何に輕微なるにせよ斯くして佛を供養するの功德は、此の世界乃至天上界のあらゆる寶財莊嚴を以て四方僧に供養するよりも、其の功德遙かに勝れて何倍であるか凡そ人智の量り知ることの出來ぬ程である、とて、如來無量の功德を、出來るだけ大きな譬へを以て說いたのである。

昭和九年一月八日

譯者 清水谷恭順 識

四天下の江海水も尙ほ斗量して枯盡すべし、佛の形像を作りて其の福を得るは、四天下の江海水に過ぎたること十倍、後世、生るる所には人の爲めに敬護せらる。佛の形像を作らんは、譬へば天の雨水も、人、好舍あれば長るる所無きがごとし。

佛の形像を作らば、後世、死しても復た更らに泥犁・禽獸・薜荔の惡道中に生れず。其れ人有つて佛の形像を見、慈心を以て手を叉へ、自ら佛塔舍利に歸する者は、死して後百劫、復た泥犁・禽獸・薜荔の中に入らず、死すれば卽ち天上に生じ、天上の壽盡くれば復た來つて世間に下生し、富家の爲に子と作り、珍寶奇物、數ふるに勝ふべからず、然る後は、會ず當に佛の泥洹道を得べし』。

佛、王に告げたまはく『善を作さん者は佛の形像を作れ、其の福祐を得んこと是くの如くにして唐しからず』と。其の王歡喜し、前みて佛の爲めに禮を作し、頭面を以て佛の足に著け、王、群臣皆佛の爲めに禮を作して而して去る、壽終つて皆阿彌陀佛の國に生れき。

佛說作佛形像經（終）

得ること是くの如し。
佛の形像を作るに、後世には當に豪貴の家に生ずべし、其れ實にして世間の人と絕へて異なり、所生の處として、貧窮の家に在つて子と作らず。佛の形像を作るに其の福を得ること是くの如し。
佛の形像を作る者は、後世には身體常に紫磨金色にして端正なること比ひ無し。
佛の形像を作らば、後世には所生の處として當に富家に生るべし。錢財珍寶、勝げて數ふべからず、常に父母兄弟宗親に重愛せらる。佛の形像を作るに其の福を得ること是くの如し。
佛の形像を作らば、後世には閻浮利地に生じ、常に帝王王侯の家に生れ、或は賢善なる家の爲めに子と作る。佛の形像を作るに其の福を得ること是くの如し。
佛の形像を作らば、後世には帝王と作り、中にも復最も尊く、諸の國王に勝れ、諸の國王の歸仰する所たり。佛の形像を作るに其の福を得ること是くの如し。
佛の形像を作らば、後世には遮迦越王と作る。飛行して天上に上り、後來下して自ら恣にし、作爲する所に在つて至らざる所無し。佛の形像を作るに其の福を得ること是くの如し。
佛の形像を作らば、後世には第七梵天上に生れ、壽は一劫にして智慧は能く及ぶ者有ること無し。
佛の形像を作らば、死後は復び惡道中に在つて生れず、生るれば常に自ら節を守り、心念常に佛道を求めんことを欲す。佛の形像を作るに其の福を得ること是くの如し。佛の形像を作らば、後世に生るれば常に佛を敬ひ、心に經を慈む。常に雜へて繒綵・好華・好香を持し、燈火を然し、諸の天下の珍寶奇物、持つて佛舍利に上る。其後無數劫、會ず當に泥洹道を得べし。人、出意有つて珍寶を持し、佛に上る者は皆凡人に非ず、皆是れ前世に佛道を作せるなり。佛の形像を作るに其の福を得ること是くの如し。
佛の形像を作らば、後世に福を得ること窮極して盡くる時有ること無く、復稱て數ふべからず。

佛說作佛形像經

闕譯[一]　人名は後漢錄に出づ

佛、[二]拘鹽惟國に至りたまふ。諸樹園主有り、拘翼と名く。時の國王を優塡と名く、年十四。佛の當に來りたまふべしと聞きて、王、卽ち傍臣に勅し、左右皆悉く駕を嚴り、王卽ち行きて佛を迎ふ。遙に佛を見たてまつりて心中踊躍歡喜し、王卽ち車を下りて步み、傍臣、左右に蓋を持する者を罷む。王、趨きて佛を迎へ、前みて頭面を以て佛の足を著け、佛を遶ること三匝、長跪し手を叉へて佛に白して言さく『天上天下人民の能く佛に及び者あること無し、今佛の面目身體行出し、光明巍巍として好もしきこと乃し是くの如く、我れ佛を視たてまつるに厭極の時あること無し。今佛、是れ天上天下の人の師なり、佛の慈心、所愛の者多し』。佛、默然として應へず、王、復佛に白して言さく『人、善を作す者は其れ福祐を得と。當に何の趣向かすべき。佛の去りたまはん後は我れ恐らくは復佛を見じ。我、佛の形像を作りて之れに恭敬承事せんと欲す、後には當に何等の福をか得べき、願はくば佛、哀れみて我が爲めに之れを說きたまへ、我れ聞き知らんと欲す』。佛言はく『年少き王よ、汝が問ふ所大いに善し、我が言を聽け、聽き已らば當に心中に置くべし。』王の言さく『諾、敎を受けん』と。佛、王に告ぐ『若し佛の形像を作りて其の福祐を得んこと、我悉く汝が爲めに之れを說かん』。王の言さく『恩を受けん』と。佛の言はく『天下の人、佛の形像を作る者は、其の後世の所生の處、眼目淨潔に、面貌端正、身體手足常に好もしく、天上に生るるも亦淨潔なること諸天と絕異し、眼目面貌好もしからん。佛の形像を作るに福を得ること是くの如し。

佛の形像を作らば、所生の處として惡身有ること無く、體皆完好なり。死後は第七梵天上に生るを得、復餘天に勝れて端正なること絕好無比にして、諸天の敬ふ所と爲る。佛の形像を作るに福を

【一】宋本及び宮內省本圖書寮本には、此の處「失譯、漢錄に附す」とあり。
【二】拘鹽惟 Kauśāmbi 俱睒彌、拘剡彌等と書く、又造立形像福報經には拘羅瞿國、優塡王經には拘深國と書けり。中印度にありし地名。

佛說作佛形像經解題

經題、出三藏記集卷の四に「作佛形像經一卷、或は云ふ優塡王作佛形像經、或は云ふ作像因緣經」とあり、內典錄第九には「優塡王經五紙」とも稱してゐる。又同卷に「造立形像福報經二紙」とあるは、開元錄第三を見ると「作佛形像經と同本」としてある。又歷代三寶紀卷の四も僧祐錄を享けて同樣の經名を掲げて居る。之等諸錄の內、內典錄は「後秦弘始年佛陀耶舍、常安に於て譯す」の部に入れて居るが、古い僧祐及長房は、失譯の部に屬し「出入相交り、實に詮定し難し、未だ經卷を覩ず、空しく名題を閱す」或は「將に是れ漢魏の時に來り、歲久しく錄亡ふ」等と云ふて居るから、今の經題下に「人名は後漢錄に出づ」とあるのは、手懸りも無い樣である。

今、上述の諸經名を以て現存の經を比較するに、優塡王經は大正藏經(No. 332)に法炬譯となつて居つて、其の內容も今經とは遙かに異つて居る。次に造立形像福報經は、【大正藏經(No. 693)】矢張り失譯となつて居て、其の內容は、今經と全く同本異譯の樣である。但、之れには長行の末に更に長い偈頌を以て重說し、最後に今經にては「壽終つて阿彌陀佛國に生る」とあるのが、「即ち須陀洹道を得たり」となつて居るのを、大なる異りとする。

本經の內容は、拘鹽惟國の若冠なる優塡王の發問に依り、佛陀が之れに答へて、佛像を造立するの功德深大なることを說いたものである。西域記卷五に「拘睒彌國印度に在りて周り六千餘里、土地沃穰、都城の宮內に大精舍あり、高さ六十餘尺、內に刻檀の佛像あり、是れ優塡王の作るところ、諸國の君王來て之れを移さんと欲すれども能はず、追に圖して供養し、倶に眞を得たりと言ふ」と。造像の緣由となる本經に多大の興味を與ふるものである。

昭和九年一月八日

譯者 清水谷恭順 識

に端好潔白にして人の敬ふ所。塵垢、身に著かず、生るる所に在りて常に佛と會し、生るる所に在りて常に法と會し、生るる所に在りて常に比丘僧と會しむ。某甲は經に明らかに、智慧は佛の十二部經、四阿含、安般守意、三十七品、四意止、四意斷、四神足、五根、五力、七覺、八直行道に曉了ならしむ。若し能く、至心に佛道を求めば、疾かに[二]阿惟越致を得ん。

其れをして佛の三十二相、八十種好紫磨金色、十種力、四無所畏、十八不共を得、口には八種の音聲を出し、飛行洞視、至到る所に在らしめ、諸の天龍鬼神鬼子母官屬、其の身を擁護せん。行き出入するには當に安穩なるを得しめん。若し山中を行くも虎狼に逢はず、若しは軍旅に入るも兵甲を被らず、若しは江湖を行くも風波に逢はず、床上をして病瘦なる者有ること無からしむ。當に縣官をして呼召ずる者無からしむべし。妻子女產生の難有らんに安穩なるを得しむ。若し賈販を行はんに財利百倍せん。衆の邪惡氣も妄に干すを得ず。水火盜賊、怨家債主も妄りに害することを得ず。口舌消滅して皆厭伏せしめ、其の精進をして中悔を得ること莫からしめ、行は菩薩の如く、道を得ること佛の如からん』。

佛說灌洗佛形像經

此の經は宋藏の題に「摩訶刹頭經、聖堅譯」と云ふ。今開元錄を按ずるに、宋藏は錯亂せるが故に、丹本に依つて改め、「灌洗佛形像經、法炬譯」と爲す。又宋藏の此の經の初めには、卽ち、「摩訶刹」等と云ふ乃至二紙の經文なり、全く是れ摩訶刹頭經文二經殊ならず。今、丹本に依つて、「爾の時佛摩訶刹頭に告げたまはく」、より、「是の因緣に從つて佛道を成ずることを得ん」に至る二紙を以つて之れに遞り、「佛言はく、佛の形像を浴す」より已下の三十一行の經文は、宋本の中に於て本と自ら之れ有り、而して今仍ほ存す。

佛說灌洗佛形像經(終)

【二】阿惟越致(Avaivartika, or Avinivartya) 阿鞞跋致とも書く、不退、不退轉等と譯す。佛に成るに定まりて菩薩の地位より再び凡地に退くこと無き位をいふ。

佛、諸の弟子に告げたまはく、『夫れ人身は得ること難く經法は聞くこと難し。其れ天・人有りて能く自ら妻子の分五家財物を減じ、用て佛の形像を浴する者、佛の在せる時の如くせば、所願悉く得ん、度世を求め無爲の道を取らんと欲せば、生生に死と會せざることを得べし。精進勇猛、釋迦文佛の如からんを求めんと欲せば得べし。文殊師利阿惟越致菩薩の如からんを求めんと欲せば得べし。轉輪聖王飛行敎化を求めんと欲せば得べし。辟支佛・阿羅漢を求めんと欲せば得べし。永く三惡道を離るることを求めんと欲せば得べし。天上・人間に生れて富樂ならんことを求めんと欲せば得べし。百の子、千の孫を求めんと欲せば得べし。長壽無病を求めんと欲せば得べし。世間の人民は貪欲海の如し、寧ぞ身上の一臠肉を割かん、肯て一錢の物を出してすら人に與へず。人、生るる時は一錢をも持つて來らず、死するも亦一錢をも持て去らず。財物の故に世間に在り、人死しては當に獨り去るべし、此くの如きの苦を憶ひて、乃ち佛の形像を浴せば、是の功德を持て生死相ひ隨ひて斷ずるの期有ること無し』。佛の言はく、『若し人、一善の心有りて是の功德を作す者は、諸天善神、天龍八部、四天王等、僉然擁護す。佛の形像を浴する福報は所生常に淸淨なるを得、是の因緣に從り佛道を成ずることを得ん。（此の下の三十一行の經文は丹本には無き所なれども宋本には自ら有れば之れを存す。）佛言はく『好き香を持つて佛の形像に浴する者は、自ら其の福智を得、淸淨功德名聞あり。諸の、好華を持つて佛の上に散ずる者は、自ら其の福を得、端政好色にして雙比あること無し。諸の繒幡を持して、佛に上る者は、自ら其の福を得、生るる所に在りて當に自然の好衣極り無きことを得べし』。佛の言はく『我れ、功を累ね德を積み、行善至誠、持戒忍辱精進一心智慧にして、乃し自ら作佛することを得るを致す。今日の賢者某甲、皆慈心好意を爲して佛道に信向し、度脫を求めんと欲して、種々の香花を持つて佛の形像を洗す。皆、七世の父母、五種親屬、兄弟妻子の厄難中に在るが爲めの故に、十方五道中勤苦の爲めの故に、佛の人民愚癡にして佛道を信ぜざるが爲めの故に、其の後世、生れて人と爲る

佛說灌洗佛形像經

西晉沙門釋法炬譯す

爾の時に佛、[一]摩訶刹頭諸天人民に告げたまふに皆一心に聽きたてまつる。佛言はく、『人身は得ること難し。無爲道も亦然なり。佛世には値ひ難し。吾れ本、阿僧祇劫の時より、身、白衣爲り。累劫德を積み、每生自ら剋く五道に展轉し、財寶を貪らず、身を棄てて施與するに愛惜する所無かりき。王太子と爲るを致して自りは、四月八日の夜半、明星の出づるの時を以て生れて地に墮ち、七步を行き、右手を擧げて而して言ふ、「天上天下に唯だ吾れ尊しと爲す、當に天人の爲めに無上師と作るべし」と。太子の生るる時、地は大動を爲し、第一四天王、乃至梵天・忉利天王、其の中の諸天、各十二種の香を持ち、雜種の名花を和湯して以て太子を浴す。太子佛道を成ずることを得て聖法を開現し、群氓を濟度す』。佛、諸天人民に告げたまはく、『十方の諸佛は皆四月八日夜半の時を用て生れ、十方の諸佛は皆四月八日夜半の時を用て出家し、山に入り道を學ぶ、十方の諸佛は皆四月八日夜半の時を用て成佛す、十方の諸佛は皆四月八日夜半の時を用て而も般涅槃したまふ』佛言はく、『四月八日を用ふる所以は、春夏の際にて殃罪悉く畢り、萬物普く生じ、毒氣未だ行はれず、寒からず、熱からず時氣和適なるを以て、正に是れ佛、生るるの日なり。諸の善男子善女人、當に至心に佛の無量の功德の力を念じ、佛の像形を浴すること、佛の在す時の如くすべし。福を得ること無量にして稱數すべからざらん』。佛言はく『我れ本菩薩の道を行せし時、三十六返天王釋と爲り、三十六返轉輪聖王と作り、三十六返飛行皇帝と作れり。諸の佛弟子の信心善意有らん者は、當に十方諸佛功德の善を念ふべし。若し香華雜物を以て佛の形像を浴せん者は、願ふ所皆得、諸天龍神、常に隨ふて擁護し皆當に證明すべし』。

【一】摩訶刹頭 Mahāsattva 餘經の所謂る摩訶薩のことなり、大衆生と譯す。

佛說灌洗佛形像經解題

今經の末尾に附せる跋文に「開元錄を案ずるに」とあるは、即ち同錄卷二の法炬譯の中に「灌洗佛形像經一卷、初出なり、亦は四月八日灌經と云ひ、亦は直ちに灌經と云ふ、摩訶刹頭經と同本、長房錄に見ゆ」とあるのと、又同錄卷四の聖堅譯の中に「摩訶刹頭經一卷、亦は灌佛經と云ふ、第二出なり、灌洗佛形像經と同本、始興錄に見ゆ」等とあるものに依るのであらう。但し、長房錄・始興錄に見ゆ等と云ふも、其れ等及び內典錄に到るまでは、之れを皆失譯の中に收めて居り、而も內典錄卷一には「舊灌頂經と同じく少しは異り」と註を用ひて居るのを見ると、失譯として類本が古くから傳つて居つたものであることを注意せねばならない。現今も、殆ど內容の同じ經が二種、開元錄に定められた通り、一には法炬譯として本經が傳り、一は聖堅譯として「佛說摩訶刹頭經一卷 亦名灌形像經」大正藏經(NO. 696)が傳つて居る。尚亦、大正藏經(NO. 391)の灌臘經一卷も同本異譯ではないが同類のものであると思ふ。

譯者法炬は西晋の惠帝代（西紀二九〇—三〇〇）法立と與に共同して譯經を爲し、立の沒後は自ら譯して經四十餘部を出して居る人である。

本經の大要は、佛陀が、摩訶薩及び諸天人民の爲めに、四月八日の緣由、及び其の日に於ける灌佛の修法、並に其の功德の莫大なることを說いたものである。

昭和九年一月八日

譯者　清水谷恭順　識

紫檀多摩羅香、甘松芎藭、白檀、欝金、龍腦、沈香、麝香、丁香を以てすべし。是くの如き等の種々の妙香を以て、得る所のものに隨つて以て湯水と爲し、淨器の中に置き、先づ方壇を作り、妙床座を敷き、上に佛を置き、諸の香水を以て次第に之れを浴す。諸の香水を用ふること周遍して訖已(をはり)らば、復た淨水を以て上に沐洗せよ。其の像を浴せん者は、各〻少許(すこしばかり)の、像を洗ひし水を取りて自らの頭上に置き、種々の香を燒きて以て供養を爲せ。初めに像の上に水を下すの時、應に誦するに偈を以てすべし。

我れ今、諸の如來を灌沐す　淨智の功德莊嚴聚りて　五濁の衆生、垢を離れしめ　願はくば如來の淨法身を證せん、と

燒香の時は當に斯の偈を誦すべし。

戒・定・慧・解・知見の香　十方の刹(くに)に遍して常に芬馥たり　願はくば此の香烟も亦是くの如く自他の五種身に迴作せん』。と

爾の時に世尊、是の法を説きたまひ已るに、衆中に無量の菩薩摩訶薩有り、淸淨無垢三昧を獲得し、卽ち座よりして起つ。無量の天人は無上菩提を退轉せざるを得たり、爾の時に阿難、佛に白して言さく『世尊、當に何の經に名け、我等云何んが奉持すべき』。佛言はく『此の經は名けて洗浴諸佛得身淸淨と爲す。應に是くの如く持すべし』と。是の經を説きたまひ已んぬ。一切の衆會、皆大いに歡喜し、信受し奉行しき。

佛說浴像功德經（終）

如く、塔を造ること菴羅果の如く表刹は針の如く、蓋は浮萍の如くし、佛の舍利の芥子の大いさなる如きものを持して其の中に安置するに、得る所の功德、我が在世の如く、等しくして差別無し。[六]是くの如きの人は十五種の功德を得ん。一には清淨念心を得、二には順法心を得、三には慚愧心を得、四には如來を見ることを得、五には淨信心を發し、六には能く正法を持し、七には說の如く修行し、八には諸佛に親近することを得、九には諸の佛國土に意に隨ひて生ずることを得、十には若し人中に生ぜんに大姓家に生れて其の心柔軟に、人の敬愛する所となり。十一には纔に人中に生ずるに念佛の心を得、十二には諸の魔軍衆も惱亂すること能はず、十三には末法の時に於て能く正法を護り、十四には常に十方諸佛如來に恒に覆護を加へらるることを得、十五には速に五分法身を成就することを得ん』。爾の時に世尊、而も偈を說きて曰く。

若し清淨心を以て　如來の滅後に於て　舍利を供養せん者　或は塔廟を　及び如來の像を造り
彼の塔像の前に於て　漫陀羅を掃塗し　種々の花香を以て　其の上に散布し　諸の妙香水を以て　而も佛の像に浴し　上妙の諸の飯食　淨持以て供養し　佛の功德を讚禮せば　無量にして
思議し難き　智慧及び神通　諸の善巧方便ありて　悉く皆、彼岸に至らん

[七]爾の時に清淨慧菩薩、佛世尊の是の頌を說きたまふを聞き已りて、而も佛に白して言さく、『世尊、若し、佛の在世と及び滅度の後の未來世の中の諸の衆生等、云何んが像を浴せん。唯願はくば如來衆生の爲めの故に、開示し演說したまへ』。佛言はく、『清淨慧、佛の在世の如きは、諸の衆生等、淨心を發起す、佛の滅後に於ても亦應に是くの如くなるべし。空有の想に執することを作さざれ、諸の善品に於て心に渴仰を懷き疲厭を生ぜざれ、何を以ての故に、如來の法報身を成就せんが爲の故なり。我れ已に曾て汝が爲めに四眞諦の法、十二因緣、六波羅蜜を說けり。我れ今、汝が爲めに浴像の法を說かん、諸の供養中最も殊勝と爲す。善男子、若し像を沐せんと欲せば、應に牛頭栴檀、

【六】佛の在世及び滅後に於ける佛を供養する者の功德を併て示し、浴像の說を序引す。

【七】浴像の修法を說く。

佛說浴像功德經

唐の天竺三藏法師寶思惟譯す

是くの如く我れ聞きき。一時、薄伽梵[一]、王舍城の鷲峯山中に在したまひ、大比丘衆及び無量の諸大菩薩摩訶薩と倶なりき。爾の時、會中に一切の菩薩有り、清淨慧と名く。是の思惟を作さく。何の因縁を以て諸佛如來は清淨身を得たる。又復た念言すらく、若し佛の在世に親近し供養すると、及び滅度の後に舍利を供養すると、此の二種の人の獲る所の福德功德、齊しきや不や、と。是の念を作し已つて、佛の威神を承け、座よりして起ち、佛の足を頂禮して白しき言さく『世尊、諸佛如來は、何の因縁を以て清淨身を得たる。若し佛の在世に親近し供養すると、及び滅度の後に舍利を供養すると、此の二種の人の獲る所の福德其の功德、等しきや不や』と。爾の時に世尊、清淨慧菩薩に告げて言はく『善い哉善い哉、汝、今乃ち未來世の諸の衆生の爲めの故に是くの如きの問を發す、汝、當に善く聽け、我れ今汝が爲めに分別し解說せん』。爾の時に清淨慧菩薩、佛に白して言さく、『唯然なり世尊、願樂くば聞きたてまつらんことを欲す』と。佛、清淨慧菩薩に告げて言はく、『[二]諸佛如來は菩提を求めんが爲めに、往昔時に於て修する所の三昧、戒・定・忍辱・智慧・慈悲・喜捨・解脫・解脫知見・力・無所畏の一切佛法一切種智、悉く皆清淨なりき。是の故に如來は清淨身を得たり。[三]又、華香幡蓋を以て、而して以て供養し、復た香水を以て如來の身を浴し、復た寶蓋を以て其の上に彌覆し、諸の飯食を以てし、鼓樂弦歌、如來を讃詠し、此の功德を以て一切種智に迴向する、所得の功德無量無邊にして乃至無上菩提を成ずることを得ん。何を以ての故ぞ。如來の智慧は無量無邊にして思議すべからず、所有の福德も亦復た是くの如し。[四]清淨慧、我が滅度の後、二種の舍利有り、一には[五]法身、二には化身なり。若し善男子善女人等、舍利を供養し、佛の形像を造ること大麥等の

【一】薄伽梵（Bhagavat）又は婆伽婆とも書く、梵音なり、世尊と譯す。

【二】諸佛如來の清淨身を得たる因縁を說く。

【三】佛在世に佛を供養するの功德を說く。

【四】佛滅後に佛の舍利を供養するの功德を說く。

【五】法身、化身は義淨譯にては、一者身骨舍利、二者法頌舍利となつて居る。

佛說浴像功德經解題

　開元錄卷の九を見ると寶思惟譯經目の中に「浴像功德經一卷、神龍元年正月二十三日東都大福先寺に於て譯す、婆羅門李無諂譯語、初出なり、後に義淨の出すものと同本」とある。又義淨のところにも同經一卷あり、「景龍四年四月十五日大薦福寺の翻經院に於て譯す。」としてある。つまり(西紀七〇五)と(西紀七一〇)の二囘、僅か五年を距てゝ、一經二譯が出て居る。但し此の經は實は寶思惟譯が初出ではなくて、出三藏記集の卷四失譯及闕經目の中にも已に「浴像功德經一卷、浴僧功德經一卷」等が載つてゐるから、更に古く、少くとも西紀五一八以前に於て、此の經が支那に譯されて居つた樣である。故に此の經は三譯二存と稱すべきであらう。今、其の寶思惟譯と義淨譯の二本を比較して見ると、大體同じもので、後者は可成り多く前者の譯語をも踏襲して居るが、後者の方が文辭は少しく廣い。

　譯者の寶思惟は、梵名阿儞眞那の唐譯である。北印度迦濕彌羅國の刹帝利の出で、天后の長壽二年に洛陽に來り、本經初め不空羂索陀羅尼經七部十卷を譯し、開元九年（西紀七二一）壽一百餘歲を以て世を終つて居る。

　本經の內容は、勿論佛の像を洗浴する方法及び功德を說いたものであるが、其の內容を大分して見ると、初めに淸淨慧菩薩の質問を以て序曲とし、次に佛の答ふる中、先づ佛の淸淨身を得たる因緣、及び佛を供養する者の功德は在世も滅後も平等なることを說き、自づと其の中に於て浴像の說の緖を示し置くと共に、先に其の功德を十五種に說明し、終りに浴像の方法を說いて居る。傳に依ると寶思惟は此の經を譯した翌年からは更らに翻經を爲さず、每朝香を磨つて水を作り、佛像を塗浴してから朝食を攝り、唯、精勤禮誦して諸の福業を修することゝなり、其の結果一百餘歲の長壽を得たと云ふことになつて居るのであるから、本經とは切り離せぬ尊い一つの話題であらうと思ふ。

昭和九年一月八日

譯者　清水谷恭順　識

斯れ、塔を右遶するに由る。　大精進の力を具へ　種々の行を勤修するに　未だ嘗て疲懈あらず　斯れ、塔を右遶するに由る。　勇猛、常に精進なり　堅固にして壞すべからず　作す所は速かに成就せん　斯れ、塔を右遶するに由る。　深遠微妙の音ありて　聞く者皆歡喜し　安樂にして常に病無けん　斯れ、塔を右遶するに由る。　我が演說する所の如く　三有の苦をば厭捨して　出世の智をば成就せん　斯れ、塔を右遶するに由る。　常に、四念處　及以び四正勤　四如意神足に在らん　斯れ、塔を右遶するに由る。　四眞諦　根と力と七覺分　正道及び聖果に了達す　斯れ、塔を右遶するに由る。　一切の煩惱を滅して　大威德　無漏六神通を具足せん　斯れ、塔を右遶するに由る。　永く貪恚癡と　及び一切の障礙を離れ　獨覺菩提を證せん　斯れ、塔を右遶するに由る。　妙なる紫金の色を得て　相好、身を莊嚴し　現に天人師と作れり　斯れ、塔を右遶するに由る。　皆、身業と　及び語業を以て讃歎し　佛の塔を右遶するに由つて　此の大利益を成ぜん。　諸の佛塔を右遶して　得る所の諸の功德をば　我れ今、所問に隨て　略して說けども詎ぞ能く盡きん』

爾の時世尊、此の偈を說きたまひ已んぬ。舍利弗等の一切衆會、皆、大いに歡喜し、信受して奉行しき。

右遶佛塔功德經（終）

に由る。　或は婆羅門と爲り　戒を持ちて、善く　呪術・圍陀典に通達せん　斯れ、塔を右遶するに由る。　或は大長者と爲り　豪貴にして財産多く　倉廩、常に豐足せん　斯れ、塔を右遶するに由る。　或は正法王と作り　自在にして閻浮に王たらんに　率土咸く歸化せん　斯れ、塔を右遶するに由る。　或は七寶を具せる　大勢の轉輪王と爲り　十善、群生を御せん　斯れ、塔を右遶するに由る。　此れ從り天上に生れば　常に大威德有りて　佛法を淨信せん　斯れ、塔を右遶するに由る。　淨信、速かに成し已れば　法に於て迷惑無く　諸行の皆空なるを見ん　斯れ塔を右遶するに由る。　天上より命を捨て　人中に下生せんに　入胎にも迷亂せず

斯れ塔を右遶するに由る。　母の胎の中に在りては　垢穢に染まざる所　淨き摩尼珠の如けん　斯れ、塔を右遶するに由る。　胎に處し及び生るゝ時は　母をして常に安樂ならしめ　乳を飮むにも亦復然らん　斯れ、塔を右遶するに由る。　父母及親戚　一切共に鞠養し　乳母は常に離れず　斯れ、塔を右遶するに由る。　眷屬皆愛念すること　其の父母を超過し　資財自ら增長せん　斯れ、塔を右遶するに由る。　夜叉、諸の惡鬼　暫くも驚怖すること能はず　所須、自然に得ん　斯れ、塔を右遶するに由る。　百千劫を經て　其の身轉た清淨に　妙色相成滿せん　斯れ、塔を右遶するに由る。　淨眼は修く且つ廣く　猶し淨蓮華の如し　兼ねて淨天眼を得ん　斯れ、塔を右遶するに由る。　妙色常に圓滿し　諸相　自ら莊嚴し　大勢力を成就せん　斯れ、塔を右遶するに由る。　或は帝釋宮に生じ　大威勢自在にして　忉利天中の尊ならん　斯れ、塔を右遶するに由る。　或は生ぜん、須夜摩　兜率陀天宮　化樂及び他化へと　斯れ、塔を右遶するに由る。　或は復た梵天に生ずれば　梵世に最も自在なり　諸天常に供養せん　斯れ、塔を右遶するに由る。　億那由他劫　常に諸の智人と爲り　恭敬し而して供養さる

斯れ、塔を右遶するに由る。　其身と及び衣服は　億劫常に垢も無く　白淨法を具足せん

右繞佛塔功德經

大周于闐國三藏沙門　實叉難陀等制を奉じて譯す

是くの如く我れ聞きゝ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に在しまし、大比丘僧及び餘の無量の衆と倶にして、前後を圍遶さられき。爾の時に、長老舍利弗、卽ち坐より起ち、偏に右の肩を袒にし、右の膝を地に著け、合掌して佛に向ひたてまつり、偈を以て請ひて曰はく。
『大威德ある世尊よ　願はくば我れ等が爲めに說きたまへ　佛の塔を右に遶りて　得る所の果報を』と。
爾の時に世尊、偈を以て答へて曰はく、
『佛の塔を右に遶りて　得る所の功德をば　我れ今、少分を說かん　汝等、咸く善く聽かれよ。
　一切の諸の天龍　夜叉鬼神等　皆親近し供養せんは　斯れ、塔を右遶するに由る。　在々生を受くる所は　八難を遠離して　常に難無き處に生ぜん　斯れ、塔を右遶するに由る。　一切の生る處に於て　念慧、常に失ふ無く　妙色相を具足せん　斯れ、塔を右遶するに由る。天、人の中に往來し　福と命と悉く長遠にして　常に大名稱を獲ん　斯れ、塔を右遶するに由る。閻浮提に在りては　常に最勝尊なる　淸淨種姓の中に生れん　斯れ、塔を右遶するに由る。儀貌は常に端正に　富貴にして財寶多く　恆に大封邑を食まん　斯れ、塔を右遶するに由る。財寶恆ねに盈ち積みて　而も慳恪の心無く　勇猛にして廣く惠み施さん　斯れ、塔を右遶するに由る。　色相淨く微妙にて　見る者皆欣仰し　所住は常に安樂ならん　斯れ、塔を右遶するに由る。　或は刹利王と爲り　妻子悉く具足して　威勢力自在ならん　斯れ、塔を右遶する

右繞佛塔功德經解題

此の經は亦、遶塔功德經とも云ふ。四十二行の偈頌を以て成立し、初めの一行は長老舍利弗が世尊に對ひ、佛塔を右に遶るの功德果報を問ひたてまつたもので後の四十一行は皆佛の答である。其の中、初めの一行が問に對する應諾で、次の三十八行が正答である。此の答は行毎に「是れ塔を右に遶るに由る」と結んで、下は天龍鬼神等の親近供養する小果報より初まり、上は成佛の大果を招くまでの大功德を說き、頌誦極めて流朗な句調を成して居る。終りの二行の偈は此の結頌である。

譯者、實叉難陀は于闐國の人で、大小乘に兼ね通じ、八十華嚴及び起信論等、十九部一百七卷を出した唐代屈指の大譯經家である。

本經翻譯の年時は、開元錄の九、貞元錄の一等に依ると、此の人が初めて洛陽に來り譯業にかゝるのが天后の證聖元年(西紀六九五)、于闐國に還つたのが長安四年(西紀七〇四)、再び長安に來たのが景龍二年(西紀七〇八)であるが此の時は未だ翻譯に遑あらずして疾を得て斃れたとあるから、大體(西紀六九五―七〇四)の九年間と定められる。

昭和九年一月八日

譯者　清水谷恭順識

佛、阿難に告げたまはく、「此の經は名けて溫室洗浴衆僧經と曰ふ、諸佛の說きたまふ所にして、我れ獨り造るに非ず、行者度すことを得、神の授與に非ずして淸淨福を求めんには、自ら當に奉行すべし」と。佛、是の經を說きたまひ竟るに、耆域の眷屬、經を聞きて歡喜し、皆須陀洹道を得、佛を禮し退かんことを求め、嚴かに洗具を辦ず。衆坐の大小、各〻道迹を得、皆共に稽首し、佛を禮して而して去りにき。

佛說溫室洗浴衆僧經（終）

若し天王の家に生れ　生れては即ち常に潔淨に　洗浴するには香湯を以てし　苾芬以て身に熏り　形體、衆と異なりて　見る者欣ばざる莫きは　斯れ、溫室浴を造りて　僧を洗ふの福報なり。　第一四天王　四方の域を典領し　光明身は端正に　威德は四鎭を護り　日月及び星宿光照して陰冥を除く　斯れ、衆僧を洗ふに由る　福報は影と響の如し。　第二忉利天　帝釋名けて因と曰ふ　六重の寶城　七寶をもて宮殿と爲し　勇猛にして天中の尊　端正にして壽延長なり　斯れ、衆僧を洗ふに由る　其の報や等倫無し。　世間の轉輪王は　七寶導きて前に在り四海の外に周行し　兵馬あること八萬四　明寶は晝も夜も照し　玉女は時に隨つて供し　端正にして身、香潔なり　斯れ、衆僧を洗ふに由る。　第六化應天は　欲界中の獨尊なり　天相光影足　威靈は六天に震ふ　自然に甘露を食し　妓女常に邊りに在り　衆德は稱譽し難し　斯れ、衆僧を洗ふに由る。　梵魔三鉢天は　淨居修自然に　行は淨くして垢穢無く　又女人の形無く　梵行は潔きを修し已り　志は淳く泥洹に在り　彼の天中に生ずるを得るは　斯れ、衆僧を洗ふに由る。　佛は三界の尊たり　道を修すること甚だ苦勤に　行を積むこと無數劫にして今、乃ち道眞を得たり　金體、玉を瓔と爲し　塵垢、身に著せず　圓光相具足せり　斯れ、衆僧を洗ふに由る。　諸佛は行從り得たり　種々に勞勤せず　施す所の三界人　所として周遍せざるは無し。　衆僧の聖尊　四道の良福田たり　道德、中より出づ　是の行最も妙眞なり』。

佛、偈を說きたまひ已つて、重ねて耆域に告げたまはく、『彼の三界、人天の品類を觀ずるに、高下長短、福德に多少あり、皆、先世に心を用ふること等しからざるに由る。是を以て受くる各ゝ異りて同じからざること此くの如し。諸の福報を受くるは、皆、聖衆を洗浴するに由つて之れを得るのみ』。佛、經を說きたまひ已んぬ。阿難、佛に白して言さく、『當に何と此の經を名くべき、何を以てか之れを勸誨せん』と。

僧を澡浴する反報の福を說くべし」。佛、耆域に告げたまはく。『澡浴の法は、當に七物を用ひて七病を除去し、七福の報を得べし。何をか七物と謂ふ、一には然火、二には淨水、三には澡豆、四には蘇膏、五には淳灰、六には楊枝、七には內衣、此れは是れ澡浴の法なり。何をか七病を除去すと謂ふ。一には四大安穩、二には風病を除き、三には濕痺を除き、四には寒水を除き、五には熱氣を除き、六には垢穢を除き、七には身體輕便に、眼目精明なり。是れを衆僧の七病を除去すと爲す。是くの如く供養せば、便ち七福を得ん。何をか七福と謂ふ、一には四大病無く、生るゝ所常に安らかに、勇武丁健にして衆の敬仰する所、二には生るゝ所清淨に、面貌端正にして塵水著せず、人の爲めに敬はる、三には身體常に香ばしく、衣服潔淨にして見る者歡喜し、恭敬せざるは莫し、四には肌體濡澤にして威光德大、敬歎せざるは莫く、獨歩雙び無し、五には多饒く人從ひ、塵垢を拂拭し、自然に福を受け、常に宿命を識る、六には口齒の香り好く、方白齊平、所說の敎令、肅用せざるは莫し、七には所生の處、自然に衣裳光飾珍寶あり、見る者悚息す』。

佛、耆域に告げたまはく、『此れを衆僧開士を洗浴すと作す。七福は是くの如し。此の因緣に從つて或は人臣と爲り、或は帝王と爲り、或は日月四天神王と爲り、或は帝釋、轉輪聖王と爲り、或は梵天に生じて、福を受くること量り難し。或は菩薩と爲り、發意持地、功成り志就りて遂に佛と作ることを致す。斯の因緣は衆僧を供養する無量の福田にして、旱澇も傷けず[二]』。是に於て世尊、重ねて耆域の爲めに而も頌を作して曰く。

『諸の三界中を觀るに　天人、景福を受け　道德限量無し　諦かに聽け、次に之れを說かん。
夫れ人生れて世に處するに　端正の人にして敬はれ　體性常に淸淨なるは　斯れ衆僧を洗ふに由る。
若し大臣の子と爲り　財富み常に吉安に　勇健にして忠賢良なる　出入に罣礙無く
所說は人、用ひ奉り　身體は常に香潔に　端正色にして從容たるは　斯れ、衆僧を洗ふに由る。

【二】旱澇はひでりと雨多きことを云ふ、共に作物を害する大障なれども、今の福田には如何なることも障害不作を爲さざることをたとふるなり。

佛說溫室洗浴衆僧經

後漢の安息三藏安世高譯す

阿難の曰さく、「吾れ佛に從ひたてまりて、是くの如きを聞きき。一時、佛、摩竭提國の因沙崛山の中に在します。王舍城の內に大長者有り、[一]柰女の子なり、名けて耆域と曰ふ。大醫王と爲り、衆病を療治す。少小して學を好み、才藝過通、智は五經、天文、地理に達す。其の治する所、除愈せざるは莫く、死者も更生し、喪者も還るを得。其の德甚だ多く、具さに陳ぶべからず。八國宗仰し、見る者歡喜す。

是に於て耆域、夜欻に念を生ず。明けて佛所に至り、當に我が疑を問ふべしとて、晨旦、家の大小眷屬に勅して、嚴かに佛所に至り、精舍の門に到れり。佛を見るに炳然として、光、天地を照し、衆の坐する四輩數千萬人あり、佛、爲めに法を說きたまふに一心にして靜かに聽けり。耆域と眷屬、車を下りて直ちに進み、佛の爲めに禮を作し、各一面に坐せり。

佛、慰勞して曰く、「善く來れり醫王よ、所問有らんと欲せば疑難を得ること莫れ」。耆域、長跪し佛に白して言さく「世に生るゝことを得たりと雖も人の爲めに疎野、俗野俗衆の流に隨ひ、未だ曾て福を爲さず、今、佛及び諸衆僧、菩薩大士を請じ、溫室に入つて澡浴せんことを欲す、願はくは衆生をして長夜清淨に、穢垢を消除し、衆患に遭はさらしめん。唯、佛の聖旨、所願を忽にしたまはざれ」。

佛、醫王に告げたまはく、「善い哉妙意、衆人の病を治するに皆除愈を蒙る。遠近、慶び賴り、歡喜せざるは莫し。今復た佛及び諸衆僧を請じ、溫室に入れて洗浴し、十方衆藥の病を療すに及ばんことを願ふ。洗浴して垢を除く、其の福無量なり。一心に諦に聽け、吾れ當に汝が爲めに先づ、衆

【一】柰女、梵語菴羅 Amra の譯。柰樹の上に化生し、摩揭國の萍沙王の妃となりて耆婆を生む。柰女耆域因緣經に說けり。

佛説温室洗浴衆僧經解題

本經の大要は、大醫王耆域が佛に向ひ、温室を設けて、佛及び衆僧を澡浴し、垢穢を消除し、衆生をして長夜清淨ならしめんことを願ふ。佛、之れを嘉し、廣く其の福報を說き、併せて其れが澡浴の方法を敎へたまうたものである。

經題下には安世高の譯となつて居る。譯文より見て舊譯も遙か遡る古いものであることは間違ない處であらう。が然し、今諸經錄を調べて見ると、內典錄卷の九及び二には「温室洗浴衆僧經一卷、一名温室經、見聶道眞錄」なるものを法護の譯として居つて、安世高譯經目の中には本經が出て居ない。開元錄第二にも、同じく法護譯とし「第二出なり」と註を加へて居る。貞元錄第四及び第二十四にも同樣法護譯とし、然も其の註には「西晋の竺法護譯、第二譯なり、右一經は前後兩譯にして、一存一闕なり」としてある。之れに依ると法護譯の前に一譯あつたものが亡失し、法護譯の一本のみが傳つて居ると云ふことになるので、現在、「安世高譯」とするのは妥當でない樣である、但し、開元貞元二錄に於て「第二出」或は「一存一闕」と云へるものは輒く信憑し難いものである。何となれば恐らく之れは內典錄に法護譯があり、遡つて僧祐錄卷四等に「浴僧功德經一卷等」の失譯未見の本が載つて居るに起因するものであらうからである。內典錄には法護譯となつて居るのは、同錄卷四に「僧祐錄は法護譯を錄するに止だ一百五十四部三百九卷なるのみであるが、之れは別號の收集も足りないからである。又亂世に遭値して錄目も星散し、互に相ひ錯涉してゐるから信に是れ有るべきであらうが、雜錄及び諸別記には多く法護譯と註するものがある。故に今之等を獲て載す、護公の翻譯たることを疑はず」と述べ、二百十部、三百九十四卷の多きを連ね、中に、僧祐の失譯未見の本經をも採つて居るのである。以て考ふれば輒に一存一闕とは定め得ないであらう。以上述べた所は、本經は一譯一存なるものゝ如く、僧祐に於ては失譯未見であつたものを、道宣が法護譯と定めて以來、法護譯として一本が傳つて居るのみであると云ふことである。今本經の題下に、「安世高譯」としてあるのは、後人の鑑識が道宣と同じ立場に於て定めたものではなからうかと思ふが、何れにしても世高及び護公時代（西紀一四八――三一三）の古譯本たることには疑ひはないであらう。

昭和九年一月八日

譯者　清水谷恭順　識

敬信を懷き　其の志唯だ緣覺道を求めて　十方に遍く是の如きの燈を置き　一心に恭敬して供養するあらんに　若し人菩提心を發して　手に草炬を執つて暫くも佛に奉らんは　是の人福を得ること彼れに過ぎたり　我は實義を見て是の說を作す。　十方一切の諸の衆生　一々の供具を皆上の如くし　然して無量恒沙劫を經、　其の心唯だ緣覺の道を求むるあらんに　若し人有りて佛の塔廟に於て　一燈を然して或は一禮し　無上道を求むること衆生の爲にせば　此の福、前に過ぎたること量りあること無し。　見難く思ひ難き佛の境界を　智者は聞きて卽ち欣喜を生じ　信心無き者は聞きて樂しまず　彼の愚癡魔、正法を壞す。　淨法界を證るは甚だ難しと爲す　一切世間に獨り善逝のみなり　是の故に汝等應に欣喜すべく　佛の功德に於て當に願求すべし』。

爾の時に世尊、此の法を說きたまひ已る。　慧命舍利弗等、無量の天人・阿修羅・乾闥婆・緊那羅・摩睺羅迦・人非人等、佛の所說を聞きたてまつりて、皆無上菩提の心を發し、欣喜すること無量に、禮を作して而して去りにき。

佛說施燈功德經（終）

り熏じ　耳には一切の妙音聲を聞ん　是の天遊行するの處に隨つて　恒に上妙色を覩見を得ん。　見るべき所は色皆愛すべし　彼れ常に諸の惡色を覩ず　亦復た常に勝妙の觸を得　皆燈を持つて支提に施せるに由る。　彼(の天)より沒し已れば人道に生じ　正念にして父母の胎に處し　生れ已れば彼の天中の事を憶ひ　智慧の力退失せず。　彼の人是くの如きの業を造作し大力の轉輪王なることを得　其の王の形貌極めて端嚴ならん　燈を施して是くの如きの報を獲得す。　彼の業に由るが故に長命を得、　一向清淨にして安樂の器なり　其の身に諸の患痛有ること無し　燈を然して是くの如きの果を獲得す。　王の難怨賊の難有ること無く、　他人敢へて其の妻を侵さず、　惡人の爲めに惱まされじ　燈明を持つて佛に施すに由るが故なり。

安穩豐足にして畏るゝ所無く　豪富自在にして財寶饒く　勝れたる瓔珞及び園林を得ん　斯れ燈を然して佛に奉施するに由る。　當に佛世尊を覩見たてまつることを得べし　見已れば心便ち敬信を生じ　欣喜の心を以て佛に供養し　王位を棄捨して出家せん。　佛の無量智・究竟智　具さに德を歎じて能く人を化すべし　此の佛塔に於て燈を施し已れば　其の人の身光は燈の照らすが如し。　牟尼、牛王の清淨眼　好燈明を以て彼の塔を照さんに　無漏無上の道を得て　其の身の光明十方を照さん。　四眞諦を見て十力を具へ　不共の法も亦究竟し　遍見眼を得て善逝と成る　此の果は皆燈を布施するに由る。　[20]設令、一切諸衆生　昔曾て無量の佛を供養し　大威德を具して實義を見　億劫より來た緣覺道を成じ　十方の所有る諸世界に　悉く燈臺を布きて餘り有ること無く　是の世界の諸の燈臺を以つて　若し人信心に彼を供養す　是の人是くの如く供養を修して　無量劫に於て常に斷ぜざるも　若し人一燈を佛に奉施せば　得福の前に過ぎたること量り有ること無けん。　燈油、譬へば大海水の如くし　其の炷も猶ほ須彌山の如くなる　人有りて能く是くの如きの燈を然し　遍く一切の諸世界を照す　是の人深心に

【二〇】大乘に住して燈を施すの功德甚だ勝れたることを頌す。

一八 爾の時に佛、慧命舍利弗に告げたまはく。『五種の法あり、最も得ること難しと爲す。一には人身を得ること難し、二には佛の正法に於て信樂を得ること難し、三には佛法を樂ひ出家を得ること難し、四には淨戒を具すること難し、五には漏盡を得ること難し。舍利弗、一切衆生は是の五法に於て最も得ること難しと爲すも、汝等已に得たり』。爾の時に世尊、重ねて前の義を宣べ、舍利弗等に勸めんと欲して、偈を說きて言はく。

一九 如來支提に布施を修するは　衆生を利し菩提を求めんが爲めなり　智者は此の勝因を造り、生々常に最勝の報を得。　天人中に於て勝生を受け　人天等の爲めに供養を修す　譬へば須彌の如く安として動ぜず　光明は普遍く十方を照す。　彼の天衆、見て皆恭敬し　亦復た愛樂して信心を生ず　彼れ供養を興すに亦讃美し　一切皆喜び數々見る。　奇なるかな是の天の福德の相　猶ほ梵天の光が梵宮を照らすが如し　此の天曾て何等の業をか作して　身光明炎是くの如きを得たる。　是れを見て誰かは善を修習せざらん　誰かは聖種戒を修學せざらん　誰か牟尼を見て厭心を生ぜん　誰か妙法を聞きて而も放逸ならん。　彼れ昔人間に在りし時　常に燈を以て如來の塔に施せり　曾て佛法の中に供養を設け　善く神利を得て天中に生ぜり。　願はくば我れ恒に人身を得て　佛法の中に於て淨信を生じ　常に放逸ならずして佛道に住せん　寧ろ身命を棄るとも法を捨てざらん。　人身を獲得するは最も難しと爲す　愚人、云何んが福と爲さずして　資財を徒費し法の爲めにせず　死し已つて便ち大嶮坑に墮るぞや。　天、無垢の威德を見已れば　心自ら悔責し願を發して言へ　願はくば我れ常に人間に生るゝことを得て精勤して梵行を修習せん　願はくば我れ最後臨終の時には　佛法の中に於て淨信を得　願はくば正念を得て忘失せず　無量の諸如來を見たてまつることを得ん　千億の天の爲めに供養せられ　諸の天女と相に娛樂し　諸の天女衆皆敬愛し　天女莊嚴園林に戲れん。　諸方の天香皆來

【一八】施燈功德の現證を示し、信を深ふせしむ。

【一九】上說を通じ、施燈の功德を頌す。

て善く梵事を知り大禪定を得ん。舍利弗、其の菩提に迴向する善根を以つて、是の八種可樂の勝法を得るなり。[一四]復次に舍利弗、大乘に住する善男子善女人は復た八種の無量勝法を得ん。一には無量佛眼を得、二には無量如來神通を得、三には無量佛戒を得、四には無量如來三昧を得、五には無量如來智慧を得、六には無量如來解脫を得、七には無量解脫知見を得、八には入一切衆生心所樂欲を得。舍利弗、善男子善女人、佛の塔廟に於て燈明を奉施せんに、能く是くの如き無量の勝報を攝す。[一五]復次に舍利弗、若し衆生有りて說法者を見て是くの如きの念を作す、「云何んがしてか彼をして常に佛法を宣說し顯示することを得しめん、燈を以て彼に施さん、油燈を施すが故に說法者をして法燈を施すことを得しめん」と。是の念を作し已つて燈を持し奉施せんに、此の燈明を布施するの善根を以て、八種の無量資糧を得。何等をか八と爲す。一には無量正念の資糧を得、二には無量大智資糧を得、三には無量信心資糧を得、四には無量精進資糧を得、五には無量大慧資糧を得、六にはは無量三昧資糧を得、七には無量辯才資糧を得、八には無量福德資糧を得。舍利弗、是れを施燈八種の資糧と名く。[一六]亦復四無礙辯を得、乃至次第して一切種智を得。[一七]復次に舍利弗、若し善男子善女人あり、如來の前に於て施燈を見、信心淸淨に十指掌を合せて隨喜の心を起さば此の善根を以て八種增上の法を得ん。何等をか八と爲す。一には增上色を得、二には增上眷屬を得、三には增長戒を得、四には人天の中に於て增上生を得、五には增上信を得、六には增上辯を得、七には增上聖道を得、八には阿耨多羅三藐三菩提を得。舍利弗、是れを八種增上の法と名く。舍利弗、何が故に能く此等八種增上の勝法を得るや。舍利弗、佛には無量の戒・定・智慧・解脫・解脫知見あるが故に、彼を供養する者の所得の果報、所得の利益も亦復無量なり』。爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して而も偈を說きて言はく。

『出離の行を造作し　佛法を勤修して　死軍の衆を棄捨すること　衆の花林を碎くが如し』。

【一四】大乘に住する施燈功德の第二、八種の無量勝法を說く。

【一五】大乘に住する施燈功德の第三、八種無量の資糧を說く。

【一六】大乘に住する施燈功德の第四、四無礙辯乃至究竟を說く。

【一七】施燈隨喜の功德を說く。

しく廣說せず、非時語ならず、恒に究竟語なり。舍利弗、是くの如く不淸淨の口業を遠離して淸淨の口業を成就する、舍利弗、是れを口業淸淨と名く。舍利弗、云何んが意業淸淨なる。他の所有る珍寶資財に於て貪著を起さず、瞋心を起さず、害心を遠離し、又邪見を離れて諸の惡見無し、舍利弗、是れ等を遠離する、是れを意業淸淨と名く。舍利弗、云何んが善友淸淨なるを得るや。若し諸の善友、妄語を遠離し、亦飲酒せず、諸の麁獷を離れ、調伏正見に、其の親近する所に往詣して諸受し、又諸佛菩薩緣覺聲聞等の所に詣つて親近供養し、未聞を諮受する、舍利弗、是れを第四善友淸淨と名く。舍利弗、若し善男子善女人、佛支提に於て燈明を施し已れば、是くの如き等の四種淸淨なることを得。爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して偈を說きて言さく。

塔を照らさんと欲するが爲めの故に燈を然し　身・口・意の業善く調伏す　邪見を遠離して淨戒を具し　是れに由つて如意眼を獲得す。　猶ほ淨日の十方を照すが如く　速に能く漏盡を獲得す　彼の大智慧には威德を具し、　淨天眼を得て塵漏を離る。　智者は能く衆生の意を了り亦通明及び辯才を得、　二乘の道を求めて難からざるを得　佛に燈を施すに由つて是の報を獲ん。　若し無上の佛・菩提　天眼・智慧及び財物を求めんには　此の三事に於て恒に滅ずること無し　燈を佛支提に奉施するに由るなり。

〔一三〕舍利弗、若し善男子善女人、大乘に住し、佛の塔廟に於て燈明を施し已れば、彼れ、世々の中に八種可樂の勝法を得ん。何等をか八と爲す。一には勝肉眼を獲、二には勝念のよく測量する能ふこと無きものを得、三には勝上達分天眼を得、四には滿足修集道の爲めの故に不缺戒を得、五には智の滿足を得て涅槃を證り、六には先に作す所の善、無難處を得、七には所作の善業、諸佛に値ふことを得て能く一切衆の眼と爲り、八には、若し善男子善女人、彼の善根を以て轉輪王所得の輪寶を得て他障を爲さず、其の身端正にして或は帝釋と爲り大威力を得、千眼を具足し、或は梵王と爲り

〔一三〕大乘に住する施燈の功德の第一、八種可樂の勝法を說く。

爲す。一には色身、二には資財、三には大善、四には智慧なり。舍利弗、若し衆生有り、佛支提に燈明を施さば是くの如き等の可樂の法を得ん。爾の時に如來、重ねて此の義を宣べんと欲して、復た偈を說きて言はく。

身體圓滿にして大力を具し　他人と共に戰諍せず　遍く諸方に遊ぶも惱す者無し　燈を佛支提に奉施するに由るなり。　大富上族の家に生れ　功德を具足して人に敬はれ　生々恒に宿命智を得る　燈を佛支提に奉施するに由るなり。　諸の衆生に於て常に悲念し　言を發すれば眷屬皆敬ひて受け　心に損害無く恒に調柔に　常に惡道の業を造作せず。

三 復次に舍利弗、若し衆生有りて佛塔に供養するに四種の清淨あり。何等をか四と爲す。一には身業清淨、二には口業清淨、三には意業清淨、四には善友清淨なり。舍利弗、云何んが身業清淨を得ん。若し善男子善女人、彼彼の生處に於て殺生を遠離し、殺害の意無く、亦常に偸盜邪婬を遠離して己が妻所に於ても尙邪行せず、況んや餘人の妻をや。亦飮酒放逸自縱ならず、刀杖及び餘の苦具を以て衆生に加逼せず、不善法及び諸の惡業を離る、舍利弗、是等を遠離する、是れを身業清淨と名く。舍利弗、云何んが口業清淨なる。是の人、世々に常に妄語せず、若し見聞せずんば終に妄りに若しは見若しは聞と說かず、合時諮問し、然る後に乃ち語る、自他を利するが爲めに異說を作さず、設若ひ人あり敎へて妄語せしむるとも實語を護らんが爲に終に妄語せず、此の語を以て彼の人に向ひて說かず、彼の事を持て此の人に向ひて道はず、二朋先づ壞するを增長せしめず、言を發する所あれば能善く諍を和す。若しは痛心語、若しは麁語、若しは苦惡語、不喜語、不樂語、不愛語、不入心語、惱他語、結怨語、悉く皆遠離し、發する所の言あらば潤語、軟語、意樂語、不麁語、悅耳語、美妙語、入心語、多人愛語、多人樂語、可愛語、可樂語、能除怨語なり、恒に是くの如き種々の美妙の語を作す。復た綺語を離れ、異想異語を作さず、異印異期を作さず、實事を覆障し、煩

【三】功德の第七、現世四種清淨を說く。

燈明を施すの果なり。　恒常に盲及び攣躄ならず　眼は一切の時闇昧ならず　身も亦病無く惡聲も無く　心は常に黠慧にして愚惑ならじ。　又復た恒常に眼の患なく　所在生を受くるに眼眇ならず　無一眼及び瞎眼ならず　彼が眼亦常に濁亂ならじ。　眼目修長く黑白分れ　猶ほ淨妙の青蓮葉の如し　眼淨くして能く微細の物を見る　彼の明徹なること摩尼珠の如し。　無量阿僧祇劫の中　淨肉眼を得て失壞せず　彼亦常に眼の諸病無し　此れは是れ燈明を奉施するの果なり。　善き印善き根善き諸論　諸の工巧に悉く究了す　彼の有智の人善く觀察して　妙慧は能く第一義を見る。　善く諸有の不自在を觀じ　佛法の中に於て照明なるを得　普く一切の佛世尊を見、　見已れば恭敬して供養を修す。　生生に勝れたる端正色を得　親戚眷屬皆敬愛し　大財寶を得て力自在に　及び不壞の諸眷屬を得ん。　彼の燈明の能く闇を破し　熾燃として照曜すること諸法に遍きが如く、　彼の人の光明も亦是くの如し　闇冥の隱蔽する所と爲らず。　若し佛塔に於て信心を起し　勝燈鬘及び瓔珞を施さんに　燈明を施す時の心の清淨なるは　人中の最勝尊を獲得す。　端正殊妙甚だ愛すべし　一切世間の喜樂するところ　心、輒く吉凶を取らず　亦世の左道を樂まず。　世間のあらゆる諸惡見　及び邪道等を信受せず　若し國王と爲るも恒に足るを知り　他土を貪りて戰諍を興さず。　常に苦惱無く亦憂無し　亦復た諸の惱熱あること無し　彼に一切の諸退失無く　復た惡名無く衰惱無し。　若し王臣と爲つて發する所の言は　王及び國人の信ぜざるは無し　身は常に羸瘠病有ること無く　黃門と作らず非道ならず。　身相具足安樂住　患苦はよく其の身に著く能はず　亦復た諸の惡夢を見ず　臥覺一切常に安穩なり。　生々能く諸の伏藏を得　一切の佛支提に供養す　諸佛の功德は邊り有ること無し　彼の人の得る所も亦是くの如し。

〔二〕舍利弗、若し衆生有り、佛の塔廟に於て燈明を施する者は、四種可樂の法を得ん。何等をか四と

【二】功德の第六、現世、四種可樂の法を說く。

普ねく如意の妙熏香を出す、」と。 彼の天所有の諸眷屬は 彼の樹花を以つて身を莊嚴し 彼の無量億の天中に於て 光明照曜すること猶ほ日の如し。

一〇 復次に舍利弗、佛の塔廟に於て燈明を布施し、三十三天に生れ已つて彼の天自ら知る、「是くの如きの時中我れ此に住し、是くの如きの時中我れ當に命終すべし」と。彼の勝天子、命終の時に臨んで、其の眷屬及び餘の天衆に於いて、說法勸化し、其をして欣喜せしむ。彼の天宮に於て壽命を捨て已るも惡趣に墮せず、人中最上の種姓、佛法を信ずる家に生れん、是の時世間に佛無くんば、亦復吉凶を輕取する邪見の家に在つては生れず。爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して偈を說きて言はく。

彼の天生れて是くの如きの智を得、「爾許の時天中に住する」を知る 彼の天亦復能く自ら知る「我れ今、未だ幾くならずして當に命盡くべし」と。 五種の死相出現するの時 彼の天の壽命絕えんと欲するに臨んで 即ち億天衆の爲めに法を說き 愚癡を遠離して心憂へず。 天衆の中に於て是の言を作す、 「諸有は常無く亦樂も無し 或は生有らば或は死有り」と 將に死せんとするをも念はず是の法を說く。 彼の諸の眷屬皆悲惱す 無量の天衆も亦復然なり 復た已が五種の相を見ると雖も 自ら功德を念じて憂愁せず。 彼の天宮に在りて命絕え已れば 尋で即ち人間に下來して生れ 住胎出胎に念亂れず 常に快樂を受けて苦惱無し。 生じ已れば便ち宿命通を得 悉く能く本來處を憶念す 人中の苦を念ふて貪樂せず 須臾に死來り逼切するを見る。 彼れ天中の果報を念ひ已れば 此の人間に於いて樂と爲さず 天中尙ほ苦なり況んや復人をや 諸有は堅ならず常に流動す。 彼の人其の成立するに及び已れば 必ず當に家を捨てて出家すべし 心常に惡覺觀を行ぜず 彼れ當に是くの如きの果を獲得すべし。世々恒に宿命通を得 亦常に諸の惡業を作さず 必定して出家し淨戒を持つ 此れは是れ彼の

【一〇】功德の第五、下生の勝妙を說く。

林を見るに　是の中に勝五欲を具足せり。　又、佛の菩提樹に坐し　天人修羅悉く圍遶せるを見たてまつり　自ら合掌して佛前に住し　勝牟尼に於て供養を修するを見る。　旣に導師を見て深く敬重し　其の心欣喜して如來を請じ　世尊、彼を見るに心欣喜せり　是に於て彼の請を受くるに違はず。　是の人願を稱へて喜び充遍し　捨命時に於て苦惱無し　彼れ佛所に於て心喜び已れば　臨終の大怖畏有ること無し。　命終の時に臨んで念を失せず　彼れ十方を觀るに皆大いに明らかに　未曾有の勝妙色を見る　此れは是れ施燈の果報なり。　死し已れば必ず天上に生ずることを得　自ら己身の天牀に坐し　諸の天女有りて之れを圍遶するを見る　佛を供養するが故に此の果を得ん。

[九]復た次に舍利弗、佛の塔廟に於て燈明を施し已れば、死しては便ち三十三天に生ぜん。彼の天に生じ已れば五種の事に於て而も清淨を得。舍利弗、何をか彼の天、五種の事に於て而も清淨なるを得ると云ふ。一には清淨の身を得、二には諸の天中に於て殊勝の威德を得、三には常に清淨の念慧を得、四には常に意に稱ふの聲を聞くことを得、五には所得の眷屬常に彼の意に稱へ心に欣喜を得。舍利弗、是れを彼の天、五種の事に於て而も清淨なるを得と名く。爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して而も偈を說きて言はく。

彼の天は光明の身を獲得し　功德を具足して他の尊重するところ　千の天子と上首たり　燈を以つて佛支提に施すが故なり。　聞く所の天聲常に意に稱ふ　哀美殊妙なること餘天に勝る　第一勝念慧を具足し　復た最上勝の眷屬を得　彼の天子所行の處に隨ひて　一切の諸天皆欽仰す　本昔何等の業をか修習して　今、是くの如き熾然の身を得たる。　樹あり皆上歡喜と名く　周匝せる光照すこと猶ほ月の如し　彼の天是の妙樹を感得し、　此れを持つて天宮園を莊飾す。　無量の諸天皆驚き怪む「今此の樹花を何等と名けん　猶ほ燈明の光照曜たるが如く

【九】功德第四、來世の生天五種淸淨を說く。

で、先づ所作の福悉皆現前し、善法を憶念して而も忘失せず、舍利弗、是れを一明と爲す、此れに因つて便ち能く自己を念知し、先づ佛所に於て諸の善業を殖ゑん。復次に舍利弗、彼の善男子善女人、命終の時に於て是くの如きの念を得、我れ佛像塔廟等の前に於て、已に曾て供養せり、と。是の念を作し已つて心に踊悅を生ず、舍利弗、是れを二明と爲す、此れに因つて便ち能く念佛覺を起す。復次に舍利弗、彼の善男子善女人、命終の時に於て、餘の衆生の布施を奉行するを見、他の作すを見已つて是くの如きの念を起す、我も亦曾て佛支提所に於て燈明を奉施せり、我今亦當に復布施を行ずべし、と。布施を念じ欣喜心を得、喜心を得已つて死の苦あること無し、舍利弗、是れを三明と爲す、此れに因つて便ち念法の心を得ん。[八]復次に舍利弗、佛の塔廟の中に燈明を布施せんに、彼の善男子善女人、臨終の時に於て更に復四種の光明を見ることを得ん。何等をか四と爲す。一には臨終の時に於て日輪圓滿に涌出するを見、二には淨月輪圓滿に涌出するを見、三には諸の天衆一處にして而も坐するを見、四には如來應正遍知の菩提樹(下)に坐して菩提を得るに垂んとするを見、自ら己身、如來を尊重して十指掌を合せ恭敬して住するを見る。舍利弗、是れを佛の塔廟に於て燈を布施し已つて命終の時に臨み是くの如き四種の光明を見ることを得と名く。爾の時に世尊、此の義を說きたまひ已つて復た偈を說きて言はく、

無上の法王大仙人　若し人彼の塔廟に奉施せんに　彼の智慧者、作業已つて　無邊の最勝樂を獲得す。　命終の時に臨んで念を失はず　能く自ら昔燈を布施せしを見　四種の喜びを得て諸の罪を離れ　彼の死する時に於て惑亂せず。　死に臨むの時、十方の明らかなるを見ん　現に日月地より出づるを覩　天の千萬那由他なるを見　彼の天衆の爲めに佛法を說く。　父母妻子及び親屬は　皆悉く圍遶して大いに悲號するも　死者念せず亦視ず　彼の人正念にして常に亂れず。　現前に天の宮殿を觀ることを得　諸の天女に對ひて心安穩なり　復た莊嚴せる諸の園

【八】施燈功德の第三、臨命終時四種の光明を說く。

弗、云何んが如來、一切衆生の業報に於て如實に知ることを得るや。舍利弗、佛は是くの如く知る、或は衆生ありて善業盡き不善業增し、或は衆生ありて不善業盡き善業增し、或は衆生ありて善業當に生じ不善業當に滅す、或は衆生ありて不善業當に生じ善業當に滅す、舍利弗、如來、是くの如く一切衆生の業及び業報、種々の差別に入りて皆如實に知る。彼彼衆生、或は無知なる有り、或は愚闇なるあり、或は善者あり或は不善者あり。舍利弗、我に是くの如きの智有り、是くの如きの善巧有り、諸の衆生不可思議種々の業報に於て、皆能く記說す、舍利弗、若し衆生有りて信心を成就せば、彼れ能く我れを信ず。若し復衆生の、信心有ること無く、我が法を遠離し、我が語を信ぜずして我れを誹謗せば、彼れ長夜に於て、義無く利無く苦惱に墜墮せん、舍利弗、若し彼の衆生も、佛の塔廟に於て燈明を奉施せば、此の奉施の所作善業を以つて能く安樂可樂の果を獲、彼の燈明を施す善業を作すの時、欣喜相應して信心從り起り、現在世に於て三種の淨心を得ん。[六]何等をか三と爲す、彼の諸の善男子善女人是の念を作す、我れ如來に於て已に供養を設く、身の不堅を知りて堅身の想を攝し、財の過患を知りて堅財の想を攝す、と。舍利弗、是れを供養佛塔第一淨心と名く。復次に舍利弗、彼の諸の善男子善女人、是くの如きの心を起す、我れ如來の無上福田最勝福田、能く最勝の供養を受くる者なる所に於て、已に供養を作せり、我れ今、地獄・畜生・餓鬼に墮することを畏れず、我が此の善根已に人天善道の因を作す、妙色の資生衆具を得、又智慧安穩快樂を得、乃至能く菩提の果を得ん、と。舍利弗、是れを供養佛塔第二淨心と名く。復次に舍利弗、彼の諸の善男子善女人、是くの如きの想を作す、我れ諸佛に於て已に捨施を作し、已に福德を作し、已に慳貪を捨て、已に慳過を除けり、と。是の念を作し已つて施心無慳施心增長す、舍利弗、是れを供養佛塔第三淨心と名く。[七]復次に舍利弗、若し善男子善女人、佛の塔廟に於て燈明を施し已つて命終の時に臨まんに三種の明あり。何等をか三と爲す。一には彼の善男子善女人命終の時に臨ん

【六】施燈功德の第一、三種の淨心を說く、

【七】施燈功德の第二、三種の明を說く。

量の報を獲んことを應當に信受すべし、三には若し三寶に於て深く敬信を生じ、善く業行を修して得る所の福報は、汝等聲聞現に我れを見ることを得るも尙ほ能く具足して之れを知るを得ること能はず、亦復よく思惟し測度すること能はず、況んや我が滅後の聲聞弟子の我れを遠離する者、能く現知し及び能く測度することを得、若し能く知り及び測度することあらば、是の處あること無きことを應當に信受すべし。四には是の諸の聲聞、よく知り及び能く測量するを得ること能はず、一切衆生所有の作業及び業果報は、舍利弗、汝等聲聞、此の事の中に於て思量を須らず、何を以ての故に、舍利弗、如來は常に說く、「一切衆生の業行果報は思量すべからず」と、過去の諸佛應正遍知も已に是くの如く說きたまへり、「衆生の業報は思量すべからず」と、未來の諸佛應正遍知も當に是くの如く說くべし、「衆生の業報は思量すべからず、衆生の心信及び心の自性も亦知るべからず思量すべからず」と、是くの如きの義、應當に信受すべし。舍利弗、汝等聲聞、聖種に住する者も、一切衆生業報の中に於ては實眼及び巧方便あること無し、況んや餘の輕微薄劣心なる者、戒・定・慧・解脫・解脫知見を離れたる者、正念を失へる者、無明闇冥厚く目を翳へる者は、自己の身、內外の諸法に於て而もよく知ること能はず、我は竟に是れ誰ぞ、我は是れ誰許ぞ、我は何れの處にか住する、我が功德大とせんや小と爲んや、我れ當に云何んが戒と相應せん、戒と不相應せん、我れ正念の戒と爲んや我れ失念の戒と爲んや、我が所作の業は智人の業を作すと爲んや愚人の業を作すと爲んや、何れ從りか來ると爲んや何れの處にか去ると爲んや、舍利弗、諸の凡夫人、顚倒見の者は、自己の身に於て是くの如き等の事尙ほ自ら知らず、況んや能く一切衆生の種々の業報を知ることを得んや、若し能く知らば、是の處あること無し。舍利弗、如來應正遍知は戒無滅、定無滅、智無滅、解脫無滅、解脫知見無滅、相無滅なり。舍利弗、如來應正遍知は無量戒、無礙戒、不思議戒、無等戒、究竟戒、淸淨戒なり、彼の如來は一切の衆生に於て若しは業、若しは業報、皆如實に知る。舍利

田所、清淨戒所、無等等戒所、無量眞實功德所たり。[四]或は塔廟、諸の形像の前に於て供養を設けんが故に、燈明を奉施し、乃至少燈炷を以てし、或は蘇油塗然、持以て奉施せんに、其の明らかなること唯道の一階を照らさんも、舍利弗、此くの如き福德は是れ一切聲聞緣覺の能く了知する所に非ず。唯、佛・如來のみ乃し能く知れるなり。舍利弗、世報を求めん者の福德すら尙爾り、何に況んや清淨深樂心を以つて果報を求めず、安住恭敬し、相續無間に佛の功德を念ずる善男子善女人等の所生の福德をや。舍利弗、道の一階を照す福德すら尙爾り、何に況んや全く諸階道を照らさんをや、或は二階道、或は三階道、或は四階道、或は塔身の一級二級乃至多級、一面二面乃至四面に及び、佛の形像に及ばんをや。舍利弗、彼の燃す所の燈、或時には速に滅し、或は風吹きて滅し、或は油盡きて滅し、或は炷盡きて滅し、或は倶に盡きて滅すること、譬へば、諸龍の瞋恚を以つての故に雲を出して垂布し、中に於て電を起し已れば尋で滅するが如き、舍利弗、是くの如きの少時、佛の塔廟に於て燈明を奉施せんに、若し彼の比丘・比丘尼・沙彌・沙彌尼・優婆塞・優婆夷、若しは復た餘人の戒を受けざる者、善を樂はんが爲めの故に、己が身を護らんが故に、佛法僧を信ずるもの、是くの如きの少燈を福田に奉施して得る所の果報福德の聚は、唯、佛のみ能く知り、一切世間の天人・魔・梵・沙門・婆羅門乃至聲聞・辟支佛等のよく知ること能はざる所なり。是くの如き少燈明を然して受くる所の福報をも說くことを得べからず。舍利弗、諸佛の境界は不可思議なり、唯如來有りて乃し此の義を知れり。舍利弗、彼の燈を施す者の得る所の福聚は無量無邊にして算數すべからず、唯如來有りて乃し能く了知せり。舍利弗、少燈明を然ずるすら福德尙爾り、算數すべからず、況んや我が滅後、佛塔寺に於て、若しは自ら作し、若しは他をして作さしめ、或は一燈二燈を然し、乃至多燈、香花瓔鬘寶幢幡蓋及び餘の種種勝妙の供養をや。[五]舍利弗、四種の法あり、應當に信受すべし。何等をか四と爲す。一には佛法無量なることを應當に信受すべし、二には少しく善根を修するも無

【四】正しく施燈の功德を摘示す。

【五】功德莫大ならしめんが爲並に佛語の唐捐ならざるを信ぜしめんが爲めに四信を說く。

佛說施燈功德經

高齊の天竺三藏法師那連提耶舍譯す

是くの如く我れ聞きき。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に在します。爾の時に世尊、舍利弗に告げて言はく、「[一]舍利弗、佛に四種勝妙の善法有り、能く衆生をして無量の果、無量の光明、無量の妙色、無量の福藏、無量の樂藏、無量の戒・定・智慧・解脫・解脫知見・辯才の藏、一切無著無漏の法を得しむ。舍利弗、何等をか四と爲す。一には謂く、如來應正遍知は尸波羅蜜を得て無量の戒を具し、二には禪波羅蜜を得て無量の定を具し、三には般若波羅蜜を得て無量の慧及び廣智慧・觀達慧・如性慧・無數慧・決定慧・畢定知見を具し、四には無濁心善勝作心を得て妙解脫第一解脫を具す、是れを四種勝妙の善法と爲す。[二]舍利弗、是の佛如來應正遍知は、一切の惡に於て皆悉く遠離し、一切の善法皆悉く成就し、衆行備滿して如實見を具し、闇冥を遠離して能く光曜たり。世間を隱蔽し、世間の映奪する所とならず。戒・定・智慧・解脫・解脫知見を獲得し、十力・四無所畏を具足し、一切諸佛法力を得、能く諸佛法力を具し、諸佛の大慈悲力を具するを得、及び辯才力、本願方便皆悉く滿足し、善く本業を修して智慧の寶を具へ、精進無量にして終に休息せず、諸の憂慼を離れて逼惱有ること無く、取著あること無く、能善く調伏し、大龍王と爲り、餘習あることなく、一切衆生の無上の福田爲り。[三]舍利弗、若し比丘・比丘尼・沙彌・沙彌尼・優婆塞・優婆夷にして、清淨の心を發し、福を求めんが爲めの故に、樂福を愛せんが爲めの故に、如來の無上方便を思念せば本行滿足して、未來際の一切生死を盡し、現在の世に於て無量無著の戒・定・智慧・解脫・解脫知見を成就せん、乃至、佛の一種の功德を念ずるすら、功德を念じ已れば、無量億那由他百千劫中に於て、所習の善根三明福

【一】如來は應供なる所以を明さんが爲めに四種勝妙の善法を說く。

【二】佛は福田たることを示す。

【三】總じて佛を供養するに功德莫大なることを說く。

佛說施燈功德經解題

歴代三寶紀卷の九に「然燈經一卷、又は施燈功德經と名く、天保九年、天平寺に於て出す、周明帝の世、高齊沙門、北天竺烏場國三藏法師那連提耶舍、鄴城に於て譯す。照玄沙門都瞿曇般若流支長子達摩闍那、傳語す。」とあり、開元錄にも同様に述べてあるから、書史的には甚だ明瞭であつて、翻譯の年時は、北齊の文宣帝九年（西紀五五八）と云ふことになる。

　本經は勿論施燈功德の甚大なことを說いたものであるが、構文甚だ複雜せる故に、大體を科分して其の大要を述ぶれば、先づ佛は供養を受くる應當の所なる所以を明にして四種勝妙の善法を具する福田を示し、供養の根基となる意義を確立して居る。次に總じて供養の功德を說いてから正しく施燈の事を摘示し、供養に當つて四信の注意を促し、次いで其の功德を說く。功德の（一）三淨心（二）三明（三）臨終の四光（六）四種可樂の法（七）四種清淨の五つは現世の報福を說いたもの、（四）の生天五種清淨（五）下生の勝妙は來世の報福を說いたものである。五回目の偈頌を終つたところからは更に大乘に住して施燈するの功德を說いたもので（一）八種可樂の法（二）八種無量勝法（三）八種無量資糧（四）四無礙辯乃至究竟、と大乘に於ては功德の莫大なること極まつて、佛果に到る因とまで說かれてゐる。斯く莫大なる功德あるが故に、施燈を隨喜するのみにても大功德ありとし、八種增長の法を說き、更に所說の信憑を生ぜしめんが爲めに舍利弗に向ひて現證を說示して居る。終りの三十二行の偈頌は、上來所說の功德を總頌したものであつて、中就く初めの二十二行の偈は本經第五頌までの說に當り、終りの十行は其れ以下大乘功德の說に當る。此の頌に於て甚だしく小乘緣覺を卑下して居る點は特に注意すべきではなからうかと思ふ。

　最後に本經以下八經の國譯に就いて多田厚隆君の勞を煩した事は甚大である、茲に記して謝意を表す。

昭和九年一月九日

譯者　清水谷恭順　識

時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

諸天は三事勝る　長壽と端嚴と樂となり　人中と校量するに　算數甚だ及び難し　是くの如き三勝事も　常に非ず亦恒に非ず　保ち難く變壞する法なり　死魔の力に繫るゝなり　天將に命を捨つる時　餘の天其の所に集り　善く敎授し敎誡して　歡喜心を生ぜしむ　當に汝天仙よ善趣に往生せんと願ふべし　人の同分に預ることを得　中國に生れて聰明なり　佛法の律の中に於いて　正信を獲得し　根を增長して堅固なり　邪敎は轉ずること能はず　身語意の惡行は

能く方便して棄捨し　彼れが生ずる所の過失は　亦能く方便して除く　多く身語意の　三殊勝の善業を修し　理の如く正思惟し　無量廣大にして　諸の福業の事を修す　謂く施戒多聞なり　佛の正法の中に於いて　出家して梵行を修し　正信に法行を修し　恒に忍辱柔和なり　或は天人の中に生れ　或は涅槃の樂を證す　是くの如き諸天仙　來つて敎誡し敎授して　將に命を捨つる天衆をば　母の子を愍むが如くにす　諸天は常に發願して　善趣轉ゝ增益し　阿素洛等をして　退散して永く增すこと無からしむ

本事經（終）

一夜に當る。是くの如き日夜、數三十に至り以つて一月と爲す。十二月を積つて以つて一年と爲す。是くの如き年を以つて夜摩天の中の壽量は二千歳なり。人間の一億四千四百萬歳に當る。此くの如き人間の四百年の量は彼の天上の覩史多天の一日一夜に當る。是くの如き日夜、數三十に至り以つて一月と爲す。十二月を積つて以つて一年と爲す。是くの如き年を以つて覩史多天の壽量は四千なり。人間の五億七千六百萬歳に當る。此くの如き人間の八百年の量は彼の天上の樂變化天の一日一夜に當る。是くの如き日夜、數三十に至り以つて一月と爲す。十二月を積つて以つて一年と爲す。是くの如き年を以つて樂變化天の壽量は八千なり。人間の二十三億四百萬歳に當る。此くの如き人間の千六百年は彼の天上の他化自在天の一日一夜に當る。是くの如き日夜、數三十に至り以つて一月と爲す。十二月を積んで以つて一年と爲す。是くの如き年を以つて他化自在天の壽量は一萬有六千歳なり。人間の九十二億一千六百萬歳に當る。(此の中の算數は萬萬を億と爲す)是くの如きを名けて諸天長壽と名く。諸天の端嚴と諸天の快樂とは人間の所有は喩へと爲すべからず。是くの如き諸天の三種の勝事は一切皆是れ無常にして恒無く信を保すべからず。變壞の法にして死の力に呑まれ。死に繋屬す。彼の諸の天衆の臨命終の時には餘の天衆有り其の所に來詣し、敎授し敎誡して言く。諸の天仙當に汝等は善趣に往生せんと願ふべし。善趣に生じ已らば善利を獲得し、善利を得已らば成辦する所有らん。此の中の諸天は何なる善趣に往き、何なる善利を得、何んが成辦する所ぞ。謂く彼の諸天は既に命終し已り、人中に來生し、人の同分を得、往善趣と名けらる。人趣に至り已つて、佛の所説たる毘奈耶に於いて正信を獲得す。得善利と名く。是くの如き正信、增長し廣大にして根深く堅固なり。世間の沙門或は婆羅門、諸天魔梵、能く如法に引いて退轉せしむるもの無し。故に成辦と名く。成辦に由るが故に佛法の中に於いて所作有ること多し。謂く淨信心にして出家受戒し。奢摩他・毘鉢舍那を修し、四聖諦を觀じ、永く諸漏を斷じ涅槃を證得して苦の邊際を盡くす」と。爾の

有り。出家し已つて諸漏盡くる者有り。彼の國土城邑等の中に於いて諸の大天仙及び善神等皆來り降下し勤加守護し、其れをして豊樂に風雨時に順ひ、諸の疾疫無からしむ。其の中の衆生は慈心をもて相ひ向ひ同じく善業を修し、現在當來、長夜安隱にして速かに無上常樂涅槃を證す。是くの如きを名けて三時有る中にて諸天集會し歡喜詳議し、更に相ひ勸勵して人間に來降すと爲す」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

諸天は三時に於いて　歡喜して共に集會し　詳議して相ひ勸め帥ゐて　人間に來降す　最初に出家を求むるに　第二には鬚髮を剃るに　第三には漏の永く盡くし　諸の魔軍を摧伏するときに　諸天は出家の　能く永く諸漏を盡すを見て　咸く恭敬供養し　是くの如く讚頌して言く
歸命す殊勝の人に　歸命す最上士に　歸命す魔衆を摧きて　大名聞を獲得せるものに　諸天心に歡喜し　祐助して供養を修す　希求して鬚髮を剃り　漏盡き無生を證するに　是の故に應に正勤し　繫念して靜慮を樂へ　勇猛にして放逸すること無く　諸の魔軍を摧伏せよ　佛法の律の中に於いて　正信にして出家する者は　能く諸漏より解脫し　永く衆苦の邊を盡さん

(一三三)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。略して三事有り。天は人に勝る。云何なるか三と爲す。一には長壽。二には端嚴。三には快樂なり。是くの如き三事は天人に勝る」と百千萬倍にして稱計すべからず。所以は何ん。此の人間の五十年の量の如き、彼の天上の四天王天の一日一夜に當る。是くの如き日夜は數三十に至り以つて一月と爲す。十二月を積んで以つて一年と爲す。是くの如き年を以つて四天王天の壽量は五百なり。人間の九百萬歲に當る。此の人間の一百年の量の如きは、彼の天上の三十三天の一日一夜に當る。是くの如き日夜數三十に至り以つて一月と爲す。十二月を積んで以つて一年と爲す。是くの如き年を以つて、三十三天壽量は千なり。人間の三千六百萬歲に當る。是くの如き人間の二百年の量は彼の天上の夜摩天の中の一日

(一三三) 長壽と端嚴と快樂とは天人に勝る然れども共に無常なり。

多資財、或は少眷屬、或は多眷屬、或は姓尊貴、或は姓卑微なるもの、初めて淨信を發し家法を厭背し出家を欣樂せん。爾の時、諸天歡喜し集會して咸相ひ謂つて言く天仙當に知るべし。今佛弟子、惡魔軍と將に戰諍を興さんとす。我等宜しく應に諸天衆を帥ゐて人間に往降し、冥加冥助して彼れの信心を增し障難無からしむべしと。是の語を作し已つて、人間に來降し應作すべき所を作す。是くの如きを名けて第一時の中にて諸天集會して歡喜詳議し更に相ひ勸勵して人間に來降すと爲す。又我が弟子、鬚髮を剃除し、袈裟を被服し、正信心を以つて家法を棄捨し出でて非家に趣き諸の苾芻と同じく和敬を修し、別解脫戒に安住し守護し、軌範の所行を圓滿せざること無く、微少の罪に於いても大怖畏を見はし、一切の所應の學處を受學し、淨見を成就す。爾の時諸天は歡喜して集會し咸相ひ謂つて言く。天仙當に知るべし。今佛弟子、惡魔の軍と正しく戰諍を興せり。我等宜しく應に諸の天衆を帥ゐて人間に往降し、冥加冥助して彼れに威力を增し魔軍に勝たしむべしと。是の語を作し已つて、人間に來降し、應作すべき所を作す。是くの如きを名けて第二時の中にて諸天集會し、歡喜詳議し、更に相ひ勸勵し、人間に來降すと爲す。又我が弟子、諸漏永く盡き、眞無漏を證し、心善解脫し、慧善解脫して現法の中に於いて自ら通慧を證し具足安住し、能く自ら我が生已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辦じ、後有を受けずと了知す。爾の時、諸天歡喜し集會して咸相ひ謂つて言く。天仙當に知るべし。今佛弟子は惡魔軍と已に戰諍を興し已に魔を斷じ、已に魔軍を碎き、已に自ら稱言すらく。我が生已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辦じ、後有を受けずと。我等宜しく應に諸天衆を帥ゐ妙香花を持ち人間に往降して禮拜供養し稱揚讃歎して、正法を請說し、己身の生老病死を度脫せんと、是の語を作し已つて人間に來降し應作すべき所を作す。是くの如きを第三時の中にて諸天集會し歡喜詳議し、更に相ひ勸勵して人間に來降すと爲す。苾芻當に知るべし。若し國土城邑聚落有り。淨信心をもつて出家を求むる者有り。鬚髮を剃つて正しく出家する者

開闡し初中後善にして文義巧妙に、純滿淸白の梵行を示現す。謂く是れ苦諦、是れ苦集諦、是れ苦滅諦、是れ能く苦滅に趣向する道諦なりと。是くの如きを名けて第二の大師世間に出現し無量の衆を利益し安樂し、世間の天人大衆を哀愍し無量の義利を得せしめ安樂ならしむと爲す。復、如來應正等覺の有學の弟子有り。具さに梵行を修し、具さに正しく多聞せり。所謂正しく契經・應頌・記別・伽陀・無問自說・本事・本生・方廣・希法を聞き、善く其の義を知り、世間に出現して諸の衆生の爲めに正法を開闡し初中後善にして文義巧妙に純滿淸白の梵行を示現す。謂く是れ苦諦、是れ苦集諦、是れ苦滅諦、是れ能く苦滅に趣向する道諦なり。是くの如きを名けて第三大師世間に出現し無量の衆生を利益し安樂し世間の天人大衆を哀愍して無量の義利安樂を得せしむと爲す。是くの如きを名けて三大師有り世間に出現して無量の衆生を利益し安樂し、世間の天人大衆をして無量の義利安樂を得せしむと爲す。是くの如きを名けて三大師有り世間に出現して無量の衆生をして利益し安樂し、世間の天人大衆をして無量の義利安樂を得せしむと爲す」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

三種の大師有り　若し世に出現せば　能く天人等の世間を　利益し安樂す　一には謂く如來
二には無學の弟子　三には有學の弟子　淨戒を具して多聞なり　是くの如き三大師は　天人等
應に供すべし　能く正法を宣說し　廣く甘露の門を開く　無量の衆生をして　永く諸の有結を
盡さしむ　生死の苦を解脫し　常樂涅槃を證す　譬へば善き導師は　能く人に善道を示すが如
し　正順にして而も行ふ者は　安樂を得んこと疑ひ無し　是くの如き三大師は　衆生に四諦を
示し　修行は放逸無く　定んで生死の邊を超ゆ

(一三二)
吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。三時有る中に諸天は集會し、歡喜詳議し、更に相ひ勸勵し、人間に來降す。云何んが三と爲す。謂く我が弟子、或は少資財、或は

(一三二) 出家と持戒と證果との三時に諸天集會して歡喜す。

す。是くの如きを名けて三種の最勝と爲す」と。爾の時、世尊、重ねて此義を攝して頌を說いて曰く。

最勝なるもに三種有り　所謂佛法僧なり　淨信心を生ずるに依つて　能く最勝法を見る　佛に依つて淨信を生じ　兩足中尊を知れば　無上菩提を證せん　天人等應に供すべし　法に依つて淨信を生じ　離欲中尊を知れば　無上涅槃を證せん　寂靜にして常に安樂なり　僧に依つて淨信を生じ　諸衆中尊を知れば　無上福田を證せん　天人等應に供ずべし　施は最勝なる良田たり　最勝の功德を生じ　最勝の安樂にして　壽色力名聞を感ず　最勝人を供養し　最勝法を修行せば　最勝安樂を得ん　天上或は人中の　三寶の福田に施すを　最勝施者と名く　在らん所常に安樂にして　後には當に涅槃を證せん

重ねて前經を攝して嗢拕南に曰く。

子と尊重と二學と　福と堅と根と補羅と　不淨等と及び怨と　福業事と最勝となり

吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。三大師有りて世間に出現し、無量の衆生を利益し安樂す。世間の天人大衆を哀愍して無量の義利を得せしめ安樂ならしむ。云何なるか三と爲す。所謂如來・應正等覺・明行圓滿・善逝・世間解・無上丈夫・調御士・天人師・佛、薄伽梵は世間に出現して諸の衆生の爲めに正法を開闡し、初中後善にして文義巧妙に純滿淸白なる梵行を示現す。謂く是れ苦諦、是れ苦集諦、是れ苦滅諦、是れ苦滅に趣向する道諦なりと。是くの如きを名けて第一大師世間に出現し、無量の衆生を利益し安樂し、世間の天人大衆を哀愍し、無量の義利を得せしめ安樂ならしむと爲す。復、如來應正等覺の無學の弟子有り。是れ阿羅漢なり。諸漏は已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辦じ、諸の重擔を棄て、自ら義利を得、諸の有結を盡し、已に正しく如來の聖敎を奉行し、已に解脫を得、已に遍知を證し、世間に出現して諸の衆生の爲めに正法を

一切世界に悉く皆遍滿して具足安住せん。捨倶心をして廣大無量にして無怨無害ならしめ遍滿して住せん。是くの如きを名けて修福業事を爲す。此の所説の三福業事に於いて應に修し應に習ひ應に多く修習すべし」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

三法有り應に修し　應に習ひ多く修習すべし　能く三種の樂を得ん　所謂施と戒と修となり
施を修すれば多財を感じ　戒を修すれば長壽を得　慈悲喜捨を修すれば　當に清淨天に生るべし　世間有智の人は　殊勝の福を欲求す　應に此の三福を修すべし　定んで當に得べきこと疑ひ無し

(一三一) 吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。世間の最勝なるもの略して三種有り。云何なるか三と爲す。一には一切施設する有情に無足・二足・四足・多足・有色・無色・有想・無想及び非想非非想の中に於いて、佛を最勝と爲す。所謂如來・應正等覺・明行圓滿・善逝・世間解・無上丈夫・調御士・天人師・佛、薄伽梵なり。若し佛の所に於いて淨信心を起さば、諸信の中に於いて最も第一と爲す。是くの如き淨信の所感の果報は天人の中に於いて最も第一と爲す。二には一切施設する法門の世出世間、爲無爲等の諸の法門の中に於いて、涅槃は最勝なり。諸の憍慢を離れ、諸の渴愛を息め、阿賴耶を滅し、諸の經路を斷じ、愛盡き欲を離れ、寂靜涅槃なり。若し是くの如き涅槃法の中に於いて淨信心を起さば、諸信の中に於いて最も第一と爲す。是の如き淨信の所感の果報は天人の中に於いて最も第一と爲す。三には一切施設せる徒衆にして朋侶邑義の諸の集會の中に於いて佛の聖弟子たる僧を最勝と爲す。謂く四向四果なり。この八補特伽羅は諸の有情の中には眞と爲し妙を爲し最第一と爲す。應に奉じて延請し恭敬し供養し稱揚讚歎すべし。身財を悋まざれ。是れ諸の世間の人天等の衆の無上福田たり。若し是くの如き賢聖僧の中に於いて淨信心を起さば、諸信の中に於いて最も第一と爲す。是くの如き淨心の所感の果報は天人の中に於いて最も第一と爲

(一三一) 佛法僧は最勝なり。

衆法の合成せる身なれば　虛僞にして堅實なること無し　若し壽煖識を捨てなば　これを塚間に棄つ　愚夫は知る所無く　常に寶愛し耽著す　賢聖は知見有れば　之れを厭ふて糞坑に喩ふ　無漏聖道を修して　三賊の因緣を斷じ　常樂涅槃を證して　永く三賊より解脫す　世間の有智の者は　當に深く自身を厭ひ　常樂涅槃を求む　精勤して放逸すること勿れ

(一三〇)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。諸の福業の事は略して三種有り應に修し應に習ひ應に多く修習すべし。云何なるか三と爲す。一には施福業事。二には戒福業事。三には修福業事なり。何等をか名けて施福業事と爲す。謂く淨信の諸の善男子或は善女人有らん。能く種種なる飮食・餚饍・香鬘・衣服・車乘・臥具・堂宇・室宅・燈燭・庭燎、諸の資生の具を施さん。是くの如きを名けて施福業事と爲す。何等をか名けて戒福業事と爲す。謂く淨信の諸の善男子或は善女人有らん。能く殺生を離れて究竟圓滿し無犯にして清淨ならん。不與取を離れて究竟圓滿し無犯にして清淨ならん。欲邪行を離れて究竟圓滿し無犯にして清淨ならん。虛誑語を離れて究竟圓滿し無犯にして清淨ならん。諸の酒を飮み放逸を生ずる處を離れて究竟圓滿し無犯にして清淨ならん。是くの如きを名けて戒福業事と爲す。云何なるを名けて修福業事と爲す。謂く淨信の諸の善男子或は善女人有らん。慈俱心を修し、遍く一方に滿じ具足して安住せん。是くの如く第二第三第四、上下方維、一切世界悉く皆遍滿し具足安住せん。慈俱心をして廣大無量にして無怨無害ならしめ、遍滿して住せん。悲俱心を修し一方に遍滿し具足し安住せん。是くの如く第二第三第四、上下方維、一切世界に悉く皆遍滿し具足安住せん。悲俱心をして廣大無量にして無怨無害ならしめ、遍滿して住せん。喜俱心を修し一方に遍滿して具足し安住せん。是くの如く第二第三第四、上下方維、一切世界に悉く皆遍滿し具足安住せん。喜俱念をして廣大無量にして無怨無害ならしめ遍滿して住せん。捨俱心を修し、一方に遍滿して具足し安住せん。是くの如く第二第三第四、上下方維、

(一三〇)施と戒と修とは三福業。

於いて隨息念に任せば便ち能く外の對思の障品を斷ずべし。若し能く行に於いて無常觀に住し、苦無我觀に任せば便ち諸有に於いて能く有愛を斷ぜん。有愛を斷ずるが故に便ち世間に於いて執受する所無けん。執受すること無きが故に便ち怖畏無けん。怖畏無きが故に便ち自ら內に究竟涅槃を證せん。涅槃を證し已らば便ち自ら我が生已に盡き、梵行に立ち、所作已に辨じ、後有を受けずと了知せん」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

身に於いて不淨を觀じ　息に於いて隨念に住し　諸行は無常なり　及び苦は無我なりと觀ぜよ

諸行の性は空なりと達せば　最勝寂靜を得　愛盡くければ執受無く　究竟涅槃を證せん

(一二九)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。諸の有情の身は常に三種の勇健なる怨賊の爲めに隨逐切害せらる。云何なるか三と爲す。一には衰老勇健怨賊。二には疾病勇健怨賊。三には無常勇健怨賊なり。是くの如き三種の勇健怨賊は常に諸の有情に隨つて切害す。有情の身中には略して三法有り。一には壽命。二には煖氣。三には心識なり。是くの如き三法が身より遠離する時は名けて死沒と爲す。臭穢なる屍骸は棄に塚間に在り復用ゆらるゝこと無し。所以は何ん。是の身は虛僞にして諸法の合成なり。其の中にて勝れたる者を壽煖識と謂ふ。而も此の諸法は因緣に依つて生ず、無常なり無强なり無堅なり無力なり、迅速に滅壞す。老病死の賊は常に隨つて捨てず、而るを諸の愚夫は無明に覆はれ寶愛し耽著して厭捨する心無し。我が聖弟子よ。能く是くの如く假りに合成せる身に於いて如實に知見するに諸の過患多し、便ち一切內外の身中に於いて能く深く厭背せよ。深く厭背するが故に能く貪欲を離る。貪欲を離るゝが故に便ち解脫を得。解脫を得已らば便ち自ら我が生已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辨じ、後有を受けずと了知せん」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

一切有情の身は　三つの怨賊に隨つて害せらる　所謂老病死なり　曾つて暫くも捨つる時無し

(一二九)　老病死は三怨賊。

り。何の義利の爲めに應に親近すべきや。謂く此の類の補特伽羅に於いて是の思惟を作せ。彼れは當に我が爲めに相似戒を說くべし。我は當に彼れの爲めに相似戒を說くべし。更互に聽聞して相續することを得せしめ多くの所作有らんと。是の思惟を作せ。彼れは當に我が爲めに相似定を說くべし。我れは當に彼れの爲めに相似定を說くべく。更互に聽聞して相續を得せしめ多くの所作有らんと。是の思惟を作せ。彼れは當に我が爲めに相似慧を說くべし。我れは當に彼れが爲めに相似慧を說くべし。更互に聽聞して相續を得せしめ多くの所作有らん。此の義利の爲めに應に親近すべし。諸の一類の補特伽羅有り。勝戒勝定勝慧を成就せり。何の義利の爲めに應に親近すべきや。謂く此の類の補特伽羅に於いて是の思惟を作せ。我れ當に彼れに依るべし。所有ゆる戒蘊、若し未だ圓滿せざれば修して圓滿せしめん。若し已に圓滿せば內に正念を攝め堅固に任持せよ。是の思惟を作せ。我れ當に彼れに依るべし。所有ゆる定蘊、若し未だ圓滿せざれば修して圓滿せしめん。若し已に圓滿せば內に正念を攝め堅固に任持せよ。是の思惟を作せ。我れ當に彼れに依るべし。所有ゆる慧蘊、若し未だ圓滿せざれば修して圓滿せしめん。若已に圓滿せば內に正念を攝め堅固に任持せよ。此の義利の爲めに應に親近すべし。是くの如きを名けて略して三種の補特伽羅有り。應に親近すべしと爲す」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

劣に親しむは慈悲の爲めなり　等に親しむは相益の爲めなり　勝に親しむは已れが德を　圓滿に或は堅持せんが爲めなり　下士に親しむ德は劣なり　中士に親しむの德は中なり　上士に親しむ德は勝なり　かるが故に應に上士に親しむべし

(一二八)「吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。應に其の身に於いて不淨觀に住すべし。應に其の息に於いて隨息念に住すべし。應に諸行に於いて無常觀に住し苦無我觀に住すべし。若し能く身住に於いて不淨觀に住せば便ち淨界に於いて當に貪欲を斷ずべし。若し能く息に

(一二八) 四念處觀。

爲し、樂欲を發生し、策勵し精進して心を攝し心を持するなり。未だ見知せざる能趣苦滅眞道諦に於いて、見たりと爲し知れりと爲して樂欲を發生し、策勵し精進して心を攝し心を持するなり。是れを未知當知根と名く。何等をか知根と爲す。謂く我が法の中の諸の聖弟子よ。如實に是れ苦は聖諦なり、苦の集は聖諦なり、是れ苦の滅は聖諦なり、是れ能く苦の滅に趣く眞の道は聖諦なりと了知するを、是れを知根と名く。何等をか名けて具知根と爲す。謂く我が法の中の諸の聖弟子よ、諸漏已に盡き、眞無漏を得、心善解脫し、慧善解脫し、能く正しく我が生已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辨じ、後有を受けずと了知するを、是れを具知根と名く。是くの如くなるを名けて根に三種有り、其性甚深なり、顯了に甚深なり、其の性見難し、顯了に見難しと爲す」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

我が正法の中に於ける　聖弟子の有學のものよ　正道の路に順修する　是れを第一根と名く
正しく苦聖諦と　及び苦の集と苦の滅と　能く苦滅に趣く道とを知る　是れを第二根と名く
第三根は當に知るべし　諸漏皆永く盡き　眞無漏を證得し　心慧善解脫し　我が已に盡き　及び梵行已に立ち　所作皆已に辨じ　後有の身を受けずと知り　身心常に寂靜にして　善く諸根を攝護し　最後身を任持して　魔の所使を降伏するものなり

(一二七)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。略して三種の補特伽羅有り。義利の爲めの故に應に親近すべし。云何なるか三と爲す。一には一類の補特伽羅有り、劣戒劣定劣慧を成就す。二には一類の補特伽羅有り、等戒等定等慧を成就す。三には一類の補特伽羅有り。勝戒勝定勝慧を成就す。諸の一類の補特伽羅有り。劣戒劣定劣慧を成就せり。何の義利の爲めに應に親近すべきや。謂く此の類の補特伽羅に於いては希求する所無し。唯深く愍れむに非ず。勸めて勝進せしむ。此の義利の爲めに應に親近すべし。諸の一類の補特伽羅有り。等戒等定等慧を成就せ

(一二七)三有情に應に親近すべし。

財を以つて堅財を貿易すと名く。云何んが應に不堅の身を以つて堅身と貿易すべき。謂く淨信の善男子或は善女人有らん。正見を成就して能く殺生を離れ、究竟じて圓滿し、犯すこと無ければ清淨なり。不與取を離れ究竟じて圓滿し、犯すこと無ければ清淨なり。虛誑語を離れ究竟じて圓滿し、犯すこと無ければ清淨なり。諸の酒を飲み放逸を生ずる處を離れ究竟じて圓滿し犯すこと無ければ清淨なり。是くの如き等の類を、是れを應に不堅の身を以つて堅身と貿易すと名く。云何んが應に不堅の命を以つて堅命と貿易すべき。謂く我が法の中の諸の聖弟子よ、如實に是れ苦諦なりと了知し、如實に是れを苦の集諦なりと了知し、如實に是れ苦の滅諦なりと了知し、如實に是れ苦滅に趣向する道諦なりと了知するなり。是れを應に不堅の命を以つて堅命と貿易すと名く。是くの如きを名けて諸の智有らん者、應に三種の不堅の法を以つて三堅と貿易すると爲すなり」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

世の智有る人は　賤を以つて貴と貿ふるが如く　正見の者も亦爾なり　不堅を以つて堅と易ふ
此の財と身と命とは　不淨なり不堅牢なりと知り　清淨にして堅牢なる　世出世間の樂を求めよ　天上の財と身と命とは　是の世の淨にして堅牢なるものなり　常樂涅槃を證するは　是れ眞の淨堅法なり

(一二六)是れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。根に三種有り。其の性甚深なり。顯了に甚深なり。其の性見難し。顯了に見難し。云何んが三と爲す。一には未知當知根。二には知根。三には具知根なり。何等をか名けて未知當知根と爲す。謂く我が法の中の諸の聖弟子よ。未だ見知せざる諸の苦諦に於いて見たりと爲し知れりと爲し、樂欲を發生し、策勵し精進して心を攝し心を持するなり。未だ見知せざる苦集聖諦に於いて見たりと爲し知れりと爲し、樂欲を發生し、策勵し精進して心を攝し心を持するなり。未だ見知せざる苦滅聖諦に於いて見たりと爲し知れりと

（一二六）三無漏根。

（一二四）吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。三種の法有りて和合現前し能く淨信の諸の善男子をして無量の福を生ぜしむ。云何なるか三と爲す。一には淨信和合現前せば能く淨信の諸の善男子をして無量の福を生ぜしむ。二には施物和合現前せば能く淨信の善男子をして無量の福を生ぜしむ。三には福田和合現前せば能く淨信の善男子をして無量の福を生ぜしむ。是れを三法和合現前せば能く淨信の善男子をして無量の福を生ぜしむと名く」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

三法合して現前せば　能く無量の福を生ず　謂く淨信と施物と　及び眞淨福田となり　慧を具し尸羅を具すれば　善く三毒を調伏す　沙門にして梵行を修するを　眞淨福田と名く　慧を具し淨信を具し　手には如法の財を持して　良福田に奉施せば　必ず當に大果を獲つべし　身の四威儀の中　三寶と四諦とにおいて　正順して瑕穢無きは　名けて淨信心と爲す　諸の惠施の中に於いて　法施を最勝と爲す　淨信にして正法を演ぶれば　諸佛に稱譽せらる

（一二五）吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。諸の智有らん者は應に三種の不堅の法を以つて三堅と貿易すべし。云何なるか三と爲すや。一には應に不堅の財を以つて堅財と貿易すべし。二には應に不堅の身を以つて堅身と貿易すべし。三には不堅の命を以つて堅命と貿易すべし。云何んが應に不堅の財を以つて堅財と貿易すべき。謂く淨信の諸の善男子或は善女人有らん。如法に精勤して手足を勞役し力を竭し汗を流して獲る所の珍財をば應に自ら身に供じ、父母に奉上し、妻子・奴婢・僕使・朋友・眷屬を賑し、晝夜に集會し、歡娛して受樂せしむべし。而も沙門或は婆羅門に遇はゞ淨尸羅を具し、善法を成調し、梵行を勤修し、憍逸を除去し、忍辱柔和にして正直の路を履み、諸の邪道を棄て、涅槃城に趣き、淨信心を以つて歡喜し恭敬して、如應の時を知り、持用して布施し、遠く無上安樂なる涅槃を求め、或は當來の人天の樂果を希（こひねが）へ。是れを應に不堅の

（一二四）淨信と施物と福田との三法。

（一二五）身命財の三不堅を三堅と易ゆ。

やと。汝等苾芻、應に是くの如く學すべし」と。爾の時、世尊、重ねて此義を攝して頌を說いて曰く。

尋思を耽嗜するに依り　略說するに三種有り　學のもの無上樂を求むるに　障を爲すこと必ず疑ひ無し　親里相應と　利養と及び妬勝とに依り　大樂大淨より去り　結を盡さんに甚だ遙かなりと爲す　親屬と利養と　及び妬勝尋思とを捨て　攝して止觀を勤修せよ　速かに能く衆苦を盡さん

(一二三)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。略して三法有り。有學の苾芻未得心の者、無上安樂の法を欣求する時、能く退失せしむ。云何なるか三と爲す。一には苾芻の事業に喜樂すると、事業に貪愛すると、事業に耽著するとなり。二には談話に喜樂すると、談話に貪愛すると、談話に耽著するとなり。三には苾芻の睡眠を喜樂すると、睡眠を貪愛すると、睡眠を耽著するとなり。是くの如き三法は有學の苾芻未得心の者をして無上安樂の法を欣求する時能く退失せしむ。是の故に汝等、應に是くの如く學すべし。我れは當に云何んがしてか事業を樂しまず、事業を愛さず、事業に著せざるべきやと。我れは當に云何んがしてか談話を樂しまず、談話を愛せず、談話に著せざるべきやと。我れは當に云何んがしてか睡眠を樂しまず、睡眠を愛せず、睡眠に著せざるべきやと。汝等苾芻、應に是くの如く學すべし」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

無上の果を求むる時　三法有りて退せしむ　事業と談話と及び睡眠とを　樂しみ愛し著して有學の諸の苾芻よ　若し此の三法を具せば　終に最勝なる三菩提を　證得すること能はじ　若し速かに最勝なる三菩提を　證せんとこと欲求せば　應に事と話と眠とを少なくし　正しく止觀を勤修すべし

(一二三)事業と談話と睡眠との三尋思は能く退失せしむ。

（一二一）吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻當に知るべし。若し苾芻有り、正法を尊重し正法を愛樂し、正法の樂を欣び、精進して修行し、法行を愛樂せん。是くの如き苾芻は正法を隨念し、常に樂つて永く貪不善根を斷ず。貪無ければ善根を修して圓滿せしむ。常に樂つて永く瞋不善根を斷ず。瞋無ければ善根を修して圓滿せしむ。常に樂つて永く癡不善根を斷ず。癡無ければ善根を修して圓滿せしむ。三善根を修して圓滿すること得已らば四念住を修して亦圓滿せしむ。四念住を修して圓滿すること得已らば四正斷を修して亦圓滿せしむ。四正斷を修して圓滿することを得已らば四神足を修して亦圓滿せしむ。四神足を修して圓滿すること得已らば五根を修習して亦圓滿せしむ。五根を修習して圓滿することを得已らば五力を修習して亦圓滿せしむ。五力を修習し圓滿せしめ已らば七覺支を修して亦圓滿せしむ。七覺支を修し圓滿せしめ已らば八聖道支を修して亦圓滿せしむ。八聖道支を修して圓滿することを得已らば明と及び解脫と皆圓滿することを得ん」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

法を尊重し法を樂ふ　法を欣び法行を樂しむ　法に於いて常に隨念すれば　能く正法を退せず
法念は善業を修し　不念は惡行を行ふ　行法は定んで能く　此世他世の樂を招く　法をもつ
行法を護る人は　雨ふる時の大なる傘の如し　行法は法利を獲て　定んで三塗に墜ちず

（一二二）吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。世間には略して三種の尋思有り。有學の苾芻にして未だ得心せざる者無上安樂の法を欣求する時、能く退失せしむ。云何なるを三と爲すや。一には親里と相應する尋思。二には利養と相應する尋思。三には妬み勝たんとすると相應する尋思なり。是くの如きを略して三種の尋思なりと說く。有學の苾芻にして未だ得心せざる者、無上安樂の法を欣求する時能く退失せしむ。是の故に汝等、應に是くの如く學すべし。我れは當に云何んが親里相應の尋思を起さず、利養相應の尋思を起さず、妬勝相應の尋思を起さざるべき

（一二一）三善根、四念處等を修すべし。

（一二二）親里と利養と妬勝との三尋思は能く退失せしむ。

卷の第七

三法品　第三の二

(一二〇)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。此の世間に於いて子に三種有り。云何なるか三と爲す。一には等子。二には勝子。三には劣子なり。云何なるか等子。謂く一類の父母有り。戒を具して善法を成調す。能く殺生を離れ、能く不與取を離れ、欲邪行を離れ、虛誑語を離れ、飮諸酒生放逸處を離る。子も亦戒を具し善法を成調す。能く殺生を離れ、不與取を離れ、欲邪行を離れ、虛誑語を離れ、飮諸酒生放逸處を離る。是れを等子と名く。云何なるか勝子。謂く一類の父母有り。犯戒して諸の惡法を成し、樂つて殺生を行じ、不與取を行じ、欲邪行を行じ、虛誑語を行じ、飮諸酒生放逸處を行ず。子は能く持戒し、善法を成調し、能く殺生を離れ、不與取を離れ、欲邪行を離れ、虛誑語を離れ、飮諸酒生放逸處を離る。是れを勝子と名く。云何なるか劣子。謂く一類の父母有り。具戒し善法を成調し、能く殺生を離れ、不與取を離れ、欲邪行を離れ、虛誑語を離れ、飮諸酒生放逸處を離る。其の子は犯戒し諸の惡法を成し。樂つて殺生を行じ、不與取を行じ、欲邪行を行じ、虛誑語を行じ、飮諸酒生放逸處を行ず。是れを劣子と名く。是くの如きを名けて此の世間に於いて子に三種有りと爲す」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

世間の聰慧の人は　等と勝との子を欣樂し　劣子を欣樂せず　家門を損壞すること勿れ　應に知るべし三子の中　一は劣にして二は勝と爲すことを　佛正覺而も說く　諸の賢聖も亦然なり
二は俱に尸羅を信じ　聰慧にして慳恪無く　晴夜の滿月の　衆曜に處して光り威きが如し
應に親近し供養すべし　諸佛に稱揚せられ　諸の垢塵を遠離せば　所行怖畏無し

(一二〇) 等子と勝子と劣子。

世間の諸の所有ゆる　根莖花等の香は　皆風に逆つては熏ぜず　勢力微なるを以つての故なり
　唯我が佛法の中には　一妙香の類有り　風に順ひ逆ふ等　普く皆熏ぜざること無し　天上及び人中　諸の世間の賢聖　一切皆珍愛す　所謂淨戒香なり　若し能く此の香に於いて　放逸なること無く住せば　無倒定慧を生じて　永く衆苦の邊を盡くさん。

重ねて前經を攝して嗢拕南に曰く。

同界と感と後有と　求利と及び欲生と　悪說と似驢鳴と　四學と四戒となり。

於いて應に上品の欲勤精進を起し終に懈廢すること無かるべし」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

三種の樂を求むるが爲めに　智者は尸羅を護る　謂く世には名譽と　利養と生天との樂を尙ぶ
是くの如き勝業を觀じても　智者は尸羅を護る　當に惡を遠ざくることを親しく知れ　嶮惡道を避くるが如くせよ　衆惡を造らずと雖も　而も惡人に親近するは　吉祥茅を以つて　臭爛せる魚肉を裹むが如し　親しむ所には親しむ應からず　狎るる所には狎るる應からず　鮮淨なる物を持つて　糞穢の深坑に投ずるが如し　世間の淨きことを樂しむ人は　常に穢れたる塗染を懼る　有智の者も亦爾り　深く惡を怖るること親しく知れ。

(一一九)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。三種の香有り。唯、風に順つて熏じ、風に逆ふこと能はず。云何なるか三と爲す。一には根香、二には莖香、三には花香なり。是くの如き三種は唯風に順つて熏じ風に逆ふこと能はず。汝等苾芻、是の念を作すこと勿れ。更に餘香無しと。或は風に順つて熏じ、或は風に逆つて熏じ、或は復順逆にも皆悉く能く熏ずればなり。所以は何ん。我が佛法の中には一妙香有り。能く順風に熏じ、能く逆風に熏じ、能く順逆にも熏ず。天上人中に皆聞ぎて芬馥たり。世間の賢聖珍愛せざるは無し。何等をか名けて我が佛法の中に一妙香有り、能く順風にも熏じ、能く逆風にも熏じ、能く順逆にも熏じて天上人中に皆聞ぎて芬馥。世間の賢聖、珍愛せざること無しと爲すや。所謂戒香なり。此の戒香に由つて能く順風にも熏じ、能く逆風にも熏じ、能く順逆にも熏ず。天上人中皆聞ぎて芬馥たり。世間の賢聖、珍愛せざるは無し。是くの如きを名けて我が佛法の中に一妙香有り、能く順風に熏じ、能く逆風に熏じ、能く順逆に熏じて天上人中皆聞ぎて芬馥たり。世間の賢聖、珍愛せざるは無しと爲す」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

(一一九) 三種の香は戒香にはしかず。

いて已に圓滿を得、究竟住に於いて已に圓滿を得、修梵行に於いて已に圓滿を得、已に能く梵行の後邊を窮至せり。若し諸の苾芻、淨尸羅に於いて已に圓滿を得、究竟位に於いて已に圓滿を得、修梵行に於いて已に圓滿を得、已に能く梵行の後邊を窮至せり。應に知るべし。是の人は必ず村城聚落房舍臥具に樂居せず。亦諸の苾芻衆・苾芻尼衆・鄔波索迦・鄔波斯迦・勤策男等と同一の園林に喧雜して住することを樂まず。應に知るべし。是の人は第一寂靜心法を成就し、獨り空閑を守り、四依に依つて住し、諸の垢穢を離れ、內には眞實を守り、所求を棄捨して染分別無く、世法の爲めに塗染せられず。譬へば世間の嗢鉢羅花・拘牟陀花・鉢特摩花・奔陀利花の水に依つて生じ、水に依つて長じ、水より出づと雖も、水の爲めに染著せられざるが如し。是の人も亦爾り。世間に依つて生じ、世間に依つて長じ、世間に現ると雖も而も諸の世法の爲めに染せられず」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

無學は三分より成る　尸羅究竟位は　梵行を修して圓滿し　梵行の後邊に至る　是くの如き苾芻衆は　最上瑜伽を得　永く諸の苦邊を盡し　無上安樂を證す。

(一一八)吾れ世尊に從つて是の如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。若し三種の樂事を希求すること有らば、應に淨戒に於いて不缺不穿不穢不雜なるべし。淨尸羅に於いて應に上品の欲勤精進を起し、終に懈廢すること無かるべし。云何んが三と爲す。一には名譽樂事を希求す。應に淨戒に於いて不缺不穿不穢不雜なるべし。淨尸羅に於いて應に上品の欲勤精進を起し、終に懈廢すること無かるべし。二には利養樂事を希求す。應に淨戒に於いて不缺不穿不穢不雜なるべし。淨尸羅に於いて應に上品の欲勤精進を起し終に懈廢すること無かるべし。三には生天樂事を希求す。應に淨戒に於いて不缺不穿不穢不雜なるべし。淨尸羅に於いて應に上品の欲勤精進を起して終に懈廢すること無かるべし。是れを三種の樂事を希求すと名く。應に淨戒に於いて不缺不穿不穢不雜なるべし。淨尸羅に

(一一八) 三種の樂事には淨戒を持つべし。

せるなり。最上士と名く。云何んが苾芻、具さに善戒を調ふるや。謂く諸の苾芻、具さに尸羅を淨め、安住して別解脫戒を守護し、軌範の所行は圓滿せざること無く、微小の罪に於いても大怖畏を見はし、具さに能く所應の學處を受學し、淸淨なる身語の二業を成就し、淨命を成就し、淨見を成就するなり。是れを苾芻具さに善戒を調ふと名く。既に具さに是くの如くにして善戒を調へ已る。云何んが苾芻、具さに善法を調ふるや。謂く諸の苾芻、七種の菩提分法を勤修し具足して安住す。是れを苾芻具さに善法を調ふと名く。既に具さに是くの如くにして善尸羅を調へ善法を調へ已る。云何んが苾芻、具さに善慧を調ふるや。謂く諸の苾芻、諸漏を永盡し、眞無漏を得、心善解脫し、慧善解脫し、現法の中に於いて具足して安住し、自ら通慧を證し、能く自ら我が生已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辨じ、後有を受けずと了知す。是れを苾芻具さに善慧を調ふと名く。是くの如きを名けて若し苾芻有り具さに善戒を調へ、具さに善法を調へ、具さに善慧を調ふと爲す。彼れは我が法の毘柰耶の中に於いて已に具さに修行せるなり。最上士と名く」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

若し身語意思の　諸の惡不善を離るるを　具さに善戒を調へ　慚愧有る苾芻と名く　若し能く善く　七菩提分法を修行せば　具さに善法を調へ　妙定有る苾芻と名く　若し能く正しく了知して　自ら諸漏を永盡せば　具さに善慧を調へたる　眞無漏の苾芻と名く　若し三の調善を具すれば　威德は世に思ひ難し　若し已に具さに修行せば　最上なる聰明の士なり。

(一一七)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。諸の苾芻、三分を成就するもの有らん。應に知るべし。是の人は淨尸羅に於いて已に圓滿を得、究竟位に於いて已に圓滿を得、修梵行に於いて已に圓滿を得、已に能く梵行の後邊を窮至せり。云何んが三と爲す。謂く苾芻有り、無學の戒定慧蘊を成就す。是れを苾芻、三分を成就すと名く。應に知るべし。是の人は淨尸羅に於

(一一七) 無學の戒定慧。

般若慧を增上に非ずとして重んぜず。彼れは少小なる所學の戒の中に於いて微しく犯ずる所有れども卽ち能く出離す。所以は何ん。我れ說く彼の人は終に所制の學處を毀犯せずとして深く慚愧せされども定んで能く清淨梵行に隨順し、定んで能く清淨梵行を成辦す。諸の學處に於いて能く等持に住し、能く所學に住す。彼れは定んで能く五下分結を盡し、不還果を證す。不還法を得て當に化生を受くべし。彼の世間に於いて當に般涅槃すべし。或は中般を成じ、或は生般を成じ、或は有行般、或は無行般、或は上流を成じ、色究竟に趣き、或は非想非非想處に趣き、而して般涅槃す。是くの如きを名けて增上心學と爲す。何等をか名けて增上慧學と爲す。謂はく諸の苾芻、尸羅戒を增上と爲して尊重し、等持定を增上と爲して尊重し、般若慧を增上と爲して尊重す。彼れは少小なる所學の戒の中に於いて微しく犯ずる所有れども卽ち能く出離す。所以は何ん。我れ說く彼の人は終に所制の學處を毀犯せずとして深く慚愧せされども、定んで能く清淨梵行に隨順し、定んで能く清淨梵行を成辦す。諸の學處に於いて能く般若に住し、能く所學に住す。彼の人は定んで能く諸漏を永盡し、眞無漏を得、心善解脫し、慧解脫し、現法の中に於いて具足し安住して自ら通慧を證し、能く自ら我が生已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辦じ、後有を受けずと了知す。是くの如きを名けて增上慧學と爲す。是くの如きを名けて學に三種有りと爲す。若し正しく修習せば諸の有情をして下中上賢聖差別を成ぜしめん」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

學因の勢力に隨ひ　常に精進して熾然たらば　下中上品の修に　隨つて得果も差別す　謂く下の精進修は　還つて下品果を成じ　中修は中果を得　上修も亦復然り：旣に三品修の　所得の果の差別を知る　故に應に中下を捨てて　宜しく上品修に遵ふべし。

(一一六)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。若し諸の苾芻、具さに善戒を調へ、具さに善法を調へ、具さに善慧を調へば、彼れは我が法の毘柰耶の中に於いて已に具さに修行

(一一六)　善く戒と法と慧とを調ふ。

んで能く清淨梵行に隨順し、定んで能く清淨梵行を成辦す。諸の學處に於いて能く般若に住し、能く所學に住す。彼の人は定んで能く諸漏を永盡し、眞無漏を得、心善解脫し、慧善解脫し、現法の中に於いて具足して安住し、自ら通慧を證し、能く自ら我が生已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辦じ、後有を受けずと了知す。是くの如くなるを名けて增上慧學と爲す。是くの如くなるを名けて學に三種有りと爲す。若し少分修すれば少分果を得、若し圓滿修すれば圓滿果を得」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

多く戒を尊重して住するを　少分修と名く　常に精進して熾然たれば　便ち少分果を得　多く定を尊重して住するを　少分修と名く　常に精進して熾然たれば　亦少分果を得　多く慧を尊重して住すれば　圓滿修と名く　常に精進して熾然たれば　便ち圓滿果を得　少分と圓滿修とは　各ゝ同類果を得　是くの如き勝劣を知り　應に分を捨てゝ圓を修せよ。

吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。學に三種有り。若し正しく修習せば諸の有情をして下中上賢聖の差別を成ぜしむ。云何なるか三と爲すや。一には增上戒學。二には增上心學。三には增上慧學なり。何等をか名けて增上戒學と爲す。謂く諸の苾芻、尸羅戒を增上と爲して尊重し、等持定を增上に非ずとして重んぜず、般若慧を增上に非ずとして重んぜず。彼れは少小なる所學の戒の中に於いて微しく犯ずる所有れども即ち能く出離す。所以は何ん。我れ說く彼の人は終に所制の學處を毀犯せずとして深く慚愧せされども、定んで能く清淨梵行に隨順し、定んで能く清淨梵行を成辦す。諸の學處に於いて能く尸羅に住し、能く所學に住す、彼の人は定んで能く三結を永盡し、預流果を證し、無墮法を得、定んで菩提に趣かん。極は七返人天に往來し、或は家々を成じ、或は一來果、或は一間を成ず。是くの如きを名けて增上戒學と爲す。何等をか名けて增上心學と爲す。謂く諸の苾芻、尸羅戒を增上と爲して尊重し、等持定を增上と爲して尊重し、

必ず第一義を證す　かるが故に三學を尊重せば　法性に達せんこと疑ひ無し。

吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。學に三種有り。若し少分修は少分果を得、若し圓滿修は圓滿果を得。云何なるか三と爲すや。一には增上戒學。二には增上心學。三には增上慧學なり。何等をか名けて增上戒學と爲すや。謂く諸の苾芻、尸羅戒を增上と爲して尊重し、等持定は增上に非ずとして重んぜず、般若慧は增上に非ずとして重んぜず。彼れは少小なる所學の戒の中に於いて微しく犯ずる所有れども卽ち能く出離す。所以は何ん。我れは說く彼の人は終に所制の學處は毀犯せずとして、深く慚愧せざれども定んで能く淸淨梵行に隨順し、定んで能く淸淨梵行を成辦せり。諸の學處に於いて能く尸羅に住し、能く所學に住す、彼の人は定んで能く三結を永盡し、預流果を證し、無墮法を得、定んで菩提に趣かん。極は七返人天に往來して諸の苦際を盡す。或は復能く其の欲界の貪恚をして微薄ならしめ、一來果を證するもの有り。一たび此の間に來つて諸の苦際を盡くすなり。是くの如くなるを名けて增上戒學と爲す。何等をか名けて增上心學と爲すや。謂く諸の苾芻、尸羅戒を增上と爲して尊重し、等持定を增上と爲して尊重し、般若慧を增上に非ずとして重んぜず。彼れは少小の所學の戒の中に於いて微しく犯す所有れども能く出離す。所以は何ん。我れ說く彼の人は終に所制の學處を毀犯せずとして深く慚愧せされども、定んで能く淸淨梵行に隨順し、定んで能く淸淨梵行を成辦す。諸の學處に於いて能く等持に住し、能く所學に住し、彼れは定んで能く五下分結を盡し、不還果を證す。不還法を得て當に化生を受くべし。彼の世間に於いて當に般涅槃すべし。是くの如くなるを名けて增上心學と爲す。何等をか名けて增上慧學と爲すや。謂く諸の苾芻、尸羅戒を增上と爲して尊重し、等持定を增上と爲して尊重し、般若慧、を增上と爲して尊重す。彼れは少小なる所學の戒の中に於いて微しく犯ずる所有れども、卽ち能く出離す。所以は何ん。我れは說く彼の人は終に所制の學處を毀犯せずとして深く慚愧せざれども定

定を增上と爲して尊重し、般若の慧を增上に非ずとして重んぜず。少小の所學の戒の中に於いて微しく犯ずる所有りとも卽ち能く出離す。所以は何ん。我れ說く彼の人は終に所制の學處を毀犯せずとして、深く慚愧せざれども定んで能く清淨梵行に隨順し、定んで能く清淨梵行を成辦す。諸の學處に於いて能く等持に住し、能く所學に住す。彼れは定んで能く五下分結を盡して、不還果を證せん。不還果を得て當に化生を受くべし。彼の世間に於いて當に般涅槃すべし。是くの如くなるを名けて增上心學と爲す。何等をか名けて增上慧學と爲すや。謂く諸の苾芻、尸羅の戒を增上と爲して尊重し、等持の定を增上と爲して尊重し、般若の慧を增上と爲して尊重す。彼れは少小の所學の戒の中に於いて微しく犯ずる所有りとも卽ち能く出離せん。所以は何ん。我れ說く彼の人は終に所制の學處を毀犯せずとして、深く慚愧せざれども定んで能く清淨梵行に隨順し、定んで能く清淨梵行を成辦せん。諸の學處に於いて能く般若に住し、能く所學に住す。彼の人は定んで能く永く諸漏を盡し、眞無漏を得、心善解脫し、慧善解脫し、現法の中に於いて具足して安住し、自ら通慧を證し、能く自ら我が生已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辦じ、後有を受けずと了知す。是くの如くなるを名けて增上慧學と爲す。若し此の所學の三學に於いて勤めて修學すること有らん者は、我れ說く、必定して空しくして果無きにあらず、必ず究竟に至り、能く甘露を得、能く涅槃を證す。是くの如くなるを名けて學に三種有りと爲す。若し勤修すること有らば、空しくして果無きにあらず必ず究竟に至り、能く甘露を得、能く涅槃を得ん」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

　增上の戒を勤修し　戒に住し所學に住せば　能く三結を永盡し　定んで預流果を證す　增上の心を勤修し　定に住し所學に住せば　能く五下結を盡し　定んで不還果を證す　增上の慧を勤修し　慧に住し所學に住せば　能く一切の結を盡し　定んで無生果を證す　三學は唐捐なさず

學と爲すや。謂く諸の苾芻、如實に是れ苦聖諦なり、苦集聖諦なり、苦滅聖諦なり、及び能く苦滅に趣く道聖諦なりと了知するなり。是くの如くなるを名けて增上慧學と爲す。是くの如きが三學なり。若し能く中に於いて諸の放逸を離れ、晝夜に精勤し、諸の緣務を絕ち、獨り空閑に處し、修學して倒るゝこと無く、未生の諸漏は永く生ぜざらしめ、已生の諸漏は永く盡滅せしむ」と爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

戒と心と慧との學は三なり　智者は應に修學すべし　勤めて精進して常に安く　密に諸根を禁守す　晝夜空閑に處し　世の諸の緣務を絕ち　勤めて戒心慧を修することは　自らの頭燃を救ふが如くす　聖を學ぶ學處と名く　所學の後邊に至るまで　脫と所脫とに遺すこと無く　清淨妙智を成ず　不動解脫を得　已に永く諸漏を斷じ　生死の苦邊を盡くして　後有更に有ること無し。

吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。學に三種有り。若し勤修すること有らば、空しく果無きにあらず必ず究竟に至り、能く甘露を得、能く涅槃を證す。云何なるか三と爲すや。一には增上戒學、二には增上心學、三には增上慧學なり。何等をか名けて增上戒學と爲すや。謂く諸の苾芻、尸羅の戒を增上と爲して尊重し、等持の定を增上に非ずとして重んぜず。般若の慧を增上に非ずとして重んぜず、彼れは少小なる所學の戒の中に於いて微しく犯ずる所有りとも即ち能く出離す。所以は何ん。我れ說く、彼の人は終に所制の學處を毀犯せずとして深く慚愧せざれども定んで能く清淨梵行に隨順し、定んで能く清淨梵行を成辦せり。諸の學處に於いて能く尸羅に住し、能く所學に住せり。彼の人は定んで能く永く三結を盡し預流果を證し、無墮法を得、定んで菩提に趣く。極は七返人天に往來して諸の苦際を盡さん。是くの如くなるを名けて增上戒學と爲す。何等をか名けて增上心學と爲すや。謂く諸の苾芻、尸羅の戒を增上と爲して尊重し、等持の

て高聲に唱へて言はく、我れも亦是れ牛なり宜しく相ひ顧待すべしといふが如し。是くの如く一類の諸の惡苾芻は實に其の德無くして而も僧衆に隨ひ、是くの如き言を唱ふ。具壽當に知るべし。我れも亦是れ眞沙門釋子なりと。然れども此の一類の諸の惡苾芻は村城聚落に依止して住し、日の初分の時、裳服を整理し、衣鉢を執持し、村城聚落に往入して乞食す。身語意業を護持すること能はず、正念に住せず、諸根を守らずして淨信の諸の施主の家に詣り、利養の爲めの故に身は下座に處しながら爲めに高座に居して白衣に法を說く。我れは此の類の諸の惡苾芻の所有ゆる言說は皆驢鳴に似たりと說く」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

剃髮して染衣を服し　手には應器を執持すれども　實には戒定慧無く　而も自ら沙門なりと號す　世間に驢有り　牛と形相ひ異れども　而も牛群の後を逐ひ　自ら是れ眞の牛なりと號するが如し　是くの如き惡苾芻は　無敬等の法を成じ　常に厠を淸むる衆なりと雖も　而も菩提は證せざるなり。

(一一五)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。學に三種有り。若し能く中に於いて諸の放逸を離れ、晝夜精勤して諸の緣務を絕ち、獨り空閑に處し、修學して倒るゝこと無く、未生の諸漏は永く生ぜざらしめ、已生の諸漏は永く盡滅せしむ。云何なるか三と爲すや。一には增上戒學、二には增上心學、三には增上慧學なり。何等をか名けて增上戒學と爲すや。謂く諸の苾芻、淨尸羅を具し、別解脫戒に安住し守護して、軌範の所行をば圓滿せざること無く、微小なる罪に於いて大怖畏を見はし、具さに能く所應の學處を受學し、淸淨なる身語二業を成就し、淨命を成就し、淨見を成就す。是くの如きを名けて增上戒學と爲す。何等をか名けて增上心學と爲すや。謂く諸の苾芻、能く正しく欲惡不善法より離れ、有尋有伺離生喜樂し具足して最初の靜慮に安住す。廣說乃至。具足して第四靜慮に安住す。是くの如くなるを名けて增上心學と爲す。何等をか名けて增上慧

(一一五)　增上の三學、(四番)あり。

り。彼れに於いて極大福聚を成ずと雖も而も諸欲を受けて生死輪迴し、出離すること能はず。所以は何ん。彼の勝生處は是れ欲の所行の境界地なるが故なり。云何なるか三と爲すや。一には欲住天欲界勝生。二には樂化天欲界勝生。三には他化天欲界勝生。是くの如き三種の欲界勝生は彼れに於いて極大福聚を成ずと雖も而も諸欲を受けて生死輪迴して出離すること能はず。所以は何ん。彼の勝生處は是れ欲の所行の境界地なるが故なり。我が聖弟子、此の三種の欲界勝生に於いて如實に隨つて觀ずるに諸の過患有り。かるが故に欲界に於いて深く厭背を生ぜよ。厭背を生ずるが故に能く正しく離欲す。正しく離欲するが故に能く解脱を得。解脱を得已つて便ち自ら我が生已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辦じ、後有を受けずと了知す」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

欲界の三の勝生は　恒に諸の欲樂を受く　謂く欲住と樂化と　他化自在天となり　是くの如き三處に生じて　大福を成就すると雖も　而も生死に輪迴し　上地に生ずること能はず　此の諸欲の中に於いて　若し能く過患を知らば　人天等の趣を捨てゝ　無上菩提を證せん。

(一一四) 吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。世に一類の諸の惡苾芻有り。三法を成就し而も驢鳴に似たり。云何なるか三と爲すや。謂く一類の諸の惡苾芻有り。無敬無承、無慚無愧、懈怠して念を忘る。是くの如き一類の諸の惡苾芻は是くの如き三法を具足し成就して而も驢鳴に似たり。謂く實に德無くして而も僧衆に隨ひ、是くの如き言を唱ふ。具壽當に知るべし。我れも亦是れ眞の沙門釋子なりと。然して此の一類の諸の惡苾芻は增上せる戒定慧學有ること無けれども、餘の淸淨なる眞苾芻僧の如く僧衆に隨ひ、是くの如き言を唱ふ。具壽當に知るべし。我れも亦是れ眞沙門釋子なりと。世に驢有り牛群の後に隨ひ、高聲に唱へて言はく。我れも亦是れ牛なり宜しく相ひ顧待すべしと。然るに此の驢身は頭耳蹄喙毛色音聲皆牛と別なり、而るに牛の後に隨つ

(一一四) 三似驢鳴。

の過患を生ずべからず。諸の苾芻有り、此の所説の三因三緣を具して施主の家に往き、勝れたる利養を求めん。或る時、其の家忽ち遽かに賴り無からん。見已つて慼然として默して敬問せず、起つて承迎せず、延いて座に就いせず、共に談論せさらん。彼れは此の相を見、便ち起念して言はく。此の施主の家は恒には相ひ敬待せり。誰れに諂佞せられてか頓に共れをして然らしむるやと。此の因緣に由つて便ち彼の所に於いて忍ばず悅ばずして恚害の心を起し、或は身語惡不善業を發せり。斯れに因つて諸の惡趣の中に墮ち不愛果を受けん。苾芻當に知るべし。我れ世間を觀ずるに、諸の有情の類は或は利養に由つて其の心を擾亂し、身壞命終して諸の惡趣に墮ち、地獄の中に生れ不愛果を受く。我れ世間を觀ずるに諸の有情の類は或は利養及び衰損に由つて其の心を擾亂し、身壞命終して諸の惡趣に墮ち地獄の中に生れ不愛果を受く。所以は何ん。愚癡の凡夫は諸の利養を被むりては先づ其の膜を破る。既に膜を破り已つて復其の皮を破る。既に皮を破り已つて復其の肉を破る。既に肉を破り已つて復筋脈を斷ず。筋脈を斷じ已つて復其の骨を破る。既に骨を破り已つて復髓腦を傷る。然して後に方に住す。是の故に汝等、應に是くの如く學すべし。我れ當に云何んが利養を被りても其の心を擾亂せざるべきや。我れ當に云何んが衰損を被りても、其の心を擾亂せざるべきや。我れ當に云何んが利養及び衰損を被りても其の心を擾亂せず。獨り空閑に處し、聖行を勤修し、速かに無上常樂涅槃を證すべきやと。汝等苾芻、應に是くの如く學すべし」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

三種の因緣に由り　諸の利養を希求せば　種種の功德を壞り　及び人天を退失す　諸の聰明有る人は　利養と衰損とに遇へば　其の心を善く安定し　動かざること山王の如くす　常に靜慮して安然たり　正しく諸法の義を觀じ　深細なる智見を修し　常樂涅槃を證す。

(一一三)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。欲界の勝生には略して三種有

(一一三)　三欲天は生死を出でず。

しく一切の色想を超過し、有對の想を滅し、復種種の異想を思惟せず、具足して無邊虚空、空無邊處に安住す。能く正慧を以つて如實に隨つて觀じ、其の中の所有ゆる受想行識、是くの如きの法の性は皆是れ無常なり。皆是れ其の苦は病の如く癰の如く毒箭に中れるが如く、惱有り害有り怖有り猜有り、怨有り敵有り。迅速に敗壞して諸の疾疫多く、諸の災横多く、虚僞不實にして離散し我無し。信を保つ可らず。是くの如くなれば汝等、應に正慧を以つて如實に隨つて觀じ、色有を出離すべし。云何が汝等、應に正慧を以つて如實に隨つて觀じ、無色有を出ずべきや。謂く正しく是れ寂靜爲り、是れ微妙爲りと了知するなり。謂く憍慢を離れ、諸の渴愛を息め、阿賴耶を滅し、諸の經路を斷じ、空無所得にして愛盡離欲し、寂滅涅槃するなり。是くの如くなれば汝等、應に正慧を以つて如實に隨つて觀じ、無色有を出づべし。若し能く是くの如く其の正慧を以つて如實に隨つて觀じ、三有を出離せば便ち欲有色無色有に於いて能く深く厭背せるなり。深く厭背するが故に、能く正しく離欲せるなり。正しく離欲せるが故に能く解脫を得たり。解脫を得已らば便ち自ら我が生已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辦じ、後有を受けずと了知す」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

正慧を以つて隨つて觀ず　三界出離の相を　能く諸行を止息して　最上涅槃を得たり　已に諸漏を解脫し　善く瑜伽を修習し　最後身を任持して　魔の所使を降伏す。

(一一二)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。三因三緣は諸の有情をして利養を希求し多くの過患を生ぜしむ。云何なるを三と爲すや。一には貪欲を因と爲し緣と爲す。諸の有情をして利養を希求し多くの過患を生ぜしむ。二には耽著を因と爲し緣と爲す。諸の有情をして利養を希求し多くの過患を生ぜしむ。三には受用して過患を見ざるを因と爲し緣と爲す。諸の有情をして利養を希求し多くの過患を生ぜしむ。汝等苾芻、應に此の三因三緣を起して利養を希求し多く

(一一二) 貪欲と耽著と受用とは過患を見ず。三因緣は多く過患を生ず。

り。愛は漑灌爲り。無明は無智・無了・無見の覆蔽す所なり。識は便ち欲有・色有・無色有處に安住す。欲は最も下と爲し、色は其の中と爲し、無色は妙と爲す。若し欲界の業が異熟果を感じて現在前せずんば施設す可らず。此れを欲有と爲す。欲界の業に由つて異熟果を感じて正しく現在前せは故らに施設すべし。此れを欲有と爲す。爾の時に當つては業は良田爲り。識は種子爲り。愛は漑灌爲り。無明は無智・無了・無見の覆蔽する所なり。識は便ち下の欲有處に安住す。若色界の業が異熟果を感じて現在前せずんば施設すべからず。此れを色有と爲す。色界業に由つて異熟果を感じて正しく現在前せば故らに施設すべし。此れを色有と爲す。爾の時に當つて業は良田爲り。識は種子爲り。愛は漑灌爲り。無明は無智・無了・無見の覆蔽する所なり。識は便ち中の色有處に安住す。若し無色業が異熟果を感じて現在前せずんば施設すべからず。無色有と爲す。無色業に由つて異熟果を感じて正しく現在前せば故らに施設すべし。無色有と爲す。爾の時に當つて業は良田爲り。識は種子爲り。愛は漑灌たり。無明は無智・無了・無見の覆蔽する所なり。識は便ち妙なる無色處に安住す。苾芻當に知るべし。遠離に由るが故に欲有を出離す。無色に由るが故に色有を出離す。永滅に由るが故に一切の有爲有起、思慮緣生を出離す。汝等苾芻、應に正慧を以つて如實に隨つて觀じ欲有を出離すべし。應に正慧を以つて如實に隨つて觀じ色有及び無色有を出離すべし。云何が汝等、應に正慧を以つて如實に隨つて觀じ欲有を出離すべきや。謂く諸の欲惡不善法を離れ、有尋有伺にして離生喜樂し具足して最初の靜慮に安住し、能く正慧を以つて如實に隨つて觀ず。其の中の色受想行識、是の如き法の性は皆是れ無常なり。皆是れ其の苦は病の如く癰の如く毒箭に中れるが如く、惱有り害有り怖有り猜有り、怨有り敵有り。迅速に敗壞して諸の疾疫多く、諸の災橫多く、虛僞不實にして離散し我無し。信を保つ可らず。是の如くなれば汝等、應に正慧を以つて如實に隨つて觀じ欲有を出離すべし。云何が汝等、應に正慧を以つて如實に隨つて觀じ色有を出離するや。謂く正

無量の人有り。恒に集つて同じく僧の爲めに臥具を敷設する等の行を修し、尊者不滅と其の同類と無量の人有り。恒に集つて同じく淨天眼行を修し、尊者阿難と其の同類と無量の人有り。恒に集つて同じく集樂多聞行を修し、其の羅怙羅と其の同類と無量の人有り。恒に集つて樂持戒行を修し、童子迦葉と其の同類と無量の人有り。恒に集つて同じく巧辯說行を修し。其の劫比拏と其の同類と無量の人有り。恒に集つて同じく大苾芻を敎誡敎授する行を修し、尊者難陀と其の同類と無量の人有り。恒に集つて同じく苾芻尼を敎誡敎授する行を修し。優波西那と其の同類と無量の人有り。恒に集つて同じく威儀を具する行を修し。姸美難陀と其の同類とは六十人有り。恒に集つて同じく端嚴の行を修し、愚人天授と其の同類とは六十人有り。恒に集つて同じく勃逆惡行を修す。是の故に當に知るべし。諸の有情界は互に相ひ親近して相ひ乖違せず。諸の劣勝僻の種類の有情と劣勝僻の種類の有情とは更に相ひ親近し無染承事す。諸の妙勝僻の種類の有情と妙勝僻の有情とは更に相ひ親近し參染承事す」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

草木叢林の如く　亦風火等の如く　物は各ゝ類を以つて聚る　有情界も亦然り　愚者は愚に狎れ　智者は智に親しむ　體かに朋侶の別を知り　應に有智の人に親しむべし　破れた浮囊に凭るが如くんば　必ずや大海に沈まん　怠慢なる者に親近せば　定んで智の光明を失はん　かるが故に應に怠慢を捨てゝ　樂つて空閑に棲止すべし　有智の人に親近せば　速かに能く衆苦を殄くさん。

(二二) 吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。三因と三緣とは能く後有を感ず。云何なるを三と爲すや。所謂無明は未だ永斷せざるが故に。愛は未だ棄てざるが故に。業は未だ息まざるが故に。是の因緣に由つて能く後有を感ず。所以は何ん。業は良田爲り。識は種子爲

(二二) 無明と愛と業との三因三緣は能く後有を感ず。

卷の第六

三法品第三の一

（二一〇）吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。諸の有情界は互に相ひ親近して相ひ乖違せず。諸の劣れる勝解の種類の有情と劣れる勝解の種類の有情とは更に相ひ親近して參染承事す。諸の妙なる勝解の種類の有情と妙なる勝解の種類の有情とは、更らに相ひ親近し參染承事す。過去界に在りし諸の有情界は已に相ひ親愛して相ひ乖違せざりき。諸の劣勝解の種類の有情と劣勝解の種類の有情とは已に相ひ親近し參染承事せり。未來に在る諸の有情界も當に相ひ親愛して相ひ乖違せず。諸の劣勝解の種類の有情と劣勝解の種類の有情とは、當に相ひ親近し參染承事すべし。諸の妙勝解の種類の有情と妙勝解の有情とは當に相ひ親近して參染承事すべし。現在に在る諸の有情界は現に相ひ親愛して相ひ乖違せず。諸の劣勝解の種類の有情と劣勝解の種類の有情とは現に相ひ親近し參染承事す。諸の妙勝解の種類の有情と妙勝解の種類の有情とは現に相ひ親近し參染承事す。是の故に尊者解憍陳如と其の同類と六十人有り。恒に集つて同じく阿練若行を修し、摩訶迦葉は其の同類と無量の人有り。恒に集つて同じく杜多の妙行を修し、其の舍利子と其の同類と無量の人有り。恒に集つて同じく大智慧行を修し、大目乾連と其の同類と無量の人有り。恒に集つて同じく大神通行を修し、拘瑟祉羅と其の同類と無量の人有り。恒に集つて同じく無礙解行を修し、其の滿慈子と其の同類と無量の人有り。恒に集つて同じく說正法行を修し、迦多衍那と其の同類と無量の人有り。恒に集つて同じく辨釋經行を修し、尊者善現と其の同類と無量の人有り。恒に集つて同じく無諍住行を修し、頡麗伐多と其の同類と無量の人有り。恒に集つて同じく諸の靜慮行を修し、其の優波離と其の同類と無量の人有り。恒に集つて同じく持律の行を修し、物力士子と其の同類と

（二一〇）劣勝解の有情と妙勝解の有情とは三世に各ゝ相ひ親近す。

覺なり。能得涅槃なり。能超一切生老病死愁歎憂苦熱惱等の法なり。是くの如く知り已らば出世法に於いて珍寶の想を生じ、世間法に於いて下賤の想を生ぜん。出世法に於いて珍寶の想を生ずるが故に、便ち歡喜を生ず。歡喜を生ずるが故に其の心安適なり。心安適なるが故に身輕安を得。身輕安なるが故に便ち悅樂を得。悅樂を受くるが故に心寂定を得。心寂定なるが故に能く實知見す。實知見するが故に能く深く厭背す。深く厭背するが故に能く正しく離欲す。正しく離欲するが故に能く解脫を得。解脫を得已らば便ち自ら了知す。我が生已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辦じ、後有を受けずと。是くの如く汝等、此の所說の出世正見に於いて應に諦かに尋思し稱量し觀察すべし。是くの如くなるを名けて二種正見と爲す。應に諦かに尋思し稱量し觀察すべし。能く未得を得し、能く未觸を觸し、能く未證を證し、能く愁歎を超え、能く憂苦を滅し、能く如理を得し、能く甘露に觸し、能く涅槃を證す」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

正見に二種有り　世間と出世間となり　智者は諦かに尋思して　能く正しく衆苦を盡くす　諦かに世間を思へば　便ち怖畏の想を生ず　無執受等に由り　究竟じて涅槃を證せん　諦かに出世間を思へば　便ち珍寶の想を生ず　輕安なるが故に樂を受く　樂の故に心寂定なり　心定まらば覺支を生じ　四の如實を知見す　實を見れば諸疑を斷ず　疑ひ除かるれば所取無し　一切の苦を解脫して　無上涅槃を證せん。

重ねて前經を攝して嗢拕南に曰く。

施と祠と集會と　如と不如と學とが終り　行相と相違と死と　染淨と及び二見となり。

祠有り、善有り、善惡業有り、異熟果有り、此の世間有り、彼の世間有り、父有り、母有り、諸の有情化生の種類有り。其の世間に於いて諸の沙門、婆羅門等有らん。正至正行して此の世間及び彼の世間に於いて自然に通達し、證を作して領受す。是くの如きを名けて世間正見と爲す。諸の聖弟子よ。此の所說の世間正見に於いて應に諦かに尋思し稱量し觀察すべし。此の所說の世間正見に依り、能く衆生をして畢竟じて生老病死愁歎憂苦熱惱等の法を解脫せしむ。諦かに觀察せずして已らば便ち正しく了知せよ。此の所說の世間正見に依り、衆生をして畢竟して生老病死愁歎憂苦熱惱等の法を解脫せしめず。所以は何ん。是くの如き所說の世間正見は眞聖見に非ず、出離見に非ず、能く究竟じて涅槃を證する見に非ず、厭に非ず、離に非ず、滅に非ず、靜に非ず、通慧を證せず、成等覺に非ず、涅槃を得るものに非ずして、而も能く生老病死愁歎憂苦熱惱等の法を感得す。是くの如く知り已らば世間法に於いて怖畏の想を生じ、出世法に於いて安靜想を生ず。世間法に於いて怖畏を生ずるを以つての故に、都べて執受無し。執受無きが故に希求する所無し、希求無きが故に、內に於いて究竟して涅槃を證得す。是くの如く證し已つて便ち自ら了知す。我が生已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辦じ、後有を受けずと。是くの如く汝等。此の所說の世間正見に於いて、應に諦かに尋思し稱量し觀察すべし。云何なるか名けて出世正見と爲すや。謂く苦智を知ると苦集智を知ると、能く苦滅に趣向する道智を知るとなり。是くの如きを名けて出世正見と爲す。諸の聖弟子よ。此の所說の出世正見に於いて、應に諦かに尋思し稱量し觀察すべし。此の所說の出世正見に依つて、能く衆生をして畢竟じて生老病死愁歎憂苦熱惱等の法を解脫せしむ。諦かに觀察せずして已らば便ち正しく了知せよ。此の所說の出世正見に依て能く衆生をして畢竟じて生老病死愁歎憂苦熱惱等の法を解脫せしむ。所以は何ん。是くの如く說く所の出世正見は是れ眞聖見なり、是れ出離見なり、是れ能く究竟じて涅槃を證する見なり。能厭能離なり。能滅能靜なり。能證通慧なり。能成等

は婆羅門にして無有見を攝して無有見を習ひ、無有見と其の愛樂とに著するもの有り。諸の有見者と展轉相違して互に怨害を爲し、無有見を讚めて最も第一と爲す。若し沙門或は婆羅門にして此の二見に於いて諸の滅味を集め、出離を過患し、正慧を以つて如實に了知せざるもの有らば、我れは彼の人を說いて智見無く、貪瞋癡を有し、違有り害有り、慧無く明無く、生老病死愁歎憂苦熱惱等の法を解脫すること能はず、生死の衆苦を解脫すること能はずと名く。若し沙門或は婆羅門有り。此の二見に於いて諸の滅味を集め、出離を過患し、能く正慧を以つて如實に了知せば、我れは彼の人を說いて、智見を有し、貪瞋癡無く、違無く害無く、慧有り明有り、定んで能く生老病死愁歎憂苦熱惱等の法を解脫し、定んで能く生死の大苦を解脫せりと名く」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

世間は二見に由りて　展轉して互に相違し　彼此怨讎と作る　謂く有と無有との見なり　諸の此の見を有して　愛樂して捨つること能はずんば　是れを愚癡の人と謂ふ　恒に他を毀り自を讚む　若し此の見を知らずして　滅味を集め出を患ひなば　毒箭に傷ぶられ　無明の闇に覆はるゝを見る　貪瞋癡を具足して　智見明慧無ければ　定んで生老病死等より　解脫すること能はず　若し能く此の見を知り　滅味を集め出を患ひなば　毒箭に傷ぶられず　無明の黑闇を破るを見ん　決定して能く　生老病死等を解脫せん。

(一〇九)復、世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。二の正見有り。應に諦かに尋思し稱量し觀察すべし。若し諦かに尋思し稱量し觀察せば能く未得を得し、能く未觸を觸し、能く未證を證し、能く愁歎を超へ、能く憂苦を滅し、能く如理を得し、能く甘露に觸し、能く涅槃を證せん。云何なるをか二と爲すや。所謂、一切世間の正見と出世の正見となり。云何なるを名けて世間正見と爲すや。謂く一類のもの有り。如是見を起し、如是論を立て、決定して施有り、受有り、

(一〇九)世間の正見と出世の正見。

其の處り有り。所以は何ん。心に擾濁及び垢穢無きが故なり。譬へば世間の所有ゆる臺觀、若し一の中心にして極善に覆蔽するときは則ち椽梁壁皆淋漏すること無し。椽梁壁淋漏すること無きが故に皆敗壞せず。又世間の遠離せる村邑聚落の池沼にして擾濁及び諸の垢穢無ければ明眼有るの人は其の岸上に住して作意觀察するに其中の所有ゆる螺蛤龜魚、礫石等の類の行住する普ねき側らを極めて易く見る可けん。所以は何ん。水に擾濁と及び垢穢と無きが故なり。是くの如く衆生も若し心に於いて能善く守護すること有るときは則ち能善く身語意業を護る。若し能善く身語意業を護らば是の人は即ち身語意業の爲めに皆敗壞せられず。身語意業敗壞せざるが故に、其の心即ち擾濁垢穢無し。心擾濁垢穢無きが者は、能く正しく自の利樂の事、他の利樂の事、倶の利樂の事を了知すること斯れ是の處り有り。能く正しく善言說義、惡言說義を了知すること斯れ是の處り有り。能く一切の勝上なる人法の眞聖知見を證すること斯れ其の處り有り。所以は何ん。心に擾濁と及び垢穢と無きが故に、苾芻當に知るべし。心雜染するが故に、有情は雜染す。心清淨なるが故に、有情は清淨なり。是の故に雜染と清淨との二法は皆心に依止し、心より起る所なることを」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

若し心を護らずして　諸欲に隨順し　恒に馳散して放逸ならば　一切は無にして爲さゞるなり
若し善く心を護れば　諸欲に隨順せず　馳散放逸すること無くして　一切皆防護す　世間の
聰慧の人は　能く身語意を防ぎ　諸の惡を造らざらしむ　眞の健丈夫と名く。

(一〇八) 復、世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。二種の見あり。諸の有情をして展轉相違して互に怨害を爲さしむ。云何なるか二と爲すや。所謂有見と無有見となり。諸の沙門或は婆羅門にして、有見と及び無有見とを攝受して有見を習行し、有見と諸の愛樂とに耽著するもの有り。無有見の者と展轉相違して互に怨害を爲し、有見を稱讃して最も第一と爲す。諸の沙門或

(一〇八) 有見と無見とは互に怨害を爲す。

衆生心なり。若し心に於いて守護すること能はざること有らば則ち身語意業も守護すること能はず。若し身語意業を護ること能はざれば、是の人は卽ち身語意業の爲めに皆悉く敗壞す。身語意業皆敗壞するが故に其の心卽ち擾濁垢穢有り。心に擾濁及び垢穢有る者は、能く正しく自ら利樂する事其他を利樂する事と倶に利樂する事とを了知すること是の處り有ること無し。能く正しく善言說義と惡言說義とを了知すること是の處り有ること無し。能く一切の勝上の人法眞聖智見を證することも亦是の處り無し。所以は何ん。心に擾濁及び垢穢有るが故なり、譬へば世間に所有ゆる臺觀し。若し一中心にして不善なる覆蔽なるときは則ち椽梁壁、皆淋漏せらる。椽梁壁が淋漏せらるるが故に皆悉く敗壞するが如し。又世間の隣近せる村邑聚落の池沼にして擾濁垢穢ならば明眼有る人、其の岸上に住して作意觀察するに、其の中の所有ゆる螺蛤龜魚、礫石等の類の行住する普き側りをは極めて見るべきこと難きが如し。所以は何ん。水に擾濁と及び垢穢とが有るが故なり。是くの如く衆生にして若し心に於いて守護すること能はざること有らば則ち身語意業を護ること能はず。若し身語意業を護ること能はずんば。是の人は卽ち身語意業の爲めに皆悉く敗壞せらる。身語意業皆敗壞するが故に、其の心卽ち擾濁と垢穢と有り。心に擾濁及び垢穢有る者は、能く正しく自の利樂の事、他の利樂の事、倶の利樂の事を了知することは是の處り有ること無し。能く正しく善言說義、惡言說義を了知することも是の處り有ること無し。能く一切勝上の人法の眞聖なる智見を證することも亦是の處り有ること無し。所以は何ん。心に擾濁及び垢穢有るが故なり。若し心に於いて能善く守護すること有らば、則ち能善く身語意業を護るなり。若し能善く身語意業を護らば、是の人は卽ち身語意業の爲めに皆敗壞せられず。身語意業に敗壞せられざるが故に、其の心には卽ち擾濁垢穢無し。心に擾濁垢穢無き者は能く正しく自の利樂の事、他の利樂の事、倶の利樂の事を了知すること期して是の處り有り。能く正しく善言說義惡言說義を了知すること期して

る無量の惡不善法は心に隨つて流漏するとも、皆能く堰塞す。其の眼根に於て善く能く防守して、眼根を縱にせずして諸の境界に行じ、色味を貪らずして其の心を纏擾し、此の食を緣ぜずして、長夜の苦を受け猛利の苦を受け、匱乏の苦を受け、增血鏤身し、空曠の路を增す。復、往返して那落迦・傍生・鬼界及び阿素洛、人天趣の中に生じても諸の劇苦を受けず。皆眼根の善調伏に由るが故に是くの如し。或る時は、耳、聲を聞き已り、鼻、香を嗅き已り、舌、味を甞め已り、身、觸を覺り已り、意、法を了じ已れども其の相を執せず、隨好を執せず。是の因緣に由り、其の意根に於いて、善く能く正念にして防守して而も住し、貪憂を起さす。所有ゆる無量の惡不善法は心に隨つて流漏すれども皆能く堰塞す。其の意根に於いて善く能く防守して、意根を縱ままにせずして諸の境界を行じ、法味を貪らずして其の心を纏擾し、此の食を緣ぜずし、長夜の苦を受け、猛利の苦を受け、匱乏の苦を受け、增血鏤身し、空曠路を增す、復、往返せずして、那落迦・傍生・鬼界及び阿素羅、人天趣の中に生ず。皆意根の善調伏に由るが故なり。是くの如くなるを名けて調伏して死すと爲す。苾芻當に知るべし。不調伏死は無量の生死の苦海に沈沒し、調伏して而も死するは無量の生死の苦海を超度す。是れを二死と名く」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

略說するに諸の有情には　死法二種有り　調伏と不調伏となり　更に第三有ること無し　若し不調伏死は　定んで諸趣の中に於いて　諸の苦を受けて輪廻し　無量の往返を經　調伏して而も死する者は　終に惡趣に墮ちず　人天趣の中に於いて　能く永く衆苦を盡くす。

(一〇七) 吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。一切諸法は略して二種有り。云何なるか二と爲すや。一には雜染。二には清淨なり。應に正しく一法に由つて生ずと觀察すべし。所以は何ん。若し一法に於いて能く正しく守護せば則ち一切に於いても能く正しく守護す。若し一法に於いて能く守護せずんば則ち一切に於いても守護すること能はず。云何なるか一法。謂く

(一〇七) 雜染法と淸淨法。

觀見に隨ふ。眼は色を見已つて其の相を執取し、隨好を執取す。是の因緣に由つて、其の眼根に於いて正念を防守して住すること能はずして貪憂を發起す。便ち無量の惡不善法有り。心に隨つて流漏して堰塞すべからず。其の眼根に於いて防守すること能はずして、眼根を縱蕩にし、諸の境界に行じて色味に貪著し、其の心を纏擾す。此の貪に緣るが故に、長夜の苦を受け、猛利の苦を受け、匱乏の苦を受け、增血鑊身して、空曠の路を增し、無量に往返して那落迦・傍生・鬼界及び阿素洛・人・天趣の中に生れ、諸の劇苦を受く。皆眼根の不調伏に由るが故に是くの如し。或時、耳、聲を聞き已り、鼻・香を嗅ぎ已り、舌・味を甞め已り、身・觸を覺り已り、意・法を了じ已つて其の相を執取し、隨好を執取す。是の因緣に由つて、其の意根に於いて正念を防守して住すること能はず。貪憂を發生す。便ち無量の惡不善法有り、心に隨つて流漏して堰塞すべからず。其の意根に於いて防守すること能はずして、意根を縱蕩にし、諸の境界に行じて、長夜の苦を受け、猛利の苦を受け、匱乏の苦を受け、增血鑊身して、空曠の路を增し、無量に往返して那落迦・傍生・鬼界及び阿素羅・人・天趣の中に生れ、諸の劇苦を受く。皆意根の不調伏に由るが故なり。是くの如なるを名けて不調伏死と爲す。云何なるか名けて調伏して而も死すと爲すや。謂く諸の賢聖多聞の弟子は已に能く正見善士に親覲す。已に能く善士の法を了知せるなり。善士の法に於いて已に自ら調順して、色は卽ち是れ我、色は我に屬す、色は我の中に在り、我は色の中に在りとの觀見に隨はず。受は卽ち是れ我。受は我に屬し、受は我の中に在り、我は受の中に在りとの觀見に隨はず。想は卽ち是れ我、想は我に屬す。想は我の中に在り、我は想の中在りとの觀見に隨はず。行は卽ち是れ我、行は我に屬す。行は我の中に在り、我は行の中に在りとの觀見に隨はず。識は卽ち是れ我、識は我に屬し、識は我の中に在り、我は識の中に在りとの觀見に隨はず。眼は色を見已つて其の相を執せず。隨好を執せず。是の因緣に由つて、其の眼根に於いて、善く能く正念を防守して住し、貪憂を起さず。所有ゆ

無染と名く

(一〇五)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。二種の法有り。共に乖違して未だ嘗つて和合せずと雖も、然も其の中に於いて無缺無間なり。云何なるか二と爲すや。謂く生と死となり。譬へば世間の光明と影闇とは、共に乖違して未だ嘗つて和合せずと雖も、然も其の中に於いて無缺無間にして、光明發する時は影闇は便ち沒し、影闇起る時は光明は便ち謝するが如し。生死も亦爾なり。恒に共に乖違して未だ嘗つて和合せず。然れども其の中に於いて無缺無間なり。生法有る時は死法便ち沒し、死法有る時は生法便ち謝す」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

光明と影闇との如く　恒に共に乖違すると雖も　然も二法の中に於いて　未だ曾つて間缺有らず　生死も亦是くの如し　恒に共に乖違すると雖も　然も二法の中に於いて　未だ曾つて間缺有らず　無明の根より生ずる所　愛水の滋潤する所　纔かに死生は便ち續く　中にして間缺する時は無し

(一〇六)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。死に二種有り。云何なるか二と爲すや。一には死を調伏せず、二には死を調伏す。云何なるか不調伏死と爲すや。謂く諸の愚夫は異生を聞くこと無く、未だ正見善士に親覲すること能はず。未だ善士の法を了知すること能はず。善士の法に於いて未だ自ら調順せず。彼れは色は卽ち是れ我。色は我に屬す。色は我の中に在り。我は色の中に在りとの觀見に隨ふ。彼れは受は卽ち是れ我。受は我に屬す。受は我の中に在り。我は受の中に在りとの觀見に隨ふ。彼れは想は卽ち是れ我。想は我に屬す。想は我の中に在りとの觀見に隨ふ。彼れは行は卽ち是れ我。行は我に屬す。行は我の中に在り。我は行の中に在りとの觀見に隨ふ。彼れは識は卽ち是れ我。識は我に屬す。識は我の中に在り。我は識の中に在りとの

(一〇五)生と死とは相ひ乖けども無間なり。

(一〇六)不調伏死と調伏死。

く、正勤修習すること無量無損なるべし。應に水界・火界・風界に同じく、正勤修習すること無量無損なるべし。苾芻よ當に知るべし。譬へば地界は若し其の中に糞穢、洟唾、膿血是くの如き等の類を安置し、其の中に置くと雖も其の地界は、曾つて違順・欣慼・高下すること無きが如し。是くの如く心を安ずること應に地界と同じく正勤修習すること無量無損なるべし。既に地界と同じく正勤修習して無量無損ならば種種の違順の衆緣に遇ふと雖も、心都べて分別計著すること無けん。終に此の差別の因緣に由らずんば其の心高下せん。又水界・火界・風界の如き、若し其の中に於いて糞穢・洟唾・膿血、是くの如き等の類の淨不淨物を安置し、其の中に置くと雖も、其の水界・火界・風界は曾つて違順・欣慼・高下すること無し。是くの如く心を安んぜよ。應に水界・火界・風界と同じく正勤修習すること無量無損なるべし。既に水界・火界・風界と同じく正勤修習すること無量無損ならば種種の違順の衆緣に遇ふと雖も、心都べて分別計著すること無けん。終に此の差別の因緣に由らずんば其の心高下せん。此の定に由るが故に、有識身及び外の一切所緣相の中に於いて、我我所執と見慢隨眠とを善く伏し善く斷ず。彼の二種に於いて、其の心超越して一切相を離れ、寂靜安樂なれば善解脫と所有ゆる一切の心善解脫と慧善解とを得。皆其の中に於いて我我所執と見慢隨眠とを善く伏し善く斷ず。彼の二種に於いて其心超越し、一切相を離れ、寂靜安隱にして善解脫を得。其の得る所の利譽稱樂に於いて其の心欣はず、其の遭ふ所の衰毀譏苦に於いても慼(うれ)えず。是れを世間を超過する八法と名く。其の心平等なること、猶ほし世間の地水火風の如し。世間の八法は染すること能はざる所なり」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

躁動心は調へ難し　行を遠ざくるは第二無し　能く正勤して相を取れ　是れを世の聰明と謂ふ
善く心相を取り已らば　復作意して觀察せよ　正念に其の心を任せしめよ　勤修して四界と
同じくせよ　是くの如く正しく安住し　能く諸欲を棄捨するを　世の八法の中に於いて　善巧

壽と業とが未だ消亡せずんば　有情は終に死せず　壽と業とが若し盡滅せば　含識の死せんこと疑ひ無し。

(一〇三)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。二種の行有り。世間の衆生は皆共に造作するなり。云何なるか二となすや。一には能く短壽を感ずるの行。二には能く長壽を感ずるの行。云何なるか能く短壽を感ずる行なりや。謂く一類の補特伽羅、常に殺生を樂み、性兇暴たり。血を其の手に塗り、物の命を傷害して慚羞有ること無く、慈愍有ること無し。諸の衆生に於いて常に殺害を行じ、乃至脚を折れる蟻子を殺害す。是れを能く短壽を感ずるの行と名く。云何が能く長壽を感ずるの行なりや。謂く一類の補特伽羅有り。殺生より遠離し、殺具を棄捨し、慚羞し慈愍す。諸の衆生に於いて常に殺害せず乃至、脚を折れる蟻子をも害せず。是れを能く長壽を感ずる行と名く。是くの如きを名けて二種の行有りと爲す。世間の衆生は皆共に造作す」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

世間の諸の有情には　略して二種の行有り　二行の差別に由り　壽を感ずるに短長有り　謂く常に殺生を樂しみ　兇暴にして血を手に塗り　慚羞も慈愍も無きは　短壽を感ずること疑ひ無し　常に樂つて殺生より離れ　諸の殺具を棄捨し　慚羞と慈愍と有るは　長壽を感ずること疑ひ無し。

(一〇四)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。二行に由つて相應して心相を取る。云何なるか二と爲すや。一には名けて所緣行相と爲し。二には名けて作意行相と爲す。所有ゆる一切の已取・現取・當取の心相は皆是くの如き二種の行相に由る。汝等苾芻、二行相に由り、應に當に正しく勤善の心相を取れ。心相を取り已らば、應に善の意を作すべし。善の意を作し已らば應に善を觀察すべし。善を觀察し已らば應に善に安住すべし。善に安住し已らば應に地界に同じ

(一〇三)　短壽行と長壽行。

(一〇四)　所緣行相と作意行相。

て相違せず、念覺支を修すれば皆厭に依止し、皆離に依止し、皆滅に依止して、捨に迴向す。擇法及び精進喜輕安定捨覺支は背厭に依止し、皆離に依止し、皆滅に依止して、捨に迴向す。是くの如なるを名けて有學の苾芻の後修習力と爲す。是れを有學の苾芻の二力と名く」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

諸の有學の苾芻に　略して二種の力有り　思擇と及び修習となり　能く惡魔軍を伏す　惡過を見て能く斷じ　妙德を知つて能く修す　能く忍受し思惟す　是れを思擇力と名く　厭と離と滅とに依止し　及び捨に迴向し　七覺支を修す　是れを修習力と名く。

(一〇二) 吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。二種の法の盡滅に由るが故に死す。云何なるか二法なりや。一には業、二には壽なり。業盡に由るが故に及び壽盡の故に決定して命終す。若し時に業有らば爾の時には壽有り。若し壽有らば爾の時には業有り。所以は何ん。是くの如き二法は恒常に和合し和合せざること無し。是くの如き二法は施設し分析し離散すべからず。此の時業有らば、彼の時壽も有り。此の時壽有らば、彼の時業も有り。若し其の業有らば即ち其の壽も有り。若し其の壽有らば即ち其の業も有り。若し其の業無くんば即ち其の壽も無く、若し其の壽無くんば即ち其の業も無し。譬へば燈を燃せば焰を生じ明を發す。若し其の焰有らば即ち其の明有り。若し其の明有らば即ち其の焰も有り。若し其の焰無くんば即ち其の明も無く。若し其の明無くんば即ち其の焰も無きが如し。業壽も亦爾り。若し其の業有らば即ち其の壽有り。若し其の壽有らば即ち其の業有り。若し其の業無くんば即ち其の壽も無く、若し其の壽無くんば即ち其の業も無し。是くの如き二法は盡滅の故に死するなり」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

二法は恒に相ひ隨ふ　謂く業と及び壽となり　業有らば壽も亦有り　業無ければ壽も亦無し

(一〇二) 業と壽とは相ひ隨ふ。

言說と宴默との時に　根の惡を造ることを縱ままにせずして　能く我が敎を奉行せば　是れ聰慧なる智人なり　出離尋思と　及び無恚尋思とを修すれば　出離の正見有り　如實に於いて能く知らん　能く惡魔と　諸惡と不善法とを摧伏し　永く諸の煩惱を斷して　究竟して涅槃を證せん　かるが故に汝等苾芻　應に不放逸を修すべし　當に如理作意し　非理思惟を離るべし　汝等若し正勤して　語と默とに放逸すること無くば　久しからずして生死を度り　無上涅槃を證せん。

(一〇一)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。有學の苾芻に二種の力有り。云何なるが二と爲すや。謂く思擇力と及び修習力となり。云何んが苾芻に思擇力有るや。所謂一類の有學の苾芻・種種の衣服・飮食・房舍・臥具・病緣醫藥資生の具を受用せん時、皆善く思擇す。思擇せざるに非ず。而も便ち受用す。未だ得ざる所の衣服・飮食・房舍・臥具・病緣醫藥、諸の資生の具に於いても甚だ希求せず。已に得たる所の衣服・飮食・房舍・臥具・病緣醫藥、諸の資生の具に於いても深く耽著せず。堪能し忍受す。寒熱、飢渴・風日・蚊虻・蛇蝎等の觸にも堪能し忍受す。他に毀謗し罵辱せらるる等の言にも堪能忍受す。身內に生ずる所の猛利なる辛楚、酸疼、忍び難きにも、命を奪はれて臨終せんにも、難治の苦受にも堪能し忍受す。一切世間の極めて忍び難き事にも能く善く思擇す。諸の身語意の三種の惡行を能く照す。現法生法後法の不可愛樂の苦なる異熟果にも是の思惟を作す。我れは今定んで當に身語意三種の惡行を斷すべし。能く正しく三種惡行の所有ゆる過患を了知し、復正しく三種妙行の所有ゆる功德を了知せり。既に正しく知り已つて惡行と妙行とを勤斷し勤修し、自身を修治し、其れをして淸淨ならしめ、諸の罪法より離れしむ。是くの如きを名けて有學の苾芻の初思擇力と爲す。云何なるか苾芻に修習力有るや。所謂一類の有學の苾芻は所得の憶念の一切は皆覺支と相順して相違せず。所得の擇法及び精進喜輕安定捨の一切は皆覺支と相順し

(一〇一)。思擇力と修習力。

作意し廣説乃至、一切の惡不善法を増長せば、是くの如き苾芻は諸の有智の同梵行者の訶毀する所と爲せ。我れも亦彼に於いて常に稱讃せず。是くの如き苾芻は出家して具足戒を得ると雖も、惡慧樂有癡人と名く。是の故に汝等應に是くの如く學すべし。我れは當に云何んが方便して非理作意を斷除し、方便して如意作意を修習せんと。汝等苾芻よ。應に是くの如く學すべし」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を説いて曰く。

言説と宴默との時に　諸根の惡を造ることを縱にして　我が教を奉行せざるは　是れ愚昧なる癡人なり　故に汝等苾芻は　應に不放逸を修すべし　非理作意を離れ　當に如理思惟すべし　汝等若し正勤して　語默に放逸すること無ければ　久しからずして生死を度り　無上涅槃を證せん。

吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。若し諸の苾芻よ。言説する時に於いて如理作意し、出離尋思し、無恚尋思し、無害尋思せば、是くの如き苾芻は多善者、無慢緩者と名く。多善に趣向する方便を爲すが故なり。斷に於いても離に於いても善軛を捨てず、諸の放逸を離れ、勇猛精進し、正念にして正知して、心定まつて亂るること無く、諸根を密護して、出離の見を有し、能く出離を知り、如實の正慧をもつて惡魔・惡・不善法を棄背し、惡魔・惡・不善法を摧伏し、一切の惡不善法を損減す。若し諸の苾芻、宴默の時に於いて如理作意し、廣説乃至。一切の惡不善法を損減せん。是くの如き苾芻は諸の有智の同梵行者の稱讃する所と爲らん。我れも亦彼れに於いて恒常に稱讃せん。是くの如き苾芻を眞の出家受具足戒者と名く。大智慧有りて諸有を樂はざるものを不癡人と名く。是の故に汝等應に是くの如く學すべし。我れは當に云何んが方便して如理作意を修習せんや。方便して非理作意を斷除せんやと。汝等苾芻、應に是くの如く學すべし」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を説いて曰く。

便ち自ら我が生已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辨じ、後有を受けずと了知するなり。宴默に由るが故に心便ち寂定なり。清淨鮮白にして瑕穢有ること無し。隨煩惱を離れ調順堪任して安住不動なれば引發に堪能なり。能く引發するが故に如實に了知す。如實に知るが故に便ち能く厭背す。能く厭背するが故に便ち能く離欲す。既に離欲し已れば便ち解脱を得。解脱を得已れば便ち自ら我れは已に解脱せり。我が生已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辨じ、後有を受けずと了知す。汝等苾芻よ。應に上の法を說き、應に上の法を了ずべし。若し能く是くの如くならば乃ち眞實攝受仙幢にして、衆が集會して戲論し語言せるに非ずと名く。能く正しく諸法の實相を了知せば、能く諸漏を斷し、能く涅槃を證す。我れは常に集會して上の法を宣說し、上の法を了知す。かるが故に第一攝受仙幢と名くるなり」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

行者集會する時には　應に二事を修作すべし　謂く寂然宴默と　及び正法の言を說くとなり
正法の言を說くと　及び寂然宴默とに由り　諸法實相を知り　究竟じて涅槃を證す　汝等苾芻よ　若し上の法を說了せば　乃ち名を得て眞實　攝受大仙幢といはるべし　我は常に衆の中に處して　宣說して法を照了せり　是の故に名けて第一　攝受大仙幢といふ　若し正法幢に依つて　能く說き能く修行せば　定んで速かに生死を脱し　究竟して涅槃に至らん。

(一〇〇)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。若し諸の苾芻よ言說せん時に於いて非理作意し、欲尋思を起し、恚尋思を起し、害尋思を起さば是くの如き苾芻は多惡者、行慢緩者と名く。多惡に趣向する方便を爲すが故なり。斷に於いても離に於いても善軛を棄捨し、放逸懈怠にして精進を下劣にし、正念を忘失し、不正知のみ有り心は亂れて定らず、諸根は縱任ままにして、出離の見無く、出離することを知らず、如實の正慧は惡魔、惡不善法に趣向せしめ、諸の惡魔惡不善法の摧伏する所と爲り、一切の惡不善法を增長す。若し諸の苾芻、宴默の時に於いて非理

(一〇〇) 言說と宴默とに各善惡有り、

なる飲食・香鬘・衣乘・房舍・臥具・資産・燈明是くの如き等の類をもつて祠祀するを、財祠祀と名く。法祠祀とは謂く能く契經・應頌・記別・伽他・自説・本事・本生・方廣・未曾有法の無量なる門を以つて理の如く宣説し、施設建立し、分別開示して祠祀するを法祠祀と名く。此の財法二祠祀の中に於いて、法祠は最上勝妙第一なり。譬へば牛より乳を出し、乳より酪を出し、酪より生酥を出し、此の生酥より熟酥を出し、復熟酥より醍醐を出す。是の種種の牛の諸味の中に於いて醍醐は最上勝妙第一なるが如し。是くの如く財法二祠祀の中には、法祠は最上勝妙第一なり。法祠の中に於て能く顛倒無き法祠を行ずる者は、唯如來・應正等覺・明行圓滿・善逝・世間解・無上丈夫・調御士・天人師・佛・薄伽梵有るのみ」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

二種の祠の中に於いて　法祠を第一と爲す　能く法祠を行ふ者は　善逝を最も尊しと爲す　財祠を受くる田の中には　如來を第一と爲す　財祠を行ふものは不定なれども　法祠を受くるものは衆生のみなり　財祠は衆生をして　世の安隱樂を得せしむ　法祠は受者をして　究竟して涅槃を證せしむ。

(九九)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。諸の修行者同じく集會する時は、應に二事を作すべし。一には法言。二には宴默なり。法言に由るが故に審かに有德を有り、便ち深く敬信す。深く敬信するが故に便ち彼に往詣す。彼に往詣するが故に親近して供事す。親しく供事するが故に求めて正法を聞く。求めて法を聞くが故に耳を攝めて亂れず。耳亂れざるが故に正法を聽聞す。正法を聞くが故に法に於いて通利す。法に通利するが故に能く法を記持す。法を記持するが故に能く義を觀察す。義を觀察する時は法に於いて堪能にして審諦に思惟す。法に於いて堪能にして審諦に思惟する時は便ち欲樂を生ず。欲樂を生じ已つて便ち勢力を得、勢力を得已らば便ち能く稱量す。稱量に由るが故に便ち能く決擇す。能く決擇するが故に諦に於いて隨つて覺る。

(九九)　法言と宴默。

卷の第五

二　法品第二の三

(九七)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。施に二種有り。云何なるか二と爲す。一には財施、二には法施なり。云何なるか財施なりや。謂く一類の補特伽羅有り、能く種種の美妙なる飮食・香・鬘・衣乘・房舍・臥具・資產・燈明・病に緣る醫藥を施す。是くの如き等を捨て分布して他を惠む。名けて財施と爲す。云何なるか法施なりや。謂く廣く他の爲めに正法を宣說す。初中後善にして文義巧妙なり。純滿清白なる梵行の法なり。諸の有情をして聞き已つて生老病死愁歎憂苦諸の熱惱の法を解脫せしむ。是れを法施と名く。此の財法の二種の施の中に於いて、法施は最上勝妙第一なり。譬へば世間にて牛より乳を出し、乳より酪を出し、酪より生酥を出し、此の生酥より熟酥を出し、復熟酥より醍醐を出す。是の種種の牛の諸味の中に於いて醍醐は最上勝妙第一なるが如し。是くの如き財法二種の施の中には法施は最上勝妙第一なり。法施の中に於いても能く顚倒無き法施を行ずる者は、唯、如來應正等覺明行圓滿善逝世間解無上丈夫調御士天人師佛薄伽梵有るのみ」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

　二種の施の中に於いて　法施は第一爲り　能く法施を行ずる者には　善逝を最も尊しと爲す
　財施を受くる田の中には　如來を第一と爲す　財施を行ふものは不定なれども　法施を受くる
　ものは衆生のみなり　財施は衆生をして　世の安穩樂を得せしむ　法施は受者をして　究竟し
　て涅槃を證せしむ。

(九八)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。祠祀には二有り。云何なるか二と爲す。一には財祠祀、二には法祠祀なり。財祠祀とは謂く一類の補特伽羅有り、種種の美妙

(九七)　財施と法施。

(九八)　財祠祀と法祠祀。

慧の人は　父母を恭敬し　恒時に供養を修し　常に歡喜心を生ぜよ　父母は世間に於いて　恩深重にして報じ難し　無益を除き惡を制し　利を授け修善を勸む　妻室と資財とを與へ　慈心をもて常に覆護す　是の故に供養を修せよ　無量の福聚生ぜん　現には勝名聞を得　咸供養し恭敬す　死しては天の善趣に生れ　妙樂を受けて窮り無けん　生を天人に受けんと欲すれば五欲の妙樂を受けん　猶ほし天帝釋の如くならん　當に父母を供養すべし。

重ねて前經を攝して嗢拕南して曰く。

善と尋と輪と戒と學と　無明と慧と斷除と　苦と毀謗と報恩と　無欺誑と父母となり。

此の義を攝して頌を說いて曰く。

二の無欺誑法は　諸佛の共に談ずる所なり　謂く已集と已生との　諸業及び諸智なり　異熟果未だ生ぜずとも　諸業は終に滅せず　煩惱若し未だ盡きざれば　智は終に捨離せず　業は是れ生死の因なり　智は滅惑の本たり　是の故に應に智を修して　永く衆苦の邊を盡くすべし。

(九六)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。世に二種の補特伽羅有り。應に深く尊重し禮拜し供養すべし。敬愛心を以つて親近して住せよ。云何なるか二と爲すや。所謂、父母なり。若し諸の有情、其の父母に於いて深心に尊重し禮拜し供養し、敬愛の心を以つて親近して住せば無量の福を生ず。諸の有智の人は咸共に稱歎し、聲譽普く聞へ、衆に處して畏れ無く、後に焦惱せず悔ゆること無し。命終り身壞れたる後には諸の善趣に昇り、天の中に生れん。何なる緣をもつてか有情は、應に父母に於いて深心に尊重し禮拜し供養し、敬愛心を以つて親近して住すべきや。父母の子に於けるは深重の恩有り。所謂、產生と、慈心をもて乳哺すると、洗拭し將養すると、其れをして長大ならしむると、種種の資身衆具を供給すると、世間の所有ゆる儀式を敎示すると。心に常に離苦得樂せしめんと欲へると、曾つて暫くも捨つること無く影の形に隨ふが如くなるとなり。是の故に父母をば應に深く敬重し禮拜し供養し、敬愛の心を以つて親近して住すべし。若し諸の有情、父母を敬愛し、親近して住せば、父母は其の深心に於いて慈愍し、無益の事を除き、有益の事を授け、衆惡を制止し、衆善を勸修して、其れが爲めに貞良なる妻室を娉娶し、時有つては珍寶財穀を賜與し、世間の天人は咸共に稱歎し恭敬供養して、親近加護して衰惱無らしむ。是の故に有情は其の父母に於いて應に深く尊重し禮拜供養し、敬愛の心を以つて親近して住すべし」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

諸の樂福有る人は　應に父母を尊重し　禮拜し供養を修し　敬愛し親近して居すべし　世間聰

(九六)　父母には供養すべし。

しめんと欲し、曾つて暫くも捨くこと無く影の形に隨ふが如くなす。父母の子に於ける旣に是くの如きもの有り。所說の深恩をば當に云何んが報ぜんや。若し彼の父母、佛法僧に於いて淸淨の信無くんば、其の子は方便をもて示現し勸導し、讃勵し慶慰して淨信を生ぜしむべし。若し彼の父母、淸淨戒無くんば、其の子は方便をもて示現し勸導し讃勵し慶慰して、其れをして淸淨戒を受持せしめよ。若し彼の父母、多聞有ること無くんば、其の子は方便をもて、示現し勸導し讃勵し慶慰して其れをして諸佛の正法を聽聞せしめよ。若し彼の父母、性として慳貪、布施を樂はずんば、其の子は方便をもて、示現し勸導し讃勵し慶慰して、布施を行ぜしめよ　若し彼の父母、性として闇鈍にして勝慧有ること無くば、其の子は方便して、示現し勸導し讃勵し慶慰して、勝慧を修せしめよ。其の子として是くの如くならば、乃ち眞實に父母の恩に報ひたりと名くるなり」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

二の補特伽羅あり　恩深重にして報ひ難し　所謂父と及び母となり　能く世間に生長せしめたまふ　假使ひ兩肩を以つて　壽盡くるまで父母を荷ひ　常に供養恭敬したりとも　猶ほ未だ恩を報ひたりと爲さず　父母に世間に於ける　能く生育し敎導し　慈心をもて利樂せんことを求め　彼の影の形に隨ふが如くせり　若し父母先きに　信と戒と聞と捨と慧と無くんば　子は其れをして修習せしめよ　眞實の報恩とは名くるなり　恭敬して所須を給するは　唯現世の安樂なり　信戒等を修せしむれば　究竟して涅槃を證せん。

（九五）吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。世に二種の無欺誑法有り。云何なるか二と爲すや。謂く業と智となり。若し諸の有情、已に諸業を集めば、其の異熟果は若し未だ現前せずとも終に盡滅せず。若し諸の有情、已に諸の智を生ぜば一切の煩惱は若し未だ永除せずとも終に捨離せず。是くの如きを名けて世に二種の無欺誑法有りと爲す」と。爾の時、世尊、重ねて

（九五）業智と無欺誑。

生るべし　諸の智慧有らん人は　應に淨戒を堅持して　人の信施を受くる勿れ　而も尸羅を毀犯するに於いておや。

(九三)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。世に二種の補特伽羅有りて、惡趣たる地獄の惡不善法を攝受し增益す。云何なるか二種の補特伽羅なりや。一には一類の補特伽羅は淨戒を毀犯し、實に沙門に非ずして自ら沙門なりと稱し、實に梵行に非ざるを自ら梵行なりと稱し、內朽ちて順流すること、穢れたる蝸螺貝音狗行の如し。已れが惡は覆藏し、詐つて自が善を現す。朽ちたる隧級の復用ゆる所無きが如し。唯惡趣を增すのみ。二には一類の補特伽羅は、具淨戒に於いて毀犯する所無く、精進し修行して淸白なる梵行あり。有德の苾芻を、諸の無根を以つて非梵行法なりと誹謗し毀辱して威光を失はしむ。是くの如き二種の補特伽羅は惡趣たる地獄の惡不善法を攝受し增益するものなり」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

二の補特伽羅は　惡趣の業を生長す　謂く淨戒を毀犯すると　及び賢良を誹謗するとなり　是くの如き二種の人は　倶に名けて下賤と爲す　現在の人には鄙(いやし)められ　苦を受くるは當來に在り　是の故に諸の苾芻よ　常に應に不放逸にして　淸淨戒を受持し　他人を毀謗すること勿れ。

(九四)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。世に二種の補特伽羅有り。恩深くして報じ難し。云何なるか二と爲すや。所謂、父母なり。假使ひ人有り、一は父を肩荷し、一は母を肩擔して、其の壽量の盡くるまで曾つて暫くも捨つること無く、衣食を供給し、病緣には醫藥せんとも、種種の所須は猶ほ未だ父母の深恩に報ゆること能はざるがごとし。所以は何ん。父母の子に於ける恩は極めて深重なり。所謂、產生じ慈心をもて乳哺し、洗拭して將つて養ひ、其れをして長大ならしめ、種種の資身衆具を供給し、世間の所有ゆる儀式を敎示し、心より常に離苦得樂せ

(九三)　破戒と謗他。

(九四)　父母の恩は報じ難し。

しと爲す。一には鬚髪を剃ること、二には常に乞求することなり。所以は何ん。世間より怨なりとして嫌はるればなり。呪詛に興ずる者は是の願言を作さん。願くは彼れは貧窮なれば鬚髪を剃除して故き弊衣を服し、手には瓦器を持ち、家より家に至つて乞を行じて自ら活くるものなりと。諸の淨信有る善男子等は此の法を受持して出家せる者は王賊爲るに非ず、債主の怖畏に逼切せられて恐れて活きざるに非ず、而も居家を捨てたるは、但、生老病死愁歎憂苦熱惱等の法を超度せんが爲めなり。但、純ら大苦蘊を滅除せんが爲めなり。我が諸の弟子は是くの如き事を求めて正信にして出家し、自他を利せん爲めに此の法を受持せり、或は是の如きもの有り、出家し已つて未だ幾ばく時をも經ざるに則ち寛慢・放逸・懈怠し、下劣なることに精進し、正念を忘失し、正知有ること無く、心亂れて定らず、諸根を縱任ままにし、多欲にして貪著し、心に瞋恚を懷き、愚鈍にして無知、諸欲に耽染し、虛空なることを思惟し、諸の禁戒を毀る。實に沙門に非ずして自ら沙門なりと稱し、實に梵行に非ずして自ら梵行なりと稱す。內朽ちて流れに順ふは、穢れたる蝸螺貝音狗行の如し。己が惡は覆藏して詐つて自善を現じ、或は種種なる惡不善法に就く。譬へば人有つて闇みより闇みに入り、坑より坑に墮ち、怨より怨に至るが如し。我れ是くの如き癡なる出家人も亦復是くの如しと說く。又木有らんに兩頭は火燃し、中には糞穢を塗り、若しは聚落及び空閑に在らんに、皆復用ゆること無きが如し。我れ是くの如き癡なる出家人も亦復是くの如しと說く。在家の法すら失へり、復沙門にも非らざるなり。出世間に皆勝分無きなり」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

出家して戒を破らば　二俱に成ずる所無し　謂く在家の儀を失し　及び沙門の法を壞る　寧ろ熱せる鐵丸を呑み　洋銅を口に灌ぐとも　人の信施を受けざれ　而も尸羅を毀犯するに於いておや　諸の尸羅を毀犯して　悔ひ無く慚愧無く　多く人の信施を受くれば　定んで當に地獄に

しく生死に處らしむ　此世と他世とを　高下趣に往還す　最初には無明有り　最後には慚愧無くして　諸の惡法を生長し　衆の惡趣の中に墮つ　かるが故に應に精進して　貪愛愚癡を離れ智慧の明を發起して　生死の苦本を斷ずべし。

（九一）吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし　一切如來應正等覺は世間を憐愍して世に出興し、二法を永斷し除捨せんと欲するが爲めに、賢聖の無上法輪を轉ず。一切世間の所有ゆる沙門、或は婆羅門、天魔梵等よ、曾しより未だ能く如法に轉ずる者有らざるなり。云何なるが二法なりや。一には無明。二には有愛なり。一切如來應正等覺は世間を憐愍して世に出興す。皆此の二を永斷し除捨せんが爲めなり。賢聖の無上法輪を轉じ、廣說乃至。曾しより未だ能く如法に轉ずる者有らざるなり。若し能く一切の所有ゆる無明及び諸の有愛を永斷し除捨し、其れをして永く盡して遺餘有ること無からしめば、便ち能く一切の煩惱、諸の雜染法を永斷せるなり。是れ則ち名けて諸の坑塹を出で、諸の垣墻を越え、諸の關鍵を破り、[五]伊師迦を摧けるなり。是れ眞の賢聖なり。是れ正法幢なり。是れ大沙門なり。是れ婆羅門なり。是れ眞の聰慧なり。是れ眞の沐浴なり。是れ眞の智者なり。是れ眞の調順至調順地なり世の福田と名く」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

無上正等覺　商主世間尊　大雄大丈夫　衆の毒箭を拔く者が　諸の世間を哀愍するは　二法を斷除せんが爲めなり　謂く無明と有愛となり　無上法輪を轉ず　是れ苦なり是れ苦の因なり　是れ衆苦の永滅なり　是の八支聖道は　苦を滅して涅槃に趣く　智者は斯の法を聞きて　信解し等しく堅牢なり　諸法の正眞に達して　無明と有愛とを斷ず　無明と有愛とを除けば　諸の雜染皆滅す　至善調順地は　世の良福田と名く。

（九二）吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。二の苦なる事有り、最も忍び難

（九〇）無明と有愛。

【五】伊師迦。Isika 矢を作るに用ゆる堅實な莖のこと。又は王舍城に近き高大な山の名。この山は堅硬の岩石から成つてゐる。堅硬で摧破されないことを喩へるに用ゆ。

（九二）渴愛と乞求。

頌を說いて曰く。

修學勝利の人は　佛に依つて梵行を修す　慧を其の上首と爲す　及び解脫堅牢には　念最も尊勝に居す　二果は隨つて一を證せん　謂く現法涅槃か　及び永不還果なり　慧を上首と爲すに由り　貪は其の心を擾さず　色等の緣の　相貌に隨つて生ずる所の識無し　學勝利圓滿なれば　勝定上慧を生じ　生老死の邊を盡して　有餘依界を證す　かるが故に汝等苾芻よ　應に勤めて戒定を修し　微妙の勝慧を生じて　生老病死を盡くすべし　我が法律の中に住し　能く放逸すること無き者は　定んで魔軍力を壞して　永く衆苦の邊を盡くさん。

(九〇)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。一切世間の惡不善の法は皆無明を以つて其の前導と爲して生長することを得。無慚愧を以つて、其の後助と爲して損減せざるなり。所以は何ん。諸趣の生老病死愁歎憂苦熱惱等の法を生ずること有るは、一切皆無明を用つて根と爲して生長することを得。既に生長し已らば之れに依つて復、能く一切惡不善法を生起す。惡法既に生ずるは無慚愧に由り、都べて悔變すること無し。悔變すること無きが故に損減せず。一切世間の善清淨法は皆慧明を以つて其の前導と爲して生長することを得。慚と愧とを以つて其の後助と爲して損減せざるなり。所以は何ん。明は其の前に處し、慚愧は後へと爲して能く永く諸趣の生老病死を生ずること有るを斷滅し、能く一切の愁歎憂苦熱惱等の法を超え、能く如理を觸し、能く甘露を得、能く涅槃を證す。是の故に汝等、應に是くの如く學すべし。我れ當に云何んが永く無明を斷じ慧明を發起し、永く一切の諸趣に生老病死を生ずること有ることを斷じて、永く一切の愁歎憂苦熱惱等の法を超え、如理を觸し、甘露を得、涅槃を證せんと。汝等苾芻よ應に是くの如く學すべし」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

此世及び後生の　生老病死等と　貪愛等の煩惱とは　皆無明を根と爲す　無明は大愚たり　久

(九一) 無明と慧明。

の不忍不信害恨等の心を發生せじ。所以は何ん。能く他の罵詈等は彼れに於いては罪有れども、己れに於いては損ずること無しと、照見するを以つてなり。諸の聖なる弟子の正しく是くの如き心解脫を證する者は、若し他のものの讃美恭敬禮拜供養等をせん時にも、此の緣に由つて種種の歡喜踊躍悅豫等の心を發生せじ。所以は何ん。能く他の讃美等は、彼に於いては福有れども己れに於いては益なしと照見するを以つてなり。若し能く是くの如くならば世法に於いて心平等・無慼無欣・安隱自在を得と名く。是の故に汝等、應に是くの如く學すべし。我れ當に云何んが尸羅に依住して奢摩他・毘鉢舍那を修すべきやと。汝等、苾芻よ、應に是くの如く學すべし」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

淨尸羅に住するに依つて　無罪止觀を修す　根と意とを密護して　甘露涅槃を證す　止を修すれば心をして調はしむ　心調へば貪欲を離る　欲を離るれば解脫を證し　解脫を證すれば心平かなり　觀を修すれば慧をして明らかならしむ　慧明かなれば癡闇滅す　闇滅すれば解脫を證し　脫を證すれば心平等なり　かるが故に汝等苾芻よ　精進して放逸なる勿れ　常に尸羅に依住して　無罪止觀を修せよ。

(八九)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。如來の所に於いて修學勝利ならんには梵行を修行せよ。慧を上首と爲す。解脫堅固には念最も尊勝たり。若し修學勝利を成就すること有らんには如來の所に於いて梵行を修行せよ。慧を上首と爲す。解脫堅固には念最も尊勝たり。彼れは終に色貪に味著することを爲して其の心を纒擾せず。亦復、聲香味觸法貪に味著することを爲して其の心を纒擾せず。心貪の爲めに纒擾せられざるが故に、色の相貌に味著する識に隨ふこと無く、聲香味觸法の相貌に味著する識に隨ふこと無ければ、二果の中に於いて隨つて一果を證す。謂く現法に於いて有餘依般涅槃界、或は不還果を證す」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して

(八九)　慧と解脫。

ること無くして住し　無上菩提と　淸涼涅槃等を證す。

吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。諸の婆羅門・長者・居士・刹帝利等は多くの所作有り。謂く汝等に如法の衣服・飲食・臥具・病緣・醫藥・房舍・資具を施す。汝等苾芻には、多くの所作有り。謂く能く彼れの爲めに正法を宣說す。初中後善にして文義巧妙に純滿淸白なる梵行の法なり。此れに由つて俱に能く生老病死の法、愁歎憂苦熱惱の法を解脫す。汝等と彼とは(八七)力輪と法輪とをもつて、展轉相依り、如來の所に於いて梵行を勤修し、速かに無上般涅槃城に至らん」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

出家と居家と　展轉して互に相ひ依り　力と法との二輪に由り　速かに涅槃樂に至らん　出家は在俗に依つて　如法に資具を得　在俗は出家に依つて　微妙の正法を獲　二衆互に相ひ依り
人天の快樂を受け　生老病死を度り　淸涼涅槃に至る。

(八八)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。謂く修行者は尸羅に依住して能く二法を修す。云何なるか二と爲すや。謂く奢摩他・毘鉢舍那なり。謂く修行者は尸羅に依住して奢摩他を修す。既に是くの如き奢摩他を修し已つて、心を修め滿たしむ。何事の爲めの故に其の心を修習するや。心を修習する者は貪を斷ぜんが爲めの故なり。諸の修行者は尸羅に依住し、精勤して毘鉢舍那を修習す。既に是くの如き毘鉢舍那を修し已つて、慧を修め滿たしむ。何事の爲めの故に其の慧を修習するや。慧を修習する者は癡を斷ぜんが爲めの故なり。貪染汚心は解脫せざらしむ。癡染汚慧は明照ならざらしむ。若し永く貪を離るれば、心善解脫なり。若し永く癡を離るれば、慧善解脫なり。若し是くの如き二種の解脫に於いて已に能く正しく知見して觸證を得ば、我れ彼れは心善解脫・慧善解脫の爲めに、獨一にして修習せる最上なる丈夫なりと說く。諸の聖なる弟子の正しく是くの如き心解脫を證する者は、若し他のものの罵詈訶責輕弄毀辱等をせん時にも、此の緣に由つて種種

(八七)　力輪と法輪。
(八八)　奢摩他と毘鉢舍那。

るに由り　能く尊卑を了別す　牛羊等の　諸の雜穢の事を行ずるが如くならず　諸の智慧有る
人は　二の白法を成就し　常に人天趣を守り　終に三途に墮ちされ。

(八六)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。我れ如來應正等覺未だ成佛せざる時、菩薩の位に居し、多分に二種の尋思に安住することを爲せり。云何なるか二と爲すや。一には如來、菩薩の位に居し、多分に不害尋思に安住し欣喜悅樂せり。是くの如き不害尋思に安住して欣喜悅樂するを、是れを第一多分尋思と名く。是くの如き行迹を修習することに住するに由り、諸の有情に於いて都べて損害すること無し。此の尋思に由つて無量圓滿梵住を證得す。二には如來菩薩の位に居し、多分に永斷尋思に安住して欣喜悅樂せり。是くの如き永斷尋思に安住して欣喜悅樂するを、是れを第二多分尋思と名く。是くの如き行迹を修習することに住するに由り、不善法に於いて能く正しく永斷す。此の尋思に由つて善根の圓滿せる勝道を證得す。我れ爾の時に於いて、是くの如き二種の尋思に安住して、精進勇猛なり。乃至。自身の一切の血肉も悉く皆枯渇せり。唯餘の身肉骨筋皮のみ纒裹せり。亦放逸ならず乃至、未知未見未得未解未證には所應の知見得解證法をもつてし、其の中間に於いて不放逸に住し、精進勇猛にして曾つて懈廢すること無し。不放逸に由つて精進勇猛なれば懈廢すること無きが故に、速かに無上正等菩提を證し、速かに無上清涼涅槃を證し、速かに無上一切智見を證す。是の故に汝等應に是くの如く學すべし。我れ當に云何が不害欣喜悅樂多分尋思に安住し、永斷欣喜悅樂多分尋思に安住すべきやと。汝等苾芻よ。應に是くの如く學すべし」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

　佛菩薩たりし時は　多く二法に安住せり　謂く不害と永斷とに　欣喜悅樂し思へるなり　諸の有情を害せず　慈悲喜捨を修し　無量の梵住を證して　圓滿し難しと爲さず　不善法と　一切の煩惱纒とを永斷し　諸の善根と　圓滿なる殊勝の道を證得し　常に精進勇猛にして　放逸す

(八六)不害尋思と永斷尋思。

は是れ聖尋求なり。汝等苾芻よ、應に是くの如く學すべし」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

一切の有情の類に　二種の尋求有り　更に第三有ること無し　謂く聖と非聖となり　老と病と死と　愁と染との法の過患を知らず　希求して深く愛著す　非聖尋求と名く　此れ衆苦を增長して　出離を未だ期と爲さず　生より復生に至り　或は高く或は下きに趣く　善く老と病と死と　愁と染との法の過患を知り　彼の寂滅を希求するは　眞の聖尋求と名く　此れ衆苦を損減して　速かに涅槃を證し　永く安樂淸凉にして　常に漏無く怖無し　彼の非聖尋求は　諸佛に呵毀せらる　是れ生死の根本なり　智者は當に遠離すべし　此の眞聖尋求は、諸佛に稱讚せらる　是れ涅槃に趣くの道なり　智有る者は應に修すべし。

重ねて前經を攝して嗢拕南して曰く。

爲通達と律儀と　厭と知と不淨界と　經と覺悟と宴坐と　愧と所作と尋求となり。

[八五]吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。略して二種の白淨善法有りて能く世間を護る。云何なるを二と爲すや。謂く慚と愧となり。若し此の二の白淨善法無くんば、世間の有情は皆穢雜と成ること猶ほ牛羊鷄猪狗等の如し。父母兄弟姉妹を識らず。軌範親教導師似導師等を識らず。此の二の白淨善法有るに由つて、世間の有情は諸の穢雜を離れ、牛羊鷄猪狗等の如くに非ずして、父母兄弟姉妹を了知し、軌範親教導師似導師等を了知す。是の故に汝等、應に是くの如く學すべし。我れ當に云何んが是くの如き二種の最勝第一慚愧白淨善法を成就すべきと。汝等苾芻よ。應に是くの如く學すべし」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

二の白淨善法は　能く諸の世間を護り　人天を失はざらしむ　謂く慚と及び愧となり　若し此の二法無くんば　都べて尊卑を識らず　穢雜にして牛羊、鷄猪狗等の類に似たり　此の二法有

(八五) 慚と愧。

是くの如き染法は是れ諸の有情の生死の苦の本なり。愚夫異生は此に於いて守護し染愛し耽著す。此れに由つて生死を解脱すること能はず。故に染法と名く。若し此に於いて愛樂し尋求すること有らば、當に知るべし、是れを非聖尋求と名くることを。是くの如き尋求は如來終に稱揚し讃歎せず。唯之れを勸導して捨離することを知らしむ。何に緣つてか是くの如きは非聖尋求にして、如來終に稱揚し讃歎せずして、捨離することを知らしむるや。此の尋求に由るは非賢聖法なり。非能出離なり。非趣涅槃なり。非厭非離なり。非滅非靜なり。非得通慧なり。非成等覺なり。非證涅槃なり。此の尋求に由つて能く一切生老病死愁歎憂苦諸の熱惱法を引く。是の故に是く如きは非聖尋求にして、如來終に稱揚し讃歎せず、唯之れを勸導して捨離することを知らしむるなり。云何なるか名けて聖尋求と爲すや。謂く一類有り。已に老法有らば、能く自ら我れに老法有りと了知し、能く如實に老法の過患を知り、畢竟して無老は無上安樂涅槃なりと。尋求す。已に病法有らば能く自ら我れに病法有りと了知し、能く如實に死法の過患を知り、畢竟して無死は無上安樂涅槃なりと尋求す。已に愁法有らば能く自ら我れに愁法有りと了知し、能く如實に愁法の過患を知り、畢竟して無愁は無上安樂涅槃なりと尋求す。已に染法有らば能く自ら我れに染法有りと了知し、能く如實に染法の過患を知り、畢竟して無染は無上安樂涅槃なりと尋求す。是くの如きを名けて是れ聖尋求なりと爲す。是くの如き尋求をば一切の如來は稱揚し讃歎す。何に緣つてか是くの如きは是れ聖尋求にして一切如來が稱揚し讃歎したまふや。此の尋求に由るは是れ賢聖法なり。能く永く出離し、能く涅槃に趣き、能く能離を厭ひ、能く能靜を滅し、能く通慧を得、能く等覺を成じ、能く涅槃を證す。此の尋求に由つて一切の生死病死愁歎憂苦生死熱惱を超ゆ。是の故に是くの如きは是れ聖尋求にして一切の如來稱揚し讃歎す。是くの如きを名けて尋求と爲す。二有つて更に第三無し。是の故に汝等應に是くの如く學すべし。我れ當に云何が是くの如き非聖尋求の修行を遠離すべきやと。是の如き

本生及び方廣と未曾有法となり。是くの如き法に於いて受誦し聽習して、其をして通利ならしめ、解釋を宣暢せん。是れを聽說と名く。是くの如きを名けて諸の出家には略して二種ありと爲す。應に作すべき所の事をば若し能く正しく作さば未だ得ざる所を得、未だ觸せざる所を觸し、未だ證せざる所を證して能く愁歎を超え、能く憂苦を滅し、能く如理に觸し、能く甘露を得、能く涅槃を證せん」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

出家に二種有りて　正しく所應の事を作す　謂く靜慮と聽說となり　速かに涅槃を證す　靜慮は慧をもつて因と爲す　慧は必ず靜慮に由る　靜慮有り慧有らば　速かに涅槃を證す　百千の羝羊僧は　慧無くして靜慮を修す　設ひ百千歲を經ても　一も涅槃を得ること無し　智慧を勤修する人は　聽法と說法とを樂しむ　念を斂め須臾の頃に　能く速かに涅槃を證す。

(八四)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。尋求に二有りて更に第三無し。云何んが二と爲すや。謂く聖尋求と非聖尋求となり。云何んが名けて非聖尋求と爲すや。謂く一類有り、已に老法有りて老法を尋求す。已に病法有りて病法を尋求す。已に死法有りて死法を尋求す。已に愁法有りて愁法を尋求す。已に染法有りて染法を尋求す。云何なるか老法なりや。所謂、妻子奴婢僕使、象馬牛羊、鷄猪、田宅、金銀財穀なり。是れを老法と名く。是くの如き老法は是れ諸の有情の生死の苦の本なり。愚夫異生は此れに於いて守護し、染愛耽著す。此れに由つて生死を解脫すること能はず。故に老法と名く。云何なるか病法なるや。所謂、妻子奴婢僕使、廣說乃至、此れ由つて生死を解脫すること能はず。故に病法と名く。云何なるか死法なるや。所謂、妻子奴婢僕使、廣說乃至。此れに由つて生死を解脫すること能はず。故に死法と名く。云何なるか愁法なりや。所謂、妻子奴婢僕使、廣說乃至。此れに由つて生死を解脫すること能はず。故に愁法と名く。云何なるか染法なりや。所謂、妻子奴婢僕使、象馬牛羊鷄猪、田宅金銀財穀なり。是れを染法と名く。

(八四)　聖尋求と非聖尋求。

定にし　正念靜慮を具し　所執無く解脱せば　永く諸有の貪を盡さん　常に樂つて放逸せず　放逸を見ては怖を生じ　諸見をば能く永斷せば　速かに般涅槃を證せん。

(八二)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。若し苾芻有り、無慚無愧ならん。彼の人は決定して通達すること能はず、遍知すること能はず、等覺を證せず、涅槃を證せず、無上安樂を證得すること能はず。若し苾芻有り、有慚有愧ならん。彼の人は決定して能く通達を得、能く遍知を得、能く等覺を證し、能く涅槃を證し、能く究竟して無上安樂を證す」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

無慚無愧の者は　懈怠にして精進せず　多く惛沈し睡眠して　結盡を去ること遠しと爲す　有慚有愧の者は　常に放逸有ること無く　靜慮深定を樂ふ　涅槃を去ること遙かならず　彼れは能く衆結　及び生老病死を斷じ速かに三菩提を證して　無上安樂を得ん。

(八三)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。諸の出家には略して二種有り。應に作すべき所の事を若し能く正しく作し、未だ得ざる所を得、未だ觸せざる所を觸し、未だ證せざる所を證して能く愁歎を超え、能く憂苦を滅し、能く如理に觸し、能く甘露を得、能く涅槃を證せん。云何なるか二と爲すや。一には靜慮。二には聽說なり。云何なるか靜慮なるや。謂く諸の苾芻よ。諸の欲惡不善法を遠離し、有尋有伺、離生喜樂を具足し安住せば、最初の靜慮なり。尋伺靜息にして內淨一趣ならば無尋無伺にして定に喜樂を生じ具足し安住せば、第二の靜慮なり。喜を離れ捨に住して正念正知にして身に快樂を受くるは、衆聖の說く所。捨有り念有りて快樂に安住して具足し安住するは第三の靜慮なり。苦を斷じ樂を斷じ、先づ憂喜を滅して不苦不樂にて捨念清淨にして具足し安住すれば第四の靜慮なり。云何なるか聽說なるや。謂く諸の苾芻よ。佛の所說に於いて初中後善にして文義巧妙、純滿清白なる梵行の法なり。所謂、契經・應頌・記別・伽他・自說・本事・

(八二)　無慚無愧。

(八三)　靜慮と聽法。

卷の第四

(七九)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。若し苾芻有り、睡眠を減省し、具さに念して正知せば心常に安住して悅豫淸淨なり。諸の善法に於いて善く時宜に觀じて正しく修習せよ。是くの如く苾芻よ。睡眠を減省し、具に念して正知せば心常に安住にして悅豫淸淨なり。諸の善法に於いて善く時宜に觀じて正しく修習せば二果の中に於いて隨つて一果を證せん。謂く現法に於いて、(八〇)或は有餘依涅槃界、或は不還果を證せん」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

覺悟して能く法を聞き　修行せば勝果を得ん　睡眠に耽著せば　都べて所得有ること無けん
睡眠を減省する者は　具さに正念し正知し　善く其の心に安住して　常に悅豫淸淨ならん　諸の善法の中に於いて　時宜を知つて修習せば　能く究竟して　生老病死の苦を超越せん　是の故に應に　睡眠を減省する法を勤修すべし　常に委しく觀じて寂靜ならば　二果を得んこと疑ひ無し　或は「[一]下分結を斷じて　不還果を證得し　或は[二]上分結を斷じて　生老病死を度せん。

(八一)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。若し苾芻有り、空閑處に於いて常に宴坐すること樂ひ、內心に[三]奢摩他定を勤修して靜慮より離れず。明淨なる[四]毘鉢舍那を成就し、身心を守護して散亂すること無からしめ、諸の善法に於いて修習して厭ふこと無ければ、是くの如き苾芻は二果の中に於いて、我れ定んで能く一果を隨證すべしと說く。謂く現法に於いて或は有餘依涅槃、或は不還果を證せん」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

空閑を樂つて宴坐し　正念正知を具し　善く其の心を安住せば　虛妄分別を離る　善く自心を防護し　速かに無明の闇　及び諸欲煩惱を斷せば　憂悔無くして眞に歸せん　常に其の心を寂

(七九)　睡眠を減省せよ。

(八〇)　隨證有餘涅槃或は不還果。

【一】　下分結とは欲界の結惑をいふ。五結に分つ、貪結、瞋結、身見結、戒取見結、疑結である。
【二】　上分結とは色界、無色界の結惑のこと。五結に分つ。色愛結、無色愛結、掉結、慢結、無明結がそれ。
【三】　奢摩他 Samatha と譯す。諦理に停止して動かざる義。又は妄念を止息する義。
【四】　毘鉢舍那 Vipasyana 觀と譯す。觀智通達して眞如に契會するをいふ。又は智慧の利用は煩惱を貫穿して之れを斷滅せしむることを云ふ。
(八一)　止觀を勤修せよ。

得已つて便ち自ら我が生已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辨じ、後有を受けずと了知して、是の思惟を作さく。世尊よ、彼れが喜樂を爲す諸有ゆる阿賴耶と、恒に常見の爲めに繋縛せらるることとは、有を滅せしめんが故なり。所說の正法は微細にして甚深、難見にして難悟、寂靜勝妙なり。諸の尋思の所行の境界に非ず。是の諸の審諦の慧は一切世間を證る所のものなり。眞實に對治するとは謂く能く憍慢と渇愛と害と阿賴耶とを除滅し、諸の經路を斷じ眞空の性を證るなり。』

諸の貪欲を離れ究竟寂滅涅槃を證得し、是の思惟を作さく。世尊よ。彼れが怖畏を爲す、諸有ゆる阿賴耶と、恒に斷見の爲めに繋縛せらるることとは、業果は失壞すること無きことを知らしめんが故なり。所說の正法は現に應を見る時、易く饒益せらる。智者は内に一切世間を證つて眞實に對治す。謂く能く憍慢と渇愛と害と阿賴耶と除滅し、諸の經路を斷じて眞空の性を證る。諸の貪欲を離れて究竟寂滅涅槃を證る。是くの如きを名けて慧眼有る者は能く正しく觀察すと爲す。是くの如きを名けて二邊に由るが故に諸の天人をして一類は怯劣に、一類は勇猛ならしめ、慧眼有る者は能く正しく觀察せしむ」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

二邊に由つて纏はらる　諸の天人衆をして　一類には怯劣有り　一類には勇猛有り　慧眼有る聲聞は　能く如實に觀察し　能く慢を除きて厭離し　究竟して涅槃を證す　復如實に了知せよ

佛の所說の正法は　能く斷常の見と　及び二愛を滅して餘り無し　慧眼有る龍王は　能く普く法雨を雨し　諸の煩惱の焰を滅し　大淸凉を證せしむ。」

の如く清淨なれば戯論の體無し。有と謂ふ可からず、無と謂ふ可からず。彼れは亦有亦無と謂ふ可からず。彼れは非有非無と謂ふ可からず。唯、不可施設究竟涅槃と爲すと説く可し。是れを無餘依涅槃と名く。苾芻よ當に知るべし。是くの如きを名けて略して二種の涅槃の界有りと爲すなり」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を説いて曰く。

漏盡き心解脱して　最後身を任持するを　有餘涅槃と名く　諸行猶ほ相續すればなり　諸の所受は皆滅し　寂靜にして永く清凉なるを　無餘依涅槃と名く　衆の戯論皆息めばなり　此の二の涅槃界は　最上にして等倫無し　謂く現法も當來も　寂靜にして常に安樂なればなり。

(七八)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。二纒に由るが故に、諸の天人をして一類は怯劣に、一類は勇猛ならしむ。慧眼有る者は能く正しく觀察す。云何なるか二纒。謂く有見纒と無有見纒となり。云何なるか天人の一類の怯劣なるや。謂く有る天人は、愛有り樂有り欣び有り喜び有り。有を滅する爲めの故に正法を説く時、恭敬し耳を攝めて聽受すること能はず。亦復、奉敎心に住すること能はず、隨順すること能はず、如實の見を修して惟、怯劣を生じ、退轉驚怖す。我等、爾の時、當に何をか所有すべきや。我等、爾の時、當に如何が有すべきやと。是くの如きは天人の一類は怯劣なり。云何なるが天人の一類の勇猛なるや。謂く有る天人は怖れ有り厭ひ有り、無有を欣求して彼彼の苦法に逼切せらるが故に、攝受し執著す。是くの如し是くの如し、諸の惡見趣には、是の念を作して言く。我れ若し斷壞すれば隱沒して現ぜずと。爾の時乃ち寂靜微妙なりと名く。是くの如く天人の一類は猛盛なり。云何なるか名けて慧眼有る者は能く正しく觀察すと爲すや。謂く聖なる聲聞は、如實に觀察す。既に觀察し已つて如實ならず而も憍慢を生ず。如實に依らず而も憍慢を生ず。如實に因らず而も憍慢を生ず。如實を恃まず而も憍慢を生ず。如實に見已つて便ち厭背を生ず。既に厭背し已つて便ち能く離欲す。既に離欲し已つて便ち解脱を得。解脱を

(七八) 有見纒と無有見纒。

界に觸れて而も能く厭捨して執著する所無く、愛恚の爲めに其の心を纒繞せられず、愛恚等の結は皆永く斷ずるが故に、彼れは諸の色に於いて見ることを求欲する時、復、眼を以つて諸の色を觀ると雖も而も貪瞋癡等を發起せず。復、眼及び好醜の色有りと雖も而も貪欲無く亦瞋恚無し。所以は何ん。愛恚等の結は皆永く斷ぜるが故なり。彼れは諸の聲に於いて聞かんことを求欲する時、復、耳を以つて諸の聲を聽くと雖も而も貪瞋癡等を發起せず。復、耳及び好醜の聲有りと雖も而も貪欲無く亦瞋恚無し。所以は何ん。愛恚等の結は皆永く斷ぜるが故なり。彼れは諸の香に於いて嗅くことを求欲する時、復、鼻を以つて諸の香を嗅ぐと雖も而も貪瞋癡等を發起せず。復、鼻及び好醜の香有りと雖も而も貪欲無く亦瞋恚無し。所以は何ん。愛恚等の結は皆永く斷ぜるが故なり。彼れは諸味に於いて嘗めんことを求欲する時、復、舌を以つて諸味を嘗むと雖も而も貪瞋癡等を發起せず、復、舌及び好醜の味有りと雖も而も*貪欲無く亦瞋恚無し。所以は何ん。愛恚等の結は皆永く斷ぜるが故なり。彼れは諸の觸に於いて覺ゆることを求欲する時、復、身を以つて諸の觸を覺ゆと雖も而も貪瞋癡等を發起せず。復、身及び好醜の觸有りと雖も而も貪欲無く亦瞋恚無し。所以は何ん。愛恚等の結は皆永く斷ぜるが故なり。彼れは諸法に於いて知らんことを求欲する時、復、意を以つて諸法を知ると雖も而も貪瞋癡等を發起せず、*『復、意及び好醜の法有りと雖も而も貪欲無く亦瞋恚無し。所以は何ん。愛恚等の結は皆永く斷ぜるが故なり。乃至。其の身は相續して世に住して未だ般涅槃せず、常に天人の爲めに瞻仰し禮拜し恭敬供養せらる。是れを有餘依涅槃界と名く。云何なるか名けて無餘依涅槃界と名くるや。謂く諸の苾芻よ。阿羅漢を得て、諸漏已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辨じ、已に重擔を捨て、已に自義を證し、已に有結を盡し、已に正しく解了し、已に善く解脫し、已に遍知を得たり。彼れは今の時に於いて一切の所受、引因無きが故に、復希望せず。皆永く盡滅し、畢竟寂靜、究竟淸涼なれば隱沒して現ぜず。惟淸淨なるに由つて戲論の體無し。是く

※ここより三二八頁五行目の』までは三本宮本聖本によって加へた。正蔵は「校正後序」の終末に附記してある。

は習、若しは多く修習して、能く二法を斷ず。云何なるか二法。若しは修し若しは習ひ、若しは多く修習して能く二法を斷ず。謂く不淨觀と及び慈悲觀となり。能く貪欲と及び瞋恚とを斷ず。所以は何ん。一切の已貪・現貪・當貪は皆淨相なりと作意し思惟するに由る。一切の已瞋・現瞋・當瞋は皆怨相なりと作意し思惟するに由る。斷は所有ゆる貪欲を一切已斷し現斷し當斷するは、皆不淨觀を作意し修するに由る。所有ゆる瞋恚を一切已斷し現斷し當斷するは、皆慈悲觀を作意し修するに由る。不淨觀に於いて若しは修し若しは習ひ若しは多く修習すれば決定して能く一切の貪欲を斷ず。慈悲觀に於いて若しは修し若しは習ひ若しは多く修習すれば決定して能く一切の瞋恚を斷ず。若し決定して貪欲を斷ぜんと欲せば、當に勤めて精進して不淨觀を修すべし。若し決定して瞋恚を斷ぜんと欲せば、當に勤めて精進して慈悲觀を修すべし。不淨觀を修せば貪欲にして斷ずる能はざること有ること無し。慈悲觀を修せば瞋恚にして斷ずる能はざること無し。是くの如きを名けて二種の法有り、若しは修し、若しは習ひ、若しは多く修習して能く二法を斷ずと爲す」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

　修と習と多修習して　二法をもつて二法を斷ず　謂く不淨と慈悲とにて　貪欲と瞋恚とを斷ず
　是の故に有智の者は　當に觀じて自ら饒益し　不淨と慈悲とを修して　貪欲と瞋恚とを斷ずべし。

(七七)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。其の涅槃界は略して二種有り。云何なるをか二と爲すや。一には有餘依涅槃界。二には無餘依涅槃界なり。云何なるを名けて有餘依涅槃界と爲すや。謂く諸の苾芻よ。阿羅漢を得て、諸漏已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辨じ、已に重擔を捨し、已に自義を證し、已に有結を盡し、已に正しく解了し、心善く解脫し、已に遍知を得、宿行を緣と爲し、所感の諸根は猶ほ相續して住す。諸根は成ずと雖も現に種種なる好醜の境

(七七) 有餘涅槃と無餘涅槃。

厭背を求むるが爲めに、離欲を求むるが爲めに出家する者は、是れ眞實に如來の所に於いて梵行を修行すと名く。所以は何ん。是の諸の苾芻は厭背の爲めの故に、離欲の爲めの故に出家し已つて便ち能く如實に厭背し離欲せり。既に離欲し已つて便ち解脱を得たり。既に解脱し已つて便ち自ら我か生已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辨じ、後有を受けずと了知す。是くの如く若し厭背の爲めの故に、離欲の爲めの故に出家すること有らん者は是れ眞實に如來の所に於いて梵行を修行すと名く」と。爾の時、世尊、重ねて此義を攝して頌を說いて曰く。

　矯誑と名譽と　利養と及び恭敬との爲めならば　眞に梵行を修するに非ず　是れ虚妄の出家なり　厭背と離欲と　速かに最上義を證せん爲めならば　是れ眞に梵行を修するなり　虚妄の出家には非ざらず。

(七五)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。一切如來應正等覺の所說の法門は略して二種有り。云何なるか二と爲す。一には惡に於いて應に正しく了知す。二には惡に於いて應に深く厭背す。一切如來應正等覺は略して是くの如く二種の法門を說く。所以は何ん。諸の修行者は諸の惡法に於いて應に正しく了知すべし。既に惡法に於いて正しく了知し已らば、便ち能く厭背す。既に厭背し已らば便ち能く離欲す。既に離欲し已らば便ち解脱を得。解脱を得已らば便ち自ら我が生已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辨じ、後有を受けずと了知す。是くの如く行者、永く諸の愛及び衆の結縛を斷ずれば現觀するに倒しまなること無く、正しく苦邊を盡くす」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

　當に知るべし諸の如來　應正等覺者は　衆生を哀愍するが故に　二種の法門を說く　衆惡に於いて正知し　及び厭背し離欲す　心解脱して自在なれば　正しく衆苦の邊を盡くす。

(七六)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。二種の法有り。若しは修、若し

(七五)　惡に於いて應に了智し、應に厭背すべし。

(七六)　不淨觀は貪を斷し。慈悲觀は瞋を斷ず。

矯誑と名譽と　利養と及び恭敬との爲めならば　眞に梵行を修するには非ず　是れ虛妄の出家なり　通達と遍知と　速かに最上義を證せんが爲めならば　是れ眞に梵行を修するものなり　虛妄の出家に非らず。

吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。若し苾芻有り、諸の衆生を矯誑せんと欲するが爲めの故に、名譽を求めて遠くまで聞かれんが爲めの故に、利養と及び恭敬とを求むるが爲めの故に、出家する者は眞實に如來の所に於いて梵行を修行すと名けず。若し苾芻有り、律儀の爲めの故に、正斷の爲めの故に出家する者は、是れを眞實に如來の所に於いて梵行を修行すと名く。所以は何ん。是の諸の苾芻は律儀の爲めの故に、正斷の爲めの故に出家し已つて便ち能く如實に六根を守護し、禁戒を虧かず、及び能く速かに最上正斷を證す。既に能く如實に六根を守護し、禁戒を虧かず及び能く速かに最上正斷を證せば、便ち能く如實に應に斷ずべき所は斷じ、應に修すべき所は修し、應に證すべき所は證して、既に能く如實に斷修證し已つて、便ち自ら我が生已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辨し、後有を受けずと了知す。是くの如く若し律儀の爲の故に、正斷の爲めの故に出家すること有らん者は、是れを眞實に如來の所に於いて梵行を修行すと名く」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

矯誑と名譽と　利養と恭敬との爲めならば　眞に梵行を修するには非ず　是れ虛妄の出家なり
正斷と律儀と　速かに最上義を證せん爲めならば　是れ眞に梵行を修するなり　虛妄の出家には非らず。

吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。若し苾芻有り、諸の衆生を矯誑せんと欲するが爲めの故に、名譽を求めて遠くまで聞かれんが爲めの故に、利養と及び恭敬とを求むるが爲めの故に出家する者は、眞實に如來の所に於いて梵行を修行すとは名けず。若し苾芻有り、

けて二の妙智有り、應に正しく尋思し應に善く稱量し應に審かに觀察すべしと爲す。能く未得を得、能く未觸を觸し、能く未證を證し、能く愁歎を超へ、能く憂苦を滅し、能く正理を會し、能く甘露を獲、能く涅槃を證するなり」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

二種の妙智有り　智者は應に尋思すべし　謂く世出世間なり　能く正しく衆苦を盡くす　應に世間智を觀ずべし　怖畏の想を發生せよ　都べて執受有ること無ければ　展轉して涅槃を證せん　應に出世智を觀ずべし　珍寶の想を發生せよ　此れに由つて歡喜を生じ　便ち身輕安を得ん　輕安の故に悅樂す　悅樂の故に心定まる　心定を得るに由るが故に　便ち能く覺支を生ず　覺支をもて聖諦を觀じ　永く諸の疑網を斷ず　疑ひ無く所取無ければ　永く衆苦の邊より脫る

重ねて前經を攝して嗢拕南に曰く。

二根と二焦惱と　二行と二戒見と　二作と及び不作と　二智に二種有り。

(七四)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。若し苾芻有り、諸の衆生を矯誑せんと欲するが爲めの故に、名譽を求めて遠くまで聞かれんが爲めの故に、利養及び恭敬を求めんが爲めの故に、出家する者は眞實に如來の所に於いて梵行を修行すとは名けず。若し苾芻有り、通達の爲めの故に、遍知の爲めの故に出家する者は是れを眞實に如來の所に於いて梵行を修行すと名く。所以は何ん。是の諸の苾芻は通達の爲めの故に、遍知の爲めの故に出家し已れり。便ち能く實の如く通ずる所は通達し、知る所は遍知し、既に能く實の如く斷ずる所は應に斷じ、修する所は應に修し、證する所は應に證し、既に能く如實に斷修證し已れり。便ち自ら我が生已に盡き、梵行已に立ち所作已に辦じ、後有を受けずと了知せり。是くの如く若し通達せんが爲めの故に、遍知せんが爲めの故に、出家すること有らん者は是れを眞實に如來の所に於いて梵行を修行すと名く」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

(七四)　虛妄の出家と眞の出家。三番あり。

常性なり、苦性なり、病性なり、癰性なり、箭性なり、惱性なり、害性なり、怖性なり、熱性なり、壞性なり、滅性なり、災性なり、横性なり、疫癘有る性なり、虚性なり、僞性なり、空性なり、妄性なり、實我無き性なり、保信し難き性なりと了知し、是くの如き等の諸法の性の中に於いて如實に了知し、智見通慧し、現觀して等覺し、周遍照了なるを出世智と名く。諸の聖なる弟子よ。此の所說の出世智の中に於いて、應に正しく尋思し、應に善く稱量し、應に審かに觀察すべし。此の出世智を正しく修習する時、能く彼の生法の有情をして永く生を脱せしむること爲すや不や。能く彼の老法の有情をして永く老を脱せしむることを爲すや不やと。病法・死法・愁法・歎法・憂法・苦法・不安隱法も亦復是くの如し。既に審かに察し已つて能く正しく了知せよ。此の出世智を正しく修習する時、定んで能く彼の生法の有情をして永く生より脱せしむ。定んで能く彼の老法の有情をして永く老より脱せしむ。病法・死法・愁法・歎法・憂法・苦法・不安隱法も亦復是くの如し。所以は何ん。此出世智は是賢聖法なり、是れ能永出なり。是れ趣涅槃なり。是れ能永厭なり。是れ能永離なり。是れ能永滅なり。是れ能永寂なり、是れ眞通慧なり、是れ正等覺なり。能く涅槃を證す。生法を感ずるものに非ず、老法・病法・死法・愁法・歎法・憂法・苦法・不安隱法を感ずるものに非ず。彼れは是くの如きに於いて尋思し稱量し審かに觀察する時、出世法に於いて珍寶の想を生じ、世間法に於いては下賤の想を生ず。出世に於いて珍寶を生ずるを以つての故に便ち歡喜を生ず。歡喜を生ずるが故に其の心安適なり。心安適なるが故に身輕安を得。身輕安なるが故に便ち悅樂を受く。悅樂を受くるが故に心寂定を得。心寂定なるが故に能く實に知見す。實知見するが故に能く深く厭背す。深く厭背するが故に能く正しく欲を離る。正しく離欲するが故に能く解脱を得。解脱を得已つて便ち自ら我が生已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辦じ、後有を受けずと了知す。是れを此の出世智の中に於いて應に正しく尋思し、應に善く稱量し、應に審かに觀察すべしと名く。是くの如くなるを名

び鼻識界に於いても亦復是くの如し。其の舌界に於いて能く正しく了知するなり。此れを舌界と爲す。其の味界及び舌識界に於いても亦復是くの如し。其の身界に於いて能く正しく了知するなり。此れを身界と爲す。其の觸界及び身識界に於いても亦復是くの如し。其の意界に於いて能く正しく了知するなり。此れを意界と爲す。其の法界及び意識界に於いても亦復是くの如し。此の如き世俗法の中に於いて是くの如く是くの如く、如實に了知し、智見通慧し、現觀して等覺し、周遍照了なるを世間智と名く、諸の聖なる弟子よ。此の所説の世間智の中に於いて應に正しく尋思し。應に善く稱量し、應に審かに觀察すべし。此の世間智を正しく修習する時、能く彼の生法の有情をして永く生を脱せしむと爲すや不や。能く彼の老法の有情をして永く老を脱せしむと爲すや不や。病法・死法・愁法・歎法・憂法・苦法・不安隱法も亦復是くの如し。既に審かに察し已り、能く正しく了知せよ。此の世間智を正しく修習する時、彼の生法の有情をして永く生を脱せしむること能はず。彼の老法の有情をして永く老を脱せしむること能はず。病法・死法・愁法・歎法・憂法・苦法・不安隱法も亦復是くの如し。所以は何ん。此の世間智は賢聖の法に非ず、能く永く出づるものに非ず。涅槃に趣くものに非ず、能く永く厭ふものに非ず、能く永く離るゝものに非ず、能く永く滅するものに非ず、能く永く寂するものに非ず、眞の通慧に非ず、正等覺に非ず、涅槃を證せず。是れ生法を感じ、是れ老法・病法・死法・愁法・歎法・憂法・苦法・不安隱法を感ず。彼れは是くの如くして尋思し稱量し審かに觀察する時、世間法に於いて怖畏の想に住し、出世法に於いて安靜想に住し、以つて世間に於いて怖畏を生ずるが故に、都べて執受無し。執受無きが故に渴愛を生ぜず。渴愛せざるが故に便ち自ら內に究竟して涅槃を證す。涅槃を證し已つて、便ち自ら我が生已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辨じ、後有を受けずと了知す。是れを此の世間智の中に於いて應に正しく尋思し、應に善く稱量し、應に審かに觀察すと名く。出世智とは謂く一切蘊界處の中に於いて能く正しく是くの如き諸法は是れ無

語も諸の雜穢なる語も及び餘の無量の惡不善法無し。彼の諸の惡不善法無きが故に後有の業を感じても便ち增長せず。後有の業を感じても增長せざるが故に諸の業は滅盡す。業滅盡するが故に衆苦も滅盡す。苦滅盡するが故に生死の路絕ゆ。此の路絕え已れば便ち自ら、我が生已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辦じ、後有を受けじと了知す。是くの如くなるを名けて二の妙智有りと爲す。應に修して生ぜしむべし。能く未得を得し、能く未觸を觸し、能く未證を證し、能く愁歎を超へ、能く憂苦を滅し、能く正理を會し、能く甘露を獲、能く涅槃を證せよ」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

　二種の妙智有り　應に修習して生ぜしむべし　能く未得等を得す　謂はく法智と類智となり
　若し法智生ずる時は　遍く有爲法を知り　便ち能く後有の　因をして不生不增ならしむ　若し類智生ずる時は　無明便ち斷滅す　此の展轉する法に由つて　生死の輪迴を絕つ　自ら我が生盡き　及び梵行已に立ち　所作皆已に辦じ　更に後有を受けずと知る。

(七三)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。二の妙智有り。應に正しく尋思し、應に善く稱量し、應に審かに觀察すべし。能く未得を得し、能く未觸を觸し、能く未證を證し、能く愁歎を超へ、能く憂苦を滅し、能く正理を會し、能く甘露を獲、能く涅槃を證せよ。云何なるか二と爲すや。謂く世間智と及び出世智となり。世間智とは謂く色蘊に於いて能く正しく了知するなり。此れを色蘊と爲す。受想行及び識蘊の中に於いても亦復是くの如し。其の地界に於いて能く正しく了知するなり。此れを地界と爲す。水火風及び空識界に於いても亦復是くの如し。其の眼界に於いて能く正しく了知するなり。此れを眼界と爲す。其の色界及び眼識界に於いても亦復是くの如し。其の耳界に於いて能く正しく了知するなり。此れを耳界と爲す。其の聲界及び耳識界に於いても亦復是くの如し。其の鼻界に於いて能く正しく了知するなり。此れを鼻界と爲す。其の香界及

（七三）世間智と出世智。

攝して頌を說いて曰く。

諸有ゆる愚癡なる人は　三種の惡行を作し　三妙行を作さず　餘の過を引いて生ぜしむ　彼れは命終の時に臨み　決定して憂悔有り　死して諸の惡趣に墮ち　地獄の中に生れん。

吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。若し一類の補特伽羅有り、二法を成就せば命終の時に臨んで憂悔を生ぜず。身壞命終して善趣に昇り天界の中に生れん。云何なるか二と爲すや。謂はく作と不作となり。云何なるか作と爲すや。謂く身妙行・語妙行・意妙行なり。是れを名けて作と爲す。云何なるか不作となすや。謂はく身惡行・語惡行・意惡行なり。是れを不作と名く。諸有ゆる一類の補特伽羅、是くの如く說く所の二法を成就せば命終の時に臨んで憂悔を生ぜず、身壞命終して善趣に昇り天界の中に生れん」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

諸有ゆる智慧の人は　三種の妙行を作し　三惡行を作さず　餘の德を引いて生ぜしむ　彼れは命終の時に臨み　決定して憂悔無く　死しては善趣に昇り　天界の中に生れん。

(七二)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。二の妙智有り。應に修して生ぜしむべし。能く未得を得し、能く未觸を觸し、能く未證を證し、能く愁歎を超へ、能く憂苦を滅し、能く正理を會し、能く甘露を獲、能く涅槃を證す。云何なるか二と爲すや。一には法智、二には類智なり。法智生ずる時、便ち能く無倒にして遍く有爲を知る。有爲法に於いて既に遍く知り已らば、便ち能く彼れをして後有の因、生起し增長廣大することを得ずと感ぜしむ。類智生ずる時、便ち能く如實に無明を斷滅す。無明を滅するが故に便ち戲論無し。戲論無きが故に便ち尋伺無し。尋伺無きが故に便ち樂欲無し。樂欲無きが故に便ち愛憎無し。愛憎無きが故に便ち慳嫉無し。慳嫉無きが故に便ち種種なる刀杖を執持して違害し鬪諍して互に相ひ罵辱し、不眞實語をもつて相ひ離間する

(七二) 法智と類智。

礙す　彼れは命終の時に臨んで　憂悔悲惱すること有らん　重擔を棄捨するが如く　定んで地獄の中に生れん。

(七〇)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。若し一類の補特伽羅有り、二法を成就せば定んで能く白淨なる善法を發生せん。若し先きに已に生ぜば能く決定せしめん。若し先きに已に定まらば能く圓滿せしめん。彼れは是くの如き白淨なる善法に於いて障礙を爲さず、衰損を作さず、憂悔を生ぜず。身壞命終すれば重擔を棄つるが如くにして天趣の中に生れ諸の快樂を受けん。云何なるか二と爲すや。一には善戒、二には善見なり。諸有ゆる一類の補特伽羅、是くの如き說く所の二法を成就せば決定して能く白淨なる善法を生ぜん。若し先きに已に生ぜば能く決定せしめん。廣說す乃至。身壞命終すれば重擔を棄つるが如くにして天趣の中に生れ諸の快樂を受けん」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

若し二法を成就すれば　謂く善戒と善見となり　彼の人は終に定んで能く　白淨なる善法を生ず　若し生ずれば決定せん　決定すれば必ず圓滿せん　白淨なる善法に於いて　衰損障礙せじ　彼れは命終の時に臨んで　憂悔悲惱無く　重擔を棄つるが如くにして　定んで天趣の中に生ぜん。

(七一)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。若し一類の補特伽羅有り、二法を成就せば、命終の時に臨んで能く憂悔を生じ、身壞命終して諸の惡趣に墮ち地獄の中に生ぜん。云何なるか二と爲すや。謂く作と不作となり。云何なる作と爲すや。謂く身惡行・語惡行・意惡行なり。是れを名けて作と爲す。云何なるか不作と爲すや。謂はく身妙行・語妙行・意妙行なり。是れを不作と名く。諸有る一類の補特伽羅、是くの如く說く所の二法を成就せば命終の時に臨んで、能く憂悔を生じ、身壞命終して諸の惡趣に墮ち地獄の中に生れん」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を

(七〇)　善戒と善見。

(七一)　作と不作。

加行は　猛利なる諸根有り　是れに由つて大仙尊は　苦速通行と名く。

(六八)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。汝が爲めに略して二つの遲通行を說かん。云何なるか二と爲すや。一には樂行、二には苦行なり。謂く樂行に由つて彼の遲通を證す。及び苦行に由つて彼の遲通を證す。所修の加行は澁難無きが故に、所得の諸根は皆羸鈍なるが故に。是れを則ち名けて樂遲通行と爲す。所修の加行は澁難有るが故に。所得の諸根は皆羸鈍なるが故に。是れを則ち名けて苦遲通行と爲す。是れを略して二つの遲通行を說くと名く」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

今汝が爲めに略して　二種の遲通行を說かん　謂はく樂行と苦行となり　此れに因つて遲通を證す　澁難無き加行は　羸鈍なる諸根有り　是れに由つて大仙尊は　樂遲通行と名く　澁難有る加行は　羸鈍なる諸根有り　是れに由つて大仙尊は　苦遲通行と名く。

(六九)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。若し一類補特伽羅有り、二法を成就せば白淨の善法を發生すること能はず。設し已に發生せば決定すること能はず。設し已に決定せば圓滿すること能はず。彼れは是くの如き白淨なる善法に於いて能く障礙を爲し、能く衰損を作し、能く憂悔を生ず。身壞命終すれば重擔を棄つるが如くにして地獄に墮ち諸の劇苦を受けん。云何なるか二と爲すや。一には惡戒、二には惡見なり。諸有ゆる一類の補特伽羅、是くの如き所說の二法を成就すれば定んで白淨なる善法を生ずること能はず。設し復已に生ずるも決定して能はず。廣說。乃至、身壞命終すれば重擔を棄つるが如くにして地獄に墮ち諸の劇苦を受けん」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

若し二法を成就すれは　謂く惡戒と惡見となり　彼の人は終に　白淨なる善法を生ずること能はず　生ずと雖も不定なり　設し定まるとも圓滿せず　白淨なる善法に於いて　能く衰損し障

(六八)　樂と苦との二遲行。

(六九)　惡戒と惡見。

ひ、衆惡を造らず、凶狂を作さず、雜穢を起さゞらん。彼れは後時に於いて身嬰く重き疾ひ遍體に發生して增上猛利なれば嚴切なる苦受と楚毒とにて終りに垂んとなり醫療すべからざらん。此の苦を受くる時、呻吟すること有りと雖も怨歎すること無く、是の念言を作さん。我れは昔より來、唯、衆善を修し、唯、調柔を習ひ、唯、怖畏を救ひて衆惡を造らず、凶狂を作さず、雜穢を起さず。若し諸の有情、唯、衆善を修し、唯、調柔を習ひ、唯、怖畏を救ひ衆惡を造らず、凶狂を作らず、雜穢を起さゞらん。彼の所趣に我れ定んで當に往くべし。彼れは唯衆善等を修するが故に、心に焦惱せず、及び衆惡等を造らざるが故に心に焦惱せざらん。是くの如くなるを名けて二種の法有つて心焦惱せざらん」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

二法有つて能く　智者は心に歡喜を生ず　謂はく唯福業を修し　及び罪の因を作らず　後に病苦に遭はん時　呻吟しても怨歎すること無く　福有り罪無きを慶び　悔惱して焦然たらず　有福無罪の人の　生る所は諸の善趣なり　我も亦當に隨つて往くべし　決定して疑ひ有ること無し。

(六七)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。汝が爲めに略して二つの速通行を說かん。云何なるを二と爲すや。一には樂行、二には苦行なり。謂く樂行に由つて彼の速通を證す。及び苦行に由つて彼の速通を證す。所修の加行は澁難無きが故に。所得の諸根は皆猛利なるが故に。是れを則ち名けて樂速通行と爲す。所修の加行は澁難有るが故に。所得の諸根は皆猛利なるが故に。是れを則ち名けて苦速通行と爲す。是れを略して二つの速通行を說くと名く」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

今汝が爲めに略して　二種の速通行を說かん　謂く樂行と苦行となり　斯れに因つて速通を證す　澁難無き加行は　猛利なる諸根有り　是れに由つて大仙尊は　樂速通行と名く　澁難有る

(六七)　樂と苦との二速行。

て諸の善趣に生れん」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰はく。

若し自ら能く　眼等の六根門を守護し　飲食も善く量を知りて　信と精進とを成就せば　彼れは現法の中に於いて　身心に多く樂を受け　及び災無く患無く　惱無く燒然無く　行住と坐臥と　若しは覺め若しは夢の中にも　彼の二つの因緣に由り　恒に罪無く責無けん　聚落の空閑なる　衆の中及び靜處に居せる　有智のものは常に稱讚せん　當に善趣の中に生るべしと。

(六五)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。二種の法有りて能く焦惱を生ず。云何なるか二と爲すや。謂はく一類の補特伽羅有り、唯、衆の惡を造り、唯、凶狂を作し、唯、雜穢を起し、衆善を修せず、調柔を習はず、怖畏を救はず。彼れは後の時に於いて身嬰く重き疾ひ遍體に發生して增上猛利なれば嚴切なる苦受と楚毒とにて終りに垂んとなり醫療すべからざらん。此の苦を受くる時、呻吟し怨歎して是の念言を作さん。我れ昔より來、唯、衆惡をのみ造り、唯、凶狂をのみ作し、唯、雜穢をのみ起し、衆善を修せず、調柔を習はず、怖畏を救はず。若し諸の有情、唯、衆惡を造り、唯、凶狂を作し、唯、雜穢を起し、衆善を修せず、調柔を習はず、怖畏を救はざらん。彼れの所趣に我れ定んで當に往くべし。彼れは唯、衆惡等を造るに由るが故に心に焦惱を生ぜん、及び衆善を修せざるを以つての故に心に焦惱を生ぜん。是くの如くなるを名けて二種の法有つて能く焦惱を生ずと爲す」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

二法有つて能く　愚者は心に焦惱を生ず　謂く唯罪業を作り　及び福の因を修せず　後に病苦に遭ふ時に　呻吟して怨み歎き　罪有りて福無きを恨み　心に悔惱し焦然たり　有罪無福の人の　生るゝ所は諸の惡趣なり　我も亦當に隨つて往くべし　決定して疑ひ有ること無し。

(六六)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。二種の法有りて心焦惱せず。云何なるか二と爲すや。謂く一類の補特伽羅有り、唯、衆善を修し、唯、調柔を習ひ、唯、怖畏を救

(六五)　唯罪を作りて福を作せず。

(六六)　唯福を修して罪を作らず。

卷の第三

二法品第二の一

(六三)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。二分を成就せば現法の中に於いて諸の憂苦多く喜樂住無く、災ひ有り患ひ有り惱み有り燒かるゝこと有り罪有り責め有りて、諸の有情の同梵行者の訶毀する所と爲り、身壞れ命終りては諸の惡趣に生れん。云何なるか二と爲すや。一には根門に於いて守護すること能はざると、二には飲食に於いて善く量を知らざるとなり。諸有ゆる苾芻よ、此の二つを成就せば現法の中に於いて諸の憂苦多く喜樂住無く、災ひ有り患ひ有り惱み有り燒かるゝこと有り罪有り責め有りて、諸の有智の同梵行者の訶毀する所と爲り、身壞れ命終りて諸の惡趣に生れん」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰はく。

若し眼等の六根門を　守護すること能はず　飲食も量を知らず　不信懈怠を成ぜば　彼れは現法の中に於いて　身心に多くの苦を受け　及び災有り患有り　惱有り燒然有らん　行住と坐臥と　若しは覺め若しは夢の中にも　彼の二つの因緣に由り　恒に罪有り責め有らん　聚落の空閑なる　衆の中及び靜處に居せる　有智のものは常に訶責せん　當に惡趣の中に生れんと。

(六四)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。若し苾芻有りて二法を成就せば現法の中に於いて諸の喜樂多く憂苦住無く、災ひ無く患ひ無く惱み無く燒かるゝこと無く罪無く責め無く、諸の有智の同梵行者の稱讚する所と爲り、身壞れ命終りて諸の善趣に生れん。云何なるか二と爲すや。一つには根門に於いて能く守護し、二つには飲食に於いて能く量を知るなり。諸有ゆる苾芻よ。此の二つを成就せば現法の中に於いて諸の喜樂多く憂苦住無く、災ひ無く患ひ無く惱無く燒かるゝこと無く、罪無く責め無く、諸の有智の同梵行者の稱讚する所と爲り、身壞れ命終り

(六三) 根門を守護せず。飲食は量を知らず。

(六四) 根門を守護し。飲食量を知る。

に貪欲纏有ること無ければ、彼れ猶ほ有にして覺ること能はさるに非ず。我れ今、已に五欲の貪纏を斷じたれば所證と前と已に差別有り。我れ今已に能く所修の果を證せり。是の故に汝等、應に是くの如く學すべし。我れ當に云何が善く自心を轉じ、其れをして調伏せしめ、諸欲に違背して出離に隨順せしむべきや。汝等苾芻よ。應に是くの如く學すべし」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

別して一法有ること無し　性として躁動する心の如きは
調御し難く防ぎ難しとは　大仙の說きたまふ所なり
譬へば智有る人は　火を以つて衆具を等しくし
利箭を調直して　遠きとも中らしむるが如し
是くの如し諸の苾芻よ　應に善く方便を學し
心性を調直して　速かに涅槃を證せしむべし

重ねて前の經を攝して嗢拕南して曰く。

慈を修すると二緣を修すると　施と犯戒と持戒と
二妄と二聖慧と　邪見と正見と心となり。

思惟すべし。善く思惟し已り應に善く觀察すべし。善く觀察し已り應に善く安住すべし。善く安住し已れよ。若し内に貪欲纒有ることを覺らずんば、汝等復應に審諦に觀察すべし。我れ今、内に食欲纒有るが爲めに覺らざるや。我れ今、内に貪欲纒無きが爲めに覺らざるやと、審らかに觀察し已り復、應に隨一なる可愛の境の相を作意し思惟すべし。是くの如く隨一なる可愛の境の相を作意し思惟する時、若し心、喜樂なる可愛の境の相に隨順し趣向せば、當に此の心は諸の欲に隨順し出離に違背せりと知るべし。汝等、爾の時、應に自ら覺了すべし。我れは今猶ほ内に貪欲纒有りて覺ること能はずして無有と爲すに非ずと。我れ今、未だ五欲の貪纒を斷ぜざれば所證と前と未だ差別有らざるなり。我れ今猶ほ未だ修する所の果を證せざること、譬へば人有り駛き流水に於いて重き船筏を牽き、逆上して行くが如し。此の人は爾の時、多くの功力を用ゆとも、若し暫くも懈慢すれば便ち下きに順つて流されん。是くの如し、汝等、隨一なる可愛の境の相を思惟せん時、若し喜樂なる可愛の境の相に隨順し趣向せば、當に知るべし。此の心は諸の欲に隨順して出離に違背せるなりと。汝等、爾の時、應に自ら覺了すべし。我れ今猶ほ内に貪欲纒有りて覺ること能はずして、無有と爲すに非ずと。我れ今未だ五欲の貪纒を斷ぜざれば所證と前とは未だ差別有らざるなり。我れ今猶ほ未だ修せる所の果を證せざるなり。汝等、隨一なる可愛の境の相を作意し思惟せよ。若し心、喜樂なる出離の相に隨順し趣向せば當に知るべし。此の心は出離に隨順して諸欲に違背せるなり。汝等、爾の時、應に自ら覺了すべし。我れ今、内に貪欲纒有ること無ければ彼れ猶ほ有にして覺ること能はざるに非ず。我れ今已に五欲の貪纒を斷じたれば所證と前とは已に差別有り。我れ今已に能く所修の果せり。たとへば筋羽を以つて火中に投げ置くに便ち焦げ卷きて舒緩せざるが如し。是くの如し、汝等、隨一可愛の境の相を思惟せん時、若し心、喜樂なる出離の相に隨順し趣向せば、當に此の心は出離に隨順し諸欲に違背せりと知るべし。汝等、爾の時、應に自ら覺了すべし。我れ今、内

邪見の生長する時は　　愚癡をして增益に
及び顚倒をして堅固に　　の垢穢をして隨增し
諸の惡趣をして成滿せしむ　　利樂等無きが爲なり
邪見の害たるや愚夫が　　火をもつて衆物を燒くが如し。

吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。世に一法有り、生長する時は、諸の有情をして愚癡は損減し、顚倒は除滅し、淨法は隨增し、諸の惡趣を脫して善趣は成滿せしむ。多くの衆生と大利益を爲し大安樂を爲す。諸の世間の人天大衆をして義有り利有り喜樂を增長せしめん。云何なるか一法ぞや。所謂(六一)正見なり。所以は何ん。正見に由るが故に、諸の有情をして愚癡は損減し、顚倒は除滅し、淨法は隨增し、諸の惡趣を脫して善趣は成滿せしめ、多くの衆生と大利益を爲し、大安樂を爲す。諸の世間の人天大衆をして義有り利有りて喜樂を增長せしむ。是くの如くなるを名けて世に一法有りて生長する時は、諸の有情をして愚癡は損減せしむと爲す。廣說す乃至。諸の世間の人天大衆をして義有り利有りて喜樂を增長せしむ」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

正見の生長する時は　　愚癡をして損減し
及び顚倒は除滅し　　諸の淨法は隨增し
惡趣を脫して善趣を滿ぜしむ　　利樂等有るが爲めなり
正見現在前すれば　　速かに涅槃の樂を證す。

(六二)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。我れ世間を觀ずるに、別の一法無くして速疾に廻轉す。猶ほ其の心の如し。所以は何ん。是の心は境に於いて速疾に廻轉す。世出世間にして喩へを爲すべきもの無し。汝等應に是く如き心相を取るべし。善く取相已り應に善く

(六一) 正見の益。
(六二) 心は境と速疾に廻轉す。

の義を攝して頌を說いて曰く。

如來若し世間に出現せば　　諸の有情は
救ひ有り歸依有つて　　皆聖慧を增長せん
親友財位を得たるをば　　是れを小增長と名け
若し眞の聖慧を得るをば　　是れを大增長と名く
我れ諸の世間を觀ずるに　　無上聖慧を得ば
生死に流轉せずして　　定んで涅槃を取らん
彼れは現法の中に於いて　　苦を離れて常に安樂にして
當來の長夜に於いては　　生死輪迴を離れん
若し聖慧を增長せんと欲はば　　正しく衆の苦邊を盡くせ
當に願くは佛世尊よ　　長く久しく世に住したまへ

(六〇)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。世に一法有り。生長する時は、諸の有情をして愚癡は增益し、顚倒は堅固に、垢穢は隨增し、惡趣は成滿せしめ、多くの衆生と不利益を爲し、不安樂を爲す。諸の世間の人天大衆をして義無く、利無くして憂苦を增長せしめん。云何なるか一法ぞや。所謂邪見なり。所以は何ん。邪見に由るが故に諸の有情をして愚癡は增益し、顚倒は堅固に、垢穢は隨增し、惡趣は成滿せしめ、多くの衆生をして不利益を爲し、不安樂を爲す。諸の世間の人天大衆をして義無く、利無くして憂苦を增長せしむ。是くの如きを名けて世に一法有り、生長する時に於いて諸の有情をして愚癡は增益せしむと爲す。廣說す乃至。諸の世間の人天大衆をして義無く利無くして憂苦を增長せしむ」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

(六〇) 邪見の過。

親友財位を失ふをば　是れを小退失と名け
若し眞の聖慧を失ふをば　是れを大退失と名く
我れ諸の世間を觀ずるに　無上聖慧を失はば
生死に輪轉して　諸の名色身を受けん
彼れは現法の中に於いて　苦有れども安樂無く
當來長夜に於いて　久しく生死輪迴せん
若し聖慧を求めんと欲はば　正しく衆の苦邊を盡くせ
當に願くは諸の如來よ　數ゝ世に出現したまへ

吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。一の最勝なる補特伽羅有り。彼れ世間に於いて若し出現せば無量の有情は聖慧を增長せん。云何なるか一補特伽羅と爲すや。所謂如來應正等覺なり。所以は何ん。若し諸の如來應正等覺が世間に出現して能く聖慧を修する法を宣說すること有らば諸の有情をして聖慧を增長せしめん。苾芻よ當に知るべし。諸有ゆる親友と財と位とを增長するを小增長と名け、聖慧を增長するを大增長と名く。所以は何ん。若し諸の有情、聖慧を增長せば現法の中に於いて諸の喜樂多く、憂苦住無く、災ひ無く患ひ無く惱み無く燒無く、當來の長夜に於いて苦を受けず、種種なる猛利の災害を受けず、血滴を增さず、死路に遊ばず、地獄餓鬼傍生阿素洛趣に墮ちず、人天の生死の憂苦を受けざらん。所以は何ん。彼の有情は其の聖慧に於いて已に能く隨覺し、已に能く通達して、六趣に於ける生死輪迴をなさじ。若し諸の有情、未だ聖慧を增さずんば、能く出離して正しく苦邊を盡すこと無けん。是の故に汝等、應に是くの如く學すべし。我れ當に云何が聖慧を修習して其をして增長せしむべきや。我れ當に云何が諸の聖慧に於いて隨覺し通達すべきやと。汝等苾芻よ。應に是くの如く學すべし」と。爾の時、世尊、重ねて此

無し」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

知つて而も故らに妄語し　慚愧し悔ゆる心有らば
是くの如き諸の有情は　善として造せざるは無けん
精勤にして放逸ならず　如說に正しく修行せば
無上なる涅槃を得て　永く諸の怖畏を離れん。

(五九)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。一の最勝なる補特伽羅有り。彼れ世間に於いて若し出現せずんば無量の有情、聖慧を退失せん。云何なるを一補特伽羅と爲す。所謂如來應正等覺なり。所以は何ん。若し諸の如來應正等覺が世間に現せずんば能く聖慧を修する法を宣說すること無けん。かるが故に諸の有情は聖慧を退失するなり。苾芻よ當に知るべし。諸有ゆる親友と財と位とを退失するを小退失と名け、聖慧を退失するを大退失と名く。所以は何ん。若し諸の有情、聖慧を退失せば現法の中に於いて諸の憂苦多く喜樂住無く、災ひ有り患ひ有り惱み有り燒有り、及び當來の長夜に於いて苦を受け、及び種々なる猛利の災害を受け、血滴を增長し常に死路に遊び、數々地獄餓鬼傍生阿素洛趣に墮ち、數々人天の生死の憂苦を受けん。所以は何ん。彼の有情は其の聖慧に於いて未だ覺に隨ふこと能はず、未だ通達すること能はざるに由るが故に、六趣に於いて生死輪迴す。若し諸の有情、聖慧を證得せば便ち能く出離して正しく苦邊を盡くさん。是の故に汝等、應に是くの如く學すべし。我れ當に云何が聖慧を修習し退失せざらしむべきと。我れ當に云何が諸の聖慧に於いて隨覺し通達すべきと。汝等苾芻よ。應に是くの如く學すべし」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

如來世間に出現せずんば　諸の有情は
救ひ無く歸依無ければ　皆聖慧を退失せん

(五九) 最勝なる有情(如來)を八段に說く。

(五六)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。若し諸の有情、能く持戒所感の果報を知らば明了現前せん。我が如く知れる者は彼は自身に於いて深く厭離を生じ、當來を欣樂し堅く禁戒を持たん。知らざるを以つての故に、自身に樂著して禁戒を毀犯せん。所以は何ん。諸の持戒の福は能く善趣の增上猛利なる諸の樂の果報を感ぜん」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

世間の諸の有情　若し持戒すれば
能く樂の果報を感ずることを了知せば　明らかに如來に似たるを見ん
便ち不淨身に於いて　深く能く厭離を生じ
當來の勝果を求め　堅く淨き尸羅を守らん
戒を持てば　能く善趣の樂を感ずることを知らざるに由り
明らかに如來に似たるを見ても　故らに淨戒を毀犯せん
諸有ゆる持戒の人は　善趣に生ずることを得て
天の諸の妙樂を受け　無上なる涅槃を證せん

(五七)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。若し諸の有情、知つて而も妄語し、無慚無愧にして改悔の心無ければ、我れ說く、彼れは惡不善業に於いて能く造せざること無し」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

知つて而も故らに妄語し　慚愧し悔ゆる心無き
是くの如き諸の有情は　惡として造せざること無けん。

(五八)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。若し諸の有情、知つて而も妄語し、深く慚愧を生じ改悔の心有らば、我れ說く、彼れは白淨なる善法に於いて能く造せざること

(五六)持戒の果報。
(五七)妄語。
(五八)慚愧改悔。

能く大果報を感じ　明らかに如來に似たるを見ん
其の心必ず　慳悋の爲めに纏染せられず
唯食有らば一摶なりとも　亦能く分ち施さん
施の果を知らざるに由り　明らかに如來に似たるを見ん
多くの財と食と有りと雖も　慳悋にして捨つること能はず
若し凡聖の田に於いて　三時に心施を喜ばば
人天の果報を感じて　往返すること量無邊ならん。

(五五)「吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。若し諸の有情、能く犯戒を知らば所感の果報は明了に現前せん。我が如く知る者は行住坐臥に皆安きこと能はず。言笑飮食に都べて思念無く、其の心驚き惶れ、狂亂して血を吐き、身形は萎悴して、彼の刈れる蘆の如くならん。知らざるを以つての故に、安然として畏るること無し。所以は何ん。諸の犯戒の罪は能く惡趣の増上猛利なる諸の苦の果報を感ず」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

世間の諸の有情　若し犯戒すれば
能く苦の果報を感ずることを了知せば　明らか如來に似たるを見ん。
四威儀安からず　思はざる言笑等にも
心驚狂して血を吐き　身悴れて刈れる蘆の如くならん
犯戒すれば　惡趣の苦を感ずること知らざるに由り
明らかに似如來を見ても　安然として驚懼せず
諸有ゆる犯戒の人は　定んで惡趣に墮ち
増上にして猛利なる　苦の果報を受けて無邊ならん

(五五)　犯戒の果報。

恭敬して其の教を受け　放逸なること無くして奉行せば
速かに涅槃を證し　怖を離れて常に安樂なり。

(五三)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。我れ世間を觀ずるに、別の一法無し。諸の有學の未だ心を得ざる者にして、無上安樂の果を希求する時、內の强緣と作るは正作意の如きものなり。所以は何ん。彼の諸の有情は正作意に因つて求むる所皆遂ぐ。謂く衆惡を斷じ、諸善を修習し、雜染無き眞淨の身を得るなり」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

我れ諸の世間を觀ずるに　別して一法有ること無し
學にして未だ心を得ざる者　無上の果を求むる時
爲めに內の强緣と作るは　彼の正作意の如し
正作意を修習せば　求むる所成ぜざるは無し
理の如く審かに觀察して　放逸なること無くして奉行せば
速かに涅槃を證し　怖を離れて常に安樂なり。

(五四)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。若し諸の有情、能く惠施を知らば所感の果報明了に現前せん。我が如く知る者は、必ず慳悋をもつて其の心を纏染すること無けん。設ひ彼れ唯食する所の一摶有らんも、要らず分つて他に施し、然して後に自ら食はん。不知を以つての故に、諸の慳悋の爲めに其の心を纏染し、無量の飲食財寶有りと雖も他に施さずして唯自ら食ひ用ひん。所以は何ん。惠施の果報は人天の中に生れて無量に往返し、諸の快樂を受く」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

世間の諸の有情　若し惠施を了知せば

(五三)內の强緣は正作意にしくはなし。

(五四)惠施の果報。

其の福は尙ほ無邊なり　何に況や一切に於いておや
諸有ゆる大國王は　大地を威伏し
世間の祠りの施會は　一切爲さざるは無し
是くの如き祠りの施福を　所修の慈心に比するに
十六分の中に於いて　亦一も及ぶこと能はず
轉輪聖帝は　威德諸王を蔽ふが如く
亦滿月輪は　其の光り諸宿に映ずるが如し
是くの如く諸の所修の　一切福業の事は
皆慈善心の　威德の覆ふ所と爲る
慈心解脫を修すれば　若しは人にもあれ若しは非人にもあれ
一切の諸の有情　皆害を爲すこと能はず。

(五二)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。我れ世間を觀ずるに別の一法無し。諸の有學の未だ心を得ざる者にして、無上安樂の果を希求する時、外の强緣と作るは善知識の如きものなり。所以は何ん。彼の諸の有情は善知識に因りて求むる所を皆遂ぐ。謂く衆惡を斷じ、諸善を修習し、雜染無き眞淨の身を得るなり」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

我れ諸の世間を觀ずるに　別して一法有ること無し
學にして未だ心を得ざる者　無上の果を求むる時
爲めに外の强緣と作るは　彼の善知識の如し
善知識に親近ぜば　求むる所成ぜざるは無し

(五二) 外の强緣は善知識にしくはなし。

一切において已知せる者は　　涅槃を去ること遙かならず
我れ諸の有情を觀るに　　一切の所染に由り
還來して惡趣に墮ち　　生死を受けて輪迴す

重ねて前の經を攝し、嗢拕南して曰く。

貪と恚と及び愚癡と　　覆藏と惱と忿と恨と
嫉と慳と耽嗜と　　慢と害と將一切となり。

(五一)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。一切の修習する福業事の中にて慈心解脫は最も第一たり。所以は何ん。慈心解脫は威德熾盛にして一切の諸の福業事を映蔽す。彼の諸事の所有ゆる威德を以つて修する所の慈心解脫に比せんと欲ふに、十六分の中の亦一にも及はず。苾芻よ當に知るべし。譬へば小大の諸の國王の中にて轉輪聖王は最も第一爲るが如し。所以は何ん。轉輪聖王は威德熾盛にして一切の小大の諸王を映蔽して、彼の諸王の所有ゆる威德を以つて轉輪王に比するに十六分の中の亦一にも及ばず。諸の福業事も亦復是くの如し。修する所の慈心解脫を比せんと欲ふとも十六分の中の亦一にも及ばず。又小大の諸の星の中に其の滿月輪は最も第一たるが如し。所以は何ん。是の滿月輪は威光熾盛にして一切の小大の諸星を映蔽して、彼の諸星の所有ゆる威光を以つて滿月輪に比する十六分の中の亦一にも及ばず。諸の福業事も亦復是くの如し。修する所の慈心解脫に比せんと欲ふに十六分の中の亦一にも及ばず」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

一切の福業の事をば　　慈心解脫に比するに
十六分の中に於いて　　亦一にも及ぶ能はざるなり
一の有情の所に於いて　　能く慈善心を修するすら

(五一)　修慈は福業の第一。

と能はず、無上安樂を證得すること能はざるなり。若し害に於いて已に實の如く知り、已に正しく遍知し、已に能く永斷すること有らば、彼れは自心に於いて已に害を離れたるが故に、即ち能く通達し、即ち能く遍知し、即ち能く等覺し、即ち能く涅槃し、即ち能く無上安樂を證得せるなり。是の故に害に於いて應に實の如く知るべし、應に正しく遍知すべし。應に永斷を求むべし。佛法の中に於いて當に梵行を修すべし」と。爾の時、世尊、重ねて上の義を攝して頌を說いて曰く。

若し害に於いて未知ならば　彼れは涅槃を去ること遠し
害に於いて已知せる者は　涅槃を去ること遙かならず
我れ諸の有情を觀るに　害の所染に由り
還來して惡趣に墮ち　生死を受けて輪廻す
若し能く正しく了知して　永く此の害を斷ぜば
上沙門果を得て　畢竟じて生を受けじ。

(五〇)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。若し一切に於いて未だ實の如く知らず、未だ正し遍知せず、未だ永斷すること能はざれば、彼れは自心に於いて未だ一切を離れざるが故に通達すること能はず、遍知すること能はず、等覺すること能はず、涅槃すること能はず、無上安樂を證得すること能はざるなり。若し一切に於いて已に實の如く知り、已に正しく遍知し、已に能く永斷せば彼れは自心に於いて已に一切を離るるが故に即ち能く通達し、即ち能く遍知し、即ち能く等覺し、即ち能く涅槃し、即ち能く無上安樂を證得せるなり。故に一切に於いて應に實の如く知るべし、應に正しく遍知すべし、應に永斷を求むべし。佛法の中に於いて當に梵行を修すべし」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

若し一切において未知ならば　彼れは涅槃を去ること遠し

(五〇) 知一切すれば安樂を證る。

還來して惡趣に墮ち　生死を受けて輪廻す
若し能く正しく了知して　永く此の恥を斷ぜば
上沙門果を得て　畢竟じて生を受けじ。

(四八) 吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。若し慢に於いて未だ實の如く知らず、未だ正しく遍知せず、未だ永斷すること能はざること有らば、彼れは自心に於いて未だ慢を離れざるが故に通達すること能はず、遍知すること能はず、等覺すること能はず、涅槃すること能はず、無上安樂を證得すること能はざるなり。若し慢に於いて已に實の如く知り、已に正しく遍知し、已に能く永斷すること有らば、彼れは自心に於いて已に慢を離れたるが故に即ち能く通達し、即ち能く遍知し、即ち能く等覺し、即ち能く涅槃し、即ち能く無上安樂を證得せるなり。是の故に慢に於いて應に實の如く知るべし。應に正し遍知すべし、應に永斷を求むべし。佛法の中に於いて當に梵行を修すべし」と。爾の時、世尊重ねて上の義を攝して頌を說いて曰く。

若し慢に於いて未知ならば　彼れは涅槃を去ること遠し
慢に於いて已知せる者は　涅槃を去ること遙かならず
我れ諸の有情を觀るに　慢の所染に由り
還來して惡趣に墮ち　生死を受けて輪廻す
若し能く正しく了知して　永く此の慢を斷ぜば
上沙門果を得て　畢竟じて生を受けじ。

(四九) 吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。若し害に於いて未だ實の如く知らず、未だ正しく遍知せず、未だ永斷すること能はざること有らば、彼れは自心に於いて未だ害を離れざるが故に、通達すること能はず、遍知すること能はず、等覺すること能はず、涅槃するこ

(四八) 知慢すれば安樂を證る。
(四九) 知害すれば安樂を證る。

即ち能く遍知し、即ち能く等覺し、即ち能く涅槃し、即ち能く無上安樂を證得せるなり。是の故に慳に於いて應に實の如く知るべし、應に正しく遍知すべし、應に永斷を求むべし。佛法の中に於いて當に梵行を修すべし」と。爾の時、世尊、重ねて上の義を攝して頌を說いて曰く。

若し慳に於いて未知ならば　彼れは涅槃を去ること遠し
慳に於いて已知せる者は　涅槃を去ること遙かならず
我れ諸の有情を觀るに　慳の所染に由り
還來して惡趣に墮ち　生死を受けて輪迴す
若し能く正しく了知して　永く此の慳を斷ぜば
上沙門果を得て　畢竟じて生を受けじ。

(四七)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。若し耽に於いて未だ實の如く知らず、未だ正しく遍知せず、未だ永斷すること能はざること有らば、彼れは自心に於いて未だ耽を離れざるが故に通達すること能はず、遍知すること能はず、等覺すること能はず、涅槃すること能はず、無上安樂を證得すること能はざるなり。若し耽に於いて已に實の如く知り、已に正しく遍知し已に能く永斷すること有らば、彼れは自心に於いて已に耽を離れたるが故に即ち能く通達し、即ち能く遍知し、即ち能く等覺し、即ち能く涅槃し、即ち能く無上安樂を證得せるなり。是の故に耽に於いて應に實の如く知るべし、應に正しく遍知すべし、應に永斷を求むべし。佛法の中に於いて當に梵行を修すべし」と。爾の時、世尊、重ねて上の義を攝して頌を說いて曰く。

若し耽に於いて未知ならば　彼れは涅槃を去ること遠し
耽に於いて已知せる者は　涅槃を去ること遙かならず
我れ諸の有情を觀るに　耽の所染に由り

(四七) 知耽すれば安樂を證る。

上沙門果を得て　　畢竟じて生を受けじ。

(四五)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。若し嫉に於いて未だ實の如く知らず、未だ正しく遍知せず、未だ永斷すること能はざること有らば、彼れは自心に於いて未だ嫉を離れざるが故に通達すること能はず、遍知すること能はず、等覺すること能はず、涅槃すること能はず、無上安樂を證得すること能はざるなり。若し嫉に於いて已に實の如く知り、已に正しく遍知し、已に能く永斷せば彼れは自心に於いて已に嫉を離れたるが故に即ち能く通達し、即ち能く遍知し、即ち能く等覺し、即ち能く涅槃し、即ち能く無上安樂を證得せるなり。是の故に嫉に於いて應に實の如く知るべし、應に正しく遍知すべし、應に永斷を求むべし。佛法の中に於いて當に梵行を修すべし」と。爾の時、世尊、重ねて上の義を攝して頌を說いて曰く。

若し嫉に於いて未知ならば　　彼れは涅槃を去ること遠し
嫉に於いて已知せる者は　　涅槃を去ること遙かならず
我れ諸の有情を觀るに　　嫉の所染に由り
還來して惡趣に墮ち　　生死を受けて輪迴す
若し能く正しく了知して　　永く此の嫉を斷ぜば
上沙門果を得て　　畢竟じて生を受けじ。

(四六)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。若し慳に於いて未だ實の如く知らず、未だ正しく遍知せず、未だ永斷すること能はざること有らば、彼れは自心に於いて未だ慳を離れざるが故に通達すること能はず、遍知すること能はず、等覺すること能はず、涅槃すること能はず、無上安樂を證得すること能はざるなり。若し慳に於いて已に實の如く知り、已に正しく遍知し、已に能く永斷すること有らば彼れは自心に於いて已に慳を離れたるが故に即ち能く通達し、

(四五)　知嫉すれば安樂を證る。

(四六)　知慳すれば安樂を證る。

て當に梵行を修すべし」と。爾の時、世尊、重ねて上の義を攝して頌を說いて曰く。

若し忿に於いて未知ならば　彼れは涅槃を去ること遠し
忿に於いて已知せる者は　涅槃を去ること遙かならず
我れ諸の有情を觀るに　忿の所染に由り
還來して惡趣に墮ち　生死を受けて輪迴す
若し能く正しく了知して　永く此の忿を斷ぜば
上沙門果を得て　畢竟じて生を受けじ。

(四四)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。若し恨に於いて未だ實の如く知らず、未だ正しく遍知せず、未だ永斷すること能はざること有らば、彼れは自心に於いて未だ恨を離れざるが故に通達すること能はず、遍知すること能はず、等覺すること能はず、涅槃すること能はず、無上安樂を證得すること能はざるなり。若し恨に於いて已に實の如く知り、已に正しく遍知し、已に能く永斷すること有らば、彼れは自心に於いて已に恨を離れたるが故に即ち能く通達し、即ち能く遍知し、即ち能く等覺し、即ち能く涅槃し、即ち能く無上安樂を證得せるなり。是の故に恨に於いて應に實の如く知るべし、應に正しく遍知すべし、應に永斷を求むべし。佛法の中に於いて當に梵行を修すべし」と。爾の時、世尊、重ねて上の義を攝して頌を說いて曰く。

若し恨に於いて未知ならば　彼れは涅槃を去ること遠し
恨に於いて已知せる者は　涅槃を去ること遙かならず
我れ諸の有情を觀るに　恨の所染に由り
還來して惡趣に墮ち　生死を受けて輪迴す
若し能く正しく了知して　永く此の恨を斷ぜば

（四四）知恨すれば安樂を證る。

らず、未だ正しく遍知せず、未だ永斷すること能はざること有らば彼れは自心に於いて未だ惱を離れざるが故に、通達すること能はず、遍知すること能はず、等覺すること能はず、涅槃すること能はず、無上安樂を證得すること能はざるなり。若し惱に於いて已に實の如く知り、已に正しく遍知し、已に能く永斷せば彼れは自心に於いて已に惱を離れたるが故に即ち能く通達し、即ち能く遍知し、即ち能く等覺し、即ち能く涅槃し、即ち能く無上安樂を證得せるなり。是の故に惱に於いて應に實の如く知るべし、應に正しく遍知すべし、應に永斷を求むべし。佛法の中に於いて當に梵行を修すべし」と。爾の時、世尊、重ねて上の義を攝して頌を說いて曰く。

若し惱に於いて未知ならば　彼れは涅槃を去ること遠し
惱に於いて已知せる者は　涅槃を去ること遙かならず
我れ諸の有情を觀るに　惱の所染に由り
還來して惡趣に墮ち　生死を受けて輪迴す
若し能く正しく了知して　永く此の惱を斷ぜば
上沙門果を得て　畢竟じて生を受けじ。

(四三)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。若し忿に於いて未だ實の如く知らず、未だ正しく遍知せず、未だ永斷すること能はざること有らば、彼れは自心に於いて未だ忿を離れざるが故に通達すること能はず、遍知すること能はず、等覺すること能はず、涅槃すること能はず、無上菩提を證得すること能はざるなり。若し忿に於いて已に實の如く知り、已に正しく遍知し、已に能く永斷すること有らば、彼れは自心に於いて已に忿を離れたるが故に即ち能く通達し、即ち能く遍知し、即ち能く等覺し、即ち能く涅槃し、即ち能く無上安樂を證得せるなり。是の故に忿に於いて應に實の如く知るべし、應に正しく遍知すべし、應に永斷を求むべし。佛法の中に於い

(四三)　知忿すれば安樂を證る。

癡に於いて已知せる者は　涅槃を去ること遙かならず
我れ諸の有情を觀るに　癡の所染に由り
還來して惡趣に墮ち　生死を受けて輪廻す
若し能く正しく了知して　永く此の癡を斷ぜば
上沙門果を得て　畢竟じて生を受けじ。

(四一)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。『苾芻よ當に知るべし。若し[四]覆に於いて未だ實の如く知らず、未だ正しく遍知せず、未だ永斷すること能はざることあらば、彼れは自心に於いて未だ覆を離れざるが故に通達すること能はず、遍知すること能はず、等覺すること能はず、涅槃すること能はず、無上安樂を證得すること能はざるなり。若し覆に於いて已に實の如く知り、已に正しく遍知し、已に能く永斷すること有らば彼れは自心に於いて已に覆を離れたるが故に即ち能く通達し、即ち能く遍知し、即ち能く等覺し、即ち能く涅槃し、即ち能く無上安樂を證得せるなり。是の故に覆に於いて應に實の如く知るべし、應に正しく遍知すべし、應に永斷を求むべし。佛法の中に於いて當に梵行を修すべし』と。爾の時、世尊、重ねて上の義を攝して頌を說いて曰く。

若し覆に於いて未知ならば　彼れは涅槃を去ること遠し
覆に於いて已知せる者は　涅槃を去ること遙かならず
我れ諸の有情を觀るに　覆の所染に由り
還來して惡趣に墮ち　生死を受けて輪廻す
若し能く正しく了知して　永く此の覆を斷ぜば
上沙門果を得て　畢竟じて生を受けじ

(四二)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。『苾芻よ當に知るべし。若し惱に於いて未だ實の如く知

(四一) 知覆すれば安樂を證る。

(四二) 知惱すれば安樂を證る。

上菩提を證得すること能はざるなり。若し瞋に於いて已に實の如く知り、已に正しく遍知し、已に能く永斷すること有らば彼れは自心に於いて已に瞋を離れたるが故に卽ち能く通達し、卽ち能く遍知し、卽ち能く等覺し、卽ち能く涅槃し、卽ち能く無上安樂を證得せるなり。是の故に瞋に於いて應に實の如く知るべし、應に正しく遍知すべし、應に永斷を求むべし。佛法の中に於いて當に梵行を修すべし」と。爾の時、世尊、重ねて上の義を攝して頌を說いて曰く。

若し瞋に於いて未知ならば　彼れは涅槃を去ること遠し
瞋に於いて已知せる者は　涅槃を去ること遙かならず
我れ諸の有情を觀るに　瞋の所染に由り
還來して惡趣に墮ち　生死を受けて輪廻す
若し能く正しく了知して　永く此の瞋を斷ぜば
上沙門果を得て　畢竟じて生を受けじ。

(四〇)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。若し癡に於いて未だ實の如く知らず、未だ正しく遍知せず、未だ永斷すること能はざること有らば彼れは自心に於いて未だ癡を離れざるが故に通達すること能はず、遍知すること能はず、等覺すること能はず、涅槃すること能はず、無上安樂を證得すること能はざるなり。若し癡に於いて已に實の如く知り、已に正しく遍知し、已に能く永斷すること有らば、彼れは自心に於いて已に癡を離れたるが故に卽ち能く通達し、卽ち能く遍知し、卽ち能く等覺し、卽ち能く涅槃し、卽ち能く無上菩提を證得せるなり。是の故に癡に於いて應に實の如く知るべし、應に正しく遍知すべし、應に永斷を求むべし。佛法の中に於いて當に梵行を修すべし」と。爾の時、世尊、重ねて上の義を攝して頌を說いて曰く。

若し癡に於いて未知ならば　彼れは涅槃を去ること遠し

(四〇)　知癡すれば安樂を證る。

巻の第二

一法品第一の二

(三八)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。若し貪に於いて未だ實の如く知らず、未だ正しく遍知せず、未だ永斷すること能はざること有らば彼れは自心に於いて未だ貪を離れざるが故に、通達すること能はず遍知すること能はず等覺すること能はず涅槃すること能はず無上安樂を證得すること能はざるなり。若し貪に於いて已に實の如く知り已に正しく遍知し已に能く永く斷ずること有らば、彼れは自心に於いて已に貪を離れたるが故に即ち能く通達し、即ち能く遍知し、即ち能く等覺し、即ち能く涅槃し、即ち能く無上安樂を證得せるなり。是の故に貪に於いて應に實の如く知るべし、應に正しく遍知すべし、應に永斷を求むべし。佛法の中に於いて當に梵行を修すべし」と。爾の時、世尊、重ねて上の義を攝して頌を說いて曰く。

若し貪に於いて未知ならば　彼れは涅槃を去ること遠し
貪に於いて已知せる者は　涅槃を去ること遙かならず
我れ諸の有情を觀るに　貪の所染に由り
還來して惡趣に墮ち　生死を受けて輪迴す
若し能く正しく了知して　永く此の貪を斷ぜば
上沙門果を得て　畢竟じて生を受けじ。

(三九)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。若し瞋に於いて未だ實の如く知らず、未だ正しく遍知せず、未だ永斷すること能はざること有らば彼れは自心に於いて未だ瞋を離れざるが故に通達すること能はず遍知すること能はず等覺すること能はず涅槃すること能はず無

(三八) 知貪すれば安樂を證る。

(三九) 知瞋すれば安樂を證る。

切有情は念身せざるに由るが故に數數還來して諸の惡趣に墮ち生死の苦を受けん。若し能く常に是くの如き一法を念ぜば我れ彼れは定んで不還果を得て復、此の世間に還來して生れじと證せん。是の故に我れ說く。若し諸の有情、能く一法を念ぜば我れ彼れは定んで不還果を得と證せん」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

我れ諸の有情を觀ずるに　念身せざるに由るが故に
還來して惡趣に墮ち　生死を受けて輪迴せん
若し能く正しく了知して　永く身を念ぜば
定んで不還果を得て　此の間に來生せじ。

(三七)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。若し諸の有情、永く一法を念ぜば我れ彼れは定んで不還果を得と證せん。云何なるを一法と爲すや。謂く是れ念死なり。所以は何ん。一切有情は念死せざるに由るが故に數數還來して諸の惡趣に墮ち生死の苦を受けん。若し能く常に是くの如き一法を念ぜば我れ彼れは定んで不還果を得て復、此の世間に還來して生れじと證せん。是の故に我れ說く。若し諸の有情、能く一法を念ぜば我れ彼れは定んで不還果を得と證せん」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

我れ諸の有情を觀ずるに　念死せざるに由るが故に
還來して惡趣に墮ち　生死を受けて輪迴せん
若し能く正しく了知して　永く死を念ぜば
定んで不還果を得て　此の間に來生せじ。

(三七) 念死すれば不還果を得。

以は何ん。一切有情は念[八]休息せざるに由るが故に數數還來して諸の惡趣に墮ち生死の苦を受けん。若し能く常に是くの如き一法を念ぜば、我れ彼れは定んで不還果を得て復、此の世間に還來して生れじと證せん。是の故に我れ說く。若し諸の有情、能く一法を念ぜば我れ彼れは定んで不還果を得と證せん」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

我れ諸の有情を觀ずるに　休息を念ぜざるに由り
還來して惡趣に墮ち　生死を受けて輪迴せん
若し能く正しく了知して　永く休息を念ぜば
定んで不還果を得て　此の間に來生せじ。

(三五)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。若し諸の有情、永く一法を念ぜば我れ彼れは定んで不還果を得と證せん。云何なるを一法と爲すや。謂く是れ念安般なり。所以は何ん。一切有情は念[九]安般せざるに由るが故に數數還來して諸の惡趣に墮ち生死の苦を受けん。若し能く常に是くの如き一法を念ぜば我れ彼れは定んで不還果を得て復、此の世間に還來して生れじと證せん。是の故に我れ說く。若し諸の有情、能く一法を念ぜば我れ彼れは定んで不還果を得と證せん」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

我れ諸の有情を觀ずるに　安般を念ぜざるに由るが故に
還來して惡趣に墮ち　生死を受けて輪迴せん
若し能く正しく了知して　永く安般を念ぜば
定んで不還果を得て　此の間に來生せじ。

(三六)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。若し諸の有情、永く一法を念ぜば我れ彼れは不還果を得と證せん。云何なるを一法と爲すや。謂く是れ念身なり。所以は何ん。一

【八】休息とは氣息を調直ならしむること。

(三五)念安般すれば不還果を得。

【九】安般とは舊譯、又は安那般那。新譯は阿那波那。又は阿那阿波那。Ānāpāna. 數息と翻ず。出息入息を數へて心氣を鎮むる觀法。

(三六)念身すれば不還果を得。

何ん。一切有情は念施せざるに由るが故に數數還來して諸の惡趣に墮ち生死の苦を受けん。若し能く常に是くの如き一法を念ぜば我れ彼れは定んで不還果を得て復、此の世間に還來して生れじと證せん。是の故に我れ說く。若し諸の有情、能く一法を念ぜば我れ彼れは定んで不還果を得と證せん」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

我れ諸の有情を觀ずるに　念施せざるに由るが故に
還來して惡趣に墮ち　生死を受けて輪迴せん
若し能く正しく了知して　永く施を念ぜば
定んで不還果を得て　此の間に來生せじ。

(三三)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。若し諸の有情、永く一法を念ぜば我れ彼れは定んで不還果を得と證せん。云何なるか一法と爲すや。謂はく是れ念天なり。所以は何ん。一切有情は念天せざるに由るが故に數數還來して惡趣に墮ち生死の苦を受けん。若し能く常に是くの如き一法を念ぜば我れ彼れは定んで不還果を得て復、此の世間に還來して生れじと證せん。是の故に我れ說く。若し諸の有情、能く一法を念ぜば我れ彼れは定んで不還果を得と證せん」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

我れ諸の有情を觀ずるに　念天せざるに由るが故に
還來して惡趣に墮ち　生死を受けて輪迴せん
若し能く正しく了知して　永く天を念ぜば
定んで不還果を得て　此の間に來生せじ。

(三四)吾れ世間に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。若し諸の有情、永く一法を念ぜば我れ彼れは定んで不還果を得と證せん。云何なるを一法と爲すや。謂はく是れ念休息なり。所

(三三)念天すれば不還果を得。

(三四)念休息すれば不還果を得。

何ん。一切有情は聖衆を念ぜざるに由るが故に數數還來して諸の惡趣に墮ち生死の苦を受けん。若し能く常に是くの如き一法を念ぜば我れ彼れは定んで不還果を得て復、此の世間に還來して生れじと證せん。是の故に我れ說く。若し諸の有情、能く一法を念ぜば我れ彼れは定んで不還果を得と證せん」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

　我れ諸の有情を觀ずるに　　聖衆を念ぜざるに由り
　還來して惡趣に墮ち　　生死を受けて輪迴せん
　若し能く正しく了知して　　永く聖衆を念ぜば
　定んで不還果を得て　　此の間に來生せじ。

(三一)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。若し諸の有情、永く一法を念ぜば我れ彼れは定んで不還果を得と證せん。云何なるか一法と爲すや。謂はく是れ念戒なり。所以は何ん。一切有情は念戒せざるに由るが故に數數還來して諸の惡趣に墮ち生死の苦を受けん。若し能く常に是くの如き一法を念ぜば、我れ彼れは定んで不還果を得て復、此の世間に還來して生れじと證せん。是の故に我れ說く。若し諸の有情、能く一法を念ぜば我れ彼れは定んで不還果を得と證せん」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰はく。

　我れ諸の有情を觀ずるに　　念戒せざるに由るが故に
　還來して惡趣に墮ち　　生死を受けて輪迴せん
　若し能く正しく了知して　　永く戒を念ぜば
　定んで不還果を得て　　此の間に來生せじ。

(三二)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。若し諸の有情、永く一法を念ぜば我れ彼れは定んで不還果を得と證せん。云何なるか一法と爲すや。謂はく是れ念施なり。所以は

(三一)念戒すれば不還果を得。

(三二)念施すれば不還果を得。

何ん。一切有情は念佛せざるに由るが故に數數還來して諸の惡趣に墮ち生死の苦を受く。若し能く常に是くの如き一法を念ぜば我れ彼れは定んで不還果を得て復、此の世間に還來して生れじと證せん。是の故に我れ說く。若し諸の有情、能く一法を念ぜば我れ彼れは定んで不還果を得と證せん」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

我れ諸の有情を觀ずるに　念佛せざることに由るが故に
還來して惡趣に墮ち　生死を受けて輪廻せん
若し能く正しく了知して　永く佛を念ぜば
定んで不還果を得て　此の間に來生せじ

吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。若し諸の有情、永く一法を念ぜば我れ彼れは定んで不還果を得と證す。云何なるか一法となすや。謂く是れ念法なり。所以は何ん一切有情は念法せざるに由るが故に數數還來して諸の惡趣に墮ち生死の苦を受く。若し能く常に是くの如き一法を念ぜば、我れ彼れは定んで不還果を得て復、此の世間に還來して生れじと證せん。是の故に我れ說く。若し諸の有情、能く一法を念ぜば我れ彼れは定んで不還果を得と證せん」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

我れ諸の有情を觀ずるに　念法せざることに由るが故に
還來して惡趣に墮ち　生死を受けて輪廻せん
若し能く正しく了知して　永く法を念ぜば
定んで不還果を得て　此の間に來生せじ。

(三〇)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。若し諸の有情、永く一法を念ぜば我れ彼れは定んで不還果を得と證せん。云何なるか一法となすや。謂く是れ念聖衆なり。所以は

(三〇)念法すれば不還果を得。

の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

我れ諸の有情を觀ずるに　慢の所染に由り
還來して惡趣に墮ち　生死を受けて輪廻せん
若し能く正しく了知して　永く此慢を斷ぜば
定んで不還果を得て　此の間に來生せじ

(二八)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。若し諸の有情、永く一法を斷ぜば我れ彼れは定んで不還果を得と證せん。云何なるか一法なりや。謂く害是れなり。所以は何ん。一切有情は害染に由るが故に數數還り來つて諸の惡趣に墮ち生死の苦を受けん。若し能く永く是くの如き一法を斷ぜば我れ彼れは定んで不還果を得て復、此の世間に還來して生れじと證せん。是の故に我れ說く。若し諸の有情、永く一法を斷ぜば我れ彼れは定んで不還果を得と證せん」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

我れ諸の有情を觀ずるに　害の所染に由り
還來して惡趣に墮ち　生死を受けて輪廻せん
若し能く正しく了知して　永く此の害を斷ぜば
定んで不還果を得て　此の間に來生せじ。

重ねて前の經を攝し、嗢拕南して曰く。

貪と欲と瞋と恚と癡と　覆藏と惱と及び忿と
怨恨と嫉と慳と　耽嗜と慢と將(はた)害となり。

(二九)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。若し諸の有情、永く一法を念ぜば我れ彼れは定んで不還果を得と證す。云何なるか一法となすや。謂はく是れ念佛なり。所以は

(二八)捨害すれば不還果を得。
【七】害とは他人に害惱を加へる心。害覺。

(二九)念佛すれば不還果を得。

爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を説いて曰く。

我れ諸の有情を觀ずるに　慳の所染に由り
還來して惡趣に墮ち　生死を受けて輪廻せん
若し能く正しく了知して　永く此の慳を斷ぜば
定んで不還果を得て　此の間に來生せじ。

(二六)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。若し諸の有情、永く一法を斷ぜば我れ彼れは定んで不還果を得と證せん。云何なるか一法なりや。謂はく耽是れなり。所以は何ん。一切有情は耽染に由るが故に數數還り來つて諸の惡趣に墮ち生死の苦を受けん。若し能く永く是くの如き一法を斷ぜば、我れ彼れは定んで不還果を得て復、此の世間に還り來つて生れじと證せん。是の故に我れ説く。若し諸の有情、永く一法を斷ぜば我れ彼れは定んで不還果を得と證せん」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を説いて曰く。

我れ諸の有情を觀ずるに　耽の所染に由り
還來して惡趣に墮ち　生死を受けて輪廻せん
若し能く正しく了知して　永く此の耽を斷ぜば
定んで不還果を得て　此の間に來生せじ。

(二七)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。若し諸の有情、永く一法を斷ぜば我れ彼れは定んで不還果を得と證せん。云何なるか一法なりや。謂く慢是れなり。所以は何ん。一切有情は慢染に由るが故に數數還り來つて諸の惡趣に墮ち生死の苦を受けん。若し能く永く是くの如き一法を斷ぜば我れ彼れは定んで不還果を得て復、此の世間に還り來つて生れずと證せん。是の故に我れ説く。若し諸の有情、永く一法を斷ぜば我れ彼れは定んで不還果を得と證せん」と。爾

(二六)捨耽すれば不還果を得。

(二七)捨慢すれば不還果を得。

時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰はく。

我れ諸の有情を觀ずるに　恨の所染に由り
還來して惡趣に墮ち　生死を受けて輪迴せん
若し能く正しく了知して　永く此の恨を斷ぜば
定んで不還果を得て　此の間に來生せじ。

(二四)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。若し諸の有情、永く一法を斷ぜば、我れ彼れは定んで不還果を得と證せん。云何なるか一法ぞや。謂はく嫉是れなり。所以は何ん。一切有情は嫉染に由るが故に數數還り來つて惡趣に墮ち、生死の苦を受けん。若し能く永く是くの如き一法を斷ぜば、我れ彼れは定んで不還果を得て復、此の世間に還り來つて生れじと證せん。是の故に我れ說く、若し諸有情、永く一法を斷ぜば、我れ彼れは定んで不還果を得と證せん」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

我れ諸の有情を觀ずるに　嫉の所染に由り
還來して惡趣に墮ち　生死を受けて輪迴せん
若し能く正しく了知して　永く此の嫉を斷ぜば
定んで不還果を得て　此の間に來生せじ

(二五)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。若し諸の有情、永く一法を斷ぜば、我れ彼れは定んで不還果を得と證せん。云何なるか一法なりや。謂はく慳是れなり。所以は何ん。一切有情は慳染に由るが故に數數還り來つて諸の惡趣に墮ち生死の苦を受けん。若し能く永く是くの如き一法を斷ぜば、我れ彼れは定んで不還果を得て復、此の世間に還り來つて生れじと證せん。是の故に我れ說く若し諸の有情、永く一法を斷ぜば我れ彼れは定んで不還果を得と證せん」と。

(二四)捨嫉すれば不還果を得。
(二五)捨慳すれば不還果を得。

の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

我れ諸の有情を觀ずるに　惱の所染に由りて
還來して惡趣に墮ち　生死を受けて輪迴せん
若し能く正しく了知して　永く此の惱を斷ぜば
定んで不還果を得て　此の間に來生せじ

(二二)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。若し諸の有情、永く一法を斷ぜば我れ彼れは定んで不還果を得と證せん。云何なるか一法なりや。謂く是れ忿なり。所以は何ん。一切有情は忿染に由るが故に數數還り來つて諸の惡趣に墮ち、生死の苦を受けん。若し能く永く是くの如き一法を斷ぜば、我れ彼れは定んで不還果を得て復、還來して此の世間に生れじと證せん。是の故に我れ說く。若し諸の有情、永く一法を斷ぜば我れ彼れは定んで不還果を得と證せん」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰はく。

我れ諸の有情を觀ずるに　忿に染せらるに由り
還來して惡趣に墮ち　生死を受けて輪迴せん
若し能く正しく了知して　永く此の忿を斷ぜば
定んで不還果を得て　此の間に來生せじ。

(二三)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。若し諸の有情、永く一法を斷ぜば我れ彼れは定んで不還果を得と證せん。云何なるか一法ぞや。謂はく恨是れなり。所以は何ん。一切有情は恨染に由るが故に數數還來して諸の惡趣に墮ち、生死の苦を受く。若し能く永く是くの如き一法を斷ぜば、我れ彼れは定んで不還果を得て復、還來して此の世間に生れじと證せん。是の故に我れ說く。若し諸の有情、永く一法を斷ぜば我れ彼れは定んで不還果を得と證せん」と。爾の

(二二)捨忿すれば不還果を得。

(二三)捨恨すれば不還果を得。

爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

我れ諸の有情を觀ずるに　癡の所染に由りて
還り來つて惡趣に墮ち　生死を受けて輪廻せん
若し能く正しく了知して　永く此の癡を斷ぜば
定んで不還果を得て　此の間に來生せじ。

(二〇)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。若し諸の有情、永く一法を斷ぜば我れ彼れは定んで不還果を得と證せん。云何なるか一法なりや。謂く是れ覆[六]なり。所以は何ん。一切有情は覆染に由るが故に、數數還り來つて諸の惡趣に墮ち生死の苦を受けん。若し能く永く是くの如き一法を斷ぜば、我れ彼れは定んで不還果を得て復、此の世間に還り來つて生せじと證せん。是の故に我れ說く。若し諸の有情、永く一法を斷ぜば、我れ彼れは定んで不還果を得と證せん」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

我れ諸の有情を觀ずるに　覆の所染に由りて
還り來つて惡趣に墮ち　生死を受けて輪廻せん
若し能く正しく了知して　永く此の覆を斷ぜば
定んで不還果を得て　此の間に來生せじ

(二一)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。若し諸の有情、永く一法を斷ぜば、我れ彼れは定んで不還果を得と證せん。云何なるか一法なりや。謂く是れ惱なり。所以は何ん。一切有情は惱染に由るが故に數數還り來つて諸の惡趣に墮ち生死の苦を受く。若し能く永く是くの如き一法を斷ぜば、我れ彼れは定んで不還果を得て復、此の世間に還り來つて生れじと證せん。是の故に我れ說く。若し諸の有情、永く一法を斷せば我れ彼れは定んで不還果を得と證せん」と。爾

(二〇)捨覆すれば不還果を得。
【六】覆。小煩惱、地法の一。自己の造つた罪を覆ひ隱す心の作用。名譽を維持し惡名を蒙らんことを恐るるが故になす隨煩惱。

(二一)捨惱すれば不還果を得。

攝して頌を説いて曰く。

我れ諸の有情を觀ずるに　瞋の所染に由りて
還り來つて惡趣に墮ち　生死を受けて輪廻せん
若し能く正しく了知して　永く此の瞋を斷ぜば
定んで不還果を得て　此の間に來生せじ

(一八)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。若し諸の有情、永く一法を斷ぜば我れ彼れは定んで不還果を得と證せん。云何なるが一法なりや、謂く是れ恚なり。所以は何ん。一切有情、恚染に由るが故に數數還り來つて諸の惡趣に墮ち生死の苦を受けん。若し能く永く是くの如き一法を斷ぜば、我れ彼れは定んで不還果を得て復、此の世間に還り來つて生ぜじと證せん。是の故に我れ説く。若し諸の有情、永く一法を斷ぜば、我れ彼れは定んで不還果を得と證せん」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を説いて曰く。

我れ諸の有情を觀ずるに　恚の所染に由りて
還り來つて惡趣に墮ち　生死を受けて輪廻せん
若し能く正しく了知して　永く此の恚を斷ぜば
定んで不還果を得て　此の間に來生せじ

(一九)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。若し諸の有情、永く一法を斷ぜば我れ彼れは定んで不還果を得と證せん。云何なるか一法なりや。謂く是れ癡なり。所以は何ん。一切有情は癡染に由るが故に數數還り來つて諸の惡趣に墮ち生死の苦を受けん。若し能く永く是くの如き一法を斷ぜば、我れ彼れは定んで不還果を得て復、還り來つて此の世間に生ぜじと證せん。是の故に我れ説く。若し諸の有情、永く一法を斷ぜば我れ彼れは定んで不還果を得と證せん」と。

(一八)捨恚すれば不還果を得。
(一九)捨癡すれば不還果を得。

と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

我れ諸の有情を觀ずるに　貪の所染に由つて
還り來つて惡趣に墮ち　生死を受けて輪廻せん
若し能く正しく了知して　永く此の貪を斷ぜん者は
定んで不還果を得て　此の間に來生せじ

(一六)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。諸の有情、永く一法を斷ぜば、我れ彼れは定んで不還果を得と證せん。云何なるが一法なるや。謂く是れ欲なり。所以は何ん。一切有情は欲染に由るが故に、數數還り來つて諸の惡趣に墮ち生死の苦を受けん。若し能く永く是くの如き一法を斷ずれば、我れ彼れは定んで不還果を得て復、此の世間に還り來つて生ぜじと證せん。是の故に我れ說く、若し諸の有情、永く一法を斷ぜば、我れ彼れは定んで不還果を得と證せん」と。爾の時、世尊、此の義を攝して頌を說いて曰く。

我れ諸の有情を觀ずるに　欲の所染に由つて
還り來つて惡道に墮ち　生死を受けて輪廻せん
若し能く正しく了知して　永く此の欲を斷ぜば
定んで不還果を得て　世間に來生せじ

(一七)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。若し諸の有情、永く一法を斷ぜば、我れ彼れは定んで不還果を得と證せん。謂く是れ瞋なり。所以は何ん。一切有情は瞋染に由るが故に數數還り來つて諸の惡趣に墮ち、生死の苦を受けん。若し能く永く是くの如き一法を斷ぜば我れ彼れは定んで不還果を得て復、此の世間に還り來つて生れじと證せん。是の故に我れ說く、若し諸の有情、永く一法を斷ぜば、我れ彼れは不還果を得と證せん」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を

(一六)捨欲すれば不還果を得。
(一七)捨瞋すれば不還果を得。

し安樂せん。能く現後を成じて利益し安樂せん。云何なるか一法なるや。謂く所修の諸の善法の中に於いて不放逸を修するなり。所以は何ん。若し所修の諸の善法の中に於いて不放逸を能く善く修習し、善く多く修習せば便ち能く二種の義利を攝持して圓滿するに至らしめん。廣說。乃至。能く現後を成じて利益し安樂せん。是れを一法と名く。若し善く修習し、善く多く修習して二利を攝持せん。廣說。乃至、能く現後を成じて利益し安樂せん」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

諸有る多聞の人　　能く財も位も貪ること捨てて
不放逸を勤修せば　　常樂の涅槃を證せん
智人は放逸すること無く　　能く二利を攝持す
謂く現法も當來も　　倶に圓滿するに至らしめん
諸有ゆる善を能く　　現にも後にも成じて倶に利樂せん
前後の衆の賢聖は　　皆稱して智人と爲す

重ねて前の經を攝し、[四]嗢拕南して曰く。

蓋と結と劫と兩心と　　業と二意と前行と
僧破と及び僧和と　　慢を斷ずると不放逸を修するとなり。

[一五]吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。若し諸の有情、永く一法を斷ぜば我れ彼れは定んで不還果を得と證せん。云何なるか一法なるや。謂く是れ貪なり。所以は何ん。一切有情は貪染に由るが故に數數還來して諸の惡趣に墮し、生死の苦を受けん。若し能く永く是くの如き一法を斷ずれば、我れ彼れは定んで不還果を得、復、此の世間に還り來つて生れずと證せん。是の故に我れ說く。若し諸の有情、永く一法を斷ずれば、我れ彼れは定んで[五]不還果を得と證せん」

【四】嗢陀南 Udāna. 鄔拕南といへば自說又は法印の義。嗢拕南といへば集散又は集施の義。今は自說を集約した意に用ひてゐる。故に集施と譯すべきか。

(一五) 捨貪すれば不還果を得。

【五】不還果、梵に阿那含 Anāgāmin. 欲界九品の思惑を斷盡して再び欲界に還來（還生）しない聖者の位。聲聞の四果の中の第三果。

（一三）「吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。世間の有情が一結を斷ずる時は餘の一切の結も皆亦隨つて斷ぜん。云何なる一結なりや。是れを我慢と謂ふ。所以は何ん。諸の所有ゆる結の細と中と麁品とは一切皆我慢を以つて根と爲し、我慢より生ず。我慢の長ずる所なり。是の故に我慢の一結を斷ずる時は、餘の一切の結も皆亦隨つて斷ず。譬へば世間の樓觀の中心は普く樓觀の衆の分の中心となる。中心が若し墜つれば餘も亦隨つて墮つるが如し。是くの如く我慢は諸の結の所依たり。我慢若し斷ずれば餘も亦隨つて滅す。若し諸の苾芻よ。已に我慢を斷ずれば當に知るべし。卽ち是れ已に餘の結も斷ずるなり。若し諸の苾芻よ已に餘の結を斷ずれば當に知るべし。卽ち是れ已に苦邊を盡せるなり。已に正智を修し、心善く解脫し、慧善く解脫し、復、後有無らん」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

樓觀の中心に　衆分は依止せらる
中心若し墜墮しぬれば　餘分は皆墮落するが如し
是くの如く我慢の結は　衆結の所依たり
我慢の結斷ずる時は　諸結皆隨つて滅せん
苾芻よ我慢を斷ずれば　餘結は悉く隨つて斷ぜらる
餘結既に已に斷ずれば　卽ち苦邊を盡くすことを得
既に苦邊を盡くすことを得れば　已に正智を修し
心も慧も善く解脫し　後有は畢竟して無しと名けらる。

（一四）「吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。世に一法有り。若し善く修習し、善く多く修習し、二利を攝持して圓滿するに至らしめん。謂く現法利にして圓滿するに至らしめ、及び後法利も利にして圓滿するに至らしめて、能く現法を成じ利益し安樂せん。能く後法を成じ利益

（一三）一結斷ずる時餘も亦斷ず。我慢是なり。

（一四）不放逸は現當二利安樂なり。

信せず、已に敬信せる者も還敬信せざらん。苾芻よ當に知るべし。是くの如きを名けて世に一法有り生起の時に於いて多くの衆生の與に不利益を爲し、不安樂を爲し、諸の世間の人天大衆を引いて無義利を作し大苦果を感ぜしむと爲す」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

世に一法有りて生ずれば　能く無量の惡を起さん
所謂僧の破壞なり　愚癡の者は隨喜せん
能く僧を破壞するは苦なり　衆を破壞するも亦苦なり
僧の和合せるを壞せしむれば　劫を經ても無間に苦しむ。

(二二)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。世に一法有り生起の時に於いて多くの衆生の與めに大利益を爲し、大安樂を爲し、諸の世間の人天大衆を引いて大義利を作し大樂果感ず。云何なる一法ぞや。是れを僧和と謂ふ。所以は何ん。苾芻よ當に知るべし。僧若し和合なれば一切の大衆は互に諍論すること無く、相ひ訶責せず、相ひ陵蔑せず、相ひ罵辱せず、相毀呰せず、相ひ怨謙せず、相ひ惱觸せず、相ひ反戾せず、相誹謗せず、相ひ棄捨せざらん。爾の時に當つては一切世間の未だ敬信せざる者は便ち敬信を生じ、已に敬信せる者は轉た敬信を增さん。苾芻よ當に知るべし。是くの如きを名けて世に一法有り生起の時に於いて、多くの衆生の與めに大利益を爲し、大安樂を爲し、諸の世間の天人大衆を引いて大義利を作し、大樂果を感ぜしむと爲す」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

世に一法有りて生ずれば　能く無量の福を起さん
所謂僧の和合なり　慧の利き者は隨喜せん
能く和合せる僧は樂し　和合せる衆も亦樂し
僧の破壞するを和せしむれば　劫を經るまで天の樂を受けん。

(一二)僧和合すれば人天大衆樂果を感ず。

說いて曰く。

諸の不善法生ずれば　因となつて能く苦を感ず
皆意を前導となす　煩惱と俱に生ず
意は前導の法たり　意尊くして意に使はる
意に由つて染汚有り　かるが故に說有り行有り
苦は此れに隨つて生ず　輪の手に因つて轉ぜらるるが如し。

(一〇)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。世間の所有ゆる白淨善法は生起の時に於いて善品も善類も一切皆意に由つて前導せらる。所以は何ん。意生起し已れば、白淨善法は皆後に隨つて生ずればなり」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

諸の善法生ずれば　因となつて能く樂を感ず
皆意を前導となす　善法を俱に生ず
意は前導の法たり　意尊くして意に使はる
意に由つて清淨有り　かるが故に說有り行有り
樂は此れに隨つて生ず　影の形に隨つて轉ずるが如し。

(一一)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。世に一法有り、生起の時に於いて多くの衆生の與めに不利益を爲し、不安樂を爲して、諸の世間の人天大衆を引いて無義利を作し、大苦果を感ぜしむ。云何なる一法ぞや。是れを破僧と謂ふ。所以は何ん。苾芻よ當に知るべし。僧にして若し破壞すれば一切の大衆は互に諍論を興し、遞ひに相ひ訶責し、遞ひに相ひ陵蔑し、遞ひに相ひ罵辱し、遞ひに相ひ毀呰し、遞ひに相ひ怨謙し、遞ひに相ひ惱觸し、遞ひに相ひ反戾し、遞ひに相ひ誹謗し、遞ひに相ひ棄捨せん。爾の時に當つては一切世間の未だ敬信せざる者は轉た敬

(一〇)善は意に前導せらる。

(一一)破僧なれば人天大衆苦果を感ず。

皆自業に屬す　業は其の伴侶たり
業は彼の生門たり　業は其の眷屬たり
業は所依趣たり　業は能く三品に定まる
業に隨つて彼彼に生れて　不定なること輪の轉ずるが如し
或は天人の中に處し　或は四惡趣に居す
世間の諸の有情は　皆業力に隨つて轉ぜらる
國も財も妻子も　隨從して餘生に往くに非ず
(八)彼れは命終の時に於いて　所有をば皆頓に捨て
獨り業のみを隨へて往く　かるが故に皆自業に由るなり
當來の諸の有情よ　是くの如く業によつて受くと雖も
若し能く佛敎に依り　正信にして出家せば
彼れは愚癡の類の　師に開導せらるること無き中に於いて
能善く修行せるもの　正法に愚ならざる者と名く
かるが故に汝等苾芻よ　精勤にして放逸なること勿れ
應に善く諸の業を知り　正しき修行を相續し
業の自性　及び業の因緣等を盡さんが爲めに
八支聖道を修し　速かに圓滿すること得せしむべし。

(九)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。世間の所有ゆる惡不善法は生起の時に於いて、諸の不善品も諸の不善類も一切皆意に由つて前導せらる。所以は何ん。意が生起し已れば、惡不善法は皆後に隨つて生ずればなり」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を

(八)命終の時には國財妻子は隨從せず。業のみを獨り隨へて往く。

(九)惡は意に前導せらる。

界身に趣く別品類業と、人界身に趣く別品類業と、天界身に趣くとなり。是くの如く應に諸業の品類を知るべし。既に正しく諸業の自性と諸業の因緣と業の品類とを了知し已れり。云何が應に諸業の異熟を知るべき。業の異熟とは謂く此の生に於いて諸の業を造作せん。即ち此の生の中にして能く諸有を感じ或は受け未だ受けざらん。是くの如く應に諸業の異熟を知るべし。既に正しく諸の業の自性と諸の業の因緣と諸の業の品類と業の異熟とを知り已れり。云何が應に諸業の盡滅を知るべき。業の盡滅とは謂く愛滅するが故に諸の業も盡く滅す。是くの如く應に諸業の盡滅を知るべし。既に正しく諸業の自性と、諸業の因緣と、諸業の品類と、諸業の異熟と、業の盡滅とを了知し已れり。云何が應に業滅に趣く道の因緣資具を知るべき。業滅に趣く道の因緣資具とは謂く八支聖道なり。即ち是れ正見・正思惟・正語・正業・正命・正精進・正念・正定なり。是くの如く應に業滅に趣く道の因緣資具を知るべし。苾芻よ當に知るべし。諸有る沙門或は婆羅門、若し能く正しく諸業の自性と諸業の因緣と諸業の品類と諸業の異熟と諸業の盡滅と業滅に趣く道の因緣資具とを知れば、即ち能く我が法の毘奈耶を信ずるなり。若し能く我が法の毘奈耶を信ずるは即ち能く我が法の毘奈耶に入れるなり。若し能く我が法の毘奈耶に入れば、即ち能く我が法の毘奈耶に達し梵行を修行せるなり。若し能く我が法の毘奈耶に達し梵行を修行すれば、即ち能く究竟じて正しく諸の業を盡せるなり。所以は何ん。是の諸の沙門或は婆羅は既に正しく諸業の自性と諸業の因緣と諸業の品類と諸業の異熟と諸業の盡滅と趣業滅道の因緣資具とを了知し已れるなり。即ち諸業に於いて能く厭離して滅し、究竟じて解脫し、善く解脫を得たるなり。既に善く解脫せり、既に能く獨立すれば即ち善修を具す。既に善修を具せば彼の身壞し已り、法爾として一切の施設有ること無し」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

世間の諸の有情の　　前中後際に居するは

間を觀ずるに、諸有の業果は皆心意に緣る。一類の有情、心意のままに使はれ、是くの如き行を行じ、是くの如き道を履み、身壞し命終して重擔を捐つるが如くにして、諸の善趣に昇り、天中に生れん。所以は何ん。彼の諸の有情は心意清淨なればなり。此れを因と爲すに由つて、身壞し命終して諸の善趣に昇り天界の中に生るるなり」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

一類の有情　　心意に清淨を起さん
我れ今當に汝が爲めに　　其の生ずる所を記別すべし
彼れは身壞し命終して　　重擔を捐つるが如くにして
必ず諸の善趣に昇り　　天界の中に生れん
應に知るべし善慧者は　　心意清淨なるに由る
斯の清淨に因るが故に　　當に天界の中に生るべし。

(七)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ。當に知るべし。一切有情は皆自業に由り、業を伴侶と爲し、業を生門と爲し、業を眷屬と爲し、業を依趣と爲す。業は能く一切有情の下中上品を分ち定む。是の故に汝等、應に善く知るべし。諸業の自性と、諸業の因緣と、諸業の品類と、諸業の異熟と、諸業の盡滅と、趣業の滅道と、因緣と資具とを。苾芻よ。汝等、我が所說の如く應に正しく了知すべし。云何が應に諸業の自性を知る。業の自性とは謂く或は思業、或は思已業なり。是くの如く應に諸業の自性を知るべし。既に業の自性を了知し已れり。云何が應に諸業の因緣を知るべき。業の因緣とは謂く諸の貪愛なり。是くの如く應に諸業の因緣を知るべし。既に正しく諸の業の自性と業の因緣とを了知し已れり。云何が應に諸業の品類を知るべき。業の品類とは謂く別品類の業なり。地獄身に趣く別品類業と、傍生身に趣く別品類業と、鬼界身に趣く別品類業と、阿素洛

(七)上中下品の果報は皆自業に由る。

況や初後際と無く　久しく生死に流轉して
受けし所の諸の骨身は　其の量測る可し
是の大苦聚を受けしことは　聖諦を見ざるに由る
かるが故に應に妙智を修し　正しく四眞實を觀ずべし
所謂苦聖諦と　苦の因と及び苦の滅と
能く苦と苦因とを滅する　八支の眞聖道となり
此の補特伽羅は　極は七たび流轉すること有らんも
定んで一切の結を斷じ　能く諸の苦邊を盡くさん。

(五)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ。我れは佛眼を以つて遍ねく世間を觀ずるに、諸有の業果は皆心意に緣る。一類の有情、心意のままに使はれ、是くの如き行を行じ、是くの如き道を履み、身壞し命終して重擔を捨つるが如くにして諸の惡趣に墮し、地獄の中に生ぜん。所以は何ん。彼の諸の有情は心意染汚なればなり、此れを因となすに由つて、身壞し命終して諸の惡趣に墮し地獄の中に生るるなり」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

一類の諸の有情　心意に染汚を起さん
我れ今當に汝が爲めに　其の生るる所を記別せん
彼れは身壞し命終して　重擔を捨つるが如くならん
必ず諸の惡趣に墮して　地獄の中に生ぜん
應に知るべし惡慧者は　心意染汚なるに由る
斯の染汚に因るが故に　當に地獄の中に生るべし。

(六)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ。當に知るべし。我れは佛眼を以つて遍ねく世

【三】補特伽羅 Pudgala 人又は衆生と譯すは舊譯。新譯は數取趣と翻ず。五趣の間に輪廻するからである。
(五) 心意染汚なれば惡趣に墮つ。
(六) 心意清淨なれば善趣に昇る。

世間の群生は貪愛の結に由り繫縛せらるるが故に、生死の長途に馳騁し流轉す。是の故に汝等、應に是くの如く學すべし。我れ當に云何が慧力を修瑩して貪愛の結を斷じ、大闇聚を破すべきと。汝等苾芻よ。應に是くの如く學すべし」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

別して一法が有ること無けれども　諸の群生は繫縛せられて
生死の途に馳騁す　貪愛結の如き者これなり
貪愛は大なる繫縛なり　斯れに由つて久しく流轉し
彼此に往來すること有り　高下の趣に昇沈す
若し貪愛の縛を斷じ　大黑闇の聚を破れば
生死の流に處せず　彼の因無きを以つての故に。

(三)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。若し一(ひと)りの有情、一劫の中に於いて生死に流轉せん。受くる所の身骨は、假使へば能く積聚して爛れず。其の聚の高廣は王舍城の(二)毘補羅山の如くなるものあらん。況や彼の有情は初際も後際も無く生死の長途に馳騁し流轉して、受けたる所の身骨は測量す可し。所以は何ん。苾芻よ當に知るべし。所以は何ん。苾芻よ當に知るべし。我が說くところの有情は(四)四聖諦に於いて了知せざるが故に、照見せざるが故に、現觀せざるが故に、通達せざるが故に、審察せざるが故に、生死の長途に馳騁し流轉して諸の骨身を受くるなり。是の故に汝等、應に是くの如く學すべし。我れ當に云何が四聖諦に於いて了知し照見し現觀し通達し審察し究竟せんとならば、汝等苾芻よ。應に是くの如く學すべし」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

一有情あり一劫　身骨を受けて爛れず
其の聚れる量は高廣にして　毘補羅山の如し

(三) 一劫の身骨は積つて毘補山の如く高廣なり。

【二】 毘補羅山 Vipula 尾布羅、鞞浮羅とも記す。廣大と譯す。摩竭陀國王舍城北門の西に有る山。廣博脇山と譯す。印度人は常に見て信じ易き故に佛處々にこの山を引ひて喩とされる。涅槃經二十二。智度論二十八。等の文は本文と同一。

(四) 四聖諦を了知し照見せざるが故に生死流轉す。

本事經【一】

卷の第一

大唐三藏法師玄奘詔を奉じて譯す

一法品第一の一

(一)吾れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ當に知るべし。我れ世間を觀ずるに別の一法も無けれども、群生は覆障せられて、生死の長途に馳騁し流轉す。無明蓋の如し。所以は何ん。世間の群生は無明蓋に由り覆障せらるるが故に、生死の長途に馳騁し流轉す。是の故に汝等、應に是の如く學すべし。我れは當に云何が慧明を修起して無明蓋を破し、貪愛の網より出づべきと。汝等苾芻よ。應に是く如く學すべし」と。爾の時、世尊、重ねて此の義を攝して頌を說いて曰く。

別して一法が有ること無けれども　諸の群生は覆障せられて
生死の途に馳流す　無明蓋の如き者これなり
無明は大愚闇なり　斯れに由つて久しく流轉し
彼此の往來有り　高下の趣に昇沈す
若し無明蓋を破すれば　貪愛の網より解脱し
生死の流に處せじ　彼の因無きを以つて故に。

(二)我れ世尊に從つて是くの如き語を聞きぬ。「苾芻よ。當に知るべし。我れ世間を觀ずるに、別の一法も無けれども群生は繫縛せられて生死の長途を馳騁し流轉す。貪愛の結の如し。所以は何ん。

【一】本事經、梵に伊帝目多伽。Itivṛttaka ?(梵) Itivuttaka (巴)如是語、又は如是說と譯す。十二部經の一たる伊帝目伽を顯揚論に「本事有とは如來が聖弟子の前世等の事を說くを謂ふ」と定義してゐるが、今は如來の如是語の一法、二法、三法を集記したものである。故に一般に認められてゐる十二部經の中の本事とは相違してゐる。一般には本事の定義を顯揚論の說に依つて解してゐるから。

(一) 無明蓋に覆障せられて生死流轉す。

(二) 貪愛結に繫縛せられて生死流轉す。

本事經解題

本經は玄弉三藏の譯であるとして內典錄以降の經錄は皆承認してゐる。譯出年時も內典錄七には「唐永徽年玄奘於長安譯」となし、又貞元錄十一には「見內典錄。永徽元年九月十日。於大慈恩寺翻經院譯。至十一月八日畢。沙門靖邁・神昉等筆受」となす。乍然、余の見た所では玄奘譯なりや否や多少の疑ひが存すると思ふ。例せば新譯ならば「阿那般那」等と音寫すべきを「安般」と舊譯の音寫を用ひてゐるが如きはそれである。但し偶誤であるとすれば別。思ふに弟子等が譯して未だ玄奘の修正が加へられなかつたものではなからうか。

本經を明の智旭は閲藏知津二九に雜阿含經の次に列ねてゐる。これは本經の內容が雜阿含と一脈相通ずる點があると考へたからであらう。知旭は本經に對して何等の解說を試みてゐない。唯、本經の各段の科目を列記したのみに過ぎない。この故に知旭の說は閲藏知津に配列した順序だけから推考する以外何等推定すべきものがない。余の考ふる所によれば本經は小乘經典成立史を研究する者に取つて貴重な資料であると思ふ。其の第一は經題の「本事」である。此の語は顯揚論等によれば、佛弟子の菩薩等の過去の生活を敘述したものが「本事經」であるが、本經は全く梵語の「伊帝目他伽」が示す所の「如是語」「如是說」を集記したものである。元來、九部經にせよ、十二分敎にせよ。「本事」なる語は本經の取扱つてゐる通りでなければならぬものと考へる。それを後世誤つて、佛弟子の菩薩の過去世の事件を記したものとしたのであらう。更に考究すべし。次は本經に三大師を列記してゐる。佛と無學と有學とである。一般に使用されてゐる三乘の用例が全く見られない。又佛子が類を以つて一團となつてゐることを記してゐる。これは佛滅後の僧團が如何なる狀態にあつたかを示すものである。本經には部派分裂以後の如き傾向が少しも記されてゐない。上記の如き諸の記事によつて本經は阿含經典成立の初期のものではなからうか。本經は原始經典成立史研究には特別に注意さるべきものであることを記して擱筆する。

昭和九年一月十三日

譯者　田島德音　識

一

說いて曰く。

過現未來の法は　唯語のみにして眞實無し　彼れ若し實處に於いては　一相無差別なり　若し相分別無ければ　是れ即ち眞相有るなり　無相無分別なれば　分別も亦無相なり　若し分別を作さず　涅槃を了別せずんば　是の二皆魔事なり　智者應に知るべし　陰界諸入の中に　我れ名字を說くと雖も　無生の名字なれば　彼の二ながら還つて一相なり　心を起して正分別するに　彼れ即ち邪念を成ず　妙智は無分別なり　有空を以つて行ずるが故に　分別すれば思量有り　無分別には思無し　了別は即ち是れ相　不了なれば涅槃を得　若し能く是くの如く知るものを　名けて大智者と爲す　是の故に盡智者は　智を得れども無分別なり　智能く智を說く　智還つて自ら空なりと說く　是の中にして能く忍(認可)する者を　是れを名けて大智と爲す　假使(たとひ)三千(世界)に滿てらん　七寶を持用して施さんにも　是の法を忍信(認許信順)せん者は　其の福最上たり　假使ひ億劫の中にして施戒忍精進し　通辨して福を成就せんとも　是の經を持つものには比べられず　若し是の經を持たん者は　至眞等(ほとけ)即ち說く　是の經の功德力をもて　彼れは悉く當に成佛すべしと。

爾の時、世尊、是の法本修多羅偈を說きたまへる時、一萬の雜類の衆生は　遠塵離垢して[九]　淸淨法眼を得[一〇]。五百の比丘は無漏法中に於いて心に解脫を得。八萬の欲界天子の未だ發心せざる者は皆阿耨多羅三藐三菩提心を發することを得たり。世尊は爾の時、即ち彼れに記を授けたまへり。皆　星宿劫[一一]の中に於いて阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得、皆同一號にして名をば法開華如來至眞等正覺と曰はんと。佛は是の經を說き已りぬ。文殊尸利童子、尊者舍利弗等の五百の比丘、天龍八部諸の鬼神等、佛の所說を聞きて歡喜し奉行しき。

佛說文殊尸利行經（終）

【九】遠塵離垢は煩惱の塵垢を遠離し斷滅すること。

【一〇】淸淨法眼諸法の眞實相を知りて利他救濟を行ふに繫縛なきをいふ。即ち中道の理を證悟した位。又は空理を證した位をいふ。

【一一】星宿劫とは未來の劫の名。現在の賢劫終つて次に星宿劫となり、月面佛から獅子佛まで千佛が出世するといふ。

比丘の輩は是の法本の甚深の義を聞くが故に、所有ゆる惡業重罪をもつて應に大地獄の中に墮ち、一劫、苦を受くべきものなりしが、今日大叫喚地獄の中に入り、一たび觸受し已つて即ち兜率天の中に上生すること得て諸天の樂を受けん。汝、舍利弗、當に知るべし。是の諸の比丘は此の法を聞くが故に速かに多くの罪を除き暫らく少しく輕受せるなり。汝、舍利弗よ、當に知るべし。是の一百の比丘は彌勒菩薩の下生して成道したまひ、初會に聲聞衆の中にして說法したまふときに阿羅漢果を得ん。諸の有漏を盡し、復煩惱無く、三明と六通と八解脫とを具し、身心と煩惱との二餘倶に盡くさん。是の故に舍利弗よ、寧ろ是の法本修多羅の中に於いて疑心をもつて聽受し、四禪定心及び四無量心を成就することを用ひざるなり、亦復、四無色定心を具足し成就することを用ひざるなり。何の以つての故に、復、是くの如きの法を成就する者なりと雖も、若し是の甚深なる法本を聞かずんば煩惱の中に於いて生老病死憂悲苦惱を解脫することを得ざらん。我れ此の輩を愍むがゆゑに是の法本を說けるなり」と。爾の時、尊者舍利弗、即ち文殊尸利菩薩に白して言さく。「希有なり。希有なり。文殊尸利、乃し能く善く是くの如き法本を說きたまへり。これ諸の衆生を敎化せんと欲するが故なり」と。文殊尸利菩薩の言さく。「舍利弗よ、眞實際は不增不減なり。法界は不增不減なり。衆生界も亦增減無し。所以は何ん。是くの如き等の法は但言說のみ有つて得べき者無し。彼れは此れを爲さず。此れは彼れを爲さず。即さ自ら無、自ら有、何んが依處。是の故に舍利弗よ、菩提は即ち是れ解脫なり。何を以ての故に、所有ゆる法智は異處無きが故に、作に非らず不作に非らず。若し是くの如く知るを名けて已に涅槃に入れる者なりと爲す」と。爾の時、世尊、即ち尊者舍利弗に告げて言く。「舍利弗よ、是くの如し、是くの如し。文殊尸利菩薩の所說の如く、眞實際の中には增も無く減も無し。法界も衆生界も亦增減無し。煩惱も受けず解脫も受けず」と。爾の時、世尊、是の語を說き已りて、重ねて眞實義を明さんと欲するが爲めの故に、復、妙偈を以つて頌を

者ならば、彼は亦見る可らず聞くことを得べからざるなり。是く如くならば彼の方も亦須らく捨離すべし。所以は何ん。所有ゆる文殊の一切の住處も是の處も及び文殊も皆所有無ければなり。無所有者すら尙親近すべからず亦須らく捨つべし」と。爾の時、文殊尸利菩薩是くの如く說ける時、五百の比丘は還り來りて衆に入り、文殊尸利に白して言さく「仁者の說ける所の如きは我等の爲めにせるには非ざるなり。云何がすれば能く仁者の說ける所を知りうるや」と。爾の時、文殊尸利菩薩卽ち諸の比丘を歎じて言く「善い哉、善い哉。是くの如し是くの如し。如來世尊は諸の聲聞衆のために是の法の中に於いては應に是くの如く作すべしといひ、之れを知らしむることを須ゆること莫りき。諸の比丘も是の法の中に於いて亦須らく是くの如く作すべしといひ之れを知ることを須ゆること莫りき。亦知ることを須ひざるにも非ざりき。所以は何ん。是くの如き法は卽ち是れ常住とも亦法界とも名くればなり。若し常住法界ならば無憶無念なり。無憶無念ならば一切無證無不證なり。無不證ならば亦非不證不憶不念なり。若し是くの如く知る者は、卽ち如來の眞實の聲聞の弟子と名けらる。名けて最上と爲し、應供と言はるることを得る者なり。爾の時、文殊尸利童眞菩薩是の語を說ける時、彼の五百の比丘衆の中に於ける四百の比丘は無漏法中に於いて心に解脫を得たれども、一百の比丘は更に毀呰を增し誹謗の心を起し、現身の中にして生れながら大地獄の中に陷ち入りぬ。

爾の時、尊者舍利弗、卽ち文殊尸利童眞菩薩に白して言さく「文殊尸利よ、仁者は何の故に衆生に順ぜずして法を說くや。是の一百の比丘をして退失して墮落せしめたりや」と。爾の時、世尊、卽ち尊者舍利弗に告げて言く「汝、舍利弗よ、是の言を作すこと莫れ。所以は何ん。舍利弗、是の一百の比丘、若し是の甚深の[八]法本を聞かずんば當に知るべし。彼の輩は必定して大地獄の中に墮せん。一劫の中に苦を受け、地獄より出で已つて然して後に方に人身を人道に得ん。以ふに彼の諸の

【八】法本とは法性。又は眞實の道理。本源的なる妙法。

夫法も有ること無く、阿羅漢も有ること無く、亦阿羅漢法も無くして而も得べき者なり。是の故に、阿羅漢は分別を作さず、作行無きを以つての故に、行處有ること無く作者有ること無し。即ち是れ寂定なり。不作をもつて有と爲す者、不作をもつて無と爲す者、不作をもつて非有非無と爲す者あらん。若し無作無爲は是れ中にして不可得なりといはゞ彼れは一切の有無の心を遠離することを得ん。行無くとも決定して正しく沙門果の中に住すと說言することを得可し」と。

爾の時、文殊尸利童眞菩薩、是くの如く說きし時、大衆の中に於いて五百の比丘有り、坐より起ち、世尊の前に於いて高聲に唱言すらく。「今より已去は文殊の身を見ることを須ひず。亦復其の名字も聞くことを須ひず。是くの如きの方處は速に應に捨離すべし。所有ゆる文殊の一切の住處には更に趣向するもの莫けん。所以は何ん。云何ぞ文殊は煩惱も解脫も一相なりと說くや」と。五百の比丘は一時に高聲に是の言を唱へ已つて皆各ゝ面を背けて衆より出で去りぬ。復是の念ひを作さく。「我等は云何ぞ佛世尊の自ら說法したまひし中に於いて、歡喜し樂學して梵行を修し已りしや。云何ぞ今日忽ちに是くの如き弊惡なる法を聞きしや」と。爾の時、尊者舍利弗、是の事を見已り、即ち文殊尸利童眞菩薩に告げて言く。「文殊尸利よ、汝是の法を說きて諸の衆生の輩に決定して是くの如きの法を了知せしむることを欲せざるや」と。文殊尸利菩薩の言く。「是くの如し、是くの如し」と。尊者舍利弗の言く。「文殊尸利よ、汝若し是くの如くならば、何が故ぞ此の五百の比丘坐より起つて、仁者の所說を毀呰し誹謗し、現に佛の前に於いて高聲に唱言して『文殊尸利を見るを須ひず。亦文殊尸利の名を聞くことを須ひず。是の方も亦須らく捨つべし。所有ゆる文殊の一切の住處にも皆往くべからず」と。是の言を唱へ已つて衆より出で去れり」と。爾の時、文殊尸利童眞菩薩、即ち尊者舍利弗を歎じて言く。「善い哉、善い哉。汝舍利弗、快よく能善く、彼の諸の比丘の唱告の言を說けり。何を以つての故に。實に文殊無くして而も得可きが故に。若し實に文殊無くんば得ざる

いても不證不說。現在の諸法に於いても不證不說ならん。彼の人は此に於いて法器たるに堪えん。煩惱見及び清淨見無く、有爲無爲見も有ること無き者は、彼れは此の說に於いて法器たるに堪えん。若し有我も無く無我も無く作行の中に於いて不取不捨ならん。彼れは此の說に於いて法器たるに堪えん。是くの如き人は能く聽受すると雖も亦是れ所說の法の中に於いて最も決定了義の說たらざるなり」と。爾の時、尊者舍利弗は復、文殊尸利菩薩に問ふて言く。「若し仁者の所說の如くならば、是の義の中に於いて云何が修行し、云何が教住するや」と。文殊尸利菩薩、卽ち尊者舍利弗に語つて言く。「舍利弗よ、若し是の義の中にして言說すること有る可く、問ふて云何が教住するやと言ひ得べし。是の義の中に於いては既に言說も無く諸の心行も斷ぜるなり。云何ぞ問ふて云何が教住するやと言ふや」と。爾の時、尊者舍利弗、卽ち文殊尸利菩薩に白して言さく。「仁者文殊よ、此の義は甚深なり。是の義の中に於いて少しく證知すること有らん者、少しく受持すること有らん者は、何を以つての故に一切の學人、諸の阿羅漢等、是の地の中に於いてすら猶尙迷ひに沒せり。況や諸の凡夫豈に能く是の甚深の義の中に於いて能く知り能く了ぜんや」と。文殊尸利の言く。「舍利弗よ、諸の阿羅漢は是の義の中に於いて地分有ること無し。所以は阿羅漢は地分の住することを得べきもの有ること無ければなり。無住を以つての故に阿羅漢と名けらるるなり。言語道斷の故に阿羅漢と名けらるるなり。言語道斷を以つての故に、所有ゆる阿羅漢地分の行者は無爲法を以つて名を得るなり。不發を以つての故に則ち無爲と名けらるるなり。作者有ること無く亦住處も無し。云何ぞ阿羅漢に所得地有りと名けらるるや。諸の阿羅漢は名を以つてせざるが故に名けて阿羅漢となすなり。色を以つてせざるが故に阿羅漢となすなり。誰、諸の凡夫は名色の中に於いて妄りに分別を作す。是くの如き名色は實は分別も無きなり。諸の阿羅漢は皆是くの如く知つて分別を生せず。諸の阿羅漢は名を以つてせず色を以つてせず、これを名けて阿羅漢と爲すなり。凡夫も有ること無く凡

汝・今云何ぞ是く如きの言を作すや。『我れは過去未來現在の諸法に依つて行ず』と。唯、舍利弗よ、過去際・未來際・現在際に彼れは此れを爲さず。此れも彼れを爲さず。各各別異に相ひ爲作せず。處所も有ること無く、亦依住も無く、所住も無く、依處も有ること無くして得べきなり。復次に舍利弗よ、若し人有りと言く。過去未來現在は實際の中に於いて依處有りと說き依處無しと說かん者は、當に知るべし、彼の輩は如來を誹謗して大重罪を獲べし。所以は何ん。彼の眞實際は無憶無念亦無墮落なり。形色も有ること無く相狀も有ること無くして而も得べき者なり。唯、舍利弗よ。眞實際の中には過去未來現在の諸法は實に不可得なり。略說。乃至心意等の法も亦不可得なり。實際を離れては外に一法も無し。而も得べき者なり。是の故に說ひて之れを名けて空と爲すと言ふ。空なるが故に法無く、顯說すべきもの無し」と。爾の時、尊者舍利弗、即ち文殊尸利童眞菩薩に問ふて言く。「如來は實際に住せざる可くして說法したまふや」と。文殊尸利菩薩、即ち尊者舍利弗に答へて言く。「舍利弗よ。眞實際の中に何なる處所有りて而も如來を實際に住せしめて諸法を說かしむるや。舍利弗よ、法は本より自ら無なり。云何ぞ如來が實際に住し已つて諸法を說きたまふや。但、法無きのみに非ず、如來も亦無し。既に如來無し、云何ぞ如來が眞實際に住し已つて諸法を說きたまふや。所以は何ん。一切諸法は皆不可得なり。如來も亦爾り、實に不可得なり。所說の法體も亦復是くの如し。時中も不可得なり。非時中も不可得なり。時非時中も亦不可得なり。如來は復、說時中・不說時中に在つて顯現することを得べきに非ず。所以は何ん。舍利弗よ、如來は言語道斷・無爲無作なり安置する所無し」と。爾の時、尊者舍利弗は復、文殊尸利菩薩に問ふて言く。「文殊尸利よ、仁者の說く所の如くんば誰れか此の處に於いて法器たるに堪ゆるや」と。文殊尸利菩薩、即ち尊者舍利弗に答へて言く、「舍利弗よ、若し人有つて世諦を破壞するとも亦復涅槃に入る當からざらん。彼の人は此に於いて法器たるに堪えん。若し復能く過去の諸法に於いても不證不說。未來の諸法に於

と。爾の時、文殊菩薩は卽ちに復、舍利弗に問ひて言く。「汝が意において云何。爲當して有を未だ斷ぜざる者をして斷除せしめんと欲するがための故に坐禪せりや。爲、過去・現在・未來の三世の法に依るがための故に坐禪せりや。爲、色受想行識等の五陰の法に依るがための故に坐禪せりや。爲、眼耳鼻舌身意等の諸根識に依るがための故に坐禪せりや。爲、色聲香味觸法等の六塵の法に依るがための故に坐禪せりや。爲、欲色無色界等の三有の法に依るがための故に坐禪せりや。爲、若しは內、若しは外、內外差別の法に依るがための故に坐禪せりや。爲、若しは身、若しは心、若しは身心名色の法に依るがための故に坐禪せりや。是くの如き等の法を我れ已に汝に問へり。汝應に速かに答ふべし。何に依つて坐禪せりや」と。爾の時、尊者舍利弗卽ち文殊尸利に答へて言く。「仁者。我れ今現に諸法の樂行は念不忘なりと見る。かるが故に坐禪せり」と。文殊尸利菩薩、復更に舍利弗に問ふて言く。「舍利弗よ。實に諸法には現に樂行を見る者有つて念不忘なりや不や。」舍利弗の言く。「仁者文殊よ。是くの如き樂行の法は我れ實に見ざるなり。仁者文殊よ。是く如き樂行の法は我れ見ずと雖も、佛世尊は曾て聲聞一切の諸衆の爲めに寂定法を說きたまへり。是く如き法は我れ之れに依行せり。」文殊尸利菩薩、復、尊者舍利弗に問ふて言く。「何等の諸法をば如來は曾つて諸の聲聞衆の爲めに是れ寂定なりと說きたまひしや。汝は依行せりや。」舍利弗の言く。「仁者文殊よ。一の比丘有り、過去未來現在の諸法に依つて行ぜりと略說せり。乃至心意等の諸法に依つて行ぜるが如く、彼の行法の如く(行ぜり)。是れ佛世尊が聲聞一切の諸衆のために是の寂定を說きたまへるなり。これ我が依行せるものなり」と。文殊尸利童眞菩薩、復、尊者舍利弗に問へり。「汝言く。如來は曾つて聲聞一切諸衆のために彼の三世乃至心意を說きたまひ、我れは依行せる者なりと、是の事然らず。何を以つての故にといふに、卽ち彼の過去にも現に如來なく、彼の未來世にも現に如來なく、現在世にも彼の如來なし。若し是く如くならば一切諸法において如來身を求むるに皆不可得なり。

佛說文殊尸利行經

隋天竺三藏[一]豆那掘多譯す

我れ豆那掘多、大智海の毘盧遮那如來に歸命す。是くの如く我れ聞きぬ。一時、婆伽婆[二]は王舍城祇闍崛山の中に住し、大比丘衆五百人と倶なりき。皆是れ大阿羅漢なり。諸漏已に盡き復煩惱なく、三明六通あり八解脫を具し、慧心無疑にして[三]具足清淨なり。是の如き等の五百の比丘は各自房に於いて結加趺坐し身心寂靜にして[四]三昧正受す。爾の時、文殊尸利[五]童眞菩薩は自身の行法を發起し衆をして聞知せしめ大利を護せしめんと欲ふが爲めの故に最も先に起ち、一一次第に遍く諸[六]房を觀る。卽ち尊者舍利弗は獨り一房に處り其の身を折伏し結加趺坐して三昧に入れるを見る。爾の時、文殊尸利童眞菩薩は是く如く見ること已つて亦覺より發たず、更に諸處に詣り餘の房を觀察し、是くの如く展轉して乃し晨朝の日の初出の時にまで至りぬ。是の時に當つて舍利弗等の五百の比丘は皆已に出定せり。是の諸の比丘及び餘の比丘にして諸方より來れる者も一切大衆は皆悉く雲の如くに集れり。爾の時、世尊は卽ち此の時に於て坐より起ち、平身正直從容として徐ろに歩み、[七]安諦として行きたまふこと師子王の如くしたまひき。自房より出で坐を敷きたまひぬ。一切大衆は左右に圍繞せり。世尊を敬念するをもつて敢えて前に當らず。爾の時、世尊、大衆の中に處し無上首と爲り光顏巍巍として猶し金山の若く、大悲の雲に乘じて諸の法雨を雨らしたまふ。爾の時、文殊童眞菩薩は大衆の中にして尊者舍利弗に問ひて是くの如きの言を作せり。「我れ向者に遍く諸房を觀じたり。我れ時に汝は獨り一房に處り結加趺坐して其の身を折伏せるを見たり。汝、時に爲當して坐禪せりや不や」と。尊者舍利弗は卽ち文殊尸利菩薩に答へて言さく。「我れは是の時に實に坐禪せり」

【一】豆、元明二本闍に作る以下同じ。豆那掘多は闍那崛多。翻じて德志といふ。北印度犍陀羅國人。宇文周武帝(AD. 561—577)の時に長安に到り、隋の開皇二十年(AD.600)まで譯經に從事して沒した。譯經は三十七部。壽七十八。

【二】婆伽婆 Bhagavat 薄伽梵と同じ。世尊と翻ず。

【三】具足清淨。無量の戒德が身に具足して身心清淨なるをいふ。

【四】三昧正受 Samādhi, Sm-atha 三摩地。奢摩他。禪定が成就して心念散亂せず、身心を靜め、眞空の理に住して移らぬ狀態をいふ。

【五】童眞と童子の如く無欲にして迷見を起さず菩提心を破らず眞正なる中道に安住するが故に名く。

【六】房とは部屋のこと。又佛堂に附屬して建てた屋舍。

【七】安諦は恐く安詳。

光明經・般舟三昧及び陀羅尼經典を譯してゐるから彼の學系は法華・寶積・陀羅尼呪藏等を兼學せるものであることが知られる。彼と同時代に渡來した菩提留支と譯文上互に其見解を異にした結果、留支と譯場を別にしたと傳說されてゐるが、これ留支が天親學系に屬するのに崛多は法華及び呪藏等を並學する學系であつたからであらう。從つて本書には留支と崛多との兩譯が出來たのであらう。同本異譯ではあるが天親學派の空論と法華・寶積・金光明・呪藏並學の空論とには自ら空の意義の相違が文底に含蓄されるのである。學者幸ひに兩譯の異同を硏精せられむことを。

本經の所說を略述すれば、文殊尸利童眞菩薩が入定して、定中から諸比丘の房を巡行した。この時に舍利弗の坐禪入定してゐるのを見た。後に佛前に諸比丘と共に集會して文殊と舍利弗との二人が互に問難して、阿羅漢の證悟する空の義理に就いて顯示する所があつた。爾の時、五百の比丘は文殊の說を聞き、この義を受けるに忍び難く遂に會座を起つて衆の中から出で去つた。文殊は舍利弗の疑問に答へて更に空義の法要を說いた。五百の比丘は再び還つて來て、この說を聞き、四百人の比丘は阿羅漢果を證したが、一百の比丘は文殊を毀呰して座を去ると直ちに彼等は大叫喚地獄に墮ちた。舍利弗復これを問ふたので、佛これに答へていふ。此の百比丘はこの法要の聞不聞とに關らず墮獄必定の機であつた。若し此の法要を聞かなければ、彼等は獄にあること一劫の永い間苦を受くべきであつた。然るに今この法要を聞いたので暫く地獄に墮ちたが忽ちに獄を出で兜率天に生れ、未來世に彌勒菩薩が成佛する時には、初會に列つて羅漢果を證することを得る人々である。此によつて是の法要を聞かなければ、四禪四定を修して果を得ても、生死を解脫することは出來ない。設令へ聞いて疑惑し毀呰しても猶ほ聞かない者よりは勝れてゐると。この語を聽いて大衆皆信受奉行した。以上が本經の大要である。

昭和八年十二月三十日

譯者　田島徳音　識

佛說文殊尸利行經解題

本書は隋の豆那掘多三藏譯（大正藏經十四經集部一 No. 471, pp. 512—514.）に係るものを國譯したのである。僅かに一卷の小部の經ではあるが空思想研究上注意すべきものの一である。

本書は重翻されたもの。隋の彥悰の衆經目錄第二には

文殊師利巡行經　一卷　後魏(西魏元氏)世留支譯
文殊尸利行經　一卷　大隋開皇年崛多譯
右二經同本異譯

とあり、隋以降の各經錄皆悉く此の說に從ふが、內典錄・開元錄・貞元錄とは本書翻譯の年月及び筆受等を詳記してゐる。今開元錄第七の文を抄記すれば

文殊尸利行經一卷　第二出。與文殊巡行經同本。開皇六年三月出四月訖。沙門僧曇筆受。沙門彥琮製序。見長房錄。

とある。これに依つて本書の譯出年月が知られるのである。崛多は先きに周（宇文氏）明帝時代に長安へ到り四天王寺に住し翻經に從事したが、周武帝の廢佛の難に遇ひ突厥へ去つた。然るに隋興つて佛法また興起するに及んで勅を以つて崛多を招ずるや、再び渡來し、開皇五年から同二十年壽七十八で歿するまで譯經に從事した。隋代の譯出は開元錄第七によれば三十九部一百九十二卷の多きに及んでゐる。そして譯出年代を見るに開皇五年十二月は一部、同六年は五部あり二月・四月・六月・七月の四ケ月間だけ翻經、同七年は二・五・八月の間に四部譯訖。八・九・十の三ケ年間は譯訖がなく、十一年には四部譯出。この中、佛本行集經六十卷は七年から十一年まで五ケ年の歲月を費したもの。十二年は譯訖なく、十三年は一部だけ譯訖。十四年には三部。十五年は八部。十六年は一部。其他は譯訖の年代不明。上記によれば本書は崛多再渡の第二年に譯訖したものである。

本書所說の空思想は般若經典に現るものと相似し龍樹が中觀論で論述してゐる空觀と類同するものと考へる。八不中道說は出されてゐないが煩惱菩提の超絕を述べ、三世不可得を論じ、如來を否定し去つて空を力說するが如きは全く般若畢竟空思想に出脚したものと思ふ。但し本書に明す空は絕待的空であつて空の存在性を許さない。有無の非でも非々でもない。故に有無の執著を離脫した自在を指して空と名けたものといへる。崛多は法華經の重譯をなし、寶積部の經典・金

狐狗食噉し糞土と同じく流れん。何ぞ嚴飾を用ひんや。卽ち持ちて佛塔に入り佛像相好を見、心に念を生じて言はく、此は是釋迦牟尼佛像の相好なり。續いこ佛の功德を念ずらく、佛は是れ一切智人なり、大慈大悲なり、十力四無所畏等の功德を念じ已りて心熱し毛竪つ。卽ち華を以て佛に上る。佛に上り已つて念じて言はく、佛一華もて供養せば必ず大報を得と聞くと雖も、齊限の多少を知らず。卽ち出でて勸化の道人を見て問うて言はく、一花を以て佛に散ずれば幾許の福德を得んや。答へて言はく、我世苦を厭うて五欲を捨て出家して受戒せるのみ。經書を讀まざれば此の如き深き事は我能く知らず。當に讀經の聰明者に問ふべし。卽ち往いて讀經道人に問ふ。答へて言はく、我は畫師の如し、隨所に聞見すれども天眼神通有ることなし。善惡の果報を知見すること能はず、卽ち坐禪道人を示して往きて問ふべしと。坐禪道八は、上座は是六通の羅漢なれば必ず此事を知らん。卽便ち往いて念佛の功德を問ふ。心熱く毛竪ち、一花を以て佛に散ぜば幾許の福德を得るや。阿羅漢卽ち爲に之を觀ずるに、此身を捨て已れば次第に天上人中の福德を受け一世より千萬億世に至り、一大劫より乃ち八萬大劫に至るまで福猶ほ盡きず、是を過ぎて以往は復た知ること能はず、阿羅漢自ら衆より推擧せられしを以て一花果報の云何を知らずして卽ち此人に語れり。小住語り已りて遺化し、身は兜率天上に至り、彌勒の所に詣り具に賢者の所說と稱して之を彌勒に表せり。幾許の果報を得るやと。彌勒答へて言はく、知ること能はず。正使恒河沙等の一生補處の菩薩すら尙知ること能はず。況んや我が一身においておや。所以は何ん。佛には、無量の功德有りて福田甚だ良し、中に於て種々の果報無盡なり。我が將來の成佛を待たば乃ち能く之を知らん。

佛說雜藏經（終）

ふ。人民聚落、寶輸の庫藏に珍奇あり、資生も自然なり。今、乞兒と作り、獨り行きて食を乞ふ。豈に樂しむべけんや。汝還つて道を罷め相與に國を分半して治めん。道人答へて言はく、我は大國土にして聚落甚だ多し。今復た何に緣て大を捨てゝ小に就かんは、我が宜しとする所に非ず。蓱沙王復た問ふ。汝本と食するに上味を以てし、盛るに寶器を以てす。今瓦の鉢を執り殘宿食を乞ふ。亦難からずや。汝本と王たり、勇夫將士侍衞せるも、今日は單獨なり豈に恐怖せざらんや。汝は本と深宮に在りて夫人后妃・妓女娛樂・好聲妙色ありて耳目を盈悅せり。坐するに寶床を以てし、敷くに婉綖細褥を以てせしに今日は飄然と獨り林野に宿し臥すには草の蓐を敷けり。豈に苦しからずや。道人報へて言はく、我は此を以て足るを知り貪樂する所無し。蓱沙王言はく、汝は是憐むべき人なり。道人答へて言はく、汝こそ憐むべき人にして我には非ざるなり。所以は何ん。汝は五欲の爲に纏はれ、恩愛に驅使せられ自在を得ず。我今心意靜悅せり、無欲自在にして快樂種々なり。蓱沙王の爲に說法し已りて王卽ち還り去れり。

問うて曰はく、此四衆は皆佛道を好めり、欲行の菩薩に三事あり。欲一日一夜の行者有り。欲七日の行者有り、乃ち終身の行者有り。幾許の福を得ると爲すや。答へて曰はく、此問甚だ深し。吾答ふること能はず。唯佛のみ能く此福の多少を知らん。自ら如來を捨てなば能く了ぜざるなり。月氏國王の如きは佛道を求めんと欲して三十二の塔を作り、佛相を供養して一一之を作り三十一に至りし時、惡人有りて王に觸れたれば王の心退轉せり。此の如き惡人は云何か度すべけん。卽時に廻心し生死を捨てゝ涅槃に向はしむるには第三十二の浮圖を作り以て解脫を求めよ。是因緣に由つて羅漢道を成ぜり。是故に此寺を波羅提木叉と名づく。自爾より以來、未だ二百年に滿たず。此寺今在り。吾亦之を見る。寺々に皆好形の像有り、王の世を去りて後、一人菴羅樹の花を得たり。其色金の如し。是人好花を得て首飾と爲さんと欲して卽ち自ら惟念らく、此頭は無常なり。壞する時は

如く日明なり。衣裳服飾本の如くして王の邊に在りて立てり。王欲心發りて即ち起ちて捉へんと欲す。月明念じて言はく、此人欲態不淨なり。何ぞ之に近づくべけんや。是に於て即ち還つて虚空に上昇し去り、王の爲に説法し王に語るらく、此身は無常にして彈指を保ち叵きこと、譬へば朝露の日出づれば則ち滅するが如し。惟に無常なり。身に貪著せざれ。王見ずや。盛年の華の色は老いては呑滅せらる。諸根朽邁し　目は視るに明かならず。耳は聽くに聰からず、形敗れ腐朽すれば復た直する所無し。譬へば酒を釀すが如し。淳味を緑取すれば糟には直する所無し。王は身既に老ひたり。貪樂すべきもの無し、唯死のみ在る有り。是身既に生るれば死常に與に倶なれり。王見ずや。胎中にて死する者あり、胎を出でゝ死する者あり、壯時に死する者あり、老時に死する者あり、是身は危脆なり。死賊常に隨ふ。須臾も信じ叵し。身心炎然せり。但だ是衆苦のみ。心に三毒の憂惱あり。身には寒熱飢渴の衆患有り。而も生きて厭はず我身に貪著せり。宮人妓女・華色五欲・國賊妻子、悉く我有に非ず。死至るの時は一も隨ひ去るもの無し。身さへ自ら尙棄つ。何に況んや餘物おや。生死は憂喜なり。一も奇とすべきもの無し。凡細は愚闇にして五欲に迷沒し、生死に迴流し、出路を知ること莫し。王は是れ智人なり、何ぞ厭離して出家求道せざるや。王時に善心生じ、其出家を許す。月明重ねて之を化して曰はく、君當に出家すべし、當に好師を求むべし、當に妙法を聞くべし、妙法を聞き已れば受て修行すべし。日夕精進し懃懃して懈ること勿れ。此語を說き已つて忽然として現ぜず。王、天明に至りて位を太子に讓り五欲を捨離し、迦旃延に投じて出家して道を爲す。時人其國王の重き榮利を捨てゝ正眞の道を求むるを以て、臣吏人民多く來りて供養し恭敬し、問訊して修道の業を妨ぐ。是に於て遊行して摩竭國に至る。佛爲に說法して阿羅漢道を得たり。諸根靜寂して求欲する所無し。瓦鉢を執持して王舍城に入り、乞ふて宿飯を得、齋に林中に還りて草に坐して食ふ。洴沙王出遊して遇見し、林に詣つて問訊せり。汝本と王たり嘗に出入し椎鐘鳴皷に從

らんとするの相現じ、半歳を過ぎずして奄然と殞逝せんとす。恩愛離苦のため憂感して視ず。月明怪みて之を問ふ。王、死の事大を以ての故に其憂惱を恐れ隱して說かず。慇懃に重ねて問ひしかば王便ち答へて言はく、汝の壽命は短かし、將に終り久しからざらん。愛離の情あり、是故に愁ふのみと。月明白して言さく、夫れ生るれば死有るは自ら世の常なり。何ぞ獨り憂へんや。若し顧みて念を降めば但だ相を告示し出家を見放せよ。王其言を善とし其入道を聽す。王は果報を證明し信心を增益せんと欲して之に結誓の語を與へて言はく。汝若し出家せば持戒思惟し設ひ未だ成道せずとも必ず天上に生れ、天上に生れ已らば還つて我所に至れば汝の出家を聽さん。月明即ち其誓を許し、是に於て諸の比丘尼を喚び即ち度して將て去れり。貴重を以て能く五欲を捨てたれど、多く來りて問訊し恭敬供養して其道業を妨ぐ。是の故に諸國を遊行せり。出家の日より數六ケ月を滿て持戒清淨にして懃めて道を思惟し世間を厭惡し阿那含道を得、一聚落に於て命終し、即ち色天上に生ぜり。昔の因緣を觀ずるに王に要あり。要によりて本誓に赴くに、王は五欲に沒し憍佚にして化し難きを觀、直爾に往けども以て感發すること無し。宜しく恐逼を以て爾して乃ち降伏せんと。便ち自ら身を變じて大羅剎と作り衣毛振ひ堅て、五尺の刀を執り、王夜靜かに臥するに因て之を去ること遠からず、虛空の中に在り。王覺め已つて甚だ大いに怖畏す。語つて言はく、汝、士衆十萬有りと雖も今は唯我に屬せり、自在なることを得ず。死時已に至る、何の緣か濟すことを得んやと。王即ち報へて言はく、我に因緣無し、惟だ本と作せし所の善を恃み心を清淨に修め死して善處に生ぜん。天は之言を可とせん。此の如き因緣をば最も恃むべしと爲し更に餘の理無し。王便ち問ふて言はく、汝は是れ何神ぞや。我をして大いに怖畏を生じ退縮せしめしは。天答へて言はく、我は是月明夫人なり、王、出家を聽し思惟して欲を離れ色天上に生れたれば、今來りて要に赴きたるなり。王言はく、汝此を說くと雖も我猶は信ぜず、汝本形に復さば爾乃ち信ずべしと。天即ち形を變ふれば本の

し信心純厚なれば、知必ず報有らんと。故に浴具を設け以て供養を爲し、自ら惟ふらく、功を爲すこと少しと雖も以て良因に遇はゞ獲報甚だ多からんと。即ち舍利弗の所に詣り散花供養す。舍利弗其の淨信の心に因つて卽ち爲に說法し須陀洹道を得せしむ。

目連復た一神を見る、身體極めて大きくして金色の手有り。五指より常に甘露を流す。若し行人有らば須ふる所の飲食、資生の具は盡く指より出で恣に之を與ふ。目連問ふて言はく、汝是何天なれば福報功德の奇特なること乃ち爾るはと。天王答へて言はく、我は忉利天王に非ず、乃至第六天王に非ず。亦梵天王にも非ず。我は是大鬼神なり乃ち其國の大城に依つて住し遊行し觀看せんが爲の故に此に來至せり。目連問ふて言はく、汝何の善行を爲してか此の如き報を得つる。答へて言はく、彼國の大城を名づけて羅樓と曰ふ。我昔中に在り、貧しき女人と作り叉毛を織り囊を縷み賣りて以て自活せり、居計貧に轉じ屋舍壞盡し逐はれて陌頭に至れり。近くに一(ひとり)の大富にして好施の長者の家有りて囊を織りて自活せり。日中せんと欲する時。若し沙門婆羅門の鉢を持てる乞食有りて我に問ふて言はく、某長者の家は何處に在りと爲すや。我心は眞實にして虛妄有ることなければ、歡喜して手を擧げ其家を指示して言はく、彼處よ去れ、彼處よ去れと。日時過ぎて復た餘の求なし。是因緣を以ての故に、報を得ること是の如し。貧女人の隨喜心を以て行施者を助くるさへ報を得ること此の如し。何に況んや布施を實行する者に於てをや。

佛在世の時、五大國王有り。迦葉佛の時善知識と爲り出家して道を爲す。釋迦文佛世に出でゝ皆道迹を得たり。今一王の得道の因緣を說かん。國名は槃提、王を憂達那と名く。其國は殷富にして人民は熾盛なり。王に二萬の夫人有り。第一の夫人は字は月明といひ容儀端正にして王甚だ愛敬す王時に大に會し衆の伎樂を作し月明に命じて舞はしむ。月明夫人は依るに上服を以てし金銀名寶をば其身に瓔珞し、舞甚だ奇雅なれば衆の歡情を悅ばしむ。王善く相を能くし其夫人を見るに將に終

官法の之を都市に戮すを畏れ、常に恐怖を懷いて相續せり。是故に此罪を受く。此は是悪行の華報なり。後方に地獄の果を受くるのみ。

復た一鬼有りて問ふて曰く、我此身を受け肩の上に常に銅瓶有り、中に淨銅を滿せり。手に一杓を捉り取りて自ら頭に灌ぐに舉體焦爛す。是の如き苦を受くること無數無量なり。何の因緣有りて罪咎此の如きや。目連答へて言はく、汝前身の時、出家して道人と爲り僧の飲食を典す。一酥瓶を以て私に餘處に著け、客の道人の來る有らば之を與へず、去已れば酥を出し行きて舊僧に與ふ。此酥は是れ招提の僧物にして一切有分なるを此人藏隱せり、與ふと雖も不等なり。是緣に由るが故に、此罪を受くるなり。

目連復た一の天女の一の蓮華の上に坐せるを見る。縱廣百由旬なり。此華は獨妙にして餘者に殊り、欲する所の資生の具、宮殿飲食など念に得んと欲するに隨ひ盡く華より出で進止身に隨ふ。目連問ふて言はく、何の善行を爲して此の如き報を受くるや。天女答へて言はく、迦葉佛滅度の後、全舍利を遺すに諸弟子の輩、七寶の塔を建つ、高廣四十里なり。時に我女人となりて出でゝ寶塔中の佛像の相好を見て信敬の情發り佛の功德を念じて頭上の華を脫ぎ像に奉獻せり。是因緣を以ての故に報を受くるに獨妙なること此の如し。

舍利弗、夏盛熱の時、遊行して菴羅園中に至るに一の客作人有りて井水を汲みて樹に溉灌せり。此人佛に於て大信有ることなく、舍利弗を見て小の信心を發せり。舍利弗を喚んで言はく、大德來つて衣を脫ぎ樹下に坐れ、我當に水を以て之に澆がば溉灌を失はず、兼ねて相利益せんと。是に於て舍利弗、衣を脫いで洗を受け身に凉樂を得、隨意に遊行せり。此客作の人、其夜命終りて卽ち忉利天上に生れ大威力有りて釋提桓因に次す。便ち自ら念じて言はく、我何の因にて此に生ぜしやと。自ら宿命を觀ずるに、信心は微薄なれども客作として溉灌汁水し舍利弗を洗浴せしに因るなり。若

是の如し。此は是惡行の華報なり。地獄の苦果は方に後に在るのみ。

復た一鬼有り、目連に白して言さく、我身に常に火の出づる有り。焦熱し懊惱す。何の因緣の故に爾るや。目連答へて言はく汝前世の時、國王の夫人と作る。更に一夫人あり。王甚だ幸愛せり。常に妬心を生じ伺ひて危害せんと欲す。王の臥より起去るに値ふ。時に愛する所の夫人は眠りより猶未だ起きず衣を著せり。卽ち惡心を生ず。正に餅を作らんとするに値ふ。熱き麻油あり。卽ち以て其腹に濺ぐに、腹爛れて卽死せり。是因緣を以て罪を受くること是の如し。

復た一鬼有り、目連に白して言さく、常に旋風有りて我身を迴轉し、自在に意に隨つて東西することを得ず。心常に惱悶せり。何の因緣の故に爾るや。目連答へて言はく、汝前世の時、常に卜師と作り或時は實語し或時は妄語し人心を迷惑し隨意なることを得ず。是故に此の如き罪を受く。此は是華報なり。地獄の苦果は後に在り。

復た一鬼有り、目連に白して言さく、我身は常に塊肉の如し。手脚、眼耳鼻等有ること無し。恒に虫鳥の爲に食はれ罪苦堪え難し。何の因緣の故に爾るや。目連答へて言はく、汝前世の時、常に他の藥を與へて他の兒胎を墮せり。是故に此の如き罪を受く。此は是華報なり。地獄の苦果は方に後に在るのみ。

復た一鬼有り。目連に白して言さく、常に熱鐵の籠有り、籠は我身に落ち焦熱懊惱す。何の因緣の故に此の如き罪を受くるや。目連答へて言はく、汝前世の時、常に羅網を以て魚鳥を掩捕せり。是故に此の如き罪を受く。此は是惡行の華報なり。苦果は後に在り。

復た一鬼有り。目連に白して言さく。我れ物を以て自ら頭を蒙籠せり。亦常に人來りて我を殺すかと畏れ、心常に怖懼し堪え忍ぶべからず。何の因緣の故に爾るや。目連答へて言はく、汝前世の時、婬にして外色を犯し常に人の見るを畏れ、或は其夫や主の捉へ縛りて打殺さんかと畏れ、或は

ふ。是因緣を以ての故に斧還つて舌を斫るなり。

復た一鬼有り、目連に白して言さく、我常に七枚の熱鐵の丸有りて直に我口に入る。入りては復た五藏焦爛し、出でゝは還つて復た入る。何の因緣の故に此の如き罪を受くるや。目連答へて言はく、汝前世の時沙彌行を作すに果蓏子の師の所に到るに、其師を敬ふが故に偏心多くして實の長きもの七枚をのみ與ふ。是故に此の如き罪を受く。此は是華報なり。後に地獄の果を受けん。

復た一鬼有り、目連に白して言さく、常に二つの熱鐵の輪有り、我兩腋の下に在りて轉じ身體焦爛す。何の因の故に爾るや。目連答へて言はく、汝前世の時、衆僧と與に餅を作り盜心より二番を取り兩腋の底に挾めり。是故に此の如き罪を受く。此は是花報なり、後方に地獄の果を受けん。

復た一餓鬼有り、目連に白して言さく、我丸は極めて大きく甕の如し、行く時は擔ひて肩の上に著け住すれば則ち上に坐り進止患苦するは何の因緣の故に爾るや。目連答へて言はく、汝前世の時、市令となり常に輕き秤もて小しく斗りて與へ、重き秤にて大きく斗りて取り常に自ら大利を己に得んと欲して餘人を侵剋せり。是故に此の如き罪を受く。此は是華報なり、地獄の苦果は方に後に在るなり。

復た一鬼有り、目連に白して言さく、我常に兩肩に眼有り。胸に口鼻有りて頭有ること無し。何の因緣の故に爾るや。目連答へて言はく。汝前世の時恒に魁を作りて弟子を膾にし、若し罪人を殺す時は汝常に歡喜の心有り、繩を以て髻に著け之を挽けり。是因緣を以ての故に此の如きの罪を受く。此は是惡行の華報なり。地獄の苦果は方に後に在るなり。

復た一鬼有り、目連に白して言さく、我に常に熱鐵の針有りて我身に入出し苦を受けて賴無し。何の因緣の故に爾るや。目連答へて言はく、汝前世の時、調馬師と作り、或は調象師と作り、象馬は制し難ければ汝鐵針を以て脚に刺す。又時に牛の遲きも亦針を以て刺す。是故に罪を受くること

報なり、後方に地獄の苦果を受くること億百千倍ならんと。

復た一鬼有り。目連に白して言さく、大德よ、我常に身の上に糞有りて遍く塗漫し亦復之を噉ふは何の因緣の故にや是の如き罪を受くるや。目連語りて言はく、汝前世の時、婆羅門と作り惡邪にして罪福を信ぜず、乞食の道人有らば意に更に來らしめんことを欲せず、卽ち其鉢を取りて中に糞を盛滿し飯を以て上に著け、持ちて道人に與ふ。道人得已りて持ちて本處に還り手を以て飯を食ふに糞により其手を汚しき。是故に今日此の如きの罪を受く。此惡行の華報なり、後方に地獄の苦果を受けんと。

復た一鬼有り。目連に白して言さく、大德よ、我腹極めて大きくして甕の如く咽喉手脚は甚だ細くして針の如ければ飮食を得ず、何の因緣の故に此の如き苦を受くるや。目連答へて言はく、汝前世の時、聚落の主と作り自ら豪貴を恃み飮酒すること縱橫にして餘人を輕欺し、其飮食を奪ひ衆生を飢困せしむ。是因緣に由りて此の如き罪を受く。此は是華報なり、地獄の苦果は方に後に在り。

復た一鬼有り、目連に白して言さく、我常に溷に趣きて糞を食はんと欲するに大群の鬼有りて捉へて杖もて我を驅り、厠に近づくことを得せしめず。口中は爛れ臭ひ、飢え困んで賴無きは何の因緣の故に此の如き罪を受くるや。目連答へて言はく、汝前世の時佛圖の主と作る。諸の白衣の賢者有りて衆僧を供養し設食の具を供せり。若し客僧の來ること有らば汝便ち粗に麁供を設け、客僧去り已らば自ら細者を食す。是因緣を以ての故に糞すら尙得がたし、何に況んや好食をや。此は是華報のみ、後當に地獄の果を受くべしと。

復た一鬼有り、目連に白して言さく、我身上に遍滿く舌を生ずるに斧來りて舌を斫れば斷續して復た生じ此の如くして已まず。何の因緣の故に爾るや。目連答へて言はく、汝前世の時、道人となり、衆僧差ひに蜜漿を作り、石蜜の塊大にして消し難ければ斧を以て之を斫り、盜心もて一口に噉

佛說雜藏經

東晋の平陽沙門法顯譯す

佛弟子諸の阿羅漢は諸の行において各第一たりき。舍利弗の如きは智慧第一にして微妙の法を樂說す。目連は神足第一にして常に神通に乘じて六道に至り衆生の善惡の果報を受くるを見、還り來て人の爲に之を說く。目連は又一時、恒河の邊に至るに五百の餓鬼が群來して水に趣かんとし、守水鬼有り鐵杖を執りて、驅馳し近づくを得ざらしめんとするを見る。是に於て諸の鬼は目連の所に逕詣し、目連の足を禮し、各其罪の因緣を問ふ。

一鬼有り、目連に白して言さく、大德よ、我此身を受けて常に熱渴を患ふ。先に此の恒河の水の淸凉にして且つ美しきを聞き歡喜して之に趣き、中に入りて洗浴するに而も便ち沸熱し擧身爛壞せり。若し一口も飮まば五藏焦爛し臭み當るべからず。何の因緣の故に此の如き罪を受くるや。目連報へて言はく、汝先に世に相師と作りて人の吉凶を相するに實は少く虛は多く、或は毀り或は譽め、自ら審諦なりと稱して以て人心を動かし、詐惑欺誑して以て利養を求め衆生を迷惑し如意の事を失はしむ。是故に今日此水の淸凉にして且つ美なるを聞くと雖も、到れば意の如からず此は是惡行の花報なり、後方に地獄の苦報を受けんと。

復一鬼有り。目連に白して言さく、我常に大狗の利牙赤目なるものゝ爲に來りて我肉を噉はる。遺して骨のみ有る在り。風還つて吹起らば肉續いて復た生じ、狗復た來り噉ふ。我常に此苦を受くるは何の因緣の故に爾るや。目連答へて言はく。汝前の世の時、天祠の主と作り常に衆生を敎へ、羊を殺して血を以て天を祠らしめ汝自ら肉を食ふ。是故に今日肉を以て之を償ふ。此は是惡行の華

佛說雜藏經解題

經題の示すが如く內容も繁雜である。まづ鬼問目連經と相似たる餓鬼と目連との得罪因緣の問答が十七ケ條あつて、次に目連が天女や天王等の得福の因緣を訊ねる話を出し、次に佛在世當時の槃提國の憂達那王の得道に至る月明夫人との因緣例話を出し、その後に供養に依つて得る福德の功德を校量した月氏國王の話を以て結んでゐる。其の一經の要とする所は善惡の業の因緣を說いて正しく應報のあることを教へ、多少の功德も莫大な功德となり、やがては成佛の種子となり、差少の罪過も墮獄の因となることを教へてゐるのである。

猶ほ佛說鬼問目連經より本經までの五經の譯出に就いては特に福田實衍君の勞を俟つこと甚だ多し。茲に附記して謝意を表す。

昭和九年一月八日

譯者　清水谷恭順　識

盲聾瘖瘂瘸　跛躄にして行く能はさる　度世の法有りと雖も　聽受聞することを得ず　長夜に此苦を受く　宛轉して車輪の如し　身を受けて根具はり　端正にして辯聰明なりと雖も　邪見にして顚倒に墮し　佛經有るを信ぜず　或ひは屠・網・獵に行き　酒樂して情欲に著す　身を沒して閻王を見　罪至れば乃ち怖驚す　邊地には義理無く　父子相ひに汝を噬す　室家更ひに相賣り　人に屬して奴虜と爲る　恒に蓄へて驅使を給せられ　動靜に杖楚を加へらる　人形と爲るを得と雖も　畜生と共に同侶なり　世間は純ら淑善にして　師の法則有ることなし　當に長壽天に生ぜば　無形にして但識のみ有り　壽命は延長すと雖も　三塗は隣側たり　後に曲蟮蟲と作りて　泥沙を飲食と爲す　八難處に在るを以て　復た人と爲るを得難し　譬へば海の盲鱉の　浮木の孔に値はんと欲するが如し　先づ死して須く河に墮せば　甫來已に過去なり　法に値ふに已に沒盡す　輙ち佛の故處に生じ　法船壞せんと欲するが爲に　思惟して甘露に入る　精進して諷を勉と爲し　善知識を師と爲す　精進を大力と爲し　慧明は日光に踰ゆ　甘露をもて諸毒を消し　亦能く五陰を除く　若し人已に信を有たば　佛敎戒に住在すべし　便ち道通じて亦利あり　以て甘露の門を開く　甘露の聲已に出づれば　三界遍に分明なり　已に大要道を開かば　但だ當に正意もて行ずべし　一心向ふところ在在　道の爲に中止すること莫れ　人の意譬ひ稱す如きも　常に當に攝して拘牽すべし　止と觀とを思惟せよ　是を世間の明と爲す　叉手して頭腦を持たば　三界皆佛を禮せり。

五苦章句經　終

經典の號くる所を云何か奉行せんと。

佛、阿難に言はく、是經をば淨除罪蓋娛樂佛法と名け、一に投無思議光菩薩道決と名け當に之を奉持すべし。族姓の子及び族姓の女は其形壽の盡くる迄如來を供養し、之の宜しきに隨ひ其の所安に從へ。若は天華を以て須彌山の如く用ひて佛の上に散ぜよ、及以び名香・澤香・雜香・繒蓋・幢幡など謙敬し貢上せよ。

精進して懈らざること族姓女に如かず。是經法を受け奉持し諷誦し廣く人の爲に說き修法に遵つて行ぜよ。是の如く敎ふる所の功德福祐は彼の供養に過ること巨億萬倍なり。佛言はく、阿難よ、常に當に法を以て如來を供養すべし。若し無上大聖を奉敬せんと欲はゞ當に斯經を受け、持ちて諷誦し他人の爲に說き及び法卷に應ふべし。佛是の如く說きたまふ。無思議光菩薩・賢者阿難・一切衆會・阿須倫・世間人民は佛の說きたまふ所を聞いて歡喜せざるはなく禮を作して去りき。

天上の福已に盡きなば　墮して牛領蟲と爲る　譬へば大田家の　收入甚だ大豐なるが如し　但だ食ひて復た種えず　穀盡きて饑窮せず　食福も亦是の如し　福盡くれば罪中に墮す　人身甚だ得難く　根を具することも亦甚だ難し　百劫復た百劫　時に乃ち人と爲るを得　戒を失はゞ人の本を離る　但だ因緣に坐著して　厭足を知らざるが故に　受苦は彌連の如し　蜎飛蠕動の類は　其神は同一の原なり　坐して不與取を犯し　貸を借りて還す心無し　寄を受けては拒抵し　頭を持ちて人に觸突すれば　畜生の中に展轉し　其苦は縷陳し難し　佛、餓鬼の苦を說く

但だ饑渴の患有り　東西に飮食を求め　水穀の聲を聞かず　軀體は一由旬にして　倮形、髮は身を遶る　但だ坐して慳みて獨り食ふ　故に黑繩城に墮つ　鐵圍兩山の間　窈窈して何ぞ冥冥なる　識神其中に墮ち　日月の精を覩ず　展轉して相見ず　但だ叫呼の聲を聞く　一切の衆惡の聲は　苦痛にして人の情を傷る　旣に生れて人と爲るを得ば　當に身に諸の殃を受くべし

人に告げて曰く、汝是を見已りて當に自ら思惟すべし。汝の身も亦更に生れ更に老ひ、更に病み更に死す。汝逆罪を犯せば亦當に彼の如く現に其殃を受く。汝何ぞ父母に孝順に、長老を謙敬し、慈仁を首と爲さゞる。心に欲せざる所は亦人に施すこと勿れ。世に賢明有り、當に從つて啓受すべし。三尊に歸命し、心を責めて道を奉じ情を節し欲を止め苦を得度すべし。汝の所作により今當に之を受くべし。吾汝を枉げず。罪人、王に白さく、我等生ける時は實に但だ苦劇にして修爲を得るに暇あらざりき。王、獄卒に告ぐ、汝便ち將に去りて其劇處に到れと。獄卒を阿傍と名く。牛頭にして人手、兩脚は牛蹄なり。力壯にして山を排き銅鐵の叉を持つ、叉に三股有り、一叉に罪人數百千萬を鑊中に內る。其鑊の縱廣等は四十里あり自然に制持して墮落せざらしむ。罪過未だ畢らざるが故に死せざらしむ。口より底に至るに百歲なり。乃至、底より上に至るも亦復百歲なり。是を劇處と名づく。諸の罪人、罪を受け更に楚毒に苦しみ十八處を遍ず。中に罪畢つて當に出づることを得べき者有らば王復た之に現じて曰く、汝等今去りて或は人家の爲に子と作り生るることあるべし。當に孝順を念ひ父母の恩に報ゆべし。年盛時に曼べば當に惡を忍び善を爲し篤く三尊を信じ、戒を守り、道を奉じ諸の功德を修し復た惡を作すこと莫れ。還り來て此に入るなかれ。夫れ地獄は終に人を呼ばず、善く自ら之を思へと。諸の罪人歡喜して皆萬歲を稱ふ。

佛言はく、諸の法を聞くもの乍ち信じ乍ち信ぜざるもの有り、進退に狐疑して還つて邪に入る者は、皆地獄より來出し閻王の教を受けし者は信根淺少なり、故に其をして然らしむ。爾の所作の功德と雖も終に唐捐ならず、佛の弘慈亦遺忘せず、但だ劫數に之を弘めんのみ。然らば其も久しき後亦當に得度すべし。

爾時佛、阿難に告げたまはく、是經典を受け持ちて諷誦し讀みて廣く人の爲に說かば疾く時に達せしめ、普ねき法澤を來世に流布せんと。阿難、佛に白して言はく、唯當に之を受くべし、今斯の

佛言はく、昔は菩薩、閻羅王の爲に弘普の慈有り、諸の罪獄に墮する者には王盡く之に現じ、王曰く汝等何を是間に爲せるやと。罪人對へて曰く、我等死せるの時如行を知らず、諸惡自然に追逐して我を送つて來り是間に到れり。願はくば王よ、我を哀れみ罪過を赦除せよ。王曰く、汝等皆何の惡を作せしや。罪人對へて曰く、我等生ける時は父母に孝ならず、殺盗婬欺にして飲酒鬪亂し、力を恃んで強勢に善人を侵易し聖道を誹謗せり、作す所の衆惡具に說くべからず。又、惡師を信じて鬼神を祠祀り、當に福有るべしと謂ひて三生を殺して神靈に禱賽せり。我今自首して作す所の惡を悔むと。王曰く、汝等世間に在るの時、吾れ五使者を遣はして天下を案行せしめて語りて汝曹に告げたり。汝曹何を以てか其敎を受けざりしや。諸の罪人曰く、我等生ける時實に見聞せざりき。王曰く、諦聽せよ、當に汝曹の爲に說くべし、五使者とは一には曰く世間の母人は懷妊すること十月、身は之が爲に病み、當に產の時日に臨んでは父母危を怖る。旣に身死より免かるゝことを得、生を得ては乳哺懷抱し燥を推り濕に居り長大に逮得ぶ。憂慮萬端汝之を見るや不や。罪人曰く、之を見たり。王曰く、是吾が一の使者なり。二に曰く、世間の老人は顏色壞敗し頭は白く齒は落ち目は冥し耳は聾し肉は皺より皮は縮み傴僂となりて行く。汝之を見るや不や。罪人曰く、之を見たり。王曰く、是れ吾が二の使者なり。三に曰く、世間の病人は困劣して床に著くに百痛普く至れば美食も惡しと爲す。汝之を見しや不や。罪人曰く、之を見たり。王曰く、是吾が三の使者なり。四に曰く、世間にて人死すれば刀風脈を斷ちて其命根を拔き身體は正直して十日を滿てずして肉壞れ血流れ膖脹して爛れ臭ひ取るべき者無し。生ける時相愛せるも死すれば皆相惡む。汝之を見るや不や。罪人曰く之を見たり。王曰く、是吾が四の使者なり。五に曰く世間にて罪を犯せば縛束せられて獄に送られ桁・械・鞭・笞・五毒普く至る。之を都市に戮し或は手足を截り、火燒せる鐵質もて之を斬り梟挓五刑す。汝是を見しや不や。罪人曰く之を見たり。王曰く、是吾が五の使者なり。王復た罪

み無し、是を福德と謂ふ。何をか禁戒と謂ふ、口を守り意を攝め身に殺さず盜まず婬せず欺かず奉孝して醉はず、三惡趣の苦は久しく處るべからず、是を禁戒と謂ふ。先づ此意を了せば乃ち道と爲すべし。捉綱には先づ其綱を攝むるが如し。諸目皆正しくとも持てる綱を曉かにせずんば先に其目を理むるとも顚倒錯亂し互相に絆遶して解き已ること有ること無し。學も亦是の如し。其要に達せずんば經中の說を聞きても權宜を解せず。分別すること能はず。便ち相譏恃して遂に所守に執し恚の意を興起して本を失ひ義を忘れ、正を毀ち邪を遂ふ。學者雷同して音響を追逐し相匡正せず。眞を識る者少く墮落する者滋多し。此の如きの輩徒らに學の名を戴けり。

曰く、四諦とは一には曰く苦諦、二には曰く集諦、三には曰く盡諦、四には曰く道諦なり。一切衆生は此を苦と覺らず、苦を以て樂と爲し、罪苦の中に於て安きを得んと求欲す。賊醫や僞說は人心を迷惑せり。便ち所作は現世に得べしと言ふ。學者之を聞きて隨喜せざるはなし。中至の言を聞ては耳に逆ひて受けず、故に正言反に似たりと言ふ。誰か能く受くる者は集を知らず、集を知る者は死すとも、死して敢て復た作さず、復た知り盡さず。盡を知る者は死すとも死して敢て復た作さず。復た道を知らず、道を知る者は道を聞いて便ち能く道と爲す。一切世間の人は罪事を作すことは易く、福事を爲すことは難し。一切の學士は福事を作すことは易く道の事を爲すは難し。道を爲すは復た易く道を解するは難し。道を說くは易く之を行ふは難し。故に甚だ難し、甚だ難しと言ふ。

曰く、如來衆經に禁戒の律法は凡て八萬四千卷有りて一切の良藥と爲り、人の身口意を治し、人の生老病死を療すのみ。衆生を敎ふるに二要有り、何をか謂つて二と爲す。一には是を作して是を得、二には是を作さず是を得ず。佛の所說の如き三界五道の罪垢苦惱は作を離れず。一切無橫にして天の授與に非ず、亦鬼神に非ず、亦帝王に非ず、亦父母に非ず、亦沙門梵志の授與にも非ず。所作の罪福は影の形に隨ふが如く、響の聲に應ずるが如くして毛髮の如く失はざるものなり。

作無く、始無く終無し。新學之を聞かば其意驚疑せん。諸の驚疑者に三の因緣有り。一に曰く本功德少し。二に曰く明師を得ず。三に曰く經學を勸めず。自ら意を用ひて吾我に著し、名色を逐うて利養を貪求し、所行諛諂にして至信有ること無し。如の是きは深法忍に近づくこと能はず。曰く、空と無所有と無相と無願と是れ道の要慧なり。道は空を以て上と爲す。學は無爲を以て先と爲す。此三句は新學人の爲に之を說くべからず。無所有と聞ては便ち其意を曠うして復た戒を修めず、罣礙する所無し。六德中に於て事事懈廢して一切空と言ふ。當に何の所作なるべきや。口には但だ空と說き行は有の中に在り。四顚倒に墮するが故に無功德と言ふ。菩薩は應に無所從生法忍を聞かしむべからず。夫れ善知識の新學を敎へんと欲するには稍稍漸を以て敎へて魔事を語りて魔より護らしむ。因緣生死の罪苦は五道分明なれば罪福を信ぜしめ事事了了に乃ち道を語る可し。昔、分和檀王は佛と智を捔ふ。佛、王に告げて曰く海水を以て墨を磨り、樹を斫りて筆と爲し吾が知る所を寫して經卷と爲すに、海水竭盡き樹枝了索すれども吾が經は盡きず。爾る所以は佛には三達の智有り。來今往古通ぜざるはなし。佛經は衆多ければ虛空を以て量と爲し、佛智弘深ければ無造を以て原と爲す。經中演ぶる所思議すべからず。或は反覆有りて了し難く明らめ難けれど、粗ぼ六事を以て其要を知る可し。一に曰く正道、二に曰く善權、三に曰く至敎、四に曰く誘導、五に曰く福德、六に曰く禁戒なり。何をか正道と謂ふ、說くに端緒無く、造ること無し、是を正道と謂ふ。何をか善權と謂ふ、變化無方、或は出で或は處り、類に隨つて入つて與に因緣と爲す。時宜に說いて章句合せず、化に趣いて之を度す、是を善權と謂ふ。何をか至敎と謂ふ、罪福を指示し、是を作さば是を得。皆行の致す所なれば橫より與ふ者無し。其事明白なり、是を至敎と謂ふ。何をか誘導と謂ふ、童蒙の人を開かば天有德を護り壽を增し算を益すことは現世に獲つべし。是を誘導と謂ふ。何をか福德と謂ふ、六度無極にして六情を主治し根門を制守すれば天人、轉輪聖王たるを得べく長樂極

昔は阿難邠邸家に五の福德因緣有り。何を謂つてか五と爲す。一に曰く時節、二に曰はく身敎、三に曰く口言、四に曰く一味、五に曰く和順なり。何をか時節と謂ふ。晝夜六時に禮敬を失はざる、是を時節と謂ふ。何をか身敎と謂ふ、長者起くる時室內の大小隨はざる者無し、是を身敎と謂ふ。何をか口言と謂ふ、長者所作有らんと欲し、福事を興す時、先づ家中に報じ皆其敎に從ふ、是を口言と謂ふ。何をか一味と謂ふ、衣食平等にして奴婢も亦然なり、是を一味と謂ふ。何をか和順と謂ふ、上下相從うて相違戾せず、是を和順と謂ふ。是五福を以て家中奴婢・牛馬六畜・蜎飛蠕動死して皆天に生ず。其れ人家に有りて宿止經歷せる飛鳥走獸も其居室を過ぐる者は死して皆天に生ず。長者の家、合門の內に能言の屬をして口に法音を誦せしめ經聲を絕えざるを用ひんに其の音を聞いて耳中に入る者有らば歡喜せざるは無し。心は則ち是本なり。是故に天に生ず。亦是れ長者の本願の致す所、無數劫よりこのかた口言篤信にして人を欺慢せず諸惡の與に共に因緣を作らず。功德純ら淑大なり。僧那力の故に其をして然らしむ。

天地の境界三災に遭ふ時、其中の所有は一切皆盡くれども彼の界に及ばず。大劫盡の時一佛境界あり、其中に凡そ百億の須彌山、百億の鐵圍山有り、一切皆盡くれども彼の佛國に及ばざるなり。是の如く十方諸佛の國には無極の虛空、無極の衆生、無極の佛國、無邊の虛空、無際の衆生、無原の大千國土あり、如來中に滿て億劫の壽を以て衆生の有始有終を說きたまはず。如來の智は一切衆生の無底を了知したまふが故に般若波羅蜜無底、衆生無底と言ふ。

佛又四種の生有ることを說きたまふ。一に曰く胎生、二に曰く卵生、三に曰く濕生、四に曰く化生なり。此は四を分別して說けるのみ。一切を示語して種類を知らしむれば三界五道の衆生、一切の所有は皆是化生なり。故に言ふ。一切は化の如く、夢の如く、影の如く、響の如く、水月の如し。作者有ること無し。先づ此意を了せば乃ち道と爲すべし。道も亦化の如し。一切は原無く、造無く

り。何をか謂ふ、栴檀と栴檀と以て叢林を爲すと。有る家、長者道を爲し家室眷屬皆其の敎に隨ひ相違戻せず。三尊を直信して心意和同す。是を栴檀と栴檀と以て叢林を爲す者と謂ふなり。何をか謂ふ、伊蘭と伊蘭と自ら相圍遶すと。有る家、長者邪倒の見を信じ具に十惡を行ず。鬼妖を祠祀り闔門烹殺し、意同じく歡喜す、是をば伊蘭と伊蘭と自ら相圍遶する者と謂ふなり。此の四輩の因緣は皆宿命の意行同じからざるに由るが故に和せざらしむ。是を以て律經には因緣にて罪福の事を獲るを明曉にせり。若し祠祀の家の鬼は鬼も殺生を除いて與に從事せず、其飲食を食せず、若しは山澤に入りて飛鳥走獸の聚りて食ふを見て終に驚怛して其食味を斷ぜず、若しは猪羊を屠殺し、魚鳥を網獵し、罪人を刑戮するを見れば看視することを得ず。當に之を避捨すべし。縱ひ避くることを得ざるも當に大慈を起して誓願僧那すべし。我佛を得るの時は我刹中の飲食自然にして此諸惡因緣有ること無からしめんと。昔は國王夫人、付香を屠者の妻に與へず。生死は對因緣と作り展轉して相緣ず。或は罪の福に緣じ、或は福の罪に緣ずる、罪福の會して二の栽果有るなり。心は以て想を生じ、行種栽と爲り、根蒂有るを以て後果報を受く。此れ屠者の妻、罪をもて福に緣ずると爲す。後相經歷して輙ち過生するを種苦の本と爲すべし。是を以て香を與へざるなり。

夫れ父子・夫婦・兄弟・家室・知識・奴婢に五の因緣有り。何を謂つてか五と爲す。一に曰く怨家、二に曰く債主、三に曰く償債、四に曰く本願、五に曰く眞友なり。何をか怨家と謂ふ。父子夫婦兄弟宗親知識奴婢、相遇うて相殺す、是を怨家と謂ふ。何をか債主と謂ふ、父母財を致せば子之を散じ用ふ、是を債主と謂ふ。何をか償債と謂ふ、子主財を致して父母に供給す、是を償債と謂ふ。何をか本願と謂ふ、先の世に意を發して家室の爲に善心歡喜し厚く相敬從せんと欲せり。是を本願と謂ふ。何をか眞友と謂ふ、先の世の宿命に道法因緣を以て共に相承事せり、後相經過し生れて則ち法を明らめ精進の志和せり。是を眞友と謂ふ。

苦厄を覺り世の所有の苦・空・非なるを厭ひ、常に出身せんと欲し、道の爲に父母を辭し家や妻子を捨て、當に明師に就き法服を受持す。臨御の日、妻子戀泣し悲訴の聲哀しく其辭辛苦なり、賢者は之を覩て心悵然たり、意卽ち迴變し、妻子に惑はされて復た出家の志無し。是れ髮の象を繋ぐが如し、復た動くこと能はず。長へに衰を受けたり。佛言はく、一切の力壯なるも心に過ぎたるはなし。心は是れ怨家なり、常に人を欺誤す。心、地獄を取り、心、餓鬼を取り、心、畜生を取り、心、天人を取り、形貌を作るは皆心の所爲なり。能く心を伏して道を爲さば其の力最も多し。吾(われ)心と鬪ふこと其劫無數なり。今乃ち佛となることを得て三界を獨步するも皆心の所爲なり。一切の衆香、梅檀に過ぎたるは莫し、其香は無量なり。香の價は閻浮檀金よりも貴し。又人の病を療す、人の中毒して頭痛寒熱せるもの有り、梅檀の屑を摩(す)り以て其上に塗り、若しは以て之を服さば病卽ち除愈し、一切衆生願ひて得ざるは莫し。有る人大に梅檀香樹を得、薪に束ねて之を賣るに之を買ふ者無し。佛世に在せし時、說きたまふ所の經法は人をして道を得せしめ、度せざる者無し。般泥洹の後、十二部經世間に留在して動(やゝ)卷數有れども視る者有ること無し。亦梅檀の束薪の之を賣れども買ふ者無きが如し。一切の臭木、伊蘭に過ぎたるは莫し。其臭ひ毒惡にして人見て之を惡み其氣を聞くを畏る。伊蘭と梅檀と生ずるに四輩有り。何をか謂つて四と爲す。一に曰く、梅檀樹有りて伊蘭之を遶る。二に曰く伊蘭樹有りて梅檀之を圍む。三に曰く梅檀有りて梅檀自ら叢林を爲す。四に曰く伊蘭有りて伊蘭以て相圍遶す。何をか謂ふ、梅檀伊蘭之を遶ると。有る家、長者直信にして道を爲すに妻子室內其敎に從はず、邪倒の見を奉じ、鬼妖を祠祀り、敎令に從はず、是をば梅檀伊蘭之を遶る者と謂ふなり。何をか謂ふ、伊蘭梅檀之を圍むと。有る家、長者邪倒の見を信じ鬼妖を祠祀るに、妻子兒婦、家內の大小は三尊を直信して八齋を失はず、布施を德と爲し六度を廢せず、長者呵止すれども其敎に從はず、竊かに避けて之を爲す。是をば伊蘭を主と爲し梅檀もて之を圍む者と謂ふな

如し、意愛に縛せられず、是を六拔刀賊を離るゝを得と謂ふ。要當ず先づ解すべし。我無く人無ければ都べて所作無し。作さゞる所無ければ所作の功德は億劫も倦まず。譬へば鳥の虛空を飛ぶが如く、足跡有ること無し。無跡の行を作さば能く見る者無し、罪事や諸惡因緣大なりとも毛髮の如きも與らず。是を發菩薩心者と謂ふ。能く苦厄を度すれば居家は牢獄爲り、妻子兒息財物珍寶は是れ根檔杻械たり。恩愛癡著は是れ重擔たり。

佛、諸の弟子に告げたまはく、「一切の善男子善女人、汝已に出家せり、獄を離るゝを得たりと爲す。妻子を棄捐して械を脫するを得たりと爲す。如何んぞ重擔を放捨すること能はざるや。」諸の沙門曰く「我れに所擔無し」と。佛言はく「汝沙門、吾我の人に著し、身を貪り壽を計す、是れ汝の重擔なり。專ら供養を求め所有を畜積す、是れ汝の重擔なり。同學は和することなく反つて白衣に親しむ、是れ汝の重擔なり。自ら大種姓高貢なりとて憍綺なり、是れ汝の重擔なり。智を恃み愚を慢り他人を輕邈す、是れ汝の重擔なり。佷戾自用にして人の諫を受けざる、是れ汝の重擔なり。食に節度無く、酒を飮み味を貪る、是れ汝の重擔なり。法服を具せず、俗の衣裳を著くる、是れ汝の重擔なり。外は如法の如くし内に諛諂を懷く、是れ汝の重擔なり。六情を制せず。戒を毀ち欲を犯す、是れ汝の重擔なり。百姓を賦斂し寺廟を興起す、是れ汝の重擔なり。鬼母を祠祀り福願を祈請す、是れ汝の重擔なり。佛法に假託して呪術し治病す、是れ汝の重擔なり。衆祐に違背し四重禁を犯す、是れ汝の重擔なり。栖息に恒無く、廟房に還らず、是れ汝の重擔なり。擔を捨てざる者は後地獄に入らん。」と。

佛、言はく、「大白象有り、力壯んにして山を移し地を壞ち、澗を成し樹を拔き石を碎き、象の力無雙なり。人有り、髮を以て其脚を絆繫するに象之が爲に躃て復た動くこと能はず、佛、諸の弟子に告げたまはく、當に此譬を解すべし。當に善く之を思ふべし。若し賢者有らば居家道の爲に能く

ど復た正しきを信ぜず。三尊を奉ぜず。聖道を誹謗す。八に曰く、佛の故處に生る。是を八惡と謂ひ、亦た八難と謂ふ。三惡道は是れ一切衆生の家、暫く人と爲ることを得、暫く天と爲ることを得。譬へば客と作るの日は少く、家に歸るの日多きが如し。學者之を思ひ勤力精進して苦を脫るゝことを得べし。人身は得難く六情は具し難し。口辯は中たり難く、才聰は致り難し。壽命は獲難く、明人には遭ひ難し。直信は有ち難く、大心は發し難し。經法は聞き難く、如來には値ひ難し。世間に樹有り、優曇鉢と名づく。但だ實有りて華有ること無し。如來の世に出でたまふは乃ち華有るのみ。已に人身を得、六情完具し口辯才聰にして壽命延長し、明人に遭値て菩薩の心を發し、直信して還らず、具に經法を聞き、如來の世に遇ふ此れ皆宿行にして福德の人を覆ひ明より明に入り如來の跡を尋ね累行止まざれば道場に於て會す、其根を毀つこと無けん。前功を忘失すれば一に道意を失ふ、動ずれば劫數有り。之を愼しめ、之を愼しめ。

一切衆生常に長獄に在り、十二重城有り、之を圍むに三重の棘籬を以てす、之を離れて六の拔刀賊有りて之を伺ふ。能く其中に於て脫出を得る者甚だ難く甚だ難し。何をか長獄と謂ふ、謂はく三界なり。何をか十二重城と謂ふ、謂はく十二因緣なり。何をか三重の棘籬と謂ふ、謂はく三毒なり。何をか六拔刀賊と謂ふ、謂はく六情なり。已に道心を發さば當に禁戒・四等の大慈・六波羅蜜・安般守意・三十七品・諸禪三昧・總持之門等を具すべし。一切法意には高無く下無く、想無く願無く、三脫門を出でて三治法を得、三向を分別し三達智を曉む。縛無く解無く諸天人中の尊、轉輪聖王の位を求めず。其心を動ぜず、罪苦を畏れず、有勢を計せず、志一切に在りて榮寞する所無し。三界の空なることを解し三有を習はず、是を十二長獄を出づるを得と謂ふ。十二因緣を知れば、所起所滅、能く癡の本を斷ず、是を十二重城を出づるを得と謂ふ。婬・怒・癡を知れば三苦に纏はるゝこと無く意復た著せず。是を三重の棘籬を拔くことを得と謂ふ。六情は皆本末無しと曉了せば譬へば芭蕉の

戮・火燒・水溺・墜落・堆壓・塼石・刀杖・奔車・逸馬・怨家・劫盜有りて更に相傷害す。其の死は萬端なり。一切衆生は未だ三界を離れず皆共に之有り。是を二苦と謂ふ。

三に曰く、畜生苦。蜎蜚・蠕動・蚑行・喘息・飛鳥・走獸より、上は象・龍・金翅鳥に至る迄皆是れ畜生にして、亦饑渴寒熱有りて憂患勤苦す。强者は弱きを伏し更に相噉食す。或は屠殺・田獵・網羅有り。肉を以て人に供し、其の變萬端なり。具に說くべからず。是を三苦と謂ふ。

四に曰く、餓鬼苦に九種の餓鬼有り。第一の輩は身長一由旬にして頸の所、咽の處は一の鍼(はり)の孔の如し。行步の時は支節の骨辨け五百の車の如し。聲は咽より火焰として出で自ら相燒然す。若し流水を見て往けば卽ち枯竭して一咽をも得ず。或は一咽を得ば化して膿血となり或は沸屎となり、或は銅消となり咽に入りて自然に火となり熱く爛れて下へ過ぎ洞徹せざるは無し。罪過未だ畢らされば身自然と復すこと是の如し。皆先時、人と爲(な)り治生暴逆にして恐怛迫脅、道理を以てせず、慳貪にして獨り食するが故に此の殃を受く。是を四苦と謂ふ。

五に曰く、地獄苦。鐵城・鑊湯・劍樹・刀山・鐵柱・銅消・膿血・寒氷・沸屎・鹹水・竹葉・火車・爐炭・火釘・十六毒刺・烏鵲・狡狗・鵄鳥・屈鳥なり。其鳥の啄嘴は純ら是れ剛鐵にして飛んで人の口に入れば表裏洞徹して人の五藏を食ひ東西南北避くる處有ること無し。苦毒罪獄に凡て十八有り。諸の罪を受くる者は尊卑を問はず惡の輕重に隨つて各自之を受け、或は一劫半劫畢る者有りて不能不翅の者は罪畢つて還つて世間に生れ諸の餘殃を受く。是を五苦と謂ふ。八惡處とは一に曰く地獄、二に曰く餓鬼、三に曰く畜生、四に曰く邊地、五に曰く長壽天、六に曰く人身を得と雖も盲聾瘖瘂・手足殘跛、聽受すること能はず。七に曰く、人身を得と雖も六情完具せず。世智辯聰にして世の經典を學し邪の倒見を信じ鬼妖を祠祀(まつ)り、或は屠殺、田獵は肆心放意にして欺僞萬端なり。三尊を信ぜず。是より後、身還つて地獄に入り冥より冥に入り脫るゝの時有ること無し。時に人と爲ることを得れ

五苦章句經

一に淨除罪蓋娯樂佛法經と名づけ、一に諸天五苦經とも名づく

東晉の西域沙門竺曇無蘭譯す

世尊曰く、三界五道生死絶えず。凡そ五の苦あり、何をか五苦と謂ふ。一には曰く諸天苦、二には曰く人道苦、三には曰く畜生苦、四には曰く餓鬼苦、五には曰く地獄苦なり。

何をか諸天苦と謂ふ、第一天上從り二十八天に至る中阿那含天を除いて皆是れ五戒を持ち十善行を守れり、四禪は其上に生ずることを得。道慧無きが故に生老病死有り。亦其の天壽を盡さゞる者有り、其の先世の所作に隨ふが故に壽命に長短有り。諸天に二大災有り、一には曰く命盡、二には曰く劫盡なり。劫盡に三の因緣有り。一には曰く大火、二には曰はく大風、三には曰く大水なり。命盡に七證有り。一には曰く項中の光滅す。二には曰く頭上の華萎む。三には曰く顏色變ずると爲す。四には曰く衣上に塵土あり。五には曰く腋下に汗出づ。六には曰く身形損瘦す。七には曰く蠅身に著きて自然に本座を離る。水災に遭ふ時、大洪水起りて十五天と齊しくなり其中の所有盡きさる者無し。風災に遭ふ時、隨藍の大風四(方)に起り須彌山及び諸の名山を吹くに山山相搏ちて粉塵の如くならしめて盡きざる者無し。火災に遭ふ時は七日竝び出で凝住て行かず、天地を燒滅して皆融けたる金の如し。欲界の所有、其中に皆盡く。最上の四天は壽は八十億四千萬劫なりと雖も、要當ず皆死して八惡道に屬すべし。是を一苦と謂ふ。

二に曰く、人道苦とは百千種有り。人を實に疲勞と爲す。奴婢・下使・乞兒・賤人より中間は富貴、上は帝王・轉輪聖王に至る皆、生老病死・饑渴・寒熱・苦痛・愁惱・憂患・災變有り。或は兵賊・牢獄・刑

五苦章句經解題

生死の世界には五苦が相續して斷えぬ。五苦とは、諸天苦・人道苦・畜生苦・餓鬼苦・地獄苦の五苦である。この經には、その五苦の內容、特に人道苦の內容について種々な方向から觀察し解剖して批判してゐる。就中、十二重城、六拔刀賊の譬の妙、出家人の諸の重擔、父母妻子等の五因緣、閻羅王の五使者等の例話は興味深いものがある。

昭和九年一月八日

譯者　清水谷恭順　識

佛說四願經終

なば所有の財物官爵俸祿は故らに世間に在りて人に隨はず、魂神去りて空しく愁苦となる。

第三願は謂はく、父母兄弟妻子中外の親屬朋友知識に恩愛榮樂有り。疾病にて死至り命盡きなば復我命を救ふこと能はず、亦我れ魂神に隨ひて去ること能はず。空しく啼哭して我を送り城外の深き塚間に到りて以て我を棄去り各ゝ疾く還る。我を追念して愁苦憂念すと雖も十日を過ぎず。諸家宗族の男女聚會し相向つて歌舞し快く共に飲食し相對して談笑して死人を捐亡(わす)る。父母兄弟妻子中外の親屬朋友知識有りと雖も共に我が命を追ふこと能はず。空しく之を悲しむも復た何の益ぞや。

第四願は是れ人の意なり。天下の人、能く其意を守護する者有ること少し。皆心を放ち意を恣にし五樂に婬し利を貪り嫉妬し、忿怒し、鬪諍し道德を信ぜず、身死し壽盡くるに至り魂神去れり。三者相追逐して相離るゝことを得ず。譬へば雀の飛ぶに意其の兩翅に隨ふが如し。意、身神と爲れば兩翅魂魄となる。人其の意を守護すること能はざれば皆惡念の爲す所に從ひ殺盜貪婬なり。生ける時爲す所の罪を以て死して太山地獄中に入つて飢ゑたる餓鬼と爲り罪畢れば乃ち出でて畜生となり、當に人に屠割する所と爲るべし。人と作りて心を放ち意を快ますが故に三惡道に入らん。

佛、純陀及び諸の弟子に告げたまふ。當に汝の心を端すべし。汝の意を守護せよ、諦かに自ら思惟して身は我身に非ずと知れ。所有の財物も亦我許に非ず、當に諦かに計校すべし。所有の父母兄弟妻子、五種の親屬朋友知識官爵俸祿、念じて之を得んと欲はゞ厭足有ることなし。我身に益有りと謂ふも老病死來れば皆、我身を益すること能はず、亦我之を却けんとする能はず、人自ら拔きて道を爲すこと能はず、鸚鵡鳥の其毛尾を愛して射獵者の得る所と爲るが如し。賢者は諦かに知る。是の四願は人の魂神に從ひて去らず。空しくこの困苦のために因に恩愛の根を拔き、三惡の道を絕ちて三善道を得。一つは復た老ひず、二つは復た病まず、三は復た死せず。堅く其意を守護して乃ち得度すべし。諸の弟子經を聞きて歡喜し佛の爲に禮を作しき。

佛說四願經

呉の月支國の居士支謙譯す

是の如く聞きき、一時、佛、拘夷那竭國に在せし時、五百の比丘僧と與に尼延樹の下に坐し數千萬人の爲に說法したまふ。是城中に於て豪長者有りて財富無數なり、名を純陀と曰ふ。純陀に子有りて厥年十四なり。時に重き病を得て所疾を免れず、逐に便ち喪亡せり。父母兄弟・宗親・中外愛重せざるは莫りければ啼哭憂愁して安んぞ言ふべけん乎。爾時純陀、佛の來化したまふと聞きて心大いに歡喜して便ち其妻に告げて言はく、今佛此に在り、宜しく當に往いて見るべし、佛の經法を說きたまふを聞きて解脫せざるものなく憂を忘れ患を除くと。即ち其妻、親族僕使と與に俱に佛の所に到り佛の爲に禮を作し却つて一面に坐せり。

長者純陀、長跪叉手して前んで佛に白して言さく、人世間に在りて錢財を積聚し、思慮勤苦して敢て衣食せず、布施すれど經戒を奉持することを知らず。尊きと無く卑しきと無く如し願を獲得せし者も或は時に命盡きなば父母兄弟妻子親屬、啼哭し愁毒し其が爲に棺斂す。財寶衣被飲食を遣送するも寧ぞ死者に益有りや不やと。佛、純陀及び諸會の弟子に告げたまふ、我が說く所を聽き善く之を思念せよと。純陀の眷屬、諸會の弟子皆各ゝ手を叉し一心に敎を受けて聽けり。

佛言はく、人に四願有り。常に保つべからず。何等をか四と爲す。第一願は是れ人身は沐浴し莊飾して飯食五樂常に先づ之に與へ、疾病にて卒するに至るも之を止むること能はず、命盡きなば體強はばりて地に在り、人に隨はずして魂神去る。空しく之を愛重するも復何の益ぞや。

第二願は謂はく、財產・官爵・俸祿有り。之を得れば喜び得されば愁憂ふ。疾病にて死至り命盡き

佛說四願經解題

佛が或時、拘夷那竭國に在せしとき、十四歳になつた一子を失つた長者純陀夫妻が佛の所へ來て問ひ奉つた。人は生れて金錢を貯蓄し思慮勤苦するが、命盡きたらば父母妻子眷屬が悲しんで葬儀を營み、財寶や衣物や飲食を遣つたとて死人に何の益がありませう。一體どうすればよいのでせうと。之に對して佛の答へられた言葉が一經の骨目になつてゐる。

それは、人には四つの願があるが、常に保つことが出來ない。第一願は沐浴莊飾、飯食五樂は命盡くれば止む。第二願は財産官爵俸祿であるが、之とても命盡くればやはり從いては來ぬ。第三願は父母妻子等の恩愛の眷屬も、我命を救つてもくれなければ我を追つても來ない。第四願は人の意である。人が生きてゐる時よく其の意を護り身を守つたならば惡道へも墮ちず、老・病・死を剋服することが出來るのであるが、大概の人は皆其の意を恣にして我と我身を惡道の中へ陷すのである。

この故に純陀及び諸の弟子は各ゝ其心を正しく守護し諦かに思惟し、我身は業の所成なること財物も亦因緣所成なることを考へ、之等は少くとも我身に害にこそなれ益にはならぬことを思惟して三惡道を絕ちて三善道に入らねばならぬと說かれてゐる。

昭和九年一月八日

譯者 清水谷恭順 識

人趣の報竟る。

常に謟誑を行じ忿恚にして鬪諍を樂しむ。　昔施を行ぜしに由るが故に而も修羅王と作る。

修羅趣竟る。

樂んで十善の因を修むれば他に於て損害無し。　諸天は常に護持し四王天に生ずるを得ん。父母三寶に於て恭敬して隨つて能く施し　忍辱柔和を具さば忉利天に生ぜん。　自ら忿諍を樂はず他を勸めて和順せしめ　純善ら淨因を修せば焰摩天に生ずるを得ん。　多聞正法を樂ひ專ら解脱の惠を修め　他の功德をば喜び讚むれば兜率天に生ずるを得ん。　施戒諸行に於て自性常に愛樂し　精進勇猛を起さば變化天に生ずるを得ん。　戒定熏修を以て普ねく願力を資くれば　天王人間に生れて眞如實際に達せん。　是の如き善惡の報は已に分明に顯示せり。　善を作さば人天を招き惡を造らば極苦に縈る。　老病死未だ至らず勤思して正法を求めよ。　自らの果報は一たび來らば愛する所皆離別す。　彼の貪等の過失は深く厭患を生ずべし。　智者善く思惟して是故に當に遠離すべし。　若し常に利他を行ぜば則ち諸の障惱無からん。　罪福定んで差無し　略說したり宜しく諦聽すべし。

六趣輪廻經（終）

ば安穩快樂を獲ん。　若し施すに僮僕を以てせば營從常に圍遶せん。　乳牛等の物を施さば色力壽命を得ん。　若し施すに良田を以てせば倉庫は盈溢を得ん。　彼の如く彼の求むる者各各欲する所に隨はん。　花果及び淸泉、愛語は善く安慰す。　復た有るもの行施すと雖も他を役し少しく與へば　恐怖に因つて發心せる及び他の讃譽を希ひ：或は現の富貴や天に生じて快樂を受くること求むれど　是の如き等の行施は福を獲ること極めて微少なり。　若し樂んで利他を行じて身命を惜まず　常に悲愍の心を懷かば聖果は得難しとなさず。　諸の來り乞ふ者有らば時に依て給與し　彼をして忻悅を生ぜしめば感果意の如きを得ん。　彼に施して若し艱難せば受報の時も亦爾り。　己を輟めて他に惠むは最上安樂の法なり。　施は諸樂の本と爲す種の其果を生ずるが如し。　彼の來つて希求するを愍み隨つて與へ空しく返すること無れ。　愼んで外の色を侵す勿れ之を視ること己が子の如くせよ。　設ひ復た自らの妻に於ても心を擧ぐるを卽ち止め令めよ。　若し人欲境に於て心を繫けて樂著せば　後ち世間に生れて定んで女身の報を受けん。　若し人女身を厭はば欲を捨てゝ淨戒を持て　堅固の心を發生せば轉身して男子と作らん。　若し人梵行を修せば則ち諸の損惱無からん。　福德にして威神を具へ天人常に恭敬せん。　若し人酒を飮まずして正念に安住し　常に眞實の言を出せば現に安穩を獲ん。　若し他の相違するを見ば勸喩もて和悅せしめよ。　眷屬を感ずる廣多なれば別離の苦惱無し　師長の敎勅に於て常に歡喜して聽受せよ。　損益を更に籌量せば則ち善巧智を具せん。　貧窶の執役者は好んで捶打を行じ　過無きに他を惱まして己苦んで更に苦を加ふ。　若し人形色を具すれば之を恃んで慢を起し　他人を戲弄すれば當に矬陋の報を獲べし。　若し人、性慳鄙なれば善誘するも佯りて聞かず　彼れ極重の愚癡なれば當に聾瘂の報を獲べし。　善を行ずれば餘慶有り惡を積まば苦惱を招く　各ゝ彼の因を成辦し業に隨つて定んで當に受くべし。

人天三惡趣は　唯自ら能く救拔す。　六趣の中を奔馳すること夢境和合するが如し。　自他の眷屬を覩るに傷嘆して豈長久ならん。　彼の俳優人の數數形色を易ふるが如し。　地獄の苦を受け畢れば或は天の中に生じ　福盡きて復た沈淪し彼の畜生趣に墮し　種ゝの形色を受けて後人間に生るゝことを得とも　貧苦極めて艱辛なること譬へば車輪の旋轉するごとし。

畜生趣竟る。

彼の人趣の壽命は分量本と長遠なり。　多く殺生の因を造らば此に因りて減少し　諸の病苦に縈纏はれ羸痩時疫等の　鬼魅の爲に著かれ及び王法にて捶打せらる。　若し人財利に於て勞役して廣く希求し　少しの惠施の心無ければ後守財鬼と作らん。　若し人他の財を盜み用ひ已つて或は能く施さば　後鬼趣の中に墮して隨つて得、隨つて散失せん。　若し人己が財に於て分に隨つて施を行はば　當に富饒を獲て他の爲に侵損せられざるべし。　若し人淨財を以て慳を離れて廣く施を行はゞ　上妙の飲食を得て所欲皆意の如からん。　若し人珍饌を以て淨心もて奉施せば　其の得る所の福報、色力命安穩ならん。　若し人衣を以て施さば彼れ生を得て愛樂に　色相端嚴なるを獲、具に衣服を慚愧せん。　若し人僧房を造り歡喜して施を用ふれば　宮殿莊嚴を感じ五欲皆具足せん。　若し人橋梁を建て及び車乘等を施さば　最上安穩にして珍寶の輦輿を得ん。　若し人曠野に於て池井泉流を施さば　在所の生處に於て渇乏の熱惱無けん。　若し人嬖妾を以て嚴飾して施さば　彼の得る所の果報は欲樂富貴を具にせん。　若し人經教及び世俗の文典を以て　能く持ち他に施さば博學大智を感ぜん。　若し人醫藥及以び無畏施を以てせば　彼の得る所の果報は安樂にして恐怖を離れん。　若し施すに燈明を以てせば其眼は常に清淨なり。　若し施する音樂を以てせば其聲美妙なるを得ん。　若し施すに臥具を以てせ

惑多く　常に忿惡の心を懷けば焔摩の羅卒とならん。　諸の苦果の種子は少略して分別せよ。

　身語心を淸淨にせば畢竟して常に遠離せん。

地獄趣竟る。

若し人施を樂はず　復盜みて衆に飮食せば　大癭鬼の中に墮し常に諸の糞穢を噉はん。　若し人の布施を障げ己の物に悋を生ぜば　針口鬼の中に墮して腹大なれど常に飢渴せん。　嗣無きに財物を慳みて捨てず受用せざれば　匱乏鬼の中に墮して他享の殘棄を得ん。　他の施惠を希望して自ら少施して悔を生ぜば　下劣鬼の中に墮して常に涎吐を食はん。　他の過失を樂聞し惡語を加へて宣傳せば　焰口鬼の中に墮し長に諸の苦惱を受けん。　好んで諸の鬪諍を起し少しの慈愍の心も無ければ　疲極鬼の中に墮して蜎蠕虫の類を食はん。　他の財を恐惱して取り已に得て或は少く施さば　極醜鬼の中に墮し　他怖れて徼祀を獲ん。　若し人多く讌樂し　廣く諸の物命を殺して　自らも食ひ復た他に與ふれば後、羅刹鬼に墮せん。　供養の香花に於て或は嗅ぎ或は私に取らば　少貪心を起すに由りて後、尋香鬼と作らん。　若し人相崇奉され已に於て求むる所有り　怒色して彼財を希はゞ後、猛惡鬼と作らん。　若し人他の妻に於て常に樂みて媒伐を作し　後、惡を懷いて相離れば死して歩多鬼と作らん。　若し人飮酒を樂しみ量を過し復顚酗し　或は持ちて他人に勸れば後に藥叉鬼と作らん。　父母師長に於て欲する所相違背せば　後に藥叉宮に生じ勇健にして多く卒暴なり。　彼慳貪の過失は常に餓鬼の中に生ず。　苦樂は自らの因に隨ふ。　是故に復た造る勿れ。

餓鬼趣竟る。

れば　是の如き罪の衆生は當に號叫獄に墮すべし。　彼の熾然なる猛火焰は燒然して休息無し常に大惡聲を發し是の如きの苦報を受く。　若は佛法僧、及び諸の貧乏者に於て　彼の財物を剽竊せば大號叫獄に墮す。　火の燒炙する所と爲り最極の熱惱を受け　大猛惡の聲を出す、是の如きの苦報を受く。　父母師長、及び有德の賢者に於て　增上を起し殺害せば定んで無間獄に墮す。　炎は熾にして大火聚は洞然として骨髓に徹す。　長時極苦を受け　決定して暫しも樂無く　寃敵と鬪諍を起し戈戟もて相殘害せば　死して銅爪獄に墮す　其狀極めて鋒利にして　互相に擘裂し　或は變じて刀杖と爲り　競ひ斫りて其身を刺す、是の如きの苦報を受く。

强暴にして他の色を侵さば後に鐵刺獄に墮す。　刺の長さ十六指にして肉を削りて骨を穿つ復た大鐵女有り、焰の牙は甚だ怖るべし。　頂を噉ひ其踵に至る　是の如きの苦報を受く若は陰謀もて他を害さば彼の劍葉林に墮せん。　猘狗及び鵰鷲、奔逐して競つて分ち食はん。若は刼めて他の財を奪はゞ當に其極苦を受くべし。　常に熱鐵丸を呑み復た灌ぐに銅汁を以てす。　無辜の衆生を害せば當に鐵鷹獄に墮すべし。　利爪もて搏擊され長時に苦惱を受く　若し人好んで水族、諸の物命を傷殺すれば　後ち鎔銅の河に墮ち業火の爲に燒煮されん。　若し自ら盛事を貪りて他の善を掩斥せば　彼の鐵磨獄に墮し悲しみ號ぶも救度なけん。　若し人饒益せずんば當に多種の形を受くべし。　兩山其身を夾み　逼切して復た搨を加へん。　若し人、非法を說き橋梁を破壞せば　鋒刃を以て路と爲し彼を驅つて來往せしめん。　甲を以て蚤虱を傷けば　二羺頭山に墮せん。　相擊ちて死し還つて生じ展轉して苦を受く。　出離の道に依止して而も禁戒を護らずんば　煻煨獄中に墮ち肢體皆消爛せん。　諸の威儀を矯現し苟も邪活命を求むれば　屎糞獄中に墮し蛆虫の爲に唼食せられん。　五穀中の虫を見て擇ばずして礱伐せば　鐵碓獄中に墮して常に彼の爲に舂擣せられん。　他の苦を見て喜を生じ諂曲にして疑

六趣輪廻經

馬鳴菩薩集む

西天の譯經三藏・朝散大夫・試鴻臚少卿・宣梵大師・賜紫沙門・臣曰稱等詔を奉じて譯す

三世尊、正等覺の說き給ふ所に歸命す。　常に利他を行じ、諸の功德を積集せり。　若し自身の口意による所作の善惡業は、果を感ずること定まりて差非ず別の造作者無し。　最勝の導師よ、現證に慈愍を垂れたまへ　普ねく諸の有情の爲に隨業受報を說け。　此れ正理に相應せば聞き已つて當に領受すべし。　業は皆自心より作し、因と爲りて六趣に馳す。　三毒に由りて怖畏し、諸の物命を販賣す。　己を養はんが爲に他を殺さば當に等活獄に墮すべし。　彼壽は百千歲にして刀杖捶打を加へらる。　死し已つて更に復た生れ是の如き苦報を受く。　父母朋屬に於て而も損害を生じ　妄語を起し欺誑せば當に黑線獄に墮すべし。　黑線もて其身を絣すこと世間の解木の如し。　鋸は焰を發して熾然なり是の如きの苦報を受く。　火を以て山川林木及び原野を焚きて　諸の有情を燒害せば當に炎熱獄に墮すべし。　火焰は遍く燒然し苦しみの叫聲は絕えず。　兩目は明有ること無く、是の如きの苦報を受く。　法と謂つて非法を說き、無根して誹謗し　他をして熱惱を生ぜしめば極炎熱獄に墮す。　是の諸の罪の衆生は大火に逼切せられ　燒然して暫しも停らず是の如きの苦報を受く。　猪羊狐兎及び餘の生類等に於て殺害すること彼に無邊なれば當に衆合獄に墮すべし。　彼の地獄に生じ已らば備に諸の楚毒を受く。　拷掠し滅して還生す、是の如きの苦報を受く。　惡を起し身語意に讒構して相離間す

六趣輪廻經解題

地獄・餓鬼・畜生・人間・修羅・天の六趣に互りて其の酬ひて受ける業報の有樣と其の原因をば細しく說いて因果の理の正しいこと、善行を修すべきことを勸めて居る全部流麗平明な偈誦より成る經文である。

但し畜生趣に直ぐ次いで人趣を明し、修羅趣は人趣の後にあり、僅々四行のみの誦文であることは、六道の一般的公式から見ても變つてゐることに注意される。

昭和九年一月八日

譯者　清水谷恭順識

客僧に與へず、客の去るを待つて後、乃ち行きて舊僧に與ふ。此酥は是れ僧物を招提し一切分有り。僧物を慳惜するが故に今花報を受けて果して地獄に入れり。

一鬼問ふて言はく、我一たび生れてより已來、或は刀山劍樹地獄に登り、或は火坑鑊湯地獄に墮し種種に苦を受け復た休已無し。何の罪の致す所なりや。目連答へて言はく、汝人たりし時、天祠の主と作りて三牲を烹殺して天神を祭祀し、血肉を四方に灌灑し、衆人に語つて言はく、汝等祠祀せば大いに吉利を得んと。此の魔邪の言、妖孽の語を作して百姓を輕欺し父母を誑惑せり。是を以ての故に果して地獄に入れり。

一鬼問ふて言はく、我一たび生れてより已來、常に鐵丸を呑む。何の罪の致す所なりや。目連答へて言はく、汝人たりし時、沙彌の子と作り淨水を取りて石蜜の漿と作らんとす、石蜜堅く大なれば盜みて少許を打取る。衆僧未だ食せざるに盜みて一口を食せしが故なり。是因縁を以て果して地獄に入れり。汝將來の世には常に鐵丸を呑まん。

爾時目連、諸の餓鬼の與に往昔因縁の經を說き竟り、還り來て耆闍崛山に在り。一切の大會、佛の說きたまふ所を聞いて稽首し奉行したてまつりき。

佛說鬼問目連經（終）

目連答へて言はく、汝人たりし時、强ひて人に酒を勸め其をして顚倒せしめたり。今花報を受け果して地獄に入れり。

一鬼問ふて言はく、我一たび生れてより已來、恒に熱湯を患ひ行きて恒河を見れば其中に入りて以て熱渴を除かんと冀ひ方に其中に入るに身體焦爛し肌の肉は骨を離れ渴して人を飮まんと欲し一口之を腹にするに、五藏焦爛して痛さ言ふべからず。何の罪の致す所なりや。目連答へて言はく、汝人たりし時、喜んで山澤を焚燒し衆生を殘害せり。今花報を受け果して地獄に入れり。

一鬼問ふて言はく、我一たび生れてより已來、恒に飢渴を患ひ厠上に至れば糞を取りて之を啖はんと欲するに、厠上に大力の鬼有り。杖を以て我を伐ち初より能く近づくこと得ず。何の罪の致す所なりや。目連答へて言はく、汝人たりし時、佛圖の主と作り客比丘の來ることあれば慳惜て食を與へず。客の去るを待つて後乃ち行きて舊僧に與へ僧物を慳惜せり。故に今花報を受けて果して地獄に入れり。

一鬼問ふて言はく、我一たび生れてより已來、恒に不淨に處り臭惱身を纏ひ能く離るることを得ず、飢渴の時還つて此不淨を食ふ。何の罪の致す所なりや。目連答へて言はく、汝人たりし時、婆羅門の子となる、一道人有り、中後より來た汝に就て食を乞ふ。汝爾時當に是方便を作し、此道人をして復來つて乞はざらしめんとし便ち其鉢を取り糞を以て底に著け飯を以て之を覆ふ。道人鉢を得て還つて本處に至り一面に著きて澡漱旣に訖り鉢を攝りて食はんと欲するに鉢中臭穢にして近づくことを得べからず。是を以ての故に墮して地獄に在り。汝將に來世は糞屎彌梨地獄中に墮せん。

一鬼問ふて言はく、我一たび生れてより已來、肩の上に銅瓶有り、中に洋銅を盛滿せり、一手に銅杓を捉りて之を取り還つて其頭に灌ぐに痛さ言ふべからず。何の罪の致す所なりや。目連答へて言はく、汝人たりし時、僧の維那と作りて僧事を知る。一瓶の酥有りて著きて餘處に藏し、行きて

りて自ら豪强を恃んで百姓を輕欺し、强て人を打捶し、好んで美食を索めたり。今花報を受け果して地獄に入れり。

一鬼問ふて言はく、我一たび生れてより已來、恒に男根を患ひ瘡爛して痛さ言ふべからず。何の罪の致す所なりや。目連答へて言はく、汝人たりし時、佛圖精舍淸淨の處にて婬欲を行へり。今花報を受けて果して地獄に入れり。

一鬼問ふて言はく、我一たび生れてより已來、多く兒子有りて皆端正にして喜ぶべきに而も皆早死せり。之斷絕を念ふに痛しさ言ふべからず。何の罪の致す所なりや。目連答へて言はく、汝人たりし時、兒を見て殺生し助け喜びて肉を噉へり。殺生の故に短命なり。喜びしが故に痛毒す。今花報を受け果して地獄に入れり。

一鬼問ふて言はく、我一たび生れてより已來、一狗の體大にして牙利なるもの有り兩目赫赤なり。常に來つて我を噉ふは何の罪の致す所なりや。目連答へて言はく、汝人たりし時、喜びて狗を將ひて獵し衆生を殘害して慈心有ることなし。今花報を受け果して地獄に在り。

一鬼問ふて言はく、我一たび生れてより已來、一人の諸の利刀を持つもの有りて常に我肉を割く。肉盡く便ち持ち去れば須臾にして復生じ、而も復來り割く痛さ言ふべからず。何の罪の致す所なりや。目連答へて言はく、汝人たりし時、喜んで衆生を屠割し初より慈心無し。今花報を受けて果して地獄に入れり。

一鬼問ふて言はく、我一たび生れてより已來、恒に患ひて身體の處々皆痛みて忍ぶべからず。何の罪の致す所なりや。目連答へて言はく、汝人たりし時、漁獵を好み網もて魚を得、之を沙土に投げ其をして苦しみ死なしむ。今花報を受けて果して地獄に入れり。

一鬼問ふて言はく、我一たび生れてより已來、頑なにして知る所無し。何の罪の致す所なりや。

佛說鬼問目連經

後漢、安息國の三藏安世高譯す

是の如く聞きき。一時佛、王舍城の迦蘭陀竹園に住したまふ。爾時、目連は晡時なりき。禪定より起ちて水邊に遊恒し諸の餓鬼の罪を受くるの同じからざるを見る。時に諸の餓鬼、尊者目連を見て皆敬心を起し來りて因緣を問ふらく。

一鬼問ふて言はく。我一たび生れてより以來、恒に頭痛を患ふ。何の罪の致す所なりや。目連答へて言はく、汝人たりし時、好んで杖を以て衆生の頭を打ちにき。今花報を受け果して地獄に入れり。

一鬼問ふて言はく、我一たび生れて已來、資財量り無し。而も弊衣に染著す。何の罪の致す所なりや。目連答へて言はく。汝人たりし時、布施して福を作し還つて復た悔惜せり。今花報を受け果して地獄に在り。

一鬼問ふて言はく、我一たび生れてより已來、宿るに常の處無し。恒に巷陌に倚るは何の罪の致す所なりや。目連答へて言はく、汝人たりし時、客來りて投止せんとするに安處を肯ぜず、他の客の止るを見て方に復た瞋恚せり。今花報を受け果して地獄に入れり。

一鬼問ふて言はく、我食一斛を食はず。而も飽くことを得ざるは何の罪の致す所なりや。目連答へて言はく、汝人たりし時、衆生を飯飼して初め足らしめず。今花報を受けて果して地獄に入れり。

一鬼問ふて言はく、我一たび生れて已來、腹大なること甕の如く咽細くして針の孔の如ければ、食を下すことを得ざるは何の罪の致す所なりや。目連答へて言はく、汝人たりし時、聚落の主と作

佛說鬼問目連經解題

佛弟子中、神通第一と稱せらるゝ目連尊者が或時諸の餓鬼より其の受罪の因緣を問はれるまゝに答へられたのが一經の大要であつて、標題に示すが如き佛說ではない。

問答は最初一餓鬼の頭痛の因緣から始まり、鐵丸を呑む餓鬼まですべて十七の寸話より成り、何々の罪苦は何々の花報であると、判然と原因を指示してゐる所が素朴な平易な如何にも民間信仰的色彩を多分に持つてゐて、その點で興味が深い。

猶ほ本經と同巧異曲のものに、佛說雜藏經の前半がある。

昭和九年一月八日

譯者　清水谷恭順　識

けり自在天の生に非ず　亦た自然の有に非ず　時に非ず無因に非ず　唯だ煩惱に從ひて起る

彼の有無常を觀ずるに　慧者は染著せず　諸の繋縛を離れて　永く安隱に到らん。

分別業報略經（終）

ける凡夫の生れ得べき最勝天なり。

【三九】無想天は無想有情の天處にして、廣果天の上に立てられたる一天なり、之れ上座部の立つる所なり。

【四〇】無煩天、無熱天、善現天、善見天、色究竟天を五淨居天と云ふ、之れ第四禪に不還果を證せる聖者の生ずべき天なり。

故に　後に四王家に生ぜん　若し人今世に於て　志强く人に隨はず　所行に幻僞多けれども　亦た諸の善法を修し　他の鬪訟を觀んことを樂ふも　兼て好んで布施を行ずれば　斯の業緣に由るが故に　後に　阿修羅[二八]と作らん　孝順もて淨く　父母諸の尊長を供養し　忍辱にして瞋恨少く　鬪訟を見んことを樂はざれば　斯の業緣に由るが故に　後に　忉利天[二九]に生ぜん　若し人自ら鬪はず　亦た他の諍を觀ず　精勤に善法を修すれば　夜摩天[三〇]と作ることを得ん　身に於て善く觀察し　學を好んで多聞を集め　思惟の義に專精し　樂ふて淨功德を修すれば　斯の業緣に由るが故に　後に　兜率天[三一]に生ぜん　勝布施を修習し　樂ふて諸の經典を誦し　方便もて善法を行じ　自ら力めて他に由らず　慇懃に精進するが故に　後に　化樂天[三二]に生ずるなり　勝布施を修行し　善く諸根を攝護し　精勤して退轉せず　他の功德を欣樂すれば　斯の業緣に由るが故に　後に　他化天[三三]に生ぜん　熾然の欲を捨離して　四梵行を修習し　生を離れて樂と倶なるを欣はば　轉身して　梵宮[三五]に生ぜん　又た　覺觀[三四]の心を離れ　亦た離生の喜を度して　定生喜樂と倶なれば　上み　光音天[三六]に生ぜん　定を離れて喜樂を生じ　一向に樂と倶に　三摩提を捨念せば　彼の　遍淨天[三七]に生ぜん　悉く已に苦樂を度し　不苦不樂と倶に　及び清淨の念を捨すれば　廣果天[三八]に生ずることを得ん　覺知して想過を離れ　及び五種の有を厭ひ　深く無想に愛著せば　彼の　無想天[三九]に生ぜん　世俗及び無漏　諸の熏禪を修習せば　熏禪の正受力は[四〇]五淨居天に生ぜん　軟中品を修習せば　無煩、無熱天なり　上の三品を修習せば　次に三淨天に生ぜん　是の如く次第して上り　乃し色究竟に至りて　色無常の想に依りて　無量空を超修す　次に無量識を觀じて　捨して無所有に至り　又た無所有を離れて　乃し非非想に至る　我れ已に生死に　果報等あることあるを說けり　彼の業の果報に於て　慧者當に觀察すべし　應に清淨の業を修して　苦を離れて疾く樂を受くべし　已に諸の生死の　種種の業の差別を說

【二八】　阿修羅（Asura）、六道の中の一、又た八部衆の一、果報勝れて天に似たれども天に非ず、常に帝釋と鬪諍す。

【二九】　忉利天（Trāyastriṃśa）欲界六天中の第二、帝釋の所居の天。

【三〇】　夜摩天（Suyāma）とは欲界六天中の第三、善く時分を知りて五欲の樂を受く。

【三一】　兜率天は欲界の天處にして摩鄔夜摩天と樂變化天の中にあり、內院は彌勒菩薩の淨土にして、外院は天衆の欲樂の所なり。

【三二】　化樂天（Nirmānarati-ya）は六欲天の第五、自ら五塵を代して自ら誤樂す。

【三三】　他化天は具には他化自在天と云ふ、欲界天第六天にして下天の化作せし他の樂事を假て自在に遊戲す。

【三四】　梵天の宮殿を梵宮と云ふ、梵天は色界の初禪天にして欲界の婬欲を離れて寂靜淸淨なり。

【三五】　覺觀とは煩惱と云ふに同じ。

【三六】　光音天は色界の第二禪の終天にして口より淨光を發して語の要をなす。

【三七】　遍淨天は色界の第三禪天の第三にして淨光周遍す。

【三八】　廣果天は色界第四禪天の第三にして第四禪天中に於

ん　智を好みて多聞を習はば　明哲にして賢聖に遇はん　若し能く憍慢を伏すれば　轉身して勝族に生ぜん　愚惑にして自ら矜高ならば　常に卑賤の中に生ぜん　諂諛もて身曲を致せば訛言形矬陋ならん　聖心を見て喜ばざれば　所生は常に愚惷なり　瘖瘂にして言ふこと能はず目盲にして所見無けん　師善友を尊長せば　慈心安慰もて說かん　厭捨して聽受せざれば所生は當に聾聵なるべし　洗浴して諸の有德に　妙香花を供養せば　斯の人の受生する所は身相悉く端嚴にして　肌體極めて柔軟ならん　淨きこと煉眞金の如く　汚も應に汚すべからざる所とならん　邪行もて非處を犯し　害形もて衆生を毀たば　斯に由りて閹身を受けん　若し人今世に於て　愛欲の心熾然にして　身口及び諸根　盡く婦人の法に習はば　後常に女身を受けて　多欲にして聰慧ならざらん　若し人、燈燭を施して　清淨の道を演說し　迷者に正路を示し　等しく愛もて衆生を視んに　後に清淨眼を得　明徹にして障礙無からん　子愛もて衆生を視　諸の貧病を哀愍すれば　所生に子孫多く　月の衆星に在り　慈母の嬰兒に乳するが如くならん　齋を奉じて淨行を修すれば　他に愛せらるゝを懷妊せん　一切悉く犯さざれば　斯の淨業に由るが故に　生じて婇女多きことを得　圍繞して自ら娛樂すること　猶ほ天帝釋の如くならん　愛敬もて父母を禮し　諸の所尊を恭肅せば　後常に高貴のうちに生じ　身體極めて柔軟ならん　若し人今世に於て　堅固に律行を持てば　後に不動財を得ること　猶ほ雪山王の如くならん　若し人今世に於て　常に儀法を越へず　若は彼の求不求　等しく施して滿足せしむれば　後に生じて妙相を得　師子方頰車　無盡財を具足すること　海珍寶渚の如くならん　身口意清淨にして　兼て復た布施を行じ　他に於て嫉心無く　已財を守護せざれば　斯の業行の報に由りて　後に　鬱單越[二七]に生ぜん　若し人、名聞を慕ひ　及び生天の樂を求むるに　善師に依憑して學し　身口意清淨にして　所有の諸の財物を　愛樂もて守護を加へん　斯の業緣に由るが

【二七】鬱單越（Uttarakuru）、須彌山を中心とする四方四大洲の中、北方の大洲の名。

る所多く　常に應時の物を得ん　若し人淨行を修して　他の所愛を遠離すれば　生じて賢良の妻を得　容德悉く具足せん　慧者は常に　非處非時の行を遠離し　心安らかに身に過無く　丈夫の法を具足せん　清淨もて梵行を修すれば　賢聖の稱讃する所となり　受身常に鮮潔にして聞遠流布せしめ　衆人の瞻仰する所となり　諸天咸く供養せん　若し人此の世に於て　酒を遠ざけて迷亂を離るれば　强志にして忘誤ならず　義辯無異を得ん　若し人妄語せず　至誠にして虛欺せざれば　受身悉く具足し　染惡の名稱あらざらん　若し人、兩舌せず　方便もて善く諍を和すれば　生じて人中の尊と爲り　眷屬常に壞せざらん　若し人、惡口せず　美言もて衆聽を悅ばしむれば　恒に清淨の音を聞き　勝妙の法を宣揚せん　若し人此の世に於て無義の語を遠離し　誠實もて及び時に應じて　饒益の說を知量せば　後に生じて言常正にして聞く者樂ふて信行せん　若し他物を貪らず　未だ曾て求想を起さざれば　所生に心安樂にして　常に天の勝財を得ん　若し瞋恚　打縛惱逼の心を起さず　常に好んで慈忍を修すれば　後生じて梵天に昇らん　若し人今世に於て　深信にして正見を具し　有無眞實の說　善知識に習近せば　後に天中天に生じ　慧光は日月に踰えん　上に宣說する所の　無量清淨の業の如き行に隨つて各　世間種種の報を受生す　若は大利を求め　名稱もて天樂を生じ　無常もて堅固を求めんと欲すれば　當に德本を勤修すべし　淨不淨の業は　莊嚴種種の果を作らん　若は人道の中に生じて　黑白の報を雜受せんに　童子及び盛壯　中年衰老の時　斯の各は本緣に隨つて　迭ひに苦樂の報を受けん　諸業の作已に增さば　是れ則ち次第に受けんに　作すと雖も增長せず　久しくして乃ち果報を獲ん　若し人、施恒ならざれば　中間に貧匱を致さん　若し常に惠施を修すれば　富樂、窮已無からん　若し人、瞋恚多ければ　後に生じて恒に醜陋ならん　慈忍もて忿怒無ければ　受身常に端正ならん　若し人、慧を修せざれば　所生に癡闇冥なら

熱惱無く　衆人に愛樂せられ　眷屬悉く具足せん　若は人、醫藥を施せば　後に生れて病無きことを得　長壽にして常に安樂に　色力財を具足し　無量百千世にも　疫疾の劫を經ず　終に法醫の王に遇ひて　永く生死の根を拔かん　厠を造らば衆穢を除き　後に便利患無く　身心常に清淨にして　見る者歡ばざる莫く　是を緣として諸垢を離れ　究竟じて大安を獲ん　若は天上に生ぜんが爲に　或は復た名聞を求めて　恩に酬ひ及び報を望み　恐怖の故に施を行ずれば獲るところの果清淨ならず　受くる所多く麁澁ならん　祖先、施を建立し　子孫續いて絕えざれば　所生に遺慶を蒙り　無量餘財寶ならん　常に施の功德を歎じ　財あれども而も捨せざれば　所生に恒に貧匱ならん　施さんと欲するに財物無けれども　常に布施の德を歎じ　懸念して常に周恤すれば　所生に大富を得ん　福業を樂習せず　常に樂ふて智慧を修し　而も布施を行ぜざれば　所生に常に聰哲ならんも　貧窶にして財產無けん　唯だ樂ふて布施を行じ　而も智慧を修せざれば　所生に大財を得るとも　愚闇にして知見無けん　施と慧と二倶に修すれば　所生に財と智とを具せん　二倶に修せざれば　長夜處に貧闇ならん　布施するに正信無ければ　後に饒財物を得るも　所受悉く麁澁にして　其の心常に樂著ならん　深信もて施惠を行ずれば　生じて上財寶を得んに　所受皆な莊嚴にして　其の心常に愛樂ならん　善く良福田を知り　恭敬歡喜もて施さば　所生の眷屬和らぎ　倶に安樂の報を受けん　心に常に布施を輕んじ慢意もて福田を供せば　後に生じて財物多からんも　得と雖も用ひること能はず　凡品にして異聞なく　衆の敬慕せざる所とならん　心に布施を輕んぜず　恭敬もて福慧を修せば　生じて殊勝財を得　親族悉く宗敬せん　所應に隨ひて惠施し　其の心常に歡喜せば　生じて如意財を得　道を以て而も受用せん　理に乘じて財物を獲　智慧もて布施を修すれば　財寶自然に至り所得皆な失はざらん　時施するに留難無く　明かに修福の惠を解すれば　少しく求むとも獲

乘を父母に獻じ　親善の人に給施すとも　稟性慳悋多からんものは　生れて遊空神と作らん　宅舍もて飲食を乘せ　此を以て惠施を修すれば　生れて虛空神と作りて　常に宮殿と倶ならん　我已に略して　畜生と餓鬼趣を分別せり　今當に次第して　善道人天の果を說くべし　種種の淨行を修すれば　後に善趣の中に生じて　業に隨つて果報を受けん　今當に實の如く說くべし　天人阿修羅　長壽を欲求せん者は　生を害せざることを本と爲す　慧者應に知るべし　慈愍もて生を害せず　樂ふて諸の功德を修し　堅固にして傾動せざれば　所生に諸難を離れん　諸の群生の類に於て　捶打繫縛せざれば　斯の不惱の業に由りて　所生に常に病無けん　未だ曾て布施を修せざるも　亦た他財を盜まざれば　所生は常に短乏ならん　多く求めて少しく獲　能く廣く布施を行ずれども　而も復た他物を奪はば　所生に常に財を得　得るに隨つて尋で復た失せん　常に他物を盜まず　時に復た少施を行じ　方便もて財利を獲　所得恒に失はず　常に他物を盜まず　兼て復た廣く施を行ずれば　所生輒ち大いに富み　得財常に失せざらん　決定して齋戒を修すれば　所生に正法に遇ひ　衆の悉く愛樂するを見ん　名聞普く流布し　身心常に安樂にして　滿知止足し易く　夷泰らかにして憂惱無く　質直にして正行を修せん　所生の恩に報ひんと欲して　信心もて福業を修すれば　其の所生の處に隨ひて　常に父の餘財を得ん　若は飲食を以て施せば　長壽好色力にして　辯慧財寶多く　無病にして心安樂ならん　衣を施せば慚愧を得て　神儀高勝尊となり　人相悉く具足し　覩る者、欣ばざる莫く　其身は常に安隱にして　心適恒に喜歡ならん　屋を施せば舍宅を得　宮殿極めて嚴麗にして　寶藏悉く盈滿し　衆具、所欲に隨はん　若は井浴地　及與び淨水漿を施さば　生生に渴乏無く　所欲常に意に隨はん　橋船もて未渡を濟ひ　履屣〔二六〕もて徒跣に施せば　常に象馬車を得ん　是れ則ち人中の天なり　若は園林を以て施せば　常に勝妙の果を獲て　一切所依の蔭　心安らかに

〔二六〕　履は靴、屣は草履なり。

を飲食すれば[二〇]富單那鬼に墮して　糞及び死屍を食はん　怖愚尫劣　疾病諸の貧乞を欺かば後に富提鬼と作つて　常に諸の胎網を食して　顰蹙鄙陋にして行かん　慳惜にして貪求多ければ　死して賤餓鬼と作りて　形體甚だ黑瘦ならん　慳貪にして布施せず　或は施を還つて自ら毀らば　死して[二一]食吐鬼に墮し　唯だ膳膿涕唾せん　自ら福慧を修せず　他の布施を行ずるを毀り　慳惜にして麁澁を甘しみ　鄙穢の行を樂習し　居するに下流に伏竄し　恒に諸の不淨を食し　常に他人の物を希ひ　財あるも食用せず　寧ろ棄てて施を行ぜざれば　死して瞋餓鬼に墮せん　好んで他の陰私を發き　人を害ひて財物を取ると　餘罪もて餓鬼に墮せん　常に人の精氣を食ひ　麁言もて觸れて人を惱まし　好んで他の陰私を發き　剛强にして調伏し難ければ焰口餓鬼に生ぜん　他の鬪訟を熾然にし　財を積みて常に盡きんことを恐れ　慈無くして性剛强なれば　後、食虫鬼と作り　常に諸の蛆蟻を噉ひ　身を擧げて皆な火然えん　他人の施を抑止し　財あるも肯て捨てざれば　生れて巨身の鬼と作りて　腹大にして咽は針の如くならん

施さず自ら食せず　積聚して子孫の爲にせば　此の業を以ての故に　後に輕餓鬼に生れん子孫をして修福を爲さしむるとして　是に因りて信食を得　若は聚落の主と爲りて　他の財施を逼取すれば　死して[二二]鳩槃茶とならん　飲食常に意に隨ひ　若は多く衆生を殺し　肉を以て施惠と爲せば　餘罪もて[二三]羅刹と作らん　常に衆の美食を得　微恚少しく憂慼し　常に布施を修せんことを作し　香華もて自ら身を嚴り　好んで諸の伎樂を作さば　後に[二四]乾闥婆と作りて天執樂神と爲らん　利の爲に而も施を行じ　多瞋にして兩舌を好まば　後に[二五]毘舍闍と作りて　其身甚だ醜陋に　鬔髮にして而も赤眼にして　利爪長牙齒ならん　他に逼りて財物を取り而も廣く施を行ずるを以て　性樂しみ心輕躁なれば　生れて負多鬼と爲りて　多瞋にして性滿ち難からん　樂を好んで布施を修し　酒を嗜み歌舞を喜はば　後に生れて地神と作らん　與

【二〇】富單那鬼は餓鬼中の最勝なるもの。

【二一】食吐鬼は三十六鬼の第三なり。

【二二】鳩槃茶 (Kumbhāṇḍa) は人の精氣を噉ふ鬼。

【二三】羅刹 (Rākṣasa) とは惡鬼の總稱なり。

【二四】乾闥婆(Gandharva)は八部衆の一、樂神の名、酒肉を食はず但だ香を求めて陰身を養く。

【二五】毘舍闍(Piśācā)は持國天所領の鬼の名、餓鬼中の勝者なり。

澤を焚き　陸の衆生を燒害すれば　死して火劍獄に入らん　燒きて支節を剝斷し　諸の衆生を誘ひ取りて　親を詐りて其の命を害はんに　烏鵄群り　餓狗競ひ來りて其の肉を食はん　正法の橋を毀壞し　人をして非法の行に導けば　死して利刀道を經て　足を截ち肌骨を斷ち　長身・百足虫のごとくならん　貌像端正の女あり　身に纒ひて髓腦を啖ふに　彼の邪婬に由るが故に　他の婦女身に於て　摩觸して深く染著し　驅りて劍枝樹に上る　往還、身體を貫かん　種種に方便を設けて　諸の水虫の類を殺さば　死して沸灰河に入りて　身を擧げて悉く糜爛し　熱鐵丸を呑食し　融銅其の口に灌ぎ　鐵釘もて其の身に釘うたん　他の財を盜竊するが故なり　十不善を增上すれば　神逝いて地獄に入らん　盜罪は畜生に墮し　餘は則ち餓鬼に入らん

恚憎不善の行　心常に惡法を樂ひ　他の苦を見て隨喜せば　死して閻羅卒と作らん　已に諸の業行の　重き者は地獄に入ることを說く　今、當に畜生　餓鬼の業果報を說くべし　[一六]身三、[一七]口四の過　及び[一八]意の三不善　此の業若し增に非されば　死して畜生の趣に墮せん　多欲は鵝鴿　孔雀鴛鴦鳥に生れん　愚癡業の所生は　蚰蜒飛蛾等なり　無智にして打縛を好むは　象馬の中に報生せん　或は復た牛羊　[一九]麞鹿、諸の野獸と作らん　瞋恨は蚖蛇　蜂蠆毒虫の類と作らん　憍慢にして自ら矜高にし　惡心もて密かに害を懷かば　合羅婆(八脚獸)に報生し　及び虎師子と作らん　虛傲跡嶮の報は　猪狗驢狐狼なり　慳悋にして惠施せず　疾忌にして憎惡多く　輕躁にして心住せざれば　死して猿猴の中に墮せん　强顏にして羞恥に少く　無節にして言說多ければ　衆に隨つて果報を獲　後に烏鳥の身を受けん　邪食にし厭足無く　兩舌もて親友を離せば　後に猫狸の身を受け　或は熊羆の身とならん　大布施を修行するも　急性にして瞋怒多く　正憶念に依らざれば　後に大力龍と作らん　能く大布施を修するも　高心もて驕ち人を蔑すれば　斯の業行に由りて　大力金翅鳥に生れん　賢善の人より劫盜し　諸の餚饍

【一六】殺・盜・婬の三惡業は身業に屬す。
【一七】妄語、綺語、兩舌、惡口の四惡業は口業に屬す。
【一八】貪、瞋、邪の三惡業は意業に屬す。
【一九】麞とは鹿中の美なるもの。

を覺らず　今、來りて地獄に入れり　爾の時、諸の獄卒　卽ち罪衆生を執つて　驅りて地獄の門に向ふ　恐怖もて身毛竪ち　等活、若は　黑繩　衆合と二の[一〇]叫呼　[一一]無擇大地獄　[一二]燒熱及び[一三]大熱　土海及び糞池　鋒利なる劍葉の林　刀道劍枝の樹　灰河　[一四]鐵鑊の獄　諸の惡業を造る者　此の[一五]泥黎の中に生る　今、當に　彼の業の苦報差別の相を說くべし　等活に死すれば復た生じ　經歷すること億千劫なり　今聞くらく怨憎を結んで　互ひに相傷害するが故なり　人を陷るるに非道を以てし　兩舌もて親友に離れ　讒謗し及び妄語するもの　死すれば黑繩の獄に墮す　屠捕し及び餘の殺すもの　死すれば衆合の獄に入る　諸山に磨切する所　身碎け血謚流る　政を爲すに慈愍無く　峻法もて因緣を多くし　廣く諸の方便を設けて　種種に楚毒を加ふるものも　亦た衆合の獄に入りて　業に隨つて苦報を受けん　輪轉じて山芒を崩し　鐵石もて磨擣する所なり　貪恚癡の怖に隨ひ　訟を聽くに直を違枉するも　亦た衆合の獄に入りて鐵輪ありて其の身を斷たん　自ら强力の勢を恃み　嶮暴もて孤弱を陵すも　亦た衆合の獄に入り　黑象競ひ來りて踐まん　多人衆を逼迫し　彼をして大いに呼泣せしむれば　死して叫呼獄に墮して　身を擧げて常に洞燃たらん　斗秤もて人を欺誑し　心は惡なれども而も口は善くし　言行に誠實無ければ　大叫呼獄、呼哉大呼獄に入らん　見る者、身の毛竪つ　中に於て劇苦を受く　寄り付かば還つて故のごとくならさらん　非法を是法と言ひ　見法を非法と言ひ邪見もて因果を無くし　悔傲にして賢聖を謗らん　是の如きの諸人等　死しては無擇獄に入らん　父母賢善の人　沙門、婆羅門を　犯忤して憂惱せしむれば　死して熱地獄に入らん　父母賢善の人　沙門、婆羅門に　惡心もて苦痛を加ふれば　死して大熱獄に入らん　出家して淨行を修せんに　律儀戒を虧犯すれば　展轉して相形毀れ　死して熱土獄に入らん　禁を越えて正命を捨て　邪諂もて穢生を營めば　死して熱糞池に入らん　毒虫もて骨髓を貫き　田獵して林

【七】等活とは八大地獄の一、有情此の獄に於て種種の磨擣の苦を受くるも、暫く涼風に吹かれて前に等しく蘇生するが故に等活と云ふ。

【八】黑繩も亦た八大地獄の一、有情此の獄に於て黑繩もて支體を秤量せられて後に斬鋸せらる。

【九】衆合とは八大地獄の一、衆苦俱に來つて身を逼め合黨もて相害す。

【一〇】號叫と大叫の二地獄にして俱に八大地獄の中に攝す。衆苦に逼られて號叫し、乃至劇苦の爲に大哭聲を發す。

【一一】又は無間地獄と云ふ、八大地獄の一、苦を受くるに間無し。

【一二】八大地獄の一、炎熱圍繞して堪へ難し。

【一三】八大地獄の一、熱熾至極の獄なり。

【一四】罪人の煮殺すに用ひる足なき大鼎。

【一五】泥黎(Niraya)、譯して地獄と云ふ。

分別業報略經

大勇菩薩撰

宋天竺三藏僧伽跋摩譯

最勝無上の尊は　知見悉く具足したまふ　是の故に稽首したてまつる　及び法應眞僧を禮したてまつる　我れ今、安住知見具足の說を撰す。五趣[一]に緣起する所は　淨・不淨の業に由る　普く諸の世間の爲に　契經の義を開示し　智力の及ぶ所に隨ひて　業の果報を分別せん　佛、法を以て自覺したまふに　諸天咸な勸請す　即ち波羅奈[二]に至りて　眞諦の義を演暢したまふ　謂はく、苦[三]と及び苦因[四]と　苦集究竟の滅[五]と　八正[六]と悉く　盡苦淸淨の道を具足せり　無上人中の尊　苦業の果報と　是より轉じて相生する　煩惱と及び諸の業と　種種相の煩惱と　無量の諸の業行と　次第して略して分別して說きたまへり　大仙の說に隨順するに　契經に顯示する所は　諸法相に違はず　眞實決定の義を　慧者當に受持すべし　自在に作る所に非ず　果報は無用に非ず　亦た自性の起に非ず　亦た時に從つて生ぜず　自在天の無因と　自性及與び時とは　果に勝劣あるを以て　當に知るべし彼は因に非ず　無知より煩惱を生じ　是より諸業を起す　業に因りて衆の趣を開す　今當に差別を說くべし　諸の不善業を造りて　業に隨つて惡道に入らんに　彼の諸の罪衆生に　閻王、慈哀もて說かん　生・老・病・死の苦は　王法も拘執せらる　汝、彼の天使を見て　何ぞ勝覺を生ぜざる　惠施淸淨戒は　能く身口意を調ふるに　汝、何の所求の爲に　而も上願を發せざる　不幸にして惡友に遇ひ　唯だ非法の事を聞き　我の貪恚癡を增せり　何に由りてか淨業を起さん　汝は曾て善を修せず　但だ諸の惡行のみ作して　罪報の至る

【一】地獄、餓鬼、畜生、人、天と五趣と云ふ。

【二】波羅奈(Nārāṇasī)とは國名、恒河の流域にあり、此中の鹿野園は佛の初轉法輪の地にして、五比丘の濟度ありし所なり。

【三―六】次第の如く苦、集、滅、道に配す、之れ四聖諦なり。

分別業報略經解題

此經は經錄に依るに、或は又た大勇菩薩分別業報略と云はれてをつたもので、大勇菩薩の撰と傳へてをるけれども撰者の傳は未だ明かでない。譯者僧伽跋摩は印度の人で、宋には衆鎧と云はれてをる。宋の元嘉十年(西紀四三三)流沙より建業に來り、器宇清峻にして特に戒德を具して律藏に精通してをつた所から、廣く道俗の歸崇を受け、特に道場寺慧觀法師と親交があつたやうである。此當時宋には未だ二衆が備はらなかつたが、時偶ゝ師子國の尼僧鐵薩羅の入都せるを機に、此に跋摩を戒師として僧尼の受具するもの數百人に及んだと傳へられてをる。然るに、元嘉十九年を以て宋を去つて歸國の途に上つたから、跋摩の譯業は滯宋十年間に行はれたのであつて、毘尼摩得勒伽十卷、雜阿毗曇心論十一卷、勸發諸王要偈一卷、請聖僧俗文一卷と今の分別業報略經の五部二十四卷の譯出がそれである。

此經の内容は地獄・餓鬼・畜生・人・天(此中に阿修羅をも含める)の五趣の業報を分別したものであつて、善惡の業報を要領よく略述してをる點では他に類例を見ない珍しい經文である。

昭和八年十二月二十六日

譯者　清水谷恭順　識

や。」世尊、告げて曰はく、『此の智も亦た是の如き四諦を以て其の所緣と爲して諦相の想を除き、清淨の行相もて一切種の諸諦の行相に入る。有情一切の義利を作すに於ては、趣向行相少分有量法界の妙智もてす。若しは諸の聲聞の有情一切の義利を爲すに於ては、無有棄背趣向行相もてす。若しは諸の獨覺の有情一切の義利を作すに於ては、棄背行相全分無量法界の妙智もて、能く一切の煩惱所智の二障、離繫所依の事業を作し、又た一切の有情一切の災患を救濟して所依の事業を作す。是を無明の對治殊勝と名づく。』時に薄伽梵、是の經を說き已つて、諸の苾芻衆、默然として領悟し、深心に隨喜して未曾有なりと歎じ、佛の所說を聞きて皆大いに歡喜し、信受奉行せり。

分別緣起初勝法門經（終）

や。」謂はく、『聖道先聖後聖同所遊履に於て正しく行相を觀ずればなり。』「云何んが第四を出行相と名くるや。」謂はく、『聖道無上性中に於て正しく行相を觀ずればなり。』

復た言はく、「世尊、何に緣つてか聖諦に唯だ四種のみあるや。」世尊、告げて曰はく、『是の如きの四諦は普く一切の染淨因果差別の性を攝するが故なり。』

復た言はく、「世尊、何に緣つて四諦は是の如く先後次第して說きたまふや。」世尊、告げて曰はく、『是れ世間の諸病、病因、病滅、良藥相似の法に由るが故なり。』

復た言はく、「世尊、見道に入る時、此四諦に於て頓現觀を爲すや、漸現觀を爲すや。」世尊、告げて曰はく、『別道理ありて頓現觀と名く、別道理ありて漸現觀と名く。何の別道理を頓現觀と名くるや。謂はく、自內證の眞諦の聖智は眞智境非安立義に於て總相の緣なるが故に、頓現觀と名く、何の別道理を漸現觀と名くるや。謂はく、初業智及び後得智は自相及び因果相を觀察して、行相別相の緣と作るに由るが故に漸現觀と名く。』

復た言はく、「世尊、若し是の如き四聖諦あらば、何に緣つて世尊は復た二諦を說きたまふや、謂はく世俗諦と及び勝義諦なり。」世尊、告げて曰はく、『卽ち是の如き四聖諦の中に於て、若しは法住智所行の境界は是れ世俗諦、若しは自內證最勝智所行の境界、非安立智所行の境界を勝義諦と名く。』

復た言はく、「世尊、是の如き四諦は聖・非聖に於て皆な悉く是れ諦なり、何に緣つて如來は聖諦と說きたまふや。」世尊、告げて曰はく、『是の如き四諦は非聖者に於ては唯だ法爾に由るを說いて名けて諦と爲し、正智に由らず決定信の故に說いて名けて諦と爲す。諸聖者に於ても亦た法爾に由るを說いて名けて諦と爲し、亦た正智に由りて決定信の故に說いて名けて諦と爲す。是の故に如來は唯だ四種を說いて名けて聖諦と爲す。』

復た言はく、「世尊、全分無量法界の妙智は何の所緣と爲んや、何の行相あるや、何の事業を作す

[三]菩提分法は皆是れ聖道の攝なり、何に緣つてか唯だ八聖道支を說いて以て道諦と爲したまふや。」世尊、告げて曰はく、『是の如きの所說の八聖道支は普く一切の菩提分法を攝すればなり。』復た言はく、「世尊、苦諦の中に於て四の行相あり。云何んが初を無常行相と名くるや。」謂はく、『苦諦の生滅法性に於て正しく行相を觀ずればなり。』「云何んが第二を苦行相と名くるや。」謂はく、『苦諦に於て即ち生滅法性を以て依と爲して三種の苦に於て法性に隨逐して正しく行相を觀ずればなり。』「云何んが第三を空行相と名くるや。」謂はく、『苦諦の離實我性に於て正しく行相を觀ずればなり。』「云何んが第四の無我行相なる。」謂はく、『苦諦の非我相性に於て正しく行相を觀ずればなり。』

復た言はく、世尊、「集諦の中に於て四の行相あり。云何んが第一を因行相と名くるや。」謂はく、『能植衆苦種子因緣愛中に於て正しく行相を觀ずればなり。』「云何んが第二を集行相と名くるや。」謂はく、『續起因緣愛中に於て正しく行相を觀ずればなり。』「云何んが第三を生行相と名くるや。」謂はく、『五趣差別生起因緣愛中に於て正しく行相を觀ずればなり』。「云何んが第四を緣行相と名くるや。」謂はく、『能作餘緣引發因緣愛中に於て正しく行相を觀ずればなり。』

復た言はく、世尊、「滅諦の中に於て四の行相あり。云何んが第一を滅行相と名くるや。」謂はく、『永斷煩惱滅中に於て正しく行相を觀ずればなり。』「云何んが第二を靜行相と名くるや。」謂はく、『永斷衆苦靜中に於て正しく行相を觀ずればなり。』「云何んが第三を妙行相と名くるや。」謂はく、『永斷無罪淸淨安樂性中に於て正しく行相を觀ずればなり。』「云何んが第四を離行相と名くるや。」謂はく、『永斷常住性中に於て正しく行相を觀ずればなり。』

復た言はく、「世尊、道諦の中に於て四の行相あり。云何んが第一を道行相と名くるや。」謂はく、『聖道與境相應無顚倒性に於て正しく行相を觀ずればなり。』「云何んが第二を如行相と名くるや。」謂はく、『聖道永出世間離諸漏性に於て正しく行相を觀ずればなり。』「云何んが第三を行行相と名くる

【三】菩提分法とは、菩提に順趣する法であつて、四念處、四正勤、四如意足、五根、五力、七覺支、八正道の三十七科の道品を指す。

に永斷するが故なり。』復た言はく、「世尊、云何んが永滅なる。」世尊、告げて曰はく、『畢竟斷の故なり。』復た言はく、「世尊、如何んが寂靜なる。」世尊、告げて曰はく、『未來の苦果愛永斷するが故なり。』復た言はく、「世尊、云何んが隱沒なる。」世尊、告げて曰はく、『現在の苦果愛永斷するが故なり。』

復た言はく、「世尊、云何んが正見なる。」世尊、告げて曰はく、『所謂る現觀の前方便慧、正現觀慧、及與び現觀後所得慧は、所知の方便聖教諸の邪僻の行を超越するなり。』復た言はく、「世尊、云何んが正思なる。」世尊、告げて曰はく、『謂はく三寶に於て已に證淨を得て所依止と爲る。彼の功德に於て隨念思惟して、歸依外道師等を超越するなり。』復た言はく、「世尊、云何んが正語なる。」世尊、告げて曰はく、『謂はく聖所愛の無漏の戒攝無漏の作意は同時にして轉じ、四語業に於て能く正しく遠離して一切の諸の險惡趣を超越するなり。』復た言はく、「世尊、云何んが正業なる。」世尊、告げて曰はく、『謂はく聖所愛の無漏の戒攝無漏の作意は同時にして轉じ、三身業に於て能く正して遠離して一切の諸の險惡趣を超越するなり。』復た言はく、「世尊、云何んが正命なる。」世尊、告げて曰はく、『謂はく聖所愛の無漏の戒無漏の作意は同時にして轉じ、邪命趣の身語二業に於て能く正しく遠離して一切の諸の險惡趣を超越するなり。』復た言はく、「世尊、云何んが正勤なる。」世尊、告げて曰はく、『上解脫に於て欲樂を依と爲し、發勤精進して障礙を遠離して對治を圓滿するなり。』復た言はく、「世尊、云何んが正念なる。」世尊、告げて曰はく、『止觀を勤修して諸の(一)瑜伽師のごとく(二)三相に依止して、時時に彼の三種の相の中に於てし、及び放逸ならず倶に境界を行じて心現明記して修道の加行を超越し遠離するなり。』復た言はく、「世尊、云何んが正定なる。」世尊、告げて曰はく、『謂はく是の如き七種の定具に由りて心一境の性を資助し瑩飾し、乃至能く是の如きの七支勝進依止を作し、及與び殊勝の功德を引發して所依止と作すなり。』復た言はく、「世尊、所有の一切の四念住等の

【一】瑜伽師とは禪定相應する人を云ふ。
【二】三相とは、解脫相、離相、滅相を云ふ。

依る全分無量法界の妙智なり。』

復た言はく、「世尊、少分有量法界の妙智は何の所緣とせんや、何の行相あるや、何の事業を作すや。」世尊、告げて曰はく、『少分有量法界の妙智は四聖諦十六行相を緣じ無明等の煩惱業を作して一切の雜染離繫の事業を生ず。』

復た言はく、「世尊、云何んが應に生苦の相を知るべきや。」世尊、告げて曰はく、『是れ內緣苦所依性の故に、是れ外緣苦所依性の故に、是れ俱緣苦所依性の故なり。』復た言はく、「世尊、內緣苦とは其の相云何ん。」世尊、告げて曰はく、『所謂る病苦、老苦、死苦なり。』復た言はく、「世尊、外緣苦とは其の相云何ん。」世尊、告げて曰はく、『非愛和合、所愛別離、求不得苦なり。』復た言はく、「世尊、俱緣苦とは其の相云何ん。」世尊、告げて曰はく、『所謂る略して五取蘊苦を說く。』復た言はく、「世尊、云何んが愛と名くる。」世尊、告げて曰はく、『謂はく現在の自體に於て貪著するなり。』復た言はく、「世尊、後有愛とは其の相云何ん。」世尊、告げて曰はく、『謂はく未來の自體に於て希求するなり。』復た言はく、「世尊、云何んが喜貪俱行愛なるや。」世尊、告げて曰はく、『謂はく已得攝受資財現前の境界に於て深く味著を生ずるなり。』復た言はく、「世尊、云何んが名けて彼彼喜愛と爲す。」世尊、告げて曰はく、『謂はく未得攝受資財非現の境界に於て種種追求するなり。』

復た言はく、「世尊、云何んが、此の愛の永斷無餘なる。」世尊、告げて曰はく、『見修所斷、煩惱斷の故に、下分上分の諸結斷の故に、畢竟斷の故に、未來の苦果諸愛斷の故に、現在の苦果諸愛斷の故に、是を此の愛の無餘永斷と名く。』復た言はく、「世尊、云何んが棄捨なる。」世尊告げて曰はく、『諸見所斷、煩惱斷の故なり。』復た言はく、「世尊、云何んが變吐なる。」世尊、告げて曰はく、『諸修所斷、煩惱斷の所なり。』復た言はく、「世尊、云何んが永盡なる。」世尊、告げて曰はく、『諸の下分結已に永斷するが故なり。』復た言はく、「世尊、云何んが遠離なる。」世尊、告げて曰はく、『諸の上分結已

べし。所以は何ん、聞所成智の體の上に思所成智あること無く、思所成智の體の上に修所成智あること無く、一切世間の修所成智の體の上に一切の出世の修所成智あること無く、出世の有學智の上に諸の無學智あること無く、無聲聞智の上に如來等の智あること無し。若し是の如くならば、應に即ち是れ智なるも卽ち是れ無智なるべし。是の如く無明は、應に決定の體相を立つべからざるべし。又た我は彼の三善根の中に於て說いて無癡ありと說き、應に但だ癡無きを說きて無癡と名くべきも、然も癡無きを說きて無癡と名くるに非ず。故に明無きを說きて無明と名くるに非ざるなり。而も別に一心所有の法に眞實を知らざるものあるを、說いて無明と名く。別に一心所有の法に眞實を了知するものあるが如きは、說いて名けて智と爲す。又た唯だ明無きを無明と名くれば、應に是の如き一切の無明の十一の殊勝は無かるべし。是の故に應に知るべし、唯だ明無きを說いて無明と名くるに非ざることを。是れを無明の障礙殊勝と名く。』

復た言はく、「世尊、云何んが無明の隨縛殊勝なる。」世尊、告げて曰はく、『乃至有頂三界の有情は諸諦の中に於て所有の無智隨眠隨縛未だ缺けず、未だ滅ぜず、彼の有情に由りて說いて具縛と名く。又た此の無智は善趣、惡趣、因果、差別す。無色の有情は其の下品にあり、色界の有情は其の中品にあり、欲界の有情は其の上品にあり。是の如く、三品の無明を成就す。諸の有情の類の當來に生ずべき一一の法、爾の三品の隨縛は此を異生と說く。若しは諸の聖者は漸次に永斷し、若しは上中を具し、定んでは中下にあり、或は中下にあつて上下に無し。又た阿羅漢は諸漏盡きて煩惱障を脫すと雖も、應に知るべし、尙ほ所知障ありて無明の隨縛を攝す。是の如きの無明は應に知るべし、極遠にありて有情に隨逐し、唯だ諸佛を除く餘は皆な隨縛あり。是を無明の隨縛殊勝と名く。』

復た言はく、「世尊、如何んが無明の對治殊勝なる。」世尊、告げて曰はく、『二の妙智ありて無明を對治す。何等をか二と爲す、一には他音に依り或は依止せざる少分有量法界の妙智、二には他音に

等と共相なる煩惱も亦た、無明を用つて依と爲して轉ず。是を無明の相狀殊勝と名く。』

復た言はく、「世尊、云何んが無明の作業殊勝なる。」世尊、告げて曰はく、『應に知るべし、無明に略して二種の所作の事業あることを。一には無明は普く能く一切の流轉所依の事業を造作し、二には無明は普く一切の寂止能障の事業を造作す。』復た言はく、「何等をか名けて一切流轉と爲したまふ。」世尊、告げて曰はく、『若しは是處轉、若しは是事轉、若しは如是轉、我れ總じて說きて一切流轉と爲す』。復た言はく、「世尊、是れ何の處轉なりや。」世尊、告げて言はく、『三世の處に於けるものにして我の分別に由る』。復た言はく、「世尊、是れ何の事轉なるや。」世尊、告げて曰はく、『內外の六處にして我の取執に由る』。復た言はく、「世尊、云何んがして轉ずるや。」世尊、告げて曰はく、『諸業の異熟相續の流轉は我の分別に由り、邪分別に由る。』復た言はく、「世尊、云何んが名けて一切の寂止と爲したまふ。」世尊、告げて曰はく、『一切の寂止に略して四種あり。一には寂止所依、二には寂止所緣、三には寂止作意、四には寂止果成なり。是を無明の作殊勝と名く。』

復た言はく、「世尊、云何んが無明の障礙殊勝なりや。」世尊、告げて曰はく、『應に知るべし、無明は勝法を障礙し、廣法を障礙することを。』復た言はく、「世尊、如何んが無明は勝法を障礙するや。」世尊、告げて曰はく、『勝法と言ふは、能く五根を攝して其をして和合せしむ。所謂る慧根の此を障礙するは卽ち是れ無明なり、是の故に說いて勝法を障礙すと名く。』復た言はん、「如何んが無明は廣法を障礙するや。」世尊、告げて曰はく、『廣法と言ふは、聞所成智、思所成智、修所成智の此を障礙するは卽ち是れ無明なり。是の故に說いて廣法を障礙すと名く。』復た言はく、「世尊、說きたまふが如きは、無智を名けて無明と爲すや、此の唯だ智無きを無明と名けたまふや。」世尊、告げて曰はく、『唯だ智無きを名けて無明と爲すに非ず。』復た言はく、「世尊、若し唯だ智無きを名けて無明と爲すに、斯れ何の過かある。」世尊、告げて曰はく、『若し爾らば無明は應に決定の體相を立つべからざる

學する者と雖も亦た未だ斷ずること能はず。諸の聖有學にして、應に知るべし永く斷ずることを。又た不放逸內法異生、若し福行及び不動行を造らば、彼は是れ正法如理の作意相應の善心の引發する所にして、解脫を依と爲して解脫に迴向して引發するが故なり。善趣に於て殊勝の生を感ずと雖も、而も無明は增上緣を起すに非ず。然れども能く彼の四種の無明は增上緣を斷ずることを作す。諸の聖有學は不共の無明已に永く斷ずるが故に、新業を造らず、所有の故業は隨眠力に由りて、未だ永く斷滅せず、暫へ觸れて還つて吐く。是の如く所有の無明緣行は生生に漸滅して復た增長せず。此道種に由りて應に知るべし、內法諸有の學者は無明を緣りて更に諸行を造らざることを。是の故に唯だ外法異生に依りて、我は順次雜染緣起の最極圓滿を說き、內法に住するに非ず、是を無明の轉異殊勝と名く。」

復た言はく、「世尊、云何んが無明の邪行殊勝なる。」世尊、告げて曰はく、『彼の四無明は諸諦の中に於て皆能く增益と損減の二種の邪行を發起す。』復た言はく、「世尊、何んが名けて增益損減二種の邪行と爲す。」世尊、告げて曰はく、『四顚倒に由りて謂ふに非法に於て是法なりと見、或は是法に於て非法なりと見、或は生天解脫道の中に於て非方便をば是方便と見、是方便をば非方便と見る。是の如きを名けて增益邪行と爲す。諸有の誹謗、一切の邪見、是の如きを名けて損減の邪行と爲す。是を無明の邪行殊勝と名く。』

復た言はく、「世尊、云何んが無明の相狀殊勝なる。」世尊、告げて曰はく、『應に知るべし、無明に二種の相あり、一には微細自相殊勝、二には遍於可愛非愛俱非境界共相殊勝なり。所以は何ん、纏縛の無明すら尙ほ微細難知難了と爲す。況んや、所有の隨眠無明、相應無明の尙ほ微細難知難了なるをや。況んや、彼の所有の不共無明の一切の可愛非愛俱非境界に遍して眞實の相を覆ひ虛妄の相を顯はして共相にして轉ずるをや。餘の煩惱には是の如き相あらず、是の故に殊勝なり。餘の身見

はず、云何んが應に知るべき。」世尊、告げて曰はく、『諸の緣起の義略して十一あり。是の如く應に知るべし、謂はく無作者の義是れ緣起の義、有因生の義是れ緣起の義、離有情の義是れ緣起の義、依他起の義是れ緣起の義、無動作の義是れ緣起の義、性無常の義是れ緣起の義、刹那滅の義是れ緣起の義、因果相續無間絕の義是れ緣起義、種種因果品類別の義是れ緣起の義、因果更互相符順の義是れ緣起の義、因果決定無雜亂の義是れ緣起の義、是の如きを應に緣起の略義と知るべし。』

復た言はく、「世尊、餘經に說くが如き緣起の甚深は、云何んが應に是の如き緣起甚深の相を知るべき。」世尊、告げて曰はく、『卽ち十一の緣起略義に依りて應に緣起の五甚深の相を知るべし。何等をか五と爲す、一には因甚深、二には相甚深、三には生甚深、四には差別甚深、五には流轉甚深なり。應に緣起甚深の相を知るべし。復た五種あり、何等をか五と爲す、謂はく相甚深、引發因果諸分甚深・生起因果諸分甚深・差別甚深・對治甚深、應に知るべし。緣起に復た五種甚深の相あり、何等をか五と爲す、謂はく攝甚深、順次甚深・逆次甚深・取執甚深・所行甚深、是を無明等起殊勝と名く。』

復た言はく、世尊、「云何んが無明の轉異殘勝なるや。」世尊、告げて曰はく、『略して四種の轉異無明あり。何等をか四と爲す、一には隨眠轉異無明、二には纏縛轉異無明、三には相應轉異無明、四には不共轉異無明なり。』復た言はく、「世尊、誰か何等の轉異無明ありて、無明を緣と爲して行を生ずと說くや。」世尊、告げて曰はく、「外法異生非理作意の引く所の四種の轉異無明あり、此に由りて緣と爲りて福・非福及び不動行を生ず。是の如く說く所の外法異生、所有の福行及び不動行、相應の善心一切は皆是れ非理の作意の引く所の等流なり。內法異生若しは放逸の者、彼の一種の不共の無明を除く所餘の無明は放逸を引發して緣と爲りて行を生ず。內外異生若しは不放逸勤修學者、及び聖有學の三種の無明は妄念を引發して非福の緣と爲る。然るに非福の緣の爲に三惡趣を招くこと能はず。故に此の非福を我は說いて無明緣行と爲さず。是の如く所說の不共無明、內法異生は不放逸にして修

非ず。八には自在緣起あることを說く、謂はく善く靜慮を修治して緣と爲す。諸の修定の者の願樂する所に隨つて、是の如く皆な成じ終つて別異無し。是の如きを名けて、我れ略して說く所の八門の緣起と爲すなり。』

復た言はく、「世尊、佛の說きたまへる所の如きは、業に因るが故に生じ、愛に因るが故に轉ずと、何の密意に依りてか是の如きの說を作したまふ。」世尊、告げて曰はく、『無明を緣と爲して先に諸有に於て種種の福行或は非福行或は不動行を造作し增長し、種種の生身の種子の差別を引發し攝受す。此の有の中に於て若し愛未だ斷ぜざれば、此の愛に由るが故に能く行等をして其の有を轉ぜ令め、有は後有自體の功能を起す。是の如き功能は愛を離れず。此の密意に依るが故に、是を說きて業に因るが故に生じ愛に因るが故に轉ずと言ふなり。』

復た言はく、「世尊、若し世尊、愛は是れ轉の因と說かば、何に緣つてか但だ取は有の緣と爲り愛は有の緣に非ずと說きたまふや。」世尊、告げて曰はく、『若し取を離れて愛あらば、緣と爲りて非福行等を轉變し、有支を成じて諸の惡趣に生ぜしむること能はず。又若し取を離るれば、諸は愛あること無く、緣と爲りて福行、不動行等を轉變して有支を成じて不定地及び定地に於て諸の善趣に生ぜしむること能はず。是の故に唯だ愛は有の緣と爲るのみに非ず、然も後の有支は定んで取を緣ず。』

復た言はく、「世尊、大因緣法門經に說くが如き、汝、阿難陀、若し彼彼有情の類中に於て生あること無ければ、應に是の如く是の如きの類生無かるべし。若し一切の生都て有ること無ければ、應に生緣老死を施設せざるなるべしと。何の密意に依りて是の如き說を作したまふ。」世尊、告げて曰はく、『所引生と及び所生生の二種の密意に依るが故に是の如き說を作す。又た老死遠增上緣に依ると、及び老死近增上緣に依るの二種の密意をもつて是の如きの說を作す。』

復た言はく、「世尊、先に爲に略して緣起の句義を說かんと、其の緣起の義猶ほ未だ爲に說きたま

復た言はく、「世尊、此の因緣由三種の別義は云何んが應に知るべき。」世尊、告げて曰はく、『諸の能く後生を引發する種子は是れ其の因の義、若し此の生と依と作り持と作りて生起することを得せしむれば是れ其の緣の義、既に命終し已つて導引して生に近づきて生起することを得せしむれば是れ其の由の義なり。是の如く應に三義の差別を知るべし。』

復た言はく、「世尊、緣起と言ふは是れ何の句義なるや。」世尊、告げて曰はく、『是の如きの諸分は各自緣に由りて和合闕くること無く相續して起る、是の如きを名けて緣起の句義と爲すなり。』

復た言はく、「世尊、唯だ此の生の相續の緣起のみありて、更に別に所餘の緣起あると爲んや。」世尊、告げて曰はく、『我れ緣起を說くに略して八門あり。一には受用世俗境界緣起ありと說く、謂はく眼色を緣じて眼識を生じ、三事和合して便ち其の觸あり、觸は爲に受を緣ずと、是の如く廣く說く。二には任持緣起ありと說く、謂はく四食を緣じて諸根の大種安住增長す。三には食因緣起ありと說く、謂はく諸穀を求むるに、田種水の緣ありて芽等を發生す。四には一切生身相續緣起ありと說く、謂はく能引能生に由りて諸の分別ありて一切の所引所生を生ず。五には一切生身依持緣起ありと說く、謂はく諸の世界は諸の因緣に由りて成壞を施設す。六には一切生身差別緣起ありと說く、謂はく不善善の有漏業に由りて三惡人天趣の別を施設す。七には淸淨緣起ありと說く、謂はく他音に依り及び自內の如理の作意に依りて正見を發生し、能く無明滅す、無明滅するが故に諸行隨つて滅す、廣く說かば乃至成滅するに由るが故に老死隨つて滅す。』

復た言はく、「世尊、無明等次第して緣と爲りて能く行等を生ずるが如く、即ち是の如く次第して滅すとせんや。」佛の言はく、『爾らず。』復た言はく、「世尊、何に緣つてか次第して彼の滅を說きたまふや。」世尊、告げて曰はく、『先の諸分は功能を生ぜざるに由りて、後の諸分をして不生法を得せしめんことを顯示せんと欲するが爲の故に次第して說く。然るに生相と爲さざる滅法に次第轉あるに

卷の下

復た次に、世尊、餘處の說の如く、緣に四種あり、所謂る因緣、等無間緣、及び所緣緣、幷に增上緣なり。世尊、今は何の緣に依りて無明は行に緣たりと說き、何の緣に依りて次第して乃至生は老死に緣たりと說きたまふや。世尊、告げて曰はく『我、諸行に依りて總相宣說するに四種の緣あり、今此の義の中には我は唯だ一の增上緣に依りて無明は行に緣たり、次第して乃至生は老死に緣たりと說く。此の增上緣に復た二種あり、一には遠、二には近なり。』復た言はく、「世尊、此の增長緣は云何んが遠と爲し、云何んが近と爲したまふや。」世尊、告げて曰はく『非理の作意若し未だ生ぜざる時は、無明の隨眠は能く諸行の遠增上緣と爲り、生じ已らば便ち近增上緣と作る。非理の作意の引く所の諸行は六識身と相應して、俱にありて同生同滅す。若し未だ生ぜざる時は彼は能く識の遠增上緣と爲り、彼若し生じ已らば便ち識の近增上緣と爲る。未だ死歿せざる時は識は名色の遠增上緣と爲り、旣に死歿し已れば識は名色の近增上緣と爲る。其の色を以て彼の名色に望むが如く是の如く、其の所引の名色を以て彼の所生の名色に望むも亦た爾り。名色を以て彼の名色に望むが如く、是の如く六處の彼の六處に望み、觸の觸に望み、受の受に望むも亦復た是の如し。無明を以て彼の諸行に望むが如く、無明の愛に望み、愛の取に望み、取の有に望むも亦復た是の如し。其の識を以て彼の名色に望むが如く、名色等を以て名色等に望み、是の如く有を以て生に望むも亦た爾り。若は胎藏に在る嬰孩、童子少等の時の生は能く老死の遠增上緣と爲る。諸根成熟して命の將に盡きんとする時、應に知るべし、能く近增上緣と作ることを。』復た言はく「世尊、彼の有因有緣有由の如く、法門經に[illegible]愛は是れ業因なりと說く、何の密意かあるや。」世尊、告げて曰はく『所攝の業あり、愛の用に因と爲る、是れ此の中に說く所の密意と爲す。』

復た言はく、「世尊、無明も亦た非理作意に緣たり、何の故に唯だ無明をもつて緣たりと說きたまふや。」世尊、告げて曰はく、『無明も亦た非理作意を引きて行の與に緣と爲る。又た無明より生ずる所の觸・受を緣と爲して愛を生ず、是の故に偏說するなり。』

復た言はく、「世尊、略して幾の相に由りて應に緣起を知るべきや。」世尊、告げて曰はく、『略して三相に由りて應に緣起を知るべし。一には無動作に由りて緣起の相を知り、二には性無常に由りて緣起の相を知り、三には堪能に由りて緣起の相を知るなり。』

の境界に於て速疾明利に行ふこと能はず、或は行はざるが故なり。五には命根の衰損なり、壽量將に盡きんとして死に隣近するが故に、少かに死緣に遇へば堪忍せざるが故なり。即ち此の四生身相の中に於て復た六種の死の差別相あり、一には究竟死、二には不究竟死、三には自相死、四には不究竟死分差別相、五には究竟死分差別相、六には時非時死なり。應に知るべし、此の中に自相死とは、謂はく識の身を離れて色相滅沒するなり。差別の相是の如きを、名けて生身相の中の名色等の相は生・老死に由りて而も差別ありと爲すなり。』

復た言はく、「世尊、緣起の中に於て三種の愛を說き、一切皆な是れ生身の緣なりと、何に緣つてか處々多分に唯だ欲界の生身を說きたまふ。」世尊、告げて曰はく、『欲界の生身の相は最も麁なるが故に、顯了し易きが故に、永解脫退還の道に非ざるが故なり。』

復た言はく、「世尊、先に說きたまふ所の如く、諸引緣起、諸生緣起に十二あり、諸分の中に於て幾か是れ能引、幾か是れ所引、幾か是れ能生、幾か是れ所生なる。」世尊、告げて曰はく、『應に知るべし、此の十二分中に於て無明と行と及び識の一分を名けて能引と爲し、復た一分の識と及び名色・六處・觸・受ありて名けて所引と爲し、復た一分の受・愛・取・有ありて名けて能生と爲し、生及び老死を名けて所生と爲す。應に知るべし、一分の名色・六處・及與び觸・受も亦た所生と名くることを。』

復は言はく、「世尊、是の如き諸分は、若は引、若は生、一時の起と爲んや、次第の起と爲んや。」世尊告げて曰はく、『一時にして起り、次第をもつて宣說するなり。』

復た言はく、「世尊、是の如き諸分は若し一時の起ならば、何の因緣の故に先に其の引を說き、後に其の生を說きたまふや。」世尊、告げて曰はく、『要ず引あるに由りて後に方に生あり、無引に非ざるが故なり。』

復た言はく、「世尊、老は何の苦を顯はすや。」世尊、告げて曰はく、『老は壞苦を顯はす。』

復た言はく、「世尊、死は何の苦を顯はすや。」世尊、告げて曰はく、『死は苦苦を顯はす。』

復た言はく、「世尊、是の如き四種生身の相は、生・老・死に由りて何の差別かある。」世尊、告げて曰はく、『即ち此の四種生身の相は、若は次第して生じ、若は彼に屬して生ず。若し是の如く生ずれば、應に知るべし、是を生身の生相と名くることを。』

復た言はく、「世尊、云何んが、次第生身の生相なるや。」世尊、告げて曰はく、『其の最初に於て下種の生あり、此より無間に漸增の生あり、此より無間に出胎の生あり、此より無間に漸長の生あり。既に成長し已つて受用の言說、能く等生することを得。是の如きの品類を次第の生と名く。』

復た言はく、「世尊、此は誰に屬して生ずるや。」世尊、告げて曰はく、『[四]蘊界處の生にして都て我あること無し。所以は何ん、諸の蘊等の漸く增長するを以ての故に、其の性は無常なり。即ち無常の法をもつて此の生相あり。』

復た言はく、「世尊、云何んがして生ずるや。」世尊、告げて曰はく、『命根力に由りて暫時住することとあり。分限法の故に其の性は無常なり。即ち無常の法は是の如くして生ず。即ち此の四種生身の相は、時分變異す。應に知るべし、五種の衰損を作すを說いて名けて老と爲すことを。』

復た言はく、世尊、「云何んが名けて五種の衰損と爲したまふ。」世尊、告げて曰はく、『一には鬚髮の衰損なり、彼の鬚髮の色の衰壞するを以ての故に。二には身相の衰損なり、形色膚力の皆な衰損するが故に。三には作業の衰損なり、發言氣上喘息逾急なるは身戰掉するが故に、住して便ち僂曲なるは其の腰背皆な無力を以ての故に、坐して即ち低屈なるは身羸弱の故に、行くに必らず杖を按ずるは身虛劣の故に、凡そ思惟する所智識愚鈍なるは念悟亂の故なり。四には受用の衰損なり、現資具に於て受用劣るが故に、戲樂の具に於て一切現に受用すること能はざるが故に、諸の色根所行

【四】蘊は五蘊、界は十八界、處は十二處にして之を三科と稱す、何れも凡夫の迷執を打破せん爲に施設せるものなり。

復た言はく、「世尊、若し爾らば此の愛は唯だ受の緣なりと爲せば、斯れ何の過かある。」世尊、告げて曰はく、『應に一切の受は皆な是れ愛の緣なるべし。然るに復た受に是の愛の緣に非さるあり。彼は能く緣となりて諸愛を斷滅す、是故に唯だ受は愛の緣のみに非ず。』

復た言はく、「世尊、若し唯だ愛は有と緣を作して取を緣ぜずと說かば、斯れ何の過かある。」世尊、告げて曰はく、『希求するを愛と名く、嶮惡趣に於ては希求あること無し。然るに所作の非福行に由るが故に善趣を求むと雖も、相違の果生ず。彼の果生ずる時、豈に愛を緣ぜん。唯だ應に彼の取を用ひて其の緣と爲すべし。又た說く所の如く愛あること無ければ、希求あること無く、求あること無き時は、福行不動行を造るに由るが故に相違の果生ず。此果生ずる時、豈に愛を緣ぜん。唯だ應に說くべし、彼の取、其の緣となることを。此の道理に由りて、唯だ愛を用つて有と緣を爲すに非ず。』と。

復た言はく、「世尊、若し取は有に緣たり、有は生に緣たれば、何に緣つてか取と有と以て集諦と爲すと說かざるや。」世尊、告げて曰はく、『愛は能く四種の業を造るが故なり。一には此の愛は其の自體の境界の受の中に於て能く貪味繫縛の業を作るが故に、二には此の愛は能く發起諸取の業を作るが故に、三には此の愛は能く先に引く所の行等をして有業を成ぜしむることを作すが故に、四には此の愛は能く死後續生の業を作るが故なり。是の因緣に由りて、唯だ此の愛を說いて以て集諦と爲すなり。』

復た言はく、「世尊、若し生・老死・名色・六處・觸・受を相と爲せば、此の生身に於て、何に緣つてか生・老・死の名を顯示せん。」世尊、告げて曰はく、『是の如きの生身の相に三種の苦ありて苦性を成ぜんことを顯はさんが爲の故なり。』

復た言はく、「世尊、生は何の苦を顯はすや。」世尊、告げて曰はく、『生は行苦を顯はす。』

はく、「世尊、何に緣つてか、名色・六處・觸・受を說きて當來生身の相と爲したまふや。」世尊、告げて曰はく、『彼是の因に由つて受用依止し、及び是其の因によつて受用體するが故に。』

復た言はく、「世尊、若し唯だ名生のみにして都て其色無ければ、斯れ何の過がある。」世尊、告げて曰はく、『若し一生の中、唯だ其の名のみありて色性に依らざれば、相續生起すること應に道理あるべからず。』

復た言はく、「世尊、若し唯だ色生のみにして都て其名無ければ、斯れ何の過かある。」世尊、告げて曰はく、『若し唯だ色ありて名無ければ、執受は卽ち應に散壞すべし、增長することを得ず。』

復た言はく、「世尊、若し但だ說いて識は六處に緣たりと言はば、斯れ何の過かある。」世尊、告げて曰はく、『初め受生ずる時は六處未だ滿ぜず、唯だ身根及び意根のみ轉ずるあり、應に此に由りて兩根を體と爲すことを得べからざるべし。名色、最初にあるが故に次第增長して後の圓滿の六處と緣となるが故に、名色は是れ六處の緣なりと說く。』

復た言はく、「世尊、若し六處滿ずれば生身究竟ずと、何に緣つてか復た觸・受の二種を說きたまふや。」世尊、告げて曰はく、『若し生身の六處に於て已に滿ずれば是れ受用の所依究竟ずと雖も、而も未だ受用究竟と名くることを得ず。因及び受に由りて方に說いて受用究竟と名くることを得。是故に應に知るべし、要ず受用の所依究竟と及與び受用の因體究竟を須つて、方に說いて生身究竟と名くることを得ることを。』

復た言はく、「世尊、無明・緣と爲りて愛を生ずと說きたまふが如く、又復た說いて言はく、受は是れ緣なりと。若し唯だ無明は是れ其の愛の緣にして受を緣ぜざれば、斯れ何の過がある。」世尊、告げて曰はく、『愛に三種あり、應に一時に三種俱に起るべし、愛の觀待に由ればなり。受の緣となるが故に一時に起るに非ず、此の道理に由りて唯だ無明は愛の與に緣と爲るに非ず。』

此の福行も亦た唯だ無明を以て勝緣と爲す。』復た言はく、「世尊、何に緣つてか色界の愛取の二種は、色界の不動行の緣と作らずとしたまふや。」世尊、告げて曰はく、『諸有は未だ欲界の貪を離れざれば、色界の愛等は未だ生處を得ず。若し生處無ければ、堪能無し。故に色界の不動行の緣に非ず。色界の愛取の二種を銳くに、其の色界の諸の不動行に於てするが如し。是の如く無色の愛取の二種を無色界の諸の不動行に於てするも、應に知るべし、亦た爾ることを。彼は色界或は無色界の有過患身に有功德を起すに於て、作意し想見す。或は敎法に依り、或は諸法に依りて、是の如きの非理の作意を發起して、能く彼の界の不動行の緣と爲る。是の如き所起の非理の作意は、無明の所引なり。是の如き無明は此の所起の非理の作意に由る。及び果は伴を爲して、能く彼の界の不動行の緣と爲る。是の故に應に知るべし、彼の不動行も亦た唯だ無明を以て勝緣と爲すことを。復た一類ありて、無有愛に依りて諸の福行或は不動行を造る。彼は是の如き無有愛に由るが故に、既に諸有に於て多くの過患を見る。豈に更に當來の諸有を希求するをや。然るに無有に於ては如實知ならず、無知に由るが故に、諸有眞對治道を得ず。又た無知の故に非對治に於て、對治の想を起し、諸の福行或は不動行を造るも、是の道理に由る。是の如きの諸行は、應に知るべし、唯だ無明を用つて緣と爲し、愛及び取は諸行の緣と爲るに非ざることを。』

　復た言はく、「世尊、諸の所有の行は六識身と相應して倶に有りて同生同滅なり。何に緣るが故に、行は是れ識の緣と說きたまふや。」世尊、告げて曰はく、『六識身と福非福及び不動行と相應し、倶有同生同滅にして異熟識の中に諸行を安置し、種子を熏習して餘生の新異熟識を引發せしむを以てなり。此の道理に由る、是の故に行は是れ緣なりと宣說す。』復た言はく、「世尊、何に緣つてか、名色・六處・觸・受の諸分の種子は、異熟識の中に同時に引發すれども、而も復た先後次第ありと說きたまふや。」世尊、告げて曰はく、『彼は當來に於て先後次第して生起するが故に、是の如く說く。』復た言

て、先に積集する所の行等の種子、若は彼彼處諸の愛未だ斷ぜず、卽ち彼彼處功能現前して能く後有を生ず。彼の行等に由りて能く當生あり。能く生有將入現在せしむ、故に說いて有と名く。彼の取力に由りて、行等は有を成ず。是を以て緣と爲し、此に從つて命終すれば、先に引發する所は漸次に生起す。此の義に由るが故に有は生を緣ずと名く。生既に生じ已つて、先に時分變異を起すを老と名け、最後邊に於て命盡くるを死と名く。是に由るが故に、生は老死を緣ずと名く。是の如きを名けて、第二に無明は其の能生所生の緣起と等起緣を爲すと爲す。』復た言はく、「世尊、何に緣つてか愛取の二種の能生緣起は行の與に緣と爲ると說きたまはざるや。」

世尊、告げて曰はく、『愛取の二種の自界の所行に分齊あるが故なり。所以は何ん、欲界の愛取は彼の色界或は無色界の諸の不動行と等起緣を爲すこと、道理に應ぜず、境界に非ざるが故に。欲界の愛取の二種を說くに、不動行に於てするが如し。是の如く色界の愛取の二種の無色界の諸の不動行に於ける、若は無色界の愛取の二種の欲界行或は色界行に於ける、及以び色界の愛取の二種の欲界行に於ける、當に知るべし、亦た爾ることを。』

復た言はく、「世尊、何に緣つてか、欲界の愛取の二種は、非福福行の與に緣と爲るとしたまはざるや。」世尊、告げて曰はく、『諸有現前の愛・非愛の境は增上力の故に欲愛を發生して、不善根を起し非福行を造る。一切皆な於因於果に由る。非福行の中には過患を知らず、彼は意樂に過失あるに由るが故なり。或は加行に過失あるに由るが故に、非福行を起す。是の如きの意樂加行の過失は、唯だ無明を用ひて勝緣と爲し、愛及び不善根を境界とするに非ず。若し欲愛に由りて諸の福行を造れば、彼の信は依と爲りて乃ち斯の行を造る。死と生とに於て定信を起すが故に、此の愛及び取は信に由りて攝伏せられ、我施設は有覆無記と爲る。若し法・欲界の有覆無記なれば、諸行を發するに於て勝功能無し。因果及び福行の中に出離を知らず、可愛の生を求めて斯の福行を造るが故なり。

【三】善惡の體性中容にして善とも惡とも記すべからざるを無記と云ふ。此中、妄惑なれどもその體性極めて羸弱なるを有覆無記と云ふ。又た自性は妄惑にあらず而も羸弱にして善惡にあらざるを無覆無記と云ふ。

知るべし、是の如きの思擇修習は善心に在りと雖も、然も如理の作意思惟ならず。故に是れ後有愚癡の所引なり。謂はく、後有に於て勝功德を見るも、癡覆藏の故に、及び出離を見るも癡覆藏の故なり。是の如く非福福不動行障礙對治は六識身と倶に生じ、倶に滅し、能く現在已得の生滅異熟識中に於て諸行の三種習氣を安置す。此の方便に由りて後有の新生種子を攝受し、後有の新種子を攝受す。故に當生中の所起後有に於て、所攝の名色・六處・觸・受次第して生ず。此の名色等は現・已得の異熟識中に於て但だ因性を起して、未だ果性あらず。是の故に但だ所引の緣起と名く。是の如きを名けて、第一に無明は其の能引所引の緣起と等起緣を作すと爲すなり。』復た言はく、「世尊、云何んが名けて第二に無明は其の能生所生の緣起と等起緣を作すと爲したまふや。」世尊、告げて曰はく、『謂はく、一類ありて現在已得の自體を愚くす。六觸處に於て緣生受を爲して便ち味著を起す。味著に由るが故に、當來是の如き類の受を希求す。希求に由るが故に、追求の時に於て取を起す。樂受所起の愛を緣と爲すが故に、欲取を發生す。欲取と言ふは、謂はく、諸欲に於て、妄分別貪するを此を上首と爲す、此を前行と爲して、便ち欲界の一切の煩惱あり。若し復た其の苦受を以て緣と爲して無有愛を生ず、厭離倶行非理所引厭離相應は此の愛に依止す。不正方便をもつて求むるに時あること無ければ、卽便ち出離惡見、定期惡見及び此二種の所依の惡見を發起す。此の義に由るが故に、愛は取を緣ずと名く。若し卽ち此の取を以て所依と爲さば、欲貪を離れず。而も命終は、此の諸見及與び欲界の一切の煩惱に由るを、欲界愛に緣と爲るの取ありと名く。若は欲貪を離れ、或は色貪を離るれば、彼の色界愛、或は無色愛は便ち生處を得。彼は色界或は無色界に於て、煩惱轉ずる時、色界無色界の取を發起す。此の諸の色無色の煩惱及び彼の諸の見に由るを、色界愛に緣と爲る取、及び無色界愛に緣と爲るの取ありと名く。彼は是の如き愛に緣となる取に由りて、先に種種の行所を得、異熟果識[二]を熏習するを名けて取ありと爲す。彼は是の如き取の所攝の受に由り

【二】異熟とは果が因の性質と異なりて成熟するを云ふ。舊譯には果報と譯す。

未だ生ぜざるを生ぜしめ、生じ已つて轉ぜざらしむ。是の故に我れ說かく、是の如きの無明は普ねく一切の煩惱雜染・諸業雜染・諸生雜染に於て、能く因緣の根本依處を作ると。是を無明の因緣殊勝なりと名づく。』

復た言はく、「世尊、云何んが無明の等起殊勝なる。」世尊、告げて曰はく、『謂はく、此の無明は或は當來苦諦所攝の後有の自體を愚し、或は現法苦諦所攝の已得の自體を愚くす。是の如き愚に、或は能引所引の緣起あり、或は能生所生の緣起あり。此二緣起れば卽ち當來と現法の自體を愚くするを以て、無明は等起緣を作す。』復た言はく、「世尊、云何んが能引所引の緣起なる。」世尊、告げて曰はく、『第一に無明は行を緣じ、行は識を緣じ、識は名色を緣じ、名色は六處を緣じ、六處は觸を緣じ、觸は受を緣ず、是の能引所引の緣起と名く。』

復た言はく、「世尊、云何んが能生所生の緣起なる。」世尊、告げて曰はく、『第二に無明は受を緣じ受は愛を緣じ、愛は取を緣じ、取は有を緣じ、有は生を緣じ、生は老死を緣ず。是を能生所生の緣起と名く。』

復た言はく、「世尊、云何んが名けて第一に無明は其の能引所引の緣起と等起緣を作すと爲したまふや。」世尊、告げて曰はく、『謂はく、一類ありて當來後有の自體を愚くす。卽便ち後有希求を發起す。愚の所生に由る。後有希求は便ち後有に於て勝功德を見る。若し現法に於て可愛、不可愛の境に執著するに、邪分別の故に非福行を造る。彼は資具に於て貪著を生ずるが故に、或は怨憎に於て瞋恚を生ずるが故に、及び彼の相應は決了すること能はずして功德・過患・放逸愚の故に、斯の惡行を造る。卽ち後世所有の過失に於て思惟すること能はず、解了すること能はず。行相無明は能く是の如き非福行緣を作す。若し後有に於て勝功德を見、或は出離を見れば、便ち福行或は不動行を造る。彼は敎法に依り、或は誨法に依りて思擇及び修習を發起するが故に、能く斯の行を造る。應に

して極善作意すべし、當に汝が爲に說くべし。云何が名けて分別緣起初勝の法門と爲すや。謂はく、十一種の殊勝の事の故に、緣起の初に於て無明を宣說し、以て緣性と爲すなり。何等をか十一なる、謂はく、所緣殊勝・行相殊勝・因緣殊勝・等起殊勝・轉異殊勝・邪行殊勝・相狀殊勝・作業殊勝・障礙殊勝・隨縛殊勝・對治殊勝なり。」

爾の時、衆中に一の苾芻あり、座より起ちて、偏へに右の肩を袒にし、合掌して佛を禮したてまつりて、白して言さく、「云何んが無明の所緣殊勝なるや。」世尊、告げて曰はく、『無明の所緣は卽ち是れ一切の若は因若は果にして、衆の過患、諸の雜染品あり。及び一切の若は因若は果にして、衆の功德、諸の淸淨品あるを以てなり。是を無明の所緣は殊勝なりと名く。』

復た言はく、「世尊、云何んが無明の行相殊勝なるや。」世尊、告げて曰はく、『是の如きの無明は眞實を隱覆し、虛妄を顯現するを以て行相と爲す。是を無明の行相殊勝なりと名く。』

復た言はく、「世尊、云何んが無明の因緣殊勝なるや。」世尊、告げて曰はく、『是の如きの無明は普ねく一切の煩惱雜染・諸業雜染・諸生雜染に於て、能く因緣の根本依處と作る。云何んが一切の煩惱雜染なる、謂はく略して三煩惱の品類ありて普ねく一切の煩惱雜染を攝す。謂はく、無知煩惱と猶豫煩惱と顚倒煩惱となり。云何んが一切の諸業雜染なる。謂はく、略して三の自相差別・身・語・意業、及び三障礙對治差別あり。謂はく、福・非福、及び不動業は普ねく一切の諸業雜染を攝す。云何んが一切の諸生雜染なる。謂はく、略して三依止、三受あり。謂はく、樂及び苦、不苦不樂の起す所の三苦・壞苦・苦苦、及以び行苦は普ねく一切の諸生雜染を攝す。云何んが無明は普ねく一切の煩惱雜染・諸業雜染・諸生雜染に於て、能く因緣の根本依處と作るや。謂はく、諸諦に於て二種の愚ありて、能く一切の煩惱雜染をして未だ生ぜざるを生ぜしめ、生じ已つて增廣せしめ、及び一切の諸業雜染をして未だ生ぜざるを生ぜしめ、生じ已つて增廣積集せしめ、亦た一切の諸生雜染をして、

分別緣起初勝法門經

大唐の三藏法師玄奘、詔を奉じて譯す

卷の上

是の如く我れ聞きぬ。一時、薄伽梵、室羅筏に在して誓多林給孤獨園に住したまふ。時に衆多の大苾芻衆あり、安適堂に在りて同じく集會し、坐して是の如きの類の往復談論を作す。言はく、「諸の大德、世尊、曾て無量の異門を以て十二分の甚深の緣起を說きたまへるに、彼の最初に於て[一]無明を宣說し、以て緣性と爲したまふ。何の因緣をもつての故に、一切の煩惱諸行の緣中に唯だ無明を說いて以て緣性と爲したまふや。此の無明に於て、何の殊勝を見たまふや。」是の因緣に由つて、便ち諍論を興す。時に世尊、天住に遊びたまひ、人に超過せる淸淨の天耳を以て是の如きの事を聞きたまふ。日晚の時に於て宴坐より起ちたまひて安適堂に詣り、大衆の前に在して如常の座を敷き、結跏趺坐し、淸美の音を以て諸の大衆に告げたまはく『汝等、何の故に此の堂の中に集りて諍論を興すや。汝等、今ま何の所論を爲せしや。』此に於て集會の時の諸の大衆、世尊に白して言さく「我等此に集りて是の如きの類の往復談論を作せり。言はく、諸の大德、世尊、曾て無量の異門を以て十二分の甚深の緣起を說きたまへるに、彼の最初に於て無明を宣說し、以て緣性と爲したまふ。何の因緣をもつての故に、一切の煩惱諸行緣中に唯だ無明を說いて以て緣性と爲したまふや。此の無明に於て、何の殊勝を見たまふや。世尊、我等是の因緣に由りて便ち諍論を興す。我等は今是の事を論ぜんが爲に、此に於て集會す」と。是の語を作し已んぬ。

爾の時、世尊、彼の大衆に告げたまはく『我に是の如き分別緣起初勝の法門あり。汝、應に諦聽

【一】無明（Avidyā）とは無始以來の煩惱にして、一切の煩惱の根本をなす。

れてをることは注意を要する點である。

昭和八年十二月二十六日

譯者　清水谷恭順　識

分別緣起初勝法門經解題

此經は緣生初勝分法本經と同本異譯であつて、上下二卷に分れてをる。譯者は唐の玄奘三藏であるからつまり新譯本である。

一經の內容は、一時諸の大苾芻衆が安適堂に集會して、佛陀は十二因緣を說くに當つて、何故に最初に無明を置かれたのであるか、何の殊勝あるが故に一切の緣の中に於て無明を緣性としたまうたのであるか、此の疑問を契機として、佛がその疑問を一掃せん爲め、無明に十一種の殊勝點ある所以を說かれるのが一經の要旨である。十一種の殊勝とは、一に所緣殊勝とは、無明の緣ずる法には過患も雜染も功德も淸淨もあり、乃至一切の因、一切の果はすべて無明に依るが故に所緣殊勝と云ふのである。二に行相殊勝とは、無明は一切の眞實を隱覆して妄法を顯現する行相に於て他の如何なるものよりも殊勝なるを行相殊勝と名ける。三に因緣殊勝とは、無明は能く一切の根本依處となるを指すのである。四には等起殊勝、之は現在の自體を迷はすのも、又た未來の苦果を招くのもすべて無明の等起緣に依るが故なるを特に等起殊勝と名けるのである。五に轉異殊勝とは、無明には隨眠轉異、纏縛轉異、相應轉異、不共轉異の四種の轉異あつて殊勝なるが故に、之を轉異殊勝と云ふのである。六に邪行殊勝とは無明は諸諦の中に於て皆能く增益と損減と二種の邪行を起すが故に、邪行殊勝である。七に相狀殊勝とは無明には微細自相殊勝と遍於可愛非愛俱非境界共相相殊勝の二種の殊勝の相があるからである。八に作用殊勝とは、無明は普く一切の流轉所依の事業を作り、又た一切の寂止能障の事業を作るに依つて、作用殊勝と名けるのである。九に障礙殊勝とは無明は勝法を障礙し廣法を障礙するからで、十に隨縛殊勝とは無明は無始以來有情に隨逐し、唯だ諸佛を除いて餘は皆なその隨縛を脫することが出來ないから隨縛殊勝なのである。十一に對治殊勝とは少分有量法界の妙智と、全分無量法界の妙智と此の二つ妙智あつて能く無明を對治するが故に斯く名けるのである。以上凡そ十一種の殊勝は、十二因緣の最初に無明を置く所以であると共に、又た一切緣の中で特に無明を緣性となす理由である。斯の樣に無明に關して細說したのが此經であるから、少くとも無明に就て知るところあらんと欲する者は、一讀して以て參考に資すべきである。因みに此經に大因緣法門經の引用さ

隆廣大安隱豐樂人民熾盛ならしめん。爾の時、其の王便ち彼の城を都ぶ、後時、王都邑隆廣大安隱豐樂人民熾盛ならんが如し。

我も亦た是の如し。今已に舊道舊徑舊所行跡古昔諸仙の嘗て遊履する所を證得す。何等をか名けて舊道舊徑舊所行跡古昔諸仙の嘗て遊履する所と爲す。當に知るべし、即ち是れ八支の聖道なり。謂はく、初に正見、次に正思惟・正語・正業・正命・正勤・正念・正定なり。唯だ第八に至る、是の如きを名けて舊道舊徑舊所行跡古昔諸仙嘗て遊履する所と爲す。我れ昔し尋ね行き、既に尋ね行き已つて曾て老死を見、老死集を見、老死滅を見、老死趣滅行の跡を見る。是の如く曾て生・有・取・愛・受・觸・六處・名色・識・行を見、曾て行集を見、曾て行滅を見、曾て行趣滅行の跡を見る。我れ此の法に於て自然に通達す。等覺を現じ已つて、諸の苾芻、諸の苾芻尼、(六)鄔波索迦、(七)鄔波斯迦に告げ、及び種種の外道・沙門、諸の婆羅門、雜出家の類、無量の大衆に告ぐ。是の諸の苾芻、若し此の中に於て能く正行を修して能く證を成ぜん者は、便ち能く正理法善を證得せん。諸の苾芻・苾芻尼・鄔波索迦・鄔波斯迦、無量の大衆、若し此の中に於て能く正行を修し、能く證を成ぜん者は、便ち能く正理法善を證得せん。是の如くして乃ち能く(八)梵行を增廣し、亦た當に無量の衆生を饒益し、諸の天人の爲に正善開示すべし。』時に諸の苾芻及び諸の菩薩摩訶薩等の無量の大衆、佛の所說を聞きて未曾有なりと歎じ、皆大いに歡喜して信受奉行せり。

緣起聖道經(終)

【六】鄔波索迦(Upāsaka)、舊には優婆塞と云ひ、譯して淸信士、近事男と云ふ、すべて五戒を受けたる在家の男を云ふ。

【七】鄔波斯迦(Upāsikā)、舊には優婆夷と云ひ、淸信女、近事女等と譯す。すべて五戒を受けたる在家の女を云ふ。

【八】梵とは淸淨の義にして、すべて淸淨の行を梵行と云ふ、又た特に婬欲を斷ずる法を梵行と云ふ場合あり。

ち是の如き如實の現觀を生ず。識あること無きが故に便ち名色無し、識滅するに由るが故に名色隨つて滅す。我れ復た思惟すらく、誰あること無きが故に而も識あること無きや、誰滅するに由るが故に此の識隨つて滅するや。我れ即ち此に於て理の如く思する時、便ち是の如き如實の現觀を生ず、行あること無きが故に便ち識あること無し、行滅するに由るが故に識即ち隨つて滅す。我れ復た思惟すらく、誰あること無きが故に而も行あること無きや、誰滅するに由るが故に此行隨つて滅するや。我れ即ち此に於て理の如く思する時、便ち是の如き如實の現觀を生ず。無明無きが故に便ち行あること無し、無明滅するが故に行即ち隨つて滅す。行滅するに由るが故に識も亦た隨つて滅し、識滅するに由るが故に名色隨つて滅す。名色滅するが故に六處隨つて滅す。六處滅するが故に觸も亦た隨つて滅す。觸滅するに由るが故に受も亦た隨つて滅す。受滅するに由るが故に愛も亦た隨つて滅す。愛滅するに由るが故に取も亦た隨つて滅す。取滅するに由るが故に有も亦た隨つて滅す。有滅するに由るが故に生も亦た隨つて滅す。生滅するに由るが故に老死愁歎憂苦擾惱も皆な隨つて滅す。是の如くなれば永く純大の苦聚を滅せん。

我れ復た思惟すらく、我れ今ま舊道舊徑舊所行跡古昔諸仙の遊履する所を證得す。譬へば人ありて曠野嶮穢稠林を遊行し、欻然として舊道舊徑舊所行跡古昔諸人の嘗て遊履する所に値遇し、彼即ち尋ね行き、既に尋ね行き已つて舊の城郭、古昔の王都を見るに、園林池沼具足せざる無く、淨妙の街衢甚だ愛樂す可し。其の人見已つて是の如く思惟せん。我れ今ま宜しく應に速かに王所に詣つて斯の事を啓白すべしと。爾の時、彼の人便ち王所に到り王に啓白して言はく、大王當に知るべし、我れ因緣ありて曠野嶮穢稠林を遊行し、欻然として舊道舊徑舊所行跡古昔諸人の嘗て遊履する所に値遇す。我れ即ち尋ね行き、既に尋ね行き已つて舊の城郭、古昔の王都を見るに、園林池沼具足せざる無し。淨妙の街衢甚だ愛樂すべし。大王、今ま若し彼の城を都べんには、定んで大王をして昌

きが故に生あること無きや、誰滅するに由るが故に此の生隨つて滅するや。我れ卽ち此に於て理の如く思する時、便ち是の如き如實の現觀を生ず。有あること無きが故に便ち生あること無し、有滅するに由るが故に生卽ち隨つて滅す。我れ復た思惟すらく、誰あること無きが故に而も有あること無きや、誰滅するに由るが故に此有隨つて滅するや。我れ卽ち此に於て理の如く思する時　便ち是の如き如實の現觀を生ず。取あること無きが故に便ち有あること無し、取滅するに由るが故に有卽ち隨つて滅す。我れ復た思惟すらく、誰あること無きが故に而も取あること無きや。誰滅するに由るが故に此の取隨つて滅するや。我れ卽ち此に於て理の如く思する時、便ち是の如き如實の現觀を生ず。愛あること無きが故に取あること無し、愛滅するに由るが故に取卽ち隨つて滅す。我れ復た思惟すらく、誰あること無きが故に愛あること無きや。誰滅するに由るが故に此愛隨つて滅するや。我れ卽ち此に於て理の如く思する時、便ち是の如き如實の現觀を生ず。受有ること無きが故に便ち愛あること無し、受滅するに由るが故に愛卽ち隨つて滅す。我れ復た思惟すらく、誰あること無きが故に而も受あること無きや、誰滅するに由るが故に此の受隨つて滅するや。我れ卽ち此に於て理の如く思する時、便ち是の如き如實の現觀を生ず。觸あること無きが故に便ち受あること無し、觸滅するに由るが故に受卽ち隨つて滅す。我れ復た思惟すらく、誰あること無きが故に而も觸あること無きや、誰滅するが故に此の觸隨つて滅するや。我れ卽ち此に於て理の如く思する時、便ち是の如き如實の現觀を生ず。六處無きが故に便ち觸あること無し、六處滅するが故に觸卽ち隨つて滅す。我れ復た思惟すらく、誰あること無きが故に而も六處無きや、誰滅するに由るが故に六處隨つて滅するや。我れ卽ち此に於て理の如く思する時、便ち是の如き如實の現觀を生ず。名色無きが故に便ち六處無し、名色滅するが故に六處隨つて滅す。我れ復た思惟すらく、誰あること無きが故に而も名色無きや、誰滅するに由るが故に名色隨つて滅するや。我れ卽ち此に於て理の如く思する時、便

あることを得、是の如きの取は愛に由つて緣と爲る。我れ復た思惟すらく、誰れの有に由るが故に而も愛あることを得るや、是の如きの愛は復た何の緣に由るや。我れ此の事に於て理の如く思する時、便ち是の如き如實の現觀を生ず。受あるに由るが故に便ち愛あることを得。是の如きの愛は受に由つて緣と爲る。我れ復た思惟すらく、誰れの有に由るが故に而も受あることを得るや、是の如きの受は復た何の緣に由るや。我れ此の事に於て理の如く思する時、便ち是の如き如實の現觀を生ず。觸あるに由るが故に便ち受あることを得、是の如きの受は觸に由つて緣と爲る。我れ復た思惟すらく、誰れの有に由るが故に而も觸あることを得るや、是の如きの觸は復た何の緣に由るや。我れ此の事に於て理の如く思する時、便ち是の如き如實の現觀を生ず。六處あるに由つて便ち觸あることを得、是の如きの觸は六處、緣と爲る。我れ復た思惟すらく、誰れの有に由るが故に而も六處あるや、是の如きの六處は復た何の緣に由るや。我れ此の事に於て理の如く思する時、便ち是の如き如實の現觀を生ず。名色あるに由つて便ち六處あり、是の如きの六處は名色、緣と爲る。我れ復た思惟すらく、誰れの有に由るが故に而も名色あるや。是の如きの名色は復た何の緣に由るや。我れ此の事に於て理の如く思する時、便ち是の如き如實現觀を生ず。識あるに由るが故に便ち名色あり、是の如きの名色は識に由つて緣と爲る。我れ此の識に齊しく、意便ち退還して越度轉ぜず。謂へらく識緣となりて名色あり、名色緣となりて六處あり、六處緣となりて其の觸あり、觸緣となりて受あり、受緣となりて愛あり、愛緣となりて取あり、取緣となりて有あり、有緣となりて生あり、生緣となるが故に便ち老死愁歎憂苦擾惱ありて、是の如きの積集純大の苦聚を生起す。

　我れ復た思惟すらく、誰あること無きが故に而も老死無きや、誰滅するに由るが故に老死隨つて滅するや。我れ即ち此に於て理の如く思する時、便ち是の如き如實の現觀を生ず。生あること無きが故に便ち老死無し、生滅するに由るが故に老死隨つて滅す。我れ復た思惟すらく。誰あること無

緣[1]起聖道經

大唐の三藏法師玄奘、詔を奉じて譯す

是の如く我れ聞きぬ。一時、薄伽梵[2]、室羅筏國[3]に在して、誓多林給孤獨園[4]に住したまひ、大苾芻[5]衆千二百五十人と倶なりき。及び諸の菩薩摩訶薩等の無量の大衆あり。

爾の時、世尊、諸の大衆に告げたまはく『吾れ未だ三菩提を證得せざる時、獨り空閑に處して寂然として宴坐し、發意思惟すらく、甚だ奇なり、世間、苦海に沈淪して都て出離の法を覺知せず、深く哀愍すべし。謂らく、生有り老有り死有りて此に沒し彼に生ずと雖も、而も諸の有情は實の如く生老死出離の法を知ること能はず。』

我れ復た思惟すらく『誰の有に由るが故に而も老死あるや。是の如きの老死は復た何の緣に由るや。我れ此の事に於て理の如く思する時、便ち是の如き如實の現觀を生ず。生あるに由るが故に、便ち老死あり。是の如き老死は、生に由つて緣と爲る。我れ復た思惟すらく、誰れの有に由るが故に、而も生あることを得るや。是の如きの生は、復た何の緣に由るや。我れ此の事に於て理の如く思する時、便ち是の如き如實の現觀を生ず。有あるに由るが故に便ち生あることを得。是の如きの生は有に由つて緣と爲る。我れ復た思惟すらく、誰れの有に由るが故に有あることを得るや、是の如きの有は復た何の緣に由るや。我れ此の事に於て理の如く思する時、便ち是の如き如實の現觀を生ず。取あるに由るが故に便ち有あることを得、是の如きの有は取に由つて緣と爲る。我れ復た思惟すらく、誰れの有に由るが故に而も取あることを得るや、是の如きの取は復た何の緣に由るやと。我れ此の事に於て理の如く思する時、便ち是の如き如實の現觀を生ず。愛あるに由るが故に便ち取

【一】元、明二本には佛說の二字を冠らしむ

【二】薄伽梵(Bhagavat)は又は婆伽伴、薄阿梵等とも云ひ、譯して世尊と翻ず、即ち佛のことなり。

【三】室羅筏(Śrāvastī)、もと舍衞城のこと、以て國號となす、即ち憍薩羅國なり。

【四】Jetavana、舊譯には祇陀林、祇洹林と云ふ、もと誓多太子の所有なれば誓多林と云ふ。即ち後の祇洹精舍は須達長者誓多林を買ひて精舍を建てしに名く。又此精舍の園を給孤獨園とも云ふ。

【五】苾芻(Bhikṣu)、は舊譯の比丘に同じ。

縁起聖道經解題

此經は貝多樹下思惟十二因縁經、佛說舊城喩經などと同本異譯であつて、唐代の巨哲玄奘三藏の譯す所である。譯者玄奘は貞觀三年の冬に入竺し、貞觀十九年正月長安に還つたので、その間凡そ十五ケ年に亘り、齎す所の經論章疏は五百二十夾、六百五十七部と傳へられてをる。その譯業は歸朝の年から始められて寂年に至るまでの二十年間で、譯出する所は通計七十五部一千三百三十五卷と云はれ、その中には大般若經、解深密經、瑜伽師地論、大毘婆沙論、成唯識論、倶舍論等、後世に多大の影響を及ぼしたものが少くない。蓋し空前絕後の大譯業家であつて、譯語の正確なるは云ふ迄もなく、又た譯語上では大いなる改革が見られてをるから、後世玄奘の譯を特に新譯と云ふのである。それ故に今の此經も亦た新譯の經の部に入るのである。

此經の內容は、佛が初め樹下に坐して、十二因縁の流轉還滅の理を觀じて正覺を成ぜられたことを、佛の思惟に寄せて敍べたものであつて、目的は十二因縁の逆順觀を明かすにあること勿論であるが、別に八正道をつけ加へて述べてをることにも注意せねばならない。蓋し原始佛敎の十二因縁觀を見るには、最も要を得た經である。

昭和八年十二月二十五日

譯者　清水谷恭順識

て子の所に趣くこと無し。是の緣を以ての故に、此より彼に至ることあること無し。然るに實には少種を以て能く多果を生ず。云何んが相似而生なる、不善因の不善果を生ずる如く、善因の善果を生ずる如し。是を以ての故に、相似相續而生と名く。又復た舍利弗、佛の說きたまへる所の如き、能く十二因緣を觀ずるを是を正見と名くと。若し正しく十二因緣を觀ずれば、過去の身中に於て有想を生ぜず、未來の身中に於ても亦た無想を生ぜず。衆生は何より來り、去りて何れの所に至ると爲ん。若し沙門・婆羅門及び世間の人、諸見・我見・衆生見・命見・丈夫見・吉不吉見を成就せん、是の如きの十二因緣は多羅樹の其首を剪滅ずれば更に生を得ざるが如く、我見則ち除こる。若し人正しく十二因緣を見、若は是の如きの思心を得ん、尊者舍利弗、若し衆生あつて能く是の法を忍ばん、此の「[五]多陀阿伽度・[六]阿羅呵・[七]三藐三佛陀・善逝・世間解・調御丈夫・天人師・佛・世尊、必ず爲に阿耨多羅三藐三菩提の記を授けたまはん。」

尊者舍利弗、彌勒の是の說を作すを聞き已つて歡喜して去りぬ。[八]天・龍・夜叉・乾闥婆・阿修羅及び諸の大衆、彌勒を頂禮して歡喜奉行せり。

佛說稻芋經（終）

【五】多陀阿伽度(Tathāgata)は譯して如來と云ふ。佛十號の一

【六】阿羅呵（Arhat)、譯して應供と云ふ。佛十號の一

【七】三藐三佛陀（Samyak-Saṁbuddha)、譯して正遍知と云ふ、佛十號の一。如來、應供、正遍知、善逝、世間解、調御丈夫、天人師、佛、世尊、と明行足を佛の十號と云ふ。

【八】八部衆の中の前の五衆。

合して生ず。復た次に尊者舍利弗　眼識は五因緣より生ず。云何んが五と爲す、眼と色と明と空と作意なり。識は便ち生を得。眼識は眼根に依り、色を以て境界と爲す。明を緣じて以て照と爲す。虛空は障礙を作さず、作意起發するが故に眼識を生ず。是の如きの衆緣、若し和合せざれば眼識則ち生ぜず。而も眼識も亦た我れ能く體想と作ると念ふことを作さず、色も亦た我れ能く境界と作ると念ふことを作さず、明も亦た我れ能く照了すと念ふことを作さず、空も亦た我れ能く無礙なりと念ふことを作さず、作意も亦た我れ能く眼識を發起すと念ふことを作さず。眼識も亦た我れ數緣より生ずと念ふことを作さず。此の如く眼識は實には假なり、衆緣和合して生ず。是の如きの次第をもつて、諸根の識を生ずることも亦た是の說の如し。

復た次に舍利弗、法ありて此世より他世に至ること無し。但だ業果莊嚴衆緣和合して便ち生ず。又復た舍利弗、譬へば明鏡の能く面像を現ずるが如く、鏡面各異所に在れども、而も往來の物、同所を見ること無し。又復た舍利弗、月の天に麗かにして地を去ること四萬二千由旬、水流は下に在れども月は上に曜けるが如し。玄象一なりと雖も影は衆水に現ず。月體降らず、水質昇らず。是の如く舍利弗、衆生は此世より後世に至らず、後生より復た此に至らず。然れども業果因緣報應ありて、損減すべからず。復た水に尊者舍利弗、火の薪を得れば便ち然え、薪盡くれば則ち止むが如し。是の如く業結、識を生じて諸趣に周遍し、能く名色の果を起すも、我無く主無く亦た受者無く虛空の如く熱時の炎の如く幻の如く夢の如く實法あること無し。而も其の善惡の因緣果報は、業に隨つて亡びず。又復た尊者舍利弗、十二因緣も亦た五因緣より生ず。非常と非斷と不來不去と因少果多と亦た相似相續次第而生となり。云何んが非常なる、一陰滅して一陰生ず、滅は卽ち生に非ず、生は卽ち滅に非ず、故に非常と名く。云何んが不斷なる、秤の高下の如く此に滅して彼に生ず、故に不斷と名く。如實に知見す。云何んが不來不去なる、子ありて去つて芽に至ること無く、芽來り

生と爲し、世に住して衰變するが故に名けて老と爲し、最後に敗壞するが故に名けて死と爲し、往事の言聲を追感して哀感するを名けて憂苦と爲し、事來りて身に逼るを是を苦惱と名け、追思相續するが故に名けて悲と爲し、煩惱纏縛するが故に名けて惱と爲す。邪見にして妄辨するを名けて無明と爲し、此の邪辨を以て三業を起すが故に名けて行と爲し、善惡等の業は能く果報を受くるが故に名けて識と爲し、汚穢無記業より汚穢無記識を生じ、不動業より不動識を生じ、識より名色を生ず。名色より六入を生じ、六入より觸を生じ、觸より受を生じ、受より愛を生じ、愛より取を生じ、取より有を生じ、有より生を生じ、生に從つて老死憂悲苦惱あり。彌勒、尊者舍利弗に語らく、「十二因緣に各各果あり。常に非ず、斷に非ず、有爲に非ず、有爲を離れず、盡法に非ず、離欲法に非ず、滅法に非ず、有佛無佛にも相續して斷ぜず。河の流間を駛せて絕時無きが如し。」

爾の時、彌勒、重ねて尊者舍利弗に語らく、「十二因緣に各各因あり、各各緣あり。常に非ず、斷に非ず、有爲に非ず、有爲を離れず、盡法に非ず、離欲法に非ず、滅法に非ず、有佛無佛にも相續して斷ぜず、河の流間を駛せて則ち絕ゆること無きが如し。能く四緣を以て十二緣を增長す。何等をか四と爲す、無明と愛と業と識となり。識を種體と爲し、業を田體と爲し、無明と愛は是れ煩惱の體なり。能く識を生長す。業を識田と爲し、愛を潤漬と爲し、無明は識種子を覆植す。業は我れ能く識種を生ずと念ふことを作さず、愛も亦た我れ能く潤漬すと念ふことを作さず、無明も亦た我れ能く識種を覆植すと念ふことを作さず、識も亦た我れ爾所の因緣に從ふと念ふことを作さず。復た次に業を識田と爲し、無明を糞と爲し、愛水を潤と爲して便ち名色等の芽を生ず。而も名色の芽も亦た自より生ぜず、亦た他より生ぜず、亦た自他の合より生ぜず、亦た自在天より生ぜず、亦た時方より生ぜず、亦た體より生ぜず、亦た無因緣の生ならず。復た次に欲樂父母精氣衆緣和合するが故に色芽を生ず。主無く、我無く、造無く、壽者無し。猶ほ虛空の如く、幻の如し。衆の因緣和

と爲す、四陰五識も亦た言ひて名と爲し、亦は名けて識と爲す。是の如きの衆法和合するを名けて身と爲す。有漏心を名けて識と爲す。是の如き四陰を五情根と爲し、名けて色と爲す。是の如き等の六緣を名けて身と爲す。若し六緣具足して損減無ければ、則便ち身を成ず。是の緣若し滅すれば身則ち成ぜず。地も亦た我れ能く堅持すと念はず、水も亦た我れ能く濕潤すと念はず、火も亦た我れ能く成熟すと念はず、風も亦た我れ能く出入息すと念はず、空も亦た我れ能く障礙すること無しと念はず、識も亦た我れ能く生長すと念はず、身も亦た我れ數緣より生ずと念はず。若し此の六緣無ければ身も亦た生ぜず。地も亦た無我・無人・無衆生・無壽命・非男非女、亦た非非男非非女・非此非彼なり。水・火・風乃至識等も亦た皆な無我・無衆生・無壽命、乃至亦た非此非彼なり。

云何んが無明と名くる。無明とは六界の中に於て、一想・聚想・常想・不動想・不壞想・內生樂想・衆生想・壽命想・人想・我想・我我所想を生ず。是の如き種種衆多の想を生ず、是を無明と名く。是の如き五情の中、貪欲瞋恚を生ず。想・行も亦た是の如し。一切假名の法に隨著するを名けて識と爲し、四陰を名と爲し、色陰を色と爲す。是を名色と名け、名色增長して六入を生じ、六入增長して觸を生じ、觸增長して受を生じ、受增長して愛を生じ、愛增長して取を生じ、取增長して有を生じ、有增長するが故に能く後陰を生ずるを生と爲し、生增長して變ずるを名けて老と爲し、受陰敗壞するが故に名けて死と爲し、能く嫉熱を生ずるが故に憂悲苦惱と名け、五情違害を名けて身苦と爲し、意に和適せざるを名けて心苦と爲す。是の如き等の衆苦聚集して、常に闇冥に在るを名けて無明と爲す。諸業を造集するを名けて行と爲し、諸法を分別するを名けて識と爲し、建立する所あるを名けて名色と爲し、六根開張するを名けて六入と爲し、緣に對して塵を取るが故に名けて觸と爲し、苦樂を受覺するが故に名けて受と爲し、渴して飮を求むる如きが故に名けて愛と爲し、能く取る所あるが故に名けて取と爲し、諸業を起造するが故に名けて有と爲し、後陰始めて起るが故に名けて

風も亦た我れ能く發起すと言はず、空も亦た我れ能く障礙を作さずと言はず。時も亦た我れ能く生ぜしむと言はず。種も亦た我れ六緣よりして芽を得と言はず、芽も亦た我れ數緣より生ずと言はず。爾數の緣より生ずと念ふことを作さずと雖も、而も實には衆緣和合より芽を生ずることを得。亦た自より生ぜず、亦た他より生ぜず、亦た自他の合生よりせず、亦た[四]自在天より生ぜず、亦た時方より生ぜず、亦た本性より生ぜず、亦た無因より生ぜず。是を生法次第と名く。是の如き外緣生の法は五事を以ての故なり。當に知るべし、不斷と亦た非常と亦た不從此至彼と如芽種少果則衆多と相似相續不生異物となり。云何んが不斷なる、種・芽根・莖次第相續に從ふが故に不斷なり。云何んが非常なる、芽・莖・華・果各自別なるが故に非常なり。亦た種滅して後ち芽生ぜず、亦た滅せずして芽便ち生ずるに非ず。而も因緣法の芽起つて種謝し、次第生の故に非常なり。種芽名相各異なるが故に、此より彼に至らず。種少なけれども果多きが故に、當に知るべし一ならず、是を種少果多と名く。種子の異果を生ぜざる如きの故に、相似相續と名く。此の五種の外緣を以て諸法生ずることを得。

內因緣の法は二種より生ず。云何んが因と爲す。無明乃至老死に從ふ。無明滅すれば即ち行滅し、乃至生滅するが故に則ち老死滅す。無明に因るが故に行あり、乃至有生に因るが故に則ち老死あり。無明は我れ能く行を生ずと言はず、行も亦た我れ無明より生ずと言はず、乃至老死も亦た我れ生より生ずと言はず。而も實には無明あつて則ち行あり、生あつて則ち老死あり。是を內因次第生と名く。云何んが內緣生の法と名くる。所謂る六界なり。地界と水界と火界と風界と空界と識界となり。何を謂ひて地と爲す、能堅持者を名けて地界と爲す。何を謂ひて水と爲す、能潤漬者を名けて水界と爲す。何を謂ひて火と爲す、能成熟者を名けて火界と爲す。何を謂ひて風と爲す、能出入息者を名けて風界と爲す。何を謂ひて空と爲ず、能無障礙者を名けて空界と爲す。何を謂ひて識

【四】外道の十六宗に自在等因宗と云ふ一宗あり、森羅萬物は皆な自在天に依りて生じ、自在天によりて滅すと計す。

見、法を見れば卽ち是れ佛を見るや。佛、是の說を作したまふ。十二因緣は常に相續して起るも、無生如實の見は顚倒せず。無生無作は有爲に非ず、無住無爲なり。心境界に非ず、寂滅無相なり。是を以ての故に、十二因緣を見れば卽ち是れ法を見るなり。常に相續して起るも、無生如實の見は顚倒せず。無生無作は有爲に非ず、無住無爲なり。心境界に非ず、寂滅無相なり。是を以ての故に、十二因緣を見れば卽ち是れ無上道具足法身を見るなり。」

尊者舍利弗、彌勒に問ふて言はく、「云何んが十二因緣と名くるや。」彌勒、答へて言はく、「因あり緣ある、是を因緣法と名く。此は是れ佛、略して因緣相を說きたまへるなり。此の因を以て能く是の果を生ず。如來の出世は因緣生の法なり、如來の不出世も亦た因緣生の法なり。性相常住にして諸の煩惱無し。究竟如實は不如實に非ず、是れ眞實の法にして顚倒の法を離る。復次に十二因緣の法は二種より生ず。云何んが二と爲す、一には因、二には果なり。因緣生の法に復た二種あり、內因緣あり、外因緣あり。外因緣の法は何より生ずる。種は能く芽を生じ、芽より葉を生じ、葉より節を生じ、節より莖を生じ、莖より穗を生じ、穗より華を生じ、華より實を生ず。種無きが故に芽無く、乃至華實あること無し。種あるが故に芽を生じ、乃至華あるが故に果生ず。而も種は我れ能く芽を生ずと念ふことを作さず、芽も亦た我は種より生ずと念ふことを作さず、乃至華も亦た我れ能く實を生ずと念ふことを作さず、實も亦た我れ華より生ずと念ふことを作さず。而も實には種は能く芽を生ずるに如似たり。是の如きを名けて外因生の法と爲す。云何んが外緣生の法と名くる。所謂る地・水・火・風・空・時なり。地種は堅持し、水種は濕潤し、火種は成熟し、風種は發起し、空種は障礙を作さず。又た時節氣和變を假る。是の如き の六緣具足して便ち生ず。若し六緣具せ されば、物則ち生ぜず。地・水・火・風・空・時の六緣調和して增減せざるが故に、物則ち生ずることを得。地も亦た我れ能持すと言はず、水も亦た我れ能潤すと言はず、火も亦た我れ能く成熟すと言はず、

佛說稻芋經

闕譯附東晋錄

是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、王舍城[一]耆闍崛山[二]中に住したまひ、大比丘衆千二百五十人と倶なりき、及び大菩薩摩訶薩衆あり。

爾の時、尊者舍利弗、彌勒の經行の處に往至り、彌勒と舍利弗と倶に石上に坐せり。爾の時、尊者舍利弗、彌勒に問ふて言はく「今日、世尊、稻芋を覩見たまひて是の說を作したまふ、『汝等比丘、十二因緣を見れば、即ち是れ法を見、即ち是れ佛を見るなり』と。爾の時、世尊、是の說を作し已つて、默然として住したまふ。彌勒、世尊は何が故に是の修多羅を說きたまふ。復た何の義を以て十二因緣を見れば即ち是れ法を見、法を見れば即ち是れ佛を見るなりと說きたまへるや。皆な何の義を以て、是の如きの說を作したまふ。云何んが是れ十二因緣なる。云何んが因緣を見れば、即ち是れ法を見るや。云何んが法を見れば、即ち是れ佛を見るや。」

爾の時、彌勒、舍利弗に語つて言はく、「佛世尊、常に說きたまはく、『十二因緣を見れば即ち是れ法を見、法を見れば即ち是れ佛を見るなり』と。十二因緣とは無明は行を緣じ、行は識を緣じ、識は名色を緣じ、名色は六入を緣じ、六入は觸を緣じ、觸は受を緣じ、受は愛を緣じ、愛は取を緣じ、取は有を緣じ、有は生を緣じ、生は老死憂悲苦惱を緣ず。衆苦聚集して大苦陰の爲に因と作る。是の故に、佛、十二因緣を說きたまへり。云何んが是の法、正道分及び涅槃の果に入[三]るや。如來、略して是の法を說きたまふ。云何んが是れ佛なるや。能く一切法を覺す、故に名けて佛と爲す。若し慧眼を以て眞法身を見れば、能く菩提所學の法を成ず。云何んが十二因緣を見れば即ち是れ法を

【一】王舍城とは中印度摩揭陀の國都。

【二】耆闍崛山は譯して靈鷲山と云ひ、中印度摩揭陀國王舍城の東北に在る山の名、佛、此の山に在して諸經を說けりと傳ふ。

【三】入は宋、元、明、宮の四本には八とあり、若し八を以て譯せば此の文は「云何んが是の法は、八正道分及び涅槃の果なるや」となる。

佛說稻芋經解題

此經は了本生死經、慈氏菩薩所說大乘緣生稻𥡴喩經、大乘舍黎娑擔摩經、佛說大乘稻芋經と何れも同本異譯であつて、譯語の相違や、多少の出入はあつても大旨は全く同じである。今試みに前の了本生死經と此經を比較して見ると、前者の頗る難讀なるに對して此は極めて讀み易く一讀要旨を解了することが出來る。又た此經はその初分に於て了本生死經に無き所を補充してをるのみでなく、一部の組織は最後一貫して遙かに整然たるものがある。言ふ所の補充とは、一には何が故に佛は十二因緣を說きたまへるかの理由を擧げ、二には佛陀とはそも何ぞやの問題を論じてをる點などがそれである。此の外一經の內容はすべて了本生死經と同じであるが、讀み易く解了し易い點で讀者は寧ろ此經の方を了本生死經よりも前に讀まれるのが便利であると思ふ。但だ譯者の不明なことは、此經にとつて一番の不幸である。

昭和八年十二月二十五日

譯者 淸水谷恭順 識

知らず。眼色明空念は眼識をして具さに成生せしめ、耳鼻口身心は法を緣じて心識を生ず。彼の眼は我れ識の爲に猗と作るを知らず、法は我れ識の爲に行と作ることを知らず、心は我れ識の爲に明と作ることを知らず、空は我れ識をして無礙ならしむることを知らず、識は我れ此の因緣を成ずることを知らず。是のごとく阿難、緣心法明空念は心識をして具さに成生せしむ。而も此は自作に非ず、彼作に非ず、兩作に非ず、無因生に非ず、我に非ざるが故に彼に非ざるが故に、無因有に非ず。當に五事を以て內緣起るを見るべし。何をか五と謂ふ、非と不斷と不步と少行多報と相象非故なり。彼の死際の如く身已に壞するを非常と爲し、出生して身分あるを不斷と爲し、或同去・或異去・分異の故に不步と爲す。少行多報を行不敗亡と謂ふ。行報生の如く、故家[八]に非ざるなり。若し此の緣起に命・非命無きを見るを法を見ると爲し、法に命・非命無きを見るを四諦苦集盡道を見ると爲す。譬へば明人の師の畫を成ずるを見て、其の畫好師妙を歎ずるが如し。四諦を見る者も亦た是の如し。佛の一切知一切見は是に從つて喜を得て佛を離れず、法衆至眞戒を得て喜離れず。」

了本生死經（終）

【八】家は宋、元、明、宮の四本には像に作る。

た不明に從つて、福德行作に近しみ罪賊行作に近しむ、是を緣不明行と謂ふ。諸行あるが故に、福不福に近しみて而も識あり、是を緣行識と謂ふ。識に由つて性行を作し、名色具さに成生す、是を緣識名色と謂ふ。是の緣生作作輒ち受くるを是を緣名色六入眼識會更樂と謂ひ、是を緣六入更樂と謂ふ。更樂の如く痛知も亦た爾り、是を緣更樂痛死と謂ふ。不知痛の者を行別と爲すが故に、愛象に從つて輒ち取る、是を緣痛愛と謂ふ。愛象に從つて更呑す、是を緣愛受有と謂ふ。受を三行身に意と爲す、是を緣受有と謂ふ。有行勞に當に復た具成生あるべし、是を緣有生と謂ふ。五性已に成ずるが故に老死あり、是を十二緣起隨轉宛轉と爲す。田業を造作す。識は種行を造り、不明は對行を造る。地の如きは種を持し、水は種をして散ぜざらしめ、火は種をして熟せしめ、風は種をして起さしめ、空は種をして無礙ならしむ。行の田業を造るも亦た是の如し。愛は潤行を造り、彼の行は我れ田業を造るを知らず。愛は我れ潤行を爲すを知らず、識は我れ種行を爲すを知らず、不明は我れ對行を爲すを知らず。地の我の種を持するを知らざるが如し。水・火・風・空も上に說くが如し。有行勞に從つて、當に復た具成生あるべし。此も亦た是世に從つて躇步する者あること無し。但だ因緣の相持なり。譬へば鏡の淨く明朗なるが如く、內外を緣じて面象を生じ、面も亦た此に死して彼に生ぜず。鏡の中面あるに從つて因緣虧けず、是に從つて受あり。火の如きは受を以て不斷に現じ、晝夜に然えて其の炎步まず、識も亦た是の如し。身相縛をもつて五道に往來せず、緣あるが故に生ず。是の法、主無し。譬へば月の圓かなるが如く、四十九由延に而も圓形にして下水に現じ、緣あらば虧けず。月は彼に死して此に於て生ずるに非ず、生死を觀ずるも當に是の如くなるべし、是を因相縛と爲す。何をか緣相縛と謂ふや、佛、阿難に告げたまへる如く、眼は色を緣じて眼識を生じ、彼の眼は我れ猗行を作すことを知らず、色は我れ識の對と爲ることを知らず。明は我れ識の照と爲ることを知らず、空は我れ識をして無礙ならしむるを知らず、識は我れ此作有を生ずることを

【七】由延（Yojana）は通途には由旬と云ふ、里程の計目なり。

風種と空種と識種となり。彼の身、住することを得るは是れを地種と爲す。持して散ぜざる如き、是を水種と爲す。飲食嘗啖臥得善消、是を火種と爲す。身中の出息入息、是を風種と爲す。四大の能持せざる所、是を空種と爲す。隨轉して雙箭窄の如き、是を識種と爲す。彼の地種の如きは非女非男・非人非士・非身非身所・非人生非少年・非作無作者・非住無住者・非智無智者・非衆生非吾非我・非彼有無有主なり。火・水・空種も亦た是の如し。識種は非女非男・非人非士・非身非身所・非人生非少年・附作無作者・非住無住者・非智無智者・非衆生非吾非我・非我有非有主なり。是の如く但だ六種に從へば、一想たり、合想たり、女想たり、男想たり、妄想たり、身想たり、自在想たり、强自在受若干種たり。故に不明と爲す。時に說いて性癡淨常想樂想身想と曰ふ。疑嫌妄は上要に非ず。佛、是を不明と說きたまふ。亦は染と爲す、物に於て慧生無し。妄の故に不明と爲し、妄の故に行と爲し、物を知るが故に識と爲す。五性の故に名色と爲し、名色の根に猗るが故に六入と爲し、三合するが故に更樂と爲し、更樂行ずるが故に痛と爲し、痛にして樂の故に愛と爲し、愛彌廣きが故に受と爲し、受は當に復た行あるべきが故に有と爲し、五性具成の故に生と爲し、諸種熟するが故に老と爲し、命根禁閉するが故に死と爲す。熱中を憂と爲し、諛語を悲と爲し、五識身に臨んで合するを五苦と爲し、心識身合するを懣と爲し、心念勞するを惱と爲す。有の故に有を生ず。是の如きの見知障[六]翳、是を具滿大苦性足と說く。是に從つて凶衰を受け、著の故に復た生ず。其の始めに見知すべからず、度量すべからず。又た冥を不明の義と爲し、作成を行の義と爲し、知を識の義と爲し、緣住彼彼相倚るを名色の義と爲し、主も亦た專らならざるを六入の義と爲し、更も亦た合會するを更樂の義と爲し、知に從ふを痛の義と爲す。渴して物を得んと欲するは火の如く、厭無きを愛の義と爲し、取を受の義と爲す。當に復た有なるべきを有の義と爲す。五性仰ぐを生の義と爲し、熟を老の義と爲し、行斷を死の義と爲す。是の如きの義を說くを亦た十二緣起相と爲す。又

【六】障は宋、元、明、宮の四本は彰に作る。

了本生死經解題

此經は佛說稻芉經、慈氏菩薩所說大乘縁生稻䕰喩經、大乘舍黎娑擔摩經、佛說大乘稻芉經と同本異譯であつて、吳の優婆塞支謙の翻譯する所である。譯者支謙は月氏國の人で字を恭明と云ひ、後漢の靈帝の時代に父祖法度と共に東遊し、爾來廣く內外の學を精究し、六ケ國語に通じたと云はれてをる。後に獻帝の末葉に漢室の亂るゝに及んで鄕人と共に難を避けて吳に入り、吳主孫權の寵遇を受けて此に安住し、吳の黃武元年(西紀二二二)から建興年中(二五二――二五三)に至る三十有餘年に亘つて衆經の譯業に從事し、大般泥洹經、法句經、阿彌陀經、維摩詰經等の佛敎史上重要な經典の翻譯を初として凡そ三十六部四十八卷を譯出したのである。寂年六十。此經も亦たその間に譯出されたものではあらうが、別に出三藏記集第六に出す道安の了本生死經序によつて見ると、夙に天竺に於ては此經を佛陀の初轉法輪に於ける四諦四信中の樞要なるものとして相當に重んぜられてをつたもので、それが漢の季世に始めて支那に傳はり、後に魏の初代に支恭明(支謙)が出でゝ之を註解して玄旨を發揚し、道安も亦た之に附釋したと云ふ意味のことが書かれてをる。又た開元釋敎錄第一等には支謙自ら經の序文をも撰したことが傳へられてをる。

次に本經の內容を一言すれば、佛陀が曾て『縁起を見れば法を見ると爲し、已に法を見れば我を見ると爲す』と說きたまへるを擧げ來つて、然らば縁起とは何ぞやの問題を中心として、尊者舍利弗、之が解說を試みるのが此經の要旨である。卽ち縁起の成立し得る要素として內縁、外縁の二縁を立て、又た各に內相縛、縁相縛を開示して、之を細說し、轉じて要約して、內縁外縁共に非常、不斷、不躇步種不敗亡、相狀非故の五事を俟つて起る所以を明かにし、かくして十二因縁を見了すれば、卽ち法を見乃至佛を見たてまつる所以を說いてゐる。

最後に本經外佛說稻芉經、縁起聖道經、分別縁起初勝法門經、分別業報略經の國譯に就いて平了照君の助力に俟つこと甚大であることを附記して同君に謝意を表す。

昭和八年十二月二十五日

譯者　淸水谷恭順　識

若し人意清淨にして　常に正思惟を起せば　彼の智慧の舟に乘り　能く[70]彼岸に渡らん。
智眼は最も清淨なり　能く幽顯を矚　自・他情・非情　普遍して盡きざること無し。
若し貪等の過を離るれば　心に惛濁を生ぜず　彼の淨琉璃の　一切悉く明了なるが如し。
彼の一切の[72]外道は　智の光明を覩ず　當に眞實の言を以て　方便して爲に開示すべし。
極放逸の衆生は　唯だ佛のみ能く濟度し　彼岸に至らしめたまへば　最上の丈夫と號す。
佛は諸の世間に於て　第一の歸救と作り　未だ安からざる者をして安からしめ　未だ度らざる者をして度らしめたまふ。
無始の[73]輪廻より[74]無明の爲に蔽はるゝも　佛語に依りて能く斷ずること　日の黑暗を除くが如し。
常に此の言を思惟せば　智者は能く超越し　不滅の處に至るを得[75]最上の寂靜を獲ん。
無盡の法智を以て　廣大の光明と作す　功德稱量し難く　聖中に於て最も勝れたまふ。

【七〇】彼岸。厭離自身品第三の下を見よ。
【七一】情・非情。有情と有情に非ざる一切のもの。
【七二】外道。伏除煩惱品第一の下を見よ。
【七三】輪廻。說法品第二の下を見よ。
【七四】無明。伏除煩惱品第一の下を見よ。
【七五】最上の寂靜。涅槃をいふ。寂靜品第二十八の下を見よ。

り。
善く因縁の法　及び福非福の業に達せば　色を見るに其の貪を離れ　常に大覺悟を生ぜん。
上妙の諸物を以て[五九]如來に奉施し　是に由りて人天を得　展轉して常に恭敬せん。
清淨にして心に染無く　后妃眷屬を護り　彼の邪非を遠離せば　足るを知りて憂惱無けん。
凡夫は境に牽かれ　智者は心に垢無し　當に樂ふて正行を修し　戒に於て能く守護すべし。
彼の毀戒の者を離れ　諸の善人を憐念し　正見思惟に住し　常に法樂を樂へ。
正法を以て國を治め　大臣人民を護れば　彼の王は世間に於て　諸天に等しくして異ること無し。
王の淨德を修するに由り　臣佐も正行に依り　民庶悉く清淨なること　月の秋空に朗なるが如し。
因果の相を了知せば　則ち相攻の罰無く　一切の處[六〇]吉祥にして　自他安隱なるを獲ん。

稱讚功德[六一]品第三十六

[六二]正遍知にして世間の父たり　能く三有の縛を斷じ　覺路に登らしめたまふに[六三]歸依す。
淨智眼にして　能く諸の疑暗を破し　善く衆の異論を摧き　正見に住せしめたまふに歸依す。
[六四]良福田にして　諸の善果を滋榮し　三毒の過患を離れ　離垢清淨ならしめたまふに歸依す。
最上慧にして　勝れたる[六五]三摩地に住し　最勝の法寶を以て　衆生の爲に開示したまふに歸依す。
[六六]佛世尊の[六七]相好諸の功德を稱讚し　能く彼の見る者をして　適悅して心清淨ならしめん。
若し人意清淨にして　常に諸佛を禮敬せば　最上の[六八]吉祥を獲　諸の恐怖を離るゝを得ん。
若し人意清淨にして　善く微妙法を說けば　能く[六九]菩提に至り　畢竟の安隱を獲ん。

【五九】如來。佛十號の一。福行品第三十一の下を見よ。
【六〇】吉祥。伏除煩惱品第一の下を見よ。
【六一】功德。梵語 guṇa の譯。功能福德の義。
【六二】正遍知。梵語 samyak-saṁbuddha 三藐三佛陀の譯。眞正に遍く一切法を覺知せるもの〻意、即ち如來十號の一。
【六三】歸依。歸は反還を以て義と爲し、依は憑なり。
【六四】福田。悲愍有情品第二十一の下を見よ。
【六五】三摩地。定の梵語、禪定品第二十六の下を見よ。
【六六】佛・世尊。共に如來十號の一。無常品第五之餘の下を見よ。
【六七】相好。梵語 lakṣaṇa の譯。佛の身體に就て微妙の相狀了別すべきを相といひ、更に細相の其の相を莊嚴するを好といふ。世尊には三十二相八十種好あり。
【六八】吉祥。伏除煩惱品第一の下を見よ。
【六九】菩提。說法品第二の下を見よ。

常に正見を生じ　彼の邪教に依らず　清淨の心動ぜざれば　當に天主と爲るを得べし。
戒・慧と相應し　勇猛にして施を行ずるを樂へば　人民の稱讃を得　當に天主に爲るを得べし。
常に柔軟の語を以て　群生を愛念せば　眞實に相應するを以て　當に天主と爲るを得べし。
財の增減を畏れず　亦未だ嘗つて慳悋ならず　其の心須彌の如くなれば　當に天主と爲るを得べし。
或は他兵侵暴するも　勇悍怯弱を知り　權智を以て和平せば　當に天主と爲るを得べし。
彼の[五四]三界の中に於て[五五]三寶第一たり　能く力を以て興顯せば　當に天主と爲るを得べし。
時に依りて令を布き　諸の群生を利樂し　險難を離れしむれば　當に天主と爲るを得べし。
染欲の過惡を離れ　多く睡眠を樂はず　常に智と相應せば　當に天主と爲るを得べし。
心堅固にして[五六]精進し　未だ嘗つて疲倦を生ぜざれば[五七]三有の瀑流を越へ　當に天主と爲るを得べし。
所作の事業に於て　審諦にし錯謬無く　群臣を愛念せば　當に天主と爲るを得べし。
口に惡言を施さず　諸の惡者を喜ばず　唯だ仁恕にして和平なれば　當に天主と爲るを得べし。
諸の罪惡を造らず　妄に喜惱を生ぜず　心に彼の垢染を離るれば　當に天主と爲るを得べし。
當に決擇思惟して　然る後に所作に隨ひ　正法に依りて行ずべし　當に天主と爲るを得べし。
諸の飲食を嗜まず　常に正法を樂はゞ　清淨輕安なるを獲　智中の智者と爲らん。
彼の正法を解するに由り　黎民を愛育せば　彼の王は福慧を具し　天龍常に守護せん。
輪迴は極めて長遠なること　絲緒の絶えざるが如し　若し正法に入解せば　彼に於て善く超越せん。
如來の說きたまふ所の[五八]十善の眞實の法に於て　彼の王能く奉行せば　法に依りて世を治むるな

【五四】三界。無常品第五の下を見よ。
【五五】三寶。佛寶、法寶、僧寶をいふ。
【五六】精進。精進品第二十五の下を見よ。
【五七】三有。三界の異名。
【五八】十善。地獄品第十六の下を見よ。

諸の福業を具すと雖も　今善行を修せざれば　彼の無智の愚夫は　復た苦海に漂沈せん。
彼の種性・珍財　及び餘の諸の快樂は　一切皆無常にして　能く防護するもの有ること無し。若し彼の明智を具し　淨戒を捨てず　勝族の中に生ずるを求めば　斯れは則ち善く安住せん。當に知るべし淨戒の法は　清涼なる深淵の如く　能く煩惱の熱を離れ　其の心常に泰然なり。諸の勝行を具足せば　眞實の富饒と爲し　勝族と相應す　心に捨離を生ぜされ。
常に智者に親近せば　下種姓に生ぜず　彼の福慧を勤修せば　善く勝族に住すべし。

王者治國品　第三十五

若し王にして正法を行ぜば　臣佐悉く清淨にして　善く諸根を調伏し　諸天の守護を得ん。
常に安忍の行を行じ　愛語して喜怒無ければ　彼の王は世間に於て　人民咸な敬奉せん。
時を以て[五〇]輸賦し　正法に依りて受用せば　彼の王は貪心あること無く　[五一]夜摩天主と作らん。
清淨にして偏黨無く　及び寃親の想無ければ　彼の王は平等心もて　當に天主と爲ることを得べし。
先王の賜ふ所に於て　奪取を生ぜず　諸の[五二]有情を惱まさざれば　當に天主と爲るを得べし。
樂ふて[五三]施・戒を勤修し　常に眞實の言を發し　諸の衆生を等視せば　當に天主と爲るを得べし。
當に賢善の人を樂ひ　惡讐從を擯棄し　正法を守護すべし　當に天主と爲るを得べし。
忠直の臣佐を樂ひ　女色に著せず　心垢を離れて寂靜なれば　當に天主と爲るを得べし。
諂佞の言を聽かず　正人の所說を樂ふこと　甘露の美きが如くなれば　當に天主と爲るを得べし。
常に正法を聞かんと樂ひ　世の珍玩に著せず　貪欲の垢を解脫せば　當に天主と爲るを得べし。

【五〇】輸賦。年貢をはかること。
【五一】夜摩天主。無常品第五之餘の下の夜摩天及び生天品第三十二の下の天を見よ。
【五二】有情。悲愍有情品第二十一を見よ。
【五三】施・戒。布施と持戒。布施品第二十二等の下を見よ。

智者は常に　最上の寂靜の樂を稱讃す　若し欲樂を樂ふ者は　後の險難を怖れざるなり。
未來の諸の苦惱は　智を以て對治せよ　罪に由りて苦因を生じ　作らざれば則ち咎無し。

善知識品[四八]　第三十四

自他對待し　相勉めて諸惡を遠ざくるに由り　難に於て能く救護するを　此れを說いて知識と名づく。
常に利益の言を說けば　自他を安樂ならしむ　若し樂ふて衆惡を行ぜば　彼は則ち其の友に非ず。若し惡知識に近づけば　則ち能く苦惱を生じ　賢善の人に依止せば　永く諸の憂患を離れん。彼の二の習行する所　謂く染汚・清淨　此の二友の中に於て　智者は善く揀擇す。
當に諸惡を遠離し　專ら衆善を修すべし　既に其の苦因無ければ　唯だ樂分を獲ん。
若し善知識に近づけば供養稱讃を得　不善の人に親附せば　卽ち險難に墮せん。
彼の我慢[四九]を遠離し　一切の罪を怖畏せば　善く諸の罪根を拔き　貪等の過失を除かん。
衆の善業を堅固にし　彼の惡者に違背せば　功德の行を增長し　諸の懈怠を生ぜざらん。
正見を具足し　心安固にして動ぜず勇猛心もて調柔するを　此れを名づけて良友と爲す。
當に知るべし是の如きの人は　世間に希有なる所なり　諸有の具智の人は　此に於て應に親近すべし。
若し惡知識を離るれば　則ち善名聞を得ん　是の如く善く了知し　相依りて出離を求めよ。
若し人種姓　及び豪富端嚴を恃めば　醉象の奔馳して　深穽を怖れざるが如し。
其の心常に高擧し　諸根常に散亂せば　當に知るべし是の如きの人は　世間に輕賤せらる。
後の苦報を怖れず　盲然として衆罪を造る　先因を得るに易からず　彼は何ぞ自ら輕毀するや。

【四八】善知識。博知博識をいふには非ず。知識とは其の心を知りその行を識るの義にして知人卽ち朋友の意なり。善知識とは、我に益を爲し、我を善道に導く知友をいふ。

【四九】我慢。教授衆生品第十四の下を見よ。

し。若し人苦樂に於て　心彼に隨つて轉ぜず　怖無く亦愛無ければ　是を具智者と爲す。
昔修せる福業を受くるも　新善行を作さざれば　彼の樂隨つて滅少し　大怖卽ち將に至らんとす。

又彼の諸の天人は　上妙の快樂を受くるも　是の樂は堅固に非ず　無常に破壞せらる。
若し彼の樂の　幻泡水月の如くなるを悟らず　是の如く樂に著する者は　身の樂皆散壞せん。此の世間の大怖は　方便して能く免るゝこと無し　死魔は勢速疾にして　去り已れば迴す者無し。
壽命及び快樂　一切は皆散壞す　業索の拘する所と爲れば　牽かれて餘の惡道に至らん。
過去に諸樂を受くること　廣大にして豈能く說かん　云何ぞ彼の癡人は　厭足を生ぜざるや。現在に受くる所の樂は　愛毒の二相雜す　彼は[四五]有爲無常にして　一切皆墮落す。
彼の三有の快樂は　智者は愛樂せず　能く諸天を惛醉す　何に由つてか熱惱を離れん。
時分は久長に非ず　迅速なること飛電の如し　彼の著樂の諸天は　火に乾薪を益すが如し。
一切の樂已に過ぐ　當に心に衆善を修すべし　命終の時　後に憂悔を生ぜしむること無かれ。百千生の中に於て　諸の快樂を受用す　愚夫は何ぞ久しく住する　彼の樂復た何れに往かん。
愚者は樂に厭無く　薪を以て火に投ずるが如し　是の故に當に捨離すべし　彼の樂は究竟に非ず。

五欲の過患を知れば　當に渴愛を離れ　禪を修して散亂を除くべし　斯の樂は最も淸淨なり。若し人貪欲に著せば　彼の所得は樂に非ず　能く輪迴の因を生じ　[四六]毒を其の蜜に雜ふるが如し　是の故に五欲に於て　常に愛樂を生ぜざれ　彼の樂は寂靜ならず　當に畢竟の樂を求むべし。善く諸根を降伏せば　境の爲に煩はされず　諸有の具智の人は　心境に隨つて轉ぜず。
愚夫は少智無く　苦に於て妄りに樂と爲し　迷妄の顚倒を起し　[四七]五趣に馳流す。

【四五】有爲無常。無常品第五之餘の下を見よ。

【四六】其の字。忍徵師校註に疑ふらくは耳かといへり。或は甘か。

【四七】五趣。不放逸品第六の下を見よ。

無し。
修する所の善法に於て　心に常に守護を生ぜば　諸の衆生を愍念し　安隱の處に至らしめん　若し心に散亂を生ぜば　善法現前せず　既に彼の善因無し　後樂も得べからず。
智者は常に　世間の諸の衆生　皆苦・空・無常なるを觀察せば　則ち貪著を生ぜず。
樂ふて寂靜の法を行じ　佛智を勤求し　常に眞實の言を出せば　苦の邊際を盡すを得ん。
一の貪法　及び苦樂の二種を遠離し　三世の過患たるを了せば　是の人樂分を得ん。
樂果は因より生じ　生じ已りて卽ち隨ひて滅ず　彼の有漏の樂因は　修せざれば增長せず。
樂に於て著を生ぜざるを　此を離貪者と爲す　善く〔四四〕三有の海を越へ　能く彼岸に到らん。
又彼の有漏の樂は　刹那も久住せず　是の故に當に遠離すべし　不動の樂を勤求せよ。
苦に於て疲厭せず　樂に於て愛を生ぜず　二に於て所著無ければ　能く菩提の道に趣かん。
愚夫は快樂に著し　出離方便無し　沙中に油を求むるが如く　畢竟して得べからず。
愚癡にして心散亂し　百千の思惟を起し　常に諸の惡因を造れば　善に於て少分も無し。
若し人快樂を須てば　常に正法に依止せよ　樂ふて非法を行ずる者は　則ち諸の苦惱を受けん。
自ら諸の苦因を作れば　何ぞ能く彼の樂を見ん　苦樂は各因に依る　知り已りて衆善を修せよ。
世樂は寂靜に非ず　無常の力廣大なり　彼の愛に染せらる爲に　毒を嘉饌に雜ふるが如し。
善人は妙樂に依り　不滅の處に至るを得　愛を離れ煩惱を除けば　氷炭を心に交ふること無けん。樂は女色より生ず　此に說く彼は唯だ苦なり　諸の惡の種子たり　當に惡趣に墮すべし。
若し樂の後に苦を招けば　彼は何ぞ名づけて樂と爲さん　凡夫は了知せず　自ら其の苦報を受く。彼の欲樂を受用せば　時分の爲に遷され　日の久しく停らず　光明も亦隨つて沒するが如

〔四三〕有漏。煩惱を含有する事物をいふ。一切世間の事體は盡く有漏法ならざるはなし。
〔四四〕三有の海。厭離自身品第三の下を見よ。

ざる所なり。
善く諸の禪定を脩し　能く心の散亂を除けば　則ち貪の羞恥を離る　此の樂は能く勝るもの無けん。
智者は林中に處り　常に寂靜を思惟し　彼の貪心を離るゝを得　諸天の樂も比すること難し。
一切の五欲の樂は　畢竟して長久に非ず　彼に於て貪を生ぜず　此の樂を最上と爲す。
若し林野に棲止せば　最上の安隱を得ん　一切の諸の苦因は　貪欲を以て本と爲す。
貪の爲に覆はれ　飲食衣服を樂はゞ　是の人則ち林中に於て[三六]宴坐すること能はず。
常に智を以て觀察し　善の境界に依止し　常に林中を樂ひ　無貪等の行を修せよ。
若し人心寂靜なれば　則ち散亂を生ぜず　常に林中を樂ひ　貪染を離るゝを得よ。
若し人癡行を離るれば　[三七]三有の過失あること無し　常に林中を樂ひ　[三八]最上の寂靜を得べし。
心寂靜なるに由るが故に　則ち諸の希求無し　常に林中を樂ひ　諸の[三九]禪定を修習せよ。
城邑聚落に於て　心に愛樂を生ぜず　唯だ空閑に依止し　心に棲して宴坐せよ。
若し人邪に思惟し　貪等に圍繞せられ　林中に處るを樂はざれば　何に由つてか[四〇]諸漏を盡さん。若し憒鬧に近づけば　則ち彼の散亂を生ず　是の故に當に遠離すべし　人の稱讃する所と爲らん。當に知るべし林中に處るは　勝れたる清淨の樂たり　貪等の惛濁を離る　智者は常に親近せよ。
若し林中に棲止せば　諸根常に適悅し[四一]帝釋天主と雖も　樂に於て及ばざる所なり。
常に禪定を修習し　清淨の法に安住せよ　彼の夜摩の諸天は　樂に著して習ふこと能はず。若し五欲の樂に耽れば　常に諸の苦惱を生じ　癡愛の爲に覆はる　彼の樂何ぞ能く久しからん。
常に善の法財を求め　三惡行を造らざれば　當に知るべし是の如き人は　癡愛も能く繫すること

【三六】宴坐。教誡比丘品第三十の下を見よ。
【三七】三有。三界に同じ、伏除煩惱品第一の下を見よ。
【三八】最上寂靜。涅槃をいふ。寂靜品第二十八の下を見よ。
【三九】禪定。禪定品第二十六の下を見よ。
【四〇】漏。煩惱の異名、伏除煩惱品第一の下を見よ。
【四一】帝釋天主。生天品第三十二の下を見よ。
【四二】夜摩の諸天。無常品第五之餘の下を見よ。

當に貪等の咎を離るべし　作し已れば惡報を招く　常に諸の苦惱を怖るれば　是の人彼の天に生ぜん。

是の如き大義利は　則ち彼の樂因と爲る　衆善當に奉行すべし　是の人彼の天に生ぜん。

快樂品　第三十三

定[三〇]は功德林と爲す　最上清淨の樂なり　能く引いて菩提[三一]に至り　犢の其の母に隨ふが如し。　若し新たに樂因を修せば　則ち能く舊苦を除き　或は新たに苦因を造れば　則ち能く舊樂を壞す。

蜜を其の藥に塗るが如く　毒を其の膳に雜ふるが如く　善惡相參るに由り　甘味得可からず。

樂は貪に因りて生ぜず　此の樂は唯だ清淨なり、能く寂靜の道に趣けば　則ち三毒の名無し。

是の樂は上に過ぐるもの無く　初中後皆善し　則ち貪愛の心に於て　畢竟して復た起さざれ。

愚夫は心散亂し　無我を了することを能はず　苦樂の境中に於て　常に彼の欲樂を求む。

若し人染欲を離るれば　則ち　輪迴[三二]の因を斷つ　淨業に依止するに由り　能く　彼岸[三三]に到らん。

彼の染愛は樂に非ず　貪・瞋と相應す　貪等の失を解脫せば　則ち無垢の樂を得ん。

天中の樂を受くと雖も　欣樂を生ぜず　彼は善く出離を求め　愛に於て所著無し。

若し愛羂に拘せらるれば　纏縛は實に樂に非ず　不滅の處に至ることを得るを　斯れを畢竟の樂と爲す。

若し樂欲より生ずれば　智者の所樂に非ず　染欲の因緣を離るゝを　斯れを最上の樂と爲す。

寂靜の行を樂はず　阿蘭若[三五]を遠離せば　鴛の蓮池に依るが如し　食無くして何ぞ能く住せんや。

諸天は放逸に由り　寂靜に依るを樂はず　日に於て涼光を求むるは　顚倒にして相應に非ず。　若し樂ふて其の愛を離るれば　則ち能く諸苦を脫せん　是の樂は上に過ぐるもの無く　愚夫の知ら

【三〇】定。三昧 samādhi の譯。禪定品第二十五の下を見よ。

【三一】菩提。說法品第二の下を見よ。

【三二】輪廻。說法品第二の下を見よ。

【三三】彼岸。厭離自身品第三の下を見よ。

【三四】貪・瞋。貪欲と瞋恚、愚癡と共に三毒といふ。

【三五】阿蘭若。敎誡比丘品第三十の下を見よ。

兩舌の過惡を離れ　愛語を發するを樂ひ　其の心常に質直なれば　是の人彼の天に生ぜん。
心高擧するを遠離し　身を觀ずること瓦木の如く　知足にして常に謙和をれば　是の人彼の天に生ぜん。
彼の晝夜の中に於て　以て疲倦を生ぜず　樂ふて衆善を勤修せば　是の人彼の天に生ぜん。
[二六]掉擧・惛沈・睡眠・懈怠等に於て　心常に遠離を生ぜば　是の人彼の天に生ぜん。
五根散亂するに由り　數々に諸境を取り　智を以て善く防護せば　是の人彼の天に生ぜん。
善く　[二七]四攝行を修し　[二八]四諦法を明了にし　廣大の知見を具せば　是の人彼の天に生ぜん。
苦因苦果　及び苦を盡すの邊際に於て　皆眞實に了知せば　是の人彼の天に生ぜん。
設ひ極險難に遇ふも　諸の善法を捨てず　心寂靜なるに由るが故に　是の人彼の天に生ぜん。
殊妙の衣を樂はず　常に毳服を持し　淨命に乞食するに依り　是の人彼の天に生ぜん。
心に禪定を修するを樂ひ　安坐して朽木の如く　善く出離の行を修せば　是の人彼の天に生ぜん。
隨つて得る所の飲食　精妙或は麁獷なるも　心に欣厭を生ぜざれば　是の人彼の天に生ぜん。
地に依りて臥具と爲し　樹下に樓觀の如く　其の心常に泰然なれば　是の人彼の天に生ぜん。
諸根常に寂靜に　境の牽く所と爲らず　散亂の垢染を離るれば　是の人彼の天に生ぜん。
眼に　[二九]色等の境を觀し　彼の相皆空なるを了し　是の如く皆正知せば　是の人彼の天に生ぜん。
若しは毀若しは稱讚　聞き已りて心動ぜず　煩惱相應すること無ければ　是の人彼の天に生ぜん。
善不善の業　報を受くること咸な決定せるを了せば　當に彼の梵行を修すべし　是の人彼の天に生ぜん。

【二六】掉擧惛沈睡眠懈怠。掉擧は遠離不善品第四、餘の三は捨離懈怠品第二十の下を見よ。
【二七】四攝行。梵語 catuḥ-saṃgraha-vastu の譯。又四攝法ともいふ。一に布施攝、若し衆生財を樂めば財を布施し、若し法を樂しめば法を布施して、是によつて親愛の心を生じ、我によつて道を受けしむるをいふ。二に愛語攝は善言慰喩し、三に利行攝は、身口意の善行もて衆生を利益し、四に同事攝は法眼を以て衆生の根性を見、その所樂に隨つて形を分けて示現し、その所作を同じくして利益に霑はしめ、是等によりて道を受けしむるをいふ。
【二八】四諦。寂靜品第二十八の下を見よ。
【二九】色等の境。訶厭五欲品第七の下の五境を見よ。

寶樹は涼風を生じ　禽鹿相依止し　天女は紅蓮に處りて　而して共に相遊戲せん。
殊妙寶の華鬘あり　適意して衆歌舞し　諸天及び天女　咸な供養恭敬せん。
普遍光明の鬘　淸河愛樂す可く　妙なる五樂の音を聞き　緣生の虛幻なるを悟る。
無量の諸の天衆　咸な共に相遊戲し　昔修する所の因に依り　三品の快樂を受く。
久しく施・戒を脩習し　志念常に堅固に　彼の行を具足するに由りて　是の人彼の天に生ぜん。
常に佛語を遊ひ　諸の衆生を護念し　寂靜の心に安住せば　是の人彼の天に生ぜん。
慈忍を具足し　怨根深惑を除き　慈心常に相應せば　是の人彼の天に生ぜん。
若し人意寂靜にして　三有に著せざれば　善く彼の心を調ふるに由りて　是の人彼の天に生ぜん。
唯だ一に眞實の言あり　多く虛しく說くを樂はず　非義利を遠離せば　是の人彼の天に生ぜん。
彼の老・病・死を悟り　[二一]輪迴・[二二]流轉を怖れ　寂滅の樂を樂求せば　是の人彼の天に生ぜん。
巖谷林泉　塚間或は樹下に棲み　深く諸の禪定を修せば　是の人彼の天に生ぜん。
妙なる辯才を具足し　時方を知りて法を說き　常に惡知識を捨つれば　是の人彼の天に生ぜん。
聚落城邑に於て　遊往し觀翫せず　唯だ一に空閑に處れば　是の人彼の天に生ぜん。
常に自身の不淨を以て本と爲し　刹那も久しく停あらざるを觀ぜば　是の人彼の天に生ぜん。
善く諸の法性に達せば　是の法法位に住し　彼の輪迴に著せざれば　是の人彼の天に生ぜん。
如實に諸の受の　能く取著を生ずるを知り　心に愛樂を生ぜざれば　是の人彼の天に生ぜん。
諸法は幻の如く　[二三]乾闥婆城の如く了し　善く自心を調伏せば　是の人彼の天に生ぜん。
乃至[二四]色等の蘊　彼は唯だ一の空性なり　[二五]涅槃を志求せば　是の人彼の天に生ぜん。
男子女人に於て　皆父母の想を生じ　平等に衆生を觀れば　是の人彼の天に生ぜん。

【二一】輪迴。說法品第二の下を見よ。
【二二】流轉。遠離不善品第四の下を見よ。
【二三】乾闥婆城。蜃氣樓なり。願離自身品第三の下を見よ。
【二四】色等の蘊。訶厭五欲品の下の五蘊を見よ。
【二五】涅槃。願離自身品第三の下を見よ。

舌に眞實無きに由り　虚を指して有と談ず　詭飾の言詞を離るれば　天中に生ずるを得ん。
常に彼の兩舌を遠ざけ　慈心もて相愛敬し　離間語を說かざれば　天中に生ずるを得ん。
惡語は刀杖の如く　智者は當に遠離すべし　常に美妙の言を出せば　天中に生ずるを得ん。
善く斯の七戒を護れば　則ち能く諸天に生ぜん　智者は當に了知すべし　此の諸佛の說きたまう所なり。

衆善を以て莊嚴せば　天上に生ずるを得　若し昔の修行を廢せば　彼は則ち後悔を生ぜん。
天上に妙なる林藤あり　修蔓四もに垂布し　好華香莊嚴し　諸天其の下に憩ふ。
若し衆の善行を修せば　當に諸の快樂を獲　天中に往趣し　是の如き果を見ることを得べし。又
彼の諸の天衆は　三品の快樂を受く　各各に先業の如くにして　彼彼の果を得るなり。
因は果と相似するに　而も肯て因を修せず　因果を善く了知せば　當に樂分を獲べし。
勝妙の五欲の境に　諸天樂著を生じ　愚夫は意に迷妄し　後の大怖を覺らず。
上妙の欲樂を希ひ　殊勝の境界を求むるも　果のみを愛し因を修せざれば　彼は愚癡增長す。
若し彼の樂果を樂ひて　而も淨戒を持せざれば　人の暗中に處り　燈を離れて明を求むるが如し。

種子を離れて果無く　燈を離れて何ぞ光有らん　戒を離るれば天に生ぜず　智を離るれば　[一九]解脫無し。

樂は業の招く所に由り　一切皆染濁す　當に決定の心を生じて　無垢の樂を求むべし。
若し人欲樂を棄て　永く追求を絕てば　彼は愛染の心無く　善く我の所執を除かん。
臂を屈伸する頃の如きに　[二〇]摩天に生ずるを得　天衆競ひて來り迎ひ　身光に常に照耀せん。
彌盧山王の如く　衆寶に嚴瑩せられ　彼の大海中より　涌出して空に於て住せん。

【一九】解脫。說法品第二の下を見よ。

【二〇】夜摩天。無常品第五之餘の下を見よ。

微妙なる五音樂　及び最勝の歌舞　聞き已りて咸な適悅し　諸天と共に遊戲す。
戒は其の種子と爲り　諸の樂果を出生し　上妙の[一六]五欲に於て　心に隨ひて受用す。
諸天の光明の[一七]鬘は　殊勝淨無垢なり　乃至諸の快樂は　皆善因の感ずる所なり。
諸天と遊戲し　無量の快樂を受く　是の如き快樂の因　此の因は我作に非ず。
最勝妙の樓閣あり　衆寶にて莊嚴す　夙に善因を植うるに由り　其の中に安住すること得。
廣大の五欲を受けるも　染著の心を生ぜず　三種の縛を離るゝに由り　[一八]帝釋天王と爲る。
若し人心質直に　定を脩し散亂を除けば、此の天中に來生し　自業を現證と爲す。
廣く衆の善業を修せば　受樂常に相續し　昔行ずる所の因　今來りて斯の果を受くるを悟らん。
此の現生に善を修せば　猶ほ林木を植ゑ　相續して滋榮せしむるが如く　是の人を智者と爲す。
在所生處に於て　善或は不善を作せば　各各に其の因の如くにして　種々の報を受けん。
若し人善因を修せば　天中に生ずるを得　彼の不善の因を造れば　當に地獄に墮すべし。
愚癡著欲の人は　善を捨てゝ不善を作し　命終の時を怖れず　彼は自ら損壞すと爲す。
善不善の業報は　種の各滋長するが如し　愚夫は心樂に著して　未だ嘗つて暫くも捨てず。
三品の善業を修し　身語の七支を觀ぜば　彼の三毒を解脫し　天中に生ずるを得ん。
欲境に於て動ぜず　亦讚美を生ぜず　離染清淨に住せば　天中に生ずるを得ん。
善く種々の施を修し　彼の慳悋の心を治せば　諸の苦難の處を越へ　天中に生ずるを得ん。
衆生の命を害せず　而も常に愛護を生じ　寂靜の慈心に住せば　天中に生ずるを得ん。
不與取を遠離し　其の心熾火の如きも　正思惟に安住せば　天中に生ずるを得ん。
欲の游泥に染せず　他色を見ること母の如く　慧を以て善く觀察せば　天中に生ずるを得ん。
自心に獄火を懷くは　舌薪より發起す　斯れ妄言を說くに由る　此を離るれば天中に生ぜん。

【一六】五欲。訶厭五欲品第七の下を見よ。
【一七】鬘。かみかざり、くびかざり。
【一八】帝釋天王。梵語 śakra devānām indriya. 釋提桓因ともいふ。忉利天の主にして他の三十三天を支配す。

たらん。

天中の妙欲　及び最勝の空殿を受くるも　念念に即ち[七]無常なり　久しからずして後に當に盡くべし。

[八]彌盧は極めて高勝なるも　善業は能く彼に過ぐ　乃至[九]究竟天　善に匪ざれば何ぞ能く詣らん。

欲境に於て厭無ければ　天中は更に殊勝なり　愛に由りて轉た增長し　何に由つてか寂靜を得ん。

諸天愛に由るが故に　樂に著し休息すること無く　常に愛火に燒かる　樂に於て何をか能く得るや。

作善に三品有り　三類を三因と爲し　三有に三に[一〇]現行し　三業に三果を感ず。

汝は善法を樂ふに由り　施・忍・不害を修し　眞實の行相應し　天上に生ずるを得ん。

勝れたる莊嚴　[一一]華鬘寶　[一二]瓔珞を具足し　樂を天中に受くるは　皆善業に由りて得るなり。

又天中の妙樂に　上中下の差別あり　是の如き三品の因は　福果に隨つて現ずる所なり。

彼の善行を修するに隨ひ　二種の報を失せず　或は人或は天中に　則ち快樂を受けん。

汝は昔福業を修し　善く七支戒を護り　今此の天中に來りて　自ら其の樂果を受くるなり。

妙なる蓮華の池有り　清涼の香風を生じ　珍妙の樓閣の中に　諸天と共に遊戲す。

極めて殊妙なる金山あり　琉璃を峰頂と爲し　寶樹の華果多く　諸天と共に遊戲す。

上妙の[一三]劫波林あり　枝葉悉く滋茂し　清泉其の中を繞り　諸天と共に遊戲す。

復[一四]七寶の山有り　河流四に圍繞し　金沙其の底に布き　諸天と共に遊戲す。

青蓮華には妙香あり　[一五]曼陀羅華林には　衆鳥妙音を出し　諸天と共に遊戲す。

復た餘の勝處有り　皆衆寶の林木あり　宮殿は寶もて莊嚴し　諸天と共に遊戲す。

【七】無常。無常品第五の下を見よ。

【八】彌盧。山の名。無常品第五の下を見よ。

【九】究竟天。色究竟天の略。

【一〇】現行。現在に行轉するをいふ。

【一一】華鬘。無常品第五之餘の下を見よ。

【一二】瓔珞。無常品第五の下を見よ。

【一三】劫波林。劫波樹の林。無常品第五の下の劫樹を見よ。

【一四】七寶、金、銀、琉璃、硨磲、碼碯、眞珠、玫瑰をいふ。

【一五】曼荼羅華。梵語（mandārava）。圓華、自團華悅意華等と譯す。

善く彼の愛縄を離るゝこと　劍の朽索を斷つが如くなれば　安隱にして諸怖を離れ　諸天に生ずることを得ん。

慧力極めて堅勇に　常に專ら正法を求め　[四]施・戒・禪定を修せば　諸天に生ずることを得ん。

又彼の諸の衆生は　廣く共の善行を修せば　果を感じて天中に生じ　諸天常に恭敬せん。

人善を作せば天に生じ　天に福を修せば人と爲り　常に正法に依り　互相に力能有り。

或は天より退沒し　或は餘趣より天に生ず　若し彼の善業を離るれば　則ち[五]三惡道に趣かん。

諸の寂靜の善法は　樂の因本たり　乃至夢中に於ても　應に善法を捨つべからず。

善法は非法を滅し　眞實は虛妄を摧き　諸天は非天を降し　智慧は愚鈍を破す。

善法は階梯たり　智者は能く昇蹈し　諸天の中に往趣し　上妙の快樂を受く。

謂く身語の[六]七支　殺盜等を行はされば　此の七能く梯となり　天界に生ずることを得ん。

淨業の身を嚴るに由り　光潔にして極めて愛すべく　猶ほ彼の明燈の如く　自身よりして發す。

是の故に諸の天人は　皆戒を以て本と爲せ　常に適悅の心を生じ　樂を受くるに窮極無けん。

諸の天女侍衞し　衆星の月を拱くが如く　天中に遊戲するは　皆善因の所得なり。

欲する所に隨ひ心に從ひ　得已りて滅失無く　彼の樂常に增長するは　皆善因の所得なり。

善く布施行を修し　諸の有情を憐愍し　慈心と相應せば　天上に生ずることを得ん。

殺生の罪を遠離し　諸の衆生を害せず　善行と相應せば　天上に生ずることを得ん。

不與取を遠離し　而も樂ふて布施を行じ　少物をも悋惜せざれば　天上に生ずることを得ん。

欲の邪行を棄捨し　常に彼の正道に依り　垢を離れ心寂靜なれば　天上に生ずることを得ん。

飲酒の過失を離るれば　意に迷亂を生ぜず　人に輕笑せられず　天上に生ずることを得ん。

諸天は快樂を受くるも　應に放逸を生ずべからず　當に寂靜の樂を求むべし　彼は則ち常に安隱

【四】施・戒・禪定。布施と持戒と禪定なり。各々に六度の一。布施品第二十二等の下を見よ。

【五】三惡道。三惡趣に同じ。地獄、餓鬼、畜生なり。地獄品第十六等の下を見よ。

【六】七支。身三、口四の惡業。十惡業の中の前七なり。十惡業とは、殺生、偸盜、邪婬、(已上身三)、妄語、綺語、兩舌、惡口、(已上口四)、貪欲、瞋恚、愚癡、(已上意三)をいふ。

卷の第十

生天品　第三十二

若し人衆善を脩し　清淨にして心質直なれば　當に天中に生ずるを得べし　牟尼の說きたまふ所なり。

布施・愛語を樂ひ　慈心常に相應し　諸の衆生を護念せば　此の因を眞實と爲す。

彼の心清淨なるに由り　白法の依止と爲り　天中の快樂を受け　身には光明を出さん。

是の光明は最勝にして　相續して絕へず　世に燈明有るが如く　諸の險難に墮せざらん。

若し人心清淨なれば　摩尼の無垢なるが如く　平等に常に謙和し　諸天に生ずることを得ん。

若し心善く調伏し　戒を持し諸定を修せば　清淨なること眞金の如く　諸天に生ずることを得ん。

一切の有情に於て　心に常に憐愍を生じ　殺生罪を造らざれば　諸天に生ずることを得ん。

世に處して身光潔く　諸の罪法に染まず　一切の損害を離るれば　諸天に生ずることを得ん。

欲境を見ること毒の如く　金寶を覩ること草の如く　貪欲の過患を離るれば　諸天に生ずることを得ん。

若し人貪欲を離れ　心境の牽くところと爲らず　怖畏險難を脫せば　諸天に生ずることを得ん。

親眷朋屬を遠ざけよ　彼は互相に纏縛す　單已にして修行せば　諸天に生ずることを得ん。

殊勝の行を具足し　淨慧に安住せば　善く貪欲を降伏し　諸天に生ずることを得ん。

三業に毀犯を離れ　樂ふて諸の禪定を修せば　衆の爲に稱讃せられ　諸天に生ずることを得ん。

惡知識を棄背し　愛の毒箭を遠離し　女の爲に索縛せられざれば　諸天に生ずることを得ん。

【一】天。梵語 deva 提婆又はsura 素羅の譯。光明、自然、清淨、自在、最勝等の義。人間以上の勝妙の果報を受くる所にして、其の一分は須彌山の中に在り、其の他は遠く蒼空に在りとす。總じて二十八天あり、之を天趣と名づけ六趣の一なり。二十八天とは、欲界に六天あり、四天王天、忉利天、夜摩天、兜率天、化樂天、他化自在天なり。次に色界に十八天あり、分けて四禪となす、初禪に三天あり梵衆天、梵輔天、大梵天なり、二禪に小光等の三天、三禪に小淨等の三天、四禪に無雲、乃至色究竟の九天あり。次に無色界に四天あり、空處天、識處天、無處有處天、非想非々想天なり。上品の十善を行じ、兼ねて禪定を修せる者はこの果報を受く。

【二】牟尼。教誡比丘品第三十の下を見よ。

【三】摩尼。治心品第十一の下を見よ。

彼の正慧を具するに由り　諸惡の險難なるを見て　常に善と相應し　諸の煩惱を離るゝを得ん。
若し彼の愚癡に縱ひ・唯だ欲境を樂ひば　樂壞して苦現前し　徒勞に悔惱を生ぜん。
乃至形壽を盡すまで　心に散亂を生ぜず　常に福行を修せば　則ち能く惡道を免れん。
壽命は速かに遷謝し　福報亦久しきに非ず　當に正法を攝受すべし　[六七]知足天主と爲らん。
若し善法を棄捨せば　彼は則ち放逸を生じ　復た福行を修せざれば　久しからずして當に退沒すべし。
各聞き强健の時　及び身肢缺くる無きに　廣く諸の福業を營めば　後に則ち憂悔無けん。
若し福田を修せず　唯だ放逸を樂はゞ　當に知るべし是の如きの人は　地獄の苦本を爲す。
彼は諸根を具すと雖も　正法を樂はずして　云何ぞ活命を求め　多の眷屬を養育するや。
常に晝夜の中に於て　心に正法を攝持し　說法の師に親近せば　諸の罪苦に遠ざかるを得ん。
持戒に由りて天に生れ　諸の欲樂を受くるを得　愚癡にして福行を癈せば　久しからずして則ち退沒せん。
淨智を發生するを樂ひ　戒寶を以て身を嚴り　常に彼の欲の陀を怖るれば　諸天共に稱讚す。
善法を愛樂するに由り　諸天常に恭敬す　若し顚倒の心生ずれば　貧窮にして福慧無けん。
善法は橋梁の如く　持戒は則ち能く往く　彼の善行を修せざれば　苦海何に由つてか渡らん。
隨順して善行を修せば　決定して善果を得　百千　[六八]倶胝劫にも　彼の善は能く壞するもの無し。
常に施・戒の法を修し　智を以て防護し　諸の所求有る者をして　三寶に歸依せしめよ。
善く三種の施を修し　能く三過失を治し　彼の過を離るゝに由るが故に　清淨の功德を獲ん。
圓滿の淨戒を樂ひ　決定の正信を生ぜば　三有の苦を破壞すること　日の雲翳を除くが如し。
若し正法を具足せば　諸天咸な尊重す　是の人當に　最上寂靜の處を獲得すべし。

【六七】知足天。兜率天の譯名。兜率天は無常品第五之餘の下を見よ。

【六八】倶胝。無常品第五之餘之下を見よ。

寧ろ身命を喪失するも　正法に違背せざれ　若し正法を離る者は　諸惡に隨つて流轉せん。
愚癡にして欲樂に著し　正法眼を棄捨せば　彼は現生を虚しく擲つこと　海中に雨を下すが如し。

彼の禁戒を護らず　樂ふて諸惡を造作せば　心田の善の種子　則ち生長するに由る無し。
當に一心に　最上清淨の法を觀察すべし　不滅の處に至るを得　苦に於て則ち有ること無けん。
若し諸根縱逸に　境に於て耽著せば　則ち彼の僞に纏はられ　輪轉して休息すること無けん。
若し罪法に著せざれば　鎔金赫奕たるが如く　三有の險難を離れ　畢竟の寂靜を獲ん。
清淨の慧を具足し　常に正法を尊重せば　彼の說法の師に於て　聞き已りて能く信受せん。
常に三寶に供養し　父母に考事せば　能く涅槃の城に至り　最上の安隱に住せん。
出家の形儀を具し　善く正法を宣說し　梵業を精修せば　最勝の妙樂を得ん。
諸の布施の中に於て　[六三]法施は上に過ぐるもの無し　勇猛精進を起し　諸の禪定を修習せよ。
是の如き說法者は　[六四]如來の讃したまふ所なり　若し淨信を生ぜざれば　傍生の如くして異ること無し。

常に諸賢聖の　說く所の寂靜の法を樂ひ　[六五]三種の福田に於て　修持して出離を求めよ。
彼の說法の師に於て　第一の恭敬を生じ　正法を求むるが爲の故に　心に疲倦を生ぜざれ。
五欲の境を觀察するに　彼は則ち實に樂には非ず　設ひ見るも取るべからず　[六六]牟尼の誡むる所なり。

樂ふて正法を修習せば　則ち離垢の道を見ん　彼は法樂を受用し　諸天も及ばざる所なり。
現に作る所の善業　背に依るが如くにして住す　是の故に當に一心に　常に彼の善に親近すべし。
慧眼を以て　未來の諸の苦報を觀見するに　愚夫は罪を作るを樂ひ　智者は心に常に怖る。

【六三】法施。布施品第二十二の下の布施を見よ。
【六四】如來。梵語 tathāgata の譯。佛は如來の道に乘じて來るが故に如來ともいふ。佛十號の一。
【六五】三種福田。一に報恩福田、父母師長なり。二に功德福田、佛法僧三寶なり。三に貧窮福田、貧窮困苦の人なり。福田は悲愍有情品第二十一の下を見よ。
【六六】牟尼。教誡比丘品第三十の下を見よ。

若し勝れたる福行に於て　數々にして修作せば　其の種々の因に隨ひ　則ち彼彼の果を受けん。
一切の諸の世間は　善惡の法を主と爲す　當に善法を勤修すべし　彼は則ち能く救護せん。
若し善法を捨離し　樂ふて衆罪を造作せば　是の因緣に由るが故に　則ち地獄の苦を受けん。
乃至命未だ謝せず　及び身肢圓滿なるに　努力して勤めて修作せば　彼は則ち大智を具す。
若し人善く說法せば　能く他を開悟し　[五九]涅槃の城に至り　安隱にして憂怖を離れしめん。
若し彼の正法に於て　爲に四句の偈を說けば　出離の道を顯示し　第一の歸救と爲らん。
善く正法を宣說せば　能く疾く佛道を成ぜん　[六〇]帝釋少因なりと雖も　多財豈能く致さんや。
若し世財に貪著せば　法慧增長せず　珍寶は散壞有り　法財は用極まること無し。
唯だ修する所の善法は　百千生に相逐ふ　己れの所有の資財は　一步も隨去せず。
又水火盜賊は　則ち能く其の財を損ふ　善法心中に在れば　少分も能く奪ふもの無し。
縱ひ久遠劫を經　無量の欲樂を受くるも　決定して當に破壞すべし　須らく諦かに正法を求むべし。
唯だ此の一の善法を　當に精勤守護すべし　善を作せば命延長し　惡を造れば速やかに磨滅す。
當に善法に親近すべし　敎の如くにして修行せば　諸の苦則ち生ぜず　殊勝の樂を獲得せん。
若し樂ふて不善を作し　常に非法を行ぜば　後に地獄の中に墮し　無量の極苦を受けん。
無量劫の中に於て　常に[六一]三寶に歸依せば　先づ天中の樂を受け　後に寂靜の果を得ん。
現に福報を受くるを觀ずるに　皆先業より生ず　或は樂或は苦の因　各各に差忒ふこと無し。
當に堅く淨戒を持し　廣く福業を崇むべし　晝夜に常に相續して　河流の絕えざるが如くなれ。
若し人善法を捨つれば　今生を則ち虛しく過ぐ　若し善因を[六二]癈せざれば　人天の快樂を得ん。
若し福行圓滿にして　善く正法を護持せば　是の人世間に於て　最勝にして倫匹無けん。

【五九】涅槃。寂靜品第二十八の下を見よ。槃の字は忍徵師校刻本に依る。原本には盤。
【六〇】帝釋。生天品第三十二の下を見よ。
【六一】三寶。佛寶、法寶、僧寶あり。
【六二】癈の字。忍徵師校刻本には廢に作る。

意空寂を樂ひ　專ら諸の禪定を修せば　彼の梵志[58]の沙門は　善く安隱道に住せん。

福行品　第三十一

若し人福業を營めば　當に殊勝の報を獲べし　是の故に廣く修作せよ　福無ければ則ち財無けん。

福は最勝の寶たり　福は無盡藏と稱す　福は彼の明燈の如く　福は父母に同じ。

福は能く諸天に生じ　福は能く勝處に引く　人間福行を修せば　感果意の如くなるを得ん。

若し彼の福行を修せば　定んで富樂を招く　應に當に善く了知すべし　福無ければ則ち樂無し。

福は三世の益と爲す　自性愛樂す可し　影の常に相隨ふが如く　彼れ則ち暫くも捨つること無かれ。

諸天の福若し滅ぜば　久しからずして則ち退墮せん　是の故に福行に於て　應に相續して修作すべし。

福無ければ艱辛多く　常に下劣の處に生ぜん　善無くして樂果を希ふは　沙中に酥を求むるが如し。

愚夫は心に誑らかされ　常に福業を離る　既に善法を修せず　罪惡常に增長せん。

現生に衆善を修せば　福の行く所に隨つて生ず　是の因緣を以ての故に　後に天中に生るゝを得ん。

若し樂ふて福業を修せば　衆人に尊奉せられ　身に諸の逼迫を離れ　其の心常に安靜なり。

善人は善法を行じ　樂中の妙樂を獲　彼の清淨の因に由り　當に菩提の道を得べし。

是の故に諸の有情　福業を勤修せよ　倏爾として無常至らば　定んで他の所有と爲らん。

【五八】梵志。梵語 brahmacārin の譯。梵天の法を志求するの意。婆羅門四時期の一。

諸惡は淤泥の如く　少分も著すべからず　當に獨り山林に處り　妄を捨て寂靜を求むべし。
善く無垢行を修せば　則ち諸の垢染を壞し　唯だ空閑に依止せば　能く欲の境界を超へん。
[五六]世・出世の法に於て　垢を離れ所著無く　苦樂を平等に知れば　此れを說いて寂靜と名づく。
五欲を捨離し　足るを知りて希求無く　清淨にして活命せば　此を說いて寂靜と名づく。
常に諸の憒鬧を遠ざけ　非處に遊止せず　單己にして修行せば　此を說いて寂靜と名づく。
永く貪欲を絕ち　則ち諸の憂喜無く　身・語・心を清淨にするを　此れを說いて寂靜と名づく。
勝劣等の法に於て　心高下を生ぜず　智を以て平等に觀ずれば　此れを說いて寂靜と名づく。
善不善の行に於て　咸く其の業報を知り　世間の法に著せざれば　此れを說いて寂靜と名づく。
正慧を發起し　常に欲の過失を念じ　受所生を了知せば　此れを說いて寂靜と名づく。
善く諸根を調伏し　時方を知りて法を說き　彼の輪廻の因を怖るれば　此れを說いて寂靜と名づく。
自身の相を了知し　諸根の散亂を除き　常に山林に依止せば　此れを說いて寂靜と名づく。
正念精進に住し　常に諸惡を離れんと思ひ　園林に遊戲せざれば　此れを說いて寂靜と名づく。
一切の煩惱を斷ずること　火の林木を燒くが如くなれば　是を名づけて沙門と爲し　彼は諸欲に著せず。
若し世俗の事を樂はゞ　常に聚落に遊止し　愚癡にして人を誑かし　自から法に依りて住すと稱せん。
清淨の阿蘭若にも　心に愛樂を生ぜざれ　此れは唯だ離貪者の　居る所の境界なり。
若し五欲に耽著し　好んで世の言論を說けば　當に知るべし是の如き人は　彼に則ち[五七]住すること能はず。

【五六】世・出世。世間出世間の略。訶厭五欲品第七の下を見よ。

【五七】住の字。忍徵師校刻本に依る。原本には往。

む。
慢の過慢の相に於て　善く能く分別して說き　自他實の如くに知れば　比丘の智者と爲す。
智無く心散亂し　我慢忿毒を懷き　名利を恃みて醉傲なれば　彼に何ぞ寂靜有らん。
名行と相應し　善く智の境界に住し　生死の過患を怖るれば　出家の果利を具す。
智の境界に住するに由り　自性他性　道非道も亦然り　及び善惡の業報を了す。
苦樂の二邊を離れ　彼の非道を行ぜず　在家の纏縛を捨つれば　安隱にして憂苦無けん。
比丘僧房に住して　則ち散亂を生じ　世俗と殊ならざれば　沙門の法を損壞す。
若し山林に棲止し　人の毀謗を爲さず　常に定を習ひ經を持せば　意に則ち散亂無けん。
若し樂うて僧房に在り　多貪にして積畜を求むれは　其の心暫暇あらず　以て壽命を損ふに至る。
命の堅に非ざるを悟らざれば　快樂亦隨つて滅じ　現在の因を顧みずして　後世の樂を求む。
心に希望起らざるを　是を離貪者と爲す　少欲にして知足なれば　彼は[55]沙門果を得ん。
樂うて山林に依止し　諸の禪定を修習し　常に定の功德を讚せば　能く諸の過患を離れん。
一切の合和を離れ　境の僞に牽かれざれば　善く彼の貪欲を斷ずること　火に乾薪を焚くが如し。
若し樂うて寂靜に居せば　則ち三有の海を怖る　此の淨身の比丘は　房舍の累する所に非ず。
若し樂うて僧坊に住するも　唯だ貪愛の增長せば　此世他生に於て　何に由つてか能く出離せん。
若し樂ふて僧坊に住するも　多く知識を追求し　常に諸惡を造作せば　後に則ち惡道に墮せん。
若し人明慧を具し　能く寃親の想を離るれば　則ち彼の對待無く　其の心常に寂靜なり。

【五五】沙門果。沙門は梵語(śrāmaṇa)。勤息と譯し、道を勤修し煩惱を息むるの義、沙門果とは沙門の行を修せしものゝ得果をいふ。

す。

若し欲境來り侵せば　之を捨つること熾火の如くなれ　此の護戒の比丘は　[52]摩尼の無垢なるに等し。

内外悉く清淨に　智德もて身を嚴る　此の梵行の比丘は　戒衣の覆ふ所なり。
世間の法に著せず　須彌の動ぜざるが如くなれば　此の寂靜の比丘は　一切咸な恭敬せん。
城邑聚落に入るも　三晝夜を逾へず　此の解脫の比丘は　常に巖谷に居るを樂ふ。
極めて貪欲の罪を怖れ　定を修し散亂を除けば　此の單已の比丘は　寂然として心動ぜざらん。
惡知識を遠離し　貪愛を泯絕せば　此の離染の比丘は　諸の所作に著せざらん。
常に親朋を遠離し　習定し或ひは讀誦せば　此の出離の比丘は　則ち諸の苦難を脫せん。
少欲にして知足し　勤修して懈怠無ければ　此の精進の比丘は　能く諸の魔業を壞せん。
比丘は山谷に棲み　諸の貪求を遠離す　云何んが袈裟を披て　奴の如くに活命するや。
又彼の持戒の人は　天・龍常に恭敬す　善法の親しむ可き無ければ　池涸れて鵠去るが如し。
若し能く貪欲を離るれば　永く諸の過患無く　樂ふて王臣に親近せば　則ち諸の憂怖を生ぜん。
阿蘭若處及び　曠野塚間　藤蘿山谷中に於て　心を息して　[53]宴坐せよ。
若し禪定を修せず　唯だ飲食を營求せば　當に知るべし是の如きの人は　則ち諸の餓鬼に同じ。
定を離垢の樂を爲すは　智者の說く所なり　若し禪定を離るれば　餘には則ち少樂も無けん。
劣慧愚癡の人は　則ち能く修習せず　世間の飲食に著す　彼は則ち自ら欺誑するなり。
欲境の爲に牽かれ　心に復た愛樂を生ぜば　不善の法を增長し　生天の行を破壞す。
若し人法師に於て　信解せば　[54]我慢を除き　精進心を發起し　憶持して忘れざらしむ。
是の法を聞くに由るが故に　彼に依りて是の如く說き　復た能く他人をして　我慢を生ぜざらし

【五二】摩尼。梵語 (mani) 珠の總稱。

【五三】宴坐。梵語 pratisamlayana の譯。寂然安息の貌をいふ。

【五四】我慢。敎示衆生品第十四の下を見よ。

常に糞掃衣を持し　唯だ一の破鉢を畜ひ　不實根蔬を飡へば　彼の樂は佛に讃せらる。
身語心を清淨にし[四九]常に正命を行じ　樂うて諸の禪定を修せば　菩提に趣くこと遠からず。
常に曠野に棲止し　心に放逸を生ぜず　唯だ淨く梵行を修せば　菩提に趣くこと遠からず。
五欲を棄背し　足るを知りて希求無く　常に寂靜の心を生ぜば　菩提に趣くこと遠からず。
邪活命を行ぜず　煩惱の塵垢を離れ　其の心虛空に等しければ　菩提に趣くこと遠からず。
佛諸の法律を說きたまふ　心に愛樂を生ぜざれば　彼の梵行を修せず　寂靜の道を誹謗す。
下劣の人に習近し　戒法を遠離せば　眞實の正見を棄て　諸定を修するを樂はず。
彼の[五〇]掉擧に由るが故に　作意して破壞し　彼の對治の法を離る　何に由つてか禪定を得ん。
自分の善法を離れ　邪師事業を樂はゞ　彼の二皆破壞し　決定して惡道に墮せん。
比丘の形相を捨て　俗形の服に改易せば　人の爲に輕笑せられ　世に處して常に貧乏ならん。
彼の下劣の愚癡は　自ら所學を矜誇し　己れの善業を棄捨し　樂うて非法を行ず。
俗に返りて自ら濟すに由り　則ち善名聞を失し　爲に彼の諸の善人　之を棄つること草芥の如し。
樂ふて諸の惡業を造れば　則ち彼の正見を壞す　此の破法の比丘は　其の心常に諂詐なり。
常に妙飲食を貪り　欲事に樂著せば　此の惡行の比丘は　袈裟を著したる賊と名づく。
曆象星宿を窮め　占相等の事を說き　此の世俗の比丘は　王者に親近せんと樂ふ。
醫方彩畫を習ひ　非理の事を結構し　此の險惡の比丘は　常に衣食を營務す。
誦經・習定を厭ひ　利養名聞を貪れば　此の假名の比丘は[五一]久しからずして當に自損すべし。
多くの惡友に狎近し　方術燒金を求むれば　此の非法の比丘は　彼は則ち自ら損滅せん。
若し彼の欲行を離るれば　則ち諸の惡友を遠ざけ　麨を食ひて而も足るを知れば　亦熱惱を生ぜ

【四九】常の字。忍徵師校刻本に依る。原本には當。

【五〇】掉擧。十纏の一。教示衆生品第十四の下を見よ。

【五一】久の字。忍徵師校刻本には求に作る。

諸法律儀を誑らかせば　業に隨つて而も自ら受く　業網に纒縛せられ　彼は唯だ極苦のみ有らん。

善法の衣を著せざれば　裸形の醜惡なるが如く　後に地獄の中に墮し　種々の治罰を受けん。

衆善の莊嚴無ければ　唯だ苦惱逼迫し　是の如き破戒の人は　速やかに惡道に趣かん。

謂く破戒に由るが故に　諸の善行を修せず　獄火は極めて燒然たり　決定して能く免るゝこと無けん。

內に戒法に安住せば　外に諸の威儀を具す　此を捨つれば皆邪命し　則ち出離するに由る無し。

彼の晝夜の中に於て　諸の不善を增長し　愚癡惡行の人は　戒寶を毀壞す。

諸法皆空なるを聞き　意に堅く持して捨てず　正念思惟に住するを　善く戒を護る者と爲す。

戒は能く諸罪を遠ざけ　善人は常に奉持す　破戒は垢穢の如く　諸の造惡者を縛す。

若し禁戒を毀てば　唯だ罪と相應す　彼則ち[47]焰摩羅の使者に　親近するを樂ふなり。

愚癡無戒の人は　增上の散亂を起し　相續して諸罪を造り　地獄を去ること遠に非ず。

若し樂うて衆惡を造れば　彼は唯だ自ら損害す　今果は昔因の如し　云何ぞ後悔を生ずるや。

罪河は極めて深廣にて　波濤常に洶涌し　諸の罪人を漂溺し　晝夜に諸の苦を受けしむ。

若し彼の淨戒を離るれば　則ち白淨の法を捨つ　後に縱ひ人身を得るも　心に常に放逸を生ぜん。

戒に於て全く毀犯し　賢善の人を[48]憎嫉すれば　是の如き惡比丘は　決定して惡道に墮せん。

若し樂うて淨戒を持し　常に諸道に遊履せば　是の人久しからずして　出世眞常の樂を得ん。

善く齋法を堅持し　諸の經典を讀誦せば　其の心常に寂靜に　煩惱と相應すること無けん。

三有海の中に於ては　戒を以て船筏と爲す　當に教に依つて奉行すべし。　能く彼岸に到らん。

【四七】焰摩羅。地獄品第十六の下を見よ。

【四八】憎の字。忍徵師校刻本に依る。原本には增。

智慧深きこと海の如く　毀譽せられて動ずること無く　心に恚愛を生ぜざるを　眞實の比丘と名づく。

善く微妙の法を宣べ　垢無く所著無し　智慧力堅固にして　時に依りて疲懈すること無し。

欲界・色界　及び彼の無色界の　種々の因緣生を知るを　是を具智者と名づく。

能く欲の過失を離れ　世の言論に著せず　我は說く彼の比丘　欲境を見ること毒の如し。

彼の正慧を具するに由り　欲を觀ること淤泥の如し　此を解脫の人と爲し　淪溺を免るゝを得。

樂うて諸の禪定を修し　懈怠を遠離し　常に經典を讀誦し　諸の衆生を饒益せよ。

大辯才を具足し　問に隨つて答を爲し　諸法の次第を知り　顚倒の分別を離れよ。

善く僧伽の事を營み　諸の財物を護惜せば、身に疲勞を生ぜず　亦悔惱有ること無し。

己れの名稱を求めず　亦福報を希はず　我は說く彼の比丘は　則ち一切の縛を離る。

又彼は淨戒を持し　天中に生ずるを求めず　所作の善因を以て　唯だ菩提の果に趣く。

常に正行を修するを樂ひ　惡友に親近せず　我は記す是の如きの人は　則ち諸の咎を離るゝを得ん。

善く慈觀を修し　精進にして心質直に　少しも律儀を犯すこと無ければ　菩提を去ること遠からず。

[四五]生・老・病・死を怖れ　輪廻の苦を厭離し　散亂を除き禪を修せば　菩提を去ること遠からず。

[四六]自性空に依止し　無常生滅を悟り　次第に諸禪を修せば　苦の邊際を盡すことを得ん。

又彼の毀戒の人は　佛法の害と爲す　外に袈裟を服すと雖も　內に德の蘊する所無し。

猶ほ彼の聚沫の如く　怯弱にして堅固に非ず　是の如き虛行の人は　比丘の名字を竊むなり。

毀戒地獄の人は　僧寶の擯する所と爲り　自心に由りて誑らかされ　身壞して惡道に墮せん。

【四五】生老病死。これを四苦といふ。

【四六】自性空。外道は諸法各自に不變不易の性ありと說き、佛敎は諸法は無自性にして空なりと說く。

よ。

云何ぞ諸の比丘　身を以て所質と爲し　諸惡趣の因を造り　[42]僧寶の名稱を壞するや。
名利の境界を貪り　女人に習近せば　彼は俗に非ず僧に非ず　法中の賊と爲す。
王臣の威勢を恃み　恣に酒饌を噉へば　[43]假名の比丘と爲し　施者を誑惑するなり。
善攝方便無く　同じく俗務を營辨し　常に王城に依止せば　蛇の林壑に處るが如し。
若し厭離を生ぜざれば　念念に常に增長せん　當に欲愛の纒を捨て　樂うて寂靜に依止すべし。
諸の煩惱惑業は　見に於て治斷せらる　色等の蘊を解脫し　應に當に善く修作すべし。
樂うて諸の禪定を修し　諸法を覺悟せば　善く眞實の相に達し　最上の安隱を得ん。
廣大の慈心を發し　正法を勤求し　自身幻の如しと了するを　眞實の比丘と名づく。
常に　[44]淨善の心を生じ　貪欲忿恚を除き　顚倒の分別を離るゝを　眞實の比丘と名づく。
一切の結縛を斷じ　一切の和合を離れ　常に諸の衆生を愍れむを　眞實の比丘と名づく。
善く自心を調伏せば　欲境も亂すこと能はず　眞金の垢を離るゝが如くなるを　眞實の比丘と名づく。
諸欲の境界に於て　愛非愛を起さず　彼の心に所著無きを　眞實の比丘と名づく。
諸の戒法を具足し　諸根の怨賊を降し　下劣の譏謗を離るゝを　眞實の比丘と名づく。
諸の飲食に耽らず　常に明慧を發生し　樂うて諸法を研究するを　眞實の比丘と名づく。
曠野塚間に於て　草を敷いて坐臥し　心に疲倦を生ぜざるを　眞實の比丘と名づく。
諸惡の因　定んで其の苦報を受くるを了知せば　則ち彼の垢濁を離るゝを　眞實の比丘と名づく。
意根清淨なるに由り　諸惡の險難を離れ　輪廻の道を超出するを　眞實の比丘と名づく。

【四二】僧寶。佛寶、法寶と共に三寶の一。
【四三】假名の比丘。實德無くして但だ名字のみある比丘。
【四四】善の字。忍徵師校刻本には喜に作る。

若し明智を具し　怖畏歡喜を離れ　二に於て所著無ければ　彼は阿羅漢の如し。
自他衆類に於て　如實に老死を知れば　天人咸な歸信し　彼は阿羅漢の如し。
常に梵行を修するを樂ひ　三衣[37]を離れて有無く　少を得て以て足ると爲せば　彼は阿羅漢の如し。
美味に耽嗜せず　時に依りて一坐食し　名利の垢染を離るれば　彼は阿羅漢の如し。
悲・捨[38]と相應し　衆罪を覆藏せず　過失の林を焚燒せば　彼は阿羅漢の如し。
僧伽[39]の軌則に違し　其の心常に懈怠し[40]　勇悍精進無ければ　此れは則ち比丘に非ず。
佛諸弟子を誡めたまひ　應に臥具を畜ふべからずと　若し懈怠を樂ふ者は　何ぞ能く安樂を獲ん。
懈怠の一種に由り　諸の過患の本あり　流轉輪廻に於て　無量の苦惱を受けん。
若し懈怠有れば　衆善く則ち生ぜず　袈裟[41]服を被ると雖も　此れ則ち比丘に非ず。
若し定・慧を修せざれば　何に由つてか諸漏を盡さん　唯だ假の形相を具するのみ　此れ則ち比丘に非ず。
僧坊に安住するを樂ふも　學法の境界を離れ　酒色に耽味せば　此れ則ち比丘に非ず。
若し諸の魔縛を斷ぜんとせば　衆罪業を遠離し　應に毀禁と共に住して　飲食を同じうすべからず。
又破戒の比丘　衆の飲食を受用すれば　彼は則ち毒を服するが如く　洋銅を飲むに異ることなし。
彼は勝能無きに由り　衆同分に預らず　後に地獄の中に墮し　食に於て得べからず。
若し諸の煩惱を斷ぜば　蛇の其の室を出づるが如し　女人を見るを樂はず　正命に依りて乞食せ

【三五】毘鉢舍那。梵語(vipaśyanā)。觀と譯し、又見、種々觀察ともいひ、事理を觀見すること。
【三六】奢摩多。梵語(śamatha)止と譯し、寂靜、能滅ともいふ。心を攝して散亂をはなること。
【三七】三衣。僧伽梨、鬱多羅僧、安陀會の三をいふ。
【三八】悲・捨。慈悲と喜捨。
【三九】僧伽。梵語(saṃgha)。常には略して僧といひ、和又は衆と譯す。僧團をいふなり。
【四〇】悍の字。忍徵師校刻本に依る。原本には捍。
【四一】袈裟。梵語(kaṣāya)。

苦樂精麁に於て　皆所著有ること無く　此の最上の比丘は　世間を觀ること焔の如し。
心に散亂を生ぜず　正法を樂求し　本と白業を勤修せば　彼は[28]阿羅漢の如し。
善知識に近づくを樂ひ　親屬を遠離し　在家の垢染を捐つれず　彼は阿羅漢の如し。
慧寂なるに由りて諸根　境界に著せず　行くに二足指を視れば　彼は阿羅漢の如し。
王の履道　城邑四衢巷に詣らず　販賣を譏呵せられずと僞せば　彼は阿羅漢の如し。
歌舞を觀ず　相鬪諍するを樂はず　曠野空閑に住せば　彼は阿羅漢の如し。
一日唯だ一食　未だ得ざるを希求せず　分量を知りて止足せば　彼は阿羅漢の如し。
常に[29]糞掃衣を持し　上妙の服を樂はず　食行と相應せば　彼は阿羅漢の如し。
諸業を造らざるに由り　一切の虚妄を離れ　起らず亦樂はざれば　彼は阿羅漢の如し。
恚怒の相を起さず　貪欲愚癡を離れ　諸の惡法を解脱せば　彼は阿羅漢の如し。
一切の瞋惱を離れ　諸の[30]結使を超越し　正念思惟に住せば　彼は阿羅漢の如し。
[31]八聖道を修習し　善く寂靜に住し　諸の煩惱の怨を破せば　彼は阿羅漢の如し。
寂靜の根堅固に　貪欲の淤泥を超へ　心を一境性に住せば　彼は阿羅漢の如し。
自の[32]經行所　及び他の遊止處に於て　知り已りて　實の如くに說けば　彼は阿羅漢の如し。
[33]漏・無漏の法　皆因緣より生ずるを知り　決定して疑有ること無ければ　彼は阿羅漢の如し。
[34]惛沈・睡眠を離れ　懈無く時に依りて起ち　諸の梵行を勤修せば　彼は阿羅漢の如し。
阿蘭若に住するを喜び　[35]毘鉢舍那　[36]奢摩他の諸定を修せば　彼は阿羅漢の如し。
智者は正理に依り　常に林野に棲止し　禽の空虚に處るが如くなれば　彼は阿羅漢の如し。
信施の飲食を受け　平等に僞に法を說き　根に隨つて煩惱を破せば　彼は阿羅漢の如し。
善く眞實の道を知り　相應して心次第に　能く彼岸に到れば　彼は阿羅漢の如し。

【二八】阿羅漢。梵語（arhan）。略して羅漢ともいひ、應供、殺賊、無生等と譯す。應供とは世間の勝供養を受くるに應ずるをいひ、殺賊とは一切の煩惱の賊を殺害せるをいひ、無生とは再び諸界諸趣に生ぜざるをいふ。小乘四果の一、又如來十號の一。今は前者なり。

【二九】糞掃衣。梵語（pāṁsu=kūlika）。納衣ともいふ。巷野より拾ひ集めし布にて作りし衣。

【三〇】結使。結も使も共に煩惱の異名。煩惱は心身を繫縛し、苦果を結成し、衆生を驅使する義より出づ。

【三一】八聖道。聖道は梵語 āryamārga の譯。聖者の道の意。又八正道ともいふ。一に正見、二に正思惟、三に正語、四に正業、五に正命、六に正精進、七に正念、八に正定なり。

【三二】經行所。經行は行道ともいひ。禪定の中間に一定の場所を往來すること、經行所とは其の場所なり。

【三三】漏・無漏。有漏と無漏の略。漏は煩惱の異名、伏除煩惱品第一の下を見よ。

【三四】惛沈・睡眠。共に十纒の一。捨離懈怠品第二十の下を見よ。

正法を聞くを樂ひて　流轉の因に隨はず　慧を以て善く揀擇し　常に殊勝の行を修せよ。
欲境熾然なりと雖も　彼の心寂靜なるに由り　驅策すること僮僕の如くなれば　則ち諸の苦惱無けん。
若し諸根調順せば　則ち流蕩を生ぜず　欲の纒縛を離るゝ者は　[二六]牟尼と異ること無し。
善人は金寶の如く　見る者咸な貴重す　樂ふて寂靜の行を修し　他をして喜心を生ぜしむ。
[二七]阿蘭若に棲止し　樓觀に居るを樂はず　足るを知りて毳衣を持し　常に乞食を行ぜよ。
善く身・語・心を修し　苦樂の想を生ぜざれば　分別の執著を離れ　最上の安隱を得ん。
諸の禪定を習ふに由りて　能く彼の魔怨を破し　常に眞實の言を以て　群品を引導す。
善く智慧の車に乘りて　六根の貪使を摧けば　當に知るべし是の如きの人は　菩提の道に近づくことを得ん。
樂ふて阿蘭若に住せば　則ち永く諸の過を離れ　風の空中に於て　雲を吹きて障礙無きが如し。
清淨の三業を以て　諸の勝行を勤修せば　眞實の正見を具し　諸の魔敎を破壞せん。
彼の貪等の行に於て　本性にして染せず　常に慈悲心を起すは　是れ比丘の作す所なり。
色等の境　彼の纒縛の因と爲るを了知せば　是の人憂惱無く　寂滅の處に至るを得ん。
諸の因緣の法　善惡皆決定せるを知り　解脫の法を聞くを樂はゞ　貪に於て則ち著せず。
未修の善業に於て　常に愛樂を生ぜば　是の人月光の如く　本性淨無垢なり。
罪惡の法を焚燒すること　火に乾薪を投ずるが如くなれば　諸の苦因を棄背し　三有に於て勝と稱す。
解脫を志求し　世間の法に著せざれば　諸の輪廻を超出すること　鳥の空に隨ひて往くが如し。
如實に其の因を知り　決定して果を受くれば　彼は三有の中に於て　是を眞の解脫と名づく。

【二六】牟尼。梵語(muni)。寂默、寂靜等と譯す。
【二七】阿蘭若。梵語(aranya)。又阿練若に作り、略して蘭若ともいひ、無諍・空寂、最閑處等と譯す。

爲す。
若し嬉戯に樂著せば　心に暫捨をも生ぜず　諸の病惱を增長せん　斯れ則ち實に樂には非ず。
善く四諦の法を解し　及び施等の行を修せば　當に知るべし是の如きの人は　最上の安隱に住せん。

[20]教誡比丘品　第三十

常に[21]慈忍を行ずるを樂ひ　諸の[22]有情を害せざれば　一切の衆生之を敬すること　其の父の如くなるを得ん。
身業常に清淨にして　諸根善く相應せば　心に慳貪を生ぜず　[23]不與取を遠離せん。
彩繪の女人に於ても　亦觀視すべからず　堅固の欲想を斷ずるを　世の解脱者と爲す。
樂ふて諸の禪定を習せば　諸の憂畏を離るゝを得　煩惱の蛇に觸れず　金を視ること瓦礫の如し。
苦樂安危　及び盛衰等の事に於て　其の心傾動せざるを　此を名づけて比丘と爲す。
善く諸根を降伏し　境の僞に嬈はされざれば　智を以て如實に知り　寃親に於て平等なり。
若し明智を具足し　欲境を了すること毒の如くなれば　我れ記す是の如きの人は　當に菩提の道を得べしと。
眞實の正見を具し　刹那の生滅を悟れば　安住すること　[24]須彌の如く　輪廻の海を超出せん。
草及び[25]栴檀に於て　等視して差別あること無く　珍饍及び名衣にも　皆愛樂を生ぜざれ。
利養名聞に於て　之を觀ること熾火の如く　心に常に止足を生じ　草に依りて坐臥せよ。
過・現の所作の　種々の諸の事業に於て　顚倒の思惟を離るれば　則ち染著を生ぜず。

---

thatā の譯。眞とは眞實、如とは如實の義、諸法の體性虚妄を離れて眞實なるを眞といひ、常住にして不變不改なれを如といふ。

【二〇】比丘。梵語(bhikṣu)。又苾芻等に作り、乞士と譯す。出家して具足戒を受けしものゝ通稱。

【二一】慈忍。慈悲と忍辱。

【二二】有情。衆生の義なり。

【二三】不與取。他の與へざるを取ること、即ち偷盜の異名なり。

【二四】須彌。伏除煩惱品第一の下を見よ。

【二五】栴檀。訶厭五欲品第七の下を見よ。

愚人の諸欲に著すること　蛾の燈光を愛するが如く　大怖畏を知らず　畢竟して少樂も無し。
佛は眞實の道を說きたまふ　謂く苦・空・無常なり　及び我作者無くんば　能く輪廻を免脫せんと。

智境は本と平等　一切は皆心の造　此に於て證解し已る　故に三種を說かず。
飲食の過患を離れ　邪活命に依らざれば　無分別智を起し　[一一]出世間の法を證せん。
善く眞實の智に住し　[一二]十六行相を作せば　然る後に能く了知し　諸法の次第に達せん。
永く三毒の垢を離れ　三有の逼迫を出で　三惡趣を[一三]超越するを　是を[一四]須陀洹と名く。
不善法を因と爲せば　定んで惡道に墮す　[一五]解脫の法に依るに由り　須陀洹果を得。
善く諸定を修習せば　[一六]輕安を引生し　純淨の業相應し　三有の海を越ゆるを得ん。
永く諸の疑惑を斷ぜば　貪及び不害を離れ　白業の船舫に乘り　能く彼岸に到らん。
謂く[一七]有爲の諸法は　因緣より生起す　[一八]彼の四聖諦の　染淨の因果たるを知れ。
若し四諦に了達せば　決定して解脫を得　愚夫は欲境に著し　三有に隨つて旋轉す。
若し能く貪欲を離るれば　則ち寂靜の道に住す　此の道は上に過ぐる無く　智者の遊履する所なり。
若し人諸佛に於て　常に淨心に恭敬せば　生生に快樂を獲ん　佛を離るれば解脫無し。
若し人正法に於て　常に淨心愛樂せば　生生に快樂を獲ん　法を離るれば解脫無し。
若し人衆僧に於て　常に淨心に供養せば　生生に快樂を獲ん　僧を離るれば解脫無し。
若し人四諦に於て　常に淨心信解せば　生生に快樂を獲ん　此を離るれば解脫無し。
若し人聖道に於て　常に淨心修習せば　生生に快樂を獲ん　此を離るれば解脫無し。
若し[一九]眞如を證するを求むれば　當に淨慧に安住すべし　遊戲に樂著せざれ　此れを天中の天と

【八】四諦。寂靜品第二十八の下を見よ。
【九】輪廻。說法品第二の下を見よ。
【一〇】無爲、不放逸品第六の下を見よ。
【一一】出世間の法。有爲の迷界を出離する道、
【一二】十六行相。又は十六行、二八行、十六諦觀等ともいひ、見道に於ける第一苦法智忍より第十六道類智忍に至る十六心に於いて、四諦を觀ずる十六種の觀法をいふ。
【一三】超の字。忍徵師校刻本に依る。原本には趣。
【一四】須陀洹。梵語 (srota-āpanna)。預流果と譯す。小乘四果の一。凡夫を去つて初めて聖道の法流に入るの意。即ち三界の見惑を斷盡せる位なり。
【一五】解脫の法。說法品第二の下を見よ。
【一六】輕安。梵語 prasrabdhi の譯。心所の名。惛沈に對し身心輕利安適なるをいふ。
【一七】有爲。無常品第五之餘の下を見よ。
【一八】四聖諦。四諦に同じ。四諦はみな聖なる眞理なれば一々に聖諦といふ。世間の因果を染、出世間の因果を淨となす。
【一九】眞如。梵語 bhūta-ta-

卷の第九

寂靜品 第二十八

若し諸の[一]煩惱を盡せば　則ち最上の樂を得ん　此れを[二]寂靜の[三]道と爲し　智者は實の如くに說く。
又彼の諸の如來は　常に寂靜の法を讃す　不滅の處に至るを得ば　諸苦則ち生ぜざらん。
若し人[四]放逸を離れ　貪欲の過患無く　樂ふて寂靜の行を修せば　[五]菩提を去ること遠からず。
若し能く貪愛を離れ　境に於て心亂れず　及び惡知識を捨つれば　菩提を去ること遠からず。
若し能く善く觀察し　善不善に著せざれば　[六]輪廻の怖畏を離れ　菩提を去ること遠からず。
若し能く諸の惑を斷じ　懈怠の垢穢を除き　自他の無我なるを了せば　菩提を去ること遠からず。
三毒の過患を離れ　諸根をして寂靜ならしめ　明かに[七]四諦を了せば　菩提を去ること遠からず。
精麁の飲食に於て　貪厭を生ぜず　智境の兩相如なれば　菩提を去ること遠からず。
苦樂の二種に於て　亦執著を生ぜざれば　諸の怖畏を離るゝを得　菩提を去ること遠からず。
若し人諸の罪を怖れば　當に諸の放逸を離れ　善く菩提に趣くを求め　最上の寂靜を得べし。

聖道品 第二十九

若し人[八]四諦に於て　智を以て善く觀察せば　諸の[九]輪廻を解脫し　[一〇]無爲の彼岸に趣かん。
若し正思惟無く　愚癡にして諸欲に著し　生死を厭離せざれば　輪廻の爲に縛せられん。
廣大の苦を畏れず　出離の方便無ければ　欲箭の爲に中てられ　當に惡道に墮すべし。

【一】煩惱。伏除煩惱品第一の下を見よ。
【二】寂靜。煩惱を離るゝを寂といひ、苦患を絕つを靜といふ。卽ち涅槃なり。涅槃は梵語（nirvāna）。滅、滅度、寂滅、不生、無爲、安樂、解脫、圓寂等と譯す。この經中處々に、最上樂、不生處、不滅處、眞常、眞常の果、最上寂靜等とあるは、みなこの寂靜涅槃の謂なり。
【三】道の字。忍徵師校刻本に依る。原本には迺。
【四】放逸。不放逸品第六の下を見よ。
【五】―【六】菩提、輪廻。共に說法品第二の下を見よ。
【七】四諦。梵語catvāri ārya-satyāni の譯。具に四聖諦、四眞諦と譯す。諦は審實不虛の義。四諦とは苦(聖)諦、集(聖)諦、滅(聖)諦、道(聖)諦なり。世間は四苦八苦の相にして實に苦なり、苦の因は集にして卽ち內の眼等六處より起る愛著によりて苦の果を感ず。彼の愛著煩惱を解脫し斷捨すれば卽ち苦滅す、苦を滅するの道は卽ち八聖道なり。この四の事理何れも審實にして虛ならざるなり。この中苦諦、集諦の二は世間の因果、滅諦と道諦の二は出世間の因果なり。

善く諸の定を堅固にせば　則ち能く意馬を調へ　永く諸の憂染を離れ　最上の安住を得ん。
善く定を修する者は　食を離れて止足し　招く所の殊勝の報は　此を能く說き盡すこと無し。
是の如く善く修習し　心を一境性に住せば　能く生死の流を超へ　不滅の處に至るを得ん。

[七〇]勝慧品　第二十七

慧力を先と爲すに由り　樂ふて正法を勤求せば　定と常に相應し　母の子を愛するが如し。
又世間の父母は　[七一]徧く隨逐すること能はざるも　彼は　[七二]五趣の中に於て　一切皆救護す。
慧山極めて高峻なれば　戒水常に清淨に　三有の過患に於て　一切皆明らかに見る。
若し眞實に　眼根所緣の境を了知し　智を以て所依と爲せば　能く　[七三]三有の海を渡る。
善く施・戒・定を修するに　彼の智を說いて先と爲す　智の持戒を樂ふに由り　則ち能く惡趣を免がる。
若しは眼の所觀の境に　慧に由りて染を離る　故に如來の說きたまふ所なり　善く　[七四]八聖道に住せん。
苦等の　[七五]四諦に於て　最初に開示するに　增上の慧力に由り　愚夫の常見を破せん。
智は彼の利劍の如く　貪愛の藤蔓を斷じ　生等の纏縛及び彼の過失の聚を離る。
智は勝れたる甘露と爲す　是れ出世の法財　最上の善知識第一の寶藏と爲す。
智・戒を修せる者舊は貪愛の疑惑を離れ　常に寂靜に依止し　眞實の道を開示せん。
慧は彼の金剛の如く　力能極めて堅利にして　諸の煩惱を摧壞し　大智の車に乘ぜしむ。

【七〇】勝慧。慧は梵語Prajñā(般若)の譯。又智慧、明等と譯す。般若は一切諸智慧中無上無比無等の故に勝慧といふ。六度の一。
【七一】徧の字。忍徵師校刻本に依る。原本には偏。
【七二】五趣。不放逸品第六の下を見よ。
【七三】三有海。伏除煩惱品の下の三有及び厭離自身品第三の下の有海を見よ。
【七四】八聖道。教誡比丘品第三十の下を見よ。
【七五】四諦。寂靜品第二十八の下を見よ。

〔六一〕八聖道を捨離せば　淨智增長せず　唯だ彼の精進の力のみ　安隱の處に至るを得。
若し人精進を具せば　王の力自在なるが如し　〔六二〕羅漢に精進無く　〔六三〕菩提を成ずること能はず。
是の功德を了知せば　諸根散亂せず　精進心を發起せば　第一最勝と爲す。
淨智現前するを得　常に正念を生じ　彼の老死を遠離し　〔六四〕眞常の果を證するを得ん。

〔六五〕禪定品　第二十六

若し人諸の定を修せば　慧に於て著せず　應に常に一心に　清淨の意樂を生ずべし。
善く心を一境に住せば　相違の過失無く　諸の怖畏を解脫す　此れを說いて安樂と爲す。
若し心一境に住せば　則ち諸の疑惑を離れ　清淨なること眞金の如し　此れを說いて安樂と爲す。
若し人心寂靜なれば　諸根散亂せず　決定して菩提に趣く　此れを說いて安樂と爲す。
心一境に住するに由り　諸の定を修習するを樂ひ　是の人常に〔六六〕三摩地の快樂を獲得せん。
獨り空閑に處るを樂ひ　常に彼の勝定を修せば　彼の妙樂を了知して　世間を出過せん。
是の如き清淨の心もて　常に一境に安住せば　過失の網を解脫し　〔六七〕最上の寂靜に到らん。
若し心を一境に專らにし　善く〔六八〕五根を制し　智水を以て滅除せよ　愛火に燒害せらるればなり。
常に現前して　清淨殊妙の樂に安住するは　彼の愛を解脫するに由り　受用するに而も盡くること無し。
心に邪曲思惟すれば　處處に生起す　善く住して定を持せる者　常に一境と相應す。
此れは最上の禪定なり　能く〔六九〕涅槃の城に趣き　諸の魔怨を破壞す　是の故に應に修習すべし。

【六一】八聖道。敎誡比丘品第三十の下を見よ。
【六二】羅漢。阿羅漢の略、敎誡比丘品第三十の下を見よ。
【六三】菩提。說法品第二の下を見よ。
【六四】眞常の果。眞實にして常住なる果報、即ち涅槃をいふ。
【六五】禪定。禪は梵語（dhyāna）思惟修、靜慮等と譯す。心一境に定まりて審に思慮すること。定は三摩地の譯語なり。六度の一。
【六六】三摩地。梵語（samādhi）三摩提、三昧等に作り、等至、定、正定、調直定、正心行處等と譯す。即ち惛沈掉擧をはなれて心をして一境に住せしむる精神作用をいふ。
【六七】最上の寂靜。即ち涅槃をいふ。寂靜品第二十八の下を見よ。
【六八】五根。眼、耳、鼻、舌、身根なり。訶厭五欲品第七の下を見よ。
【六九】涅槃。寂靜品第二十八の下を見よ。槃の字は忍徵師校刻本に依る。原本には盤。

忍は妙良薬の如く　能く忿毒を療治す　彼の忍力に由るが故に　展轉して起らしむること無し。
愚夫は明慧無く　盲の觀る所無きが如し　忍辱の燈明を以て　之を引いて正道に登らしむ。
正法の財無きに由り[五四]五趣に於て旋轉す　善く忍行を修する者は　我は說いて富饒と爲す。
忿怒は深き過咎なり　險惡なる曠野の如し　若し人忍行を具せば　彼に於て善く超越す。
若し忍行を修せざれば　正道を迷失す　惡趣の苦を離れんと欲せば　忍に非ずしては何に由りてか免れん。
若し人忍辱を行ぜば　晝夜に安隱を獲　永く諸の憂感を離れ　後世も常に端正なり。
忍は功德の藏たり　善人は常に守護し　意に於て善く調伏し　煩惱に嬈はさるゝこと無し。
忍を生天の梯と爲し　[五五]輪廻の怖畏を出づ　若し能く善く修習せば　[五六]地獄の苦を解脫せん。
忍は功德の水たり　清淨にして常に充滿し　能く[五七]餓鬼の渴を救ひ　[五八]傍生の罪垢を滌ぐ。
若し專ら忍行を修せば　吉祥安樂を獲　等しく諸の有情を視ること　世の慈母の如し。

精進品　第二十五

正法を長養せんが爲に　彼の時及び方を觀じ　勇猛[五九]精進を起して　彼彼の果を求めよ。
若し正法及び　時方の作用を離るれば　彼の精進無きに由り　多く懶墮の事を增さん。
智者は勇[六〇]悍多く　解脫の正法を樂ひ　速かに天中に趣くこと　箭の頃の如く相似たり。
彼の精進の力に由り　善く種々の事を營むに　彼々の所作に於て　皆悉く成就を得。
若し出世の正法　及び世間の義利は　皆彼の精進に由る　此を捨つれば則ち有ること無し。
若し人精進を遠ざくれば　則ち諸の善法を捨て　世の輕嫌する所と爲り　兎影の月を昏するが如し。

【五四】五趣。不放逸品第六の下を見よ。
【五五】輪廻。說法品第二の下を見よ。
【五六―五八】地獄餓鬼傍生。この三を三惡趣といふ。五逆罪十惡業を犯せる者の赴くべき所なり。
【五九】精進。梵語 virya の譯。又勤と譯し、勇猛に善法を修し惡法を斷ずること。六度の一。
【六〇】悍の字。忍徵師校刻本に依る。原本には捍。

し。

若し心に善く修作し　施・戒の寶に依止せば　天上人間に於て　長く殊勝の處に生ぜん。

身に淨戒を持せず　心に正法を樂はずんば　内外に所蘊無し　何に由つてか惡道を免れん。

若し寂靜の法を樂はば　人の恭敬する所と爲り　彼の内外堅固なること　[五〇]金剛の如くにして異ること無し。

[五一]栴檀・沈水香　[五二]怛計・薝蔔華　人天咸な重んずる所なるも　彼の戒香には及ばず。

若し人施・戒を修するも　唯意に生天を樂はば　此れを垢濁の因と爲す　毒を美膳に和するが如し。

是の故に彼の戒に於て　堅く持して出離を求め　破戒の人を遠離すること　毒の如く刀杖の如くなれ。

是の如く善く戒を護らば　人・天の中に往趣す　無戒は衆に嫌はれ　樂を求むるも得べからず。

是の功德を了知して　專心に暫くも捨つること無かれ　第一の救護たる　戒と相似するもの無し。

[五三]忍辱品　第二十四

善く忍に安住するを　第一の莊嚴と爲し　此れ最勝の財たり　世寶の及ぶ所に非ず。

若し人忍行を修せば　世の恭敬する所と爲る　是の故に常に一心に　堅固に修習せよ。

若し人忍行を修せば　忿怒の過失を離れ　此の世佗の世に於て　善人常に稱讚す。

忍財と戒財と及び彼の勝慧の財　是の如き諸の功德は　世間に超過す。

是の故に具智の者は　樂ふて忍辱を行じ　常に諸の衆生に於て　心に厭捨を行ぜざらん。

【五〇】金剛。離惡語言品第十二の下を見よ。

【五一】栴檀・沈水香。栴檀香と沈水香(又沈香ともいふ)

【五二】怛計・薝蔔華。共に香樹の名。薝蔔華は金色華樹といふ。

【五三】忍辱。梵語 kṣānti の譯。諸の侮辱惱害等を忍受して恚恨なきこと。六度の一。

戒は能く彼の樂を生じ　諸の罪垢を棄背す　是の故に常に守護せば　畢竟して憂怖を除かん。
彼の戒の持するに由るが故に　命終に怖畏無く　三惡道中に於て　第一の救護と爲る。
若し人戒を護らざれば　盲の眼目を瞖するが如く　戒に於て清淨ならず　常に下劣の處に生ぜん。
人生の快樂を求むるに　唯だ戒のみ其の本と爲す　戒に於て淸淨ならざれば　後に則ち悔惱を生ぜん。
無戒愚癡の人は　天界に生ずるを得ず　是の故に具智の者は　戒に於て常に奉持せよ。
天中の妙なる五欲は　第一殊勝の樂なり　戒淸淨なるに由るが故に　多果を獲ん。
[四七]彌盧山は金光あるも　戒光復た彼に過ぎ　析きて十六分と爲すも　亦其の一に及ばず。
戒光は常に照明し　眞金の嚴瑩を逾ゆ　皆自らの善業に由り　忉利に生るゝを得るなり。
持戒に三品有り　謂く彼の上中下なり　皆作る所の因の如く　受報も亦是の如し。
彼の戒を持するに由るが故に　則ち放逸を生ぜず　正法に安住し　常に諸の妙樂を獲。
戒は能く諸苦を離れ　常に淨き光明を發し　設ひ百千の日光も　此に類するに能く及ぼすこと無し。
若上品の持戒は　七種の功德を獲　意に隨つて受用せん　[四八]善逝の說きたまふ所なり。
淨戒に依止するに由り　正見常に現前し　人世より天に生ず　斯れ得難しと爲さず。
戒は清涼の觸たり　身に於て捨離せず　愚夫は親近せず　常に諸の熱惱を受く。
若し人淸淨心もて　善く禁戒を獲らば　彼の[四九]七種の財を具し　決定して能く壞すること無し。
若し人淸淨心もて　梵行を修持せば　禽に二翼有るが如く　空を飛びて而も墮ちざらん。
彼の戒を持するに由るが故に　淸淨の果を得　勝中の最勝と爲り　則ち更に上に過ぐるもの無

【四七】彌盧山。無常品第五の下を見よ。

【四八】善逝。梵語 sugata の譯。如實に彼岸に去つて再び生死海に退沒せざるの意。如來十號の一。

【四九】七種財。梵語 sapta dhanāni の譯。七聖財、七德財等とも譯す。信、戒、聞、施、慚、愧、慧の七種の功德財をいふ。

能く諸の有情をして　一切の處に安隱ならしめ　諸の罪行を造らず　天中に生るゝを得。
若し人彼の戒を護り　智を以て善く揀擇せば　彼の晝夜の中に於て　精進して常に退すること無けん。
戒は彼の良馬の如く　善人の乘御する所なり　眞實思惟を以て　樂報に著せされ。
天中に上妙の樂ありて　諸天共に遊戲す　皆持戒に由るが故に　彼に生ずるを得るなり。
天の上妙の[四二]華鬘　天衣にて嚴飾し　諸天共に遊戲す　皆善因の所得なり。
妙蓮華池有り　清凉の香風を生じ　諸天共に遊戲す　皆善因の所得なり。
天上に諸の宮殿あり　衆寶にて莊嚴し　諸天共に遊戲す　皆持戒に由るが故なり。
天中に妙園林あり　衆華悉く開發し　諸の寶山に遊止す　皆持戒に由るが故なり。
彼の淨戒を具するに由り　[四三]三十三天に生ず　人已れの宅に入れば　卽ち諸の憂患無きが如し。
若し人彼の戒を護らば　最上の壽命を得　戒を破れば命終の時　無量の極苦を受けん。
持戒の功德に於て　知り已りて常に愛樂し　善く戒を護る者は　則ち毀犯を生ぜず。
能く彼の戒を護るに由り　善く[四四]忍辱に住し　寂靜の因緣を以て　衆人咸な觀るを樂しむ。
若し淨戒に依止せば　[四五]舡筏に乘るが如く　能く自佗を運載し　三有の海を渡るを得ん。
戒水清凉なるに由り　能く心智を滌ぎ　[四六]閻浮檀金華　諸天來りて奉獻す。
若し人意寂靜に　戒を以て常に莊嚴せば　自在に諸天に生じ　樂を受くること極まり無けん。
廣く勝行を修するに由り　最上の妙樂を受く　諸天に遊戲するは　皆持戒に由るが故なり。
若し彼の淨戒を持せば　階陛を陞るが如く　智力常に相扶け　尊勝の處に生るゝを得ん。
若し人純淨の心もて　戒に於て缺漏無ければ　戒法清淨なるに由り　常に安隱の處に生ぜん。
善く戒を護る者は　常に思惟觀察して　微細の毀犯をも離れ　寂滅の處に至るを得。

【四二】華鬘。無常品第五之餘の下を見よ。

【四三】三十三天。欲界の第二天卽ち帝釋天の異名。須彌山の頂上にあり帝釋天を中心とし四方に各八天あれば三十三天となる。

【四四】忍辱。忍辱品第二十四の下を見よ。

【四五】舡の字。忍徵師校刻本には船に作る。

【四六】閻浮檀金花、閻浮檀は梵語（Jambunada）閻浮は樹の名、檀は河と譯す。閻浮樹の下に河ありこれを閻浮檀といひ、その河中より沙金を出すこれを閻浮檀金といふ。其の色赤黃にして紫焰氣を帶ぶ。閻浮樹の果汁河に落ちて沙を染めて化せしものなりといふ。

若し此の世佗の世にも　戒は其の伴侶と爲り　彼の險惡道に於て　之が爲に依怙と作る。
饑渇の怖畏に於て　第一の捄護と作る　應に當に善く觀察すべし　此を捨てゝ何の歸趣ぞ。
寧ろ利なる刀劍を以て　自ら其の首を斷ずるも　彼の戒の功德に於て　應に毀犯を生ずべからず。

是の持戒の功德は　因果皆清淨に　世・出世の樂を招き　諸佛の爲に讃せらる。
若し人戒を護らざれば　初中後に善無く　廣大の利益　及び最上の寂靜を失せん。
持戒は第一の善　施も及ぶ能はざる所なり　彼の財は限量有り　戒の功は能く盡くること無し。
戒の德莊嚴するに由り　衆人に愛敬せらる　當に知るべし諸の[四一]如來　戒に因つて聖と成る。
持戒は最も清涼に　身心の熱惱を除く　是の故に、常に奉行せよ　當に天道に生るゝを得べし。
戒は生天の梯たり　亦名づけて樂海と爲す　若し人彼の戒を離るれば　後に唯だ憂悔を生ぜん。
戒は清涼の水の如く　深く廣く常に彌滿し　彼の持戒の者の爲に　身心の垢穢を滌ぐ。
天中の妙樂　及び殊勝の莊嚴を受くるは　皆戒の功德に由り　善因の致す所なり。
若し淨戒に安住せば　衆善咸な依止し　念念に常に增長し　惡道の怖畏無けん。
若し專ら梵行を修し　戒を以て身を嚴れば　是の人現生に於て　供養恭敬を得ん。
堅く禁戒を持するに由り　常に諸の不善を遠ざけ　彼の一切の處に於て　快樂安隱を得ん。
若し彼彼の戒を持せば　各別に功能有り　常に殊勝の處に生じ　意に隨つて自在ならん。
施・戒・智の三種は　能く慈心を生じ　常に衆生を愛念し　親近承事を得。
戒は妙なる珍寶の如く　善人は常に貴重す　永く諸の過失を離れ　天中に生るゝを得。
清淨智を具足せば　鎔金の垢を離るゝが如く　常に淨戒を持するを樂はば　天中に生ずるを得ん。

【四一】如來。梵語 tathāgata の譯。佛十號の一。佛は如實の道に乘じて來る故に、如來ともいふ。

若し人生天を樂はゞ　少因にして則ち能く得ん　是の故に諸惡を遠ざけ　常に淨戒を持つべし。
若し能く彼の戒を護り　心に施を行ずるを樂はば　後に天中に生るゝを得　妙樂の無比なるを獲ん。
妻子及び珍財　親眷朋屬等　淨戒を護持する者は　此を觀ること皆樂に非ず。
戒に於て愛敬を生じ　赤子を護念するが如ければ　則ち彼の毀犯を離れ　常に勝處に生ぜん。
彼の淨行を修するに由り　施・戒悉く圓滿し　白業を以て莊嚴し　天上に生るゝを得。
戒は寶藏の如く　能く彼の富饒を生じ　名稱及び生天　求めずして自ら至る。
此の三種の勝報　鬼趣すら尚能く求む　何ぞ況んや具智の人をや　淨心にして戒を奉ぜよ。
若し人淨戒に於て　盡形に能く護持せば　不滅の處に至るを得　永く諸の苦際を盡さん。
過去の諸の[36]輪廻は　[37]三毒の[38]纒縛たり　戒は淨き光明の如く　能く彼の黑暗を破す。
戒は天の池沼の如し　衆寶の嚴瑩を具し　亦堅固の財と名け　水火も能く壞する無し。
是の故に彼の正士は　戒に於て曾つて犯無く　常に愛敬の心を生じ　最上の[39]寂靜を得。
決定の心堅固に　戒に於て缺漏無ければ　唯だ彼の戒の功德　命終るも常に守護す。
若し持戒の人に親しめば　日光の照す所の如く　毀禁の者に習近せば　轉た其の癡鈍を增さん。
不善の垢穢を離れ　希求熱惱無し　是の如き持戒の人は　諸佛に稱讃せらる。
持戒は福慧を具し　初中後皆善し　破戒は唯だ愚夫　傍生の如くにして異ること無し。
若し人淨戒を持せば　戒衣に覆はるゝを得　戒に於て若し毀犯すれば　彼は則ち裸體の如し。
持戒に由りて天に生ぜば　天衆競ひて迎奉し　彼の園苑の中に於て　而も共に相遊戲せん。
諸の福業を具足し　堅く梵行を修持せば　是の人天中に生れんこと　決定して疑惑無し。
彼の戒を持するに由るが故に　諸の善利を增益す　上妙の[40]五欲に於て　心に染著を生ぜざれ。

【三六】輪廻。說法品第二の下を見よ。
【三七】三毒。貪欲瞋恚愚癡の三煩惱をいふ。
【三八】纒縛。伏除煩惱品第一の下を見よ。
【三九】寂靜。寂靜品第二十八の下を見よ。
【四〇】五欲。訶厭五欲品第七の下を見よ。

若し人施を樂はず　自らも亦受用せざれば　常に其の財を悋惜するも　終に佗に散壞せらる。
若し人珍財を具し　尊親師長に奉じ　斯く正行に順ぜば　則ち虛用を爲さず。
貧病疲乏の　一切の諸の有情に於て　常に淸淨の施を樂ひ　之が爲に眼目と作る。
是の如く施を行ずるに由り　施し已りて天に生るゝを得　諸天若し慳を生ぜば　久しからずして退墮せん。
人間も施の因を修せば　天中に樂報を受く　所修の因無くして　妄に其の果を招くに非ず。
若し施・戒を離れ　亦禪定を修せず　是の如き愚癡の人は　活くと雖も死に異ること無し。
若し正法を樂はざれば　則ち慧命を滅失す　愚夫は修習せず　活くと雖も則ち死せるが如し。
若し人智燈無ければ　心則ち明了ならず　彼は則ち傍生の如くして　人皮に覆はると爲す。
施さず復た貪多ければ　諸根常に散亂す　當に知るべし彼は人に非ず　餓鬼の鬪諍せるが如し。
慈念觀察に住し　施・戒・禪定を修せば　斯れを寂靜の人と爲し　諸天咸な恭敬(くぎやう)す。
具德は衆に尊ばれ　無德は咸な輕易す　是の如く善く了知すれば　是を人中の天と名く。
善く其の施を修せば　富樂長壽を獲ん　此の世佗の世に於て　常に樂ふて喜捨を行ぜよ。
衆生は自業に隨ひ　[三一]五趣の中に生ず　唯だ施等の善因は　之を見ること父母の如し。
布施の因の感ずる所　勝報を[三二]具するを了知せば　當に淨戒を奉持すべし　三有の苦を脫るゝを得ん。

持戒品　第二十三

[三四]戒は最勝の財たり　日光の普く照すが如し　若し人命終せん時　唯だ戒のみ伴侶と爲る。
戒を持せば天に生るゝを得　或は諸の[三五]禪定(せんちやう)を得ん　此の世佗の世に於て　光明に與等無し。

【三一】五趣。地獄、餓鬼、畜生、人、天の五道をいふ。
【三二】具の字。忍徵師校刻本に依る。原本には其。
【三四】戒。梵語 śīla の譯。身心の過を防禦すること。持戒とは戒律を受持して犯觸せざること、六度の一。
【三五】禪定。六度の一。禪定品第二十六の下を見よ。

けん。

[二九]施は彼の良田の如くして　而も其れ三種有り　善く心の種子を熏じ　各其の果利を獲しむ。

初めに施を行ずるを樂ひ　後に專ら淨戒を持し　智を以て愛の垢を斷ず　此の理上に過ぐるもの無し。

世間は皆無常なり　復た諸の過失多し　彼の愛を斷ずること能はずば　何に由つてか勝處に生ぜん。

常に大心を發起し　樂ふて廣く布施を行ずべし　此を捨てゝ修習せざれば　後に餓鬼の報を受けん。

施に依止するに由るが故に　復た堅く淨戒を持す　是の人後身に於て　[三〇]轉輪王の位を受けん。

彼の禁戒を具するに由り　善く時・非時を知り　苦の邊際を解脫し　菩提の道に近づくことを得

諸天施を行せざれば　其の福則ち隨つて滅す　智者了知し已れば　當に樂ふて喜捨を行ずべし。

乃至此の生の中に　人間の快樂を受くるは　皆彼の施に由るが故なり　常に念を繫けて修作せよ。

設ひ畜生の中に墮するも　亦彼の快樂を受くるは　皆彼の施に由るが故なり　是れ如來の說きたまふ所なり。

若し人施を樂はざれば　後に餓鬼趣に墮し　斯く慳恡なるに由るが故に　常に諸の不淨を食せん。

若し樂ふて布施を行ぜば　則ち清涼の果を得　是の如き行を修せざれば　饑渴の焰に燒かる。

先の放逸に由るが故に　施等の因を修せず　彼の命終の時に於て　自心に熱惱を生ぜん。

心に喜びて施を行ぜば　衆に愛敬せらるゝを得　常に[三一]吉祥を獲ん　感果故に相似なり。

【二九】三種の良田、三種福田なり福行品第三十一の下を見よ。

【三〇】轉輪王。梵語 cakravarti-rāja の譯。轉輪聖王ともいひ、身に三十二相を具し、即位の時天より輪寶を感得し、その輪寶を轉じて四王を降伏して四州の王と爲る。

【三一】吉祥。梵語 śrī の譯。妙善嘉良の意。

施は彼の浴池の如く　戒は能く諸垢を淨め　智を以て善く觀察せば　能く三有を超ゆ。
謂く[二七]施・戒及び智の　三種は燈明の如く　若し人善く修習せば　永く諸の癡瞑を離れん。
愛恚は巨海の如く　疑惑は波濤の如し　彼の險難を渡らんと欲せば　當に施・戒・智を修すべし。
衆生は狂亂多く　隨所に貪著を生ず　彼の心を防護せんと欲せば　當に施・戒・智を修すべし。
是の如きの三種の行　我は說いて良藥と爲す　善く煩惱の病を除き　皆淸凉なるを獲しむ。
心は邪の思惟を起し　放逸の過失を生じ　彼の婬・怒・癡に　相應して纏縛せらる。
是の三毒の畏る可きこと　火の世間を燒くが如し　施等を以て對治せば　當に斷じて永く盡きしむべし。
施等の行を修せざれば　彼は則ち愚癡と爲す　是の人常に苦惱し　樂を求むるも則ち有ること無し。
若し在在處處に　衆生諸罪を造り　彼彼の因緣に隨ひ　種々の果報を受く。
一切の[二八]有爲法は　皆因緣より起る　未だ惡因無くして　苦報を受くるを見ず。
心に惠施を樂はざれば　面に常に怒色を生ず　斯れ貧窶の因と爲る　是の故に當に遠離すべし。
若し施せば喜心を生じ　相應の慳垢を離れ　後に天中に生ずるを得　諸天と共に遊戲す。
是の慳は彼の寃の如く　損壞すること極めて畏る可し　能く諸の衆生をして　餓鬼の饑渴を受けしむ。
若し樂ふて布施を行ぜば　所生卽ち快樂なり　是の故に諸の智者は　施に於て常に稱讚す。
施は彼の光明の如く　至る所に則ち隨つて有り　若し人天の中に生ぜば　供養恭敬を得ん。
故に諸佛の說く所　當に善く布施を修すべし　破壞す可からざる　最上堅牢の處に住せん。
善く其の施を行ぜば　則ち彼の慳寃を降し　常に慧を以て觀察せば　其の便を得せしむること無

【二七】施戒智。布施と持戒と智慧、共に六度の一。

【二八】有爲法。無常品第五之餘の下を見よ。

悲は剛強を捨離し　內には則ち諸善を生じ　煩惱の過患を除くこと　鎔金の鑛より出づるが如し。

悲心は寶器の如く　中に滿ちて妙物を容る　彼の善根を增長せば　念に隨つて安隱を獲ん。

悲心は寶藏の如く　衆生に用ひて盡くること無く　能く彼の貧窮を破し　廣大の利を成就す。

悲心は常に寂靜にして　樂ふて諸禪を修習し　放逸の境界を離れ　五欲の垢染を出づ。

又復た慈心を起し　佗に於て愍念を生じ　彼をして輕安を獲　苦の纏縛を脫するを得せしむ。

意を以て善く思惟し　常に彼の罪垢を遠ざけ　諸の恐怖を解脫し　寂靜の樂を志求せよ。

常に忍と相應すれば　自他則ち惱無く　世間咸な見るを喜び　後に天中に生るゝを得ん。

若し人能く　慈忍の無上寶に安住すれば　一切の諸の有情　之を瞻ること父母の如し。

慈愍は上に過ぐるもの無く　樂の根本と爲す　若し人是の心無ければ　後に則ち唯だ苦有り。

若しは梵天の悲心　自在天の忍辱　諸の持明智母　皆慈行に及ばず。

不害は第一の福たり　正見は最上の善たり　寂靜の心は常に安く　諸の險難を離るゝを得ん。

是の故に當に了知すべし　心に常に憐愍を生じ　施・戒・忍・慈を以て　無垢智を修成せよ。

布施品[二六]　第二十二

淨施に由りて感ずる所　十二種の功德あり　人天の中に生ずるを得て　財富與等あること無し。

若し人是に返けば　咎を獲ること亦此の如し　愚癡にして施を樂はざれば　後に要處に墮せん。

妻子眷屬の爲に　慳悋貪愛を起し　匱乏の苦因を造り　常に希求するに足ることあらず。

若し廣く布施を行ぜば　貪の纏縛を解脫し　彼の我慢の幢を摧き　諸の癡暗を破滅す。

施は彼の先導と爲り　殊勝の處に引生し　人世・天中に於て　當に巨富を招くべし。

【二六】布施。梵語 dāna 檀那の譯。福利を人に施與するをいふ。大きく財施、法施の二種に分つ。持戒、忍辱、精進、禪定、智慧と六波羅蜜（譯して六度）といふ。

謂く[18]身語意の業　常に善と相應せば[19]三惡道を顯示し　之を引いて出離せしむ。
若し悲心に依止せば　能く寂滅の樂に趣く　諸の[20]衆生を愍念すること　母の己が子を愛するが如くなれ。
有苦の衆生に於て　尋求して救護し　鬼趣も尙ほ祐を蒙り　天趣に生ずることを得しめよ。
若し悲心を具足し　諸の[21]含識を愛念せば　是を大丈夫と名づけ　人天咸な恭敬す。
若し人悲心有れば　則ち能く淨戒を持し　月の世間を照すが如く　光明常に淸淨なり。
能く諸の衆生をして　愁怖憂慼を離れしむ　是の故に悲心に於て　畢竟して常に親近せよ。
若し人麁獷を離れ　悲心を以て莊嚴せば　是を良[22]福田と名づけ　名稱普く周遍す。
悲心普く滋するに由り　諸根に垢染無く　淸淨の正見に住し　菩提を去ること遠からず。
若し人悲心を具せば　諸天自在なるが如く　百千生の中に於て　永く彼の貧乏を離れん。
若し人意質直なれば　金の貴重すべきが如く　復た悲心に安住せば　斯を無盡の寶と爲す。
若し人精進を具し　常に正法を勤求せば　悲心の明燈を以て　爲に說くに疑暗を除く。
常に晝夜の中に於て　其の悲意を捨てず　其の所至の處に隨つて　樂ふて說いて懈ること無かれ。
悲心は極めて淸涼　衆生の熱惱を息めて　上妙の樂を得せしめ　後に[23]眞常の果を獲ん。
故に諸佛の讃する所　悲を無盡財と爲す　亦淨き池沼の如く　能く諸の罪垢を滌ぐ。
是は最上の莊嚴なり　煩惱の黑暗を破し　菩提の苗を沃潤し　眞常の果を得せしむ。
若し人悲心有れば　牛の[24]醍醐を出すが如く　其の美味を具足し　身心の熱惱を蠲く。
三有は巨海の如く　三毒は駛流の如く　悲心を[25]舡筏と爲す　仁者の乘蹈する所なり。
悲を功德の財たり　白淨の心もて嚴瑩し　善人は常に繫念す　此を說いて名づけて悲と爲す。

【一八】身語意の業。身口意の三業又は身語心の三業ともいふ。
【一九】三惡道。地獄餓鬼畜生の三惡趣なり。
【二〇】衆生。有情の梵語sattva薩埵の舊譯なり。
【二一】含識。心識を含有するものの意、卽ち有情なり。
【二二】福田。佛法僧父母師長等の應に供養すべき者に於て之を供養せば、能く諸の福報を受くること田に播くが如きを云ふ。
【二三】眞常の果。眞實にして常住なる果報。卽ち涅槃をいふ。
【二四】醍醐。五味の一。牛乳より製し、味中第一、藥中第一より。
【二五】舡の字、忍徵師校刻本には船に作る。

若し樂ふて精進を行ぜば　懈怠の垢穢を離れ　諸の恐怖を解脫し　此に則ち樂分を獲ん。
若し意に懈怠を作し　勝淨法を修せざれば　廣大の過咎を得　是の人唯だ苦分あり。
眷屬[一〇]の纏縛に由り　當に險難に墮すべし　是の故に此の生の中に　彼の欲樂を貪ること無かれ。

又彼の懈怠の者は　常に癡の爲に蔽はれ　少分の福業無く　衆共に輕賤を生ず。
又彼の懈怠の者は　睡眠・惛沈[一一]を生じ　懈怠[一二]の門を破壞し　智者は善く防護す。
又彼の懈怠の者は　無慚[一三]・無愧[一四]を起し　此の二を苦の本と爲し　後に大恐怖を得。
又彼の懈怠の者は　悉く其の修作を廢す　是の人は世間に於て　活くと雖も卽ち死せるが如し。
又彼の懈怠の者は　掉擧を引生し　心をして寂靜ならざらしめ　命終にも心散亂す。
懈怠の淤泥に沒せば　何に由りてか苦海を超へんや　唯だ勇猛精進のみ　能く彼岸[一五]に到る。
又彼の懈怠の者　傍生[一六]の如くにして異ること無く　但だ所食を思念し　餘は則ち知る所無し。
飮食を貪嗜するに由り　樂ふて不淨行を作し　欲する所多く匱乏し　常に佗に從つて乞丐す。
乃至自身に於て　寒熱饑渴を忍ぶ　皆懈怠に由るが故に　備に艱苦を受く。
彼の懈怠に由るが故に　衆人皆嫌棄す　彼自の爲に欺罔せらる　何ぞ能く苦際を盡さんや。
眞實乘を學せず　唯だ美味を貪れば　命終に惡道に墮し　徒勞に後悔を生ぜん。
若し精進を發起せば　彼の正念に安住し　永く不善法を斷ず　此を則ち智者と爲す。
是の如き種々の苦は　皆懈怠に由りて生ず　是の業報を了知し　畢竟して復た造らされ。
衆生の三毒の火は　念念に常に熾然たり　大悲の甘露の雨　彼の爲に息除せん。

悲愍有情[一七]品　第二十一

【一〇】眷屬。無常品第五の下を見よ。

【一一】惛沈。十纏の一。心をして盲昧沈鬱ならしめる煩惱。

【一二】解脫。說法品第二の下を見よ。

【一三】【一四】無慚無愧。共に十纏の一。說罪品第十五之餘の下を見よ。

【一五】彼岸。厭離自身品第三の下を見よ。

【一六】傍生。畜生の異譯。

【一七】有情。梵語 sattva の譯。情識を有するもの。卽ち衆生なり。

卷の第八

捨離懈怠品第二十

謂く彼の劣慧に由りて　懈怠[一]を生じ　好んで戲論の言を習ひ　正智を遠離す。

善知識を捨離し　樂ふて惡友に習近せば　破法の因緣と爲る　此を說いて　邪命[二]と爲す。

時と方と及び　彼の諸難處とを知らず　說くべからずして爲に說けば　心に常に愁怖を生ぜん。

譏嫌を避けずして　而も常に往いて乞食せば　佗の爲に輕賤せられ、自ら己が德を稱せんと樂ふ。

增上の貪癡[三]を起し　掉擧[四]邪慢[五]を生じ　深く五欲に著し　心正敎に依らず。

王の敎敕に違背し　常に忿恚を懷けば　狂亂して正念を失し　非時にして死を致す。

說法の師を遠離し　法非法に達せず　善人敎詔[六]すと雖も　瞋を生じて毀呰す。

彼の飮食を貪嗜し　常に睡眠[七]に著す　是の如き罪の衆生は　當に地獄に墮すべし。

若し決定して精進すれば　能く樂報を生ず　是の故に正法に依り　而も當に善果を取るべし。

若し懈怠を本と爲せば　三種の過失を生ず　唯だ精進の對治のみ　能く諸の癡惑を破す。

謂く彼の三毒[八]の因は　能く三種の報を招き　此の三を根本と爲し　隨つて三有[九]に趣く。

若し彼の懈怠を樂はゞ　則ち諸の善法を棄つるに　衆惡之に由つて生じ　當に地獄に墮すべし。

或は彼を取つて貪を生じ　或は此を捨てゝ恚を增す　是の如く處に執著するを　此を說いて愚癡と爲す。

懈怠の其の心を覆すこと　毒に中りて悶絕するが如し　放逸の深坑に於て　墮落すること疑惑無し。

【一】懈怠　梵語 kausidya の譯。善品を修するに當り、懶怠にして勇悍ならざるをいふ。
【二】邪命。如法に自活せず下如法の事をなして生活すること。
【三】貪癡。貪欲と愚癡、何れも三毒煩惱の一なり。
【四】【五】掉擧邪慢。何れも十纏の一。遠離不善品第四及び敎示衆生品第十四の下を見よ。
【六】詔の字。忍徵師校刻本に依る。原本に招。
【七】睡眠。十纏の一。心をして闇昧ならしめる煩惱をいふ。
【八】三毒。貪欲と瞋恚と愚癡の三煩惱をいふ。
【九】三有。三界の異名。無常品第五の下の三界を見よ。

し。

愚夫の諸罪を造り　悪趣の中に墮すは　皆飲食の因に由る　智者の誡むる所なり。

是の業報を了知し　心に當に怖畏を生じ　樂ふて施・戒を修し　衆善を以て莊嚴すべし。

叫呼して飲食を求むるに　自身より火を起し　彼の罪の衆生を焼くこと　槁木を然やすが如し。
是の火方處に遍ねく　至る所に即ち隨逐す　設ひ百劫を經るの中にも　食に匪されば能く濟ふこと無し。
世の火は炎熱なりと雖も　飢火復た是に過ぎたり　[四八]三有の中に奔馳し　食に於て求むるも得ること無し。
又世間の有情は　常に種々の過を生じ　飲食の因緣の爲に　三有の海に沈淪す。
彼の三有の中に住し　業に隨つて牽去せられ　長時に楚毒を受く　此の苦は說いて盡くすこと無し。
胎藏の中に處り　糞穢に溺るゝ所と爲り　逼迫の熱惱を受く　此の苦は說いて盡くすこと無し。
欲境に耽著し　殊妙の嚴飾を樂ひ　貪求して艱辛を受く　此の苦は說いて盡くすこと無し。
常に佗の舍宅に詣り　衣食を求丐し　彼の輕賤する所と爲る　此の苦は說いて盡くすこと無し。
愛毒に由りて使せられ　已れ勞して而も求覓し　乃至身未だ終らず　此の苦は說いて盡くすこと無し。
自ら其の欲境を貪れば　衆寃其の便を伺ひ　心常に惶怖を生ず　此の苦は說いて盡くすこと無し。
彼の妻孥の爲に由り　多く憂慼を生ず　斯を第一の寃と爲す　此の苦は說いて盡くすこと無し。
枉に諸の珍財を費し　親朋に訶毀せらる　斯に由つて愁惱を起す　此の苦は說いて盡くすこと無し。
變異して身衰老し　杖を策して而も徐行し　色力頓に疲羸す　此の苦は說くに盡くることなし。
生平に愛寵する所も　臨終には皆棄捨し　獨り往きて所依無し　此の苦は說いて盡くすこと無

【四八】三有。三界に同じ。無常品第五の下を見よ。

極重の熱惱を受くるに　實に堪へ難く忍び難し　我若し出離するを得ば　少罪をも復た造らさらん。

彼の餓鬼趣の中に　常に大愁怖を生じ　此の不善の因に於て　是の故に當に遠離すべし。

畜生品　第十八

彼の[四一]畜生の苦報は　牽縛捶打と爲す　殺の因緣を斷ぜざれば　則ち更に食噉を生ず。

愚夫は愛に心を惑し　樂ふて損害を行じ　[四二]施・戒の因を修せず　後に畜生の報を受く。

愛索の爲に縛さるれば　五根癡瘂の如く　忿・恨・憎・嫉を懷き　後に畜生の報を受けん。

應作・不應作　可食・不可食　善不善の法に於て　皆了知すること能はず。

人趣は追求多く　諸天は放逸に著し　餓鬼は飢渴を受け　地獄は唯だ極苦なり。

若し人[四三]有情に於て　樂ふて殺戮を行ぜば　種々の危害を招き　當に互相に殘害すべし。

又復た諸の衆生は　多慳にして復た散亂なり　是の因緣を以ての故に　當に[四四]鬼畜趣に墮すべし。

彼の[四五]三毒の過患は　諸の有情を沒溺し　生死の[四六]輪迴を受くれば　深險にして出離すること難し。

若し正法を樂求せば　則ち諸の善果を生じ　彼の朋慧を具足し　人の爲に恭敬せらる。

是の故に具智の者は　樂ふて清淨の業を修し　理の如くにして作意し　[四七]解脫の正道を蹈むべし。

飢乏業報品　第十九

樂ひて不饒益を作し　諸の衆生を驅役せば　下劣の苦因を招き　飢と相似無し。

【四一】畜生。梵語 tiryagyoni の譯。又傍生とも譯す。地獄、餓鬼と共に三惡趣又は三惡道といふ。牛馬鷄豚犬羊の六畜を初めとし、凡ての動物界をいふ。その性質暗昧にして親子の別すら辨へず、弱肉强食、互にその血をのみその肉を噉ひ、常に恐怖の念に驅られて暫くも安きことを得ず。下品（一說に中品）の五逆十惡を作る者はこの果報を受く。

【四二】施・戒。布施と持戒、布施品第二十二等の下を見よ。

【四三】有情。衆生に同じ。悲愍有情品第二十一の下を見よ。

【四四】鬼畜趣。餓鬼畜生等の惡趣なり。

【四五】三毒。貪欲瞋恚愚癡の三煩惱をいふ。

【四六】輪迴。說法品第二の下を見よ。

【四七】解脫。說法品第二の下を見よ。

彼の身語意に由り　諸の不善を造作す　眷屬は皆他に往き　獨り苦に依りて住す。
[三八]琰摩の使者に　捉縛し驅逐せられ　深邃の黒暗に入り　去る處極めて懸遠なり。
我に一切處に於て　常に諸の苦惱を受け　乃至須臾の頃も　曾つて微少の樂無し。
今此の果報を受くるは　皆先の所作に由る　何の時にか斯の苦を免れ　樂處に至るを得んや。
渇の爲に逼らるゝが故に　彼の高原を徒陟し　設ひ河池を見るも　到れば則ち皆枯涸す。
曠野山林に於て　周遍して尋覓し　渇乏艱辛を受け　水を求むるも得べからず。
乃至濕潤の處　彼亦見ること能はず　復た大烏鳶有り　利觜にして啄食せらる。
彼の飢渇の火の爲に　常に其の身の逼切せられ　險道の中に宛轉し　叫呼して救護を求む。
昔欲の境界に近づく　彼は鏡中の像の如し　虚しく己の珍財を壞し　今は獨り此の報を受く。
彼の業を造るに由るが故に　[三九]籠罩より出離すること難く　四向に於て奔走す　業盡くれば當に解脱すべし。
[四〇]三毒より生ずる所の　極惡の猛火の聚　念々に常に熾然なれば　則ち能く巨石を燒く。
又火の彼の石を焚くに　水沃げば旣ち能く止む　我が業火は海の如く　深廣なり何ぞ能く滅せんや。
惡業は其れ薪の如く　愛風同じく發起し　彼の罪の有情を燒くに　周匝して能く避くる無し。
我は諸罪の咎を造り　善法を遠離し　彼の鬼の世間に墮し　自心の爲に誑らかさる。
我彼の飢渇の　二火の爲に　鎭に燒然せられ　及び刀杖の傷殘り　三種の極苦を受く。
我諸の惡業を造り　餓鬼趣の中に墮す　眷屬親朋の　能く爲に救濟を作すものなし。
唯だ彼の善法有り　我が依怙と作る　謂く施・戒・多聞の　三種の歸救たり。
乃至我に　諸の極惡の苦因を造作し　愚癡の網中に墮し　長く苦海に淪む。

【三八】琰摩。地獄品第十六の下を見よ。

【三九】籠罩。竹かご荊のかご。

【四〇】三毒。貪欲瞋恚愚癡。

口に正法を說くと雖も　心に常に佗の咎を伺はゞ　是の人を世間に於て　第一の惡者と爲す。若し人欲樂に著せば　則ち是れ苦惱を求む　自心の爲に誑かされ　樂壞すれば佗受くるに非ず。是の故に正慧を以て　常に[三六]十善行を修し　諸の非義利に於て　畢竟して永く除斷せよ。樂ふて佗を利益し　心を繫けて暫くも捨つることなく　常に淨善の法に依り　應に當に是の如く住すべし。

餓鬼品　第十七

若し人施を行ぜされば　燈無くして光を求むるが如し　善業を捨離せば　何ぞ能く樂報有らん。世間の盲者の　物に於て覩る所無きが如く　施を離るれば福因無く　當に[三七]餓鬼趣に墮すべし　無財の鬼中に墮すれば　周遍して求覓するも　常に飢渴に困ず　皆慳に由りて感ずる所なり。若し樂ふて施を修せる者は　一切能く壞する無し　少因をも作さゞれば　後に乃ち徒に悔を生ぜん。

先に惡業を造るに由り　餓鬼趣の中に墮し　獄火の爲に燒炙せられ　長く飢渴の苦を受く。何の時か彼の趣を離れて　暫く快樂を得　何の劫にか解脫を得て　則ち諸の熱惱を捨てん。因果及び彼の道非道を了せざるに由り　飢火の爲に逼られ　相續して苦を斷ぜず。醜狀に髮髼亂し　唯筋皮相連る　諸の飮食を希求するに　暫く覩るも得るに由無し。衆苦の爲に逼迫せられ　諸惡險難に墮し　曾つて親朋の　我に於て暫くも能く救ふもの有る無し。

汝昔人中に於て　諸の福行を作すを斷ず　寶洲に至り　空手にして獨り返るが如し。若し樂ふて勝行を修せば　常に彼の諸惡を遠ざく　我彼の善人を觀るに　生天の階漸を躡む。

【三六】十業行。十惡に對す。即ち不殺生、不偸盜、不邪婬（身三）不妄語、不兩舌、不綺語、不惡口（口四）不貪欲、不瞋恚、不邪見（意三）なり。是を止善といひ、惡行を止むる所これ善行なるをいふ。然るにこゝに止まらず更に進んで放生、布施、梵行（身三）誠實語、質直語、和諍語、柔輭語、（口四）不淨觀、慈悲觀、因緣觀、（意三）の善行を修するは行善といふ。

【三七】餓鬼。梵語 preta の譯。單に鬼ともいふ。地獄及び畜生と共に三惡趣の一。この中には勝劣甚だしきものあり。その福德ある者に至つては山林塚廟の神と仰がるゝこともあるも、多くは常に不淨の處に居し、常に饑渴の苦に逼らる。中品（一說は下品）の五逆十惡を作せるものこの果報を受く。

彼の琰摩の使者は　檢察して隨つて釋放するも　若し惡報未だ盡きざれば　還つて牽いて衆苦を受けしむ。

身肢方面に於て　分裂して斫截し　無數の罪ある有情　悲愁號叫を生ず。

復た惡有情有り　多く[三四]離間語を作る　猶ほ一種子の　後に增長し無數なるが如し。

皆彼の惡慧に由りて　鬪亂を生じ　親屬朋友に於いて　悉く僞に破壞を作す。

常に諸の善言を遠ざけ　樂ふて惡語を發せば　當に其舌を割截すべし　因果還りて相似す。

百千の功德の門　舌に由りて破壞し　今に此の苦報を受く　何れの時にか出離を獲ん。

彼の地獄の中に墮すれば　極熱にして飢渴を生ず　譬へば芥子を以て　須彌の火聚に擲ぐるが如し。

又彼の地獄の火は　復た飢渴より生ず　及び墮落の諸天の　報を受くるも亦此の如し。

造る所の衆の惡業は　皆三毒に由りて起る　展轉するも猛焰の間　藏竄逃避すること無し。

無智の諸の有情は　妄に分別を起し　不善を說いて善と爲し　良友に於て寃の如し。

云何ぞ諸の衆生は　眞實の法を[三五]語らず　設ひ彼の僞に開示するも　心に愛樂を生ぜざるや。

正法を聞くを樂はず　說法の師を輕毀す　濁惡世の中に於て　何に由りてか慧眼を生ぜん。

愚夫の境界は　愛欲に長く迷惑す　正法律に依らず　能く自ら悟るに因無し。

癡索の牽く所と爲り　常に諸惡を作すを樂はゞ　作し已りて極苦を受け　徒に憂悔を生ぜん。

增上の愚癡に由り　法に於て非法を說く　彼の因旣に顚倒し　則ち錯行亂學なり。

明慧揀擇無く　五欲に耽嗜せば　善に於て修習せず　惡を見れば隨つて作す。

諸天心樂に著し　放逸の火中に投ずれば　勝善の緣に遇はず　彼は卽ち隨つて退墮す。

又彼の愚癡の人は　諸の賢善を憎嫉し　矯りて諸威儀を現じ　佗を誑して利を求む。

【三四】離間語。兩舌の別名。

【三五】語の字。忍徵師校刻本に依る。原本には悟。

一切の諸の法藏は　解脱の門を顯示す　汝和合僧を破せば　今此の苦報を受く。
常に虛妄の言を發し　東を指して北と談り　說く所誠信無くんば　今に此の苦報を受く。
又復た綺語を生じ　眞實の實を損壞し　自佗を益する無くんば　今に此苦報を受く。
兩舌の惡業を起し　互相に讒謗し　彼の親朋を離散せば　今に此の苦報を受く
無義の惡語を說き　刀杖毒火の如く　佗をして熱惱を生ぜしむれば　今に此の苦報を受く。
已の身命を護惜し　諸の有情を損害し　常に慈愍の心無ければ　今に此の苦報く受く。
佗の所有の珍財　偸取し或は刦奪し　恣に五欲の因と爲せば　今に此の苦報を受く。
樂ふて欲の邪行を作し　火に其の薪を益すが如く　常に疑怖心を生じ　諸の不善を增長す。
邪見に樂著し　佗の善根を損壞せば　惡報を受くること窮り無く　第一の苦惱を受けん。
此の諸の惡境界に　汝は愚癡にして隨轉す　皆身語心に由りて　相應して造作す。
彼の衆惡を造り已り　將に終らんとするに苦現前し　獄卒の爲に驅せられ　速かに地獄に趣く。
是の地獄の苦惱は　極めて忍受に堪へ難し　假使へ海の深廣なるも　燒然して亦枯涸す。
若し人諸惡の　因果樂む可きに非ざるを了せば　常に當に正思惟し　罪に於て作すべからさるべし。
謂く佛法僧寶は　衆德皆圓滿す　人中に生ずるを得て　何ぞ親近し能はさるや。
初め微細の罪を作り　小火に燒かるゝが如きも　後には廣く惡因を造り　身を火聚に投ずるが如し。
罪に於て徒に憂怖し　意に諸惡を斷ぜず　常に苦報を受くるを思はゞ　今汝復た何をか造るや。
當に知るべし彼の少罪は　則ち能く衆苦を生ず　業盡くれば當に出離すべし　餘に能く救ふもの有ること無し。

我彼の惡處を觀るに　種々の苦の治罰　一切の情非情　皆猛焰を騰ぐ。
復た大毒蟒有り　周匝して悉く圍繞し　悲號して出離を求むるも　歸すること無く亦救ふ者無し。
黑暗の獄中に墮せば　深廣なること大海の猶し　虛空[二九]宿曜の光　長劫に何に由つてか覩ん。
謂く彼の[三〇]五根に由り　顚倒して貪著を生じ　[三一]三有の中に流轉す　何に由つてか能く寂靜ならん。
一切の身の肢分　利鋸もて分解せらる　無量の極苦惱　言もて能く盡し宣ぶる莫し。
積集するに罪山の如く　衆苦常に圍繞し　念々に常に增長す　心に作し身に自ら受く。
極苦の迫窄を受くるに　辛酸は唯だ自ら知る　琰摩彼に敕して言く　汝昔の所作を觀よと。
若し自の罪を了知せば　苦に於て能く堪忍せよ　乃至業未だ盡きず　一一に當に思惟すべし。
昔癡に覆はるゝに由り　今徒に悔惱を生ず　汝是の如きの因を作し　自ら是の如きの果を受く。
惡作に由りて起る所　增上の重罪を造り　難中の險難に墮し　苦中の極苦を受く。
愚夫は罪を造り已つて　薪を以て火に投ずるが如く　劫より劫に至る　業盡くれば或は當に出づべし。
[三二]諸天・修羅・夜叉・鬼神等に非ず　我死羂に拘せらるれば　彼も皆捄ふこと能はず。
彼索の爲に縛され　牽かれて琰摩の所に至り　惶怖するも依歸無く　業の趣く所に隨ふ。
若し欲の過患を離れゝば　三界の中の最勝なり　一切の縛を解脫せば　則ち諸罪を造らず。
[三三]若し和合因緣あり　先に父より得る所　彼は是の如く劬勞す　汝何ぞ殺害を行ずるや。
又復た母を害する罪　惡業の此に過ぐる無し　地獄の中に墮し　增上の極苦を受く。
三有の結縛を斷ずるを　是を阿羅漢と名づく　愚癡にして殺害を行じ　今に此の苦報を受く。

【二九】宿曜。伏除煩惱品第一の下を見よ。
【三〇】五根。眼耳鼻舌身の五根なり。訶厭五欲品第七の下を見よ。
【三一】三有。三界に同じ。衆生生死流轉の處なり。無常品第五の下の三界を見よ。
【三二】天修羅夜叉鬼神等。無常品第五の下を見よ。
【三三】殺父、殺母、殺阿羅漢、破和合僧、出佛身血の五を五逆罪といひ、殺生、偸盜、邪婬(已上身業に三)妄語、綺語、兩舌、惡口(已上口業に四)貪欲、瞋恚、愚癡(已上意業に三)の十を十惡といひ、この上品の五逆十惡の罪業を犯せるものは盡く地獄の果報を受け、長時に劇苦を受く。

又彼の貪欲の火は　三有に於て熾然なり　善利を見て修せざれば　後樂何の得る所ぞ。
巧笑の言辭を說き　貪欲を增長するは　斯を大過咎と爲す　當に斷じて餘有ること無かるべし。
彼の地獄に墮し已り　聲を發して大いに號哭するも　獄卒謂ふて言く　彼の因の如くにして受くと。
諸惡を遠離せず　作し已つて還つて復た造れば　彼の因卽ち增長し　報を受くること亦此の如し。
若し未來の苦を畏るれば　當に現に衆善を修すべし　則ち地獄の報無く　亦悲啼を生ぜず。
放逸は彼の地の如く　諸の不善を出生す　無量の諸の有情は　皆貪の爲に牽かる。
汝は昔衆罪を造り、貪等の惡行を起す　愚夫は了知せず　苦に當りて何人か代らん。
慈愍の心を生ぜず　諸惡に隨つて流轉す　無邊の苦海の中　何に憑つてか而も濟度せん。
資財及び愛する所は　命盡くれば悉く遺棄す　此の衆罪を造るに由り　獄卒の追ふ所と爲る。
極猛の惡火の聚　虛空に充遍し　乃至地方所も熾燄として間無し。
苦切に觀る可からず　惶怖何れの至る所ぞ　鋒刃を其の道と爲し　驅逐して履踐せしむ。
險難の廣きこと海の如く　獨り逝きて伴無し　何れの時に解脫を得　我に於て誰か能く救んはや。
我は苦に逼切せられ　疲乏して往くこと能はず　彼の爲に執縛せられ　牽挽して將去せらる。
妻拏朋屬等　此に到れば皆寃の如し　縱ひ無量珍財もて　求嘱するも能く脫ること無し。
昔放逸なるに由るが故に　樂壞して翻つて苦と爲る　死羂の爲に牽かるれば　冥莫として何れに歸趣せん。
彼の[二八]琰摩の獄卒は　極めて暴惡にして忿怒し　執縛して凌辱を加へ　心に大惶怖を生ず。

【二八】琰の字。忍徵師校刻本には焰に作る。

造作する所の諸惡は　利刀毒火の如く　險惡にして極めて畏る可く　作し已れば汝當に受くべし。
若し人心寂靜にして　諸の境界に著せず　癡の所行に隨はざれば　則ち惡報を離る。
地獄の苦聲を聞くも　愚暗なるは怖を生ぜず　彼の乾薪を持して　之を烈火に投ずるが如し。
又世間の火は然ゆるも　焰久しければ即ち能く滅す　當に知るべし彼の業火は　長時に熾盛す。
常の火は勢斷ず可きも　業火は長く相續す　若し人惡行を造らば　畢竟して爲に燒かる。
是の故に彼の業火は　常に地獄の人を燒く　惡道を怖れざれば　能く斯の害を免がるゝこと無し。
慧を以て當に揀擇すべし　己に於て善く防護し　彼の惡業を遠離せば　則ち諸苦を受けず。
癡の覆ふ所と爲り　常に衆惡を造作し　今此の極苦を受け　悲號を徒爾に爲す。
謂く初中後分　及び苦の邊際を盡し　苦因と苦果と　皆愛樂すべからず。
昔人間に在りて　廣く諸の惡業を作り　此の險惡の報を招く　汝今當に自ら受くべし。
顚倒分別を離れ　因果常に相應す　昔の所作の如く　業に隨つて報を受く。
汝は能く自身に於て　常に其の保重を生ず　云何ぞ殺業を起し　伺つて他の壽命を斷ずるや
汝は彼の財利を求めて　備に諸の艱辛を受く　云何ぞ他財に於て　心を興して而も劫盗するや。
汝は自らの妻妾に於て　專意に防護す　云何ぞ他色に於て　侵暴を生ずるや。
汝は妄語の罪を作り　良善を欺誑し　爲に他信受せず　彼の舌極めて畏るべし。
汝飲酒の罪を樂ひ　癡鈍を引生し　非法誹謗を招く　何ぞ遠離を生ぜざるや。
是の如き[二七]五種の惡は　皆汝の先に造る所　今此の惡報を受く　何爲れぞ徒に悲慟するや。
不善法は毒の如く　應に當に常に遠離すべし　能く諸の有情をして　長く苦海に淪ましむ。

【二七】五種惡、又五惡とも稱す。一に殺生、二に偸盗、三に邪婬、四の兩舌惡口妄言綺語、五に飲酒なり。

若し樂ふて衆惡を作すは　彼苦に於て厭無きなり　苦を以て苦に加ふ　何に由つてか能く出離せん。
心に厭患を生ぜざれば　彼何ぞ寂靜有らん　我罪の衆生に於て　故に悲愍を生ぜず。
汝は癡の爲に縛され　彼の非法の行を造る　彼の因は汝自ら作る　我が能く救ふところに匪ず。
彼の癡行を積集し　罪惡悉く盈滿し　淨戒を持すること能はず　苦報孰れか能く免れん。
若し人惡業を造れば　因に隨つて則ち報を受く　應に知るべし苦の因緣は　自ら作して而も自ら受く。
汝は愛索に拘せられ　狂亂して慚愧無し　極險の治罰を受けん　彼の苦は能く說くもの無し。
若し人衆惡を造れば　則ち諸の楚毒を受け　作らざれば則ち受けず　因無ければ亦報無し。
是の如き諸の過患は　果は地獄に在り　諸の善法中に於て　曾て欣樂(ごんげう)を生ぜず。
福業を修せず　無量の罪惡を造らば　報を受くること亦如然なるに　愚夫は徒に悔惱す。
諸の善人を捨離し　多く詭詐を行じ　眞實の因を修せず　樂を求むるも得べからず。
衆の罪垢を積集するは　愚癡の心より起る　長劫に極苦を受くるは　皆昔造る所に由る。
地獄の諸の有情は　獄卒に囚執せられ　苦切に之を責めらる　業盡きなば汝當に出づべし。
又彼愚癡の人は　自心の爲に誑かされ　所作の業を了せず　煩惋して悲愴を懷く。
非利を以て善と爲し　良友を以て寃の如くし　自他を損壞せば　常に大黑暗に處らん。
彼の三毒の惡行は　深寃と異ること無し　能く諸の有情を牽き　焰摩羅(えんまら)[三六]の所に至る。
是の癡は何に因つて生ずるや　皆我所を計するに由る　施等の行を修せざれば　何を以てか濟度せん。
罪は第一の寃と爲す　惡趣に隨つて顯現し　此の世佗生に於て　而も相捨離せず。

【三六】　焰摩羅。梵名（yama-rājn)。yama は又夜摩、焰魔、琰摩、琰魔、閻魔、等に作り、rājn は譯して王といふ。故に琰摩羅闍、閻摩羅社、焰魔邏闍、焰摩羅、焰魔羅、閻魔羅王、琰摩王、閻魔王、閻羅王等といひ、又略して閻邏、焰羅、剡王、閻王等といふもみな同じ。鬼世界の始祖、地獄の王たる鬼神なり。

謂く彼の癡に由るが故に　冥より冥に入り　生天の正行　及び最上の寂靜を失ふ。
彼の妻子眷屬は　纒縛して出離すること難し　生死海中に沒して　而も依怙する所無し。
貪求は衆惡を造り　妻孥の爲にすと云ふ　自ら酸辛を受くるに及び　彼各何所にあるを知らん
無量生の中に於て　常に美色に貪著し　是に由りて諸過を造り　鄙劣にして愧無し。
先に彼の罪惡を造り　後に追悔を生ぜずんば　定んで地獄の中に墮し　長劫に出づるの期無し。
親族衆多なりと雖も　已れに於て何ぞ能く捄はんや　餘の著欲の者を見るに　報を受くること亦此の如し。
自ら善行を行ぜば　必らず其の樂果を招く　愚夫は癡に蔽はれ　此に於て殊に悟無し。
若し癡の爲に覆はるれば　貪恚亦隨つて生ず　愛する所佗の有と爲らば　己の苦の能く免るゝこと無し。
內は[三五]三毒の爲に燒かれ　外は獄火圍繞し　長劫に楚毒を受け　何れの時か惡道を免れん。
自心に諸惡を造り　曾つて愧恥を生ぜず　獄火の爲に燒炙せらる　何ぞ徒に悲啼するを用ひん。
汝輩は極めて暗鈍　樂ふて非法を行ず　悔恨を生ずるを須ひず　苦に於て當に安忍すべし。
愚夫は衆罪を造り　作し已りて驚怖を生ず　業果は常に相隨ひ　皆因緣より起る。
善に於て何をか曾つて修せるや　惡に於て斷ずること能はず　若し彼の惡を離るれば　地獄復た見ず。
若し人癡に覆はれ　業果を了せざれば　邪師の爲に悞まられ　轉た其の過咎を增す。
先に造れる罪を怖るゝに由り　常に熱惱を生ずるも　正法もて對治すること無ければ　終に苦の爲に逼切せらる。
若し能く諸過を離るれば　苦に於て則ち分無し　正念思惟に住し　諸罪を作すべからず。

この名あり。
【三三】八地獄。前出の、等活地獄、黑繩地獄、衆合地獄、號叫地獄、大號叫地獄、燒然地獄、極燒然地獄、無間地獄なり。この八地獄を常には八大地獄と呼び、又八寒地獄に對して八熱地獄ともいふ。八寒地獄とは、不放逸品第六之餘の下に註せる蓮華獄（嗢鉢羅地獄、鉢特摩地獄、摩訶鉢特摩地獄）等の類なり。又八大地獄には各十六の副地獄あり。これらみな上品の五逆十惡の罪業を造れる者の趣くべき處なり。
【三四】四獄。八大地獄には各々に四門あり。四門各々に熜煨、屍糞、鋒刄、烈河の四處あり。即ち大地獄に十六、八大地獄合して一百二十八の副地獄あり。
【三五】三毒。貪欲と瞋恚と愚癡となり。

若し人邪活命せば　衆の惡業を造作す　今當に其の報を說くべし　後に[15]地獄に墮せん。
謂く[16]等活・[17]黑繩・[18]衆合・[19]二號叫・[20]燒然・[21]極燒然・[22]無間地獄等なり。
是の如きの[23]八地獄は　方面に各一門あり　彼の一一の獄門に[24]四獄城郭を爲す。
鐵城遍く圍繞し　惡を造る者充滿し　獄卒罪人を叉す　魚を鼎鑊に烹るが如し。
山石器杖を雨らし　斫截して其の身を碎く　日夜に常に悲啼し　渴すれば銅汁を飮ましむ。
極苦に逼切せらるゝが爲に　聲を發して大に號吼し　種々の治罰を受け　四方に向ひて奔竄す。
若し人癡に覆はれ　橫に諸の惡見を生ぜば　彼の地獄の因を招くこと　海の如く深く且つ廣し。
此の下劣の惡見は　自他を損害す　無量の苦の因緣もて　汝は自ら纒縛を爲す。
邪見に著するに由るが故に　己を恃み憍慢を生ぜば　永く惡道の中に墮し　長時に極苦を受けん。
彼の惡業を造るに由り　汝今此に來至す　下劣愚癡の人　自ら何の愁怖を作すや。
惡を作し善報を希はゞ　則ち是の處有ること無し　種を深淵に植ゆるに　必らず其の果利無し。
若し人愚癡を縱にし　數親近和合せば　彼の少樂を爲すが故に　後に多苦を受けん。
愚夫は妄に樂と爲し　妻孥に戀著し　染汚の煩惱を起す　皆愛の心を惑はすに由る。
己の命終の時に於て　一も能く救護するもの無く　獨り險惡の道に趣き　慘然として長逝す。
又彼の地獄の中　本と諸の苦器無し　惡を造れる有情に隨つて　自心の變ずる所なり。
譬へば妙香を然すに　倏爾として飄して狀無きが如く　亦群宿の禽の　夜に集り曉に還つて散ずるが如し。
或は他財を劫取し　及び彼の身命を害す　此の極不善を造るは　皆癡の致す所と爲す。

【一五】地獄。梵語 naraka 那落迦、又は niraya 泥犂の譯。不樂、可厭、苦具、苦器等と譯し、その依處地下に在るを以て地獄といふ。餓鬼、畜生と共に三惡趣又は三惡道といふ。

【一六】等活。八大地獄の一。彼の有情種々の斫刺磨擣に遇ふも暫く涼風に吹かるれば蘇すること前の如く、前に等しく活くる故にこの名あり。

【一七】黑繩。八大地獄の一。先づ黑繩を以て支體を秤量して後に斬鋸する故にこの名あり。

【一八】衆合。八大地獄の一。衆多の苦具俱に來りて身に逼り合黨して相害する故にこの名あり。

【一九】二號叫。八大地獄の中、號叫地獄と大號叫地獄との二なり。衆苦に逼られて、奇異に悲號して怨叫の聲を發し、又劇苦に逼られて更に大哭聲を發するが故にこれらの名あり。

【二〇】燒然。八地獄の一。又炎熱地獄ともいひ、火身に隨つて起り炎熾周圍して苦熱堪え難き故にこの名あり。

【二一】極燒然。八大地獄の一。又大熱地獄ともいひ、熱中の極なるが故にこの名あり。

【二二】無間。八大地獄の一。苦を受くること間斷なければ

[七]蓮華地獄に墮し　百千[八]倶胝數に　無量の苦惱を受くるも　愚癡にして厭怖無し。
[九]三界は樂有ること無く　皆苦の逼る所と爲る　衆生は癡に盲せられ　未だ甞て憂畏を懷かず。
愚夫は苦因に迷ひ　苦に於て了すること能はず　是の苦は因より起る　種の其の果を生ずるが如し。

苦樂に由りて拘せられ　[一〇]三有に於て往返す　唯だ寂滅の樂を除き　永く諸の憂惱を離る。
若し所生處に在り　能く諸苦を思念せば　是の苦復た生ぜず　苦を離れて安隱を獲ん。
若し人能く　地獄中の苦惱を憶念すれば　則ち彼の樂の中に於て　少分も著せず。
是の如く了知し已れば　世間悉く虛假なり　當に諸の過患を離れ　慧を以て善く修作すべし。
壽命は久住せず　瞬息刹那の間なり　彼の惡因を斷除し　常に衆善を奉行せよ。
住壽は堅に非ず　一切は心に由りて造ることを了せば　正行の所作に依り　邪活命を求めざれ。
未來世の苦惱に　何ぞ驚怖を生ぜざるや　癡索は　鎖に縈纏し　獄火は常に燒煮す。
癡は不善法と爲す　白淨の福業に違し　能く惡衆生を引き　長く苦海に淪む。
若し人罪を怖れず　多く諸惡を造るを樂はゞ　地獄の中に展轉して　獄火の爲に燒炙せられん。
一微細の火の　則ち能く諸物を燒くが如く　愚夫の罪少許なりとも　亦地獄に墮す。
若し人惡道を怖るれば　諸の罪行を作さず　能く正法を攝受し　惡を捨てゝ善に從へ。
惡友は[一一]放逸を生じ　[一二]無慚・[一三]無愧を起す　智者は常に之を遠ざく　彼は火の如く毒の如し。
苦法は魔障たり　樂法は所礙無し　二に於て善く分別せば　一切皆通達す。
彼の惡知識を遠け　樂ふて廣く　[一四]施・忍を行し　諸の衆生を　慈念す　是れ生天の要行なり。

地獄品　第十六

【七】蓮華地獄。不放逸品第六之餘の下の蓮華獄を見よ。
【八】倶胝。無常品第五之餘の下を見よ。
【九】三界。欲界色界無色界なり。無常品第五の下を見よ。
【一〇】三有。三界の界名。
【一一】放逸。不放逸品第六の下を見よ。
【一二】無慚。梵語 ahrikatā の譯。惡を作して自心に恥づることなきをいふ。十纏の一。
【一三】無愧。梵語 anapatrāpya の譯。世間を顧みず恣に暴惡をなすをいふ。十纏の一。
【一四】施忍。布施と忍辱、共に六度の一。布施品第二十二等の下を見よ。

卷の第七

説罪品　第十五之餘

明らかに罪福の相を了すれば　是を具智者と爲す　此に於て正解無きは　乃ち愚癡の所作なり。
善く諸の功德に達し　過惡に於ても亦然なり　二種を實の如くに知れば　常に樂分を獲ん。
若し人諸罪を造れば　冤と同處するが如く　樂ふて善利を行ずるは　良友に近づくが如し。
愛染の造作に由り　境界常に現前し　癡暗の中に展轉し　常に諸の楚毒を受く。
欲境は稠林の如く　貪愛の常に遊ぶ處なり　愚夫は法に達せず　何に因つてか能く出離せん。
彼の地獄の中に墮すれば　和合して衆苦を受く　當に知るべし罪を作らざれば　此に來至するに由無し。
善を行ぜば勝報を獲　無量の福莊嚴す　惡を爲せば自ら殃を招き　決定して能く免るゝこと無けん。
謂く自他の苦樂は　[一]三有の海に循環し　業風に由りて吹かる　波の水に依るが如し。
若し人[二]放逸を生じ　常に諸惡を造作せば　是の因緣を以ての故に　常に地獄に墮すべし。
地獄より脫るゝを得て　餘趣の中に生ずるも　復た欲の爲に牽かれ　昔の受くる所の苦を忘る。
此心は慣習に由り　暫く悟るも卽ち迷に還る　樂壞して苦復た生ずるに　後の患を思惟せず。
[三]五根の爲に誑らかされ　狂亂の佗境を侵し　流轉を受くること　窮り無きは　皆愛の纒縛に由る
[四]地獄・鬼趣　傍生及び邊夷に墮し　或は暫く天中に生ずるも　須臾にして還つて[五]退歿す。
諸趣の流轉を受けて　世間の車輪の如きは　皆業習の牽くに由り　而も疲厭を生ぜず。
設使ひ天中に生じ　極樂の快樂を受くるも　福盡くれば還つて退墮す　此れ皆[六]輪迴の行なり

【一】三有海。三有は三界に同じ。厭離自身品第三の下の有海を見よ。
【二】放の字。忍徵師校刻本に依る。原本には於。
【三】五根。眼耳鼻舌身の五根なり。訶厭五欲品第七の下を見よ。
【四】地獄鬼傍生。これを三惡趣又は三惡道といふ。地獄品第十六等の下を見よ。
【五】歿の字。忍徵師校刻本に依る。原本には殃。
【六】輪迴。說法品第二の下を見よ。

若し能く諸過を離れ　能く諸の善業を修せば　是の人は世間に於て　第一の福報を獲ん。
善く諸根を降伏すれば　世の尊重する所と爲り　此の一報の身を盡して　天中に生ずるを得ん。
若し人福德鮮く　初中後に善無く　罪惡常に增長すれば　則ち地獄に墮せん。
若し衆罪を造作せば　自ら其の惡果を招き　善を作せば見る所の如く　定んで樂報を受く。
不善の種子に由り　後に險難に生ず　昔作す所の[八〇]業の如く　因果皆相似す。
衆生の惡趣に墮すは　皆罪に因つて召す所なり　魚の彼の鉤を呑み　因つて免るゝを得ること無きが如し。
罪は苦の根と爲す　畢竟して當に除斷すべし　衆生は常に染習し[八一]臭の不淨に隨ふが如し。
常に當に愛樂を習ひ　能く諸の惡業を破するは　譬へば胡麻を壓するに　華壞するも香散ぜざるが如し。
常に[八二]五欲に樂著し　散亂にして安忍無く　懈怠にして虛妄言あれば　彼は則ち定んで善無けん
若し衆惡を造る者は　長夜の黑暗なるが如く　若し善法に安住するは　旭日の出現するが如し。
若し人嫉妬無ければ　此を善淨の行と爲す　愚癡にして衆罪を作れば　彼は則ち常に忿怒す。
船の少物を載すれば　至る所に則ち能く浮くが如く　衆生の罪若し輕ければ　則ち諸惡に沈むことを免れん。
惡知識を遠離せば　常に諸の快樂を獲　彼に於て若し隨順せば　則ち諸の險難を受けん。
善く業報を了知し　微細の毀犯をも離るれば　是の人罪に著せざること　空の泥に染まざるが如し。
未だ聞かざる者をして聞かしむるに　聞き已りて能く憶念せば　惡趣尙天に生ず　何ぞ況んや具智者をや。

【八〇】業。福非福業品第十三の下を見よ。
【八一】臭の宗。忍徵師校刻本に依る。原本には具。
【八二】五欲。訶厭五欲品の下を見よ。

ず。

若し諸善を修するを樂はゞ　最上の快樂を得ん　此の善は苦因に非ず　顚倒の受者無し。

無始劫より來た　善を作せば樂報を得　若し彼の惡因を造らは　定んで苦果を獲。

善を僞せば良朋に親しみ　罪を造らば惡友に近づく　賢善の人を憎嫉すれば　彼は則ち惡道に墮せん。

心に若し修善を樂はゞ　則ち諸の罪惡を遠ざく　是の人[七八]菩提に於て　掌中の如く遠からず。

謂く修作する所に於て　初中後皆善ければ　能く樂報を生ず　此を捨つれば則ち然らず。

是の故に諸罪を遠ざけ　善をして常に相續せしめよ　能く彼の惡を離るゝ者は　常に快樂を獲ん。

無始の生死の中に　數々に諸罪を受くるも　愚夫は癡に使せられ　而も疲厭を生ぜず。

欲に著して諸惡を造り　後の苦果を知らず　暫く適悅を生ずるも　長時に苦惱を受けん。

樂ふて諸罪を作る者は　世間共に輕鄙す　是の故に諸惡を離れ　善に於て廢せしむることなかれ。

無益は究竟に非ず　最上の苦惱を受く　是の故に彼の智者は　罪に於て常に遠離せよ。

若し人慈心を具すれば　則ち諸罪を造らず　惡を僞せば自ら殃を招き　作らずんば則ち受けず。

常に諸の罪惡を造るは　邪師邪敎に依る　若し彼の二種を離るれば　善く眞實の道に住せん。

愚夫は覺知せず　樂つて諸の惡行を造る　若し彼の過失を離るれば　常に勝處に生ぜん。

若し樂ふて衆罪を作れば　定んで業の牽く所と爲る　後の[七九]輪迴を怖れざれば　人身に於て得難からん。

若し人諸罪を怖れ　多く諸善を作すを樂はゞ　彼は能く菩提に趣き　最上の妙樂を得ん。

【七八】菩提。說法品第二の下を見よ。

【七九】輪迴。說法品第二の下を見よ。

初めは少罪を作ると雖も　後には則ち險道に墮す　癡彼の心を覆ふに由り　出で已りて而も復た造る。

小罪も防護せざれば　皆地獄の因と爲る　譬へば微少の火の　能く山林を燒くが如し。

罪に由つて惡趣に生じ　極重の苦惱を受く　彼は已に於て寃の如し　何ぞ能く寂靜を得ん。

若し人諸罪を造れば　則ち少樂も有ること無し　若し樂ふて樂を求むる者は、當に諸の善行を修すべし。

善を作せば善哉と稱し　惡を造れば皆輕毀す　福を修するは乃ち難しと爲し　罪に於て何ぞ容易なるや。

若し非法を造るを見　劣心の隨喜を生ぜば　彼の無智に由るが故に　苦を受くること復た是に過ぎん。

若し人衆罪を造り　諸の果報を積集せば　是の苦堪任し難し　惡に於て作すべからず。

衆惡を造るに由るが故に　定んで其の惡報を受く　是の故に當に遠離すべし　作らざれば則ち咎無けん。

若し諸罪を怖れざれば　則ち惡友に習近す　自ら造作するに由るが故に　感果も佗の受くるに非ず。

善を行へば善果を招き　惡を作せば惡報を受く　若し衆罪を造る者は　善に於て則ち有ること無し。

若し人邪見に著し　展轉して諸罪を生ぜば　刀杖火坑と雖も　彼と相似するもの無し。

若し人衆惡を離れ　常に善行を修せば　身語意清淨にして　菩提を去ること遠からず。

若し諸惡を造るを樂はゞ　極重の苦惱を受けん　造惡に由るが故に　而も能く樂果を得るには非

五欲は重[七三]障[七四]たり　能く智眼を覆ひ　常に諸の衆生をして　説法・正道を壊せしむ。
善く説法する者に於て　當に一心に諦聽すべし　是の人は法將たり　能く諸の魔軍を敵とす。
謂く[七五]四顚倒　及び世間八法に於て　自ら正慧を生ぜざれば　則ち彼の爲に欺誑せられん。
五欲は迅流の如く　漂淪せば出離すること難し　當に智の[七六]舡筏を以て　彼より能く超越すべし。
彼の愚癡の心に由り　常に諸欲に樂著せば　[七七]五趣の中に輪廻す　何ぞ能く解脱を得んや。
不如理の作意は　火の常に熾然するが如し　若し理の如く行ぜば　甘露もて熱を除くが如し。
謂く無明を積集し　久遠より生起するも　一智の明燈を以て　破滅して現ぜざらしむ。
若し人正智を具せば　則ち能く涅槃に趣き　無智にして貪癡を縱にせば　則ち懈怠を生ぜん。
若し智の光明を具せば　三毒の黑暗を壊す　是の故に當に一心に　戒を持し淨智を修すべし。
常に大智の火を以て　諸惑の薪を焚燒せよ　若し此の善根無くんば　三毒の爲に損はれん。
衆生は病疾に縈はられ　偃臥して命將に終らんとするも　癡迷にして所依無く　眷屬は徒に悲惱す。
多く放逸を作るに由り　常に愚癡の行を樂ひ　無量の惡因を爲し　衆苦の逼迫を受く。
是の三毒の過患は　諸の衆生を損惱す　若し正智相應せば　彼に於て悉く除遣せん。
當に知るべし彼の智火　能く煩惱の山を焚けば　惑業既に餘無く　常に寂靜の樂に棲む。

説業品　第十五

謂く彼の作意に由り　常に諸の罪惡を造り　愚癡にして了知せざれば　徒に後悔を生ぜん。
衆生は諸の罪を造り　皆苦報を受く　是の故に當に遠離し　常に樂果を求むべし。

【七三】五欲。色聲香味觸の欲なり。訶厭五欲品第七の下を見よ。
【七四】障の字。忍徵師校刻本に依る。原本には瘴。
【七五】四顚倒。不放逸品第六之餘の下四種顚倒を見よ。
【七六】舡の字。忍徵師校刻本には船に作る。
【七七】五趣。地獄、餓鬼、畜生、人、天なり。

邪見は諸善を障へ　少分も起るべからず　是の如く愚癡の人は　自ら險惡道に投ずるなり。
謂く邪見を起す者は　因に非ずして因を計す　彼は自ら欺誑せられ　沈淪し出づるの期無し。
若し人邪見に著せば　徒に其の苦行を修し　他人を誑惑し　愚癡にして我慢を生ぜん。
愚癡黑暗なるに由り　生死の大海に溺る　是の人は正因無く　苦を以て苦を捨てんと欲す。
彼の外道の說に隨へば　身を炙りて出離を求む　智者は心を炙らしめ　則ち能く諸惑を燒く。
若し具さに正智を修し　能く諸の煩惱を破せば　是を眞の丈夫と名づけ　諸の苦際を離るを得。
世の名聞に樂著して　互に相諂讃す　彼の淸淨の菩提は　邪見の得る所には非ず。
善に於て勤修せず　心に常に掉擧[六九]を生じ　利養に貪著するが故に　彼の淨戒を捨離す。
酒味に樂著せば　好んで外色を侵し　諸の衆生を殺害し　此に由りて地獄に墮せん。
惡知識に親近せば　邪見・兩舌[七〇]を起し　諸の威儀を護らず　三業に毀犯多からん。
我慢・無明[七一]に由り　說く所に眞實無ければ　此世佗生に於て　何ぞ能く快樂を得ん。
衆苦に沈溺せられ　此に滅し彼に復生ずるは　諸佛の說きたまふ所の如く　皆無明の行に由るなり。
若し人[七二]我慢　邪慢・增上慢起せば　此の苦の根本と爲す　畢竟して常に遠離せよ。
樂ふて諸惡を造作し　初中後に善無ければ　彼の無明の流に隨ひ　生死の大海に入らん。
若し人勝智を具せば　善く煩惱を息除し　能く一切の縛を解き　不滅の處に至るを得ん。
勝智を修するに由るが故に　則ち能く諸惑を斷ず　此に煩惱の縛は　智に由りて解脫を得と說く。
諸の煩惱は薪の如く　智火もて燒けば永く盡く　若し欲の境界を樂はゞ　何ぞ能く纏縛を離れんや。

【六五】傍生。畜生の異譯。
【六六】禪定。禪定品第二十六の下を見よ。
【六七】三受。梵語 tisro vedanāḥ の譯。內の六根が外の六境を感覺するに三種の別あるをいふ。一に苦受、二に樂捨、三にその何れも非る捨受なり。
【六八】三業。身業、口業、意業なり。身口意の三業といひ、又身語意、身語心ともいふ。
【六九】掉擧。厭離不善品第四の下を見よ。
【七〇】兩舌。離惡語言品第十二の下を見よ。
【七一】無明。伏除煩惱品第一の下を見よ。
【七二】我慢。邪慢。增上慢。我ありと我所有ありと執して心をして高擧ならしむるを我慢といひ、惡行を成就し惡を恃んで高擧するを邪慢といひ、未だ得ざるを得たりと謂ひ未だ證せざるを證せりと謂ふを增上慢といふ。

す。

諸天は樂損を爲し　人世は匱乏の苦あり　地獄は常に燒然し　[六五]傍生は互ひに相噉ふ。
餓鬼は飢渴に逼らる　皆彼の癡に由るが故に　長く輪廻に處す　何ぞ曾つて少樂有らん。
愚癡にして欲樂に著し　樂に由りて而して苦を受く　善知識に近づかされば　正法の救護無し。
若し人眞實を具し　常に正法を聞くを樂ひ　諸の[六六]禪定を修習せば　彼は則ち憂苦無けん。
諸佛は正法を宣べたまふこと　燈の常に照明するが如く　諸の衆生を慈念したまふこと　彼の父母の如きに過ぎ。
衆生は三因に由り　三種の過失を造り　三界の中に循環し　[六七]三受常に相逐ふ。
三業に由りて起され　三惡の險難に趣く　衆生は樂に著するが故に　三有に馳騁す。
若し三寶を尊重せば　當に三菩提を得べし　三種の見を遠離せば　則ち諸苦を生ぜず。
彼の晝夜の中に於て　三時に常に觀察せよ　謂く彼の老・病・死　三種の過失の藏なり。
[六八]三業に邪思を離れ　善く三平等に住せば　輪廻に著せず　永く諸の憂惱を離れん。
彼の道・非道　及び空・有等の相に於て　慈心もて善く觀察せば　當に無上道を證すべし。
是の人意清淨に　諸の染欲に觸れず　永く諸の垢濁を離れ　解脫の安樂を得ん。
三有の貪求を離れ　常に正念を生ずれば　是の人は正道に於て　決定して退轉無けん。
衆生は癡に蔽はれ　智に於て通達せず　無量の貪愛を起し　常に苦の爲に纏縛せらる。
懈怠にして慚愧無く　惡知識に習近せば　地獄の種子と爲る　智者は善く防護せよ。
彼の無慚愧に由り　常に衆罪を造作せば　後に險道に墮し　徒に悔惱を生ぜん。
憍慢・瞋恚　嫉妬幷びに覆惱を起し　愚癡にして信根無くんば　何ぞ能く善道を生ぜんや。
酒を嗜み復た財を貪れば　邪見の妄語を起し　常に碜毒の因を行じ　定んで地獄の報を招かん。

念處、受念處、心念處、法念處にして、常樂我常の四種顚倒を對治す。
【五二】 三際。過去、現在、未來をいふ。
【五三】 五欲。訶厭五欲品第七の下を見よ。
【五四】 煩惱。伏除煩惱品第一の下を見よ。
【五五】 三寶。一に佛寶。二に法寶、三に僧寶なり。
【五六】 寂靜。寂靜品第二十八の下を見よ。
【五七】 輪廻。說法品第二の下を見よ。
【五八】 三有。三界といふに同じ。伏除煩惱品第一の下を見よ。
【五九】 梵天。梵語brahma devaの譯。色界の初禪天なり。欲界の婬欲を離れ寂靜清淨なれば梵天といふ。此の中に三天あり。一に梵衆天、二に梵輔天、三に大梵天なり。
【六〇】 解脫。說法品第二の下を見よ。
【六一】 三世。過去、現在、未來の三世なり。
【六二】 天。無常品第五の下を見よ。
【六三】 地獄畜生餓鬼。これを三惡趣といふ。地獄品第十六等の下を見よ。
【六四】 三有の海。厭離自身品第三の下の有海を見よ。

よ。

正智の思惟を以て　諸の[五四]煩惱を伏斷せば　斯れを具智の人と爲す　世々常に安隱なり。

智の能く諸惑を斷ずること　火の乾薪を焚くが猶く　正智若し增明せば　[五五]三寶をして顯現せしむ。

若し智の境界を樂はゞ　常に[五六]寂靜の法に住せよ　煩惱は毒蛇の如く　則ち能く諸善を害す。

若し眞實の見を具せば　能く自他を利し　老死の過患を離れ　最上の寂靜に住せん。

若し[五七]輪廻を樂はゞ　常に彼の爲に纒縛せらる　是の煩惱の寃賊は[五八]三有に遍く逼迫す。

若し人佛教を知り　衆生の爲に演說し　常に純淨の行を修せば[五九]梵天に生ずることを得ん。

若し三毒を厭離し　常に諸佛を供養せば　彼の輪廻を破壞すること　槁木を燃すが如くならん。

若し人苦因を知りて　而して諸罪を造らざれば　無量の煩惱の聚　彼に於て能く縛することなし。

智は勝れたる光明たり　癡は極まれる黑暗たり　若し能く善く分別せば　此を說いて智者と爲す。

若し癡の過失を離るれば　則ち諸の險難なし　癡の爲に覆はるれば　何ぞ能く[六〇]解脫を得んや。

寧ろ猛火に觸れ　及び毒蛇と共に處るも　善く寂滅の樂を求め　癡と倶なるべからず。

愚人は正智無く　盲の黑暗に處るが如く　輪廻を怖畏せず　常に非法の行を造る。

衆生は癡に誑らかされ　常に愛染を起し　世間の貧窮を受け　衰老に逼迫せらる。

[六一]三世の業果に由り　地獄より[六二]天に生じ　或は天より畜生に墮し　或は餓鬼の報を受く。[六三]

衆生は彼の貧に由り　業に隨つて諸趣に往き　復た癡羂に拘せられ[六四]三有の海に輪廻す。

無始より諸の罪を造りて　種々の生死を受くるも　彼の慣習に由るが故に　曾つて疲倦を生ぜ

觀ずるをいふ。

【四五】四瀑流。梵語 catvāra oghāḥ の譯。四流、四大暴河ともいひ、善品を漂流せしむる煩惱を四種に分てるもの。欲瀑流、有瀑流、見瀑流、無明瀑流なり。

【四六】八聖道。敎誡比丘品第三十の下を見よ。

【四七】二種生死。分段生死と變易生死なり。

【四八】十力。梵語 daśa-balāni の譯。これに二種あり、一に處非處智力、二に業異熟智力、三に靜慮解脫等持等至智力、四に根上下智力、五に種々勝解智力、六に種々界智力、七に遍趣行智力、八に宿住隨念智力、九に死生智力、十に漏盡智力、これを如來の十力といひ、一に深心力、二に增上深心力、三に方便力、四に智力、五に願力、六に行力、七に乘力、八に神變力、九に菩提力、十に轉法輪力、これを菩薩の十力といふ。

【四九】菩提。說法品第二の下を見よ。

【五〇】眞俗二諦。眞諦及び俗諦の併稱。諦は審實不虛の義で、俗事虛妄の道理を俗諦といひ、涅槃寂靜の道理を眞諦といふ。

【五一】四念處。三十七覺支の一科。又四念住ともいふ。身

唯だ自業を親と爲す　佗に於て何の得る所ぞ　善く其の心を調伏し　理の如くして安住せよ。
業を以て自ら莊嚴するは　則ち餘の作す所に非ず　百生千生に於て　而も未だ曾つて暫くも捨てず。
若し生滅　及び眞實の因果を了知せば　則ち諸の罪苦を離れ　不滅の處に至るを得ん。
造作する所の諸業は　[34]迂曲して常に相隨ひ　輻の彼の輪に依るが如く　世間に於て旋轉す。
當に慧を以て揀擇し　理の如くにして修作すべし　是を[35]調御師と爲す　永く諸の煩惱を脫せん。

敎示衆生[36]品　第十四

謂く[37]貪・恚・癡の垢　及び老・病・死の苦　此の六は深寃の如く　能く諸の[38]含識を損ふ。
又[39]五境は賊の如く　能く功德の財を劫す　初めは彼の親朋の如く　後には則ち寃害を爲す。
心に由りて[40]放逸を生じ　欲境に於て鶩馳し　能く諸の衆生をして　地獄・餓鬼に趣かしむ。
貪は其れ熾火と爲し　瞋は則ち彼の寃の如く　黑暗を說いて癡と爲す　是の三皆畏るべし。
謂く三十六業　及び彼の四十行　[41]九十八煩惱は　三界に周遍す。
[42]十二因緣　[43]一百八煩惱を離れ　善く法・非法を解せば　常に無量の樂を獲ん。
[44]十六現觀　及び彼の十六空に於て　我法の二相を了せば　是を名づけて智者となす。
善く道・非道　及び彼の四究竟に達せば　[45]四瀑流を解脫し　能く諸の罪垢を滅せん。
[46]八聖道を修習せば　[47]二種の生死を出で　彼の[48]十力を顯現し　[49]菩提の果を證するを得ん。
[50]眞俗二諦　及び彼の[51]四念處を明らかにせば　[52]三際の無知を除き　魔の伏する所と爲らず。
是の[53]五欲の境界は　初めは甘きも後には則ち苦く　諸の險難に墮せしむ　是の故に常に遠離せ

【三四】迂の字。忍徵師校刻本に依る。原本には遥。
【三五】調御師。無常品第五の下を見よ。
【三六】衆生。梵語 sattva（薩埵）の譯。新譯には有情といふ。
【三七】貪恚癡。貪欲瞋恚愚癡の略。これを三毒煩惱といふ。
【三八】含識。心識を含有するもの、即ち衆生をいふ。
【三九】五境。厭五欲品第七の下を見よ。
【四〇】放逸。不放逸品第六の下を見よ。
【四一】九十八煩惱。見惑八十八、思惑十を合したるもの。
【四二】十二因緣。dvādaśāṅga pratītyasamutpāda の譯。衆生が三世にわたりて六道に輪廻する次第緣起を說きたるもの。一に無明、には行、三に識、四に名色、五に六入、六に觸、七に受、八に愛、九に取、十に有、十一に生、十二に老病死なり。
【四三】百八煩惱。九十八煩惱に無慚、無愧、昏沈、惡作、惱、嫉、掉擧、睡眠、忿、覆の十纏を加へたるもの。
【四四】十六現觀。現觀は梵語 abhisamaya の譯。現前に境を觀ずるの意。又聖諦現觀ともいひ、見道苦法智忍等の十六心に於て分明に等しく境を

衆生は業風に由り　吹かれて所生の處に至る　彼に於て愛樂を生ぜば　則ち業の拘する所と爲る。
唯だ善不善の業のみ　後生に常に相逐ふ　猶ほ其の華を採るに　彼の香則ち隨つて至るが如し。
衆生の自業の使は　生滅に隨つて流轉す　譬へば彼の鞦韆の　昇墜して休息無きが若し。
天・人・修羅[三一]　六趣に於て往返し　癡の爲に覆はれ　眞實の見を生ぜず。
又世間の輪の如きは　手に依りて旋轉するも　彼は業の催す所と爲り　速疾なること與等無し。
業に纒はるゝに由り[三二]　十二支和合す　是を緣生輪と名づけ　世間に知る者無し。
諸天は癡に覆はれ　常に欲境に著するも　唯だ業果のみ長く存し　彼の樂は積聚無し。
彼は善業の　良藥・明燈の如く　暗を除き輕安を獲　能く爲に歸救を作すを知らざるなり。
堪へ難き極苦　及び種々の怖畏を受くるも　是の業は大力有りて　而も疲勞を生ぜず。
天に滅して人中に生じ　人に歿して地獄に墮し　獄より出でて[三三]　傍生と作り　復た鬼趣に墮す。
皆彼の業風に由り　飄轉して定無きに　彼の愚癡の衆生は　未だ嘗て覺悟を生ぜず。
衆生は業車に乘り　能く三界を行く　餘の乘は則ち然らず　速疾なること相似なるもの無し。
若し所作淸淨なれば　則ち其の福報を受く　唯だ彼の現生に於て　則ち其の自業を知る。
彼の業は彩繪の如く　皆心より起るなり　晝く所周ねからざる無く　長時に滅せず。
謂く廣大の福報は　皆業より生ずるなり　福業若し盡くるの時は　彼の樂則ち散壞す。
善に於て若し廢せされば　彼の樂則ち增長す　是の故に善因に於て　展轉して常に修作せよ。
彼の百千生に於いて　形軀骨鎖を受け　業の纒ふ所と爲り：：曾つて安樂の想無し。
若し種々の因を造らば　則ち種々の報を受く　當に此の生の中に於て　諸の善行を勤修すべし。
業晝は極めて工巧に　皆心に依りて造作す　業盡くれば則ち亡じ　刹那も久住せず。

[三一]　六趣。六道に同じ。

[三二]　十二支。十二因緣をいふ。

[三三]　傍生。畜生の異譯。

愚夫は厭足無く　樂ふて諸の欲樂を作し　彼に厭無きに由るが故に　則ち自ら衰滅を取る。
現生の福報に於いては　業盡くれば樂も亦亡ぶ　多く放逸を作るに由り　臨終に始めて覺知す。
無量の分別を起し　彼の種々の業を造り　各業の因緣に隨つて　而も其の果報を受く。
衆生は業の爲に驅られ　或は業の爲に招かれ　或は快樂を生じ　或は苦報を招く。
若し天中に生ずるを得て　五欲の妙樂を受くるも　福盡きて退墮するに　[二七]死に及んで能く救ふものの無し。
又彼の輪廻の因は　皆虚妄より起る　佛は眞實の見を以て　解脫の正道を示したまふ。
昔諸の善業を修せば　[二八]戒・定・慧相應す　此れ輪廻の因に非ず　清淨の樂に安住す。
是の福報は無盡なり　放逸を作すべからず　當に畢竟して一心に　殊勝の行を增修すべし。
若し人福報を具せば　當に諸の不善を遠ざくべし　善を爲せば聖道を蹈み　惡を作せば殃咎を招かん。
若し人善行を作すに　勇悍にして退屈すること無ければ　常に寂靜の樂を獲　能く菩提の道に趣かん。
若し人放逸に著し　樂ふて諸の不善を作せば　彼の福則ち隨つて滅し　當に惡道に墮すべし。
是の業は[二九]鞦韆の如く　皆心によつて變化す　衆生は癡に誑らかされ　常に彼に依りて轉ず。
生死は其れ輪の如く　[三〇]十二處は輻の如く　世間に旋轉す　皆心に使せらるゝが爲なり。
心に由つて善業を造り　引いて天中に生じ　境界に迷ふ所と爲り　後苦を思惟せず。
樂及び非樂に於て　當に審に慮りて而して行ずべし　苦樂の業殊りと雖も　皆因緣より起るなり。
世間に樂有ること無く　皆業の爲に牽かる　樂壞し苦現前するは　心に由りて造作す。

【二七】死の字。忍徵師校刻本に依る。原本には此。

【二八】戒定慧、これを三學といふ。

【二九】鞦韆。ぶらんこ。

【三〇】十二處、三科の一。眼耳鼻舌身意の六根と色聲香味觸法の六境となり。色に迷ふこと偏に多きものゝ爲に說くところなり。

彼若し善を修せされば　業盡くれば即ち退墮し　衰相其の前に現ず　油盡きて燈滅するが如し。
此に滅して彼に復た生じ　三界を循環し　業風に隨つて吹かるれば　何に由つてか能く出離せん。
若し人智自在なれば　則ち輪廻に著せず　彼の業繩の爲に　少分も纒縛せられず。
假使へば蓮幹絲もて　積みて[二三]須彌を量るが如し　彼の業索も亦爾り　能く智者を縛する無し。
智者は輪廻に處するも　須彌の動ぜざるが如く　諸の憂惱を遠離し　諸の恐怖を解脱す。
諸佛の見たまふ所の如くば　因果常に相似す　若し作業廣大なれば　彼の報亦同等なり。
數々に諸業を造り　各々に其の果を受く　是の如く造作するに由り　則ち彼の爲に纒縛せらる。
若し善業を造るが故に　定んで彼の勝報を獲　色力命身を嚴り　人の爲に敬はる。
福業豈能く久しからん　倏爾として燈光の若し　彼の業報差ふこと無く　皆心に隨つて造作す。
一切の諸の衆生　業盡くれば命必ず喪ひ　身は火の爲に燒かれ　少しの安住も有ること無し。
又彼の諸の衆生は　心界差別するに由り　各諸業を造作し　三有に纒縛せらる。
世間の瘖瘂の人は　不善道を行ずるに　[二四]由る　彼樂報を希ふも　水を攪して火を求むるが如し。
若し所作の善無ければ　樂果則ち生ぜず　常に[二五]放逸を樂はゞ　決定して功德無けん。
業索の牽く所と爲るも　暗鈍にして知覺無し　彼の索は能く斷ずるもの無く　苦盡きて方に解脱す。
衆生は業に由るが故に　輪廻に於て往返す　此に滅し彼に生ずるを見るに　皆因によつて得る所なり。
愚夫は[二六]五欲に著し　未だ曾つて覺悟を生ぜず　貪愛相資くるに由り　何ぞ苦の邊際を窮めん。

【二三】須彌。須彌山なり、伏除煩惱品第一の下を見よ。

【二四】由の字。忍徵師校註に疑ふべしといへり。

【二五】放逸。不放逸品第六の下を見よ。

【二六】五欲。訶厭五欲品の下を見よ。

愚夫は因を修せずして　妄に樂の報を希ふも　譬へば沙中に於て　酥を求むるも得べからざるが如し。
若し彼の善因を修せば　則ち快樂を生ず　因無くして報を獲んとするは　樹を離れて果を求むるが如し。
衆生は業に由るが故に　報を受くるに定無し　沙を空中に擲ぐるに　風に隨つて飄墮するが如し。
彼の聚散の因縁　苦樂も亦復た爾り　皆業に由りて牽かる　罪に於て造るべからず。
無邊の業の種子[二]　六道の中に變化するは　皆心より生ずる所なり　是佛の眞實の說なり。
是心調伏し難く　諸業を造作するを樂ひ　彩の如く衆生を畫き　唯だ佛のみ能く知見したまふ。
一穀の種子の　能く百千萬を生ずるが如く　是業網も亦然り　能く測量する者無し。
線の禽を繫ふるに　翔ぶと雖も復た能く至るが如く　彼の業の衆生を拘するに　往返すること亦是の如し。
愚夫は正見無く　罪福の相に達せず　三有の中を循環し　唯だ苦のみを己の有と爲す。
若し善惡の業を了せば　則ち生滅の法を悟る　斯を眞實の人と爲し　能く彼岸に到る。
若し善知識を離れば　則ち惡友に親近し　法を棄て世財を貪り　後の苦果を信ぜず。
業報を了せざるに由り　則ち罪福を知らず　彼の愚癡の有情は　長く熱惱を受けん。
世智は我慢を生じ　常に無義の言を說き　業の因縁を悟らず　常に輪廻の苦を受けん。
人の久しく囚執せらるゝに　偶ゝ其の釋放を得たるが如く　彼の親眷朋屬　喜樂して相慶慰す。
地獄の中に處り　業盡きて解脫を得　先の善業力に由りて　天上に生るゝを得るが[三]猶し。
天中の快樂を受け　無量の莊嚴を具し　彼に於て復た因を修せば　轉た其の勝處に生ぜん。

【二】六道。地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天の三界六趣をいふ。

【三】猶の字。忍徵師校註に疑ふべしといへり。

業索の拘する所と爲れば　百千生に往返し　世間の車輪の機關に由りて轉ずるが如し。
彼の三毒は堅牢にして　衆生出離すること難し　貪等の過患を離るれば　則ち善く三有を超ゆ。
若し人慶快の心もて　彼の殊勝の行を修せば　是の因緣を以ての故に　莊嚴勝報を受けん。
業は彼の畫師の　善く諸の形像を圖するが如く　或は天上・人間　畫く所盡さゞる無し。
彼の畫は數量無く　皆業に因りて變化し　衆の彩飾を施さず　亦能く見る者無し。
壁毀るれば畫も亦無く　畢竟して皆散壞す　此の身は滅謝すと雖も　彼の業は則ち長く在り。
衆生は癡に覆はれ　業の籠縛する所と爲り　無始の生死の中に　陶輪の如く常に轉ず。
風日煙塵の如き　畫に於て則ち能く損ふも　彼の招く所の業緣は　未だ[一七]嘗つて暫くも棄てず。
當に過去に　造る所の諸の不善の　在々處々に於て　作すに隨つて自ら受くるを觀察すべし。
謂く上中下の　諸の微細の惡業に於て　能く悉く解脫せしむる　是れ最上の智者なり。
又彼の諸の有情　善不善を造作せば　樂及び非樂に於て　決定して當に獲得すべし。
若し佛の言に違背すれば　彼を愚癡者と爲す　無量の苦惱に於て　長時に解脫なからん。
[一八]天・人・阿修羅　地獄・鬼・畜生　皆彼の業に由るが故に　當に智慧に隨つて行ずべし。
染慧の分別に由り　無量の惡業を造り　各々に諸趣に往くなり　受報悉く知見せよ。
若し人善業を造れば　後に人天に生ずることを得　不善は[一九]三塗に溺るゝこと　俳優の服を更ふるが如し。
業線は極めて堅長　遍く三有を縛す　衆生の自業に由ること　輻の車[二〇]輞に依るが如し。
或は天中に生じ　或は險難に沈む　輪迴は暫くも停らず　業に隨つて報を受く。
有情の天中に生ずるは　皆善業に從つて得　妙色蓮華の　清淨の池沼に出るが如し。
若し人善業を造れば　決定して破壞に非ず　常に勝處に生じ　感果意の如くなるを得ん。

【一七】嘗の字。忍徵師校刻本に依る。原本には常。

【一八】天人阿修羅地獄鬼畜生　これを三界六道といふ。前三は無常品第五、後の三惡趣は地獄品第十六等の下を見よ。

【一九】三塗。塗は途の義、一に火途、地獄趣の猛火に燒かるゝ處。二に血途、畜生趣の互に相食む處。三に刀途、餓鬼趣の刀杖を以て逼迫せらるゝ處なり。

【二〇】輞の字。忍徵師校刻本には網に作る。

ん。

若し人佛の敎に於て　道・非道に達せず　癡にして正慧無きに由り　常に熱惱を生ず。
他の如意の樂を見るに　彼の樂は因より生ず　諸法皆唯心　各々に自行に隨ふ。
有爲は皆無常なること　水泡の久に非ざるが如し　應に當に善行を行じ　二世の饒益を爲すべし。
世間の業報　及び諸天の退墮を覩るに　若し放逸を樂ふ者は　彼定んで少樂も無し。
業索は極めて修長　堅固にして脫れ難く　彼の愚夫を纒縛し　[13]菩提を去ること則ち遠からしむ。
智慧は利劍の如く　彼に於て能く除斷し　愚癡熱惱を離れ　[14]彼岸に至らしむ。
業に由りて彼の果を受くるは　善惡の相應するに隨ふ　智者は暫くも忘れず　因果常に決定す。
因緣和合するに由りて　肢分骨鎖を生じ　諸の有情を纒縛し　輪迴して解脫すること無からしむ。
彼の纒縛に由るが故に　逼迫して堪任し難し　當に解脫の因を修し　諸の苦際を盡すべし。
彼の業は善く鉤[15]召し　復た能く衆生を牽き　在所生處に於て　業に隨つて報を受けしむ。
彼の業果は輪の如く　[16]三有に於て旋轉す　當に諸の過患を離れ　常に殊勝の行を修すべし。
布施は淨器の如く　戒勤の慧水を貯ふ　智者は善く持用し　三有の業火を滅す。
若し彼の三業を縱にすれば　三毒則ち隨轉す　三界の中に馳騁するは　癡の三種の行に由る。
一切の諸の衆生の　苦の逼迫する所と爲るは　皆自の作業に隨ひ　常に依止して住す。
若し彼の善因無ければ　何ぞ能く少樂も有らん　業に隨つて彼の報を受くること　種の其の果を生ずるが如し。
又陽春時の　能く卉木を滋榮するが如く　彼の果は因より生ず　因無ければ則ち起らず。

【一三】菩提。說法品第二の下を見よ。
【一四】彼岸。涅槃をいふ。不放逸品第六之餘の下を見よ。
【一五】召の字。忍徵師校刻本に依る。原本には名。
【一六】三有。三界に同じ。

愚夫は心散亂し　欲に於て常に樂著し　正慧揀擇無ければ　諸惡則ち增長す。
彼の著樂の衆生は　癡の爲に覆はれ　惡報其の前に現ずれば　則ち黑暗の處に墮す。
佛の正法に於て　心に欣樂を生ぜざるに由り　彼の地獄の中に在り　長時其の苦を受く。
無始の輪廻より　業網に纒縛せられ　此に滅し彼に復た生ずるは　皆心に由りて造作す。
或は天より墮落し　或は地獄より天に生じ　或は人中に生じ　或は餓鬼の報を受く。
謂く彼の苦樂の因は　皆已に由りて造る所　各互に相生起す　自在天[九]の作るには非ず。
輪廻生死の中に　無數の惡業を造るは　唯だ佛のみ當に證知すべく　餘智は了する能はず。
若し非法善を招けば　此の因を顚倒と爲す　當に知るべし受くる所の果は　皆因と相似す。
若し因果相應すれば　則ち正理に順ず　是の有爲[一〇]の諸法　緣起[一一]に從はざるは無し。
未だ罪無き者の　而も地獄に趣くを見ず　定んで惡業に由るが故に　則ち其の苦報を受くるなり。
決定して諸惡を造り　堅著にして悔無く　彼は業の爲に縛され　則ち惡道に墮す。
未だ不善業の　樂果を引生するを見ず　唯だ佛の眞實の言のみ　彼の對治の道を示したまふ。
燈に因つて光有るが如く　業に由りて報を招くが如く　諸有の所作は　皆因緣[一二]より生ずるが故なり。
謂く彼々の因に由り　各々に果隨轉す　善く是の如きの相に達せば　則ち眞實の見と名づく。
自在天の　因無くして建立するに同きに非ず　諸法は皆緣より生ず　是れ如來の說きたまふ所なり。
無始の輪廻より　業報常に相似す　顚倒して分別するに非ず　因緣に從つて有るなり。
衆生は癡に迷はされ　愛欲に於て厭ふこと無し　若し業報を了せざれば　何に由りてか寂靜を獲

【九】自在天。大自在天の略、大自在は梵語 maheśvara 摩醯首羅の譯。色界の頂にありて三千界の主なりといひ、自在天外道の主神なり。
【一〇】有爲。無常品第五之餘の下を見よ。
【一一】緣起。梵語 pratītya-samutpāda の譯。因緣によりて生起するをいふ。
【一二】因緣。不放逸品第六の下を見よ。

卷の第六

福非福業品　第十三。

造作する所の[一]諸業　謂く福及び非福は　能く諸の有情を縛し　定んで各其の報を招く。
愚夫の心は魚の如く　愛波に依りて住す　笑を含んで諸惡を造り　悲啼して而も自ら受く。
昔は同じく諸罪を造る　謂く僕使營從なり　後に其の苦報を受くるに　彼則ち相代ること無し。
親眷朋屬に由り　和合して衆罪を造るも　他世に於て相隨ふは　唯だ作れる所の惡業なり。
華の至る所の處に　其の香を捨離せざるが如く　善惡の業も亦然り　在處に常に隨逐す。
衆生は自業に由り　[二]因果常に相應す　善を作せば諸天に生じ　殊勝の樂を受けん。
若し惡業の果報は　則ち極重の苦を受く　[三]三惡趣の中に墮せば　彼の苦相似するもの無けん。
謂く彼の[四]三業に由り　造作すること[五]三界に遍く　常に[六]三毒を起せば　則ち三惡道に墮せん。
諸の愚夫の異生するは　因緣和合するに由り　三界の中に流轉するは　皆自業に隨ふ。
自作し他受くるに非ず　他作し我受くるに非ず　當に知るべし造る所の業は　報を招くこと唯決定す。
業は衆多有りと雖も　受處に其れ[七]九有り　彼互に相資するに由り　四十種の惡を成す。
自ら一の業を造作せば　定んで其の一執を受け　險道の中に墮せば　則ち其の伴侶無し。
或ひは他の爲に勸請せられて　惡業を造作するも　後に苦報を受くる時　彼則ち救ふこと能はず。
業熟すれば初後　及び此生他世に非ず　謂く此に於て造作し　或ひは餘處に於て受く。
善惡の業に由るが故に　[八]輪迴に隨つて流轉し　業風の爲に吹かれ　苦樂の報を招く。

【一】諸業。業は梵語 karman の譯。有情の身口意の造作をいふ。

【二】因果。因は生起の原因となるものをいひ、果は其の因によりて惹起されたるものをいふ。

【三】三惡趣。三惡道といふも同じ、地獄と餓鬼と畜生となり。

【四】三業。身業口業意業なり。身語意又は身語心の三業ともいふ。

【五】三界。欲界色界無色界なり。無常品第五の下を見よ。

【六】三毒。貪欲と瞋恚と愚癡とをいふ。

【七】九。三界九地の意。欲界を一地とし、色界無色界を各四地に分つと九地を成ず。

【八】輪廻。說法品第二の下見をよ。

是の故に應に一心に　常に眞實の法を念ずべし　是の人は最上の　不生不滅の處を得ん。

此の眞實の功德は　能く寂靜の樂を生ず　智者は妄言を離れ　諸佛に稱讃せらる。

若し人虚妄の言あれば　一切衆を惱亂し　衆の怒る所と爲り　活くと雖も即ち死せるが如し。
若し人虚妄の言あれば　利刀もて傷割するが如く　眞實の功德を壞す　彼の舌何ぞ墮せざらん。
若し人虚妄の言あれば　則ち熾火の聚の如く　亦彼の毒蛇の如し　皆其の口より出づるなり。
妄言の毒は第一たり　勝地にも諸毒を生じ　諸の衆生を損惱す　地獄は彼より先に得。
若し人虚妄の言あれば　諸惡其の舌に集り　自らの口中より　便利膿血を出すが如し。
是の人の舌は索の如く　能く牽いて惡道に趣く　法の橋梁を破壞するは　皆妄語を說くに由る。
佛に非ず淨戒に非ず　父に非ず亦母に非ず　是の人は惡慧に由り　苦に於て能く救ふもの無し。
若し人妄語を說けば　彼速かに自ら輕慢せられ　智者は咸な捨て去り　諸天皆遠離せん。
語言を攝護せざれば　常に瞋恚を生ず　斯の人は福德鮮く　至る所に則ち苦多し。
他の樂は則ち嫉を生じ　他の惡は掩ふこと能はざれば　當に知るべし是の如きの人は　定んで惡道に墮す。
愚人は空しく妄に說きて　而も修作すること能はず　彼の言行相違すれば　當に無量の苦を受くべし。
自ら正法に住せず　他の密事を談ずるを樂はゞ　是の人は世間に於て　高心にして智慧なけん。
若し人正敎に於て　違背して信ぜざれば　十萬[三三]尼浮陀に　常に地獄の報を受けん。
若し人虚妄の言あり　願ふて諸惡を造るを樂はゞ　[三四]五十六浮陀に常に　地獄の報を受けん。
樂ふて彼の惡因を作り　見濁ありて眞實無ければ　是の如き愚癡の人は　轉た其の黑暗を增さん。
眞實は第一の財なり　堅固にして能く動するもの無く　之に依つて天上に生じ　常樂の門に登る。

【三三、三四】尼浮陀。梵語 niyuta（兆、百萬と譯す）或は vibhūta（無量、多と譯す）か。或は又尼を阿の誤りと見て阿浮陀 abda（一ケ年と譯す）とせば意を通じ得べし。又浮陀は上の一字を略せしものなるべし。五十六は寧ろ五千六の誤りなるべし。

妄想にして諸惡を造り　愚癡にして暫くも捨つること無ければ　自ら諸の熱惱を受け　油を熾火に沃ぐが如し。

妄想にして諸果を求むるも　因無くんば何ぞ得る所あらん　衆苦之に由りて生ず　畢竟して當に遠離すべし。

又愚癡の衆生は　樂ふて損惱を行ず　其の心常に恚恨あれば　則ち彼の毒虺の如し。

自性唯險惡に　常に他を捶打せば　熱惱鎭へに燒然し　彼は定んで少樂も無けん。

名聞・利養無く　親眷・朋屬無く　心に損害を樂ふに由り　人神咸な護らず。

若し損害を樂ふ者は　黑暗の聚の如く　他をして恚惱を生ぜしむ　此を說いて深咎と爲す。

不害は最も善と爲す　能く衆生を安樂にす　常に是の如きの因を修せば　當に菩提の道を得べし。

口には正法を說くと雖も　其の心唯不善なれば　世の盜者の如きに非ず　此れ法中の大賊なり。

若し善く法を說く者は　當に說の如くにして行ずべし　則ち煩惱の垢を離れ　眞實の果の趣くを求めよ。

妄語に由るが爲の故に　多く世俗の事を說き　無量の出世の法は　少分も解すること能はず。

當に眞諦を談るを樂ふべし　世俗の言を習はざれ　若し世俗に依る者は　輪廻（りんね）の縛する所と爲る。

樂ふて非福の業を作せば　決定して樂の因無く　出世の法財を離れん　是れ智者の說く所なり。

師は利益の言を示すも　愚癡にして敎を受けざれば　後に苦難を招き　其の心徒に悔惱せん。

若し人眞實の言あれば　心中に常に喜悅あり　諸天咸な衞護し　世間皆恭敬（くぎやう）せん。

世恭敬するに由るが故に　善名稱を增長し　常に眞實の行を修し　定んで天中に生ずるを得。

刀火毒藥の如く　羂索・鬼使の如し　當に知るべし彼の妄語は　苦報を招くこと實に重し。
若し業果を怖れざれば　命終に皆現前す　當に彼の惡言を離れ　常に眞實の說を樂ふべし。
然らざれば則ち衆苦を集め　下劣の種族に生じ　兩舌互ひに相生じ　展轉して窮極無けん。
彼の兩舌の惡報は　則ち地獄に墮し　念念に當に燃然し　自ら其の極苦を受く。
諸の秘密の敎に於て　心を潛めて破壞す　兩口兩舌の如き　已過常に覆蔽す。
若し人兩舌を離れ　決定の寂靜に任せば　[三一]眷屬の纒縛を離れ　和合の想を生ぜざらん。
兩舌は惡蟒の如く　常に窟穴に處す　若し彼の過を離るゝ者は　則ち諸の災橫なけん。
若し人惡言を發すれば　則ち[三二]鹻鹵地の如し　舌に由りて毒を生ずるが故に　衆人に皆棄てらる。
利なる刀杖を見るが如く　何ぞ怖畏を生ぜざるや　若し彼の惡言を樂はゞ　則ち爲に損害せられん。
舌は彼の熾火の如く　心は則ち其の薪の如く　惡言は猛焰の如く　諸の衆生を焚燒す。
若し人愛語を以てせば　世間咸な恭敬し　見る者歡喜を生じ　之を視ること父母の如くならん。
愛語は最も善たり　能く殊勝の樂を生じ　無盡の諸の熱惱をして　皆清涼ならしむ。
愛語は能く天に生ず　勝れたる功德の聚たり　亦彼の良朋の如し　是れ最上の寂靜なり。
眞實の經典に於て　違背して修習せざるは　諸佛の觀たまふ所の如くば　彼の舌は唯だ片肉なり。
常に眞實を說くを樂はゞ　諸の功德を具足し　後に天中に生るゝを得ん　此の舌は則ち寶の如し。
若し人心に妄想あれば　彼の愛に欺誑せられ　他財を已に取らんと願ふ　何ぞ天趣に生ぜんや。

【三一】眷屬。無常品第五の下を見よ。
【三二】鹻の字、忍徵師校刻本には鹹に作る。

虚妄を起すに由るが故に　定んで彼の壞する所と爲る　世の毒を飲める者の　久からずして自ら喪ふが如し。

身に於て則ち安に非ざれば　他に於て豈能く益せんや　自他に唯損のみ有り　何ぞ虚妄の說を用ひん。

又世間の諸の毒は　一たび發して斃るれば卽ち止む　虚妄の毒は然らず　百千生に破壞す。

佛解脫の道は　眞實を以て本と爲すと說きたまふ　淨行にて莊嚴せば　常に殊勝處に生れん。

衆生は自らの業に隨ひ　彼の愛河の中に墮す　唯だ眞實の舟に乘れば　則ち能く彼を超越す。

衆生の不善の因は　皆愛より起る所にして　惡道の中に墮し　眞實のみ能く救度す。

[二八]金剛の堅利にして　能く諸山を摧破するが如く　彼の眞實は勝能にして　善く煩惱を息除す。

眞實は二世の益なり　猶ほ無盡財の如く　善く諸法を分別し　其の心常に安隱なり。

或は[二九]惡比丘有り　其の性砂毒多く　常に虚妄の言を說き　彼の心唯だ輕動す。

善人は咸な棄捨し　世の惡む所と爲り　之を視ること寃賊の如きは　眞實なきに由るが故なり。

謂く彼の妄語に由り　能く自他を壞す　旣に少しの益も無し　云何ぞ棄捨せざらんや。

若し人妄語を起せば　口氣常に臭きを感じ　諸天咸な遠離し　貧窮にして依怙無けん。

若し人妄語を起せば　動止に安隱なく　[三〇]世間・出世間に　常に正道を離れん。

若し妄語を捨てざれば　當に極苦の果を受くべし　是の如き諸の衆生は　自ら惡道に趣くを求むるなり。

當に知るべし眞實の人は　世の尊重する所と爲る　是の故に妄言を捨て　常に斯の勝行を修せ。

眞實は則ち不害　常に慈愍を生じ　正法の藏　生天の要行と爲す。

衆生の地獄　及び焰摩鬼趣に墮するは　皆妄語に因るが故なり　智者は深き誡と爲す。

【二八】金剛。梵語 vajra の譯。金中の精なるもの。又金剛石をいふ。

【二九】比丘。教誡比丘品第三十の下を見よ。

【三〇】世間・出世間。一切生死の法を世間とし、涅槃の法を出世間となす。卽ち四諦に約せば、苦集二諦は世間、滅道二諦は出世間なり。

是の故に當に一心に　畢竟して　妄語[二七]せざるべし　若し能く遠離する者は　則ち諸の憂惱なけん。

若し彼の妄語を樂はゞ　常に眞實を捨離す　是の人は唯だ自ら咎め　寶を捨てゝ瓦礫を取るなり。

若し人了知せず　好んで虛妄の言を發せば　地獄の中に墮し　長時に極苦を受けん。

眞實の語は難きに非ず　無智は修習せざるのみ　能く行人を莊嚴し　善に於て皆成就す。

眞實を上善と爲し　虛妄を深咎と爲す　愚人は功德を捨て　而して過患を取る。

諸の苦惱の種々は　皆妄語より生ず　若し人能く遠離せば　無垢・寂靜なるを獲ん。

若し眞實の言を發せば　人の見るを喜ぶ所と爲る　當に知るべし虛妄の者は　常に諸の不善を作すを。

若し人語眞實なれば　心喜ぶこと諸天の如し　愚者は妄言に由り　常に未來の苦を怖る。

眞實は第一の善たり　虛妄は最も極惡なり　過を離れて功德を求めば　人中に上に過ぐるもの無し。

常に勝處に生じ　諸の快樂を受用し　善く菩提に趣くを求むるは　皆眞實に因るが故なり。

若し人　增上虛妄の言を遠離せざれば　常に難處に生じ　備に諸の苦報を受けん。

眞實は勝道たり　虛妄は善因に非ず　餘方より來るにも非ず　他に因つて得る所にも非ず。

佛は彼の眞實の　能く諸の苦惱を離るゝを說いて　最勝の明燈　病を除くの良藥と爲したまふ。

毒と甘露との如く　二種は皆舌に依る　毒は彼の妄言の如く　甘露は眞實に同じ。

決定の眞實に住せば　當に彼の甘露を取るべし　若し虛妄を起す者は　愚の返つて毒を求るが如し。

【二七】妄語。十惡業の一に數へらる。

是の人世間に於ては　口は則ち利斧の如く　自ら其の身を斷壞す　皆惡言に由るが故なり。
他をして暴惡を起さしめ　一切の罪を增長し　能く諸の過患を生ずるは　皆惡言に由るが故なり。
語に眞實無きに由り　人の爲に輕賤せられ　是の因緣を以ての故に　後に餓鬼に墮す。
智人は虛言無し　虛言は返つて咎を招き　口氣常に臭穢にして　後に諸の苦報を受く。
若し眞實の行を捨つるは　則ち正法を遠離するなり　正法を離するに由るが故に　無量の苦惱を生ず。
若し眞實の言を發せば　人の尊重する所と爲り　如來の稱讚を得　正法の明炬たらん。
常に解脫の言を說き　眞實を捨てざれば　當に知るべし是の如きの人は　聖に趣くの階漸なり。
若し人眞實なければ　後に轉じて女身と爲り　常に虛妄の言を習へば　則ち惡趣に墮せん。
此は眞實の正道なり　是は諸佛の所說なり　最勝の法財と爲し　第一の救護と作す。
眞實は至寶の如く　莊嚴の中の最勝なり　淨無垢の目の　光明常に熾盛なるが如し。
眞實は寶藏の如く　無價にして用盡くること無し　若し能く是の行を行せば　人中に最上と爲る。
世間の王者の　妙寶を以て莊嚴するが如く　智人の眞實の言は　諸天の嚴飾の如し。
虛言は深過と爲す　毒中の毒の如し　此を因と爲すに由るが故に　則ち惡趣に墮す。
父に非ず亦母　及び親眷・朋屬に非ず　唯だ彼の眞實行のみ　餘に能く救護（くご）するもの無し。
若し虛妄の人に近づけば　地獄の火に觸るゝが如し　怖畏を生ぜざるに由り　則ち彼の爲に燒害せらる。
是の火は極めて炎猛し　尙能く大海を燒く　何ぞ況んや無智の人をや　草木を然（もや）すが如し。

と爲す。

若干の衆生を畫くも　五趣に隨つて流轉す　業廣大なるに由るが故に　處々に悉く周遍す。

又彼の心の畫師は　能く諸の業網を畫くに　世間の有情等は　皆彼の爲に縛さる。

又風雨煙塵　皆能く其の畫を損ふ　百千倶胝[二三]劫にも　業畫は常なること故の如し。

大地は散壞すること有り　海水も亦枯竭す　唯だ業畫は長く存し　處に隨つて而も顯現す。

諸業は常に相隨ひ　彼の果に差忒無し　衆生は其の心を縱にし　諸趣に流轉す。

若し人心樂に著し　欲の境界に趣くを求め　不善業を斷ぜざれば　定んで苦難に墮せん。

是の故に當に心を制すべし　彼は極惡にして畏るべし　欲境の和合を樂む　愛毒常に充滿す。

其の險難を顧みず　欲に於て常に追求すれば　樂壞して苦相應し　自ら其の果報を受く。

若し人惡趣を怖れば　其の心常に寂靜なり　彼の寂靜なるに由るが故に　慧命を増長す。

是の心は大力あり　暴惡にして防護すること難し　智者は善く調伏し　諸の憂怖を離るゝことを得ん。

離惡語言品[二四]　第十二

智者は惡言を離れ　常に正語を發し他をして　愛樂を生ぜしめ　善く　菩提[二五]の道に住せしむ。

常に清淨の行を讃し　垢染の言説を離れよ　若し惡言を樂ふ者は　當に惡趣に墮すべし。

若し虚妄の言を發せば　則ち眞實の法を捨て　亦佗世の善を壞し　惡として作さゞる無けん。

若し人虚妄の言あれば　他の嫌惡する所と爲り　長く　輪廻[二六]の苦を受け　諸天に生ずるに由無けん。

善人に咸な棄てられ　衆の怒る所と爲り　諸の善法を障礙するは　皆惡言に由るが故なり。

【二三】倶胝。無常品第五之餘の下を見よ。

【二四】惡語言。佛教にては、五惡を數ふるに妄語をその一とし、十惡の中には妄語（新譯虚誑語）、倚語（新譯雜穢語。語に婬意を含むもの）、兩舌（新譯離間語。所謂二枚舌）、惡口、（新譯麁惡語）の四を數へて、以て殺生、偸盜、邪婬、飲酒等と同罪と爲せり。

【二五】菩提。說法品第二の下を見よ。

【二六】輪廻。說法品第二の下を見よ。

著す。
是の心は須臾の頃に　能く善惡の業を造る　自性本と輕動し　尋求するも得べからず。
是の心は來るも知らず　去るも亦何の見る所ぞ　緣合すれば卽ち暫く有り　緣散ずれば所住無し。
是の心は積聚に非ず　亦彼の長久に非ず　執持相應に非ず　一切處に覩ること無し。
心も亦强いて名と爲す　和合より起り　[二]牛糞と　摩尼と　二種も亦是の如し。
色根等も亦爾り　各各に識より生じ　未だ一法の和合に非ずして　得ること有るを見ず。
是の如く彼の境界は　衆生除斷すること難し　若し正法に安住せば　欲に於て何の作す所ぞ。
是の心は極めて兇險にして　大力も調伏すること難し　樂うて諸業を造作し　愚夫は知覺すること無し。
諸業を造るに由るが故に　則ち流轉の因となり　三有の中に於て　長く諸の苦惱を受く。
風等の疾に染むが如く　滅すれば惡道に沈むには非ず　彼の貪等の過患は　定んで地獄に墮す。
心の過失は最大なり　常に諸惡を造作す　風病も亦善に非ず　應に當に勝行を修すべし。
風等の疾は瘳す可く　身殞れば則ち隨つて散ず　彼の貪病は然らず　百千生に長く在り。
當に知るべし貪等の病は　風と差別あり　善く殊勝の行を修せば　貪の過失を離るゝを得ん。
是の心は醫王の如し　善く意の過患を治す　彼の世間の　唯だ身病を療すが如きに非ず。
心に善思惟を起せば　則ち諸染を生ぜず　愚者は正法なく　則ち險道に墮す。
若し人禪定を樂はゞ　山林に依止せよ　愚夫は寂靜ならず　多く共れ違諍を起す。
是の心は畫者の如し　遍く諸の形像を繪し　皆彼に由りて造作し　[三]五趣に周流す。
世の畫は巧妙なりと雖も　百千の種類を圖するのみ　業の畫は極めて廣大にして　三界を其の幀

〔二〕摩尼。梵語(mani)珠の總稱。

〔三〕五趣。不放逸品第六の下を見よ。

若し心の使する所と爲り　一切の罪を造作し　非法の行に依止せば　長く輪迴の中に處らん。
是の心は刹那の頃に　百千の生滅有り　本性は唯だ輕動なり　幻化の實ならざるが如し。
是の心は大力有り　奔馳して暫くも停ること無し　若し智識あり寂靜なれば　則ち能く善く彼を縛す。
是の心は調伏し難く　諸根をして動亂せしむ　智者は善く任持し　能く彼岸に達す。
是の心唯だ厭くこと無きも　知足の索能く縛す　善く彼の心を治する者は　世間の智人と爲らん。
是の心欲境を緣じ　常に愛樂を生ず　善を爲せば能く息除し　惡を作せば則ち增長す。
若し人心寂靜なれば　諸欲を見ること毒の如し　愚者は其の心に縱ひ　之に耽りて美妙と爲す。
是の心は唯だ造作し　彼の業は則ち隨轉す　根境に由りて生ずる所　相應和合せしむ。
智者了知し已れば　此を捨てゝ輕安を獲　彼の色も觀ること皆同じ　復た何んの異想を生ぜん。
一切の色の境界は　因と爲り能く心を亂す　善く彼の心を調ふる者は　則ち諸の過咎を離る。
一穀の種子の　色香を生ずるに異有るが如く　彼々の和合に由り　各各に心に隨つて起る。
世間の匠者の　善く彼の機關を修するが如く　正法に依り心を治せば　彼は則ち常に安樂なり。
境界は心を牽くに　愚者は適悅を生ず　智慧は大力有り　速かに清淨ならしむ。
又彼の心動轉すれば　遍く諸の蘊界　及び彼の三有の中に緣ず　眞實の見無きに由る。
又大海の中に　風擊てば波騰涌するが如く　心と境の和合するに由り　世間に隨ひて流轉す。
善業は心を引き　定んで勝果を招く　應に當に善行を行ずべし　復た諸惡を造ること無かれ。
心と定と相應せば　水に風動無きが如し　各因緣より生じ　業に隨つて歸趣する所なり。
是の心は最も輕捷にして　彼に過ぐるもの有ること無し　若し善く防護せざれば　則ち常に欲に

是の心は力能あり　種々の業を造作し　虛空境界に於て　刹那も暫住せず。
彼の心は了知すること難し　常に其の形相無く　世間に引生し　心に匪されば則ち往かず。
身に諸業を造作し　何れより去つて何れに住する所ぞ　彼の果皆見るべし　彼の心は能く覩るもの無し。
是の心は調伏すること難し　癡暗に見らるゝ無きも　能く諸の衆生を引き　速かに地獄に趣く。
是の心は能く罪を作り　亦能く福業を修す　彼の幻化の如くなるを了し　常に正道に依れ。
是の心は去るも知らず　來るも亦能く見ること無く　能く諸の有情を牽いて　百千生に往返す。
利刀も斷ずること能はず　熾火も燒くこと能はず　愚暗無智の人は　則ち彼の僞に壞せらる。
是の業索は堅固にして　能く癡なる衆生を縛し　百千生中に於て　之を挽いて而も斷ぜず。
是の心は刹那の頃に　善不善の業を造る　能く彼の心を調ふる者は　處に隨つて常に安樂なり。
彼の[19]六根門より入り　諸の境界に樂著し　心は彼の有情を牽いて　險難に墮するを覺らず。
虛空は本と明朗　水性は常に澄湛なり　是の心若し彼の如くば　殊勝の善を引生せん。
境に於て尋求を生じ　常に和合を念ず　心に由り諸根に依り　王將に導從するが如し。
是の心は常に奔馳し　彼の身は所往に隨つて　互相に力能有り　三有の海に輪轉す。
造る所の業周遍するは　皆心に[20]由りて然らしむ　若し善因緣無ければ　少樂をも得べからず。
當に正法を規求し　諸の禪定を修習すべし　心に諸の過惡を離るゝこと　日の雲翳を出づるが如し。
若し心善く定に住せば　則ち正見を生じ　在家も淨信を發せば　當に輪迴の難を免るべし。
若し心に惡を造らざれば　過失則ち起らず　煩惱を離れて清淨に　常に天上に生ぜん。
是の心諸根に隨ひ　迅速に流轉す　善く心を防護せば　後に則ち諸天に生ぜん。

【一九】六根門。阿厭五欲第七の下を見よ。

【二〇】由の字、忍徵師校註に擬ふらくは內かといへり。

是の心は常に思惟し　晝夜に暫くも住すること無し　其の造る所の業の如き　受報皆相似なり。
若し心の爲に伏せらるれば　樂ふて諸の不善を作し　命終に恐怖を生じ　苦に於て能く免るゝことと無し。
業は則ち彼の畫の如く　處に隨つて顯現す　心に由りて作る所の故に　彼の果則ち隨轉す。
種々に業差別すれば　報を受くることも亦是の如し　心の使する所と爲れば　三界に馳騁せん。
若し人心に隨ひば　則ち一切の業を造る　善く心を調伏する者は　則ち眞常の樂を證せん。
是の心は所趣に隨ひ　或は暴惡輕動す　善い哉彼の心を調ふるに　心靜なれば則ち苦無けん。
若し人善く心を制せば　則ち諸の過患を除く　過を離るゝは乃ち智人なり　苦に於て則ち受けず。
諸苦は心より生ず　彼の他より得るに非ざるを了せよ　逼迫して堪任し難きは　皆心輕動するに由る。
[一五]天・龍・阿修羅　夜叉・[一六]畢舍遮は　皆心を以て主と爲し　三有處に遍し。
心は能く天中に引き　及び人世　乃至諸の惡道に生じ　輪の轉ずるが如く異無し。
心境の爲に牽かるれば　愚者は則ち迷亂す　意に由りて愛を生ずるが故に　無量の苦惱に住す。
心は唯一癡行なり　暴惡にして大力有り　說くべきも見るべからず　念々に速かに遷滅す。
智者善く　心の種々の過患を調伏すれば　則ち魔網を超出し　[一七]彼岸に渡るを得ん。
心は能く疑惑を生じ　諂曲にして動轉すること多し　若し彼の心に依る者は　乃ち險難に趣くを求むるなり。
當に心の過失を離るべし　則ち諸根寂靜に　罪、非法著せず　善く實相に達せん。
最勝の[一八]禪定を得るも　心の因緣より生じ　惡道の中に墮すも　亦彼の心に由りて起る。

【一五】天龍阿修羅夜叉。無常品第五の下を見よ。
【一六】畢舍遮。梵語 (piśāca)、食肉鬼の名。
【一七】彼岸。不放逸品第六之餘の下を見よ。
【一八】禪定。禪定品第二十六の下を見よ。

す。

是の如きの心を起すに由り　則ち是の如きの果を受く　善を作れば淨因と爲り　惡を造れば苦報を得。

心に由りて彼の[九]業を造り　業に因りて果を感ず　心と業と相應するは　即ち[一〇]輪迴を受くるが故なり。

若し人彼の心に由り　諸の惡業を造作せば　彼の地獄の火の爲に　長時にして燒煮せられん。

心に由りて諸罪を造り　心に由りて其の果を感ず　當に知るべし彼の心は　因緣により生起す。

衆生は心に誑かされ　自在に諸咎を作るも　地獄の中に墮せば　深く大恐怖を生ぜん。

當に正法に依り　心に隨つて惡を造らざるべし　善行なれば常に輕安なり　惡行はたゞ非法なり。

一切は唯心の造るところ　果も亦心より得　心若し種々に生ぜば　彼の果亦是の如し。

心は彩繪者の如く　[一一]三界の衆生を畫き　善く安住すること有ること無し　心に隨つて動轉せざれ。

又彼の心を本と爲し　能く解と縛とを生ず　善業は則ち解脫　不善は乃ち[一二]纏縛なり。

衆生は業網に墮し　心の降す所と爲り　菩提に趣くを求めざること　盲の道を見ざるが如し。

是の心は唯だ一種にして　能く諸業を造作す　若しは業若しは彼の心は　則ち[一三]三有に遍し。

又彼の五色の　能く種々に顯現するが如く　[一四]五根諸塵を緣ずれば　則ち處々に隨轉す。

世間の畫者の如きは　諸人咸な共に覩る　當に知るべし心の畫師は　巧妙にして能く見るもの無し。

壁に諸像の圖するに　好醜は畫工に隨ふが如く　善不善の業緣は　皆心に由りて造作す。

【九】業。福非福業品第十三の下を見よ。

【一〇】輪廻。說法品第二の下を見よ。

【一一】三界。欲界色界無色界なり。無常品第五の下を見よ。

【一二】纏縛。十纏四縛の略、伏除煩惱品第一の下を見よ。

【一三】三有。三界に同じ。

【一四】五根。訶厭五欲品第七の下を見よ。

巻の第五

治心品　第十一

佛諸法を宣轉するに　身を說いて無常[一]となしたまふ　酒及び女人に於て　愼みて放逸を生ずること勿れ。

此の心は彼の王の猶く　世に於て自在を得　能く諸の衆生をして　深き險難に墮せしむ。

心に由りて諸業を造り　迷亂して怖畏を生ず　智者は善く心を持し　最上安隱に住す。

能く引いて勝處に生じ　及び牽いて惡道に入れしむ　若し離垢寂靜なれば　卽ち眞常の果[二]を證せん。

若し樂ふて諸法を說き　作意して先導と爲らば　意淸淨なるに由るが故に　則ち殊勝の行を成ぜん。

若し人善く心を制せば　則ち心に隨つて轉ぜず　諸の煩惱[三]を棄背し　日の黑暗を除くが如くならん。

又彼の心は寃の如し　是の寃佗より起るに非ず　劫火[四]は須彌[五]を然す　心火も亦此の如し。

愚夫は心降るが爲に　諸根に自在を得　能く彼の苦惱を生じ　菩提[六]を去ること則ち遠し。

寃は自心より生ず　心を離れ何の所有ありてか　能く諸の有情を縛し　牽いて焰摩[七]の所に至らしめんや。

若し欲の境界を樂ひ　正法を修習せず　愚癡にして邪道を履めば　則ち地獄[八]に墮せん。

心は火の中の火の如く　最上に調伏し難し　彼の調ひ難きに由るが故に　當に極苦を受くべし。

若し心を縱にし自在なれば　常に諸の過失を生ず　善く彼の染欲を離るれば　苦の逼る所と爲ら

【一】無常。無常品第五の下を見よ。

【二】眞常の果。眞常にして常住なる果報、卽ち涅槃をいふ。

【三】煩惱。伏除煩惱品第一の下を見よ。

【四】劫火。無常品第五之餘の下を見よ。

【五】須彌。伏除煩惱品第一の下を見よ。

【六】菩提。說法品第二の下を見よ。

【七、八】焰摩、地獄。焰摩は又焰魔に作る。共に地獄品第十六の下を見よ。

威儀道行無ければ　說法を廢するは是の分なり　言行と相違せば　空しく說くも何の益か有らん。
自ら達解すること能はざれば　何に由つてか他を悟らしめん　麁礦の言詞を發する　此れ善說法に非ず。
正理に違背し　識者は咸な譏誚し　貧弊の人にも輕んぜらるゝは　皆酒を飲むに由る。
過去に憶念無く　現在復た忘失す　未來何の知る所ぞ　酒に由りて三世に迷ふ。
名稱威德を失ひ　心をして常に馳散せしめ　諸の過咎を引生す　斯れ酒に困ぜらるゝが爲なり。
若し酒を遠離せば　[三]戒・定を具して清淨に　最上の安隱に住し　不滅の處に至るを得ん。

【三二】戒定。持戒と禪定、各々戒定慧三學の一。

口に狂言を出し　目を瞪りて定往無く　時に臥して覺知せず　所作皆廢忘す。
地に偃仆するに由り　女人の爲に笑はるゝも　其の[二八]身動轉せず　枯木の如く相似たり。
彼は酒に醉ひて臥するも　瞥見して其れ死すと謂ふ　知者は咸な告げて言く　酒を飲むに由り是の如しと。
常に飲酒を樂ふ者は　三十六失を[二九]生ず　當に彼の過を了知すべし　此れ則ち常に安穩ならん。
勝族の名稱を具するも　酒に汚さるゝに由り　是の人蘆華の如く　久からずして自ら輕棄せられん。
若し人飲酒を樂はば　展轉して境に牽かれ　放逸の水中に墮し　瀑流して出離すること難し。
境に牽かるゝが爲の故に　善不善を知らず　淸勝の園林に於て　何ぞ復た酒を飲むを用ひん。
若し酒味を樂はば　則ち諸の險難を生じ　地獄の中に墮し　具に諸の苦惱を受けん。
飲み已れば癡を發生し　癡に由りて衆罪を造る　愚人は心に愛樂す　何ぞ能く遠離を生ぜん。
增上の耽著を起し　極重の苦報を受く　若し能く彼の過を離るれば　則ち諸の憂惱無けん。
初は則ち其の慧を損じ　後には則ち其の樂を壞す　是の故に彼の智人は　酒に於て常に厭捨す。
若し人酒に近づけば　彼は則ち飛蔦の如く　常に癡の爲に盲せらる　故に酒を說いて毒と爲す。
酒に於て毒想を作すは　最上第一の樂なり　淨戒を持するに由るが故に　寧ろ銅汁を飲まん。
若し飲酒を樂はゞ　罪に於て則ち免がれず　彼は增上の愚癡もて　常に惡道に處らん。
飲酒は一罪なりと雖も　能く一切の惡を生ず　是の故に當に之を制すべし　心戒は則ち本と爲す。
[三〇]比丘飲酒を樂はゞ　則ち[三一]阿蘭若を捨て　心の一境の性を離れ　正法を思惟せず。
飲酒を樂ふに由るが故に　心に常に熱惱を生じ　非法を習近し　二世の善利を壞す。

【二八】身の字。忍徵師校註に疑ふらくは心かといへり。

【二九】生の字。忍徵師校註に依る。原本には住。

【三〇】比丘。教誡比丘品第三十の下を見よ。

【三一】阿蘭若。伏除煩惱品第一の下を見よ。

後に地獄の中に墮し　復た鬼界　及び彼の傍生趣に生ずるは　皆酒に壞せらるゝが爲なり。
酒は毒中の毒たり　疾中の痼疾たり　已苦に復た苦を加ふ　是れ智者の說く所なり。
慧命を破壞し　法財寶を竭盡し　彼の淨梵行を毀つは　皆心に酒を樂むに由る。
乃至尊崇者も　醉已れば區別無く　世人の嗤ふ所と爲り　慚耻を生ぜず。
酒は其れ利斧の如く　能く諸の善法を損ふ　飲を樂ふ者は慚無く　他の爲に輕賤せらる。
若し人酒に惑はされ　耽湎して罷るの期無く　諸の善行を作さされば　彼は識無く智無きなり。
若し人飲酒を樂へば　彼の心則ち狂亂し　或は戲笑を發し　或は嗔恚を起さん。
現生及び後身[二六]　無明常に慧を覆ひ　解脫の法を焚燒するは　皆酒に使せらるゝが爲なり。
若し其の酒味を嗜めば[二七]　金播果の初は甘く後則ち毒なるを食ふが如し　是れ智者の說く所なり。
是の故に彼の智者は　酒に於て深く誡を爲し　心に思念を起さず　飲めば則ち熱惱を生ぜん。
富足なれば常に酒を飲み　諸天復た是に過ぐ　彼彼の快樂に於て　後に則ち皆散壞す。
衆生は酒に迷はされ　其の心常に醉亂し　彼の癡の牽く所と爲り　其の美味に耽著す。
當に知るべし酒は繩の如く　癡愛常に解し難し　寧ろ地獄の中に墮するも　酒に於て觸るゝべからず。
觸るゝに因り其の香を聞き　癡人は卽ち飲を樂ふ　是の故に彼の酒に於て　見已れば當に捨去すべし。
若し見るに卽ち貪を生じ　若し觸るゝに香卽ち發すれば　彼の香を聞くに由るが故に　其の心止むること能はず。
是の故に酒を毒と爲す　過失を生ずること一に非ず　色力名聞を壞するは　皆彼の酒を飲むに因る。

【二五】　地獄・鬼・傍生。地獄餓鬼畜生の三惡趣なり。
【二六】　無明。伏除煩惱品第一の下を見よ。
【二七】　金播果。金播歌果の略、訶厭五欲品第七の下も見よ。

風の火に觸るれば　其の焔則ち熾然たるが如く　女人を見て貪を生ずれば　定んで彼に燒害せられん。
若し清淨の樂を求むれば　當に女人を遠離すべし　此世と他生と　其の心常に寂靜なり。
勇猛の精進を起し　勝慧を修習し　欲を捨て因果を信ぜば　是の人大利を獲ん。

離酒過失品　第十

此に酒を說いて毒と爲す　應に當に之を遠離すべし　若し飲酒を樂ふ者は　則ち善法を壞せん。
若し人酒に近づけば　明慧を生ぜず　彼は解脫[三三]の分無けん　是の故に常に遠離せよ。
第一の過失と爲すは　智者の說く所　自他を損壞せん　是の故に常に遠離せよ。
若し人飲酒を樂はば　好んで世俗の事を說き　多言にして紛諍を起さん　是の故に常に遠離せよ。
飲酒は資財を損ひ　惛迷し復た懈怠す　是の如き過患有り　是の故に常に遠離せよ。
酒に由りて貪を發生し　嗔恚も亦復た爾り　展轉して愚癡を增さん　是の故に常に遠離せよ。
酒は禍の根本たり　諸根をして馳散せしめ　後に地獄の中に墮するは　皆酒に由りて敗せらるるなり。
或は高聲に戲笑し　暴惡の語言を出し　諸の良善の人を毀ち、後に則ち憂怖を生ぜん。
飲酒に由りて醉亂し　善惡を分別せざること　傍生[三四]の無知なるが如し　是の故に當に遠離すべし。
若し人酒に困ぜられ　惛醉せば則ち尭の如く　快樂長年を求むるも　患たり則ち何ぞ有らん。
是は諸難の本　過患の源たり　常に癡暗の中に居し　死に趣くの階漸たり。

【三三】解脫。說法品第二の下を見よ。

【三四】傍生。畜生の異譯。

人世・天中に於て　略して欲の過咎を述ぶ　智者若し遠離せば夜[三]摩天主と作らん。
彼の女色を樂ふは　皆慣習より生ず　世に眞實の人有れば　則ち能く其の事を免る。
是の人の宿善本　滅し已りて天中に生じ　諸天の女人を見て　散亂するも亦此れに同じ。
則ち樂ふて眞に非るを毀ち　心寂靜ならざるを訶し　女人の過患を厭ひ　寃の如く捨て去れ。
若し女人に習近せば　多種の苦惱を生ず　是の故に當に了知し　彼に於て常に遠離すべし。
若し散亂の心を起せば　則ち諸の過失を生じ　常に女人を見て　戲調を生ぜん。
日に本と黑暗無く　火性に清涼無し　女人には慈心無く　少分も得べからず。
大地に傾搖無く　風の狀に安寧無し　女人には善行無く　常に諸過を說くを樂ふ。
又女人の心は　動亂して長久に非ず　難有れば則ち捨離すること　池涸れて鷺の去るが如し。
淺瀨は鷺の所依　深淵は則ち有ること無し　山嶽に震動有るも　彼定んで悲愍無し。
正法を稱揚せず　樂ふて諸の魔障を作し　險難の中に墮し　彼の誑す所と爲る。
赫日冷ならしむべく　蒲桃能く剛ならしむるも　女人は諂嫉の心もて　堅著して棄捨せず。
樂に於ては同じく受用し　苦に於ては則ち然らず　少恨も常に心に在り　恩に於ては癡忘す。
昔園苑中に於て　共に相娛樂するも　衰難忽ちに相侵せば　毀呰して而も棄捨す。
女は世間の縛たり　鬪諍を增長す　過失の藏たり　乃ち非法の器なり。
女色は衆生を惑はし　常に其の欲想を懷き　遍計の追求を起し　其の心暫くも捨つること無からしむ。
無量の愛欲の箭　諸の衆生も損惱す　彼の樂何の之く所ぞ　悉く其の磨滅を見るのみ。
是の欲深く畏る可し　利刀猛火の如し　智者は善く了知し　常に一心に防護せよ。
若し淨戒を持する有るも　忽ちに欲想を起せば　無量の誹謗を招き　衆多の過患を生ぜん。

【三】夜摩天。無常品第五之餘の下を見よ。

又彼の女索は　善く[二〇]六根を縛す　常の索は其の能無く　唯だ身及び頸を縛す。
妻子幷びに眷屬は　縛たること最も堅牢なり　愚人は妄心を生じ　皆執して己有と爲す。
女色に於て愛を生ずるも　彼は唯筋肉纏はり　便利の依る所なり[二一]　汝の愛復た此に來るや。
好んで巧なる言詞を發し　誑惑して媿無し　當に知るべし女人は　寃と則ち異ること無し。
衆妙の嚴飾を以て　他をして愛樂を生ぜしめ　其の心常に動轉し　所說に虛假多し。
女人は性多毒なり　迦羅倶吒の如く　彼の著欲の人を損ひ　能く其の難を免るるもの無し。
百千の方便を具するも　女人を防ぐこと能はず　風火虛空の如く　能く彼を縛する者無し。
諸の非律儀を造り　病難夭喪に遭ふは　皆女人に由り　其の解脫行を破す。
世間の諸の衆生　衆の罪業を造作するは　皆女人に由り　恐怖して常に迫窄す。
幼より其の耄に及び　其の心常に散亂す　女人は性本と然り　日光の常に暖かなるが如し。
女心は定則無く　風中の燈焔の猶きも　怨有れば暫くも捨てず　馬の其の瘡を嚙むが如し。
索もて鼠狼を縻ぐが如き　縛すと雖も彼能く脫す　則ち彼の女人の　他の爲に制せられざるに同じ。
華の毒蛇を蓋ふが如く　灰の炎火を覆ふが如く　色の人心を蔽ふが如く　女の惡露を藏するが如し。
毒樹の華を開くに　觀る者曾つて厭くこと無きが如く　是の華は女人の猶し　畢竟して當に棄捨すべし。
常に女色を樂求せば　境界卽ち現前し　此生及び後身に　倶に樂分無けん。
火に非ず刀杖に非ず　力に非ず機關に非ず　女の爲に縛せらるれば　彼の惡能く斷ずるもの無し。

【二〇】六根。眼、耳、鼻、舌、身、意根をいふ。
【二一】原文は汝愛復來此、忍徵師校註に疑ふべしといへり。

し。
女人は最も險詐にして　能く彼に過ぐる者無し　多く方便を作して　寵愛を希ふ。
又諸の女人は　自性流蕩多し　智者は先見有り　愼みて相隨順すること勿れ。
若し女人に習近せば　則ち善利を失し　設ひ天中に生るを求むるも　此れ亦得ること能はず。
天中の妙なる樂音は　聞く者咸な愛を生ず　若し樂著して捨てざれば　苦難を引生せん。
女人は心動轉し　餘に於て染愛を生じ　愛火或は暫く息めば　則ち棄捨を生ず。
女人は志に堅著し　樂ふて鄙事を行ずるも　若し彼の衰殘せるを見れば　則ち棄捨を生ず。
女人は諂媚多く　彼をして癡鹿の如くならしめ　禍患の侵す所を見れば　則ち棄捨を生ず。
女人は極の險惡にて　其の恩德を念ぜず　彼に厄難相臨めば　則ち棄捨を生ず。
女人は心散亂し　種種の思惟を起し　能く他を誑誘すること　蜜に諸毒を和するが如し。
女人は巧言多く　能く愚癡の者を惑はす　智士は善く思惟し　彼の言曾つて動ずること無し。
愚癡著欲に由り　財に於て慳悋無きも　彼の福因を修せず　鼠の常に藏に竄するが如し。
女色は彼の索の如く　而も第一堅牢なり　彼の迷へる士夫を縛し　三有の海に墜ちしむ。
是の索體を縛するに非ず　唯だ能く心を繫し　心若し彼に纏はせらるれば　苦則ち已れの有と爲らん。
餘索の人を縛する　燒斫せば皆斷ぜしむ　是の女索は然らず　能く牽いて惡道に趣く。
身は其の相狀有り　彼の索則ち能く縛す　心は本形質無く　女索に非ざれば不可なり。
若し索の爲に縛さるれば　其の量人皆見る　女索の人を縛するに　是の量知る者無し。
暫く其の少樂を生ぜば　後に脫すること則ち難しと爲す　能く諸の衆生を縛し　常に愛の苦海に淪む。

合會は必ず離有り　之に由りて愁感を起す　貪欲鎭に縈纏するは　皆女人に由るが故なり。
是の女人の貪毒は　身と倶時に起り　火の世間に生ずるに　熱の性則ち隨つて有るが如し。
當に知るべし是の貪火は　心中より發する所にして　相續して常に燒然し　苦に於て與に比するもの無し。
善法を破壞し　及び衆生を損惱し　惡道の因と爲る　是れ諸佛の說きたまふ所なり。
口に美言を出すと雖も　心中に常に毒を蘊み　其の戀慕する所に於て　其の志曾つて定まり無し。
設ひ暫く愛著を生ずるも　久しからずして則ち棄捐し　說く所に誠有ること無く　彼の意則ち實に非ず。
方便を以て欺誑し　染欲の因緣を習ひ　己に於て貪を生ずる人　之を恃みて憍慢を生ず。
[一九]天・人・阿脩羅　夜叉・鬼神等の　險難の中に墮するは　皆女人に由るが故なり。
又彼の女人は　恩を知り善を念ぜず　其の心暫くも停まること無く　日の旋轉するが如し。
其れ榮盛の人を見れば　則ち承奉を樂ひ　彼に若し衰厄有れば　殊に少しの憂慮も無し。
蜂の其の華を採り　華乾けば卽ち捨て去るが如く　應に知るべし彼の女人の　舊を棄つることも亦是の如し。
女人は慈心無く　常に嫉妬を懷く　此れ端由無きに非ず　皆男子に因る。
諸天は唯だ女人のみ　餘に能く彼を降すもの無し　女縛に牽かるるに由り　則ち惡趣に墮す。
若し女色に樂著せば　此の失與等無く　貪火鎭へに心を燒く　何に由つてか能く出離せん。
若し欲の牽く所と爲れば　貪業皆見るべく　常に其の意を惛醉し　諸の不善を作すを樂ふ。
女人は惡に纏はられ　多く潛意を興し　彼の昔曾する所を棄つること　蛇の其の蛻を委ぬるが如

【一九】天人阿修羅夜叉、無常品第五の下を見よ。

世間の諸の衆生　無邊の惡業を造るは　皆彼の財を愛するに由り　長く苦海に淪まん。
愛の爲に使せられ　勇[一七]悍にして怯弱無く　乃至火の中を蹈み　其の身命を顧みず。
若し人多く愛を起せば　心火常に燒然す　愛無ければ意淸涼なること　深淵に澡沐するが如くならん。
愛は彼の烈火に　薪を投ずれば則ち焰を騰ぐるが如く　之を彼の貪夫の　愈得て而も厭無きに譬ふ。
無量の珍寶を具するも　[一八]刹利は猶ほ充ならず　自餘の諸の有情は　畜少なければ則ち患無けん。
若し人愛を起せば　樂少く而も苦多し　苦樂兩つながら昭然たり　智者は善く取捨せよ。
善く彼の愛を降す者は　最勝の寂靜を得　若し能く常に之を遠ざくれば　則ち菩提の道に近づかん。

離欲邪行品　第九

女人は罪の本たり　能く資生を散ず　若し彼の爲に伏せらるれば　樂に於て則ち何か有らん。
女人は諂曲多く　常に嫉妬を懷き　樂ふて不善を造作し　業に於て自在を得。
巧言にして他を誑かし　常に和合の想を生じ　正念思惟無く　欲事を讃するを喜ぶ。
彼は暫く柔順を生ずるも　後には則ち剛狠多く　珍異もて莊嚴すと雖も　恩に於て曾つて念ぜず。
設ひ百千の衆生　咸な愛樂を生ずるも　自性に常有ること無く　猶ほ彼の飛電の如し。
若し女色を樂はば　斯れを不善の因と爲し　現生及び後身　悉く彼に破壞せられん。
若し一の姝好なるを見れば　心則ち散亂を生じ　彼の境界に樂著し　貪の爲に繞はさる。

【一七】悍の字、忍徵師校刻本に依る。原本には捍。

【一八】刹利。梵語 kṣatriya 刹帝利の略。印度四姓の一。王者武士等の階級をいふ。

百千の諸の有情は　愛に因りて險難に墮し　無量の苦報を受け　智者は咸な歎を興す。
壽命は速かに遷謝するに　愚夫は知覺せず　福業悉く消除せば　彼の愛則ち增長せん。
若し人愛に著せば　世世常に隨逐せん　彼は暗鈍無知にして　罪福の相に達せざるなり。
若しは善業の果報は　諸天に生じ樂を受け　不善業の因緣は　彼より退墮す。
善惡の業を造らず　和合の過失を離れ　老死の因を棄背せば　最上の安隱に住せん。
貪は彼の車輪の如く　五欲を輻と爲す　愛の[一五]轂其の中に住するに　世間に知る者無し。
愛河は極めて深廣　欲境を波濤と爲し　疑惑は群魚に譬ふに　世間に知る者無し。
晝夜三時に於て　多く諸の不善を造る　智者も防護せざれば　即ち惡に隨つて流轉せん。
美色は幻化の如く　彼を了せば則ち縛無し　愛に由りて常に追求せば　縛せられ能く解くもの無けん。
若し愛の纏ふ所と爲れば　則ち欲樂に著し　智慧若し現前せば　能く彼の過患を除かん。
愛は其の黑暗を增し　智は光明を發す　當に暗を捨て明に從ふべし　苦を離れて安樂を獲ん。
智は其れ利劍の如く　能く愛の林木を伐る　應に當に善く脩習すべし　最上の安隱を獲ん。
當に知るべし愛の稠林は　深密にして出離すること難し　若し人善く超越せば　則ち三界を出でん。
愛河に三派有り　放逸の水[一六]瀰滿す　當に慧舟に乘り　能く彼岸に渡るべし。
愛は利なる刀杖の如く　愚夫の身を割截し　苦惱堪任し難し　是の故に常に遠離せよ。
愛は惡き癰疽の如く　心より生起し　其れ晝夜の中に於て　曾つて少樂も無し。
愛は猛熾火の如く　疑惑は樵薪の如く　業風に由りて吹かれ　心を燒きて熱惱を生ず。
若し人愛に纏はるれば　其の心則ち輕躁し　非理にして其の財を取れば　則ち身命を喪はん。

【一五】轂。車輪の正中をいふ。

【一六】瀰の字。忍徵師校對本に依る、原本には彌。

悪道より出で已りて　人間に生ずるを得　五百生の中に向ひ　常に他に於て求乞せん。
色を下げ常に言を低くし　匱乏心に逼迫し　唯だ苦を己れの分と爲すは　皆愛に由りて得る所なり。

若し人其の愛を斷じ　常に佛慧を求むるを樂はば　斯れを其れ正人と爲す　最上の寂靜を得ん。
若し心中の愛を遣れば　蛇を駈りて穴を出ずが如し　愛毒未だ蠲除せざれば　決定して當に破壞すべし。

若し決定して造作せば　彼の愛常に現前し　火に乾薪を擲ぐるが如く　其の焔則ち彌盛なり。
衆生は珍財を貪り　積聚して止足すること無きも　彼の命終の時に於て　皆他の所有と爲らん。
愛に由りて獲る所の咎は　財散ずるも罪は消へず　業に由りて牽かれ　悲を含んで地獄に趣かん。

財は他の受用と爲り　罪は則ち己れの身に當り　彼の惡趣の中に墮し　後悔して徒に熱惱せん。
財散ずを名づけて衰と爲し　樂壞すれば則ち苦と爲し　親友忽ちに寃の如き　皆愛心より轉ず。
智人は愛を起さず　愛火は常に熾然し　諸の有情を損害し　惡道に墮せしむ。
財を積むこと彼の山の如くなれば　守禦して常に憂怖せん　云何ぞ諸罪を造り　非理にして持用するや。

畜財を樂はざる者は　怖無く防護無し　是の離貪の智人は　在處に常に安住せん。
富樂を樂求するも　倏然として散壞す　盛衰の久しく停まらざること　日の輪轉するが如し。
榮富は縛の如く　貧乏は罪の如く　皆愛の爲に使せられ　欲に於て厭患無し。
上妙の快樂を受け　所欲皆意の如くなるも　愛火の逼る所と爲り　身樂倶に散壞せん。
若しは諸の天及ひ人　欲に於て厭無きに由り　皆愛の爲に燒かる　如來は悉く知見したまふ。

若し欲に於て怖を生じ　愛火に逼らるるを離るれば　愛の垢染を解脫し　復た惡道に墮せさらん。

自ら邪思惟するに由り[一三]三毒の塵坌を起し　放逸の深淵に溺れ　常に女色を貪る。

歌樂妙音聲は　散亂を引生し　其の心暫くも停まること無し　猶ほ駛水の如し。

愛は深險なる河の如く　欲は漏る[一四]舡舫の如く　愚者の乘る所　即ち彼に沈喪せられん。

愛は猛熾焰の如く　三毒は乾薪の如く　放逸は迅風の如く　諸天を燒くに覺らず。

諸天は欲樂に著せば　則ち愛に降伏せられ　頃刻須臾に於て　暫くも其の少暇無からん。

愛は欲の所依と爲り　百千の障礙を生ず　諸天樂に著するが故に　善に於て作すこと能はず。

愛蛇は五首有り　其の性極めて暴惡　彼の貪欲の人を螫すに　是の苦堪忍し難し。

愛河は極めて深廣　五欲より出生す　彼岸に達せんと欲せば　善に匪ずして何ものか　能く越えん。

愛は幻伎兒の如く　三有に充遍し　諸の天人を誑惑し　益に於て少分も無し。

五根は欲境を取り　未だ曾つて厭怠有らず　酥を火中に投ずるが如く　念念にして增長せん。

又復た彼の愛は　能く惡趣の門を開き　地獄・鬼・畜生に　是の如くに常に往返せん。

愚夫は愛を起すに由り　死魔の口中に墮す　善く斯の過失を離るれば　彼の爲に啗せられず。

諸有の具智の人　能く彼の愛を降伏せよ　憂惱怖畏を離れ　坐臥常に安隱ならん。

若し彼の愛纏(あいてん)を離るれば　則ち諸苦を生ぜず　愚者は希求多く　常は損害を興さん。

其の晝夜の中に於て　心に慈愍を生ぜず　他の所有の珍財　意に欲して皆取らんと希ふ。

是の輩は劫火の如く　其の性常に兇險に　善人を遠離し　毒蛇の穴に處するが如し。

增上の愛に由るが故に　熱惱燒煮せられ　死して地獄の中に墮し　復た鬼趣に生ぜん。

【一三】三毒。貪欲、瞋恚、愚癡の三種煩惱をいふ。

【一四】舡の字。忍徵師校刻本に船に作る。

世火は極めて炎猛なるも　人皆能く之を遠ざく　愛火は世間を燒くに　能く斯の害を免るること無し。

若し人愛を生ぜざれば　最上の寂靜を得　過患の稠林を出で　能く苦海を超へん。

和合の過失を離るれば　則ち愛欲の索を斷じ　諸の罪苦を解脱す　乃ち是れ無憂者なり。

百千[二]倶胝劫に　常に愛の爲に欺かれ　愚夫は棄捨せず　幻網の爲に維繫せらる。

謂く愛に由りて覆はれ　親近承事を樂ふこと　彼の傭力の人の　渴して其の鹹水を飲むが如し。

飲み已りて渴暫く息むも　須臾にして喉復た乾く　渴愛心に在れば　非道何に由つてか止まん。

是の故に當に遠離すべし　諸惡は之に由りて生ず　愛の爲に伏せらるる者は　沈淪して出期無けん。

天中最勝の　上妙の五欲の樂を受くれば　終に愛索に牽かれ　復た惡趣に墮せん。

若し人愛に近づけば　苦惱常に充滿す　正教の明す所に依るに　此れ定んで饒益に非ず。

若し愛の境界に著せば　則ち厭足有ること無く　能く彼の愛を棄つれば　是の人憂患無からん

　諸天愛に由るが故に　則ち放逸を生じ　耽著して復た追求し　復た地獄に墮せん。

諸天若し退失せば　第一の慚耻と爲す　上妙の樂に著するに由り　則ち極量の苦を受けん。

愛自心を覆へば　其の心則ち狂亂し　輪廻を怖れず　長時に縱逸ならん。

衆生欲樂に由り　復其の愛を增長し　愛火・地獄火　彼彼に燒害せらる。

彼の愛若し增長せば　展轉して則ち窮まり無く　已に有るものに防護を生じ　未だ得ざるを常に追求せん。

追求を起すに由るが故に　其の心常に足らず　是の人樂分無きは　如來の印可したまふ所なり。

心に厭無きに由るが故に　常に其の欲味を思へば　則ち彼の愛火に　相續して燒然せらる。

【二】倶胝。無常品第五之餘の下を見よ。

財を愛するに由るが故に　地獄趣の中に墮す　彼の熱惱堪へ難し　是の故に當に遠離すべし。
當に其の智水を以て　之に沃ぎて永く滅せしむべし　若し愛火を除かざれば　菩提を去ること則ち遠し。
若し其の愛を遠離し　諸珍に於て著せざれば　是の人世間に於て　則ち微少の苦も無けん。
網の魚を捕ふるが如きは　悉く諸の螺蜆を遺す　愛は彼の衆生を縛し　能く免るる者有ること無し。
鹿の毒箭に中てらるるが如く　則ち四に向ひ馳走するも　毒處處に相隨ひ　寧ぞ苦惱を逃れん。
愛火も亦是の如し　彼の毒常に隨逐し　愚癡の凡夫を燒く　何に由つてか能く出離せん。
暫く適意を生ずるも　果報は常に燒然たり　出世の樂を求むる者は　應に當に其の愛を去るべし。
魚の其の餌を食へば　彼は必らず當に死に趣くべきが如く　人は愛の僞に牽かるれば　中夭すること疑惑無し。鬼の境界の中に墮し　熱惱して遍く馳走し　及び地獄の有情は　多く心に由りて愛を起す。
乃至他門に向ひ　求乞して活命するは　皆愛に由りて然らしむ　是佛の說きたまふ所なり。
愛火は諸天を燒くに　薪の少許をも須ひず　境界に著するに由り　[一]六根より發起す。
具足の快樂を受け　常に其の心を迷醉し　墮落して覺知せざるは　愛に由りて誤まらるゝなり。
一切の輪迴の因　皆愛より得る所なり　愛の鎖は有情を拘し　惡趣に墮せしむ。
又天中の愛火　欲境に常に圍繞し　愚癡に由りて自在に　彼の著欲の者を燒く。
火の乾薪を得て　焰を騰ぐること則ち彌盛なるが如く　欲樂其の心に適へば　其の愛轉た增長せん。

【一】六根。眼、耳、鼻、舌、身、意根なり。

愛火は心より起る　迷者は淸凉と謂ふも　猶ほ[四]地獄の火に勝る　此れ乃ち[五]三界に遍きなり。
又彼の地獄の中に　能く劫火を生じ　極めて炎猛熾然たり　皆愛より起る所なり。
地獄の苦の衆生は　業盡くれば必らず當に出づべし　三界の諸の有情は　愛火休息すること無し。
愛に縛せらるるに由るが故に　[六]輪迴して窮り有ること無し　何に況んや地獄の中に　更に愛火を生ずるをや。
又地獄の業火は　但だ能く彼の身を然す　愛火の衆生を損ふは　心及び其の體を燒くなり。
是の二種の差別　今當に之を分別すべし　獄火熾炎なりと雖も　愛火復た彼に過ぎたり。
[七]三業に由りて起る所　[八]三有に遍く燒然し　善因を損害するは　唯だ愛火の毒たり。
[九]貪火は諸天を燒く　瞋火も亦復た爾なり　癡火は愚夫を逐ひ　愛火は所至に隨ふ。
嫉慢は復た火の如く　我執の薪より生ず　愛火は世間を燒き　薪無きも常に熾盛なり。
境に於て戀著を生じ　愛蛇の傷むる所の爲り　瞻視し及び承迎し　展轉して增長せん。
火に其の薪を增すが如く　相續して絕へず　世火は猶ほ防ぐ可く　愛火は能く制するもの無し。
若し愛に欺罔せられ　世間に隨つて流轉せば　彼則ち寃敵の如く　能く勝る者有ること無し。
愛に由りて覆はれ　海に趣きて諸珍を求め　恐怖の軍陣の中に　深く入りて而も鬪戰す。
王者は其の國を愛し　乃ち互相に侵競し　以て母及び子　財に因つて諍を起すに至る。
若し彼の愛を解脫し　諸の珍玩を損捨し　之を視ること瓦礫の如くなれば　則ち[一〇]菩提の道に近づかん。

【四】地獄。地獄品第十六の下を見よ。
【五】三界。無常品第五の下を見よ。
【六】輪廻。說法品第二の下を見よ。
【七】三業。身業、口業、意業の三をいふ。
【八】三有。三界に同じ。
【九】貪火、瞋火、癡火、貪欲、瞋恚、愚癡の三毒煩惱なり。
【一〇】菩提。梵語（bodhi）、道は覺と譯す。

卷の第四

訶厭五欲品　第七之餘

欲境は夢事の如く　亦[一]尋香城の猶く　猛熾にして焔の然ゆるが如し　諸天是に由りて墮す。

若し欲に於て愛を生ぜば　後に則ち爲に損ぜられ　曲戾にして正思無し　諸天是に由りて墮す。

極下の悪厭ふ可く　流注すること河源の若く　之を深險の坑に譬ふ　諸天是に由りて墮す。

欲の性本と動搖し　風浪水月の猶く　蛇舌の停まらざるが如し　諸天是に由りて墮す。

欲は飛電の轉ずるが如く　亦[二]陽焔の如く　聚沫の不堅なるが如し　諸天是に由りて墮す。

欲は迅かなる河流の如く　象耳の常に動けるが如く　芭蕉の不實なるが如し　諸天是に由りて墮す。

欲は彼の幻事の如く　金播歌果の如く　魚の其の鈎を呑むが如し　諸天是に由りて墮す。

當に眞實の智を以て　欲境を斷除し　不善果及び諸の不饒益を解脫すべし。

妄想の思惟を起し　欲に於て欣樂を生ぜば　則ち欲綱に拘せられ　壽命豈能く久しからん。

衆生の心輕動せば　咸な欲の牽く所と爲り　愚癡にして覺知無けん　彼は自ら欺誑せらる。

若し欲境に動ぜらるれば　則ち是れ諸苦の本　[三]乾闥婆城の如く　當に知るべし久住せず。

若し欲に於て貪を生ぜば　彼の瞋則ち隨轉し　是の如き諸の衆生は　速かに惡道に趣かん。

是の故に彼の正士は　欲を捨て火恚を除き　癡等の過失を離れ　明慧を顯發す。

若し人欲境を厭ひ　彼の深宛の如きを悟り　智を以て良朋と爲せば　速かに眞常の果を證せん。

欲に於て著を生ぜざれば　諸の垢染を離るるを得　斯れを具智の人と爲し　諸天咸な敬奉せん。

善く欲の淤泥を越ゆれば　能く衆生に樂を與へ　心は縛を離れて寂靜に　諸の魔軍を降伏せん。

【一】尋香城。乾闥婆城に同じ、蜃氣樓をいふ。

【二】陽焔。かげらふ。

【三】乾闥婆城。厭離自身品第三の下を見よ。

是の欲は寶處に非ず　輪廻の曠野たり　若し愛樂し親近せば　則ち出離すること能はず。
罪に於て驚怖せざれば　彼は大なる無知と爲す　非財を說いて財と爲せば　唯だ苦にして則ち樂無けん。

若し人欲を遠離し　貪愛を生ぜざれば　此を善く安住すと爲し　欲火の害する所に非ず。
欲に於て止足無ければ　彼の心安靜に非ず　貪愛と相應し　火の焰の騰ぐるが如し。
諸天・[五六]阿修羅　人及び非人等　欲に於て厭を生ぜず　皆彼に破壞せらる。
若し人欲境に於て　迷惑して心狂亂せば　彼は自ら欺誑せられ　是に由りて喪滅せん。
諸の嗔癡の衆生は　罪福の相を知らず　境界を名づけて欲と爲し　常に愛樂を生ず。
諸天は欲に牽かれ　其の心則ち癡亂す　若し佛の功德を樂はゞ　當に彼の境界を離るべし。
此の現在の五欲は　能く諸の過患を生ず　欲に於て染著せざるを　是を名づけて智者と爲す。

【五六】阿修羅。梵語（asura）。非天等と譯す。十界及び六趣の一。戰鬪を事とする一類の鬼類をいふ。

く。

當に知るべし彼の貪欲は　夢境の虚幻なるが如し　苦・空・無常にして　及び實の主宰無きを了せよ。

故に諸佛の所説は　[四九]五蘊は自性空なりと　若し實の如く了知せば　則ち欲に於て著せざらん。

諸の[五〇]有情を愍れむが爲に　[五一]煩惱の縛を斷除して　[五二]彼岸に至らしむれば　[五三]寂靜の涅槃を得ん。

樂うて五欲を行ぜば　則ち[五四]三有に沒溺し　常に其の心を迷惑す　何に由つてか寂靜を得ん。

若し人欲に著せば　則ち正法を妄失し　彼の境界を尋求し　速かに其の地獄に趣かん。

是の欲は唯破壞し　猶ほ利なる刀劍の如く　若し厭離を生ぜざれば　後に當に唯だ苦有るべし。

若し是の如く造作せば　則ち是の如く增長す　彼に於て厭足無ければ　常に諸の熱惱を生ぜん。

天中の快樂を求むれば　當に欲の燒く所と爲り　諸の苦因を造らざれば　常に快樂を得ん。

愚夫は欲境に於て　堅著して捨てず　此れは則ち電光の如く　暫時にして動轉せん。

若し人五欲を貪り　相續して斷ぜざれば　是の人欲火に燒然せられ　休息無けん。

諸天欲境に於て　增上の愚癡を生ぜば　離喜妙樂に於て　彼は則ち復た得ざらん。

解脫を離るれば樂無く　亦涅槃無し　欲境と相違す　是の故に當に棄捨すべし。

若し貪の境界に住せば　諸根則ち厭くこと無く　彼の厭無きに由るが故に　何に由つてか解脫を得ん。

若し輪迴の海に於て　能く怖畏を生ぜば　當に彼の不善　及び貪欲の險難を離るべし。

欲境は暫くも停ること無く　日出でて復た沒するが如し　當に山林に依るを樂ひ　禪を修めて出離を求むべし。

欲は解脫の法に非ず　愚者は珍玩と爲す　唯だ[五五]聖財の七種のみ　畢竟して安樂を獲ん。

【四九】五蘊。梵語 pañca skandhāḥ の譯。三科法の一。一切有爲法の類聚。色、受、想、行、識蘊なり。
【五〇】有情。悲愍有情品第二十一の下を見よ。
【五一】煩惱。伏除煩惱品第一の下を見よ。
【五二】彼岸。不放逸品第六之餘の下を見よ。
【五三】寂靜の涅槃。寂靜品第二十八の下を見よ。
【五四】三有。三界に同じ。
【五五】聖財七種、信、戒、慚、愧、多聞、智慧、捨離を指し、是を七聖財（梵語 sapta dhana）といふ。

愚人は心欲に著し　顧戀して捨つること能はず　彼は癡の爲に盲せらる　何ぞ能く明惠を發せんや。

惡言は聞くこと讎の如く　此に於て人皆怖る　欲境は深寃の如し　云何ぞ遠離せざるや。

愚夫彼の欲に著せば　則ち欲火の爲に燒かる　厭患の心生ぜざれば　後に苦報を受けん。

譬へば大火聚の如きは　見る者咸な怖を生ず　欲境は常に熾然たり　云何ぞ親近を樂ふや。

是の身筋連持し　深く厭離を生ず可し　復た欲の迷はす所と爲れば　索の如くにして纏縛す。

金播歌果の　紅色にして味甘美なるも　食へば則ち損惱を生ずる如く　著欲も亦是の如し。

蛾の燈焔を撲てば　則ち彼の爲に燒かるゝが如く　著欲の諸の衆生は　之に由りて破壞せらる。

彼の無識の愚夫は　欲に於て而も稱譽す　是の欲は熾火の如く　觸るれば則ち燒然せらる。

鹿の渴に逼られ　[48]陽焔に奔趣するが如く　彼の貪心に隨ふに由りて　妄に快樂を求む。

諸天妙欲に著せば　則ち厭飫有ること無く　諸惑之に由りて生じ　何ぞ能く寂靜を得ん。

現に少樂を生ずと雖も　後に於て則ち苦と爲る　諸天は欲境に牽かれ　其の心常に散亂す。

種種の境界に於て　耽染して心迷醉す　命盡きて業相隨ふこと　決定して疑惑無し。

衆生死の將に至らんとするに　惶怖を生ぜざる無きも　欲の境界に著すに由りて　死に及びて依怙無し。

愛別離の苦惱　皆欲に由りて生ずる所なり　諸天當に了知すべし　應に心に戀著すべからず。

是の欲は義利に非ず　無常の恐怖を生ず　彼の愚癡の凡夫は　愛樂して親近す。

增上の癡迷に由り　貪火に燒煮せられ　正念思惟無く　欲に於て厭怖無し。

若し欲の境界を樂はゞ　決定して諸苦を受け　三界の中に輪轉し　何に由つてか出離を得んや。

衆生は無明に因り　常に諸の苦惱を受く　是の故に彼の欲は　電の如く久住するものに非ずと說

【四八】陽焔。かげらふ。

彼の愚癡の凡夫　常に欲味を貪る　初め少樂有りと雖も　後に當に唯損のみ有るべし。
是の如く彼の聲色　體性は能く惑を生じ　愚者は彼に牽かれ　則ち其の險道に趣く。
若し人欲味に於て　心に常に渴愛を生ぜば　彼は唯だ苦にして樂に非ず　智者は當に遠離すべし。
虛空の雨を降らし　能く河流を益すが如く　諸天は欲の中に沒し　唯だ熾盛を增す。
魚の水中に居るに　猶ほ其の渴愛を生ずるが如く　彼の著樂の諸天の　厭無きことも亦是の如し。
彼の虛空界の如きは　邊際得べからず　欲に於て貪を生ずる人も　境界何ぞ窮盡せん。
海の波濤を騰ぐるが如き　其の水常に充滿す　愚癡著欲の人は　彼の心常に足らず。
愚者は常に　未だ得ざる諸の欲境を思惟し　已に得れば則ち堅く著し　味を貪りて涎を流すが如し。
欲は能く熱惱を生じ　極惡の過患たり　此に滅し彼に復た生じ　[四五]寂靜の境界に非ず。
是の欲は唯だ損害なり　此れを棄つれば丈夫と名づく　已れに若し衰厄有れば　彼則ち咸な捨て去る。
境界に於て厭くこと無く　樂に於ても亦足ること無し　智者は善く思惟し　應に常に遠離を生ずべし。
境界は苦因たり　寂靜は樂の本たり　境界の毒蛇を離れ　當に寂靜に親近すべし。
欲は能く大怖　刑戮及び重病を生じ　彼の貪の因緣に由り　輪迴に隨つて流轉す。
無量百千生に　聚め已れば復た還つて散ず　唯だ[四六]諸佛世尊のみ　眞實に悉く知見したまふ。
[四七]世間・出世間の　種々の諸の快樂は　彼の著欲に由るが故に　悉く皆散壞せらる。

【四五】寂靜。寂靜品第二十八の下を見よ。

【四六】佛、世尊、共に如來十號の一、無常品第五之餘の下を見よ。

【四七】世間、出世間、不放逸品第六の下を見よ。

是の[四四]六根の輕動する　之を彼の惡馬に譬ふ　欲境に著して厭くこと無く　常に其れ飢渇せるが如し。
諸天五欲に著するは　火に乾薪を益すが如く　火の性本熾然たり　足ること無きも亦此の如し。
是の六根の熾火は　無始より常に燒然す　愚夫は覺知無く　貪り迷ひ悶絶せるが如し。
當に知るべし彼の欲樂は　則ち地獄の因たり　欲を覩て貪心を起すこと　蛇の其の舌を動かすが如し。
又彼の盲者の如く　目無くして諸欲を亡ず　彼若し尋求を起せば　則ち地獄に墮せん。
無目なるに由るが故に　能く欲の境界を離るるには非ず　眼を具し正行を修せば　則ち彼の惡趣を越へん。
樂ふて非義利を行じ　諸の不善業を造り　欲に於て心に厭くこと無ければ　是の人惡道に墮せん。
若し人欲に著せば　衆苦之に由りて生じ　暫く捨つるも還つて追求す　彼は識無く智無きなり。
欲は初は親友の如く　後には則ち寃敵と爲り　金播歌果の　食已れば卽ち害と爲るが如し。
無量の諸の衆生　欲に著して墮落す　逝く水の迴無きが如く　彼の樂も亦異ること無し。
諸の快樂　園林勝境界を受用するも　彼に於て若し貪無ければ　常に安隱の處に生ぜん。
若し人欲味に耽れば　放逸にして心狂亂し　樂壞して苦現前するも　彼は後悔を生ぜず。
先の善業の力に由り　形色の姝好なるを感ず　是の故に彼の諸天　各愛樂を生ず。
是の欲境無常なり　決定して當に離散すべし　諸有の具智の人　欲に於て亂れざれ。
此の身は何の堪ゆる所ぞ　無智にして愛樂を生じ　常に不善の因を造る　況んや復た未來の苦をや。

【四四】六根。眼耳鼻舌身意の六官なり。

諸欲に樂著するに由り　其の苦果を畏れず　彼は暗鈍無知にして　後に極險難を受けん。
欲の患たるや尤も重し　暫く能く少樂を生ぜば　此の不淨行の爲に　惡趣に引導せらる。
若し人智眼無く　欲に於て常に愛念せば　亦彼の盲者の如く　險に墮して救ひ無けん。
彼の著欲の衆生は　少しく味ひて而も怖多きこと　猶ほ[四三]尋香城の　暫有にして即ち處無きが如し。
放逸にして喜悅を生じ　展轉して愛樂し　諸天は癡に迷はされ　覺悟を生ぜず。
境界に於て貪を生ぜば　彼の欲即ち隨轉し　大苦報を知らず　決定して自ら受けん。
若し人五欲に於て　常に嬉戲に樂著せば　當に彼の惡道に墮すべし。愚癡にして徒に後悔せん。
若し癡の境界を離るれば　欲火に燒かれず　正行に於て勤修せば　則ち最上の樂を得ん。
世間の欲境を以て　清淨の妙樂に比するに　十六分中に於て　而も其の一に及ばず。
若し人心欲に著せば　此の欲實に樂に非ず　速かに地獄の中に趣き　苦に於て分有らん。
設ひ百千劫に於て　欲に著するも亦足ること無く　常に欲の境界を求む　何ぞ曾つて樂處有らん。
若し欲に於て作意せば　刹那に則ち增長す　諸天及び世人　此に由りて墮落す。
欲に於て常に耽迷せば　最極の險惡たり　若し遠離を生ぜざれば　則ち彼に破壞せられん。
是の眼は猶ほ海の若く　色を觀るに滿足すること無く　最上の美味に於て　舌は嗜みて而も厭くこと無し。
鼻は諸の妙香を齅ぎ　彼に於て常に捨てず　觸に由り快樂を生ずるに　彼の意則ち盡くること無し。
美妙の音聲に於て　耳は聞きて極めて愛樂し　意は法塵に著し　未だ曾つて暫くも捨てず

【四三】尋香城。乾闥婆城に同じ。蜃氣樓なり。

是の心は常に癡暗にして　境に於て明了ならず　彼の欲は極めて過患たり　暫く適悅を生ず。
若干百千　無量倶胝數に於て　皆欲に由りて破壞するに　心に於て防護せず。
欲境の爲に縛さるれば　當に地獄の報を受くべし　意を以て善く修作し　畢竟して當に遠離すべし。
先に貪染を起すに由り　復た彼の瞋行を作り　愚癡に迷はさるるに因り　則ち畜類に同じ。
愚夫は欲の中に沒し　欲に由りて復た癡醉し　猶ほ彼の飛蛾の　終に火の害する所と爲る　が如し。
彼の諸天の形色は　樂に著して破壞し　彼の欲の降す所と爲り　決定して當に墮落すべし。
衆生は欲に誑らかさるれば　則ち癡迷を生じ　愛索に牽かるるに由り　則ち惡道に墮す。
若し彼の險惡を怖るれば　自ら善利を作せ　意寂靜なるを以ての故に　熱惱を生ぜず。
若し欲の境界を樂はば　疑惑則ち增長し　漸く諸の過患を生ずること　風の其の火を皷つが如し。
欲火常に燒然し　彼の樂速かに遷滅す　常に眞實に思惟し　境界に著せざれ。
若し人欲境に於て　其の心に迷亂を生ぜば　境界常に現前せん　是れ彼の愚癡行なり。
無智は境界に著し　厭離を生ぜず　薪を火中に投ずるに　風に因りて則ち熾盛なるが如し。
諸天は彼の貪に由り　常に欲樂に著し　愚癡にして厭離せず　是に由りて退沒す。
若し人欲境に於て　心に常に繫念を生ぜば　別離の苦惱に　長時にして燒煮せられん。
天中の妙なる欲樂　當に愛別離と爲る　是の苦人間に勝り　其の少分にも及ばず。
諸天は欲樂を受け　魚の水中に居するが如し　心境若し倶に亡ぜば　彼の貪則ち起らず。
若し人欲境に於て　常に愛樂親近し　其の心に防護せざれば　長時に苦を斷ぜず。

是の中に愛樂を生ぜば　刹那の樂も有に非ず　若し離垢寂靜なれば　不滅の處に至るを得ん。
智者は初中後に　欲を以て而も莊嚴す　云何ぞ彼の愚夫は　欲に於て耽著するや。
是の欲は毒苗の如く　觸るれば則ち熾火を生ず　彼に於て愛樂を生ぜば　則ち毒の爲に害せられん。
火に薪を加へ　其の焔常に滅せざるが如く　若し彼の欲を樂はば　則ち熱惱を增さん。
蛾の燈焔を見て　其の身を燒くを知らざるが如く　彼の愚癡の衆生は　欲に著すること亦是の如し。
若し人貪欲に著せば　常に彼に燒煮せられ　畢竟して知覺無く　燈の蛾と相似たり。
是の故に彼の諸天は　欲を捨てゝ佛智を求めよ　放逸は當に自ら損ふべし　今生を虚く擲つ勿れ。
常に諸欲に樂著せば　善業を滅失し　癡の爲に欺誑せられ　後に當に地獄に墮すべし。
毒樹華を開くに　遊蜂競ひ採るが如く　愚癡著欲の人は　受用して以て樂と爲す。
彼の蜂毒を食するに由り　其の命復た何ぞ有らん　欲毒は衆生を損し　永壽極めて得難し。
又彼の地獄の火は　欲に由りて燒然す　是の火其の中に滿ち　諸天等の類を燒く。
餓鬼は飢渴に逼られ　復た火の燒く所と爲る　彼の畜生の中に於ては　樂ふて損害を尋求す。
餘の一切の世間　皆欲に依りて任せば　是の火普遍に起り　諸の欲に迷ふ者を燒く。
心は常に境界に於て　耽迷し復た輕動す　愚者若し明了せば　彼の危苦を離るるを得ん。
其の心諸欲に著し　其の險難を知らず　常に欲の瀑流に處せば　則ち苦惱を生ぜん。
諸天は性怯弱にして　欲に著して狂亂を生じ　斯れに由りて心動轉し　大恐怖を知らず。
諸天は五欲に耽り　常に固護を生じ　無智にして棄捨せず　後に當に憂悔を生ずべし。

幻の如く聚沫の如く　[四一]金播歌果の　暫く美味を生ずるが如く　著欲も亦此の如し。
智者眞實に見るに　愛を離るれば則ち苦無し　彼の愚癡の者の爲に　其の惡果を顯示せよ。
欲は世間の毒の如く　一切の罪を造作し　所得の如く思惟するも　後に復た破壞せらる。
意欲に著して厭くこと無ければ　復た欲を以て寃と爲す　彼の天命終の時　即ち地獄に墮せん。
欲は世間の毒と爲す　亦一電光の如し　愚癡にして女色に著せば　魚の浪を逐ひて轉ずるが如し。
常に思惟增長するも　前後際不善なり　欲に著するは熾火の如し　智者は當に遠離すべし。
若し其れに隨つて親近せば　則ち彼彼增長せん　欲火は極めて燒然たり　觸るれば則ち楚毒を受けん。
此の欲火を了知し　智者は常に遠離す　若し彼の欲を離るれば　決定して安隱を獲ん。
彼の無數百千　[四二]那由佗の天衆は　五欲を愛樂するに由り　獄火に燒煮せらる。
欲は火の如く毒の如し　當に離れて安樂を求むべし　彼の地獄の因たり　是の故に應に棄捨すべし。
欲に於て自在を得ば　見ず聞かざるが如く　彼に著せざるに由るが故に　苦無く逼惱無けん。
欲に於て應に作すべからず　亦意に思惟すること勿れ　欲に著する諸の天人　彼の火の爲に害せらる。
無始の輪廻より　欲寃は心より起る　愛に於て若し解脫せば　彼の欲は則ち有ること無けん。
彼の染濁の苦果は　愛欲より生ず　若し欲に於て解脫せば　則ち上妙の樂を得ん。
智者は欲に依るも　欲に於て愛無く　彼の癡を離るるに由るが故に　眞常の處を證するを得ん。
暫く適悅を生ずるも　後に諸の楚毒を受く　欲に於て染著を起せば　則ち地獄に趣かん。

【四一】金播歌果。毒果の名。色は紅色にして頗る美しく、味も亦至つて甘美なれども、その毒はげしく食へば直ちに必ず命を損ふ。

【四二】那由佗。梵語(nayuta)數目、億に當る。

又世間の火の如きは　見巳りて咸な畏を生ず　貪火は極めて洞然たるに　何ぞ驚怖を生ぜざるや。

彼の五根より起り　五境に圍遶せらる　愛力は疾きこと風の如く　彼の多貪者を燒く。

境界は　稠林[三五]の如く　深險にして出離すること難く　彼の貪の燒く所と爲るは　火の　槁木[三六]を然すが如し。

是の貪欲の熾火は　境界に隨つて增長す　彼の貪者は知ること無く　苦を以て而も樂と爲す。

世火は光明を益し　貪火は黑暗を增す　是の境界は寃の如し　智者當に遠離すべし。

若し人境界に於て　見巳れば當に毒の如くなるべし　暫く少樂を生ぜば　然る後に極苦を受けん。

此の世佗の世に非ず　亦初中後無く　是の如く欲の境界は　云何ぞ快樂有らん。

是の諸の愚癡の者は　多く嬉戲に樂著し　境界に於て厭くこと無し　火の草木を焚くが如し。

境に於て厭くこと無きに由り　則ち彼に欺誑せられ　常に生死の中に處し　其の過失を知らず。

著欲は飛禽の行なり　彼は決定して愚癡なり　是の如き諸の天人は　禽等の類にも及ばず。

猶ほ劫盡くるの時　日の海を炙りて竭せしむるが如く　百千　倶胝[三七]劫に　色を觀して厭くこと無し。

彼の海は尙竭くること有るも　天雨能く充滿す　眼に諸の色相を視　未だ曾つて厭足有らず。

欲に於て若し厭くること無ければ　樂に於て何をか分別せん　彼若し足りて貪無ければ　則ち憂惱を遠離せん。

摩羅耶山[三八]の　悉く　旃檀木[三九]を產するに　愚者は伐りて薪と爲し　復た以て田畝を營むが如し。

欲は第一の誑と爲す　虛妄にして堅牢ならず　乾闥婆城[四〇]の如く　亦夢境の如し。

【三五】稠林。稠密なる森林。

【三六】槁木。かれ木。

【三七】倶胝。無常品第五之餘の下を見よ。

【三八】摩羅耶山。梵名malaya.南天竺にある山、旃檀木を產すといふ。

【三九】旃檀木。梵名candana香木の名、南印摩羅耶山に產す。その山の形牛頭に似たれば牛頭旃檀香とも名づく。

【四〇】乾闥婆城。厭離自身品第三の下を見よ。

佛に同じく[二五]彼岸に超へん。

訶厭[二六]五欲品 第七

欲を第一の誑と爲す 彼に於て作意無ければ 是れ諸の[二七]地獄の因なり[二八]輪迴して深險に縛せらる。

若し人諸欲に著せば 則ち無邊の苦を受けん 常に欲蛇に害せらるれば 何ぞ少樂有らんや。

寧ろ利なる刀劍を以て 自ら其の舌を斷ずるも 應に少言を以てすら 欲事を談ずべからず。

衆生は[二九]貪に欺かれ[三〇]嗔恚(しんに)して常に燒煮し[三一]愚癡に降伏せられ 欲に於て常に讃美す。

多く惡行を造り 而も欲の少味を得 彼の貪癡を縱にするに由り 苦の苦たるを了せず。

彼の欲は形色無く 快樂は常有ること無く 最極の惡因と爲す 然れば後に當に遠離すべし。

衆生は貪を起すに由り 常に惡趣に墮す 若し能く彼の過を離るれば 則ち地獄の怖無けん。

獄中に惡火を生ず 欲火悉く同等なり 是の故に當に一心に 常に厭怖を生ずべし。

常に解脱(げだつ)を愛樂し 彼の欲を遠離せば 不善法を破壞すること 日の黑暗を除くが如し。

彼の愚夫の凡夫 諸根境界に著し 意に由りて愛樂を生ぜば 即ち惡趣に墮せん。

又彼の諸の有情は 貪火を生じ 和合すれば則ち熾盛し 離散すれば則ち有ること無し。

彼の[三二]五境界(きやうがい)に由り[三三]五根に愛著を生ぜば 須臾にして貪火然え 欲に於て足ること無けん。

若し欲の境界を離るれば 彼の起るを得るに由無し 是の火極めて險惡なり 常に應に遠離を生ずべし。

木の分別無きが如く 愛河に從つて流る 彼の愛は復た酥(そ)の如く 之を沃はば熾焰を增さん。

是の貪火は猛毒あり 能く一身を燒く 名色を棄捨すれば 彼の火則ち[三四]然えず。

【二五】 彼岸。生死の境界を此岸にたとへ、業煩惱に中流にたとへ涅槃を彼岸を譬ふなり。

【二六】 五欲。梵語 pañca kāmaḥ の譯。五境に染著して起す五種の情欲、色欲、聲欲、香欲、味欲、觸欲なり。

【二七】 地獄。地獄品第十六の下を見よ。

【二八】 輪迴。說法品第二の下を見よ。

【二九】【三〇】【三一】 貪(欲)、嗔恚、愚癡。是の三を三毒煩惱といふ。

【三二】 五境界。梵語 pañca rajāṃsi の譯。又五境、五塵ともいひ、五根所取の境界、即ち色、聲、香、味、觸なり。

【三三】 五根。梵語 pancêndriyāṇi の譯。五識の所依たる眼。耳、鼻、舌。身根なり。根は能生。增上の義で、草木の根の增上の力を有し、能く枝幹を生ずるが如く、眼根は色境に乃至身根は觸境に對して意識を生ず。

【三四】 然の字、忍徵師校註に依る。原本には滅。

ん。

放逸の過失を示すに、道と極めて相違す　則ち法の橋梁を斷じ　善心の種子を壞す。
能く解脱の法を壞し　諸の妄念を引生し　彼の險惡趣に墮すは　皆放逸より起る。
自ら利益を求めず　他人の爲に棄てられ　言無く所作無ければ　彼は則ち死者の如し。
天の形質を具すと雖も　愚癡なれば畜類に同じく　常に放逸の中に居し　歌舞戲笑を作す。
若し人放逸に著せば　卽ち三有の海に趣き　滅し已りて復た還生し　悉く其の破壞を見ん。
此に由りて諸罪を造り　業の纒縛する所と爲り　放逸轉じて寃と爲り　諸の善法に違背す。
是の業內に任せず　亦外に在らず　當に知るべし放逸の者は　皆心に由りて破壞せらる。
最上の境界に於て　其の心に厭足無く　歌舞嬉戲を樂ひ　墮滅の處を知らず。
愚癡放逸の者は　怖を以て歡悅と爲す　彼の天は生盲に同じく　道・非道を知らざるなり。
彼の放逸の行に由り　諸善より墮落し　[一九]欲界の中に輪轉し　[二〇]五趣に馳流す。
若し無色界に住せば　[二一]四種の空定を獲るも　放逸を行ずるに由るが故に　世間に流轉す。
三界の中に周流し　愚癡にして知覺無ければ　[二二]放逸は桎梏と爲り　愛索にて纒縛す。
若し諸の[二三]惡道に墮し　常に飢渴・恐怖あるは　彼の放逸の行に由る　悔惱を生ぜざれ。
若し心に苦惱を生ぜば　則ち愛別離と爲り　故に如來の訶したまふ所　常に放逸を遠ざけよ。
彼の放逸の芽に由り　老・病・死を滋長す　是の三種の苦惱は　能く諸の衆生を壞す。
又彼の大地の　能く其の藥草を生ずるが如く　彼の放逸の愚夫は　則ち諸惑を增長す。
放逸は毒苗の如く　諸の懈怠を出生し　酒を飮み女色に著し　共に境界に遊戲す。
放逸は極苦と爲し　不放逸は最も樂なり　放逸・不放逸　此にて善く分別せよ。」
「假使ひば百千　[二四]俱胝劫に　惡趣に墮して極苦を受く　是の故に應に放逸を作すべからず　則ち諸

【一九】欲界、無色界、三界、共に無常品第五の下を見よ。
【二〇】五趣。不放逸品第六の下を見よ。
【二一】四種空定。又四無色定ともいひ、一に空無邊處定、二に識無邊處定、三に無所有處定、四に非想非非想處定、この四種の禪定を修せば、無色界四天の果報を得るなり。
【二二】桎梏。あしかせてかせ。
【二三】惡道。惡趣に同じ、地獄、餓鬼、畜生を三惡趣といひ、又三惡道ともいふ。
【二四】俱胝。無常品第五の偈を下を見よ。

彼の惡作を遠離し　専ら諸の善行を修し　斯の過咎を棄捨し　常に不放逸を樂へ。
放逸は輪迴の本　此を離るるを寂靜と爲す　彼の二種の差別　此に其の自相を說けり。
智者は常に思惟し　樂ふて諸善を修し　正人は法に依りて行じ　則ち少苦すら無し。
衆生は輪迴に處し　皆自業に隨ふ　云何んが彼の世間に　放逸の破壞を爲すや。
放逸は第一の縛なり　復た能く諸善を壞し　彼の墮落の因と爲り　地獄の苦の本と作る。
一の放逸を顯示するも　諸の苦惱の因たり　若し饒益を樂ふ者は　常に彼の過失を離れよ。
若し放逸を離るれば　不死の處に至るを得　不放逸に由るが故に　則ち[一四]菩提の道に近づかん。
若し不放逸を樂はば　最上の涅槃に住せん　故に彼の放逸を說いて　其の墮落の因と爲す。
若し人放逸を作せば　此の惡は上に過ぐる無し　世の欺輕する所と爲り　死して[一五]餓鬼趣に墮せん。
若し放逸を樂はば　則ち彼の顚倒を生じ　是の如き業果に由り　生死に隨つて[一六]流轉せん。
彼の地獄の熾火は　常に放逸の人を燒く　若し解脫を樂はん者は　則ち放逸を捨てよ。
若し人放逸を離るれば　則ち明智を生じ　永く諸惑を斷ち　常に彼の妙樂を受けん。
衆生の心散亂せば　業の爲に纏縛せられ　[一七]三有の中に流轉せん　當に不放逸を樂ふべし。
苦に於て謂ひて樂と爲し　樂壞して苦を生ず　夫死して或は妻と爲る　當に不放逸を樂ふべし。
妻死して或は母と爲り　母死して或は妻と爲る　此の流轉の中に於て　當に不放逸を樂ふべし。
放逸は能く貪を生じ　貪に由りて復た恚を生じ　過患の源と爲り　惡道に沈淪せん。
放逸・不放逸　智者皆著せず　此れは最上の安隱にして　智惠の樓閣に昇らん。
若し能く放逸を離るれば　善く安樂の處に住し　大智の丈夫と爲り　速やかに[一八]眞常の果を證せ

【一四】菩提。說法品第二の下を見よ。
【一五】餓鬼趣、三惡趣の一。餓鬼品第十七の下を見よ。
【一六】流轉。遠離不善品第四の下を見よ。
【一七】三有。三界に同じ。
【一八】眞常の果。眞實常住なる果報、卽ち涅槃をいふ。

ん。

此に彼の放逸を說くに　理に於て和合に非ず　諸天は常に癡迷にして　當に[九]地獄に墮すべし。
諸天は欲に迷はされ　非愛に愛を生じ　癡暗にして覺知せず　何ぞ少樂も有らん。
諸天五欲に於て　常に樂著し迷醉せば　彼の生盲の人の如く　正道を見ざらん。
彼の心散亂するに由り　眞實の見を生ぜず　放逸　鎭(とこしへ)に燒然す　是の故に當に遠離すべし。
意地の諸の善法は　放逸に由りて破壞す　[一〇]八聖道昭然たるも　畢竟して能く見ること無し。
是の放逸の毒たる　能く[一一]十善法を壞す　是の如き放逸の者は　[一二]四種の禪定を失せん。
諸佛は五欲を離れ　常に不放逸を讚したまふ　是の身は老死に侵さる　當に放逸を遠離すべし。
放逸なれば唯苦のみ有り　此を離るれば卽ち解脫す　放逸の僞に牽かるれば　無智にして斷ずること能はず。
不放逸は最勝なり　諸天は親近を樂ふ　若し放逸を作さば　定んで當に退沒すべきを知れ。
一切の諸の衆生は　[一三]輪迴して解脫せず　放逸の羂索(けんさく)に由り　縈纏(えいてん)して出離すること難し。
惡を造れば則ち福無く　善を作せば罪を招くに非ず　放逸なる諸の有情(うじやう)は　常に顚倒の見を生ず。

云何んか罪福と爲す　世俗の說く所に非ず　智者は善く明了し　放逸を讚せず。
諸天若し放逸なれば　則ち善業を滅失す　當に知るべし此の惡因は　定んで苦果を招く。
若し意諸欲に著し　暫時に少樂をも生ぜば　則ち彼に破壞せられ　退失して大苦を生ぜん。
境界常に現前し　愚夫は厭足せず　癡迷にして女人に著せば　則ち其の墮落を見ん。
貪に由りて放逸を生じ　諸の女人に習近せば　已れの命終の時に於て　彼は則ち咸な觀看せん。
諸天若し退沒するに　獨り逝いて而も侶無く　唯だ善惡の業のみ有りて　後に於て隨逐す。

【九】地獄。地獄品第十六の下を見よ。

【一〇】八聖道。敎誡比丘品第三十の下を見よ。

【一一】十善。地獄品第十六の下を見よ。

【一二】四種禪定。梵語catvāri dhyānāni の譯。又四禪、四靜慮とも譯す。卽ち色界の四禪天に生ずる四種の禪定をいふ。初禪、二禪、三禪、四禪と名づく。

【一三】輪迴。說法品第二の下を見よ。

若し放逸に任せば　[四]四種の顚倒を生じ　能く善行を壞すること　世間の寃害の如し。
無量の諸の疑惑　怖恐常に逼切し　生死の中に流轉するは　皆放逸の行に由る。
此の一の放逸行は　常に諸の欲樂を樂ひ　則ち一切の[五]無漏　清淨の法を遠離す。
諸天は放逸の故に　展轉して窮極無きも　愚癡にして厭離せず　何に由つてか寂靜を得ん。
[六]染汚の思惟を離るれば　其の心則ち寂靜なり　能く自他を利し　復た諸の熱惱無けん。
諸天は欲樂に著す　所得何ぞ曾つて見ん　是の樂は[七]有爲の生　無常にして久住せず。
此の有爲の色相は　決定して破壞す　彼の樂若し壞するの時は　則ち苦惱を生ず。
若し人欲境に於て　放逸にして心狂亂せば　決定して乖離有り　後に熱惱を受けん。
五欲の境界に於て　貪愛して自在なるを得ば　彼の欲諸天を誑かす　放逸なれば則ち隨つて轉ぜん。
若し人放逸を作さば　是れ諸難の根本なり　財に於て貪求を起し　廣く諸の不善を造らん。
若し人此の生に於て　諸の快樂を具足せば　當に智惠に隨つて行ずべし　魚の流水を逐ふが如し。
諸天若し放逸にして　女色の爲に伏せらるれば　則ち彼に燒然せられ、常に苦惱を受けん。
是の故に諸の天人　一心に當に遠離すべし　意に於て常に止足せば　欲の縛する所と爲らず。
愚癡にして罪福に迷ひ　法・非法を知らざれば　此の人涅[八]槃に於て　少分をも得べからず。
輕重の律儀　及び甚深の法要に於て　常に修習を樂へば　則ち彼の安樂を獲ん。
常に正法を宣ぶるを樂ひ　諸の垢穢を滌除し　放逸の行を作さざれば　則ち常に妙樂を獲ん。
昔樂ふて放逸を行ずれば　常に迷醉して愚癡なり　若しは天若しは世人　皆親近すべからず。
放逸の過失を造り　未だ曾つて間斷有らざれば　彼の人の命終らんと欲して　則ち惡道に趣か

【四】四種顚倒。顚倒は梵語 viparyāsa の譯。凡夫は生死有爲の法に對して、常樂我淨の見を起すをいふ。
【五】無漏。梵語 anāsrava の譯。有漏に對し、漏卽ち煩惱を離れたる法をいふ。
【六】染汚。不潔不淨の意。
【七】有爲。無常品第五之餘の下を見よ。
【八】槃の字。忍徵師校刻本に依る。原本には盤。

卷の第三

不放逸品　第六之餘

善に於て當に奉行すべし　惡を見るに則ち毒の如し　故に此の放逸を說いて　第一の險道と爲す。

彼の放逸の衆生は　美言の僞に誑はされ　常に其の心を迷醉し　苦に於て唯己分あり。

苦惱を怖れず　天の快樂を求めず　智の觀察無きに由り　〔一〕傍生と異ること無し。

飮食婬欲に於て　其の心暫くも捨つること無く　是の如き諸の有情は　則ち其れ畜類に同じ。

嬉戲に樂著する者は　〔二〕琰摩の口中に住し　彼の死即ち現前し　是の苦堪忍し難し。

衆生の心放逸なれば　樂壞せば即ち夭喪す　彼の放逸に由るが故に　終に死に磨滅せらるるなり。

唯一の善法有り　壽命をして安隱に　復た能く諸天に生ぜしむ　說いて不放逸と名づく。

放逸・不放逸は　過失・功德を生ず　善・惡は皆心に由る　解・縛亦是の如し。

衆生は快樂の　寃害の如くなるを了知せず　彼の意極めて愚癡にして　佛智を遠離す。

放逸は毒樹の如く　蘖幹に其れ三有り　彼の老・病・死に　常に依止して住せらる。

具足して正行を修せば　彼の僞に侵されず　智者は輪迴に處し　常に不放逸を樂ふ。

若し不放逸を樂はば　則ち諸の過咎を離れ　諸の恐怖を解脫し　最上の快樂を得ん。

若し放逸を具する者は　我に則ち怖畏を生ず　彼若し解脫すること有らば　樂に於て斷ずべからず。

貪に由りて放逸を起し　當に〔三〕蓮華獄に墮すべし　彼欲に於て自在にし　常に其の中に止住せん。

【一】傍生。畜生の異譯。

【二】琰摩。焰魔に同じ。

【三】蓮華獄。八寒地獄中に嗢鉢羅 utpala（青蓮華）鉢特摩 padma（紅蓮華）摩訶鉢特摩 mahāpadma（大紅蓮華）等と名づくる地獄あり。嚴寒逼迫して身を分析し、青蓮華、紅蓮華、大紅蓮華の如き有樣を呈するに到るといふ。

醉ふ。
放逸を遠離せば　則ち彼の墮落無し　若し彼の牽く所と爲れば　常に諸有に沈まん。
若し饒益を樂ふ者は　當に諸の放逸の　最上の煩惱たるを捨つべし　是れ諸佛の說きたまへる所なり。
放逸の牽く所と爲れば　心をして則ち輕動ならしむ　諸天是に由るが故に　懈怠にして[六八]修斷無し。
若し放逸を遠ざけざれば　惡惠深く怖るべし　定んで險難に墮し　後に彼の熱惱を受けん。
天中より墮落せば　則ち諸の艱苦を受く　當に知るべし彼の放逸は　少しも親近すべからず。
若し常に放逸を樂はば　彼は快樂の分無し　當に知るべし彼の放逸は　第一の苦の根本なり。
無數の諸の天人　皆放逸に因るが故に　地獄の中に墮すこと　百千倶胝劫なり。
放逸は第一の寃なり　不放逸は友の如し　是の故に當に親近すべし　常に饒益を作さんが爲なり。」

【六八】修斷、修善斷惡あり。

若し不放逸を樂はば　常に諸難に値はず　智に由りて垢染を離るれば　當に眞常の處を證すべし。

此の放逸は能く　諸天の妙なる五欲を壞す　何ぞ況んや彼の愚夫の　耽著して知覺無きをや。

若し放逸を行ずるを樂はば　彼の人則ち死に近し　能く彼の過失を離るれば　善く[六五]惠命を任持せん。

放逸・不放逸の　二種是の如くに說く　之に近づけば苦の本と爲り　之を捨つれば則ち死に遠ざかる。

諸天及び世人は　常に欲樂に著し　猶ほ彼の飛禽の如く　二種異有ること無し。

彼の正法に違せず　解脫の因を知らず　是の如き天及び人は　故に彼と相似す。

若し放逸を棄捨し　常に勝行を樂はば　是の如き諸の有情は　此を眞の智者と爲す。

諸天は遊戲を樂ひ　常に放逸を作さば　天の福報を受くと雖も　彼の禽と同類なり。

諸業に差別有れば　生を受くること則ち異有り　唯だ善法のみ依るべく　決定して少しも墮すること無からん。

若し輪迴を悟らざるも　一切皆盡に歸す　彼の天は極めて愚癡にして　顚倒して唯だ自ら損す。

若し天正法に依れば　無垢の境界に住し　放逸の行を作さざれば　世の恭敬する所と爲らん。

謂く彼の苦と樂と　皆因緣より起る　彼の天善く覺了し　非義利を造らざれ。

親眷朋友に於て　互相にして繫屬し　輪迴を厭怖せず　何ぞ曾つて出離を求めんや。

飮酒は放逸を生ず　智者當に了知すべし　飮已れば卽ち消散するも　放逸は壞すべきこと難し。

放逸は狂亂を發し　[六六]五趣に馳騁す　是の故に方便して說く　患たること惛醉に逾ゆと。

若し人放逸を行ぜば　罪を受くること　[六七]俱胝劫なり　飮む者は日に當に醒むべし　放逸は長時に

【六五】惠命。智慧を生命となすの意。

【六六】五趣。五道或は五惡趣ともいふ。地獄、餓鬼、畜生、人、天なり。

【六七】俱胝。無常品第五之餘の下を見よ。

無智にして正法を捨て　樂ひて放逸を作せば　[五九]焰摩の使者の爲に　臨終に驅逼せられん。
放逸は極めて險惡なり　智者は常に守護せよ　彼は命終の時に於て　安隱にして諸の怖無からん。
放逸は第一の苦なり　不放逸は最も樂たり　若し彼の樂を求むる者は　放逸を行ふべからず。
彼の處界等に於て　放逸の過患を起し　諸の善根を損壞せば　則ち諸の障礙を生ぜん。
又彼の放逸は　形色に樂著し　增上の無知に由りて　即ち險難に趣かん。
若し常に放逸を作せば　定んで惡道に墮せん　愚夫は彼の[六〇]死の　掌中に住するを覺知せず。
諸天は福盡くれば死す　皆放逸を生ずるに由り　彼の爲に損害せられ　墮落するも能く救ふもの無し。
唯だ一の善法有りて　諸の功德を具足す　[六一]忍辱と常に相應し　[六二]含識を憐愍せよ。
此の善根の力に由り　臨終に諸怖を離る　是の故に放逸を捨て　專注に勤めて修作せよ。
常に愚癡を遠離し　善く明惠を護る　若し此の二法に達せば　放逸は自ら除斷せん。
此は丈夫の法財なり　決定して當に修習すべし　彼の財を具するに由るが故に　則ち不放逸を樂ふ。
放逸は名づけて縛と爲す　不放逸は卽ち解なり　是の如き二種の相　方便を以て揀擇せよ。
若し放逸を樂はん者は　當に善思惟を起すべし　後の命終の時に於て　則ち其の業果を知らん。
又復た[六三]捨家の人　常に止足を生じ　精進して諸善を修せば　寂滅の樂に近づくを得ん。
世俗の攀緣を離れ　唯だ[六四]眞諦に務めば　諸の魔事の爲に　少分も動亂せられざらん。
若し人意寂靜に　常に諸の希求を離るれば　勝智則ち發生せん　彼に於て何ぞ苦有らんや。
正惠を以に　過・現の諸の恐怖を觀察せば　當に彼の未來の　無量の煩惱の縛を脫るべし。

【五九】焰摩。焰魔に同じ。
【六〇】死の字、忍徵師校註に依る。原本には故。
【六一】忍辱。忍辱品第二十四の下を見よ。
【六二】含識。伏除煩惱品第一の下を見よ。
【六三】捨家。出家に同じ。
【六四】眞諦。俗諦に對す。諦は審眞不虛の義なり。

意放逸に隨つて轉ぜば　境界常に現前し　樂に於て厭患無く　彼の天常に苦惱す。
諸天の欲の行に著するは　皆彼の放逸に由る　是の法堅牢ならざるも　能く壽命を壞す。
無量百千萬　[55]那由他の諸天　欲火の爲に燒かるゝは　愚癡・放逸なるに由る。
彼の放逸の過惡は　能く諸の有情をして　彼の不善の因を造らしむ　後に其の苦果を招かん。
善く眞實に　彼の放逸の自性を觀察するに　之を[56]毒蚖に譬ふべく　亦利なる刀劍の如し。
放逸は諸天をして　一切皆隨轉せしむ　初に視れば親朋の如く　後に覺れば寃敵の如し。
天・人・阿脩羅　及び彼の諸龍等　皆放逸に由るが故に　諸の障難を生ず。
放逸の爲に惑はされ　衆善を脩すること能はざれば　是の人大利を失ひ　險惡の道に趣くを求むるなり。
若し人常に　飲食と和合とに樂著せば　[57]傍生の行を造作す　放逸に欺誑せらるゝなり。
又彼の諸の天人　衆の善業を遠離し　展轉して癡迷を恣にす　放逸は何の得る所ぞ。
諸天は放逸の故に　福盡きて墮落し　業風の爲に吹かれ　惡趣に漂淪す。
無量百千の　輪迴生滅の苦を經るも　正念思惟無ければ　常に諸の憂怖を生ぜん。
諸天は彼の癡に由り　放逸の濁水を飲む　後に地獄の中に墮し　猛火常に圍遶せん。
若し人世間に於て　常に不放逸を樂ひ　諸の福業を勤修せば　定んで天中に生ずるを得ん。
人身極めて得難きに　得已りて放逸を生ず　放逸は極めて黑暗なり　當に地獄の苦を招くべし。
若し人放逸を樂ひ　復た憐愍を生ぜずば　彼に於て命終せん時　極苦の熱惱を受けん。
世火の燒く所及び刀劍の斷ずる所にも非ず　是の放逸の識火は　[58]五根より發起す。
樂壞せば卽ち苦と爲す　親屬も亦寃の如し　皆放逸に由りて生ず　是の故に當に棄捨すべし。
放逸と癡愛とは　貪をして轉た增長せしむ　是の三種畏るべし　能く衆生の善を壞す。

【五五】那由他。梵語(nayuta)數目の名。億。
【五六】蚖。毒蛇、まむしの一種。
【五七】傍生。畜生の異譯。
【五八】五根、眼耳鼻舌身の五根なり。

業に牽かるゝに由るが故に　輪廻に墮つて流轉す　報盡くれば卽ち無常　有智も能く免がるゝことと無し。

放逸は甚だ惡むべく　方便して常に遠離せよ　若し能く彼の過を斷ぜば　則ち三有の海を超へん。

人の深崖に墮つるが如き　彼の命或は少しく活くるも　放逸にして若し墮落せば　少樂も得べからず。

放逸の過失に由り　無量の惡業を造り　其の晝夜の中に於て　少善も有ること無し。

世間・出世間[五三]　所有の諸の快樂は　放逸に破壞せらる　是の故に當に棄捨すべし。

放逸なれば速かに破壞し　此を離るれば卽ち安隱に　後に諸天に生ずるを得　最勝の天主と爲らん。

若し人放逸を離るれば　則ち流轉の因を斷つ　是の故に當に棄捨すべし　常に憂怖を離るゝを得ん。

若し人樂果を求むれば　當に其の苦因を除くべし　若し彼の放逸を斷ぜば　則ち諸の苦難無けん。

又放逸に著する者は　睡眠及び　惡作の因緣を引生し　當に險岸に墮すべし。

不放逸は最勝なり　少しも生起せしむること無く　捨離せば常に安きを獲ん　樂に著せば彼に縛さる。

諸天は放逸の故に　展轉して癡醉を增し　禽の所知無きが如くに　常に地獄の行を爲す。

無量の諸の天人は　欲の爲に　桎梏[五四]せられ　放逸の海中に墮し　魚の羂網に投ずるが如し。

又天中の有情　欲に耽りて知覺無く　放逸に心を纏はるれば　彼の樂豈に能く久しからん。

【五三】出世間。世間の稱に對す。一切生死の法を世間とし、涅槃の法を出世間とす。

【五四】桎梏。あしかせてかせ。

す。

又彼の諸の天人は　量を知りて而も樂を受く　若し淫縱過多なれは　失壞して唯だ自ら咎めん。

天中の妙樂に於て　貪著して暫くも捨つること無ければ　福業即ち隨つて減じ　自ら當に退沒すべきを知る。

放逸の過患を示す　諸天當に永く斷ずべし　愛著を捨てざるに由り　忉利（五一）よりして墮つ。

愚癡にして放逸を樂ひ　種々の過惡を生ぜば　彼に於て命終する時　欲火の逼る所と爲らん。

（五二）五欲は地の如く　放逸は之に依りて生じ　常に耽染癡迷にして　其の福業を修せず。

欲は放逸の因と爲る　暴惡にして極めて捷利なり　智者は當に之を制すべし　彼は皆夢の如しと了せよ。

夢は地獄の因に非ず　五欲を即ち因と爲す　當に五欲を離れ　殊勝の行を勤修すべし。

諸天は欲樂に於て　念に隨つて皆獲得す　智を以て善く開悟せば　則ち不放逸と爲す。

諸天は宮殿に處り　境界の爲に惑はさるれば　放逸にして出離無く　苦海に沈淪せん。

放逸は極めて癡暗なり　無明を以て本と爲す　彼の癡の覆ふ所と爲り　見ると雖も目無きが若し。

又騰る燒燄の　火に因りて發生するが如く　放逸の諸惑を生ずるは　癡に由りて起るを得るなり　意に若し放逸を生ぜば　即ち彼の爲に燒かれ　是の如き愚癡の人は　當に地獄に墮すべし　諸天は放逸を起し　天女に戀著し　和合の快樂を樂ひ　乖離の苦を覺らず。

彼の天命終らんと欲して　則ち大恐怖に近づく快樂は堅牢に非ず　此に當りて徒らに厭悔せん。

合會は當に離散すべし　樂に著せば苦に壞せられ　少き者は即ち衰朽し　一切皆盡に歸す。

又彼の諸の有情は　善惡の業に縛され　各各諸趣に往くこと　彼の俳優の者の如し。

【五一】忉利。六欲天の第二。三十三天ともいひ、須彌山の頂に居し、帝釋天を中心とし四方に各〻八天あれば三十三天と名づく。

【五二】五欲。訶厭五欲品第七の下を見よ。

不放逸は最勝にして　甘露を飡ふが如し　若し放逸癡迷なれば　毒を服して當に死すべきがごとし。

又彼の放逸は　彼の熾なる毒火の如し　是の造作に由るが故に　長時に自ら燒煮す。

一切の世間に於て　[四七]無爲は最も　[四八]寂靜たり　是の人放逸ならざれば　當に彼の所に至るを得べし。

若し人放逸を生ぜば　常に諸の不善を造す　彼は癡の蔽ふ所たり　云何ぞ天に生ずるを得ん。

放逸なれば當に殂壞すべく　此を離るれば常に安隱なり　鄙惡は深く厭ふべし　是の故に當に遠棄すべきなり。

若し人放逸ならざれば　世の崇重する所と爲り　常に顚倒を離れん　此れを稱して正人と爲す。

云何ぞ喜樂に著し　放逸の過咎を起すや　心に若し制止せざれば　死魔の爲に屈せられん。

喜樂は熾煙の如く　放逸は炎火の猶し　無量の諸天を燒くに　癡醉して知覺無し。

若し放逸を斷ぜざれは　常に　[四九]輪廻の人と作り　境界の爲に迷はされ　解脫を求むること能はず。

放逸は諸天を牽いて　險難に墮せしむ　是の故に智慧の人は　放逸を說いて毒と爲す。

快樂は彼の蜜の如く　放逸は卽ち耽著なり　後に苦果を感ずる時　自ら其の楚毒を受けん。

放逸は危厄を招く　智者は皆了知し　愚癡なるは厭患せず　彼の片に譬ふるに異ること無し。

若し放逸を行ずるを樂はば　是の人唯苦のみ有り　放逸は善の因に非ず　少樂も得べからず。

[五〇]不放逸なれば當に　寂靜なる不死の處を得べし　放逸は他の能無く　唯だ地獄の苦を招くのみ。

諸天は放逸に著し　耽染して明慧無し　彼は則ち異趣に同じく　暗鈍なること悉く相似なり。

彼の天は極めて放逸に　種々の變現を樂ひ　常に天宮に處らんと謂ひ　已れの墮落するを知ら

【四七】無爲。梵語 asaṃskṛta の譯。有爲に對す。爲は造作の義。因緣の造作に非ず、生住異滅等の相無きを無爲といふ。

【四八】寂靜。寂靜品第二十八の下を見よ。

【四九】輪廻。說法品第二の下を見よ。

【五〇】不の字。忍徵師校註に依る、原本には心。

風に飄はさるゝ聚沫の如き　暫時猶ほ停まるべし　彼の天若し福盡きなは　瞬息も住すること能はず。

若し人欲樂に著せば　則ち貪の爲に使せられ　展轉して希求多く　死將に至らんとするを知らず。

彼の貪愛を縱にするに由り　念念に則ち增長す　寧ぞ彼の壽命の　漸々にして而も減少するを知らんや。

少壯の倏ちに衰朽すること　猶ほ杖もて捶打するが如く　安樂なるも病來り侵し　損害することも亦此の如し。

是の三種の過惡は　能く天非天を壞す　凡夫は癡に加へられて　見已るも驚怖せず。

自他親屬を觀るに　涎洟して斷ぜざるが如く　彼彼の癡愛に由り　互相にして纏縛す。

若し人種族を貪れば　子孫相繼嗣し　彼は繭の自ら縛するが如し　畢竟して何の得る所ぞ。

壽命は保護し難く　死寃は大力有り　勢速かにして暫くも停らず　刹那に卽ち相近づく。

天・人・修羅　鬼神諸の異類に非ず　唯だ[四一]佛世尊を除き　餘に力能く伏するもの無し。

善く力・無力を了し　眞實の法を顯示し　諸の罪因を造らされば　永く彼の險道を離れん。

[四二]不放逸品　第六

若し人[四三]放逸を樂はば　此れ[四四]解脫に非ずと說く　彼は癡に迷はさるに由り　[四五]菩提を去ること卽ち遠し。

放逸を樂はさる者は　放逸を眎ること讎の如し　諸天は此れに因るが故に　卽ち[四六]地獄に墮す。

衆生若し放逸なれば　則ち生死に沈む　心若し彼の過を離るれは　自性本と淸淨なり。

【四一】佛世尊。佛は梵語 buddha 覺者を譯す。世尊は梵語 lokanātha の譯。共に如來十號の一。

【四二】不放逸。梵語 apramāda の譯。心を護りて善を修し惡を妨ぐをいふ。

【四三】放逸。梵語 pramāda の譯。規矩を守らず善方便を離るるをいふ。

【四四】解脫。梵語 vimukta の譯。煩惱及び定障等の繫縛を遠離して自在を得るをいふ。

【四五】菩提。梵語 (bodhi)道或は覺と譯す。

【四六】地獄。地獄品第十六の下を見よ。

受用の境界　及び稱擧等の事に於て　是に由りて皆散失す　此れを說いて名づけて死と爲す。
決定の眞實を具し　衆生の所依と爲り　能く衆同分[四〇]を壞す　此れを說いて名づけて死と爲す。
若し天・龍・夜叉　及び諸の鬼神等　時至れば皆歸盡す　此れを說いて名づけて死と爲す。
惡馬の奔馳するが如く　熾火の逼迫するが如く　一切堪任すること無し　此れを說いて名づけて死と爲す。
壽煖識俱に捨て　蘊處皆散壞し　是の法最も平等なり　此れを說いて名づけて死と爲す。
是の如く諸の有情は　遷流して暫くも息むこと無し　當に放逸の心を離れ　善業を勤修すべし。
風及び飛鳥の　其の性極めて捷利なるが如きも　彼の衆生の壽命は　迅速なること彼に過ぐ。
風勢に迴轉有り　翕去るも亦還るべし　衆生の命若し終らば　空しく愛するも復た得ず。
形色皆變壞し　福業悉く銷鎔し　彼の焰摩王の　强力の爲に攝せらる。
死苦は極めて險惡に　諸の衆生を破壞し　速疾にして暫くも停らず　彼何ぞ知覺無きや。
諸天は放逸多く　樂に著して癡に迷はされ　大苦惱を知らず　決定して自ら當に受くべし。
謂く有爲の諸法は　體性に常有ること無く　恐怖卽ち隨つて生じ　展轉して當に破壞すべし。
年少は老に侵され　命は死に呑噉せらる　破壞の因に住するに由り　則ち諸の災横を生ぜん。
諸天は放逸の故に　貪欲にして心狂亂し　是の如き諸惡に於て　而も憂怖を生ぜず。
惠眼は悉く明かに　未來の諸の苦果を見る　智者は善く思惟し　愚夫は顚倒を起す。
意に由りて諸惡を造り　彼は自ら欺誑せらる　福滅ずれば命卽ち終ること　油盡きて燈滅するが如し。
上妙の快樂　園林勝境界に於て　受用して厭足せざれば　是に由りて墮落せん。
壽命は堅固に匪ず　譬へば彼の浮泡の　倏ちに有り卽ち還つて無きが若く　愚夫も亦是の如し。

【四〇】衆同分。有情をして同等類似の果報を得せしむる因。

諸天には墮落と謂ひ　人間には夭喪と名づく　既に彼の無常を知れば　何ぞ復た諸惡を造らん。
譬へば油炷盡くれば　卽ち燈定んで滅するを知るが如く　福業若し消亡せば　天の宮殿を退失せん。
壁に彩繪を施すが如し　壁毀るれば畫寧ぞ存せん　樂壞せば福衰微し　墮落すること疑惑無し。
諸天は勝處を捨て　樂に著するが故に此の如し　一切の諸の有情　當に無常の法を悟るべし。
生者は死に呑まれ　盛は衰の爲に逼られ　[35]四大忽ちに增損す　病惱何んに由つてか免がれん。
若し生に衆多有れば　滅も亦限量無し　滅し已りて復た還つて生じ　生じ已れば卽ち衰老す。
刹那の頃刻に於て　大怖卽ち將に至らんとす　遷流して暫くも停まること無し　人何ぞ知覺無きや。
又一切の衆生は　年少なるも速かに變異し　壽命倏として無常なり　人何ぞ知覺無きや。
日日推遷するに由り　須臾に卽ち殞滅し　[36]業の牽纏する所と爲る　人何ぞ知覺無きや。
百千[37]倶胝の天　自在に遊戲するも　彼に尙ほ墮落有り　人何ぞ知覺無きや。
又[38]六欲の諸天は　快樂に貪著し　此れに由りて滅謝す　人何ぞ知覺無きや。
快樂は夢幻の如く　亦彼の泡沫に同じく　暫有にして卽ち散壞す　人何ぞ知覺無きや。
又彼の[39]陽燄の如く　妄想より起る所なり　愚夫は輪迴に處り　何ぞ厭患を生ぜざるや。
是の死最も怖るべく　方便して免脫すること無し　若し舍宅天宮　孰れか久安の處と爲さん。
快樂皆棄捐し　無量の苦逼切し　親眷悉く分離するを　此れを說いて名づけて死と爲す。
癡の正惠を覆ふに由り　彼に趣き大恐怖あり　極めて深廣の苦海なり　此れを說いて名づけて死と爲す。
諸根皆昧劣に　須臾にして命將に斷ぜんとし　善名聞を棄捨す　此れを說いて名づけて死と爲す

【三五】四大。梵語 catvari-mahā-bhutāni の譯。具には四大種といふ。一切の色法を作る四種の要素。地大、水大、火大、風大なり。
【三六】業。梵語 karman の譯。有情の身語意の造作をいふ。
【三七】倶胝。梵語 (koṭi)。億と譯す。
【三八】六欲の諸天。欲界に六重諸天あるをいふ。四王天、忉利天、夜摩天、兜率天、樂變化天、他化自在天なり。
【三九】陽燄。かげらふ。

三界に何の樂か有らん　一切皆無常なり　癡の爲に盲せられ　出要を尋ぬること能はず。
譬へば虛空の中に　洪雨を降澍するに　勢速く暫くも停ること無きが如く　快樂も亦た是の如し。
風の塵沙を飄すに　空に於て暫く住するが如く　惑業は以て形を成し　而も墮する所を知らず。
衆生は常有ること無く　快樂も亦久しきに非ず　愚人は正思無し　彼の樂も得べからず。
諸の欲樂を增長せば　則ち流轉の因と爲る　若し善く了知せざれば　當に彼に破壞せらるべし。
謂く彼の苦と樂とは　相須つて止住し　猶ほ妙なる[三二]華鬘の　毒[三三]虺を覆ふが如し。
毒を美饌に和せば　食ひ已れば卽ち當に死すべきが如く　若し欲樂に著せば　定んで彼の惡趣に沈まん。
一切の有爲の相は　皆[三四]生・住・滅に歸す　彼の樂も亦復た然るに　意に妄に其の愛を生ず。
虛妄に貪を生ずるに由り　卽ち刹那に流轉し　快樂と壽命と　久しからずして棄捐す。
若し諸善を行ずるを樂はば　初中後に懈無く　竟寂靜なるに由るが故に　死に當りて憂悔無からん。
形色は必らず當に盡くべく　恩愛は終に別離するに　愚者は思慮無く　常に欲の境界に著す。
老死は輪の轉ずるが如く　迅速にして防護すること難し　衆生智眼無ければ　卽ち彼に分裂せらる。
彼の天墮落の時　根識皆惛亂し　眷屬皆捨棄し　彼の苦は相似するもの無し。
彼彼の欲樂を受け　貪著して心に厭くこと無し　此れ命終の時に於て　種々の苦惱を受けん。
若し人善業を作せば　定んで惡道を免がれ　後に於て命終るに臨み　則ち諸の憂怖無からん。
乃至未だ遷謝せざるに　福報皆具足し　自ら彼の大利を獲ん　此れ第一の安隱なり。

【三二】華鬘。梵語 kusuma-mālā の譯。華で作った鬘(かみかざり、くびかざり)。
【三三】虺。まむし。
【三四】生住滅。三有爲相といふ。生相、住異相、滅相を有爲法の三相とし、又生、住、異、滅、四相ともなす。

見ず。

[24]五欲の諸の過失は　惠力能く除斷す　若し彼の貪愛を離るれば　[25]有海を出づるを得ん。

謂く彼の[26]情・非情は　終に磨滅に歸す　世相を了するに是の如し　心に當に[27]寂靜を樂ふべし。

園林・諸寶山　宮殿・妙嚴飾は　劫火洞に燒然し　諸天は咸な退沒す。

愚癡にして心放逸なれば　境界何ぞ窮極せん　愛索に縛され啞の如く　彼より墮落せん。

壽命と喜樂と　是に于て棄捨せよ　盲瞑にして所見無ければ　正道を迷失せん。

又一切の衆生の　命は浮漚の起るが若く　欲浪に傾搖せらる　壯色何ぞ能く久しからん。

彼の[28]兜率天の人は　無常の火に逼られ　油盡き燈光滅するがごとく　迅速なること此の如し。

業果は其れ輪の如く　[29]十二支は輻の如く　各因の牽く所と爲り　生滅すること旋轉するに同じ。

天中の妙樂　莊嚴の勝境界を棄て　復た彼の輪廻を受け　滅の降伏する所と爲る。

滅に伏せらるゝに由るが故に　則ち苦本を增長し　三界の中を循環し　能く諸苦を免るゝこと無し。

又彼の天墮落せば　餘天則ち喜を生ず　是の恚惱に由るが故に　流轉して休息無し。

福盡くれば力還つて墜ち　有海に漂淪す　若しは樂若しは苦の因　自ら受けて差[30]忒あること無し。

昔善業を修するに由り　諸天に生ずるを得るも　樂に著し淨因を廢せば　漸次にして消盡せん。

彼の因增長せざれば　其の福豈能く久しからん　皆無常なるに由り　一切都て散失す。

諸の[31]有爲の色相は　悉く虛假無常なり　衆生は妄心に著し　正法に依るを樂はず。

諸天は欲樂に耽り　迅速なること瀑流の如く　壽命は刹那の間なるを　愚癡にして悟らず。

自ら不善業を作し　而して老死を招く　彼の天は正知せず　常に欲境を追求す。

【二四】五欲。色欲、聲欲、香欲、味欲、觸欲なり。

【二五】有海。厭離自身品第三の下を見よ。

【二六】情非情。有情と有情に非る一切のもの。

【二七】寂靜。涅槃をいふ。寂靜品第二十八の下を見よ。

【二八】兜率天。梵語 tuṣita 天の名、上足天、妙足天、知足天、喜足天等と譯す。六欲天の一。

【二九】十二支。十二因緣をいふ。敎示衆生品第十四の下を見よ。

【三〇】忒の字。原本には忒。寧ろ誤りなるべし。

【三一】有爲の色相。有爲法の形色體相なり。有爲法は無常品第五の下を見よ。

晝は則ち彼の命に同じく　夜は乃ち諸の死に譬ふ　彼の二相を了知せば　心に於て善く修作せよ。

欲境は衆生を縛し　長時に自在ならず　卽ち彼の死魔の爲に　久しからずして消伏せられん。

女人は諂惑多く　美語もて相承奉す　愚人は死時に於て　業報を當に自ら受くべし。

昔(むかし)勝園林　香風淨池沼に於て　縱逸にして嬉遊多し　快樂は何所なるを知らん。

彼の樂は定んで變異し　此の身は定んで當に沒すべし　如何なるをか丈夫と名づけ　常に貪の爲に使せらるゝや。

或は苦及び快樂　長幼と衰老と　若しは勝劣の種族も　無常の爲に伏せらる。

或は端正・醜陋　及び有力・無力　若しは親と非親も　無常の爲に伏せらる。

或は王者・使命　及び長者・營從　若しは柔軟・剛强も　無常の爲に伏せらる。

或は貧乏・富饒(ふねう)　及び有德・無德　若しは男若しは女等も　無常の爲に伏せらる。

或は客或は主宰　及び水陸の所居　若しは諸山峯に住するも　無常の爲に伏せらる。

或は寢寐し惺寤し　及び飮食宴處にあり　若しは往き若しは來る者も　無常の爲に伏せらる。

或は空居・地上　及び中夏・邊夷も　輪鋸の停まらさるが如く　無常の爲に伏せらる。

或は具智・豐財　精勤幷びに放逸　若しは病若しは輕安も　無常の爲に伏せらる。

或は暴惡・仁慈　儉約と奢侈と　若しは覺悟・癡迷も　無常の爲に伏せらる。

或は[二〇]地獄・餓鬼　及び[二一]傍生・人趣　若しは懈怠も勇猛も　無常の爲に伏せらる。

若しは[二二]欲界の諸天　及び色界に安住するも　力能無きに由るが故に　無常の爲に伏せらる。

若しは無色天人　[二三]三摩鉢底に住するも　彼皆力能無く　無常の爲に伏せらる。

若し法因より生ぜば　彼は定んで當に散壞すべし　未だ諸の所作にして　而も能く常住なる者を

【二〇】地獄餓鬼。地獄品第十六餓鬼品第十七の下を見よ。
【二一】傍生。畜生に同じ。畜生品第十八の下を見よ。
【二二】欲界・色界・無色天、無常品第五の下を見よ。
【二三】三摩鉢底。梵語(samāpatti)、等至・正受、正定現前等と譯す。惛沈掉擧を離るゝことによりて身心を平等安和ならしめることをいふ。

死怖は極めて險惡　唯法のみ能く救拔す　是の故に常に愛樂せば　安隱處に生ずるを得ん。
正法を樂ふに由るが故に　天中に生ずるを得　若し彼の退滅の時は　則ち少苦も無けん。
凡夫は死將に至らんとして　其の心に少樂も無く　朋友衆多なりと雖も　一步も隨ふ者無し。
若しは生前の所作　臨終に悉く現前す　恐怖は唯自ら知り　眷屬[14]は空しく圍遶す。
又彼の命將に盡きんとするに　他に於て分別を起す　癡執を　我所[15]と爲し　死に於て大怖を生ず。
境界は蛇螫の如く　貪毒は悶絕の如し　諸天了知せざれば　死の侵暴する所と爲る。
又彼の天中に滅し　或は人中に生ず　應に當に諦かに思惟すべし　生滅の苦相逐ふことを。
業風に隨逐し　方便苦惱を受く　世に彼の正人有り　當に心に降して死を免がるべし。
父母親屬　及び朋友僕從に非ず　是の人の命終の時。慘然として而も獨り往く。
本性に自ら欺誑し　死に當りて儔侶[16]無く　眷屬　妻孥[17]に於て　一心に空して繫念す。
又彼の諸の親族　一として能く救度するもの無く　惶怖として所依無く　相視ること閑者の如し。
愚夫は識知無く　今生を枉虛に過ぎ　後世轉た辛酸に　各其の苦報を受く。
若し苦に於て怖を生ずれば　死に於ても何ぞ然らざらん　正法を志求せば　當に[18]眞常の樂を得べし。
諸天は樂に著するが故に　暗鈍にして明了ならず　一切は悉く無常なり　快樂も何ぞ久住せん。
幻法は卽ち遷流し　實相は常に動ぜず　諸天の宮殿を捨つるは　正法に依らざるに由る。
若し[19]彼の心動亂し　五欲に耽迷し　命の邊際を知らざれば　當に其の磣毒を受くべし。
或は彼の天中に沒し　復た餘天に生ずるも　終に當に墮するの時有るべし　晝盡きて夜有るが若し。

【一四】眷屬。無常品第五の下を見よ。
【一五】我所。梵語mama-kāraの譯。我の所有の義、五取蘊をいふ。
【一六】儔侶。なかま、等類。
【一七】妻孥。孥は子に同じ。
【一八】眞常。眞實常住の法卽ち涅槃をいふ。
【一九】彼の字。聖徵師校刻本に依る原本には波。

是の無常の[六]劫火は　能く須彌を爇く　況んや復た諸天人の　芭蕉聚沫に類するおや。
當に知るべし[七]有爲の法は　[八]自性は安住に非ず　若しは常若しは快樂　何ぞ少分も有らん。
世間の諸の衆生は　皆死の遠きに非ざるを知るも　方便して免脫すること無く　[九]對治の道を起さず。
謂く自他の形色　何ぞ能く久しく住するを得ん　癡暗なるは覺知無きも　快樂も亦此の如し。
一切の諸の[一〇]有情は　淨善業を修せず　皆生死の輪に　分裂して破壞せらる。
百千の種類を具するも　刹那に皆喪滅す　當に知るべし生有る者は　咸な死の爲に伏せらる。
若し人意に思惟し　常に放逸を行ずるを樂へば　匱乏にして樂の因無く　徒に[一一]焰摩の攝と爲る。
形色の勇健なるを恃み　樂に著せば即ち散失し　大力の　[一二]焰摩羅に　是の人親近するを樂ふなり。
若し焰摩羅に近づけば　最極の鄙劣と爲らん　快樂と壽命と　速疾に皆消殄す。
若し天欲樂に著し　長時に善因を廢し　盲瞑にして覺知無ければ　彼は欲に欺誑せらる。
威德光明無く　根昧く心散亂し　彼の[一三]夜摩天より　業に隨つて墮落す。
快樂は暫時に住し　衰老は常に身に切る　若し染著の心を生ぜば　彼は目無く智無きなり。
上妙の快樂に於て　受用して厭捨無く　刹那の間に　死怖忽ちに來至するを覺らず。
愚夫は止足無く　老死を念ぜず　後に於て命終らんと欲し　悔惱すること徒に是の如し。
又天中の快樂は　思惟すれば即ち獲得す　其の墮滅の時に當りて　彼の樂は何れの往く所ぞ。
快樂は速かに遷謝す　壽命も亦復た然り　久しからずして自身に於て　定んで疑惑無きを得ん。
若し强健の時に於て　淨惠もて心明了に　正法を樂求せば　此を具智者と爲す。
一切の樂は盡有り　一切の愛は離有り　一切の命は終有り　未だ死せざるに當に修學すべし。

【六】劫火。梵語 kalpāgni の譯。劫盡火、劫燒ともいひ、壞劫の時に起る大火災をいふ。
【七】有爲。無常品第五の下を見よ。
【八】自性。梵語 svabhāva の譯。自の體性の意、即ち不雜不改にして他と區別さるべき個性をいふ。
【九】對治の道。煩惱を斷ずる法。
【一〇】有情。無常品第五の下を見よ。
【一一】焰摩。焰魔にも作り、焰摩羅の略。
【一二】焰摩羅。地獄品第十六の下を見よ。
【一三】夜摩天。梵語 Yama 天の名。六欲天の第三。

卷の第二

無常品　第五之餘

爾の時に諸の天人　樂に著して喜悅を生ずるも　彼の時分を過ぎ已れば　各憂惱を懷かん。

樹の當に滋榮せんとして　密葉にして若も彌布するも　彼の時分を過ぎ已れば　悉く其の衰落を見るが如し。

輪廻は彼の樹の如く　諸天は則ち葉と爲す　欲樂に著するに由るが故に　無常に散壞せらる。

又雨際の時　空に於て遍く灑し　下り已つて復た轉ぜざるが如く　彼の樂も亦た是の如し。

響の外に騰るに　風に由りて發起し　虛假にして本來無なるが如く　彼の樂も亦た是の如し。

又火炬に投ぜば　則ち彼の乾薪を焚くが如く　死火は極めて熾然にして　諸の著樂者を燒く。

無量百千生に　輪廻[一]に於て往返するも　貪癡[二]に迷はるゝが爲に　出離を生ぜず。

多種の欲樂に於て　縱逸にして受用せば　諸の苦所の因と爲り　滅し已りて自ら當に受くべし。

謂く彼の生・老・死[三]　及び愛別離苦[四]　是の如きは自他に於て　各各に能く免るゝもの無し。

一天の墮落するを見　何ぞ驚怖を生ぜざるや　若し善方便無ければ　我亦た當に彼の如くなるべし。

知り已りて勤めて修作し　常に無常を念ぜば　是の人命終らんと欲して　即ち諸の痛苦無けん。

彼の親眷朋屬　相對して悲感を懷くも　其の大怖の時に當り　憂苦能く代るもの無けん。

住壽は當に殞るべく　未だ墮せざるは終に沒す　是の死力堅强にして　貴賤皆勾攝す。

若し天善く決了せば　則ち放逸[五]を生ぜず　彼の善根を積集して　諸惡を斷つ。

聚は散の本　少は即ち老に歸趣し　命は死の爲に侵され　各之に依りて住す。

【一】輪廻。說法品第二の下を見よ。

【二】貪癡。貪欲と愚癡。各ゝ三毒煩惱の一。

【三】生老死。生（Jāti）老（Jarā）病（vyādhi）死（maraṇa）を四苦（catasro duḥkhatāḥ）といふ。

【四】愛別離苦。梵語 priya-viprayoga-duḥkha の譯。又恩愛別苦・愛相別離ともいひ、八苦の一。

【五】放逸。不放逸品第六の下を見よ。

皆善業に由りて招くも　畢竟して久住せず　譬へば　[一三二]彌盧山の　劫盡れば亦た散壞するが若し。
又彼の諸天は　憍慢・放逸を生じ　無常を念ぜず　刹那にして墮落す。
彼の天中の　[一三三]有情は　五欲に自在を得るも　多く快樂を受け已れば　定んで　[一三四]惡趣に溺れん。
若し身・根・意識　逼迫して時處無ければ　彼の苦は艱辛を極め　其の數量を知らず。
已に　[一三五]眷屬多きを恃みて　常想を生ずるも　其の退沒の時に當れば　則ち乖離の苦を受けん。
侍衞の僮僕に於いても　倶時にして棄捨す　増上愚迷に由り　死に至るまで知覺すること無し。
彼の天將に滅せん時　根も識も唯だ憂苦なり　斯の墮落を覩已るに　彼我當に異無かるべし。
是の三界は虛假　諸法は皆　[一三六]有爲なり　旋轉すること車輪の如く　堅からざること聚沫の如し。
是の身聚沫の如くなるに　臥具衣服に著し　是の心車輪の如くなるに　和合を樂ふて動轉す。
天・人・夜叉　修羅・　[一三七]迦樓羅に非ず　唯だ自ら善業を作りてのみ　死に於いて能く救度す。
乃至未來世にも　死怖は深く畏るべし　若し勝因を修せされば　後に悔ゆるも益する所無からん。
是の鄙劣なる境界に　能く多の快樂を生じ　無智愚癡なるに由り　命の邊際を知らず。
何者か是れ眷屬　何者をか快樂と爲すや　滅相其の前に現ずれば　彼の天も依怙無し。
諸の勝處　林木華の莊嚴を捨離し　[一三八]死繩の爲に索かれ　業に隨ふて長逝す。
水の空に踊るが如く　勢墮せば卽ち飄散す　首を聚むるも　[一三九]睽離有り　輪廻して各流轉す。
又陽春の時　衆華悉く開發するも　時景速かに遷流するが如く　人も豈に能く長久ならん。

【一三二】彌盧山。山の名。高山、光山ともいひ、須彌に同じといひ、異なりともいふ。
【一三三】有情。梵語 sattva の譯。情識を有するもの。卽ち衆生なり。
【一三四】惡趣。地獄、餓鬼、畜生等の諸趣をいふ。
【一三五】眷屬。梵語 parivāra の譯。天性親愛するが故に眷と名づけ、更に相臣順するが故に屬と名づく、眷愛隷屬の意。
【一三六】有爲。梵語 saṃskṛta の譯。無爲に對す。爲作あるの義。卽ち因緣所生の現象の諸法をいふ。
【一三七】迦樓羅。梵語(garuḍa) 龍をとりて常食とするといふ鳥の名。大嘴項鳥、金翅鳥ともいふ。八部衆の一なり。
【一三八】繩の字。忍徵師校刻本には魔に作る。
【一三九】睽離。そむきはなれる。睽の字、忍徵師校刻本には暌に作る。

呪術・妙藥　及び大力の修羅に非ず　死繩の爲に索かるれば　彼彼救ふこと能はず。
貪塵の爲に目を翳せられ　都べて覺知する所無く　彼の著欲の衆生は　唯だ死を歸趣と爲す。
若し貪欲を樂ひ　多く快樂を求めて　厭離の心を生ぜざれば　死に於いて遠からず。
彼の[一二八]焰魔の使者は　强力にして能く却くるもの無く　刹那に其の前に現じ　卽ち大苦惱を受く。
彼の天寶山の　林泉殊勝の境を捨てゝ　彼よりして墮落し　業に隨つて自果を受く。
遊戲に樂著し　欲を受くるに厭足無ければ　彼の渴愛癡迷により　墮落するに能く拯ふもの無し。
遙かに彼の煙を見れば　則ち火の遠きに非ざるを知るが如く　衰相若し現前せば　彼は定んで當に退沒すべし。
生有るものは必づ當に滅すべし　無病にして暫く輕安に　年少きも老に浸さるれば　榮盛倏ち衰變す。
恩愛は別離有り　和合は久住せず　諸法本と無常なるは　[一二九]正覺の說きたまふ所なし。
自他生滅の法　二種常に隨轉し　滅し已りて復た還つて生じ　決定して是の如くに住す。
愚人は刹那の間に　少福卽ち消殄す　是の故に彼の正士は　速かに[一三〇]調御の法を修す。
壯色は久しく停まるものに非ず　壽命も亦隨つて滅す　常に放逸の心を祛り　具足して諸善を修めよ。
諸天の具知の者は　刹那生滅を悟り　福業を勤修す　當に[一三一]眞常を證すべし。
復た妙なる樓閣有り　密葉は清陰を羅ね　修藤は異花を發き　芬馥として闃遠す。
勝妙の樓閣有り　衆寶の裝校する所　金河は清泉を泛べ　諸珍を階陛に厠ふ。

【一二六】貪癡。貪欲と愚癡。共に三毒煩惱の一。
【一二七】放逸。不放逸品第六の下を見よ。
【一二八】焰魔。地獄品第十六の下を見よ。
【一二九】正覺。正覺者卽ち佛を指す。
【一三〇】調御。一切衆生を狂象惡馬にたとへ、佛菩薩を象馬師に譬へたるなり。
【一三一】眞常。眞實常住の法、卽ち涅槃をいふ。

生れ已れば卽ち長大す　壯色は暫くも停まらず　倏爾として卽ち無常なり　倶生[一一五]の性是の如し。

禍に於いて攝取せず　境界の爲に縛せらるゝは　貪愛愚癡に由る　臨終に救護あること無し。

復た妙寶の峯有り　莊嚴皆具足し　種々の蓮華有り　林木極めて愛すべし。

種種の河池有り　水鳥咸な依止し　衆妙名華有り　衆寶にて嚴飾す。

最勝の宮殿有り　皆珍寶の所成にして　劫樹[一一六]は金光を發し　葉は琉璃の色を布く。

尼倶律陀樹[一一七]は　銀光相間錯し　蓮蘂は悉く開敷し　衆蜂は音樂の如し。

上妙の　瓔珞[一一八]有り　奇巧にして勝るゝこと比無し　人世に昔修する所　感果皆意の如し。

彼の諸天は樂に著し　彼の無常なること　乾闥婆城[一一九]の如く　幻泡聚沫の如くなるを悟らず。

愛欲は熾火の如し　彼に依れば卽ち破壞し　此に由りて命終し　有海[一二〇]に漂沈す。

五欲の快樂に於いて　受用して厭捨無ければ　滅する時彼の爲に燒かれ　諸天皆遠離す。

多欲にして慚恥無きを　第一の鄙惡と爲す　諸天癡冥に縱へば　死魔其の便を得。

若し天・人[一二一]・修羅[一二二]　夜叉[一二三]・龍神[一二四]等　死羂[一二五]の爲に拘せらるれば　一として能く救ふ者無し。

乃至三界に遍ねく　皆死の爲に攝せらるは　堅く[一二六]　貪癡に著するに由る　何に由つてか解脫を得ん。

諸天は樂に著するに由り　百千の死の畏を受く　境界は乾ける薪の如く　彼の死は熾なる火の如し。

若し他の滅謝するを覩れば　已に何ぞ知覺せざらん　病苦終らんと欲する時　自ら其の業報を受く。

放逸[一二七]にして心を染し　欲の境界に耽著し　彼の無常なるを悟らず　倶生の性は是の如し。

若し放逸を行ずるを樂ひ　常に欲樂を追求せば　彼は毒を相似す　死兵の逐ふ所と爲る。

【一一五】倶生。梵語 sahoja の譯。倶生起の略。分別起に對す。身と倶に任運に生起するの意、邪師邪數思惟等を俟たず任運に起る惑障をいふ。

【一一六】劫樹。劫波樹の略。主に帝釋天の喜林園にあるといふ樹の名。劫波は時の義、時に應じて一切所須のものを出すといふ。

【一一七】尼倶律陀樹。梵名 nyagrodha. 尼拘婁陀又は尼拘陀とも作り、樹の名。下に生長する樹の意、卽ち榕樹なり。

【一一八】瓔珞。梵語 keyūra. 玉を輪にして身を飾るもの。

【一一九】乾闥婆城。訶厭自身品第三の下を見よ。

【一二〇】有海。訶厭自身品第三の下を見よ。

【一二一】人。三界の中欲界に屬し、六趣の中の第五。欲界の有情の中最も思慮多きもの。過去戒善の因によつて人倫の果を感ずといふ。吾人現前の境界なり。

【一二二】修羅。無常品第五六餘の下阿修羅を見よ。

【一二三】夜叉。梵語 (yakṣa)。能噉鬼、捷疾鬼等と譯す。

【一二四】龍。梵語 nāga の譯。龍能く不測の力を有すれば稱して龍神となす。八部衆の一なり。

【一二五】死羂。死のわな。

著樂に由り退失せば　即ち世の無常を知る　若し彼の因を覺悟せば　心當に諸善を造るべし。
高きは必づ當に墜つべし　世數は終に盡に歸し　合會は分離あり　死を命の邊際と爲す。
諸法の有は無常なり　生滅即ち隨轉す　生有りて滅無きは　[二二]三界に何ぞ曾つて見ん。
或は一に餘族を生じ　或は一胎中に喪ふ　或は隨轉し往來し　或は作すに事業を欲す。
日光の明かなるに見るに　出で已れば定んで當に沒すべきが如く　一切の生有る者　滅即ち依りて前に住す、
愚夫は彼の樂の　生ずれば即ち滅するを了知せず　出離の方便無し　後に當に唯た死を守るべきのみ。
當に彼の常樂を求め　未だ殞らざるに勤めて善を修すべし　正法行に隨順するを　此を說いて智者と爲す。
無常にして亦た何ぞ定らん　他世に轉た艱辛す　佛の輪迴の因を說きたまふ　唯だ此を眞實と爲す。
謂く彼彼に生起せば　即ち數數に墮滅す　諸天は樂に著するが故に　則ち多く憍傲を生ず。
又復た彼の天中に　滅する時に苦惱を受くること　唯だ地獄の中を除いては　餘の苦の與に等しきもの無し。
堅く[二三]五欲に著するに由り　自らは退沒するを知らず　是の如き愚癡の人は　何に由てか老死を免れん。
[二四]輪轉生滅を受くるに　其の數量有ること無し　出離の心を生ぜざれば　彼は自ら欺誑すと爲す。
高きに居る者は必づ危ふく　寶を聚むるも當に乏あるべく　恩愛には乖離有り　生ける者は皆死に歸す。

【二二】三界。梵語 trayo dhātavaḥ の譯。前に註せる欲界。色界。無色界なり。凡夫の善惡の業報に因り生死往來する世界なり。又三有ともいふ。

【二三】五欲。訶厭五欲品第七の下を見よ。

【二四】輪轉。輪廻流轉の略。

此の滅の法は平等なり　處處に悉く周遍す　此に於て了知せざるものは　眞に是れ愚癡者なり。
若しは年少、衰老も　或は貧乏富足も　及び在家出家も　死の爲に勾攝せらる。
若しは快樂苦惱も　或は有德無德も　淨行非淨行も　死の爲に勾攝せらる。
若しは持戒毀戒も　或は智者も愚夫も　乃至尊きも及び卑きも　死の爲に勾攝せらる。
若しは[一〇四]天、若しは[一〇五]地獄　或は[一〇六]餓鬼も　[一〇七]畜生も　醒覺も及び惛迷も　死の爲に勾攝せらる。
若しは[一〇八]欲界に生じたるも　或は[一〇九]色界に住する者も　[一一〇]無色も亦復た然り　死の爲に勾攝せらる。
是の身に老病の侵すこと　枝索もて捶縛するが如し　彼の死は強力有り　衆に於て慈護無し。
種種の恐怖有るも　死の畏は極めて險惡なり　諸天は癡に盲られ　此に對して啼笑有り。
天中より墮沒し　乖離の苦惱有り　或は地獄中に墮するに　彼の苦窮極無し。
天上の快樂を受くるも　唯滅にして憂苦を生じ　毒を美味に雜ふるが如し　是の故に當に棄捨すべし。
彼の天は福將に盡きんとするに　親屬皆捨て去る　其の墮落の時に當り　是の苦相似あること無し。
福減じ劣なるを以ての故に　油盡きて燈滅するが如し　此に於いて命終るに臨み　但だ其の逼惱を增す。
愛欲の爲に纏はれ　憂感に心狂亂し　語緩かに身顫動す　是れ波の墮落の怖なり。
常に彼の快樂に著し　欲の爲に欺誑せられ　或は暫時にも捨離せば　彼は則ち苦惱を生ず。
諸天墮落の苦は　地獄に比せば猶ほ輕く　十六分中に於いて　其の一に及ばず。
天中の滅沒の怖　人間の死の憂惱を　[一一一]見已りて厭患せず　況んや復た[一一二]輪迴の火をや。

【一〇四】天。梵語 deva 又は sura の譯。光明、自然、自在、淸淨等の義。六趣の一。人間以上の勝妙の果報を受くる所にして、一分は須彌山の中、一分は遠く蒼空の中にありとす。
【一〇五】地獄、地獄品第十六の下を見よ。
【一〇六】餓鬼、餓鬼品第十七の下を見よ。
【一〇七】畜生、畜生品第十八の下を見よ。
【一〇五―一〇七】三界六趣の中、この三を三惡趣といふ。
【一〇八】欲界。梵語 kāma-dhātu の譯。地獄・餓鬼・畜生・修羅・人の五趣及び六欲天をいふ。阿鼻地獄より他化自在天に至り、この中皆男女雜居して諸の染欲多ければ欲界と名づく。
【一〇九】色界。梵語 rūpa-dhātu の譯。初禪天より阿迦膩吒天に至り、女形なく欲染なく宮殿高大なり。これ色の化生なるが故に色界と名づく。
【一一〇】無色界。梵語 arūpa-dhātu の譯。空無邊處天より非想非々想處天に至り、但だ四心ありて色の形質なきが故に無色界と名づく。
【一一二】輪廻。說法品第二の下を見よ。

り。

樂ふて放逸の行を習へば　則ち輪廻を増長す　此に於て遠離せざれば　當に大苦惱を受くべし。

屠者は群畜を縛し　皆馳散せしめず　眷屬を身に累ぬれば　何に由てか能く免脱せんや。

又彼の諸天衆は　常に諸の欲樂に著し　生滅の因を知らず　彼の天は愚者の如し。

是の如く彼の衆生は　放逸の爲に牽縛せられ　極めて愚癡を増上し　死に至りても醒悟すると無し。

心常に諸惡を造り　死の爲に降伏せらる　欲火鎭へに燒然し　徒に後悔を增さん。

非法を行ずるを樂ふに由り　決定して輪廻に入る　彼命終の時に於て　極めて怖るとも救度するもの無けん。

善法を思擇せず　常に歡聚を樂ふも　倏爾として忽ちに乖違せば　則ち別離の苦を受けん。

晝夜に壽命を促め　須臾の頃刻に在り　死怖蓄し現前せば　應に知るべし能く免るゝもの無し。

智者は生滅を觀て　則ち嗟歎を興す　放逸愚癡を捨つれば　苦を離れて清淨なることを得ん。

自他の滅相を觀ずれば　何ぞ諸惡を造るを容さん　若し心過失を離るれば　當に[一〇〇]寂靜の樂を獲べし。

[一〇一]不放逸は最勝なり　是れ如來の所說なり　人若し[一〇二]無常を悟らば　則ち諸の不善を捨てよ。

[一〇三]無常品　第五

快樂の邊際を盡すに　一切常有ること無し　若し自ら愛樂を生ぜば　應に知るべし　當に棄捨すべし。

是の死怖畏るべし　迅速にして防護すること難く　或は戲笑中にも　忽爾として長逝す。

【一〇〇】寂靜。寂靜品第二十八の下を見よ。
【一〇一】不放逸。不放逸品第六の下を見よ。
【一〇二】無常。無常品第五の下を見よ。
【一〇三】無常。梵語 anitya の譯。世間一切の法は生滅遷流して刹那も住することなきをいふ。

無智にして業果に迷ひ　常に諸の過惡を作る　愚癡著欲の人は　死の爲に呑噉せらる。
貪火の爲に燒然せられ　輪迴の苦を知らず　愚癡著欲の人は　死の爲に呑噉せらる。
情愛の錘(あつ)むる所に由り　別離の苦惱を生ず　愚人は爾の時に當り　死の爲に呑噉せらる。
輪迴を厭怖せず　心を色境に馳す　愚癡著欲の人は　死の爲に呑噉せらる。
病難の憂怖を生じ　而して厭患すること能はず　愚癡著欲の人は死の爲に呑噉せらる。
彼の惡知識の爲に　輪迴の險道に趣く　愚癡著欲の人は　死の爲に呑噉せらる。
心に邪思惟を起して　正理に違背す　愚癡著欲の人は　死の爲に呑噉せらる。
自ら非法を行じて　生死の怖畏を作る　愚癡著欲の人は　死の爲に呑噉せらる。
常に染汚の言を發す　心寧んぞ罪福を知らん　愚癡著欲の人は　死の爲に呑噉せらる。
貪愛を慣習するに由りて　眞實の法を樂はず　愚癡著欲の人は　死の爲に呑噉せらる。
已(おのれ)に於て快樂(けらく)を求め　法に於ては損壞を生ず　愚癡著欲の人は　死の爲に呑噉せらる。
當に專注一心に　常に淨業を修持し　諸の不善を棄捨すべし　是を名づけて智者と爲す。
若し諸天樂(らく)に著し　施戒を修するを樂(ねが)はず　常に放逸の心を生ぜば　決定して當に墮落すべし。
復た天寶山有り　諸珍をもつて嚴瑩せられ　琉璃を以て峰と爲し　[九八]須彌と相稱へり。
彼の天或は初め生じ　現に住し及び將に沒す　若し放逸の心を生ぜば　彼に於て　[九九]流轉せん。
其の地悉く嚴淨にして　林木涼風を起す　若し放逸の心を生ぜば　彼に於て流轉せん。
妙(たへ)なる蓮華(れんげ)の池有り　金の葉琉璃の幹なり　若し放逸の心を生ぜば　彼に於て流轉せん。
淸勝の河流有り　珍禽悉く翔け集る　若し放逸の心を生ぜば　彼に於て流轉せん。
上妙の輦輿　層樓の極めて高勝なる有り　若し放逸の心を生ぜば　彼に於て流轉せん。
是(かく)の如き流轉(るてん)の相は　皆欲境に迷ふに由る　云何ぞ說いて人と名づく　心に厭捨を生ぜざればな

【九八】須彌。梵名 sumeru 一小世界の中心を爲す山の名。
【九九】流轉、梵語 saṃsāra の譯。流は相續、轉は起の義、有爲法の因果相續して生ずるをいふ。卽ち一切の凡夫善惡の業を造つて苦樂の果を感じ六趣に輪廻することなり。

妙飲食を嗜むと雖も　光澤威德あること無く　非法の業緣を作り　諸惡此に隨轉す。
是の如く愚癡の人は　常に知覺を生ぜず　業風の爲に飄はされ　三界に輪轉す。
或は勝處に生るゝこと有るも　放逸にして墮落す　懈怠癡迷に由りて　諸の過を斷ずること能はず。
若し五欲を棄捨せば　最上の安穩を得　諸佛聖人の如く　貪も無くまた憂惱も無けん。
初中後に修習し　諸の垢染を解脫せば　當に[九二]牟尼尊のごとく　第一寂靜の樂を得べし。
若し五欲を樂はゞ　則ち[九三]惡趣に墮す　彼に別の功能あること無く　唯だ其の苦報を招くのみ。
是の故に有智の人は　欲に於て何の著する所かあらん　彼を[九四]輪廻の因と爲さば　定んで諸の[九五]楚毒を受く。
或は天寶峯の　園林淨池沼に住するも　戲妄染著するに由りて　彼に從ひて而も墮落せん。
天上に妙金山あり　琉璃を峯頂と爲すも　不善業を造るに由りて　彼よりして而も墮落せん。
天上に諸の寶樹あり　清泉相間遶するも　貪欲の因緣を以て　彼よりして而も墮落せん。
天上に諸の寶坊あり　香[九六]潔にして愛樂すべきも　戒を毀ち諸善を離るれば　彼よりして而も墮落せん
天上に妙なる音樂あり　聞き已りて能く意に適ふも　樂著するに由りて時を癈し　彼よりして而も墮落せん。
若し意に貪著を生ぜば　欲境常に現前す　正智の思惟無ければ　何に因りてか安樂を獲ん。
童稚無知の如き　豈に能く少福を修せんや　彼より墮落し已つて　自ら其の業報を受く。
若し人不善を作し　而して樂果を求むるとも　彼の因相似せず　愚夫の心妄りに轉ずるのみ。
[九七]施・戒・正慧に於て　修習を起さず　愚癡著欲の人は　死の爲に呑噉せらる。

【九二】牟尼。梵語（muni）。寂又は寂默、寂淨と譯す。身口意の三業を靜止せる學道者の尊稱。
【九三】惡趣。三惡趣、四惡趣をいふ。
【九四】輪廻。說法品第二の下を見よ。
【九五】楚毒。辛痛の毒。
【九六】潔の字。忍徵師校註に依る。原本には海。
【九七】施戒正慧。布施と持戒と智慧、各々六波羅蜜の一。布施品第二十二、持戒品第二十三、勝慧品第二十七の下を見よ。

遠離不善品　第四

若し人[八〇]五欲に於て　常に其の渇愛を生ぜば　彼の心動亂するに由りて　諸惡此に隨轉す。
若し女色を見　樂著して暫くも捨つること無く　[八一]彼の無常を悟らざれば　諸惡此に隨轉す。
彼の[八二]貪・癡に由るが故に　生死を增長す　凡夫は了知せざるも　諸惡此に隨轉する。
常に樂ふて[八三]放逸を行ぜば　壽命長久に非ず　正智の思惟無くんば　諸惡此に隨轉す。
貪欲にして厭足すること無く　侈服をもつて恣に身を嚴り　[八四]掉擧・[八五]無慚を生ぜば　諸惡此に隨轉す。
常に[八六]六塵坌・五欲の爲に牽かれ　[八七]三世に迷ひて無知なれば　諸惡此に隨轉す。
已が眷屬に樂著し　自ら殞沒することを知らず　顧戀し恚心を起さば　諸惡此に隨轉す。
昔欲境に耽れば　則ち後過患と爲る　意寂靜ならざるに由りて　諸惡此に隨轉す。
[八八]染欲の爲に迷はさるゝは　譬へば魚の網に投ずるが如し　纒縛して脫すること能はず　諸惡此に隨轉す。
愚夫は常に愛著し　欲の過失を知らず　癡暗の迷ふ所　諸惡此に隨轉す。
多く寵嬖を畜ふるも　命終するに而も獨り往き　[八九]業羂の拘する所と爲り　諸惡此に隨轉す。
正道を迷失し　[九〇]三界の殊を知らず　[九一]諸根を攝護せざれば　諸惡此に隨轉す。
有戒無戒に於て　樂ふて損惱を行じ　正法を破壞せば　諸惡此に隨轉す。
罪福損益に於て　聞き已るも聾瘂の如くなるは　愚童の戲を作すに譬ふべく　諸惡此に隨轉す。
寂靜の園林・流泉　諸の勝處を捨て　嬉逸に樂著せば　諸惡此に隨轉す。
巖谷の宮殿　清淨の蓮華池を離れ　彼の欲樂を貪るに由りて　諸惡此に隨轉す。

【八〇】五欲。色聲香味觸の五境に對する情欲。訶厭五欲品第七の下を見よ。
【八一】無常。無常品第五の下を見よ。
【八二】貪・癡。貪欲と愚癡、各々三毒煩惱の一。
【八三】放逸。不放逸品第六の下を見よ。
【八四】掉擧。心をして高擧せしめ安靜せしめざる煩惱。
【八五】無慚。惡を爲して自の心に恥づることなきをいふ。
【八六】六塵坌。色聲香味觸法の六境をいふ。この六境は眼耳鼻舌身意の六根により身に入りて淨心を坌汚すればなり。
【八七】三世。過去現在未來の三世、又三際ともいふ。
【八八】染欲。染は染汚。垢染、染障等と熟字し、不淨をあらはす。
【八九】業羂。業報のわな。
【九〇】三界。梵語 trayo dhātavaḥ の譯。欲界、色界及び無色界をいふ。凡夫の生死往來する世界なり。
【九一】根。梵語 indriya の譯。能生・增上の義、草木の根の增上の力を有して能く枝葉を生ずるが如し。諸根とは眼根、耳根、鼻根、生根、身根、(意根)の五根(六根)をいふ。

又復た此の身は　衆病の依止と爲り　不淨常に盈流す　實に罪惡の器なり。
人のために近住と爲るも　思惟覺知すること無し　刹那命終の時は　惡色深く畏るべし。
壽・煖・識の三緣　倶時にして而も棄捨し　枯木の如くにして知無く　形消えて穢汁を流す。
愚夫は盛年に當り　迷亂して憍恣多きも　須臾にして暫くも停らず　變異して衰老と成る。
財富を恃んで奢逸に　廣く諸の惡業を造りなば　是の人命終らんと欲して　極苦の熱惱を受けん
正法を樂はざれば　何ぞ彼の非人に異ならんや　[七一]涅槃城に違背し　邪道に棲止するなり。
廣大なる修福の報　是に由りて人間に生ず　當に智慧の舟に乘りて　永く[七二]有海を越ゆべし。
此の身は堅牢に非ず　暫次にして動轉し　常に諂曲を心と爲す　寧んぞ老死の怖を免れんや。
是の身は[七三]掣電の如く　[七四]乾闥婆城に類す　云何んが他人に於て　數に喜怒を生ぜんや。
疲病の城邑たり　是れ憂惱の舍宅たり　亦た田疇の如く　善不善の種を生ず。
若し人　[七五]施・戒・慈・智を以て　身を莊嚴するに　唯此の善因緣をのみ　第一堅固と爲す。
又此の身を說かば　諸界の所依たり　若し能く覺了せば　速かに[七六]解脫を得ん。
此の自身界を明すに　虛假なるを強いて分別す　若し他の[七七]蘊・界を樂はゞ　愚癡にして出要無し。
[七八]若し外に諸財を具するも　內界に寂靜無し　身に於て善く了知せば　則ち能く諸苦を脫す。
己財を守護するに由りて　復た苦惱を增し　諸の恐怖隨つて生ず　謂く官・賊・水・火なり。
若し非法の財を遠ざくれば　則ち諸の障礙無し　棄捨せば常に安きを獲　攝取せば當に自ら咎むべし。
應に如實に　自他蘊界の相を了知し　[七九]定を習ひ經典を持ち　煩惱聚を焚燒すべし。
是の故に有智の人は　身に於て善く觀察せよ　既に彼の界性を明らかにせば　是を解脫者と名づく。

船に作る。
【六七】利養。利を以て身を養ふこと。
【六八】名聞。名譽の世間に聞ゆること。
【六九】過愆。とがあやまち。
【七〇】非梵行。不淨なる行ひ。
【七一】涅槃。梵語（nirvāṇa）又涅槃に作り滅、寂滅、不生、無爲、安樂等と譯す。
【七二】有海。三有若しくは二十五有を海に譬へ、衆生が三有等に淪沒して彼岸に達する期なきを船舶の海に漂ふに比す。
【七三】掣電。いなづま。
【七四】乾闥婆城。梵語 gandharvanagara 乾闥婆神の化作せる城。蜃氣樓なり。
【七五】施戒慈智。布施と持戒と慈悲と智慧となり。
【七六】解脫。說法品第二の下を見よ。
【七七】蘊界。三科の中の二、說法品第二の下を見よ。
【七八】若の字。忍徵師校註に疑ふらくは喜かといへり。
【七九】定。禪定品第二十六の下を見よ。

若し人多聞有れば　則ち諸の財寶を具するなり　無聞なれば富饒なりと雖も　[六二]愚懵にして貧窶に同じ。

若し人法財無く　師範を遠離し　虛しく彼の形軀を受けなば　常に憂慼を懷かん。

若し惡知識に近づき　放逸懈怠を生ぜば　猶ほ磽田中に　虛しく種子を擲つが如し。

多聞は　[六三]法眼を具す　[六四]瞽なりと雖も亦た明らかに覺す　[六五]目無く多聞無きを　是を暗鈍者と爲す。

若し正法を遠離し　非法に依止せば　猶ほ良醫を捨てゝ　而して篤疾を愈せんことを求むるが如し。

諸法は限量無し　學を積んで方に悟入す　滴雨の駛流を成すも　皆漸次に由るなり。

無始の輪迴海に　菩提心を發起し　金剛道場に至りて　佛果を成ずるも亦た爾なり。

淨心に正法を持し　諸禪にも著せざれば　欲境の牽く所に非ず　決定して常に安穩なり。

有智は智人に親しむ　當に無智を捨離すべし　智德を以て身を修むるは　斯の人甚だ希有なり。

信心を以て法を求むれば　常に勝處に生じ　設ひ險難の中に墮するとも　諸天常に捄護せん。

暗に於ては明燈と作り　病に於ては良藥と爲り　貧乏には珍財を與へ　盲者をして能く視せしめん。

世間の瀑流に於ては　爲に彼の[六六]舡筏と作れ　若し醉慠放逸なれば　決定して自損を爲さん。

是は先佛の所說なり　當に具足して信受し　正智をして現前せしめ　修習して疲倦を忘るべし。

厭離自身品　第三

謂く　[六七]利養・[六八]名聞　飲食・臥具等は　少分も希求すること無かれ　我に於て何の作す所ぞ。

是の身厭患すべし　損害すること冤賊の如く　諸の[六九]過愆を造作し　常に[七〇]非梵行を樂ふ。

の譯。煩惱及び定障等の繫縛を遠離して自在を得るをいふ。

【五三】輪迴。梵語 saṃsāra の譯、衆生無始以來六道の生死に旋轉すること車輪の轉じて窮りなきが如きをいふ。

【五四】四種因緣。梵語 catvāraḥ pratyayāḥ の譯。單に四緣ともいひ、有爲法の生起するに藉るべき四種の緣、即ち因緣・等無間緣・所緣緣・增上緣なり。

【五五】蘊處界。五蘊・十二處十八界の譯。舊譯には陰入界。三科と通稱し、何れも諸法萬有を分類したる名目。

【五六】多聞。多く法門を聞きて受持すること。

【五七】煩惱。伏除煩惱品第一の下を見よ。

【五八】耆德。老成具德の僧。

【五九】菩提心。菩提即ち正覺を求むる心。

【六〇】身語心。又身口意の三業といふ。

【六一】三有。伏除煩惱品第一の下を見よ。

【六二】愚懵。おろかにしてまようこと。

【六三】法眼。五眼の一、一切の法門を照見する智慧をいふ。

【六四】瞽。めくら。

【六五】忍徵師校註に無目は疑ふらくは盲目かといへり。

【六六】舡。忍徵師校刻本には

若し人正法を聞き　聞き已りて悉く明了せば　善根を發生し　諸の過咎を遠離せん。
正法を聞くに由るが故に　心淨くして　[五一]垢染あること無く　踊躍歡喜を生じ　明慧を增長す。
正法を聞くに由るが故に　衆罪を造作せず　業果の虚ならざるを知り　當に菩提の道を得べし。
正法を聞くに由るが故に　佛の諸の功德を知り　法を[五二]解脫の因と爲す　是を眞の智者と爲す。
正法を聞くに由るが故に　法相常住なるを知る　是の故に當に一心に　事に於て勤めて修作すべし。
正法を聞くに由るが故に　[五三]輪迴の海を解脫し　種種の貪愛を斷じ　當に實際を證すべし。
正法を聞くに由るが故に　彼の生滅の相に[五四]四種の因緣を具するを悟り　當に明了に信解すべし。
正法を聞くに由るが故に　[五五]蘊・處・界生滅と相應するを了知し　正智をして明顯せしめん。
是の三種の過患を　輪迴の本と爲す　多く正法を聞くを樂ひ　當に斷じて永く盡きしむべし。
若し[五六]多聞を樂はゞ　世に處するに上に過ぐるもの無く　動不動の法に於て　悉く諸の源底を究めん。
是の人命終の時　復た諸の憂怖あること無く　善く彼の正法に達し　少苦をも生ぜざらん。
能く正智の火を以て　[五七]煩惱の薪を焚燒し　多聞を樂ふに由り　後苦も復た受けざらん。
若し多聞に親近すれば　則ち安穩の樂を生じ　放逸の燒然を離る　此を善の根本と爲す。
當に[五八]耆德に承事し　彼の出離生死の因を　宣說するを欣樂すべし　眞常の處を證するを得べければなり。
一切法に了達し　諸の障染を解脫し　[五九]菩提心を引發するは　多聞を最上と爲す。
若し多聞に習近し　正慧を修せんと樂欲せば　當に[六〇]身・語・心を以て　尊重し常に恭敬すべし。
若し多聞を樂ふ者　善く法性に住し　堅固に勤めて修作せば　能く[六一]三有の海を越へん。

ともいひ、無諍、空寂、最閑處等と譯す。
【三九】須彌。梵名 sumeru. 一小世界の中心をなすといふ山の名。
【四〇】宿曜。星宿ともいひ。二十八宿・十二宮・七曜等の總稱。
【四一】師子。梵 sinha 俗に獅子。
【四二】懈怠。捨離懈怠品第二十の下を見よ。
【四三】修羅。阿須羅の略、訶厭五欲品欲品の下を見よ。
【四四】外道。梵語 tirthaka (tirthika) の譯。佛敎以外の敎道、又は其を信ぜる者を指す。
【四五】菩提。梵語 (bodhi) 道又は覺と譯す。
【四六】纏縛。伏除煩惱品第一の下を見よ。
【四七】四種福田。一に趣田、畜生等。二に苦田、貧苦の人。三に恩田、父母等。四に德田、賢聖。供養の福報を農夫の田に播種して秋收の利あるにたとふ。
【四八】五欲。訶厭五欲品第七の下を見よ。
【四九】妻孥子。孥は子に同じ。
【五〇】惡趣。地獄・餓鬼・畜生等の諸惡趣をいふ。
【五一】垢染。染は垢染、染汚等を熟字し、不淸淨の意なり。
【五二】解脫。梵語 vimukta

無生は有生を止むること　火の槁木を然すが如く　亦た妙飲食の能く飢渇を除くが如し。
[四一]師子の進むも止まるも　能く諸の群獸を伏するが如く　足るを知りて貪求を絶たば　畏無きこと是の如し。
仁慈は世と共に稱せられ　此を捨つれば咸く輕鄙す　[四二]懈怠と顚愚とは　精進能く斷除す。
暴惡の人有り　非理に謗を相加ふるに　智者は誠言を以て　安忍して能く除遣するが如し。
諸天　[四三]修羅を降すは　正法を信樂するに由る　佛は世間に出でゝ　能く諸の　[四四]外道を制したまへり。

說法品　第二

若し人善く說法すれば　能く彼をして解を開かしめ　衆の導師と爲りて　安隱處に至らしむ。
[四五]菩提の正路を示し　畢竟して趣入せしむるに　生死の險道の中に　永く癡の　[四六]纏縛を斷つ。
是の法は上に過ぐるもの無く　世俗の說く所に非ず　若し是を聞くこと有らん者は　能く諸有の海を渡る。
若し智慧の人有り　此に於て勤めて修習せば　[四七]四種の福田有りて　能く諸の善果を生ぜん。
若し佛の敎を奉持せば　諸根具足を得　愛樂の心を生ぜざれば　後に於て徒に悔惱せん。
若し人　[四八]五欲に於て　常に追求耽染し　[四九]妻孥に戀著せば　當に　[五〇]惡趣に墮すべし。
不正思惟を起し　諸の過失を積集するは　皆自心の　妄想の爲に縈繫せらるゝに由る。
是の心は降伏すること難く　多く欲境に攀緣す　若し能く之を制せば　清涼安穩なることを獲ん。
是の心は惡馬の如し　正法を以て調伏せよ　聞き已らば當に憶持し　數數にして觀察すべし。

【二五】寂靜。寂靜品第二十八の下を見よ。
【二六】智慧。勝慧品第二十七の下を見よ。
【二七】惠・施。智慧と布施。
【二八】有情。悲愍有情品第二十一の下を見よ。
【二九】貪・瞋。貪欲と瞋恚、各々三毒の一。
【三〇】諸惡趣。地獄・餓鬼・畜生・修羅等をいふ。
【三一】慳・嫉。慳貪と嫉妬。
【三二】定。禪定品第二十六を見よ。
【三三】兩舌。十惡業の一。又離間語といふ。所謂二枚舌なり。
【三四】纏縛。十纏四縛の略。又一切の煩惱が衆生を纏縛して三界の獄につなぐをいふ。
【三五】無明。梵語 avidyā の譯。癡の異名。闇鈍の心諸法の事理を明了する明無きをいひ、二種、五種、十五種等に分つこともある。
【三六】八聖道。教誡比丘品第三十の下を見よ。
【三七】四無所畏。一に一切智無所畏、二に漏盡無所畏、三に說障道無所畏、四に說盡苦道無所畏なり。無所畏は無畏といふに同じ、化他の心畏れざるの意。
【三八】阿蘭若。梵語 araṇya. 又阿練若に作り、略して蘭若

し。

常に樂ふて[二七]惠・施を修し　堅固に淨戒を持し　諸の[二八]有情を憐愍せば　諸願をして成就せしめん。

慈悲と相應し　希望を生ぜずんば　他を攝受せんとするに　決定して成就を得ん。

彼の[二九]貪・瞋を解脫し　足るを知りて過患を離れ　衆生を愛念せば　決定して成就を得ん。

平等・質直を以て　寃親の想有ること無ければ　永く諸の[三〇]惡趣を脫し　決定して成就を得ん。

諸の威儀を具足し　善く平等に法を說き[三一]慳嫉の過失を離るれば　決定して成就を得ん。

樂ふて師尊に承事し　戒を持し[三二]諸定を修し　罪福の相を明了にせば　決定して成就を得ん。

勇猛精進を起し　坐禪し若しは讀誦し　愛語して諂曲無ければ　決定して成就を得ん。

時及び彼の方に於て　或は作し或は止息し　皆方便了知すれば　決定して成就を得ん。

無瞋は瞋恚を伏し　忍辱は暴惡を除き　正法は非法を捨て　光明は黑暗を滅す。

眞實は虛妄を遣り　寂靜は[三三]兩舌を摧き　憐愍は毀呰を息め　無縛は[三四]纏縛を解く。

慈心は殺害を止め　樂施は慳垢を銷し　淨善を以て　不如理の作意を對治す。

智を以て[三五]無明を照らし　無常は常執を破す　日昃き月虧くるが猶く　遷流すること本是の如し。

當に自ら善い思惟　觀察して邪欲を離るべし[三六]八聖道を因と爲せば　能く諸の惡趣を越ゆ。

[三七]四無所畏に住せば　能く諸の怖畏を降し　正念は妄念を祛らひ　勝智は邪智を摧く。

樂ふて[三八]阿蘭若に住し　淡泊にして貪欲を絕つは　譬へば衆山の中に[三九]須彌を最勝と爲すが如し。

大海の深廣にして　能く諸の珍寶を生ずるが如く　皎日の光明　諸の[四〇]宿曜を映蔽するが如し。

の下を見よ。

【二二】(不)放逸。不放逸品第六の下を見よ。

【二三】六塵。色聲香味觸法の六境。この六境は淨心を汚すによる。

【二四】布施。布施品第二十二の下を見よ。

【二五】持戒。持戒品第二十三の下を見よ。

【二六】忍辱。忍辱品第二十四の下を見よ。

【二七】禪定。禪定品第二十六の下を見よ。

【二八】四無量心。一に慈無量心、二に悲無量心、三に喜無量心、四に捨無量心なり。無量の有情を所緣となすが故に、無量の福を引くが故に、無量の果を感ずるが故に無量といふ。衆生を教化利樂するの心は無量なれども四心を以つて且らく一門を示すなり。

【二九】含識。心識を含有するもの、即ち有情。有情は悲愍有情品第二十一の下を見よ。

【三〇—三二】地獄・餓鬼・畜生これを三惡趣又は三惡道といふ。地獄品第十六・餓鬼品第十七・畜生品第十八の下を見よ。

【三三】身語意。又身口意の三業ともいふ。

【三四】業。福非福業品第十三の下を見よ。

諸法集要經

觀無畏尊者集　總二千六百八十四頌
西天譯經三藏朝散大夫試鴻臚卿宣梵大師
賜紫沙門臣日稱等奉　詔譯

卷の第一

[一]伏除煩惱品　第一

「[二][三]三有最勝尊に稽首したてまつる　[四]吉祥無垢にして諸[五]漏を盡したまへり　愚夫の惑の爲に沈溺せらるゝを　能く[六]等慈を以て[七]拔濟したまへ。」
[八]正法念處　廣大[九]契經海に依りて　此の[一〇]伽陀を集成す　世間の眼と作さんが爲なり。
當に淨信を發生し　[一一]精進にして[一二]放逸ならず　[一三]六塵を棄背し　微妙の智を修習すべし
[一四]布施・[一五]持戒・[一六]忍辱　諸の[一七]禪定を樂ひ　[一八]四無量心を以て　諸の[一九]含識を利樂せよ。
若し散亂・放逸にして　暴惡の邪見を起し　常に虚妄の言を發せば　當に[二〇]地獄に墮すべし。
若し慳悋憎嫉にして　善法を遠離し　衆生を損惱することを樂はゞ　定んで[二一]餓鬼趣に墮せん。
若し正法を破壞し　愚癡にして染欲に著し　飲食・睡眠に耽れば　當に[二二]畜生の報を獲べし。
[二三]身語意の三種に　諸の不善を造作せば　[二四]業の爲に纒はられ　數數にして増長せん。
是の如く彼の愚夫は　展轉して休息すること無し　智者は善く修習して　當に[二五]寂靜の樂を得べし。
是の業果を了知して　放逸を棄捨し　[二六]智慧を以て揀擇せば　此の善上に過ぐるものあること無

【一】煩惱。梵語 pleśa の譯。貪欲瞋恚愚癡等の諸惑の心を煩はし身を惱ますをいふ。
【二】三有。有は生死の果を指し有にして無ならざる義。三有は三界の異名。即ち欲界、色界、無色界の生死の果を指す。
【三】三有最勝尊。佛世尊を指せるなり。
【四】吉祥。梵語 śrī の譯、好善嘉良の意。
【五】漏。梵語 āsrava の譯。煩惱の異名。漏は漏泄の義で三界の有情は眼耳等の六瘡門より日夜に煩惱を漏泄して止まざるをいふといひ、又漏失の義で煩惱が正道を漏失し、或は人をして生死に漏落せしむるを以てなりといふ。
【六】等慈。平等の大慈悲。
【七】拔濟。苦を拔き難を濟ふこと。
【八】正法念處廣大契經海正法念處經のこと、經文は人の機に契ひ法の理に合へば契經ともいひ、其の經七十卷ありて廣大なるが故に海に譬ふ。
【九】契經。經文は人の機に契ひ、法の理に合へば契といふ。
【一〇】伽陀。梵語 gāthā.・偈頌・諷誦等と譯す。歌謠・聖歌の意。
【一一】・精進。精進品第二十五

の佛教史上、特に本經の鑽仰者ありしことを聞かぬ。恐らくは、從來殆ど讀まれなかつた經典であらう。

一、本經の國譯については、專ら文學士關口慈光氏を煩はした。こゝに記して謝意を表すると共に、幾多の過誤や不行屆の點は、すべて皆私の罪であることを陳謝する。

昭和八年十二月二十八日

譯者　裕　慈　弘　識

諸法集要經略解題

一、本經は一部十卷三十六品、悉く伽陀を以て述べられたもので、その數總じて二千六百八十四(實際は二千四百八十)頌を算する。而して第一卷首の歸敬偈と、第三卷不放逸品第六の餘の末尾に位する一偈とが、特り七字を以て一句となし、四句を以て一偈をなすの外は、すべて五字四句偈を以て終始して居る。かくして偈頌のみより成れる本經は、成文上かなりの無理が行はれて居る事例も少くはないので、大體からすれば、讀み下し難い經典である。

一、次に本經は、先づ初め三有最勝尊に歸命をさゝげ、次に之が製作の目的、一經の大綱ともいふべきものを掲げ、而して爾來、或は五欲不善の怖るべく厭ふべきことを教へ、或は放逸と酒と女人等の不信過失を描き、それらに捉はれ、それらに因て開展する生活の種々相は、畢竟迷妄にして苦惱に充つることを示し、殊に三惡趣の名相と、そこに墮すべき因緣とを說いて、早く身の無常を觀じ、自心を調伏して淨業を修持し、以て寂靜を得べしと教へること極めて懇切である。蓋し本經は、その卷首に「正法念處廣大契經海より、此の伽陀を集成す、世間の眼となさんがためなり」といふて居る如く、特に組織立つた構想を有つてゐるわけではないが、全體として、三界六道の因果を說き、修道上の切要なる教訓を垂れたるもので、六度、四無量心、八聖道その他について述ぶる所を網羅し、佛教のあらゆる要義を集大成したかの如き觀を與へる。

一、本經は、由來觀無畏尊者の集とせられ、而して前記の如く、その初めに「世間の眼となさんがために、正法念處廣大契經海より、此の伽陀を集成する」とあるに依つて、その形成、大綱等に對する一往の了解が得られるであらう。しかし譯者の不明、いはゆる觀無畏尊者に就いては、今のところ全く知る所がなく、從てまた本經成立の年代や、その地方の如きに就いても分明して居らない。唯こゝには、本經は、正にかの正法念處經の縮圖であるといふべき事を一言するに止めて、他は且らくこれを省略に從ふ。

一、本經は、宋代(A. D. 960—1126)に日稱等によつて傳譯せられ、而して高麗藏鴈函に收められ、今現に縮藏(藏帙第九冊)、卍藏(第一輯第二套第一冊)、及び大正藏(第十七卷)に收載せられて居るが、然し嘗て忍澂師によつて、之を校合刻梓せられたことのある外は、支那日本

佛說作佛形像經解題……四二七
佛說作佛形像經〔一―三〕……四二八
佛說未曾有經解題……四三一
佛說未曾有經〔一―三〕……四三三
佛說盂蘭盆經解題……四三五
佛說盂蘭盆經〔一―三〕……四三六
佛說諸德福田經解題……四三九
佛說諸德福田經〔一―三〕……四四一

◇　◇

索引……卷末

（見出の下の括弧内の數字は卷數なり）

二法品第二（三—五）……三一三

三法品第三（六—七）……三六〇

佛說施燈功德經解題……三九三

佛說施燈功德經……〔一—一四〕……三九四

佛說溫室洗浴衆僧經解題……四〇九

佛說溫室洗浴衆僧經……〔一—四〕……四一〇

右繞佛塔功德經解題……四一五

右繞佛塔功德經……〔一—三〕……四一六

佛說浴像功德經解題……四一九

佛說浴像功德經……〔一—三〕……四二〇

佛說灌洗佛形像經解題……四二三

佛說灌洗佛形像經……〔一—三〕……四二四

目次

六趣輪迴經 ……（一―一六）……二二三
佛說四願經解題 ……二二九
佛說四願經 ……（一―三）……二三〇
五苦章句經解題 ……二三三
五苦章句經 ……（一―一三）……二三四
佛說雜藏經解題 ……二四七
佛說雜藏經 ……（一―一〇）……二四八
佛說文殊尸利行經解題 ……二五九
佛說文殊尸利行經 ……（一―八）……二六一
本事經解題 ……二六九
本事經（七卷） ……（一―一二）……二七一
一法品第一（一―二）……二七一

了本生死經 ……［一―五］……一五八
佛說稻芊經解題 ……一六三
佛說稻芊經 ……［一―七］……一六四
緣起聖道經解題 ……一七一
緣起聖道經 ……［一―五］……一七三
分別緣起初勝法門經解題 ……一七七
分別緣起初勝法門經（二卷） ……［一―三三］……一七九
分別業報略經解題 ……二〇三
分別業報略經 ……［一―一〇］……二〇四
佛說鬼問目連經解題 ……二二五
佛說鬼問目連經 ……［一―四］……二二六
六趣輪廻經解題 ……二三一

餓鬼品第十七（七）……一〇六
畜生品第十八（七）……一〇八
飢乏業報第十九（七）……一〇八
捨離懈怠品第二十（八）……一一一
悲愍有情品第二十一（八）……一一三
布施品第二十二（八）……一一四
持戒品第二十三（八）……一一七
忍辱品第二十四（八）……一二一
精進品第二十五（八）……一二三
禪定品第二十六（八）……一二四
勝慧品第二十七（八）……一二五
寂靜品第二十八（九）……一二六
聖道品第二十九（九）……一二六
教誡比丘品第三十（九）……一二八
福業品第三十一（九）……一二九
生天品第三十二（一〇）……一四三
快樂品第三十三（一〇）……一四八
善知識品第三十四（一〇）……一五二
王者治國品第三十五（一〇）……一五三
稱讚功德品第三十六（一〇）……一五五
了本生死經解題……一五七

目次

諸法集要經解題……（本丁）（一—二）……（通頁）一

諸法集要經（十卷）……（一—一五八）……三

伏除煩惱品第一（一）……三

說法品第二（一）……五

厭離自身品第三（一）……七

遠離不善品第四（一）……九

無常品第五（一—二）……一一

不放逸品第六（二—三）……二六

訶厭五欲品第七（三—四）……二九

離愛品第八（四）……三四

離欲邪行品第九（四）……三七

離酒過失品第十（四）……四二

治心品第十一（五）……四六

離惡語言品第十二（五）……四七

福非福業品第十三（六）……八〇

教示衆生品第十四（六）……八八

說罪品第十五（六—七）……九二

地獄品第十六（七）……九七

經集部 十四

裕 慈 弘
清水谷 恭 順 譯
田 島 德 音

國譯一切經

大東出版社藏版